マット界はいまこそ"真剣勝負"やれんのか!

kamipro

紙のプロレス

MMA & PRO-WRES

enterbrain MOOK

2008
122
880yen



4.29 DREAMミドル級GP開幕!!
魔王よ、"黒"の本性をさらけ出せ!!

秋山成勲

"黒の宴(ミドル級GP)"を止めるのは誰だ!?

魔王が来たりて……

夢は続くか、ブツ切れか!?
4.29『DREAM.2』&
5.11『DREAM.3』
大展望特集!!

これぞ"決闘"なり!
いざ"三度目の正直"のカルバン戦!!
青木真也

"格闘芸術"を追求する夢のカリスマ異次元対談!!
ミノワマン×須藤元気

船木誠勝戦の裏側——UWF"20年の想い"を語る
田村潔司

怒れるチーム茨城が"HERO'S"をブチ壊す!!
川尻達也×石田光洋

ますます永田さんが好きになる! 噂の兄弟トークを誌上公開!
永田裕志×永田克彦

"I♥栃木"のスペシャルBIG対談
ガッツ石松×川田利明

21世紀の格闘文化を考える!!
総力特集 煽りVとは何か?

"若気の至り"が新時代を切り開く!
HIROYA vs 藤 門嗶裟に鳥肌立った!!

渦中の事件がマット界にも飛び火!?
ザ・グレート・サスケとロス疑惑

kamipro 122 魔王が来たりて……

2008年5月6日
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
印刷・製本 図書印刷株式会社

enterbrain

うわ〜ん、うわ〜ん、怖いよ〜。



Cristiano Kaminishi
Carlos Toyota
Rubens "Cobrinha" Charles
Eduardo Pessoa
Rodrigo Feijao
Marquinhos Souza
Leo Santos
Lucas Lepre
Guilherme Mendes
Rafael Mendes
Roberto Souza
Mauricio Souza
Sachi
Fighter's Shop
BULL TERRIER
www.b-j-j.com
ファイターズショップ ブルテリア URL http://www.b-j-j.com 携帯サイト http://www.b-j-j.com/cgi-bin/i/index.cgi
〒435-0006 静岡県浜松市東区下石田町 1782-1 伊藤ビル1F TEL:053-421-2534 FAX:053-421-2542
ATAMA
BRAZILIAN FIGHT WEAR.COM
BRAZILIAN TOP TEAM
DRAGÃO KIMONOS
HUNTER
KEIKO RAÇA
Red Nose
KORAL
CLINCH GEAR
MMA Gear
NO GI
RAGS
UFC
PROBIOTICA
QUANO 99
VULKAN
WAR

ガチンコ? セメント? それともシュート!?

真剣勝負とは何か!?

MMA

PRO-WRESTLING

©みのもけんじ



うわ～ん、うわ～ん、怖いよ～。

2008 No.122 CONTENTS

kamipro

表紙イラスト／岡村昌明

K-1 WORLD YOUTH

kamipro Special

Columns

真剣勝負



真剣勝負とは何か――？純度１００パーセントのガチンコだが、真剣勝負じゃない闘いがある。真剣勝負だが、じつはガチンコじゃない闘いもある。世の中を善と悪の二元論で論じることはできない。真剣勝負もまた、底が丸見えの底なし沼なのである。

やれんのか！



真剣勝負とは何か――？その値打ちはわからずとも、真剣勝負の輝きが消えたとき、我々は格闘技を観るうえでの主眼を失なう。プロレスもまたしかりだ。だからこそ、その意義を問いたい。いまこそDREAMよ、競技や興行論を超える真剣勝負やれんのか！



前代未聞の仕切り直し！ 4・29『DREAM・2』カルバン戦!!

これは〝決闘〟だ

聞き手／ジャン斉藤　撮影／菊池茂夫



いまこそ“真剣勝負”やれんのか！

立ち上がったバカサイバー

青木真也

やれんのか！　青木真也!!

悪夢で終わった3・15『DREAM・1』のJZカルバン戦。首に〝反則攻撃〟を受けた青木は続行不能となり、その場ではノーコンテストと告げられたが、後日、審判団の協議を経て〝没収試合〟という裁定が下った。ボッシュート!!

この一戦は、昨年の大晦日『やれんのか！』では、カルバンのケガによって消滅している。そんないわくつきの背景があるだけに、その決着の行方が注目されていたが――、前代未聞の発表が主催者側からされたのだ。

4・29『DREAM・2』でカルバンとの再戦が決定!!

ビビってたじろぐことに、その勝者は5・11『DREAM・3』において、永田克彦とのライト級GP2回戦を行なうことを主催者から〝希望〟されている。なんという強行日程だろうか。『DREAM・1』から数えれば事実上の3連戦。さらに2回戦からは〝主催者推薦枠〟として宇野薫がシード扱いで登場する。青木とカルバンだけに課せられた巨大な試練――。

そういった不平等を克服してこそ、英雄は生まれるものではあるが、それは観る側の視点の話だ。いったい青木真也はこの〝逆境〟をどう考えているのか？

――青木さん、ついてないですねぇ。

青木　ついてないと思いますよね？　でも、これがついてるんですよ！　ククク。

――あの～、強がってないですか？　今回ばかりはいいんですよ、裸のワオ木真也をさらしてくださって。

青木　もう何を言ってるんですか！　だって、結局こういうことになったことで、みんながボクのことに注目するわけじゃないですか。

――確かに確かに。こんなの前代未聞の事態ですから。

青木　だから、ついてるんですよね。損して得とってんですよ、ボク。

――カルバンのエルボーを受けた首の状態はもう大丈夫ですか？

青木　それはね、『ランボー3　怒りのアフガン』でランボーが言ってたんですよ。「痛みを無視しろ！」って。

――何を言ってるんだ、この人は（笑）。

青木　まあ、試合後一週間くらいはずっと違和感がありましたけど。シビレは翌日にとれました。

――とはいえ、よくまあこんな連戦話を快諾されましたよね。再戦の話はどのタイミングであったんですか？

青木　試合直後ですよっ！

――ダハハハハハハハ！　青木さん

青木　さすがにそのときは何も考えられなかったですよねぇ〜。

——というか、『DREAM・1』のときの青木さんって、すべてをこの一戦に懸けるという表情で入場してましたね。あそこまで思いつめた姿を見ると、もう一度スイッチが入るのかなって心配ですよ。

青木　まあ、あのときは（カルバンを）殺す気マンマンでしたからね。

——気負いすぎたところってあります？

青木　それはなかったんですよね。完全にスイッチは入ってましたけど。「3月16日はない！」と思いながらリングに上がりましたよ。あとからカルバンがじっくりゆっくり入場してきましたけど、全然、気になりませんでしたし。「来いや、来いや」っていう感じでしたね。

——わずかな時間ですけど、実際にカルバンと肌を合わせてみていかがでした？

青木　思った以上に打撃は怖くなかったですね。カルバンがボクの寝技を警戒していたせいもあったからかな？

——なるほど。カルバンについて知ったこと、逆にカルバンに知られたことってあります？

青木　カルバンに知られたことは、ボクが左ミドルを蹴れるってことですかね。逆に知ったことは、アイツも〝人間〟なんだなってこと。

——カルバンも人間！

青木　そう。全然、怪物じゃないなって。長渕剛調に言えば、俺もオメエも股の下から生まれてきた人間だぁ、人間だぁ！

——（無視して）青木さんとカルバンでは、スタイル的に噛み合わないんじゃないかっていう見方もあるじゃないですか。ヒョードルvsノゲイラ戦の3回目みたいに。カルバンは青木さん主導のグラウンドの攻防には付き合いそうにないですし。

青木　まあ、そうなっちゃうでしょうね。ボクが勝ちにこだわるなら。でも！　ミルコvsノゲイラ戦の〝ノゲイラ〟になりますよ、ボクは。

——粘って粘って極めてみせる！　と。

青木　そこはボクが計画を曲げないことが大事だと思うんですよね。そこでちょっと妥協して、ヤツに付き合っちゃうとダメだと思うんですよ。カルバンも折れないだろうけど、俺はもっと折れない!!

——で、最後にコーナーで捕まえたじゃないですか。エルボーがなければ、あのままテイクダウンはできました？

青木　どうなろうとも、あそこから展開は大きく動いたでしょうね。テイクダウンできなかったとしても引き込めただろうし。あれ、チャンスだったなあ。カルバン、メチャクチャ慌ててたし。

——セコンドの中井さんの証言によると、青木さんはヒジを食らったあとも「試合をやりたい」と主張されてたんですね。

青木　全然やりたかったですよ！　だって、な〜んか、このままじゃ収拾がつかないと思ったんですよ。

——旗揚げ戦の大事なメインイベントでしたし。

青木　収拾がつかないんだったら、腕が上がらなくても闘って、ボクがぶっ飛ばされたほうがスッキリするんだろうなって。だから「眠らされてくるから好きにさせてください！」って言いましたもん。

——眠らされてくるって（笑）。

青木　そうっすよ。カルバンにぶっ飛ばされたほうが、お客さんも関係者も納得するじゃないですか。あとあと面倒くさいことにもなんないですし。

裁定に納得とかじゃなくて、とにかく「やれんのか!」って

——え〜っと、もの凄く面倒くさいことになってますね（苦笑）。

青木　ククク。結局、ドクターに止められましたけど。ボクはどうなろうとも決着をつけたかったんですよね。そこはファンに申し訳なかったですよね……。

——こうなったことで青木さんのことを悪く言う声も挙がってるじゃないですか？

青木　腹立ちましたよ！　ボクはやるっつってんだよ、コノヤロー！って。

——青木さん、再戦発表会見でも怒ってましたよね。

青木　怒ってないっすよ！（怒りながら）。

——いやぁ、明らかに怒ってましたよ（笑）。それって、準備期間があまりないままの再戦、そして勝者が12日後の『DREAM・3』に出ないといけないということに納得できないとか？

青木　納得も何も、ボクがカルバン戦をやると決めたのは、悪夢を払拭するための闘いだと思ってるんです。だから、現時点で次の試合は考えられないんですよ。「できちゃったから結婚して！」って迫られるみたいな。わかりますよね？

——え〜っと、青木さんはできちゃっても結婚する気はないということですか？

青木　ククク。順序が逆なんですよ。もっとわかりやすく説明すると、できちゃった結婚で挨拶に来られた親の立場ですよ。そんなの順序が逆だぞって話ですね〜。

——ほかのたとえにしましょうか。

青木　なんで！　わかりやすいのに。

——まあ、簡単に言ってしまうと、目の前のカルバン戦のことで精一杯ということですよね。

青木　そうです。お互いに生きてるかどうかわかんないし。

——こうして再戦をするということは、あのエルボーの裁定には納得……。

青木　（さえぎって）いや、納得とかじゃなくて、もうとにかく「やれんのか！」っていう。だって、競技的にはどうのとか、ルール的にはどうのとか言うなら、それはアマチュアでずっとやっていればいいわけで。

——そこは大人ですねぇ。

青木　そこは大人ですよ！　ファンも「これは当たってたんで反則です」みたいな話よりも、いちばんはあの続きが観たいわけじゃないですか。

——二度も消化不良になってしまったわけですから。当のカルバンは海外のメディアで青木さんのことをウソツキ呼ばわりしてるそうですよ。

青木　それは気に入らないですね〜。

——おまえが原因だろうって（笑）。

青木　いままではPRIDEと『HERO'S』の対立構造がありましたけど、今度は簡単な構図ができました。カルバン、気に入らねえからぶっ飛ばす！　っていう感じですよ。もう!!


大晦日の『やれんのか!』ではカルバンの負傷によって、大連立の象徴カードは大会直前に消滅!!『DREAM.1』では悪夢な結末……。そして"三度目の正直"となる決着戦。まさかこんなドラマが待っていたなんて。



──怒ってますねぇ。

青木 それは本音を言えば、腹は立ちますよ。でも、そういうのを全部ひっくるめてカルバンをぶっ飛ばす！ もう気分は『岸和田少年愚連隊』なんですよ！

──は？ どういう意味ですか、それ。

青木 だから、〝カオルちゃん最強伝説〟ですって。

──いや、カオルちゃんは知ってるんですけど（笑）。要するに、グダグダ文句を言わさないということですか？

青木 そうです。「誰でもやったる!!」っていう。ボクの格闘技人生、カオルちゃん最強伝説。とにかくこの男同士の決着をつけるっていうことですよね。

──これぞ〝決闘〟というシチュエーションですね。

青木 やりますよ！ これがスパッと終ったら、尾崎豊的なね、♪こ～の支配からの卒業～みたいな。

──カオルちゃんから尾崎豊って、どんな世界ですか（笑）。

青木 べつにDREAMを離れるとかそういうことじゃなくて。

──ブログでも書かれてましたけど、『やれんのか！』スタッフに不満があるわけではないんですよね。

青木 全然、不満はないですよ。

──じゃあ、宇野さんが2回戦からシードされたことに怒りはないんですか？

青木 べつにそこは気になりませんけど。宇野選手は宇野選手でキツイと思いますよ。谷亮子みたいなもんですし、負けたのに代表に選ばれちゃって。だから宇野選手はある意味、被害者なんでしょうね。だけど、ボクら選手は試合するだけだから。宇野選手は宇野選手で闘うだけですし、ボクはカルバンとやるだけ！ シードがどうとかは深く考えてないです。

──DREAMは始まったばかりということもあって、いまはドタバタしてるじゃないですか。旗揚げ戦を終えてみて、どういうイメージを持ちましたか？

青木 う～ん、どうだろ。まだ始まったばかりだし、わからないんじゃないですか。ただ、ボクの中では大晦日の『やれんのか！』が理想ですけどね。

──そういえば、青木さんの『やれんのか！』はまだ終わってないですもんね。カルバンと決着をつけないかぎりは、まだ年が明けてないって感じがしますよ。

青木 俺、ここ半年、ずっとカルバンのことばっか考えてるんですよ。正直、頭がおかしくなりそうですよ。

──頭の中では何回も何回も闘って。

青木 アイツのことを考えると腹立ってきますよ！ でも、考えないといけない。

──嫌いなのに考えてしまうなんて、まるで恋する乙女ですねぇ（笑）。

青木 恋人じゃないですよ、あんなヤツ！ けどまあ、なかなかこんな経験もできないですし。3月の試合が終わって一週間後くらいに公武堂の長谷川社長から「こんな悩み、ほかの人はできないんだから」って。そう言われりゃそうだなって。

──だから、いまこそ「やれんのか！」の精神が問われますよ。

青木 （元気よく）やりますよ！ それに、新しいイベントって、ボクたちが頑張って作っていかなきゃいけないですし。同じ時期にスタートした『戦極』と比べると、ボクの試合があんなかたちになったからっていうのもありますけど、やっぱり「やられたな！」って思いましたもん。

──DREAMはイベントカラーを打ち出すことができなかったですもんね。

青木　悪夢だったですもん。けど、ここから始まる人生もいいんじゃないのかなって。

――ちょっと話はズレますけど、『戦極』の五味さんの試合、どうでした？

青木　ああ、五味さんはホント凄かったですね。なんかね、モノが違うなっていう感じで。ボクもやらなきゃなって思いましたね。

――いい刺激になった、と。唐突な質問ですけど、青木さんが持っている真剣勝負のイメージってなんですか？

青木　真剣勝負のイメージ？　ボクはあんまり競技競技するのは好きじゃないんですよね。脚を取って相手を倒して上から殴り続けて判定で勝つ！　っていうのは自分で自分の首を絞めちゃうような気が……。だって、そんなつまらない闘い方をやってたら、ごはんを食べれなくなっちゃいますから。

――競技としてはいいんでしょうけど。

青木　だからそうですねぇ、お互いの強いところをぶつけ合うのが真剣勝負でしょ。そこにロマンは生まれてきますね。ぶっちゃけ、ロマンを感じない闘いは●●●と似たようなもんですよ。

――ダハハハハ！　なるほどねぇ。

青木　まあ、ガチンコっていっても、ホントに競技性ばかり求めてもアレじゃないですか。だからボクの中では真剣勝負って、一言で言うとロマンですね！　真剣勝負とはロマンと見つけたり!!

――それはわかるなあ。

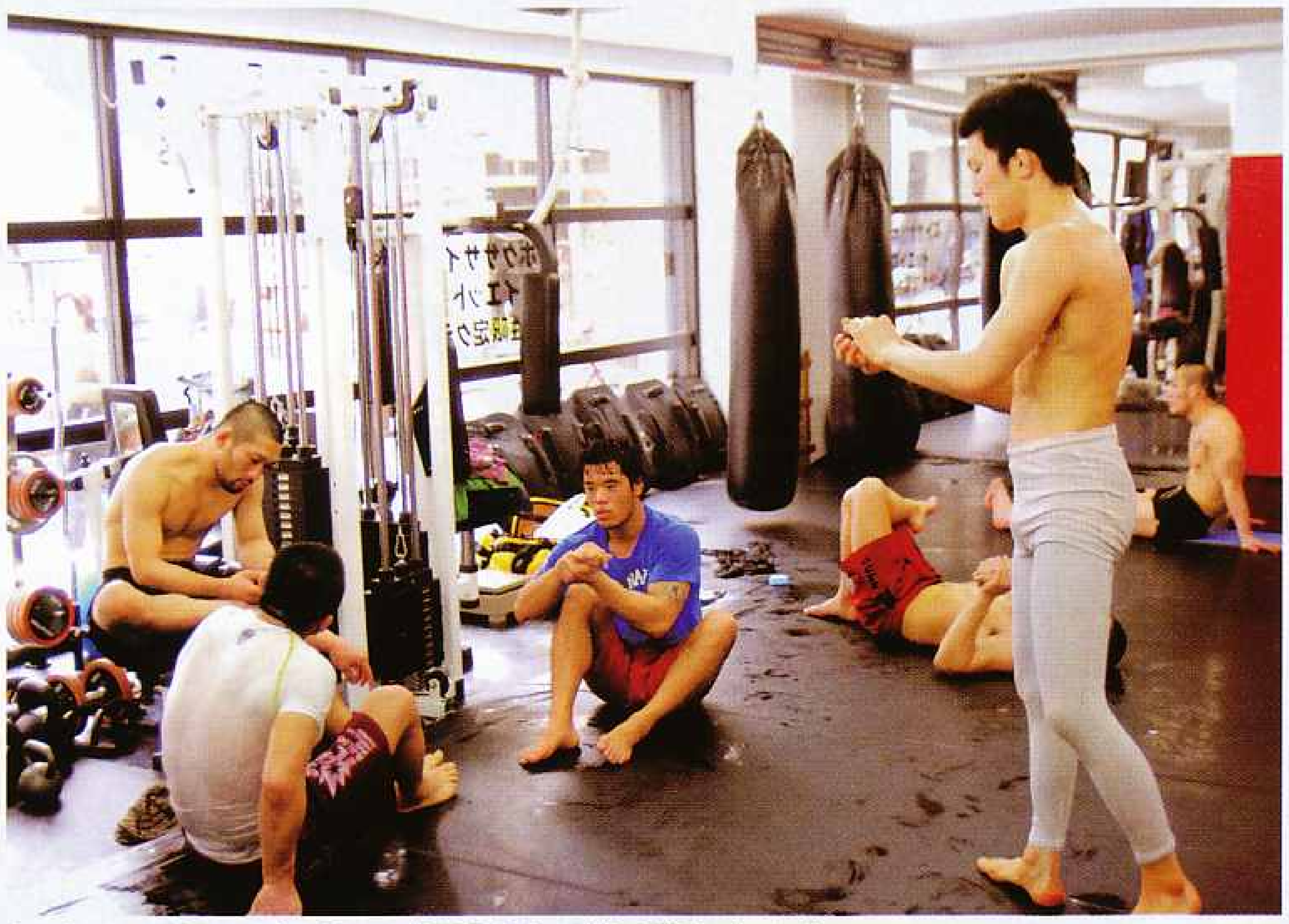
青木　ロマンがない格闘技は●●●です。

俺、ここ半年、ずっとカルバンのことばっか考えているんですよ

クククク。

――だから言いすぎですって（笑）。青木vsカルバン戦も自分は真剣勝負だなって思うんですけど、いま青木さんが置かれてる状況もそれ以上に真剣勝負だなって。

青木　さっきも言いましたけど、こんな経験はボクしかできないし、そこはちゃんと向き合って生きていきたいです。そこは真剣勝負ですよ！　もう去年の4月から。逃げたらすべてが終わってしまうわけで。でも、ボクは逃げない！　これからも逃げない！　何があっても逃げない!!（自分に言い聞かせるように）。



あおき・しんや■1983年5月9日、静岡県出身。柔道、柔術をバックボーンに持つ奇才グラップラー。"ミスター・やれんのか!"として、新ステージDREAMに合流。現・修斗世界ミドル級チャンピオン。180cm、70kg。

――それは競技や興行を超えたところの"闘い"というか。

青木　極端なことを言うと、GPの優勝だとか、そんなところを目指してもロマンは生まれないわけですよ。誰が一番ワオワオしてるのか？　っていう争いをしないとファンも興奮できない。だから1回戦からカルバンという相手を引いたわけで。

――先を見据えた試合をやってもしょうがないですもんね。

青木　先のことはあんまり深く考えないけど、間違いなく4月29日に笑ってるのはボクですから。

――それで近寄らなくなった女子アナも戻ってきますかね？

青木　いや、いまは青木裕子より谷亮子ですよ。ククク。

――へぇ〜。それってどういう意味ですか？　やっぱり青木さんの柔道家としての……。

青木　（さえぎって）いや、谷亮子のお尻の肉づきが……（しみじみと）。

――ダハハハハ！　白昼の喫茶店で何を言い出してるんだ、この変態は（笑）。

青木　谷亮子はカワイイですよ！

――そういえば、だいぶ前に青木さんの実家を取材したときに、青木さんの部屋に谷亮子のポスターが貼ってましたね。

青木　いまの柔道女子って、なんか全員かわいかったですね。

――へ〜。青木さんの柔道家時代とは違いました？

青木　全然、違う！

――何が違うんですかねぇ。

青木　やっぱね、色気づいてるんだと思う。人って見られるとかわいくなるんだよね〜。

――青木さんの頃の女子って、誰が一番かわいかったんですか？

青木　有名どころはいなかったけど、かわいい子はいましたね。でも、あんまりボクは相手にされなかったです。ククク。

――え〜、なんとなくわかります。

青木　ボクのトークをあんまりおもしろがってくれないんですよ。しっかし、谷亮子はプロだよね。ボクはプロとして魅力も彼女に感じるんですよ。

――今回の五輪選考でもいろいろ批判を浴びてますけど、あそこまで登り詰めているのにモチベーションを維持してるのは凄いですよね。常人じゃあっという間に壊れてますよ。

青木　14歳のときからトップを維持してるし、なによりコメントとか人への対応が天才だなと思って。負けたあとに相手をこき下ろさないし。まあボクらとはまた違う業界ってこともあるんでしょうけど。老若男女、誰もが好感を持てるじゃないですか。

――どこの世代にも通じる個性ってヤツですね。

青木　あれ天才ですよ。自分でアングルを作るじゃないですか。「最高で金、最低でも金」「谷で金、ママでも金」「離婚でも金」とか。

――最後のは言ってないですよ！

青木　それが最高におもしろいんだよな。けど、またほかの選手にそれなりの魅力を感じるんだよなあ。まだ見られてない感じというか、洗練されてない感じがたまんないよね〜。というわけで、カルバン戦は頑張ります！

――なんて終わり方だ（笑）。カルバン戦、期待しています！

【08年3月9日／都内・某所にて収録】



青木真也のハイパーな父親、青木正さん。佐藤大輔の監督作品『やれんのか!ドキュメンタリー』で「余分なことすんな!」と吠えていたことでおなじみであり、本誌No.109でも登場している。このオヤジにしてこの子ありという感じだ。

青木真也の名物オヤジが激語り!!

「逆境でもなんでもねぇラッキーですよ!」

パパ 今日はわざわざ、なんで俺に聞くんですか?

――息子さんが大ピンチでもあり、大チャンスでもあるので、ぜひお父さんのほうからこの大一番について語っていただけないかなと思いまして。

パパ ああ、そう。まあ、試合の勝ち負けってものはついて回るもんだから、どうってことねぇですよ!

――どうってことありませんか! このないだのカルバン戦は会場観戦されたそうですが、最後のエルボーについてはいかがでした?

パパ いかがも何も、あれ反則でしょ!!(キッパリ)。

――ダハハハハハ! お父さんは気持ちいいですねぇ。

パパ 俺からすれば反則、完全に反則ですよ!!

――試合が終わったあと、青木さんは静岡の実家に帰られたそうですね。

パパ 後日、実家に帰ってきました。でも、半日ぐらいしかいなかったから。だから自分もそれほど会ってないんです。

――じゃあ、青木さんの様子はあまりわかりませんでした?

パパ まあね。人の痛えのは3年こたえるっていうからさ。そこらへんは医者じゃねぇからわからねぇですけど、時間が経つごとに痛む場所が変わってきたようでねぇ。最終的には首の痛みというか、違和感みてえなのがずっと残っている感じ。手のしびれは24時間で取れたみたいだけどね。首の違和感が残っちゃってたもんで。

――なかなか練習も再開できなかったみたいですね。

パパ そうなんですよ。いままではあの子、試合翌日から軽く練習を始めるんですよね。それが今回は10日間近く練習ができなかったみたいよ。練習をボチボチやり始めたっていうのが、けっこう経ってからだったもんね。

――JZカルバンに対して思うところはありますか?

パパ う〜ん。難しい質問だね、そりゃあね。こっちサイドから言っちゃっていいもんなのかねぇ。

――大丈夫です! JZのほうも海外で「アオキはウソツキだ!」とか、けっこう煽ってますから(笑)。

パパ ああ、そんなことがネットで出てた。

――あいかわらず、ネットで息子さんのチェックを欠かしてないんですね。

パパ そりゃあもう! まあ、ホントにJZが言ったのかどうかはわからないからねぇ。

――とりあえず、文句を言ったことにして話を進めましょうか。

パパ フフフ! でもあれがオッケーなら、もうタックルはできねぇもんね。ただ興行的なことだけを考えちゃうとねぇ。なんらかの判断して、先に進めなきゃいけないだろうし。

――息子さんも不満はあるでしょうけど、あえてこの再戦を受けるのは凄いなって思いますね。

パパ ま、本人はつらいでしょうけどね。だって3月のカルバン戦のときは、いままでで最高の仕上がりってたからねぇ。計量がすんだあとの体重の戻りも最高、こんなにベストな状況はないっていうぐらいに身体が作れたって。昔から彼は、試合に向けての身体の作り方は凄く上手だったからね。

――柔道家時代から。

パパ そうそう。何回かしか失敗はないですよ。万全にもってけるヤツだから。今回はこれ以上ないぐらいの仕上がりだって言ったからね。だからっていって結果がどうのこうのってわけでもねぇかもしれねぇけど。今回、100パーセント以上のところに自分の身体をもってけるかっていうところが心配。

――そこは気になりますよね。

パパ それが心配ですよね。ただほれ、商売だから、声をかけられたら試合をやらなきゃなんねぇでしょ。こっちもそれは理解してるけどね。

――息子さんがこんな過酷な勝負に打って出ようと決断した理由って、わかります?

パパ おそらくね、去年、PRIDEがああなってだいぶ待たされたでしょ。あれがイヤだったみたいね。まだ若いし、食ってくだけだったらべつにどうとでもなるでしょって言っても、やっぱ本人は闘いたいんだよね。

――闘いはリング上だけじゃないっていうのがつらいところですね。

パパ つらいところだね。やっぱ興行つうのは難しいもんですよね。そこで受けなきゃねぇ、やっぱ注目も浴びねぇだろうし。難しいとこだよね。

――息子さんは逆境に対しては昔からどんな感じですか?

パパ 真也はね、雑誌やネットとかで見るとトントン拍子に上がってきたもんで、「何をおいしいとこ取りしやがって」って思われてるところもあるみたいだけど、何回も何回も挫折してるんですよ。それこそ小さい挫折は数知れず、なんの世界でも、野球の世界でもそうでしょうけど、華やかに見えるところでもってご苦労なしできたかっていうと、そうじゃねぇと思うんですよね。だから彼も彼なりにかなり挫折しながら、それでもやっぱり這い上がってきたっていう部分があるんですよね。

――華やかなところしか見ないですもんね。

パパ だから簡単に上がってきたっていう感じでしか見ないからね。だから本人はいまを逆境ともなんとも思ってねぇでしょうね。

――ホントですか⁉

パパ 俺もべつに逆境とは思ってねぇからね!

――あ、お父さんも(笑)。

パパ そうですよ。勝つこともあれば負けることもあるだもんで、勝ち負けは別にして。だから負けたからって逆境かっていうとそうじゃなくて、おもしろい試合をして次の試合を組んでもらえれば逆境でもなんでもないよね。だから試合ができるっていう時点で、苦しいともなんともない。彼の場合、趣味・特技が格闘技ですから。ほかがなんにもねぇですから。車もいらない、飲み食いもいらない、女関係も面倒くさいでしょ。

――ズバリ"変態"ですね(笑)。

パパ だから今回は練習が再開できないから返事が遅れただけの話であって、身体がやれる状態ならオファーがあること自体が嬉しいっていう感覚だから。だから逆境でもなんでもねぇでしょうね。「ラッキー!」くらいに思ってるかもしんない。

――今日はありがとうございました!

【08年4月4日/電話取材にて収録】



青木パパは息子の試合のたびに静岡から駆けつけてくる。それは柔道時代から変わりないのだが、ここ最近のドラマの転がりぶりはパパも気が気じゃないだろう。はたしてどんな結末が待っている!?

ーの軌跡 ～MMA全試合レビュー～

大学生のときにプロ格闘家デビューを飾り、いまや日本のMMAライト級戦線のトップランナーとなった青木真也。その観るものを魅了する寝技の数々で、幾多の名勝負を生産してきた。ここではこれまでの青木のMMAマッチを本人自らが解説! 中には解説じゃなく、単なる当時の思い出話に終始してるところもあるが、幸せいっぱい夢いっぱいってことでそんなの気にしない! あ、カルバン戦については前のページの本人インタビューをご参照くださ～い!

書き手／ジャン斉藤　試合写真／乾普也、菊池茂夫



▶2003.11.24　club DEEP 4th
[西調布格闘技アリーナ]

○vs沖村大

(1R 3分14秒 アームバー)

デビュー戦はフューチャーキングトーナメント(82kg以下)ですね。これは周りの大人たちに「ちょっと試合出ない?」ってダマされて出場したんですよ。当時は総合格闘家になろうとは全然思ってませんでした。まだ大学生だったんですけど、このトーナメントには所属してた柔道部には内緒で出てますし。試合自体は蹴りで一回ダウン取って、その後にパンチを効かしてから寝業で腕を極めたんです。超興奮しましたね。途中から殴るのが楽しくなっちゃって!



◀2003.11.24　club DEEP 4th
[西調布格闘技アリーナ]

○vs龍保利

(1R 0分51秒 腕ひしぎ十字固め)

この相手は道衣を着てたんですよね。吉田秀彦選手の影響なのか、当時は衣を着て総合に出るのがちょっと流行ってて。で、相手が衣を着てるのを見てたら、ボクが柔道やってたのを馬鹿にしてんのかなとか思えてきて(笑)。ちなみにボクは安いスパッツでした。合掌! 試合展開としては適当に投げて、適当に押さえて、適当に十字で勝ちました。でもなんか一戦目のハイテンションが持続してたのか凄い興奮してましたね。ワオワオしてました!

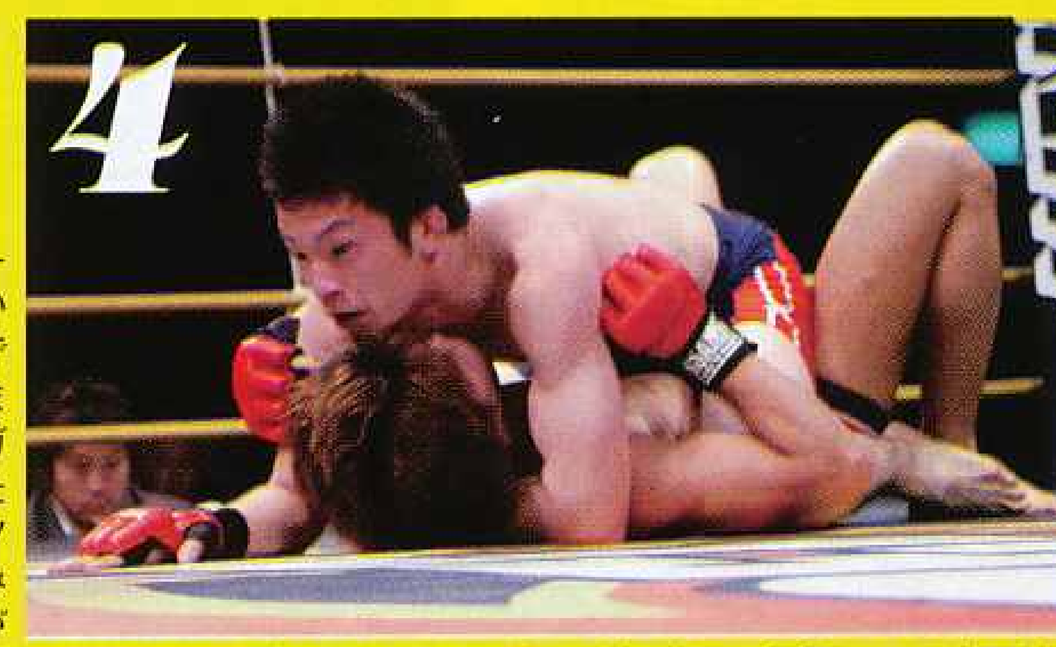


▲2003.11.24　club DEEP 4th
[西調布格闘技アリーナ]

○vs佐藤隆平

(不戦勝)

相手はプロ修斗の選手で、当時はボクより強かったと思います。それなのにこの選手、前の試合でキレイに目の上をカットして試合ができなくなっちゃって。ボクは正直負けると思ってたんで「棄権でよかった～」って感じでした。ククク。



▶2004.7.3　DEEP 15
[ディファ有明]

○vs池本誠知

(2R 0分52秒 腕ひしぎ十字固め)

このときはDEEPウェルター級王座のトーナメントでしたね。前の試合から日が空いてますけど、このあいだに格闘技に本気で取り組もうと決心して、柔術の試合に出まくってました。この頃は今成さんとガンガン練習して、極めの技術が強くなり始めた時期で。今成さんとは二人で新宿スポーツセンターで稽古しまくってましたよ(しみじみと)。このトーナメントは佐伯さんが声をかけてくれたんです。当時、池本選手はボクより全然格上だったんですけど、練習で今成さんにボコボコにされてたかいもあってか、勝てたんですよね。今成さんは練習でもボクが泣くくらいボコボコにするんですよ。いまはボクがやりたいぐらいですけど、「じゃあおまえとはもうやらない」とか言うんだ、あの男(笑)。



◀2004.10.30　DEEP 16
[後楽園ホール]

×vs中尾受太郎

(1R 4分29秒 KO)

このときは先にボクがダウン取るんですよね。で、コノヤローって向かってきた相手にやられるっていう、よくケンカにありがちなパターンで負けました(笑)。なんかオラオラしすぎてましたね。打撃でも寝技でもなんでも勝負してやるぞみたいな。反省して、ここからちゃんと打撃の練習もするようになりました。やっぱり勝つより負けるほうが全然勉強になりますね。



©サステイン

◀2005.1.29　修斗
[後楽園ホール]

○vsキース・ウィスニエフスキー

(1R 2分22秒 腕ひしぎ脇固め)

修斗デビュー戦ですね、運よくライセンスを発行してもらって。この相手はけっこう強いんですよ、この時点ですでにMMAで20勝とかしてたし。まぁ、結局は腕を極めたら折れちゃったんですけど。極めてる途中、ベリベリベリって音が鳴ったんですけど、いいやイッちゃうえってバキッてやったらビリッ! てなって。誰がこんなかわいそうなことを……ボクです!



©サステイン

▶2005.7.30　修斗
[後楽園ホール]

○vs岩瀬茂俊

(1R 0分35秒 反則失格)

これは股間にメガヒットの試合ですね。死んだと思いましたよ、まさに合掌。痛いなんてもんじゃなかったです。とにかく、タ●キンくらったらもうやれん(キッパリ)。どうしても立てないですから、もうどうしようもないですよ……、タマ●ンは絶対ダメ!

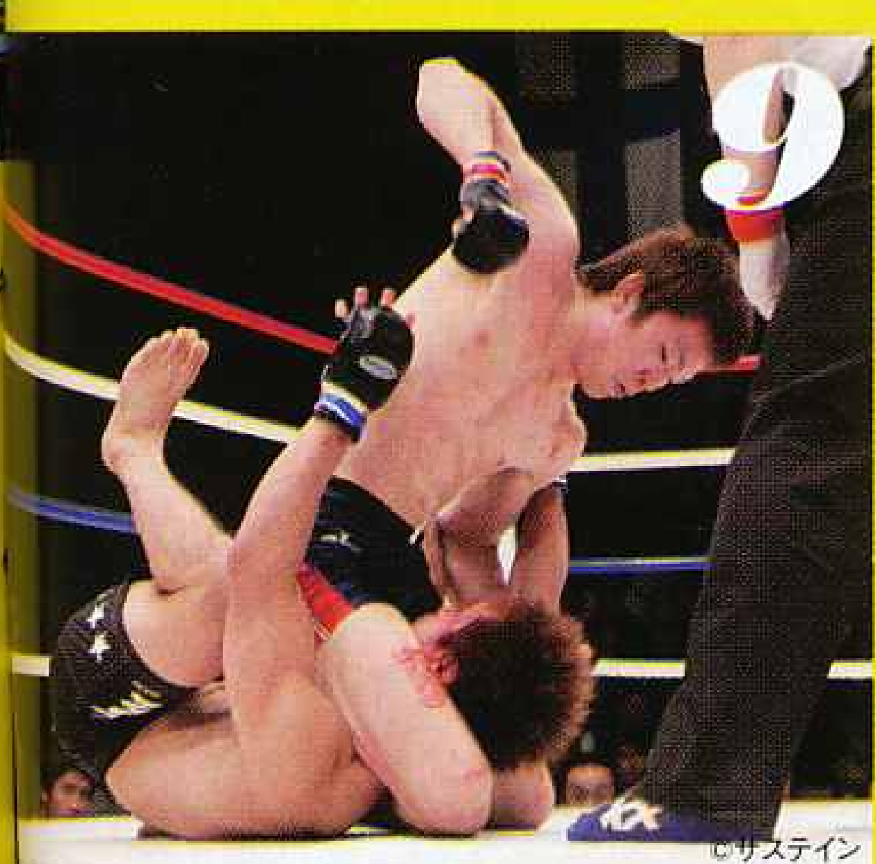


▲2005.8.20　修斗
[横浜文化体育館]

×vs桜井"マッハ"速人

(3R終了 判定 3-0)

凄い勉強になった一戦、その一言ですね。自信がつきました。ボクの中で負けてないっていうのもあったし、自分のすべてを出しきれた感じです。いまの力でここまでいけるんだなっていう確認ができた試合。かけがえのない経験になったし、この試合を通じて本当に強くなった気がしました。周りにも「青木ってけっこうやるじゃん」って、印象もついたし。



©サステイン

◀2005.11.6　修斗
[後楽園ホール]

○vs弘中邦佳

(1R 2分10秒 TKO)

これは3日前くらいに弘中選手の対戦相手が逃げて、若林(太郎)さんから「青木、試合しないか?」って言われたんです。「いつですか?」って聞いたら「今週なんだよね」って(笑)。合掌! これに勝ったらタイトルマッチやらせてくれるって約束してくれたので受けました。この試合もケンカモードでしたね。三角の体勢でマウント取ってコツコツ殴って。相手の目尻が切れてるのにレフェリーは止めないし、弘中さんもやる気満々だし、ボクも無我夢中で闘ったことで最後はああいう凄惨な結果に。

▶2007.2.17　修斗
[パシフィコ横浜]
○vs菊地昭
(3R終了 判定 2-1)

本当はPRIDEラスベガス大会に出たかったんですけど、修斗やれんのか! ということで出場しました。菊地選手はあいかわらず強かったけど、ボクのほうが強くなってると思いました。判定に対してボクがコメントブースで「理解に苦しむ」とか政治家みたいなこと言ったんですけど。その発言がまた修斗ファンのあいだで物議をかもしちゃって(苦笑)。そういえばマッハさんがボクの持ってるベルトがほしいんですよね? マッハさんならあげてもかまわないけど、ほかのわけわかんないヤツだったらやりたくないけどね(キッパリ)。





▲2007.4.8　PRIDE.34
[さいたまスーパーアリーナ]
○vsブライアン・ローアンユー
(1R 1分33秒 腕ひしぎ十字固め)

DSE体制でのPRIDEラスト興行ですね。ライト級ではボクだけ出場したってことが自慢です。最後のイベントとして感慨深かったですね。終わりの瞬間に立ち会えるってこともあって。本当に誇りですよ。ちなみにこの大会に出たことでボクは、日本でのPRIDEナンバーシリーズに参戦したライト級初の選手でもあるんです。このことをインタビュースペースで言ったんですけど誰も取り上げなかったんで、ボクはこれからも自分で言い続けていきます。自分大好きだから! で、このあとはライト級グランプリの度重なる延期に伴って空白の期間が続いていくと。

▶2007.12.31　やれんのか!
[さいたまスーパーアリーナ]
○vsチョン・ブギョン
(3R終了 判定 3-0)

これは相手のデータがなくて困りましたね。カルバンがダメになって、強い外国人にいろいろ参戦交渉してもらったんだけど全然決まらなくて。そのうち階級が全然違うのにバダ・ハリとかドン・フライとかわけのわかんない名前まで挙がって。ジャイアント・シルバだけはカンベンしてくれって言いましたけど(笑)。最後は佐伯さんの「いいでしょ、韓国人で! 弱いんだから」の一言で決まったんですよね。そうしたら実際はめちゃくちゃ強いでやんの!! あの怒濤の腕十字は想像つかなかったし、なおかつこっちがいくら殴っても心は折れないし。これは"ミスターやれんのか!"的には勝てて本当にホッとしました。



番外編
ひっそり実現していた青木vsホジャー!

▼2005.5.29 アブダビコンバット
[ザ・ピラミッド(米国・カリフォルニア州)]
×vsホジャー・グレイシー
(アキレス腱固め)

この頃は柔術だとホジャーにはまったく歯が立たなかったですね。学生時代だからけっこう前ですけど。ボクはアブダビコンバットでは日本予選を全部一本勝ちで優勝したんですよ。だから『Kamipro』読者の皆さんは知らないかもしれないですけど、けっこう組技も強いんです!(とってつけたように)。あ、今度ホジャーは『戦極』に出るんですよね。単純に総合でどのくらいできるのか見てみたいですね。



▶2006.2.17　修斗
[国立第二代々木競技場]
○vs菊地昭
(3R終了 判定 3-0)

菊地選手は強かったので、これはボクも勝ちにこだわって試合しました。このときはボクが先手を取る戦略で、それが功を奏したかたちですね。この試合でミドル級チャンピオンになったボクは「一生、修斗しかやらない」って名言を吐いちゃったわけですが……。あの時点でまだ大学生でしたけど、ある程度総合格闘技をやってみて「プロは食えん!!」って思ったんですよね〜。まぁ、なんというかここから大人のはじまりですよ!!



▲2006.3.24　修斗
[後楽園ホール]
○vs鶴屋浩
(2R 1分4秒 フットチョーク)

これはグラップリングマッチだったんですけど、警察官になる直前のけじめ試合みたいなもんですね。この頃はバイトとかはせずに、学校の奨学金でやりくりしてました。ちゃんと学校にはPRIDEのファイトマネーで返金しましたよ。ちょっといい話じゃないですか?





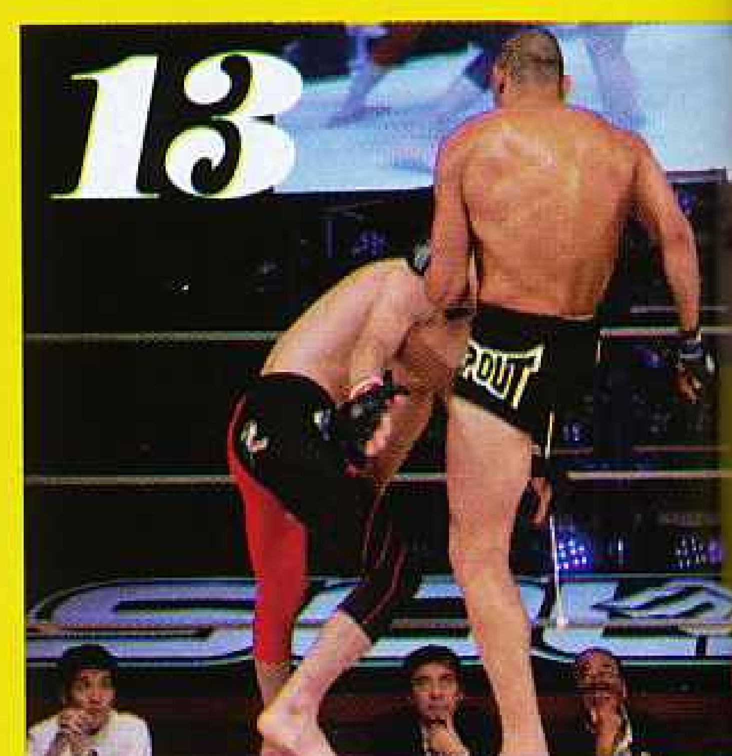
◀2006.8.26　PRIDE武士道 其の十二
[名古屋市総合体育館レインボーホール]
○vsジェイソン・ブラック
(2R 1分58秒 三角絞め)

いよいよメジャーデビューです。警察を辞めたのは修斗の経歴がひっかかって、柔道の試合に出られないことが発覚したからです。で、僕がお世話になってる公武堂の長谷川社長に「格闘技は続けたいし、UFCに出たいんでなんとか応援してください」ってお願いしたら、「それは待て。ボクがおまえを絶対に悪いようにしないから」って言ってくださって、DSEの方を紹介してくれたのがきっかけです。この試合はボクにとって革命的でしたね。勝ったら会場があんなに爆発して。なおかつ、バックステージはお水飲み放題にお菓子食べ放題だし!! 応援してくれる人もだんだん増えてきて、ここから格闘家一本でやっていける気がしましたね。

▶2006.11.5　PRIDE武士道 其の十三
[横浜アリーナ]
○vsクレイ・フレンチ
(1R 3分57秒 三角絞め)

このときは最初は(ギルバート・)メレンデスと試合だったのが、負傷欠場で直前に相手が変更になったんですよね。この選手はのちにKOTC(キング・オブ・ザ・ケージ)の王者になるんですよね。でも、やる前からボクのほうが強いっていうわけわかんない自信があったんだよな〜、ククククク。





▲2006.10.14　修斗
[パシフィコ横浜]
○vsジョージ・ソテロポロス
(2R 0分5秒 反則失格)

これもタ●キンですね。この選手もけっこう強かったですよ。最近のTUF(ジ・アルティメット・ファイター)で活躍してましたし。試合自体はボクが足関取ってボコって圧勝モードだったと思うんですけど、最後の最後にデリケートなところをデリカシーなく蹴りやがって。NO MORE タマ●ン!

▶2006.12.31　PRIDE男祭り
[さいたまスーパーアリーナ]
○vsヨアキム・ハンセン
(1R 2分4秒 フットチョーク)

この試合はボクの中で一番のターニングポイントでしょ。ハンセンは凄いプレッシャーもきつくて強かったけど、ボクは極めることにこだわり抜いたから勝てたんだ思います。試合後は涙ぐんでしたよ。自分の中のいろいろなものが弾けて。あ、それからこの試合をきっかけにオヤジがシャシャリ出るようになりましたね。そういう意味でもターニングポイント、オヤジのタレント化(笑)。




自分大好き
ワオ木さん
本人が解説!

バカサバイバー

黒の黙示録

DREAMミドル級GP開幕！
我々はすべてを受け入れなければならない——!!



青木真也とJZカルバンの再戦も決定し、いよいよもって盛り上がりを見せている4・29『DREAM・2』。目玉はもちろんミドル級グランプリ開幕戦である。有名日本人ファイターが揃い踏みするこの大会は、先につながるドラマが要求されるライト級グランプリとはまた違った意味合いを持つことになるだろう。すでに田村潔司と船木誠勝の〝UWF対決〟という物語性のあるカードも発表されており、注目度はがぜん高まっていると言える。

だがなぜか、あの男の名前を誰も口にしようとしない。今大会ダントツの優勝候補にして日本MMA界ナンバーワンの不人気選手、秋山成勲のことである。名を呼べばくちびる寒しのごとく、秋山について語ろうとする選手が見当たらないのだ。〝対秋山〟はグランプリの明白な主題であるにもかかわらず、これはいったいどういうことなのか?

たとえば、秋山とは浅からぬ因縁をもつ桜庭和志。あの忌まわしき〝ヌルヌル事件〟以来、秋山とは一切関わりを持たない姿勢を貫いてきた彼ではあるが、トーナメント出場によって再び秋山と対決する可能性が出てきた。これは全MMAファンの共通認識であるはずなのだが、桜庭は一切そのことに触れようとしない。最も重要なサイドストーリーを、意図的に避けて通っているようにさえ見えてしまうのだ。

確かに桜庭は〝ヌルヌル事件〟の被害者であり、秋山を嫌い、無視する権利がある。だが今回のミドル級グランプリ、ひいてはDREAMという生まれたばかりの団体の顔役であろうとするならば、桜庭は秋山と対峙する宿命があると言えるだろう。言うまでもなく、それは数多くのファンが心のどこかで望んでいることでもある。

かつてはPRIDEの主役として絶大な求心力を誇り、常にファンを意識した闘いを繰り広げてきた桜庭が、秋山成勲という因縁の宿敵に積極的ではないと言う現実。ここに違和感を覚えないといったら、まあ嘘になる。



〝黒の惨劇〟から1年あまりがすぎた。魔王と英雄が再び対峙することはあるのか?　いや、向かい合わねばならない。それは宿命であり運命だ!!

田村はどうか。〝PRIDE vs K-1〟という意味合いを含んだ金泰泳戦に敗れ、やや後退したとはいえ、まだまだファンから多くを期待されている選手である。

これから地上波を通じて顔を売ってゆかねばならないライト級の選手たちとは違い、桜庭や田村はもう充分な認知度と、銭の取れる物語をもっている。しかしながら彼らが、勝負論や観客のニーズがいま一つ薄い試合を繰り返す方向にゆくようであれば、その〝貯金〟は確実に目減りしてゆくはずだ。

それに〝貯金〟を消費しながら進められる彼らのウェットなドラマが、旧PRIDEを支持したDREAMファンを満足させられるかどうかも疑問である。PRIDEがあれほどの求心力を得た背景には、間違いなくスリリングな勝負論とシビアな試合内容があり、そこから生じた結果がもたらす〝感動〟があった。カード編成は機を見るに敏、最もファンを熱くさせるであろう闘いが、常に最高のタイミングで提供されてきた。

もちろん外国人選手にとっても他人事ではない。かつて秋山に打ち倒されたデニス・カーンや、これから日本で名前を売りたい〝未知の強豪〟たち。彼らが堂々と〝打倒・秋山〟を宣言することもまた、興行を盛り上げることにつながるのではないだろうか。いずれにせよ、このまま秋山という〝強者〟が腫れ物のように扱われ続けるのであれば、ミドル級GPから勝負論が抜け落ちるという異常事態になりかねないのだ。秋山を無視し続けることは、そのような〝PRIDEイズム〟を否定することにつながらないだろうか?

だが、そんな心配もおそらくは杞憂なのである。その理由は秋山が忌み嫌われ、今日において〝魔王〟と呼ばれるに至った過程にこそある。

秋山の復帰戦、デニス・カーンを凄惨に打ち倒したあの『HERO'S』韓国大会を思い出してみてほしい。プロ格闘家としては過去に類を見ないほどファンに嫌われ、一般マスメディアからも叩かれ放題という四面楚歌をも乗り越え、謹慎前を上回るほどの強さを見せつけた魔王の姿を。

憎しみや拒絶によって潰れたり弱体化したりするどころか、自分に向けられた〝負の感情〟をも飲みこみ、より巨大化してきたその軌跡こそが魔王の魔王たるゆえん。柔道家時代を振り返ってみても、やはり秋山を強くしてきたのは〝不遇〟であることがうかがえる。

すなわち現状は、秋山にとっての肥やしにすぎないのだ。皆が秋山を無視すればするほど、闇の力は魔王の中に蓄積されてゆく。それが爆発するその日こそが、まさしく新たな悪魔伝説の始まりとなるであろう。

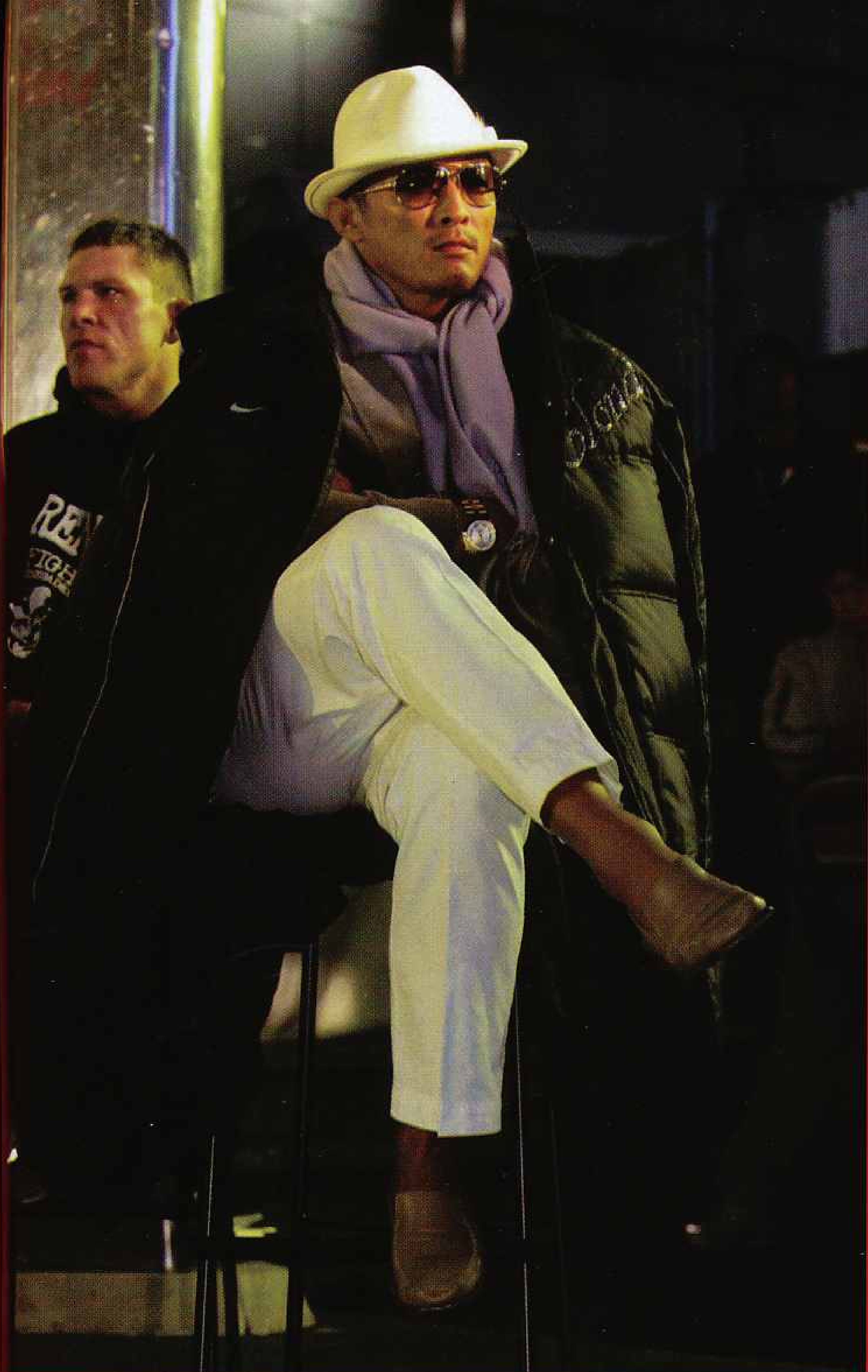
そうなれば、桜庭や田村たちも黙ってはいられない。というよりもファンが先に「誰かあの男を止めてくれ!」と泣き叫ぶだろう。そのとき彼らがファンの願いを受け流すようであれば、もはや正義のUWF戦士ではいられない。いやがおうにも勝負論を抱えて、秋山と対峙するしかなくなるのだ。

ファンタジーの世界に登場する魔王が〝世界征服〟というわかりやすい野望を抱くように、秋山もまた〝結果〟というわかりやすい達成を求めた。人気の獲得や大会の成功などはそっちのけで、結果を残すことにのみ特化したかのような秋山のモチベーションは尋常ではない。もはや神格化された〝U〟という概念にとどめを刺すのが秋山であるとするなら、そのときこそ魔王は〝魔神〟となり、世界の終わりを告げる黙示録の使者となるだろう。

最後に鳴り響くのは終末の鐘か、それとも天使が奏でる始まりの笛か?

我々はこの〝格闘ハルマゲドン〟を決して見逃してはいけない。世界の行く末をしっかりと見すえ、その上で答えを出すべきなのだ。MMAファンはいま、試されている。

（田中太陽）



魔王はアイドル

韓国から見た秋山成勲

いまこそ“真剣勝負”やれんのか！

文／大川義之

いよいよ4月29日に迫った『ＤＲＥＡＭ・２』ミドル級グランプリ２００８開幕戦。このトーナメントの〝陰の主人公〟は、なんといっても嵐を呼ぶ〝魔王〟秋山成勲だ。桜庭和志や田村潔司らとの禁断の対決をはじめ、誰と当たっても、リング上に猛々しい緊張感が吹き荒れること間違いなし！

しかし、そんな日本での捉えられ方とは裏腹に、現在、秋山は韓国メディア界で話題沸騰、超ベビーフェイスとして驀進中なのだ。日本で見せる姿がダークサイドの〝魔王〟ならば、秋山が韓国で見せる姿は、ズバリ言って完全にピュアホワイトなベビーフェイスのそれである。はたして秋山は韓国でどのように巨大化しているのか？ 韓国で報道される秋山評を紹介しながら、その複雑怪奇な人格に近づいてみたい。

秋山は今年の2月から4月にかけて、メディアへの出演のために何度も韓国を訪れている。

まず2月27日のトーク番組『ムルッパクトサ』に出演した秋山は、パク・サンミンの「ひとつの愛」を歌い、意外な歌の実力を披露。機転の効いたしゃべりのうまさなど、新たな魅力を存分に知らしめた。

この番組の司会者カン・ホドン（元韓国相撲横綱で、現在はコメディアン）は「どうしてそんなに頭がいいの？ 凄く知的で賢そうだし、話の仕方もとてもうまい。格好よくしゃべるし、どこかセミナーでも通ってたんじゃないの？」と秋山のスター性を絶賛！「キミが格闘家を引退したら、絶対に韓国の芸能界で再会するような気がする。いつか、自分と一緒にお笑いやってるんじゃないかなあ（笑）」と、芸能界入りにも太鼓判を押した。秋山の出演は、最近マンネリ化が続いていたこのトーク番組に活を入れ、視聴率は前半放送が19・2パーセント、後半放送ぶんは16・1パーセントという好数字を叩き出した。

こうした秋山成勲の意外な魅力に目を付けた韓国メディア業界は、以降、秋山をテレビに引っ張りだそうと躍起になった。そればかりか、この数週間後にはトーク番組で披露した『ひとつの愛』のレコーディングの場を用意。なんと歌手デビューさせてしまったのだ！（曲はコンピレーションアルバム『２００８哀歌』に収録）。これがまた悔しくなるぐらいいい出来なんである！ 元曲の本家であるパク・サンミンにも「感情表現が非常にいいね」とお墨付きをもらい、驚くことに立派なプロモーションビデオまで制作するという本腰の入れよう。前評判の高かったこの曲が公開されると、すぐに話題騒然となった。

「秋山が歌ったパク・サンミンの『ひとつの愛』は、モバイルチャート上位圏（第5位）に上がるなど、人気を呼んでいる。彼の感受性がたっぷり込められたこの曲は、ファンのあいだでも大好評」（２００8年4月8日『ニュース・エン』報道）

本業の歌手に交じって秋山の曲は、堂々のベスト5入り！ スポーツ選手の楽曲がここまで売れるのは、極めて異例の事態である。

さらに、秋山は「CDの売上は、すべて韓国の社会福祉施設に寄付する」と宣伝。4月4日には「木浦（モッポ）共生園」を訪れて施設の子どもたちと交流し、親善大使にも任命された。こうした秋山の旺盛な活動は、着実に韓国で知名度と好感度を上げた。最近、秋山と同様に〝時の人〟

である韓国人初の宇宙飛行士イ・ソヨン女史から『一緒にすごしたい人は誰か』ってよく聞かれるんですけど、宇宙船のような狭い空間の中ですから、性格のさわやかな秋山成勲選手です！」という発言が飛び出し、ニュースなどでも大きく報道された。

さらに韓国では、秋山の半生をドラマ化する噂が出たり、あげくのはてには、ミドル級グランプリが間近に控えているというのに「秋山が韓国の人気ドラマに出演する」というデマがまことしやかに報道されたほど。すでに、この二つの噂は秋山側から否定されているが、これが実現してもおかしくないほどに、韓国メディアにおける秋山の価値は高騰している。

このような韓国での〝秋山フィーバー〟の中で、ある種の重みを加えているのは、ともに韓国柔道界で〝学閥差別〟の犠牲者であったユン・ドンシクの言葉だ。

「成勲とは親しい間柄だよ。彼は柔道に対する格別な愛情を持っている。だから総合格闘技の舞台でも成功できたんだろう。成勲が韓国柔道界の派閥問題に負わされたキズを、少しずつ癒していってくれたらと思う。彼はようやくいまになって成功することができたのだから。

誰もが過去に、ひとつくらいは心残りな思いを抱いて生きている。無念な思いがまったくなければ、あとになって自分の人生を振り返ったとき、むしろそれを寂しく思うだろう。柔道時代の学閥問題によって受けたことは、どれひとつとして忘れたことはない。この多くの痛みをどうすれば忘れられるというのか。肯定的に考えるだけだ。それが36年間、生きてきて学んだ人生の知恵だ。もしかしたら、成勲もそう考えているのかもしれない。

アイツは自分の不幸を乗り越えて、最高のステージに立ったから。アイツが日本に帰化したときも、ただ、淡々とその事実を受け入れたよ。成勲が昔言ったように、本当に韓国の柔道界は何を言っても変わらなかったから」（『SPORTS2・0』第94号から）

秋山が歌ったパク・サンミンの『ひとつの愛』はモバイルチャート第5位にランクイン



“抱かれたい男”ならぬ“宇宙で一緒にすごしたい男”として名を馳せた魔王。韓国では『戦極』もビックリのピュアホワイトなファイター。日本とのイメージギャップは甚だしいったらありゃしないのだ。この二面性は秋山をより魔王たらしめる要素なのかもしれない。





こうした秋山と同様の体験をした者の言葉が伝わってか、前述の女性宇宙飛行士のみならず、秋山人気は、幅広い女性層にも広がっている。韓国で秋山成勲のファンクラブを運営するパク・ジュフン会長はこう説明する。

「最近、女性会員の加入と活動がぐんぐん増えています。秋山選手の実力、そして魅力的な容姿もそうですが、胸を痛めるような彼の経歴に〝憐憫の情〟を感じる女性ファンが多いようです」（2008年4月1日『ノーカットニュース』）

つまり、単に現在の秋山のクリーンなイメージのみが受け入れられているのではなく、人生において苦しみや挫折を経験してきた秋山自身の歩みが、女性の母性愛を強く刺激しているのだろう。

あまりにも違いすぎる日本と韓国での秋山成勲のイメージ。その二面性は、もはや天と地ほどの差ができてしまっていると言っていい。

秋山の陰の部分のイメージが強すぎて秋山の持つ陽性の魅力にまで目が行かない日本。一方、秋山の負の部分の考察をきちんと行なわずに、被害者としてのフィルターを通して秋山の〝痛み〟をすんなり陽性のものへと昇華させようとする韓国。どちらも秋山の一部であり、どちらの国のイメージも秋山をすべて表現しているとは言えないかもしれない。観る者の立場や見方によって、異なる光を放つ秋山の多面性。そうした多面性こそが、在日コリアンとして生まれた秋山という人間の深みであり、歪みであり、そしてあえて言うならば、大きな魅力でもある。

闘いの道を突き進むごとに、多様な色の光を放つ秋山成勲は、DREAMのリングでどのような光を放つのだろうか？



"PRIDE"を取り戻せ!
そして、さらば『HERO'S』システム!?

いまこそ"真剣勝負"やれんのか!

ズンドコ大連立が止まらない!?

DREAMに明るい差別を! 座談会

旧PRIDEとHERO'Sの大連立で3月に旗揚げ戦を行なったDREAMは大会直前にミルコの相手を公募、旗揚げ戦でも青木vsカルバンがアクシデントで終わるなどドタバタ続きの船出に。4.29『DREAM.2』、5.11『DREAM.3』へ向け仕切り直しを図りたいところだったが、ライト級GPに主催者推薦枠として出場が決まった宇野薫に対する不満が続出、ミドル級GPもなかなかカードが揃わずズンドコぶりはいまだ継続中だ。はたして、DREAMはどうなってしまうのか? さあ、みんなで考えよう!

構成／阿修羅チョロ　試合写真／乾普也　会見写真／梅木麗子

DREAMって、やっぱり〝両親〟の相性が悪かったのかなあ（笑）

ジャン斉藤（以下、ジャン） 前号で「DREAM 産みの苦しみ座談会」っていうのをやりましたけど、まだ産まれてないんですよ。

堀江ガンツ（以下、ガンツ） ちょっと陣痛が長すぎでしょ、これ！（笑）。母子ともにかなり危険ですよ、ホントに。

ミスターY（以下、Y） なんか、この結婚の是非が問われかねない状況になってますよね。

ガンツ 今日は事情通のXさんではなく、名前を伏せずにはいらないYさんに出席していただいております。やっぱり、もともと〝両親〟の相性が悪かったのかなあ（笑）。

ジャン いやいや、だってこれって事実上の〝再婚〟でしょ。お互いの良いも悪いも理解して一緒になったのに。

ガンツ じゃあ、かわいそうなのは、産まれてくる子どもだよね。ボノちゃんばりに「好きで生まれてきたんじゃない！」みたいな（笑）。

Y まあ、〝産みの苦しみ離婚〟とかもあるって言いますし。

ジャン 離婚!! そうなったら〝マット界の王理恵〟を襲名するしかないですよ！

ガンツ どっちが？ いや、どっちも凄い恋愛遍歴か（笑）。

ジャン まあ、今日はDREAMで何が産まれてくるのか、何を苦しんでるのかっていうのをちょっと浮き彫りにしていきたいなって思うんですけど。

ガンツ ファンからしてみたら、見えづらいところが凄く多いでしょうからね。では、まず宇野薫の主催者推薦枠問題からいきましょうか。

Y その問題に関して言えば、いま日本って代表選考が旬なんですよ。昨日（4月6日）の柔道では谷亮子が負けたのに代表に選ばれて。女子は一人を除いてみんな決勝戦で負け、もしくはその前に負けてる子が選ばれてるんですよ。日本の価値観として、必ずしも勝ち残った者が代表になれないっていうね。

ジャン でも、その大会だけで代表を決めてるわけじゃないですよね。

Y そこが柔道はズルいんですよ。「代表選考」っていうだけで、「代表決定戦」とかじゃないんですよ。それで、勝った人間はどうできるのかっていったら、何もできないんですよ。お上が勝手に決めるだけで。今回だったら、1年以内の国際試合の実績とかで決めるべきなのに、谷亮子はそれを無視された上で決まってますから。だから柔道とかでも特例はあるんですよ。

ジャン 要するに柔道における興行論としての選択だったところはあるわけですね。谷亮子が代表じゃなかったときの、あらゆる損失は計りしれないという。ボクも〝お上〟だったら谷亮子を選ぶなあ（笑）。



4月4日、都内ホテルにて5.11『DREAM.3ライト級GP』の会見が開かれ、主催者推薦枠として宇野薫が参戦、対戦相手は石田光洋に決定したことが発表された。これには石田はもちろん、川尻、青木からも不満の声が。

ガンツ でも、いまのDREAMは興行論を優先してるのに、逆に興行への興味が薄れていってる感があるのが一番問題だと思う。

Y ひねった興行論っていうか、まず箱ありきで、それに当てはめる方式ですけど、いまはうまく転がってないですよね。

ガンツ だって、『HERO'S』のそういうところが、ファンにソッポ向かれてきたから、「PRIDEみたいにしましょう」っていうのがDREAMだったわけじゃないですか。それなのに、やってることが一緒じゃマズイでしょ！

Y いびつですよね。

ジャン 三崎vs秋山戦のノーコンテスト裁定のときにも書いたんですけど、要はやり方や見え方の問題だと思うんですよね。確かにここは宇野くん登板しか考えられない。推薦枠で（ビトー・）シャオリン（・ヒベイロ）に出てきてこられても、ずいぶんと困るわけじゃないですか（笑）。

ガンツ いや、アンタ確かに強いけどさあって。

ジャン Yさんにお聞きしたいんですけど、今回の宇野くんの参戦っていうのは、さまざまな駆け引きもあってのことなんですかね？

Y というふうに見えてしまうのが残念ですよね。

ジャン そうなんですよ！ 裏で何があろうが知ったこっちゃないんですよ。そう見えちゃうのがマズイんですよ！

Y 光岡（映二）を『戦極』に出してますけど、そもそも慧舟會のポリシーは全方位外向ですからね。

ジャン 同じ主催者推薦にしても、一昨年の無差別級GPのヴァンダレイ（・シウバ）みたいな感じだったら納得感があったんですけどね。

Y JZ（カルバン）が2回戦からシードで出ても誰も文句言わないでしょ。『HERO'S』って一昨年のミドル級トーナメントでも、3人ケガで欠場で、1回戦のスタートを一大会ぶん遅らせたっていう前代未聞のことをやってるから、許されるかなと思ったんじゃないですか？

ガンツ そんな感じですよね。

Y とにかく時間が最優先って感じで。

ガンツ しかも、その時間っていうのも、大会ギリギリのドタバタじゃないですか。

ジャン まあまあ。公募しないだけマシじゃないですか。

ガンツ そこまでハードル下げられないでしょ！ そうなったらほかの出場者の立場はないよ（笑）

ジャン 石田（光洋）くんや川尻（達也）も会見では相当に怒ってましたね。

Y 僕は石田の怒りはガチだと思うんですけど。あのさわやか青年があんなに怒るなんて。石田も川尻も去年はずっと浪人生活を送らされて、ようやく闘う場ができたと思ったら「これかよ！」っていうのはあるでしょうね。

座談会出席者

ジャン斉藤 本誌編集長。雀鬼・桜井章一の内弟子を経て本誌編集部へ。永久電機など〝アントン事業〟の真摯な調査・検証をライフワークとしている。

堀江ガンツ 本誌編集部。子どもの頃からの変態的プロレスファン&UWF信者で、『Kamipro』入り後もUWF研究家を自称する変態編集者。

ミスターY 格闘技業界のあらゆる情報を網羅する業界きっての事情通。『Kamipro』の座談会によく登場しているミスターXは古くからの友人。

ガンツ　まあ、いろんな立場で思惑が違うでしょ。「格闘技界が落ち込んでるから、なんとかみんなで団結して盛り上げよう」って人もいれば、それに乗じてうまくやろうって人もいるだろうし。

ジャン　それこそ、東京湾に沈められる前にいろいろ動く人間がいてもおかしくない（笑）。

ガンツ　まあ、マネージメントサイドからしたら、いかに自分のタレントを高く売るかってことを考えるのは当然なわけで。

Y　そこは興行ですから。利己主義というか、自分の手駒をいかに手厚く使ってもらうかをみんな考えてるだろうから。

ガンツ　だから逆に言うと、DREAMっていう組織は、それこそプロレス団体みたいに選手側と主催者側が合致したように思ってたんでしょうね。主催者同士が手を結ぶんだったらいいんだけど、いろんなプロモーション、マネージャーがいる中で、無理やり手をつないで「いま苦しいけれども、身を粉にして頑張りましょう！」って感じで、意思疎通もないまま産まれちゃったような。

Y　……もしかして偽装結婚？（笑）。

ジャン　なんのために!!（笑）。

Y　子どもたちを養うために（笑）。

ガンツ　でも、その子どもは親同士の結婚を「え、知らねえ！」って感じでしょ。で、「向こうの子ども、大っ嫌い！」みたいなね（笑）。

ジャン　ホント『HERO'S』と『やれんのか！』の選手同士はメチャクチャ仲悪いみたいですね。世代を超えていがみ合ってるという話も聞きます（笑）。そのいびつさが興行として転がればいいんですけど。猪木さんじゃないけど、トラブルをビジネスに替えるというか。

Y　そうそう。マッチメイクが悪くても、実際に生で観たらよく転がる興行ってあるじゃない？　4月5日のケージ・フォースは大会前に3つか4つカードが壊れたけど、主催者側が「申し訳ございません」って自分たちの非をまっとうに詫びてやった興行だったの。

ガンツ　払い戻しも応じてましたしね。

Y　それが、いざ蓋を開けてみたら、途中ちょっとダレた試合もあったけど、全体的に非常におもしろい興行になって成功したんですよ。

ジャン　いまのDREAMもそこに懸けるしかないですよね。石田vs宇野戦も、石田くんの怒りによって、より興味が湧いたのは間違いないですし。

ガンツ　今回、石田や川尻とかが怒りを見せたことによって、宇野くんは、いままでの好青年一辺倒のイメージじゃなくて、ギラリと光るというか、鈍い光を放つ可能性が出てきたでしょ。

Y　これで宇野が石田を完膚なきまでに完封して勝ったら、「スゲェじゃん！」ってなりますよね。

ガンツ　ぶっちゃけ、宇野くんって、本音の怒りだったりイラつきだったり、そういうのを表に出さずに、凄くきれいにまとまっちゃってるところがイマイチ面白味にかけるところだと思うんですよ。強いんだけどオール4の優等生みたいな感じで。

Y　ソツがなさすぎるんだよね。

ガンツ　そう。オール4よりは、1や2の部分もありつつ、5の部分がある選手のほうが見ていておもしろいというか。

ジャン　ムラッ気のある五味（隆典）だったり、バカな青木だったりのほうが人間として興味を惹かれるところってありますよね。

ガンツ　そう考えると、今回のライト級グランプリは宇野くんによって盛り上がる可能性は凄くあると思う。

Y　宇野は本人的には望んでいない、世間が勝手に〝ヒール〟ってつけたシールをどう処理するかってことで、開き直ってやってくれたら凄くカッコいいと思うけどね。

ジャン　じゃあ、ライト級グランプリで一番おいしいのはじつは宇野くんなのか。

Y　ブレイクする最大のチャンスですよ！　極端な話、青木vsカルバン戦よりも宇野vs石田戦のほうが興味はあるんじゃないかな。カードとして新鮮だし、日本人同士の潰し合いだし。

ジャン　そこは愛憎入り混じるところですからね。青木vsカルバン戦はもっと評価されるべきなんだけどなあ。

Y　凄いよね、半年に3回って、日本総合格闘技史上初だよね。

ジャン　しかも勝ったら2週間も経たずに2回戦ですよ。普通はモチベーションを保てないでしょう。

Y　怒りしかないよね、お互いに。その怒りの矛先がどこなのかっていうのが一番の問題なんだけど。

ジャン　石田、川尻の二人はまだ「気に食わねえヤツがいる」ってレベルだと思うんですけど、青木はたぶん想像を絶するような感情があると思うんですよ。それこそ川尻じゃないけど、原稿用紙10枚じゃ足りない。で、親（『やれんのか！』）に恥をかかすわけにはいかないから、そこを押し殺してこんな過酷なことやんなきゃならない。そろそろ青木はグレると見た（笑）。

ガンツ　だからこそ、青木には〝飛び級〟のチャンスがあると思うんだよね。

Y　でも、ライト級グランプリは、ここまで不幸な話、ツライ話、暗い話の連続ばっかりだから、ここで突き抜けた明るい話題を提供できる人間がいたら、ホントMVPですよ！

ジャン　この逆境を全員がバーンと跳ねのけたら、それは凄く盛り上がりますよね。

Y　まとまったところで、今後はミドル級グランプリの話題ですか？

ガンツ　こちらもなかなか、難産に



主催者推薦によりライト級グランプリ2回戦からの出場が決まった宇野薫には対戦相手の石田をはじめ、川尻、青木ら選手からはキラー発言が続出。これまでとは一転"ヒール"のイメージが貼りつけられた宇野は参戦決定以降、沈黙を続けている。

なりそうですけど（笑）。

Y ミドル級って、現時点（収録は4月7日）ではどこまで発表されてるんでしたっけ？

ジャン 現時点で発表されてるのは田村vs船木、桜庭vsアンドリュース・ナカハラ、ゲガール・ムサシvsデニス・カーンの3カード。

ガンツ う〜ん、なんともいえないなぁ（笑）。

ジャン でも、船木vs田村戦はいいんじゃないですか？

ガンツ 見出しになるカードだよね。お好きな方はどうぞ、みたいな（笑）。

ジャン やっぱり、問題は桜庭の相手だと思うんですけど。

Y アンドレ・ナカハラって、どうなんですか、この人は？

ジャン アンドリュースですよ。それじゃムード歌謡歌手ですよ（笑）。プロフィールによると、極真の中量級でなんかチャンピオンですね。うーん、いや、わかるんですよ。格闘技は何が起こるかわかりませんし。

ガンツ 今回、いまのところGPに出場が発表された人たちって、「トーナメント優勝するぞ！」っていうのがほとんど感じられないんですよ。デニス・カーンぐらいでしょ。

Y 優勝うんぬん以前に「ボクは出ません」って言ってる人もいるし（笑）。

ジャン でも、このトーナメントの重要なポイントは、究極的には秋山と桜庭の"禁断の遭遇"じゃないですか。桜庭がトーナメントに出るイコール、秋山とどのような接点を持つかかって。

「桜庭は秋山と闘わなくて安心してる」なんて声があるのはつまらない話

ガンツ 直接対決をする、しないはともかく、二人の関係性が緊張感とドラマを生んでくれそうではありますよね。

Y ただ、痛いのは三崎（和雄）がいないってことですよね。三崎、秋山っていう二つの主軸があったら、それを中心に回せるから。

ジャン じゃあ主催者推薦枠で出てもらいましょう！（笑）。

Y それいいねぇ〜！ それこそ、三崎だったら準決勝から出てきても誰も文句言わないでしょ。

ジャン ミドル級にも主催者推薦枠がほしいですよねぇ。それに、ミドル級はライト級にも増してマッチメイクが難しい選手が多い気がするんだよなぁ。

Y いろんな意味でケアが必要な人が多すぎるよね。桜庭なんか、そんなにトーナメントに出たくなかったら、ボクはワンマッチでもいいと思ったけど。

ガンツ いや、ボクは断固としてノーです。同じ階級のトーナメントやってる大会のワンマッチで、桜庭vsナカハラの試合を組んで、それがなんなのかっていう。

Y テレビのため！

ガンツ でも、桜庭は現役の最終章に向かっていってる最中じゃないですか。格闘技に限らずスポーツ選手で、ベテランスター選手がなぜ美しいかかっていったら、ギリギリのところで勝負してるからですよ。辞めちゃったけど桑田真澄だったり、ついこないだの井上康生だったり。マラソンのQちゃん（高橋尚子）だったりね。あと清原和博なんかもそうですよ。みんな生き残るのに必死になってる姿に感情移入するのに。たとえば桑田とか清原が「2軍でもいいです」って言ってたり、康生やQちゃんが「試合はしますけど、オリンピックは出ません」とか言ったら、ガックリきちゃうでしょ？



4.29『ミドル級GP1回戦』ではアンドリュース・ナカハラとの対戦が決定した桜庭。決定前には「(脚の)かさぶたからの血が止まらないのでトーナメントは出ない」との"桜庭劇場"を展開し、ファン、関係者をヤキモキさせた。

ジャン そこも見え方なんですよね。一連のパフォーマンスは桜庭独特の"照れ隠し"。桜庭本人は相当な覚悟を持ってグランプリに臨んでいるのかもしれない。でも、残念なのがそう感じることができない、なんとも言えないムードが漂ってるわけじゃないですか。

Y そこをアンドレ戦でどう払拭できるのか期待したいですよね。

ジャン だからアンドリュース戦ですって。

ガンツ PRIDEミドル級グランプリに出てたときの桜庭は、優勝はできなかったけど、美しかったじゃないですか。もの凄く意地も見えたし。そこが桜庭の魅力だと思うんですけどね。

ジャン 去年、秋山特集をさんざんやってきた中で、何が一番引っかかったのは、ある人が言ってた「桜庭は秋山と絡まないから安心している」って発言で。やっぱり格闘家なんだから、最大の敵との闘いを期待しなきゃ、逆に失礼でしょう！ それに、我々のできない闘いに臨むからこそ憧れるし、尊敬できるわけでしょ。いろいろ事情はあるんだろうけど、「でも、現実は……」なんて話は聞きたくないんですよ！ だって、そんなつまらない現実との闘いなんて、どこのサラリーマンだってやってることですもん。

Y やっぱり、こういったイベントは「こいつとこいつは無理だろ」とか、「人間関係を考えたら絶対に無理だよ」ってカードを組むのが一番おもしろいじゃないですか。秋山vs桜庭戦って、まさにそういう関係の二人だからね。

ジャン それを「秋山と闘わなくて安心している」なんて声があるのはホントにつまらない話ですよね。

Y ボクシングもおそらく秋口に内藤大助と亀田の兄貴（興毅）がやると思うんですよ。やったら、いま世間の風は内藤になびいてるから、亀田は大ヒールとして迎え入れられる。そこでいい試合したら、おそらくまた世間の評価は変わるんですよね。そういうかたちでしか彼はもう生き残れない。そういう意味で、秋山vs桜庭戦も実現したら総合は絶対にまた爆発しますよ。

ガンツ それが本来のプロレスであり、プロ格闘技の興行じゃないですか。それをいまの主催者推薦枠ってさ、野球で足ケガしちゃって守れなくなりました、そしたら急遽セ・リーグでDH制が採用されるとか、そんな感じでしょ。「もういいかげんにしろよ！」っていう話で（笑）。

Y しかもその球団だけで。巨人だけとかね（笑）。

ガンツ　そんなのがまかり通りすぎて、そうじゃないとその選手と契約できない、みたいな。そういうのがファンにも見透かされてるんですよ。そうなると「どうせ選手がワガママ言ってんだろ」って感じで人気は出ないし、主催者も「何やってんだ！」って思われて、イベントの信用が下がる。ホントに悪循環ですよ。

Y　結局、主催者側は選手だけじゃなくてファンにもナメられちゃってる感じだよね。ワガママを聞いてあげるような選手は一人でいいと思うんですよ。

ジャン　K-1MAXでいうと魔裟斗ですよね。

Y　そうそう。そういうのが3人も5人も10人もいたら、ワガママがワガママじゃなくなっちゃう、無軌道になるだけだから。

ガンツ　そして魔裟斗はべつにワガママ言ってるわけじゃないし。長年、MAXをたった一人で背負い続けてるんだから、もの凄い選手ですよ。

ジャン　まあ、主催者側からすれば「そんなことは言われなくてもわかってるよ」っていう歯がゆさもあるでしょうけど。

ガンツ　ホント、主催者側は、選手、マスコミ、ファンに対しても「わかってるよ！」って言いたいことだらけなんだろうけどね。それかね、桜庭とか田村は、あくまでグランプリの彩りの一つであって、それ以外の若い選手たちの勝負論でグランプリが盛り上がるようじゃなきゃ、ホントはダメだと思うんだよね。桜庭とか田村の絡みはボーナストラックぐらいの感じでいいんですよ。

ジャン　それを本流にしちゃいけない、と。

ガンツ　そうそう。ニュースターが出てくるのが一番いいんだよ。これまで出てた選手じゃなくてもいいと思うんだよね。

Y　ミドル級のメンツを見て凄く気になるのは、PRIDE系の85キロ前後の選手がいないってことなんだけど。

ガンツ　三崎もいないし、郷野（聡寛）も長南（亮）も中村カズ（和裕）もUFCに行っちゃったし。ホントは岡見（勇信）あたりが凱旋帰国ってことで出てきたら、もうちょっと盛り上がるんだろうけど。

Y　一昔前の前田日明みたいにね（笑）。

ガンツ　ひと昔じゃなくて、大昔ですよ（笑）。だからハッキリ言っちゃうとスター不足、タレント不足で。せっかくテレビっていう舞台があるんだから、なんとかうまくそれを利用してほしいんだけど……、TBSだからなぁ。

Y　こないだのDREAMの地上波なんて、いきなりKIDが会場入りするシーンから始まってさ。

ガンツ　ガハハハハ！

Y　瞬間瞬間で一般大衆の目を引き止めておけばいいだろうっていう発想で。何を見せたいのかっていうか……試合を見せたくないっていうのはよくわかりました（笑）。

ジャン　TBSの格闘技中継の話をしだすと止まらなくなりそうなので、ミドル級GPに話題を戻しましょうよ。

ガンツ　一番いいのは「秋山食ってやる！」ってヤツが出てくることなんだけどね。三崎はそれに名乗り上げてブレイクしたんだから。

Y　そのドラマも見えづらいっていうか、みんな秋山を見なきゃいけないのに、逆に秋山を遠ざけようとしてる感じで。なんか無視しようとしてるでしょ。「ここは俺が秋山にヤキ入れてやる」、「いや、俺が先に入れる！」ぐらいにならないと。

ガンツ　秋山を倒したらスターなんだから、ホントなら秋山争奪戦になるぐらいじゃなきゃ、ウソだと思うんですけどね。

Y　そしたらもっと熱が生まれますよ。

ガンツ　あと本来、トーナメントの大会って格闘技やプロレスに限らず、組み合わせ表を見て「これが勝って、これが勝って、こういう組み合わせになって」とか考えるわけじゃないですか。

Y　そう。その妄想が楽しいからね。

ガンツ　それが大会のギリギリまでトーナメントの組み合わせすら決まってないんだからさ、想像できないんですよ！

Y　その楽しみを奪っちゃってるよね。そういう期待感があって観に行くと全然違うから。

ガンツ　今号で『HERO'S』の特集をやって、いろいろ調べたんだけど、『HERO'S』のトーナメントってじつはいいカードがけっこう実現してるんだよね。でも、途中から主催者推薦とかそういう試合ばっかりになって「え、ここでこんなカードが実現してたの？」っていうような感じで、トーナメントだかワンマッチだかよくわからなくなるっていうか。

Y　上のカードが一つ決まったら、

秋山を倒せばスターなんだから、ホントなら秋山争奪戦になるべき



旗揚げ戦のリング上では「このDREAMのリングでは、選手一人一人が夢を持っていると思います。自分も夢に向かって闘いたい」と挨拶した秋山。4月14日現在、カードは発表されていないが、秋山はDREAMでどんな夢を描こうとしているのか。

下もダダダーッと決まってくるのが『HERO'S』式のマッチメイクでしたからね。(山本) KID (徳郁)のカードが決まらないと、ほかも決められない、みたいな。

ガンツ そう考えると、ホント、"脱・HERO'S!"って声を大にして言いたいよね。ハッキリ言ってね、PRIDEファンの熱に支えられてきた『やれんのか!』グループが、『HERO'S』みたいな興行をしてたら、PRIDEからのファンに対する一番の裏切りになっちゃうと思うんですよ。

Y それはあるだろうね。

ガンツ そうなったら思い入れがある選手を観るしかないってことで個人を観るようになるから、大会の求心力はなくなっちゃいますよ。ホント、DREAMに『HERO'S』の選手は必要だけど、『HERO'S』のシステムはホントいらない!!

ジャン だから今度の『DREAM・2』、『DREAM・3』で『HERO'S』をブチ壊さなきゃいけないんですよ。ホントにここは正念場ですね。

ガンツ 『HERO'S』のスター選手がPRIDEに来るのが一番よかったんだけど、いまは『HERO'S』の選手がいない『HERO'S』にPRIDEの選手が出てるだけになってるでしょ。

Y そりゃあ難しいわ。

ガンツ たとえば、五味がライト級GPにもの凄いファイトマネーをもらって出てくるってなって、それに対して、ほかの選手から不満が出てきたとしても、それは興行的には全然ありでしょ。

Y そうそう。じつは勝負の世界って"不平等"なほうがおもしろいんですよ。最近の"不平等"はイマイチだけど(笑)。選手を平等にする必要なんてないし、強い者だけが富を得たらいい。中堅選手の「そこそこメシ食えたらいい」っていう考えが興行をつまんなくするよね。ホントに差別しなきゃダメだよ、餓死するヤツがいてもいいぐらいの。



DREAM旗揚げ戦となった3.15さいたま大会ではミドル級GPへ参戦が決定している選手が挨拶を行なった。ひさびさにリング上で桜庭と秋山が並び立つなど期待感は高まるも、その後、カード編成は難航……。

ジャン もともと格闘技なんて、差別の克服がテーマなんですよ。いまの格闘技界の場合、前向きに取り組みたい差別じゃないんですよね。なんだか暗い差別。そんなものとは対峙したくないから、どうなるかというと、つまらない公平性を口にするヤツが現われる。

Y PRIDEってファンが観ても明るい差別だったじゃないですか。

ジャン そうですね。「思いどおりにやりたいんだったら這い上がってこい」っていう明るい差別は絶対に必要ですね。

ガンツ そう考えると、「あの選手とはやりたくない」とか、そういう選手のワガママでGPのカードが決まらないんだったら、もうガックリきますよね。だって、夏にオリンピックが始まったら、負けたら次がないっていう試合をして、そのために4年間を潰してやってきてる人たちの必死な姿をこれから毎日のように観られるわけでしょ。で、格闘技というのも、じつはその「負けたら最後」みたいなところが魅力で、その中でチャンピオンを目指すっていうのがロマンだったわけじゃないですか。格闘技がその魅力を失なったら、格闘技を観る意味すら揺らぎますよ。

Y 負けても主催者推薦枠とかあるからね。

ガンツ そういうシステムって日本だけじゃないですか。最後の問題で得点が倍になるクイズ番組じゃないんだから(笑)。

Y 名前だけじゃ生き残れない世界のほうが全然いいんですよね、スポーツの世界は。

ガンツ そういう弱肉強食の中でも生き残ったレジェンドっていうのがホントに尊敬されるわけで。「負けられない理由」とか陳腐なドラマはいらないけど、ホントの意味の"真剣勝負"ならドラマは自然と生まれてくるんですよ。そうなれば負けた人にも感情移入できるだろうし。

ジャン 負けによっていままでドラマってたくさん生まれてきたじゃないですか。PRIDEなんて負けの歴史ですしね。

ガンツ そうそう、日本人なんて負けっぱなしだったから(笑)。

ジャン 「また負けんだろうな」って思いながらも応援しに行くわけですよ。残酷な現実を突きつけられても、また観に行きたくなるものがPRIDEにはあったんですよ。

ガンツ ついこのあいだまで"PRIDEを忘れろ"なんて言ってたけど、こうなったら"PRIDEを取り戻せ"って言いたくなるよね。

Y あと"さらばHERO'Sシステム"(笑)。

ジャン "DREAMに明るい差別を"ってことで、今後のDREAMに期待しましょう!

[08年4月7日/Kamipro編集部にて収録]

相対性理論から"シュール"の定義づけまで!?

夢のカリスマ異次元対談がついに実現!!

×須藤元気

1年前ではとうてい考えられなかった異色すぎる異次元対談が実現した！　ご存知、本能のファイター・ミノワマンと、精神世界の達人・須藤元気との顔合わせだ。一見、まったく"質"が違うように見えがちな二人だが、入場へのこだわりやファンへのサービス精神など共通項目は意外と多い。そんな二人をドッキングさせたところ、なんとも話がスイングしまくるではないか！　"愛情"のあまり、ミノワマンをいじりまくる須藤元気のお茶目さにも注目して読め!!

聞き手／堀江ガンツ　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也



――今日は、異色のビッグ対談ということで、なんとミノワマンさんと須藤元気さんの対談が実現しました！

ミノワマン&須藤　よろしくお願いします。

――まず、お二人はもともと面識は？

須藤　僕のパンクラスのデビュー戦のとき、美濃輪さんが同じ大会に出られてて、『ネオブラッド・トーナメント』で優勝されてたんですよね。

――そのときってミノワマンさんはもうパンクラスに所属してたんですか？

ミノワマン　そうですね。

須藤　だから、パンクラスでは1年ちょいぐらい一緒だったんですよね。美濃輪さん、横浜道場でしたよね？

ミノワマン　そうです、横浜です。

須藤　僕は東京（道場）にいたんで、パンクラス内でも横浜と東京で分かれてましたから、一緒に練習することはなかったんですよ。だから、美濃輪さんというと、飲み会に連れてってもらったようなイメージしか……。

ミノワマン　僕が連れてってたっていうか、そういう会に一緒にいたんですよね。

――そういう会ってどういう会ですか？

須藤　要はコンパです。パンクラスの選手と女性陣と……あれ、誰がブッキングしてたんですかねえ？

ミノワマン　いや、ちょっと覚えてないですね……。

――いくらでも「ピー」入れますから教えてくださいよ（笑）。

須藤　とにかく僕はいろんな人から美濃輪さんの巨乳好きだけは聞いていて、顔よりオッパイを見てしまうって（笑）。いまもそうですか？

ミノワマン　いや、いまは全然……ちゃんと全体を見るように気をつけてます。

――ようやく総合的な感じで見られるようになりましたか（笑）。

須藤　前はオッパイという寝技に偏ってましたからねえ（笑）。でも美濃輪さんは凄く二枚目キャラだったじゃないですか。

――二枚目ですし、もっとパンクな感じでしたしね。

ミノワマン　あ、パンクで音楽を好きになったんで、基本がパンクロックって感じです。いまはいろいろ聴くんですけど、やっぱり原点はパンクだから。

――そっちも総合的に（笑）。ところで、元気さんは現役のときに『kamipro』の取材で、よく「美濃輪さんがいい！」って言われてましたよね。それでこの対談を企画した部分もあるんですけど、元気さん的にミノワマンさんの気になる部分ってどんなところですか？

須藤　当時はいまのキャラクターより、もう少しまともだった……っていったら失礼ですけど（笑）、昔からどっかしら美濃輪さんって少し壊れた部分ってあって、そこが魅力でしたよね。表現者は少し壊れてないと僕は魅力を感じないですから。やっぱり、型にハマッてないし、当時からエッジがきいてましたよ。

――"芸術"はどこか飛び抜けてないと。

須藤　PRIDEの煽りVを観ても、美濃輪さんがだんだん壊れていく様子が映し出されてるじゃないですか。『DREAM・1』ではひさしぶりに生で入場を観たんですけど、あれは僕の中ではパーフェクトでしたね！

――今回もかなり"溜め"てましたもんね。ちょっと"溜め"すぎなんじゃないかというくらい（笑）。

須藤　いつまでやってるんだろうっていう（笑）。

ミノワマン　でも、どうしてもあれだけ溜めないと、あそこのピークを理解してもらえないんです！（真剣に訴えて）。

一同　ダハハハ！

ミノワマン　「長い！」って言われるから、一度曲を編集して入場したことがあるんです。そしたら全然伝わらなかったんですよ。自分自身はその曲が好きなんで、ピークに持っていけるんですけど、実際3分25秒でピークがくるんですけど、編集すると伝わらないんです。

須藤　（すかさず）たぶん、編集ミスだと思いますけどね（笑）。でも、ちょっと長いなって思うぐらいが空気が独特になるんですよ。

ミノワマン　あ、ありがとうございます。理解していただいて（深々と頭を下げて）。

須藤　いや、美濃輪さんの入場が好きな人って多いでしょ？

ミノワマン　でも、そんなふうにハッキリ言っていただいた、いただけて（急にドモって）……、あの、僕ってどんなふうにしゃべってましたっけ？

――ダハハハ！　しゃべり方を忘れましたか！（笑）。

須藤　前は普通に「おうっ！」みたいな感じだったんですけどねえ。

ミノワマン　海外から帰ってきてから、日本人の方とどういうふうに話してたか、あんまりわかんなくなっちゃって。

――そんなわけないでしょう！　えー、話を戻しますが、ミノワマンさんって昔から入場にはこだわられてましたよね？

ミノワマン　やっぱり入場は、……こだわるっていうか、入場から退場までが試合だと思ってるんで、やっぱり意味があると思いますね。

――それは元気さんにも通じるようなも



「美濃輪さんはフルスロットルですから
パチンコでハンドルを全開にしてるような」（須藤）
「一応、真ん中狙ってるつもり
なんですけど……」（ミノワマン）
ミノワマン×

のがありますね。

須藤 やはり試合って選手一人一人思い入れがあるんですよ。だから、わかるんです。ゆっくり出たりしたい気持ちも。ただ、ちょっとしょっぱい試合が続いたときに次の選手がなかなか出てこないと、お客さんとしては「早く出てこないかなあ」ってなるじゃないですか。僕が一番最初に入場パフォーマンスを始めたきっかけはそういうことだったんですね。

――観る側のことを考えてってことですよね。

須藤 それを考えると、美濃輪さんはいつでも魅せてくれるじゃないですか。やはり真剣勝負の中にもエンターテインメントを表現していかないと、格闘技界って広がっていかないなと思いましたね。ただ、僕はいろいろコスチュームを着たりしてるんですけど、美濃輪さんって自分の肉体だけで勝負してるでしょ。あれは役者そのものがよくないとなかなか表現できないですよ。

――コスチュームを着てきたときも、真っ赤な着物でしたからね（笑）。

ミノワマン あれは自分が侍であるとしたら、きっとこんな格好するかなって。

須藤 でも、侍は赤い着物とか着ないですよ（笑）。

ミノワマン いや、僕が当時の侍で、着物を着るんであれば、ここまでカブいてやろうって。

――カブキ者ですね（笑）。背中に「新人類」って書いてありましたけど、そこにもこだわりがあるわけですよね？

ミノワマン あれはいろいろ意味があって、一言では語れないんですけど。「新人類」って言葉で自分自身、覚醒したところがあって。この言葉を聞いて、なんか……いろいろ、なんか……。

須藤 美濃輪さん、言語障害になっちゃったんですか!?（笑）。

――ダハハハハ！

ミノワマン 友だちにもよく確認するんです。「もしおかしかったら教えてね」って。

須藤 すでにおかしいです（笑）。

ミノワマン だから一言では説明できないので、……感じてほしいです！

須藤 （急にのけぞって）うわ〜。これはぜひ1ページ全部使って「感じてほしい！」って文字を大きく載せてほしいです。

――その点、元気さんはよく「言葉の力」とか言われますけど、いまの内容は感覚的には理解できたりします？

須藤 そんなことよりも美濃輪さんは完全に人間力の勝利ですよ。試合にしても選手としては勝敗は大切ですけど、そういうのを超越してます。それに「ミノワマン」という名前のセンスがまた凄いじゃないですか。苗字に「マン」をつけるこのセンス!!

ミノワマン でも、これしかないから（ボソッと）。





「新人類」ですか!? 一言では説明できないので……感じてほしいです!（ミノワマン）

須藤 アハハハハ！ 中途半端だとへんな感じになるんですけど、美濃輪さんはフルスロットルですからねえ。パチンコでハンドルを全開にして、全部右端に落ちてくような（笑）。

ミノワマン あっ！ 初めてパチンコやったとき、全開でした！ やり方わかんないから。

須藤 生き方がまさしくそうですよ（笑）。たまーにアクシデントで真ん中にスポンと入るような。

ミノワマン 一応、真ん中狙ってるつもりなんですけど……。でもまだ自分自身はフルでやりきれてないとは思うというか、どっか恥ずかしがって中途半端な部分があるって感じが凄いするんですよね。

須藤 そうなんですか!?

ミノワマン それをいま試合を重ねていく上でちょっとずつちょっとずつ出しきって、完成したものを作りたいなと思ってます。

――反対に、ミノワマンさんは元気さんの入場をご覧になってどう感じてました？

ミノワマン あんなに人を使っていろんな衣装を着たりしてるのを観ると、「あそこまでやっちゃったんだ」って思うし影響されますね。あとは背中のタトゥーがあるじゃないですか。あれって何時代の絵なんですか？

須藤 あれはナスカの地上絵なんですけど、いつできたかはまだ解明されてないんですよ。僕は紀元前だと思うんですけど。

ミノワマン その当時の人間がタイムスリップして現在のリングで闘ってるように見えるんですよ。それが凄く神聖でもあって、啓示的でもあって。そう見えた瞬間がおもしろかったです。

須藤 美濃輪さん、そう思ったときってシラフでした？（笑）。

ミノワマン （どぎまぎしながら）えっ、も、もちろんシラフです！

――ダハハハハ！ 元気さん、おもしろがってますよね？

須藤 すいません（笑）。でも一言ツッコんだだけでこれだけ盛り上がるのって、美濃輪さんだけですよ！

――ツッコんでもすべて飲み込んでしまう感じがしますしね。そんなハートが揺れないミノワマンさんと、メンタルな部分にお詳しい元気さんにお聞きしたいんですけど、リングに向かうときの気持ちって、どういうものなんでしょう？

須藤 僕はもう引退した人間ですからねえ。でも思い起こしてみると、まあ、誰でも試合は緊張しますから。美濃輪さんみたいに特殊な人はわからないですけど、大抵の人は9割以上は緊張して出るんで、その緊張にどうやって付き合ってくかだと思うんですよ。

ミノワマン いや、僕も皆さんと一緒で緊張の波が何回も何回も来ますね。入場のときぐらいからバーンとスイッチ入るんですよ。それまではグネグネです。でも、こないだ試合を終えて思ったのは、緊張が何度も来るというのは何かパワーを溜めてる証拠なんじゃないかなと思って。

須藤 そこは捉え方一つで変わりますからね。だから、僕が思うに試合前に上げ下

げの波を作らないことが大事なんですよ。たとえば、練習で「今日は調子いい!」ってことで2部練習、3部練習をやるじゃないですか。そうすると次の日練習できなくないですか?

ミノワマン　できないですね。

須藤　そこで上げちゃうと、今度逆に凄く下がっちゃうんですよ。反対に下げすぎると、また上がるんですけど。たまたま上がってるときに試合がくるといいですけど、反対に下がってるときに試合がくることがけっこう多いんですよね。だから、本当はこの波の上下の幅をなるべく小さくすればいいんですよ。それがいわゆる平常心ってことなんですけど。

ミノワマン　………あっ!!

——どうしたんですか、いきなり（笑）。

ミノワマン　いや、こういう小さい波じゃなくて、一回ドーンッて落ちて、次にドーンって上がる波に乗せて試合ができたらいいんじゃないかなって。

須藤　そういう人もいますよね。ただ、失敗したらたいへんなことになりそうですし、そこはギャンブルなんです。で、フィジカルの話でいうと、じつは僕、学生時代のときずっと体育は「3」だったんですよ。

——えっ、そうだったんですか!?

須藤　小中、全然体育ができなくて。それで格闘家になろうと思ってたから、とにかく体力以外で何かそういったものをプラスアルファさせていかないと勝負できないと思ってて。それでメンタルをコントロールするように勉強したんですよね。

——へえ。ミノワマンさんはコントロールされてますか?

ミノワマン　いや、自分はコントロールはあんまり……。でも、自分も体育は「3」でしたよ。とりあえずそのときの授業では全力を出してたんですけど。

一同　ダハハハハ!

ミノワマン　だから、なんで「5」になんないんだって思ってたんですけど。でも確かに「4」とか「5」の人より記録的に低いんですよ。

——そういえば、ミノワマンさんはマラソンで最初から全速力で走ってた人ですからね。

ミノワマン　あれは小学校からずっとです（平然と）。ペース配分ができなくて。

——そうですか（笑）。では、タイプは違いますけど境遇的には似てるところがあったのかもしれないですね。元気さん自身、ミノワマンさんの試合を観て、よく「常識では考えられない、理解できないような力を発揮する」と言われてますけど、そのあたりはどうでしょう?

須藤　大晦日で対戦したのはズールでしたよね?　そもそも、そういう相手とやるという時点で美濃輪さんは勝負してるんですよ。やはり、お客さんが求めてるものって非日常的空間なんですね。日常とは違ったものを観ることによって、人は初めて日常から離れてエキサイトできる。





うわ〜。これは1ページ使って「感じてほしい!」って大きく載せてほしいですね（元気）

でも美濃輪さんは非日常的空間の中で、もう一つ非日常的空間を作ってる。格闘界が3次元だとすると、美濃輪さんは4次元なんです。対峙したときとか、入場の溜めとか、やっぱりちょっとおかしいなと思うし!

——まあ、普通じゃないですよね。

ミノワマン　（首をかしげて）でも自分でおかしいとは思わないです。自分から見たら普通というか、まともだなって。

須藤　いや、その感覚は大事ですよ。それに美濃輪さんはリアルな格闘技に入ってプロレスを意識してるじゃないですか。真実って白or黒とか、格闘技orプロレスとかそういうことではなく、そのあいだのグレーゾーンなんですよ。グレーゾーンに答えがあると思うんで、美濃輪さんの場合、真剣勝負の中でもの凄くプロレスのエンターテインメント性を引っぱってくれるのでブレンドされて凄く味わい深くなってる。

——しかも、それはグレーを狙ってるわけじゃないですよね。

須藤　ええ、自然とグレーになってしまう。でも、正直言うとプロですから狙ってもいいんですよ。僕だって狙ってやってましたから。ただ狙ってることをわからせようとすると痛くなっちゃうんですね。ただ、美濃輪さんはお客さんを楽しませる部分を絶対に理解されてると思いますし、そういったところの配分、まあ本質的に突き抜けてる部分もあるから、いい味わい深さを与えてくれてると思うんです。

——お二人に共通するのは、そういうプロとしての部分っていうのがデビュー当時からあったという部分ですよね。

須藤　僕は高校生2年生のときに入場パフォーマンスやろうって思ったんですけど、デビュー当時、ヘビー級しかなかったんで、僕の身体でプロになれたとしても「これはひと山いくらで終わってしまうぞ」と。そこで考えた戦略が、とにかく隙間を狙って人と違うことをやろうということで、弱ければイロモノになるけど、試合に勝っていけば華があるってことになるから、派手な入場をやるんだったら絶対に強くならなきゃって。だからある意味、背水の陣に自分を追い込んだんですよね。

——なるほど。その点、ミノワマンさんはどうだったんですか?

ミノワマン　僕はプロレスラーしか考えてなかったんで。

須藤　プロレスラーになろうとは思わなかったんですか?

ミノワマン　いや、プロレスラーになろうと思ってパンクラス入ったんです。

須藤　（困惑気味に）えっとその……、いわゆるロープに振ったら返ってくるようなプロレスは?

ミノワマン　だから、シンプルなプロレスがパンクラスだったんで、そう思ってパンクラス入って、デビューした当時もイメージはプロレスラーで、気持ちを込めて入場しただけなんです。曲は自分が好きな自分の気持ちが上がる曲で。それだけですね。

須藤　ああ、それが功を奏したんですね。そうやって自分がプロレスラーだって意識して入場する人って、ちょっと少ないですし。でも、プロレスラーかぁ……。いま

ので凄くしっくりきましたね（感心して）。

ミノワマン　リアルプロレスラーって名前をつけたんですけど、自分の描く理想のプロレスラー、こういう選手がいたらいいなっていうのを描いたところ、入場から退場までのああいう感じになって。それでもまだまだ理想には遠いんですけど。

須藤　でも表現者たるもの、理想主義者であるべきだと思うんですよ。それは完結しないほうが。常に全力でやっても80パーセントしかいかないって法則があるんですよ。たとえばこの世界でいったら20パーセントの人が富を占めて80パーセントが貧乏なのが現実なんですよ。その意味で、表現でも同じことが言えて、自分は100パーセントやろうと思っても結局マックスでも80パーセントなんです。そこに伸びしろがある。それがわかってると、へんなふうに完璧主義者にならない感じがしますね。

ミノワマン　……（じっくり聞いたあとにポツリと）それは本で読んだんですか？

――ダハハハハ！

須藤　そ、そうですね（苦笑）。

ミノワマン　（興味津々に）あのー、よく相対性理論の話とかされるじゃないですか。自分も相対性理論って言葉をなんかの番組で聞いてから凄い興味を持って、わかりやすい本を読み始めたんですよ。でも途中で難しくなって断念したんです。

須藤　ああ、科学の相対性理論で勉強すると難しいんですよ。要は、物事というのは結局エネルギーなんです。この部屋も誰かしらがイメージしたもので、誰かが何かを考えて行動することによって、現実世界が作り出されているんです。だから美濃輪さんが「俺はリアルプロレスラーだ」ってずっと言ってたら、リアルプロレスラーになる、それが科学の世界なんです。こういうふうにやったら楽しいなと思いながら、それを言葉に出して宣言して行動したら現実化するんですよ。

ミノワマン　………………光の速さだと、これが全部グネグネに見えるっていうのは？（遠慮がちに）。

須藤　それは化学的な側面から切った理屈なんですね。だから、単純にいまこの部屋にあるのは誰かしらがイメージしたものだと考えるとわかりやすいんです。

ミノワマン　（突然、覚醒して）あっ、そういうことか!!　わかりました。

――ほ、本当ですか!?（笑）。

須藤　だから、この部屋で美濃輪さんと僕の対談が現実化したのも、『ｋａｍｉｐｒｏ』がイメージして宣言して行動に移したからできることになったという。

ミノワマン　でもイメージしても、「これは違う！」っていうのも必ずありますよね。そういうのは？

須藤　それは思考をコントロールできてないんですよね。そこでコントロールする一番のコツは、言葉を変えることなんです。みんな考えたいことを考えてないんですよ。

ミノワマン　……。

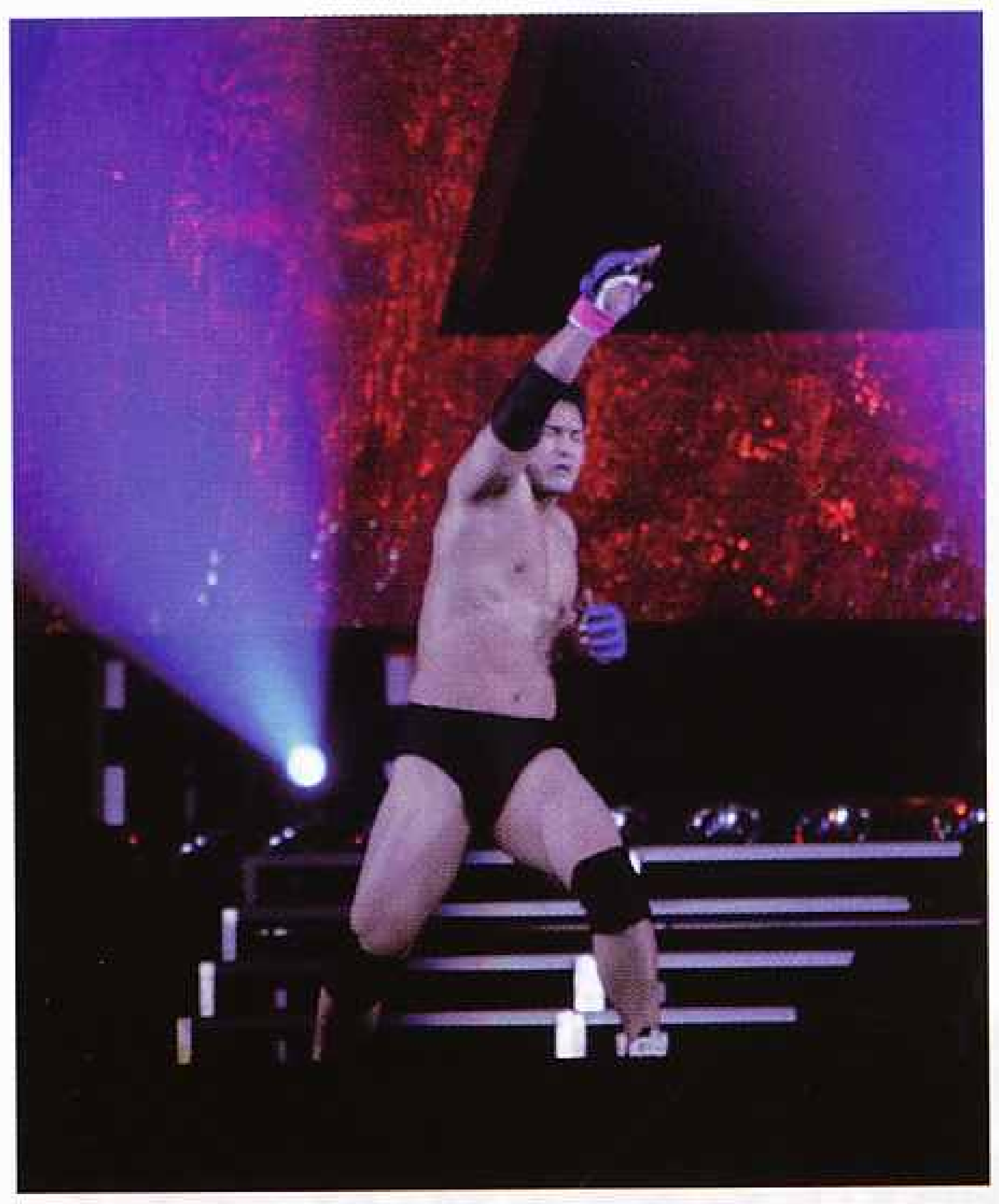
須藤　たとえば「明日の仕事ヤダな」って思うとしますよね。でも、これはそう思わないようにコントロールできるんです。「ヤダな」と思ったら、ヤなものがやってくるんですよ。

ミノワマン　違うものは全部排除してけばいいんですか？

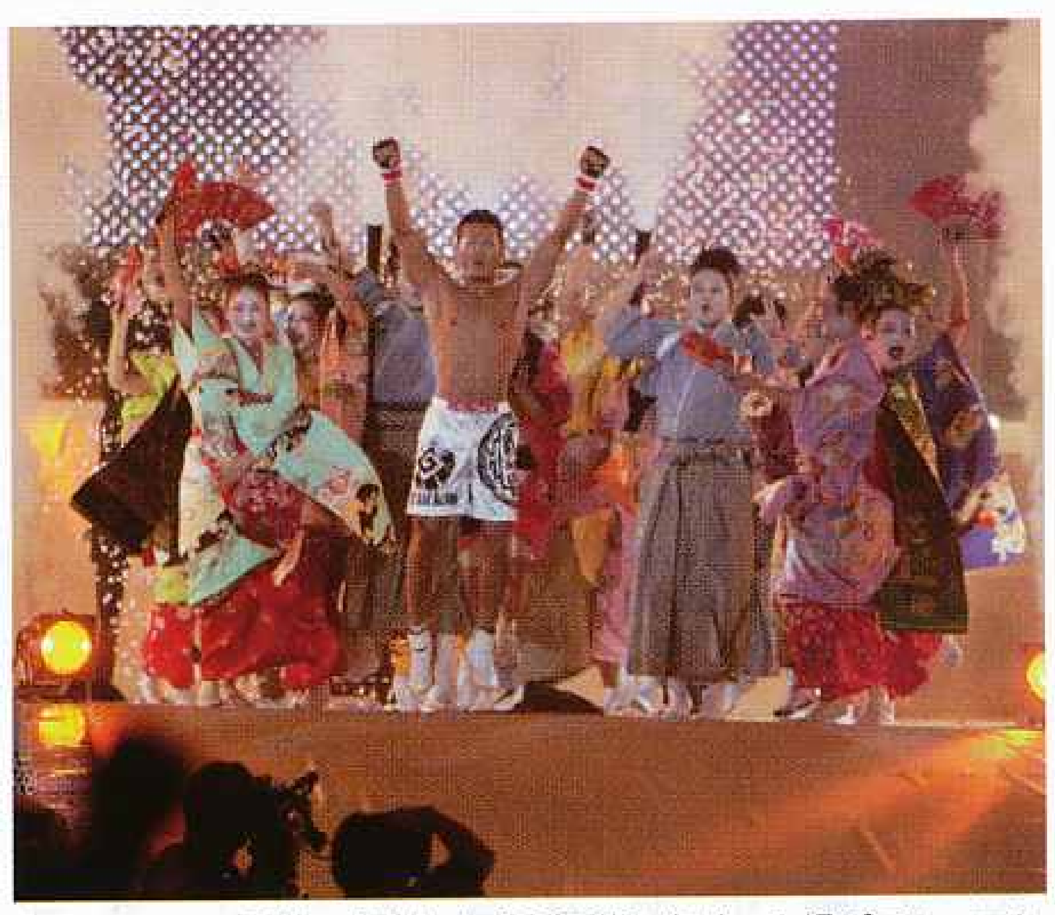
須藤　自分が望んでないものは考えないほうがいい。だから試合前に「ケガしたくないな」って言うとケガしちゃうじゃないですか。それは、そう考えてる時点で意識がケガに向かってるんですよ。

ミノワマン　普通はケガをイメージすると、それを乗り越えて「ケガしないぞ」って考えますよね？

須藤　それはセルフハンディキャップっていわれるんですけど、言い訳することで自分でわざわざハンディキャップを負ってしまってる。美濃輪さんならわかると思うんですけど、そういう選手って多いじゃないですか。



『DREAM.1』の入場ではなかなか出てこないあげく、出てきたと思ったらステージをウロウロして、なかなか花道を歩かないというムーブを披露したミノワマン。しかし本人はこの時間が大切なのだとハードに主張!



ミノワマンの入場に感心しまくる須藤元気も、入場パフォーマンスのパイオニア的存在。毎度、演出が変わる手の込んだ元気の入場は、ある意味『HERO'S』『Dynamite!!』の風物詩であった。

ミノワマン　わかります。

須藤　しかもカゼをひいたりケガしたときに一応周りに「足やっちゃってさあ」とかいうでしょ？　でもそれって万が一負けたときにケガのせいにできるからなんです。

――安牌を打っとくということですね。

須藤　僕も試合前に必ずカゼひいてたんですよねえ。でも、そういうメンタルを勉強していたんで、それからはカゼをひいても言い訳しないようにしたんです。

――ミノワマンさんはそのあたりはどうですか？

ミノワマン　僕もいろいろ試してます。何が効果があるのか。でも、どこにいいものがあるのかわかんないんですよね。前の日にお寺にお参りに行ったり部屋を掃除してみたり、逆にギリギリまでウエートとかトレーニングをしてみたり。自分のそのときの体調に合った練習方法とか、試合の持っていき方を探してる最中です。

――その点、元気さんは自分の理想に一番近くなったときっていつ頃ですか？

須藤　格闘家としては……そうですね、Ｋ－１に出始めた頃ですかね。夢だったＵＦＣに出始めたときには理想に近づいてたし、やりたいことをやれるようになりました。それでも最初にＫ－１出たときは、僕が入場パフォーマンスやってることをスタッフに知られてなかったし、デビュー当時は理解していただけませんでした。

――前例がないですからねえ。

須藤　べつにそこを批判するつもりもないですし、しょうがないんです。でも「あ、こういう世界観があるんだ」ってみんなが理解したときに、初めて表現したいものができて、それと同時に自分自身の試合自体もだんだん完成してきました。

——一方のミノワマンさんはいまだに「入場長いよ」って言われるぐらいですけど、そのあたりはいかがでしょう？

ミノワマン　こっちもしょうがないんです。あれは……必要なんですよ、あの時間が。

須藤　でも僕は、美濃輪さんの入場をプロデュースしたいですねえ。僕だったら絶対にワイヤーアクションですよ！　美濃輪さん、パンツ一丁でワイヤーに吊らされてブワーッて飛んだらカッコよくないですか？

ミノワマン　……ワ、ワイヤー（考え込んで）。

須藤　だってミノワマンって超人じゃないですか。そのワイヤーもタッキー＆翼が東京ドームで吊られたときみたいに揺れちゃったりしたらカッコいいですよね！　美濃輪さんがやったら絶対にシュールですよ！

ミノワマン　あ、あのー、シュールってどういう意味なんですか？

須藤　ええっと、シュールはですねえ、「シュールレアリズム」といって非現実的な感じを「シュール」っていうんですけど、美濃輪さんはすでに現実的じゃないじゃないですか。

ミノワマン　そうなんですかねえ？

須藤　だから、美濃輪さんみたいなもともとシュールな人がいつもの曲で「ダンッダーン（右腕のアクション）」っていう動きをワイヤーに吊らされながらやったら凄いんですよ。それで、一番盛り上がってるところでスーッと降りて立つっていう。



みのわまん■1976年1月12日、岐阜県出身。97年にプロデビュー。03年からPRIDE、06年から『HERO'S』、そして08年3月にはDREAMの旗揚げ戦に参戦し、すべてのリングで本能を爆発させているリアルプロレスラー。試合もさることながら、入場シーン、そして勝利後のSRF8回はファンの心をとらえてやまない。4.29『DREAM.2』からはミドル級GPに参戦。175cm、89.0kg。

すどう・げんき■1978年3月8日、東京都出身。98年に渡米し海外修行を敢行。99年に帰国し、その後、パンクラス、UFC、K-1、『HERO'S』など、メジャー団体で活躍。実力の高さとともに、奇抜な入場シーンや変幻自在のファイトスタイルがファンを魅了。06年『Dynamite!!』を最後に現役を引退し、現在はタレント、執筆活動、また格闘技の解説など、活躍の幅を広げている。

天然ものは生が一番ですから（元気）
天然だとは思ってないんですけど（ミノワマン）

——ということですけど、ミノワマンさん。

ミノワマン　入場イメージはよくわからないですけど……、ワイヤーにはちょっと吊るされてみたいとは思います（真剣に）。

須藤　ただ、物理的に吊るされたままリングに降りるのは難しいと思うんで、入場ステージのところで左右は振れると思うから、ブーンッて振られて、また同じ立ち位置で降りて走ってくるとか。「なんでいま上がったんだ⁉」っていうような（笑）。

——それを3分半のあいだにやるわけですね！

須藤　降りたら、自分でフックを外して、走るんです！　天然ものは生が一番ですから、そのままお刺身で食べたくなるんですかね。

ミノワマン　う〜ん、天然だとは思ってないんですけど。

——じゃあ、さっそく今月のミドル級トーナメントからワイヤーアクションやってみますか！

須藤　あ、もう次の大会に出るんですか。ペース速いですねえ。相手は？

ミノワマン　まだわかんないです。

須藤　でも、楽しみだなあ。僕、全部演出したくなってきましたね。試合前からSRF8回をやっちゃったりとか（笑）。

——ダハハハハ！　シメの儀式からスタートですか。

須藤　「そんだけ気合い入ってんだぞ」っていう。そこが美濃輪さんの最大の魅力ですからね。

——それはどんな勝利宣言よりいいですね。

須藤　もちろん選手としても、このトーナメントでどんな技を見せてくれるんだろうっていう期待もありますしね。試合中に必ず凄い技を出すじゃないですか。そういうのは観ててワクワクしますしね。

ミノワマン　凄いことを……凄いことをやってやろうって気持ちはないんですけど、普段練習で使ってるものを出してるだけなんで。

——あ、練習でもやってましたか（笑）。

須藤　そう。そこは練習で使ってないと試合に出せないですからね。

——ああ、なるほど。ちなみに、そういう元気さんはリングが恋しくなったりとかは？

須藤　恋しくは……やはり次の目標がある中で常に活動してるのでそれはないんですが、凄く懐かしいなという気持ちになります。まあ、やりたくなればいつでも戻るつもりですし。

——おお〜！　そこは気持ち次第なんですね。

須藤　ただ、いまはやりたいと思わないので。そのへんは自分の感情に従ってやりたいと思ってます。感情は嘘つかないですからね。

——感情はウソをつかない、ですか。その点、ミノワマンさんの場合はそこがファンに直接伝わってるのかもしれませんね。

ミノワマン　は、はい…………。（難しい顔をして）。

——と、とにかく、今日はお二人の楽しい話が聞けて楽しかったです！

須藤　僕も楽しかったです。でも、すいません、美濃輪さん。今日は失礼なことばかり言って。記事を盛り上げようとして、つい。

ミノワマン　いや……、僕、失礼なこと言われたんですかね⁉

須藤　（笑）。

【08年4月4日／都内・某所にて収録】



司

いまこそ
"真剣勝負"
やれんのか!

1988.5.12 ⟶ 2008.4.29

第二次UWF旗揚げから20年——いまも闘い続ける男たちは何を見せるのか?

「団体を背負う重責を担ってきた者にしか出せないものがある」

4.29『DREAM.2』からスタートするDREAMミドル級GP1回戦で、船木誠勝と対戦することとなった田村潔司。船木と田村といえば、第二次UWFで同じ時代をすごし、その後は、それぞれリングス、パンクラスのエースとしてマット界を牽引してきたU系のレジェンドだ。その二人が、新生UWF旗揚げ20周年イヤーである今年、いったい何を見せるのか?　この闘いは単なる懐メロではない!

聞き手／堀江ガンツ　撮影／菊池茂夫

田村潔

——船木選手とのDREAMミドル級GP1回戦が決定しましたけど、田村さんのカードが一番最初に発表されるなんて、史上初じゃないですか?（笑）。

田村　いや、そんなことないでしょう。

——初じゃないかもしれないですけど、もの凄く珍しいと思います（笑）。

田村　ただね、ホントは2月か3月ぐらいに、一応、新婚旅行的なことを計画してたのよ。でも、3月に予定どおり旅行に行く勇気もなく、ね。

——さすがにDREAM旗揚げ戦のときに、新婚旅行は行ってられない（笑）。

田村　わりと早めにオファーもらってたこともあって、嫁に文句言われつつ、早めに旅行中止、GP出場っていうのを決めたんだけどね。

——田村さんがその後、出場を発表したのは、やはり1回戦の相手が船木さんだったからということもありますか?

田村　そうなんだけど、けっこう悩んだな。やりたいんだけど、やりたくない感じだったから。たとえば、その子が好きなのは間違いないから、じゃあ、抱いちゃえばいいじゃんって思うんだけど、抱けない、みたいな（笑）。好きだからこそ抱けない、みたいなのあるじゃん。

——「君を大事にしたいから」みたいな（笑）。

田村　そうそう（笑）。やっぱり、よく知ってる人だし、新生UWFで2年間だけど苦楽をともにした仲なんで。新生Uの2年間

は普通の人生の5年とか10年に匹敵するぐらいの凝縮した感じだからね。だから、船木さんとやるのは、そういう意味で凄く複雑だよね。

——じつは第二次UWFに限っていえば、船木さんより田村さんのほうがちょっと先輩なんですよね？

田村　UWFでは、俺が10カ月ぐらい先輩だけど、業界的には船木さんが先輩。そういう意味で、船木さんに気を使ってもらってた部分があったのよ。俺にとってはいい兄貴分だったけど、船木さんが新生Uに来てから入門した冨宅（飛駈）、垣原（賢人）に対しては厳しかったからね。

——完全に新弟子ですからね。

田村　だから船木さん、鈴木（みのる）さん、俺、冨宅、垣原でよくツルんでたりとかしてたけど、あのバランス関係が凄く良かったし、楽しかった。青春だったね。

——じゃあ、田村さんにとって船木さんは、青春時代をともにすごした兄貴分ですか。それはけっこう特別な存在ですね。

田村　そうだね。俺と船木さんは、同時期にケガで長期欠場してたりもしたからね。俺が1年ぐらい休んでて、船木さんも半年ぐらい欠場。それで、お互いケガ人同士、家の電話で2時間ぐらいしゃべった記憶もあるし。メシもよく連れてってもらったし、そういう仲だったかな。

——その田村さんがケガをしたのも、よくよく考えると、船木さんが遠因になってるんですよね（笑）。前田さんとの試合が決まっていた船木さんが欠場して、代わりに田村さんが前田さんとやることになってケガさせられて（笑）。

田村　そうそう、もとを辿ればね。

——前田さんとやったときって、田村さんはデビュー何戦目でしたっけ？

田村　デビュー5試合目。

——そんなド新人相手に大ケガさせるほど、潰しにかかるんだから、前田さんもひどい試合しますね（笑）。

田村　ホントだよ！　いま考えたらKYだよ（笑）。

——ようやくデビューした新人を長期欠場に追い込む意味がわからない（笑）。

田村　それで、あの人は見舞いにも来なかったからね（笑）。

——ひどい！　そうなんですか⁉

田村　そうだよ。逆に俺が事務所に行って挨拶したんだから。「ご迷惑おかけしました」って（笑）。

——「長期欠場してすいません」って（笑）。当時の新人なんてホントに眼中になかったんでしょうね。

田村　うん。当時は入門したいっていう人の、替わりはいくらでもいたからね。

——生存競争が激しかったわけですね。

田村　だから俺もちょっと前まで、こういう昔話をするのはオヤジっぽくてイヤだったんだけど、いまはしたほうがいいのかなって思うのよ。こういうことを、いまの若い子にもちょっと話してあげようと思って。昔の理不尽さって、いまも多少は必要だと思うからね。

——プロになる通過儀礼として必要な部分でもありますからね。ちょっと話を戻しますけど、田村さんが第二次UWFにいた頃は、若い選手は凄く団結してたらしいですね。

田村　団結というか、みんなよく練習してたから。練習が終わると、自然とみんなで飯食いに行こうってなって、楽しかったよね。船木さんたちが来る前は、上が前田、髙田、山崎、下が中野、安生、宮戸というふうに分かれていたんだけど、そこに船木さんと鈴木さんが入ってきて、上と下の断裂を滑らかにしてくれたんだよね。

——二人が潤滑油になってくれた、と。

田村　それまでは、前田さんに意見するなんて、ありえないことだったの。でも、船木さんは前田さんの直接の後輩じゃなかったから、前田さんに対してもけっこうズバズバ言ったりしてたし。それで風通しがよくなって、一時期だけど、新生UWFが凄くいい雰囲気になったよね。

——船木さんたちが、上と下のあいだにあった壁に、風穴を空けてくれたわけですね。

田村　たとえば、それまでは後輩が先輩より先に食事に口をつけるなんて、ありえないことだったのよ。でも、鈴木さんは「お先にいただきます」って食べてたの（笑）。基本的に先輩より先に食べ始めちゃいけないし、それで先輩より先に食べ終わらなきゃいけなかったんだけどね。

——それはまた理不尽なルールですね（笑）。

田村　だから前田さんが食べ終わる前に、新弟子は身体を大きくするために3倍の料理を食べなきゃいけない。ステーキなんて1キロだからね。どうしても入らないときは、トイレで吐いてから食べたよ。けど、よけい食えなくなった。

——「すいません。もう食えません」とかは通用しないわけですか。

田村　絶対に通用しない（キッパリ）。だって昔は、一升瓶を「一気しろ」って言われたら飲まなきゃいけない世界だったからね。いまの冷静な状況じゃ、とてもじゃないけどできないけど、なんとか生き残ろうという気持ちがあれば、ステーキ1キロも一升瓶一気飲みもできちゃう。それぐらいピリピリしてたから。

——上下関係の尋常じゃない緊張感があるからこそ、自分の限界を超えることができる、と。

田村　最近、聞いた話なんだけど、水族館でイワシの大群がいる水槽に、わざとサメを入れるんだって。そうするとイワシは、サメを意識して常に緊張感を持つから、それがいい効果になって長生きするんだって。

——で、田村さんはUWF道場というサメがうじゃうじゃいる水槽に放り込まれたイワシだったわけですか（笑）。

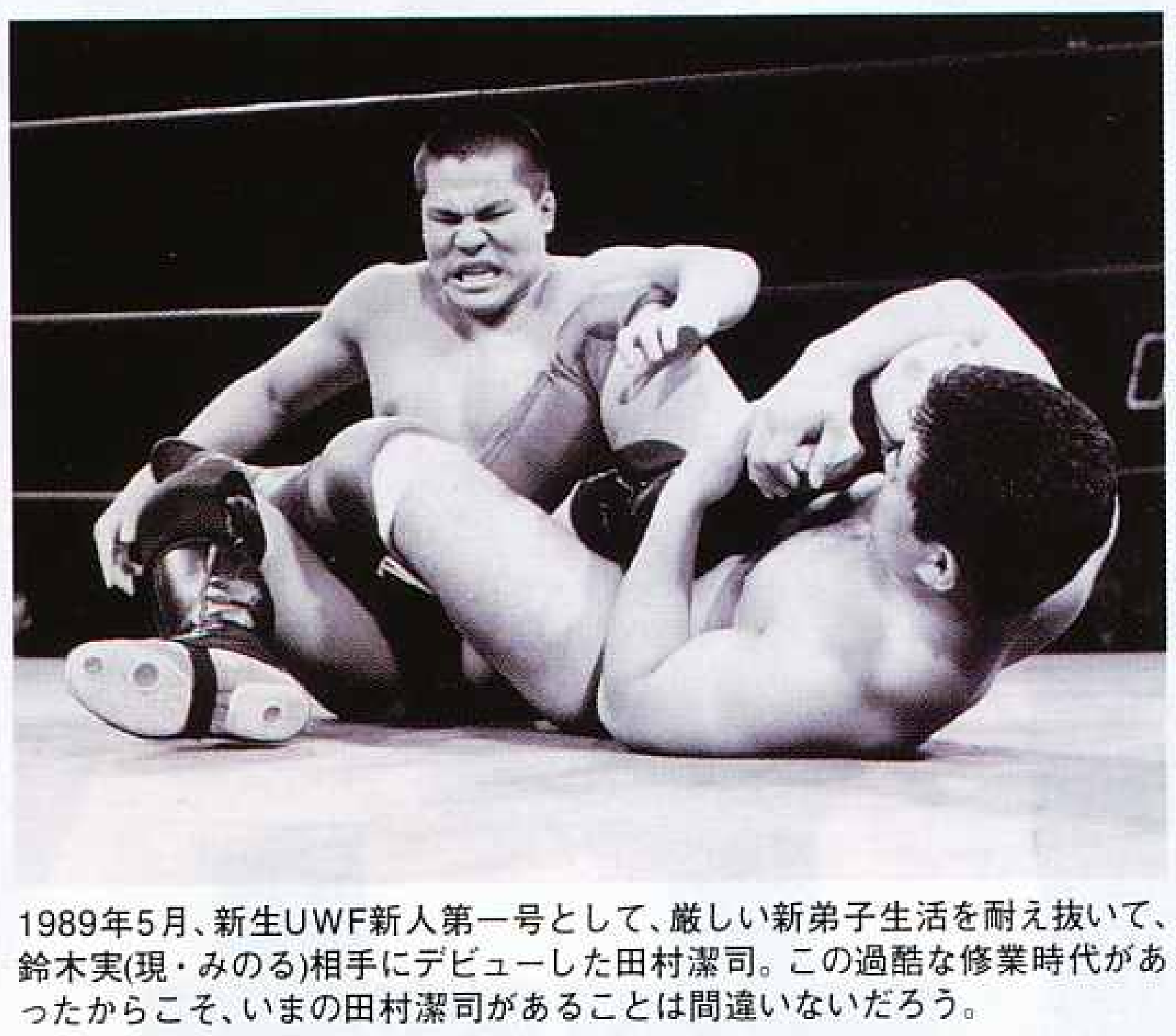
田村　そうそう（笑）。ホントにあの頃の俺は、毎日が生きるか死ぬかぐらいの緊張感の中にいたからさ。いま考えると、凄く勉強になったというか、自分のためになった。ただ、そのおかげで日本酒は、いまだに飲めないんだけどね。

——一升瓶一気のトラウマで（笑）。

田村　いまは匂いを嗅ぐのもダメだね。

——身体が受けつけなくなってるんでしょうね。

田村　飲む量が普通じゃないから。だって昔、一次会から二次会に移動するとき、みんなが集まるまで30分ぐらい時間があったのよ。そしたら髙田さんと安生さんが



1989年5月、新生UWF新人第一号として、厳しい新弟子生活を耐え抜いて、鈴木実(現・みのる)相手にデビューした田村潔司。この過酷な修業時代があったからこそ、いまの田村潔司があることは間違いないだろう。



**業界的には船木さんが先輩だけど
新生UWFでは俺が10カ月先輩
そういう意味で、船木さんは
俺に気を使ってくれた兄貴分だね**

「どっか店に入って待ってよう」って言って、店に入ったらウィスキーのボトルを注文するのよ。で、「ボトルキープしますから、お名前お願いします」って言われたら「いや、いいです。全部飲みますんで」って言って、3~4回ストレートで一気して、ホントに飲みきっちゃったからね（笑）。

──ちょっとコーヒー一杯みたいな感じで、ボトル空けちゃいますか（笑）。

田村　信じられないよね。髙田さんとかムチャクチャだもん。ホントに店にあるアルコール全部飲んだりしてたからね（笑）。

──もはや人間じゃないですね（笑）。そんな第二次UWFも2年半で終わって、船木さんたちとは、涙の別れがあったわけですけど、いつの日かまた闘う日が来ると思ってました？

田村　いや、まったく思わなかったね。分裂してからリングス、Uインター、藤原組って微妙な距離感だったでしょ。まず交わることはないだろうと思ったし、まさか自分がインターを辞めるとも思ってみなかった。俺はUで始まってUで終わるって気持ちでいたから。船木さんとやりたいって気持ちはあったんだけど。

──やっぱり別れてからも意識はしてたんですか？

田村　凄く意識はしてたし、パンクラスもよく観に行ったし。じつは別れてからもけっこう仲はよかったのよ。さっき言った5人で、たまにメシ食ったりね。でも、会社と会社の関係もあったから、だんだん疎遠にはなっていったな。

──船木さんがパンクラスを旗揚げしたとき、あのスタイルはどう思いましたか？

田村　パンクラスの旗揚げ戦は、カッキーと観に行ったんだけど、どんな試合になるんだろうっていう、ワクワク感が凄くあったね。で、興行が1時間ぐらいであっという間に終わっちゃったじゃない。

──ほぼ、全試合が秒殺でしたからね。

田村　だから、あのときは「すげえの観たな」っていう気持ちと、「あんなんで終わっちゃったんだ」っていう両方を感じたな。なんか気持ちよくは帰れなかった記憶がある。帰り道で「もう終わっちゃったな」「3本勝負にすればいいのに」とか、垣原と話してて。

──3本勝負ですか（笑）。

田村　だって早すぎるんだもん（笑）。1分とか、3分で終わる試合が多かったでしょ？　これでいいのかな、と思ってね。

──自分たちもああいう試合がしたいとは思いませんでしたか？

田村　やりたい気持ちはもちろんあったよ。俺と垣原は、髙田さんの影響も受けつつ、新生Uで兄貴分だった船木さんたちの影響も凄く受けてたから、そういう気持ちはあったと思う。ただ、やっぱりね、当時の俺とカッキーの考えって、若いし、青いし、アホだしね。でも、純粋な気持ちとして、やりたいとは思っていたよね。

──実際、95年2月にやった垣原さんとの試合は、そういう試合でしたよね？

田村　うん。カッキーとは、そういう試合を二試合やったんだよ。あと桜庭戦とかね。だからUインターでも、目に見えないようなかたちで、たまに違うカラーを出したりしてたんだよ。やっぱり一通り経験しないと見えない部分ってあるからね。

──Uインターでも、そういう試合をやらなきゃいけないと思ったわけですか。

田村　というか、プロレスラーとしての理想像というか、強くて、うまくて、魅せられてというね。それがイメージじゃなくて、実際に強くなくちゃいけないし、総合格闘技でも通用する選手じゃなきゃいけない。そのためには経験しなきゃいけないと思ったし、それによって俺なりのスタイルっていうのはできてきたかな。

──そして、いまはその総合格闘技がスタンダードになりましたけど、DREAMみたいな総合格闘技っていうのは、田村さんが考えてるものの一部って感じですか？

田村　一つの要素だね。俺はU-STYLEには総合格闘技が必要だし、総合格闘技をやるためにもU-STYLEが必要だと思っているから。

──それと同じ意味かどうかわかりませんけど、昨年大晦日、桜庭戦での船木さんについて「やっぱり醸し出すムードが違う」というようなことを言ってましたよね。

田村　うん。俺が船木さんを評価してるのは、パンクラスで、メインイベンターとして重圧に打ち勝ってきた船木誠勝なんだよね。これはメインを務めた人にしかわからない。もう、その人間が団体を背負ってるし、メインがコケると団体自体がコケるし、簡単には休めないしね。

──単純な一競技者を遥かに超えた部分が要求されるということですかね。

田村　うん。毎試合厳しい試合だろうし、それで負けたらボロクソ言われる。それを毎月、パンクラス時代はやってきた人だから。これはほかの選手とはまったく違う。だから、大晦日の試合は、内容は別として、オーラは凄かったよ。

——田村さんなんかも、リングス時代にメインをずっと務めて、心身ともにおもいきり疲れちゃったんですよね（笑）。

田村　あれがあるからいまの自分があるけどね。だから船木さんもパンクラス時代、精神的にも肉体的にも非常にキツかったと思うんだよ。若いときに頑張りすぎたがゆえに、「もういいや」って、あんなに若くして引退しちゃったんだと思う。でも、リングから離れて時間が経ってくると、なぜか昔の刺激を求めちゃうんだよね。同世代の俺とかサクとか、吉田（秀彦）なんかの試合を観て、「俺、何してんだろ」って感覚になって、もう一回頑張ってみたいって気になったんだと思う。

——なるほど。

田村　俺もね、リングスを辞めて、1年ぐらいセミリタイヤ状態で試合に出なかった期間があったからこそ、いまでも試合していられるんだと思ってるから。あのままリングスやってたら、たぶん船木さんと同じように引退してたと思う。それが、なんか38歳になってもやってて、自分でも不思議なんだけど、ここまできたらしぶとくいこうかな、と思ってるんだけどね（笑）。

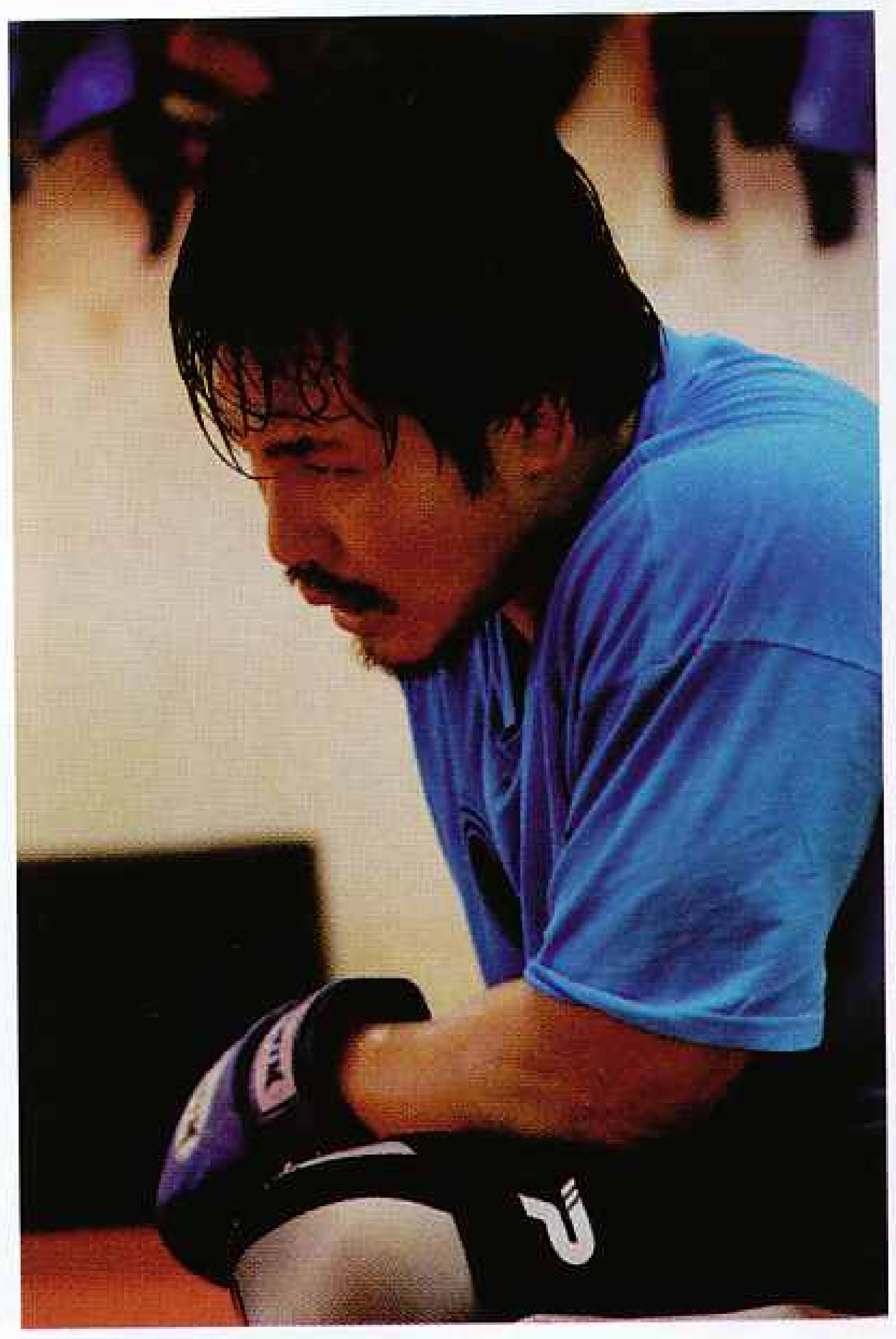
——では、船木さんに対しては、かつて同じU系のリングスとパンクラスで、団体を背負う、メインを任されるという経験をしてきた者同士としてのシンパシーを感じているわけですか。

田村　そういう感じは凄くあるね。これは船木さんも、たぶん俺のことをそういう目で見てくれていると思う。お互いがそういう環境だったから、どれだけ苦しくて、重圧があったかわかってるから。

——そういう意味で、『DREAM・1』の青木真也ってどう思いますか？　急に『やれんのか！』や、DREAMのメインを任されるようになって。図らずも、いまそのプレッシャーでもの凄く苦しんでるときだと思うんですけど。

田村　彼もやっぱり凄いプレッシャーはあったと思うけど、自分が団体をすべて背負ってるっていう気持ちまではないんじゃない？　そういう気持ちがあったら、このあいだの試合（JZカルバン戦）は続いてる。たとえ負けても、あれはやらなきゃいけない試合だったから。それは俺とか船木さんが、かつて置かれていた状況とは違うよ。ただ、ああいう大舞台のメインを任されたっていうこと自体、やっぱり凄いプレッシャーには感じてると思うから、それで試合やってるっていうのは、もの凄いことだとは思う。

俺は髙田さんの影響ももちろん受けているけど兄貴分だった船木さんの影響も強く受けている



たむら・きよし■1969年12月17日、岡山県出身。第二次UWF、Uインター、リングスを渡り歩いた生粋のU戦士。ここ数年は自らが主催するU-STYLEとPRIDEを主戦場としてきたが、昨年より『HERO'S』に参戦した。180cm、86kg。

——田村さんもそろそろ、そういうプレッシャーを感じる試合をしなきゃいけない頃なんじゃないですか？

田村　それはね、桜庭の言葉を借りるなら、もう年寄りなんで無理です！

——ガハハハ！　そういうときだけ、桜庭さんの言葉を借りないでください！

田村　もう俺も最近は、かさぶたから血が流れっぱなしだからね（笑）。

——（無視して）トーナメントを勝ち上がって、2回戦以降に秋山成勲戦とかは考えてないんですか？

田村　いや、考えてるも何も、あれはね……、もう時期を逃しちゃったね（笑）。

——ガハハハ！　自分で言いますか（笑）。

田村　そう、俺のせいで逃しちゃった。去年やれば一番よかったんだけど、その流れに乗れなかったのが自分だし、簡単に言えば、ホントに時期を逃したと思う。俺の経験上、やりたい選手とはなかなかやれないんだよね。ホイスも秋山も船木さんも、やりたいと思ったときはやれなかった。でも今回、船木さんとやれる機会が来たわけだから、また"波"が来るんじゃないか、とは思ってる。

——では、秋山戦の波が来るも来ないも、この船木戦によって、どんな状況になっているか次第ということですね。

田村　まあ、先のことはわからんよ。俺が明日死ぬかもしれないし、ツチノコを見つけるかもしれないし、永久電機を発明するかもしれないしね。

——大丈夫です。そういうことは起きないと思います（笑）。

田村　そう？（笑）。でもさ、真面目な話、ホントに『DREAM・2』って開かれるの？　って思うよ。なんか『イノキゲノム』的じゃん（笑）。

——ガハハハ！　確かに『ゲノム』ばりにカード発表が遅いですよね。

田村　いまトーナメントは何試合発表されてるの？　2試合ぐらい？

——3試合ですね。

田村　まだ3試合か……中止だな。

——中止ですか（笑）。では、最後に開催されることを前提に、船木戦への意気込みを聞かせてください。

田村　そうだね……俺と船木さんがリング上で向き合うだけで意義があると思ってるから。凄くやりにくい選手ではあるけど、それは失礼のないように全力で闘って、この試合を気にしてくれるみんなの気持ちに恥じないような試合を見せなきゃいけないな、と思ってます！

【08年4月8日／U-FILE CAMP登戸にて収録】



田村vs船木を通して考える

プロレス シュート 真剣勝負



真のプロレスを追求する元Uインターの頭脳

宮戸優光

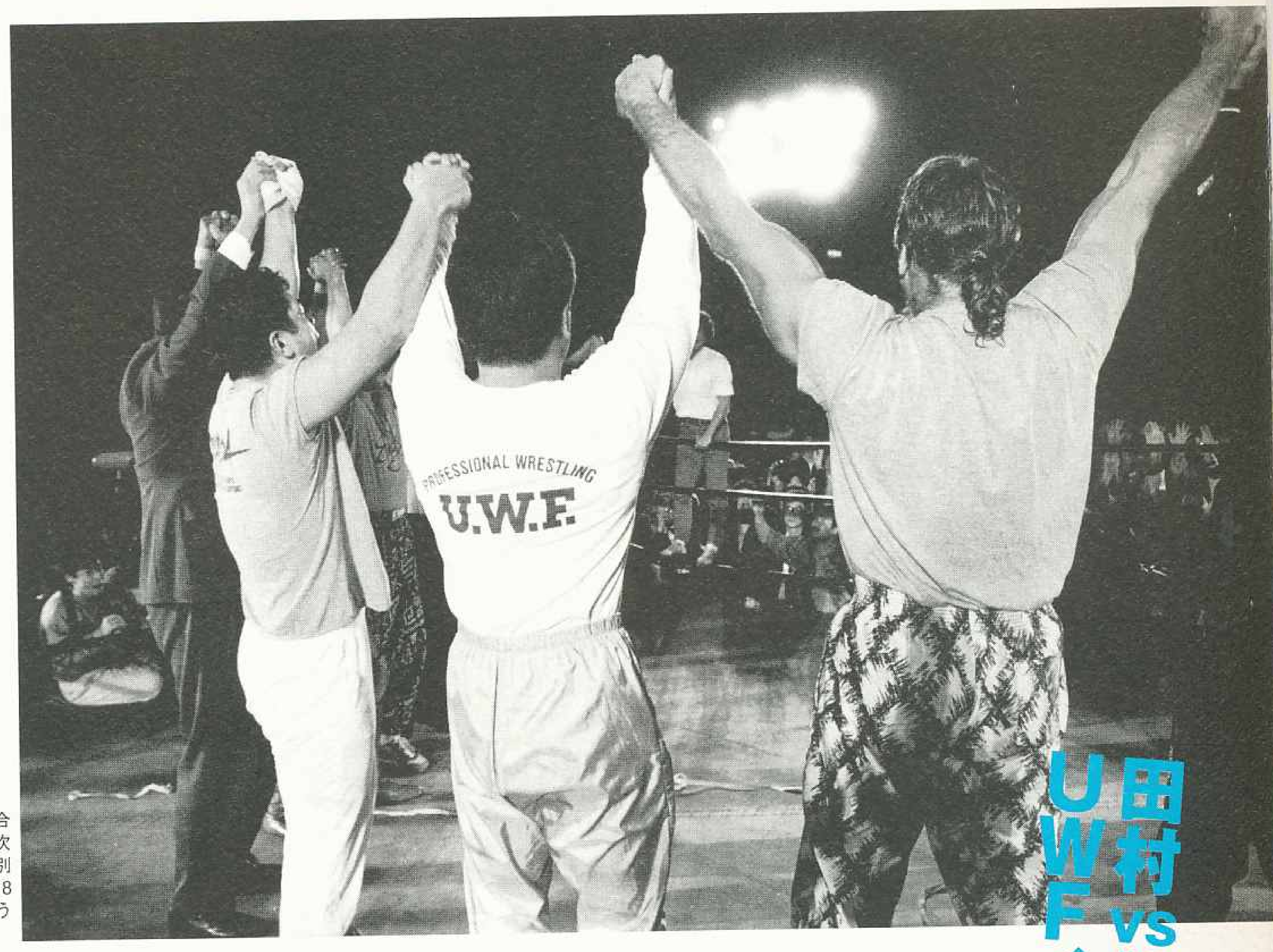
DREAMミドル級GP1回戦で実現することとなった、UWF大物対決、田村潔司vs船木誠勝戦。この一戦を、両選手を古くからよく知る宮戸優光に語ってもらったのだが、インタビューは二人の闘いやUWF論にとどまらず、「真剣勝負とは何か?」という大命題にまでおよんだ。心して読め!

聞き手／堀江ガンツ

いまこそ
“真剣勝負”
やれんのか!

田村vs船木は"UWF対決"じゃない UWFインターvsパンクラスですよ！

いまこそ"真剣勝負"やれんのか！



90年12月1日、松本運動公園総合体育館を最後に解散した第二次UWF。船木と田村もこのあと、別の道を歩んでいくこととなる。18年ぶりのリング上での再会は、どういったドラマを生むか?

——DREAMミドル級GP1回戦として、田村潔司vs船木誠勝というで、今日はお二人をよく知る宮戸さんにお話をうかがいたいと思います！

宮戸　その話をする前に、最初からこんなこと言うのもなんだけど、この二人の試合が"UWF対決"っていうのは、僕は違うと思いますね。

——違いますか!?

宮戸　だってそうでしょう。まず、タムちゃんっていうのは、デビューは新生UWFだけど、僕はUWFインターナショナルの選手だと思ってるから。それに船木さんは、もともとは新日本だし、新生Uのあとは、藤原組、パンクラスがある。それをUWFということだけで言われるのはちょっとおかしいと思いますよ。

——一時期、新生UWFで一緒だっただけだ、と。

宮戸　だから僕自身も含めてね、新生UWF時代の話を持ち出されるとね、長い人生の中で言えば小学校時代のことを言われているような感じがするんですよ。

——第二次Uは小学校ですか（笑）。

宮戸　確かに僕も船木さんもタムちゃんも、同じ小学校出身というかね、"子ども時代"に"一緒の学校"に通っていたかもしれない。でも、それは幼なじみというだけで、そこから中学、高校、大学、社会人みたいなかたちで人格を形成していくわけでしょ。これを僕たちの仕事に置き換えれば、どこでいまのスタイルの完成形を見たかということ。それは、おそらくタムちゃんはUWFインターだし、船木さんはパンクラスでしょう。だからこれは、UWF対決というより、あえてそういう目で見るなら、UWFインターvsパンクラスですよ！

——確かに二人のアイデンティティは、そこにある気がしますね。

宮戸　技術的にも精神的にも、いまの基礎となるものは、そこで一番形成されたと思いますよ。そういった意味で、桜庭（和志）や高山（善廣）、金原（弘光）もUインターの選手だと思うしね。彼らにとっても、あの時代は忘れられないと思いますよ。

——一番濃い期間なわけですね。

宮戸　だと思いますよ。あの頃は毎回、日本武道館が満員になってね。そしてメインイベンターの髙田（延彦）さんが、若い選手に対して「強くなれば、これだけの大歓声を受けられるんだ」というものをホントに見せてくれていましたから。それをね、ヒクソン戦以降、あの髙田さんの強さが嘘だったみたいに言うヤツがいるみたいだけど、そんなことはありえない！　髙田さんが強くなかったら、下は誰も育ってませんよ！　だって、もしエースが弱かったら、「強くなったって意味がねえ」って若い選手がシラケちゃうでしょ。

——確かにそうですね。

宮戸　だからUインターの頃っていうのは、みんなが髙田さんみたいに強くなりたいって努力したから、強い選手がたくさん生まれたんですよ。そして、オフの部分では、みんなでドンチャン騒ぎしたりね。そうやって、この世界の厳しさと楽しさを覚えていった時代だと思うんですよ。

——そのUインター時代、宮戸さんも他団体を意識されたと思いますけど、パンクラスというのは、どのように見ていましたか？

宮戸　正直に言えば、パンクラスに限らず、ほかの団体はとくに意識はしてませんでしたね。

——あ、そうなんですか!?

宮戸　あの頃、僕らが意識してたのは新日本ですから。なぜなら、当時の業界トップが新日本だったから。とにかく、そのトップを抜いて、プロレス界の一番になるんだという気持ちだけですよ。そして、我々がトップになったときこそ、「プロレスは最強であり、最高だ」という我々の主張を見せられるという確信がありましたから。とにかく、それを目指してましたね。

——ただ、パンクラスが出てきたときって、やたら「真剣勝負のリングがついに現われた！」みたいな感じで、メディアではセンセーショナルに扱われたじゃないですか。それは気にならなかったんですか？

宮戸　気になりませんね。どの団体のファンも、たとえば当時でいえばFMWであろうと、全日本であろうと、その団体を応援しているファンは、それこそ真剣に観ていますから。そこを売り物にするのは、じつはおかしな話ですよね。

——でも、同じU系でも「パンクラスは本物、Uインターは悪い意味でプロレス」みたいな言われ方を少なからずされたりもしましたよね？

「パンクラスはシュート、Uインターはプロレス」なんて言ってるヤツの意見に耳を貸す気はないし、興味もない！

宮戸　それはプロレスっていう言葉の意味をわかってない人間が言ってるだけでね、僕らは「プロレスは最強の格闘技だ」と言っていたわけですから。「プロレス」という言葉を「ショー」という意味で使ったことなんて一回もないですから！

――それは、実際に闘えばウチのほうが強いという自信もあってのことでしたか？

宮戸　とにかく、あらゆる面で、業界トップが目標でしたから、道場にもビル・ロビンソンをコーチに置いたり、タイ式のコーチを置いたりと、「最強」の看板がハッタリにならないように、必死でした。ただ、あの「最強」の看板を掲げたことによって、選手みんなに無言の緊張感と、一番強くなくてはならないという責任感を生ませたと思いますよ。

――「最強だ」と宣言した以上、言葉に責任を持つ、と。

宮戸　だから、あの当時の選手で、いまでも活躍しているのは、ほとんどUインター出身じゃないですか。それがすべてですよ。皆さん、プロレスがどうのこうのってね、ミスター高橋さんの本であるとか、聞きかじったことだけで言ってるだけでしょ？

――まあ、そうですね。

宮戸　シュートだ、ワークだとか簡単に言ってるけど、その本質は、あんな本では絶対にわからない。だって、同じ興行でもほかの試合は俺らだってわからないもん。

――プロの目でもわからない試合がありますか。

宮戸　いわゆるシュートという試合は、もちろんUインターでもいくつもあったし、どれとどれとはあえては言わないけど、皆さんが「え！あの試合が⁉」と思うような試合がそうだったりもするんですよ。だから、そういうことも知らずに、聞きかじったことをどうのこうの言ってる人たちの意見に、僕は耳を貸す気もないし、興味もなかった。いまでもね、「いや、高田さんの本にこう書いてある」って言う人がいるけど、たとえば高田さんの試合がそうだとしても、田村の試合についてはわからないでしょ？　だから、いわゆる暴露本を読んでわかった気になってるのは、大間違いですよ。なぜ、僕が「いわゆる」暴露本と、「いわゆる」をつけるかというと、暴露本というと、暴露したことが全部ホントのことだと思っちゃう人がいるでしょ？　でも、違うんだから。確かにミスター高橋の本なんかで、僕が読んでも「ああ、こういうことはあっただろうな」って思うこともある。しかし、それはある一面であってね、その中身を完全に表現できてるとは思えないし、違うと思う。

――そういう一面もあるという。

宮戸　可能性はある、ということですよ。だから、たとえばUWFの試合、これは新日本の選手にはできない。あるいはできない選手もいる。アメリカの選手でもできない選手がいる。なんでできない選手がいるんですか？　同じプロレスなのに。そこを説明してる本はないと思う。わかります？　ここ大事なとこなんですよ。だからプロレスを演劇論や、いわゆるシュートだのワークだのって言う人は、0か100しかないという分け方なんですよ。

――単純に白か黒しかないと思っている、と。

宮戸　そう。だけどプロレスというのは、0か100かでは絶対に説明がつかないし。もし0か100しかないなら、このスタイルはできるけど、こっちはできないっていうことは、基本的に僕はないと思うんですよ。ただ、いつも僕がこういうことを言うと、「あいつは内部の人間だから、いまだにそうやって言葉で繕ってそれを通そうとしてるんだよ」って言われるけど、そうじゃない。僕はそういう意味では嘘はつきませんよ。いまさらね、シュート、ワークって……だいたい、「ワーク」っていう言葉を世に出したのは僕なんです！

――そうですよね。ウチで最初に言っていただいて。

宮戸　いや、最初は『プロレス激本』だったかな（笑）。

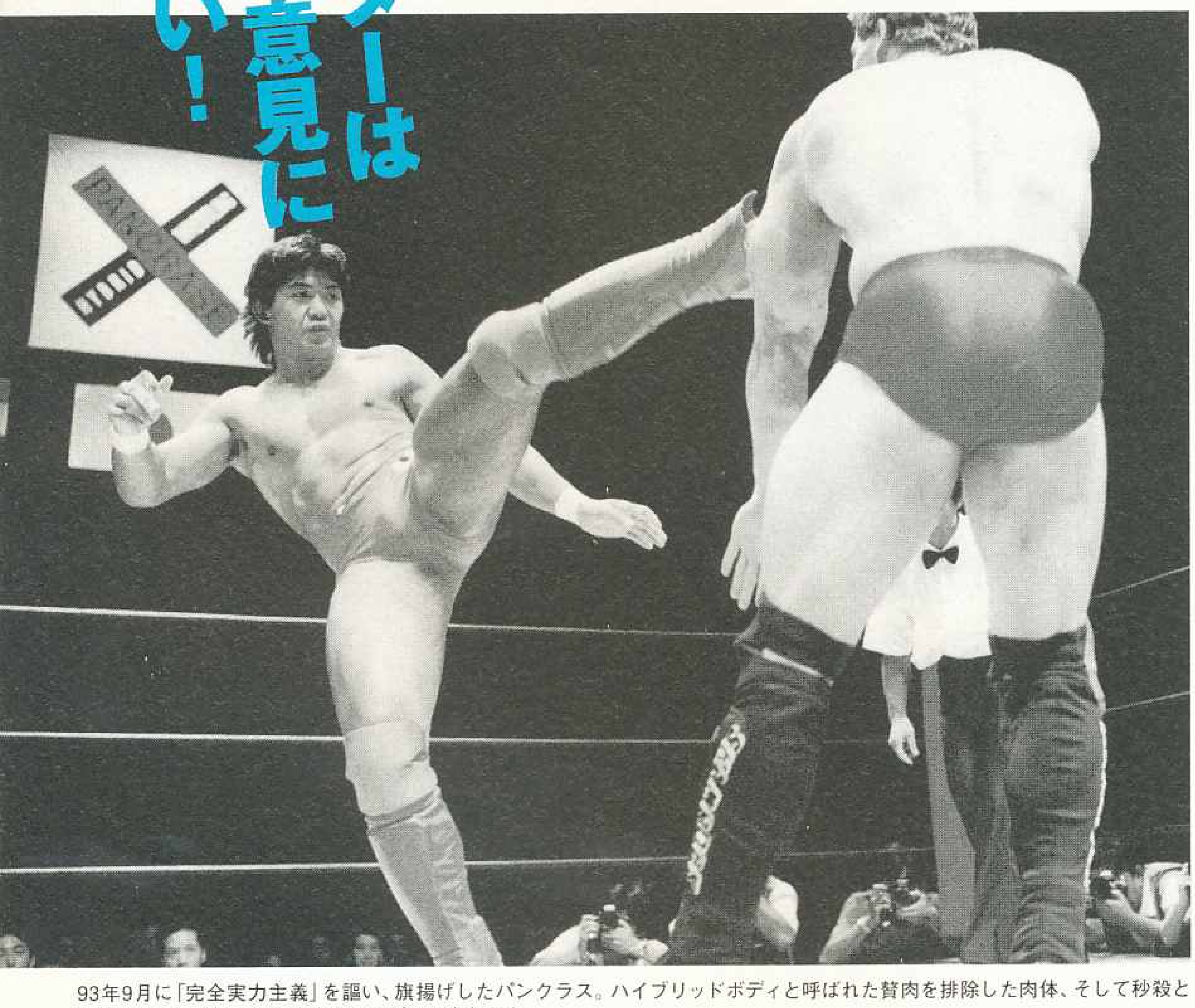
――そうでしたか（笑）。

宮戸　でも、一番使ったのは『kamipro』なんですけど。だから、プロレスにシュートとワークがあるというのは、もう否定できないし、しませんよ。ただ、じゃあプロレスが完全に八百長だとか、ワーキング＝プロレスだというのは、これは違うわけですよ！　じゃあワークとはなんなのか。ワークはガチ、シュートの反対で、ガチが100ならワークが0というのは、これは違うんです！　基本的にワークはシュートを含んでいるし、一言では絶対に語れない。

――では、Uインターというのは、本来の意味でいう「プロレス」だったということですか。

宮戸　だからプロレスというのは、全部を含んでいるんですよ。それをね、あれはシュートで、これはワークなんて、説明する必要はないしね。たとえばアントニオ猪木さんについて、「モハメド・アリ戦やアクラム・ペールワン戦はシュートだった」とかって周りの人は言うけど、猪木さん自身が「あの試合はこうで、この試合はこう」なんて、いまだに一言も言ったことないんですよ。

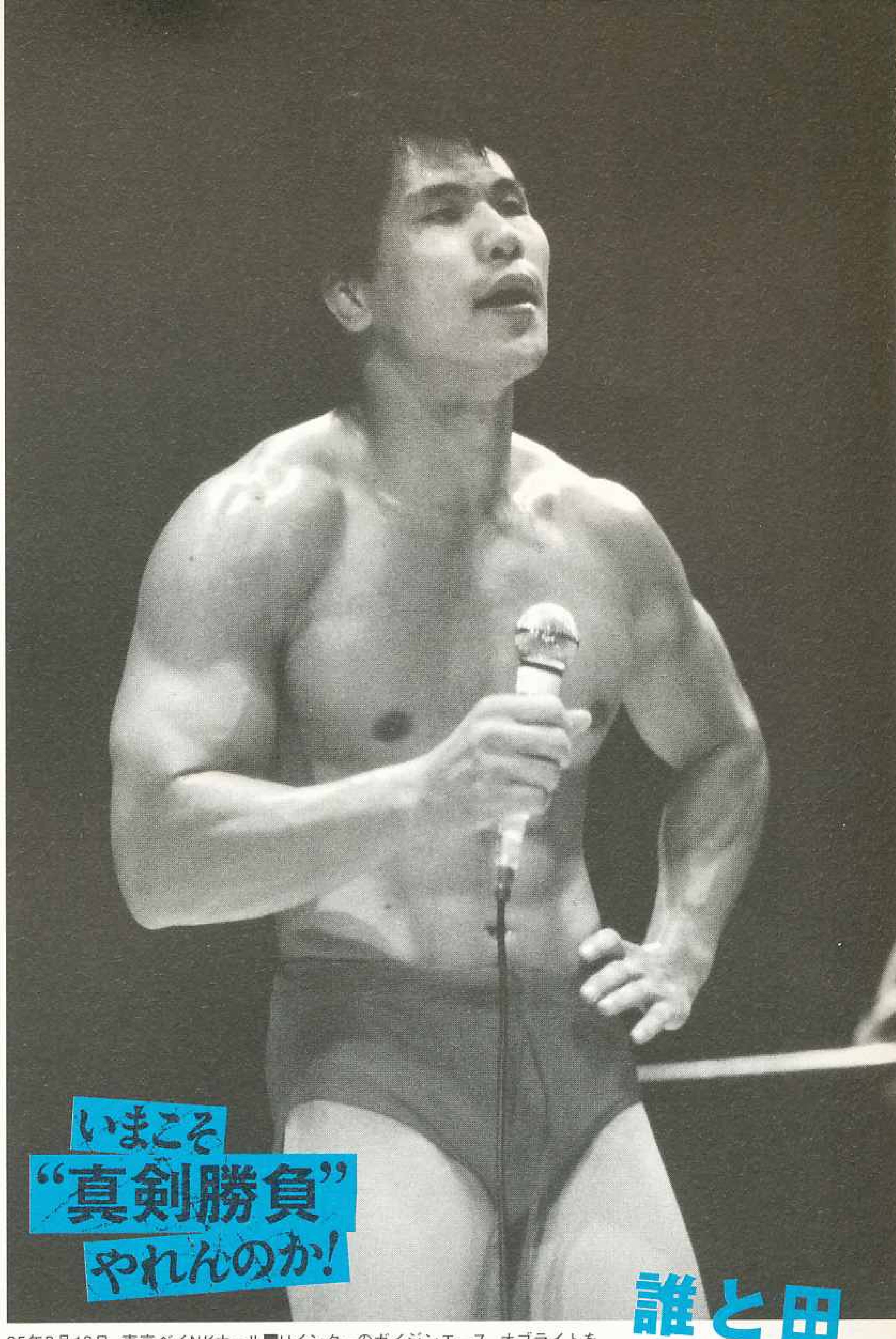
――確かにそうですね。



93年9月に「完全実力主義」を謳い、旗揚げしたパンクラス。ハイブリッドボディと呼ばれた贅肉を排除した肉体、そして秒殺というファイトスタイルは大きなインパクトを与えた。

田村が「真剣勝負してください！」と言った本当の意味を誰もわかってないんだよ！

いまこそ“真剣勝負”やれんのか！



95年8月18日、東京ベイNKホール■Uインターのガイジンエース、オブライトを下した田村は、試合後、マイクを握り「髙田さん、僕と真剣勝負してください!」と絶叫。田村の決死の発言は大きな波紋と、髙田との確執を生むこととなった。

宮戸　それなのに、ミスター高橋の本にある意味感化されて、好きなことを言ってるのがいまのマスコミであり、そういった類のファンの人だと思うんですよ。それはちょっとイヤだなって思いますね。

――ただ、宮戸さんには「プロレスとは、シュート、ワークすべてを含んだものだ」という確固たるプロレス論が当時からあったと思いますけど、当時のUインターの若い選手の中では、「これだけ練習しているのだから、自分の実力を試したい」という気持ちの選手もいたと思うんですよ。事実、田村選手が髙田さんに「真剣勝負してください」と迫ったことがあったりとか。

宮戸　ちょっと、堀江さん。あの発言について、真剣勝負＝シュートみたいな意味でとらえているのであれば、僕に言わせれば、まったくの的外れですね。

――的外れですか？

宮戸　じゃあ「真剣勝負って何？」って言ったときに、いわゆるシュートと真剣勝負っていうのは一緒なのかっていう話ですよ。これは一緒の部分もありますけど、真剣勝負というのは、文字どおり「真剣」を使った勝負、「生死を懸けた」勝負ということでしょ？　そういう意味でいえば、いまMMAといわれているものが真剣勝負かといえば、必ずしもそうではないと思うんですよね。あれは競技ではあるかもしれないけど。

――生きるか死ぬかじゃなく、勝つか負けるかですよね。

宮戸　うん、そのルールにおいて勝つか負けるかの競技。しかも、いまのMMAは負けても次がある。でも本来、真剣勝負というのは、次がないものでしょ？　負けたら「死」なんだから……。べつに理屈を言いたいわけじゃないんですが、真剣勝負というからには、いまのご時世であっても、命懸けはないとしても、負ければ負けたほうのジャンルそのものがなくなってしまう、あるいはその選手が廃業に追い込まれる。そういうものが懸かってるんだったら、それは真剣勝負といえるかもしれない。でも、ただ勝ち負けを競うだけのものが、真剣勝負であるというのは違うと思う。それはコンテスト（競技）ですよ。コンテストすべてが真剣勝負という理解は違うでしょう。

――なるほど。確かにMMAはコンテストですね。

宮戸　そしてね、あのときタムちゃんが言った「真剣勝負」ということの意味は、髙田さんに「僕とコンテストしてください！」って言ったわけじゃないと思うんですよ。いわゆるMMAをやってくれと要求したわけじゃない。もっと深い意味があったと思う。

――競技としての試合をしてくれ、と言ったわけじゃない、と。

宮戸　それは当時のUインターやタムちゃんの状況を知ればわかりますよ。あのとき、新日本vsUインターの対抗戦という話が、もう内部ではできあがっていたんですよ。

――あの発言の翌月に対抗戦が発表されましたもんね。

宮戸　そして髙田さんは、もうそれまでにスポーツキャスターになっていて、参院選への出馬云々という話もあり、引退宣言もあった。

――「極めて近い将来、引退します」という発言ですね。

宮戸　だからエースがそういう状況で、新日本との対抗戦の話も進んでいる。そんな中で、タムちゃんは対抗戦に反対していたから、Uインターの中で浮いちゃってたんですよ。ナンバーワンがスッキリしない中で、ナンバー2が自動的に繰り上げになるかといえば、会社の意向である対抗戦に反対しているタムちゃんは、レスラーとしてのポジションも含めて不安定だったと思うんですよね。

――会社も自分自身もどうなるかわからない状態だったわけですね。

宮戸　そういう中で、あのときにタムちゃんは髙田さんに「真剣勝負してくれ」って言うことを選んだんだけども、あの「真剣勝負してくれ」っていうのは「コンテストしてくれ」ってことじゃなくて、「自分と進退を賭けて闘え！」っていうことですよ！

――髙田さんが辞めるか、自分が辞めるか、ですか。

宮戸　要するに、あの頃のタムちゃんは、内部的には新日本との対抗戦を反対してる、そういうことが元になって浮いてる。そして髙田さんに対しては、辞める辞めないって言ってるけど、そこをどうすんですか、と。「僕は僕の立場を賭けるから、髙田さんもあなたの立場を賭けて俺と勝負してくれ」というね。「これで負けたら俺は辞めますから」という言葉が心の中で続いてるんだと思う。だからあのとき、ちょっと涙ぐむよ

いまMMAといわれるものが「真剣勝負」かといえば、それは違うと思うんですよ

うな感じだったでしょ。

――涙声で絶叫でしたよね。

宮戸　そこまで精神的に追いつめられて言ったってところがあるんでしょう。だからその切羽詰まって言ったっていうことの意味をみんなが読めてないから、はき違える。あれをいわゆるMMA的なね、「真剣勝負してください」って意味かといえば、そうじゃないんですよ。そこを全然みんなわかってない。あの「真剣勝負」って言葉を、結局シュートだのワークだの、あるいはコンテストが真剣勝負であるという考え方からタムちゃんの「真剣勝負」っていう言葉の意味を紐解いてるから見えてないんですよ。あれは要するに、田村潔司という選手がUインターで「首を賭けて闘え！」とエースに迫ったわけですよ。だからまさしく彼の言う「真剣勝負」って意味は合ってますよ。「コンテストしてください」って、そんな軽いもんじゃない。あの「真剣勝負」っていうのは、要するに「あんたの立場と俺の立場を賭けてリングでやろうじゃないか」と、こういう意味なんですよ。

――まさにドスを突きつけたというか。負けたら、そのドスで自分の腹を切るという。

宮戸　タムちゃんは、あのまま髙田さんがハッキリしない態度を続けて、Uインターが新日本と対抗戦に突入したら、自分の立場もUWFというものもなくなってしまうという危機感を覚えた。だから、自分のポジションを賭けて「闘え」と突きつけた。ただ意味もなく「コンテストしろ」って言ったんじゃないんですよ。だからあの「真剣勝負」という意味はね、ハッキリ言えば、単純に「ワークじゃなくてシュートで俺とやれ」って、そんな意味で言ったんじゃないんです。

――なるほど。「俺のほうが強い」とか、そんな簡単なことじゃない、と。

宮戸　そんな低次元の話じゃない！　僕はこれを何回も言ってるんだけど、通じないんだよねえ……。その真剣勝負という意味が。

――でも、これこそプロレスにおけるホントの真剣勝負ですよね。

宮戸　というか自分の仕事、立場を賭けたんだからね。単純に勝ち負けをつけることが真剣勝負じゃないんですよ。それは格闘技の世界じゃなくて、たとえばお料理の世界だってそう。

――お料理の真剣勝負ですか（笑）。

宮戸　僕はどうしても料理のたとえになっちゃうんだけどね（笑）。たとえば、国賓級の人を招いて行なうパーティで料理長として仕切らされたとき、そこでヘタな料理を出したり、ヘタなことをやってしまったら、もうそれで料理人としての評価は一生決まってしまう。これはもう真剣勝負じゃないですか。

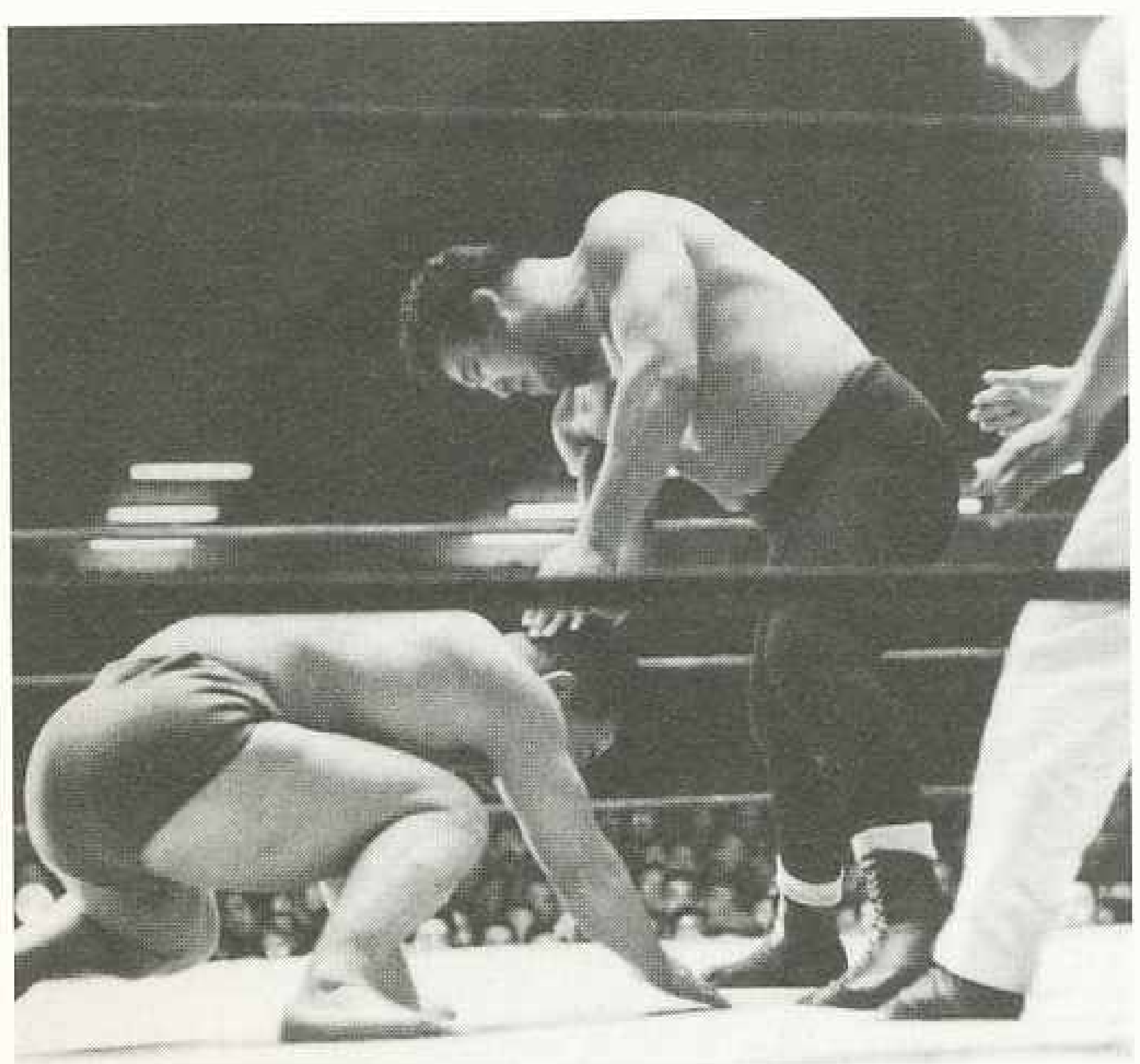
――それこそ料理人として、生きるか死ぬか、ということですよね。

宮戸　そうそう。まさに自分の立場、その後の進退すべて懸かってるわけだから。そういう意味において、いまスポーツの世界でね、真剣勝負といえる勝負がいくつあるのかっていったら、なかなかないと思うんですよ。そういう意味において、髙田vsヒクソン戦は真剣勝負でしたね。

――なるほど。あれこそ「真剣勝負」だ、と。

宮戸　あれによって髙田延彦という人はホントにすべてを失なったし、逆にヒクソンはすべてを得た。もし、あれでヒクソンが負けていたら、ヒクソンがすべてを失なっていたしね。

――グレイシー一族自体が終わっていたでしょうね。



昭和の巌流島決戦と呼ばれた、力道山vs木村政彦の一戦は、以上な注目度の中、力道山が木村を失神させる凄惨な勝利。これによって力道山は実力日本一をファンに証明。お互いの立場を賭けた“真剣勝負”となった。

宮戸　だから、あの試合はまさに真剣勝負だったと思いますよ。けど、そういう意味合いの試合が、いまMMAといわれてる中で何試合ありますか？　ということですよ。

――なかなか、あれほどの試合はありませんよね。

宮戸　そうでしょ？　プロレスというジャンルの中でも、僕が言っているような意味で真剣勝負は、これまでいくつかあると思いますよ。たとえばアントニオ猪木vsストロング小林戦。僕はこの試合がシュートだとかワークだとか言うつもりはありませんよ。でもね、あれがワークだとしてもね、アントニオ猪木さんがストロング小林にヘタを打ったり、無残に不覚をとってしまうようなことがあったら、アントニオ猪木も新日本プロレスも、もう終わってますよ！

――ファンが「勝ったのは猪木だったけど、小林のほうが強いじゃん」って思ってしまってもダメでしょうね。

宮戸　だから、僕はあの試合がたとえワークだったとしても、「真剣勝負」だったと思う。あれで猪木さんがヘタを打っていたら、アントニオ猪木も新日本プロレスも終わっていたし、猪木さんはあの試合で勝つことによって、大きなものを得たしね。

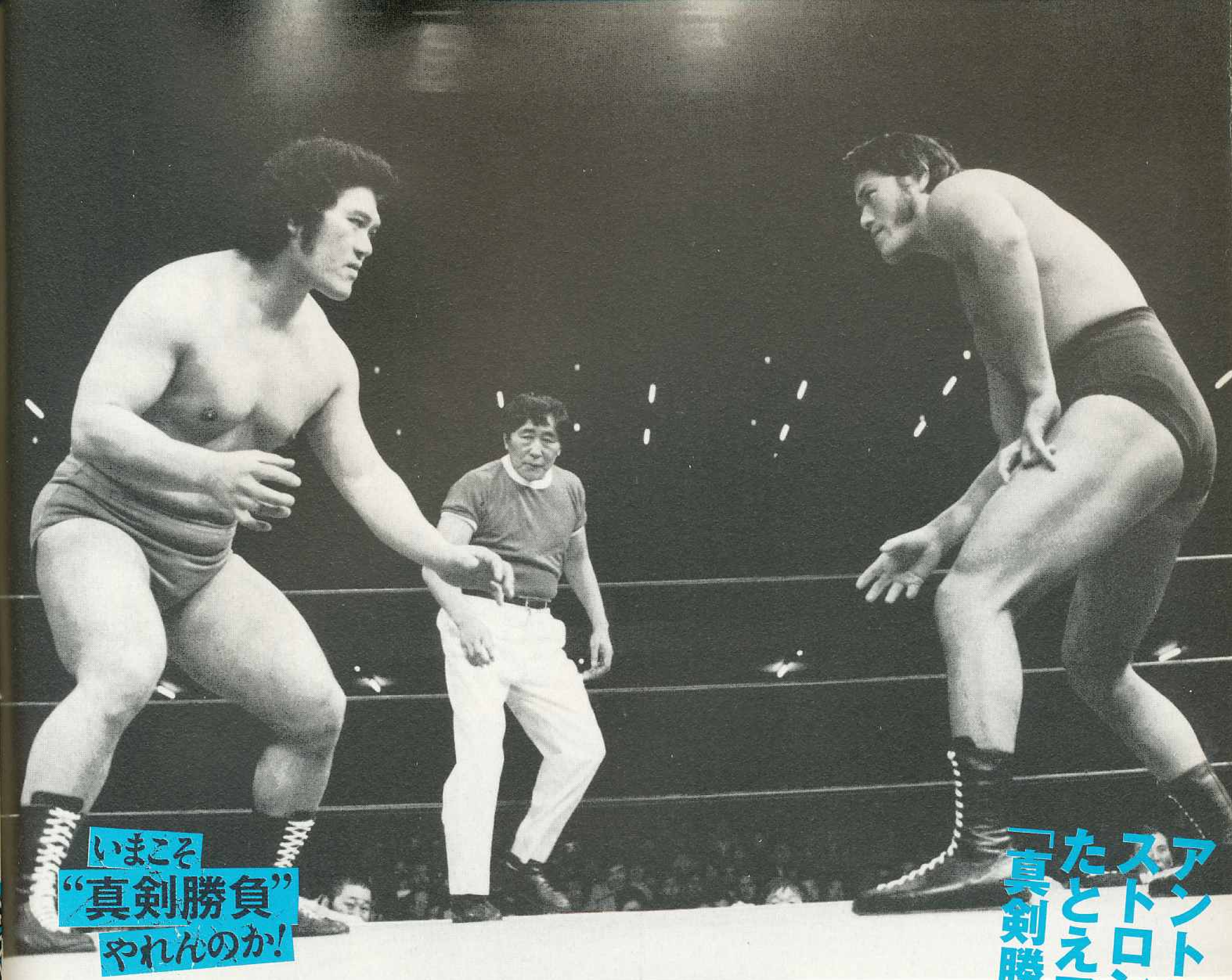
――そういう意味では、力道山vs木村政彦戦なんかもそうですか？

宮戸　そう言えるでしょうね。あの試合についても、いまだいろんな憶測が飛び交ってますけど、力道山にとってあの試合は紛れもなく「真剣勝負」だったと思うんですよ。絶対ヘタには終わらせられないというね。それに対して木村さんがどういう状況にあったのか……。世間では、あの試合は「八百長なのか、本気でやるのか」みたいに、試合前からさんざん騒がれていたわけだから、力道山にしてみたら死んでもヘタな試合はできないし、負けられなかったのは当然でしょう。だからそういう中で、決して木村さんを悪く言うつもりはないけど、油断をしたとかはありえないですよ。もし、そうだとしたら、真剣勝負の場にある種、遊びで挑んじゃったってことだから。それはもう、プロレスというものを理解してなかったんですよ。この世界、リングで起こったことっていうのは言い訳がつかないわけですから。そこでやられたら負けなんですよ。そこに言い訳はつかないわけですよ。

――プロレスのリングであるがゆえに、「真剣勝負」の「シュート」が生まれたということですね。

宮戸　もし、皆さんが言うような裏切り云々の話を言うなら、力道山ほどの野心家ならば、ルー・テーズにこそ、それをやりたかったはずではなかったんじゃないですか。それこそ木村さんのときの日本チャンピオンじゃなくて、勝てば世界チャンピオンになれたわけですよ。でも、なぜやらなかったのか……おそらく、

いまこそ“真剣勝負”やれんのか!



アントニオ猪木vsストロング小林戦はたとえワークだとしても「真剣勝負」ですよ!

1974年3月19日、蔵前国技館■国際プロレスのエースだったストロング小林が、国際を離脱し、新日本でアントニオ猪木と対戦。この大物日本人対決はおおいに話題となり、この一戦に芸術的なジャーマン・スープレックスで勝利した猪木は、ここからスーパースターの道を歩み始めた。

やれなかったんですよ。

——なるほど、なるほど。

宮戸　逆に言えば、世界チャンピオンであるテーズさんというのは、常にそういう危険と隣り合わせだったわけですよ。それなのに、長年チャンピオンで居続けたということは、そういったものに対応する力が誰よりもあったということですよね。だから力道山は、木村さんにはやれたけど、ルー・テーズにはやれなかったということですよ。木村さんは実力はあっても油断してたのかもしれないけど、ルー・テーズは実力はもちろん、さらにはそんな隙はまったくなかったわけですよ。

——本当の意味でプロレスの世界チャンピオンだったわけですね。そのテーズさんのベルトを巻いていた時代の髙田vs北尾戦なんかはどうですか?・

宮戸　あれはまさしく、僕の言う「真剣勝負」でしたよ! あのときの髙田さんは、負けはもちろん許されない。我々の会社も含めてね。しかも、あのときのルールは3分5ラウンドで判定なしですからね。引き分けになる可能性がもの凄く高いルールにされてたんですよ。あの日、髙田さんが負けたときはもちろん、引き分けでも会社は潰れていたでしょうね。

——そうですよね。あれだけ対決を煽っておいて、たった3分5ラウンドで「引き分けです」なんてなってたら……。

宮戸　それこそ暴動ですよ! たぶんあの試合が引き分けで終わってたら、暴動が起きて、プロレス界は武道館が使えなくなったでしょうね。そういう意味においてホントの真剣勝負ですよ。そんな中で髙田さんが、あの勝ち方をしたというのは、まさしく凄いことですよ。だから、僕はこういう試合を知ってるからね、単純にコンテストを真剣勝負と呼びたくないし。シュート=真剣勝負、ワーク=フェイクみたいに使われるのも違うと思うんですよ。だからリアルファイトって言葉も好きじゃない。多くの人が使ってる「リアルファイト」という言葉は、多くの場合「コンテスト」というべきでしょうね。だって、その試合の勝敗によって、その興行会社が潰れる試合がいまあります?・

——ありませんよねぇ。今日、宮戸さんの話をうかがって、いまのマット界には真剣勝負感が足りないんだなって思いましたね。

宮戸　これだけコンテストが定着したら、僕の言う「真剣勝負」というのはなくなっていきますよ。よりスポーツとして定着しちゃうから。たとえて言うなら、勝ち負けが日常化しちゃう。

——確かに、どんな強い人でも、コンテストでの「負け」と隣り合わせにいるわけだから、負けることの意味合いというのも希薄になりますよね。

宮戸　そういう意味で、今度のタムちゃんと船木さんの試合というのは、これはもちろんコンテストなん

プロレスの下積み生活に耐えてきた人間はいまのフリーター格闘家と顔が違うんだよ！

だけど、ほかの人の試合の中にはない、それぞれの生きてきた道を賭けての真剣勝負という側面は、間違いなくあるでしょうね。だから、この試合はどちらが勝っても、これ一回きりで終わりでしょう。

——なるほど。

宮戸　話は変わりますけど、よく「プロレスラーは華がある」って言うじゃないですか。けどね、それをさっきの高橋本じゃないけど、レスラーは魅せることに慣れているから、華があるとか、そう見せるのがうまいと思ってる人がいるけど、僕はそうじゃないと思う。やっぱり本当のプロレスラーの華というのは、プロレスという、いわば職人的な世界に入って、5年、10年と下積みからの修行生活に耐えてきた人間たちが醸し出す色だと思うんです。

——見せているわけじゃなく、自然とにじみ出ているものですか。

宮戸　そう。だから逆に言うとね、最近のMMAといわれるものに出ている選手たちの写真を見ると、かなり多くの選手がフリーターの顔に見えるんですよね。

——それはあるかもしれませんね。

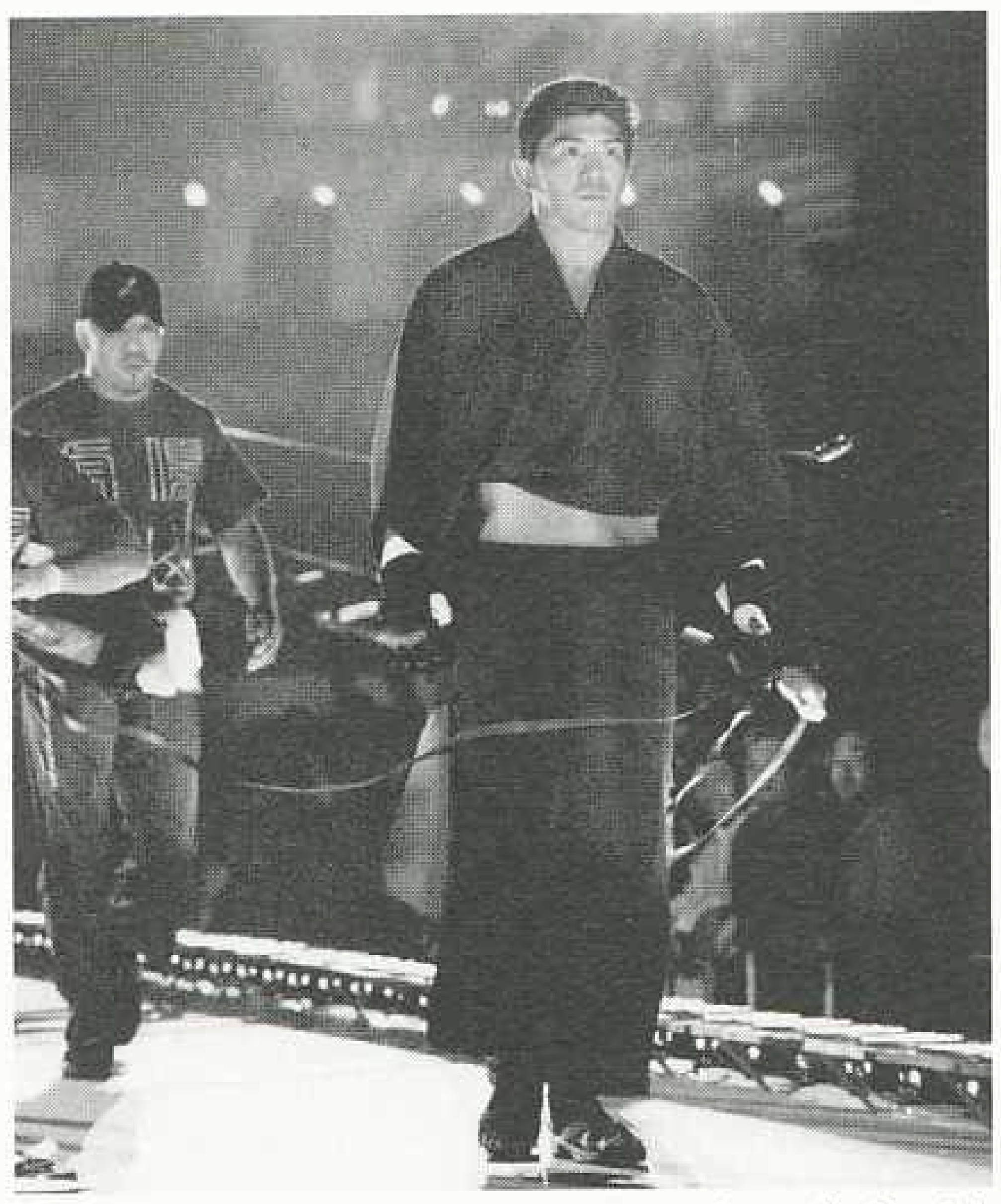
宮戸　やっぱり、同じお料理の世界でも、アルバイトとしてレストランで働いてる子と、料亭とかで下積みを5年、10年やってる子の顔は違うんですよ。格闘技の世界も同じようなことを感じるんですよね。なんでかっていうと、いまの子たちは、コンテスト、競技の世界にいるかもしれないけど、団体の新弟子じゃないから、自由でしょ？　たとえば「ちょっと足がいてえから今日は練習休もう」とか、あるいは「今日は練習行きたくないな」っていうのが許されるんですよ。先輩の付き人や、掃除、洗濯、ちゃんこ番といった雑用があるわけでもないしね。

——月謝払ってジムに通ってる選手もいるでしょうからね。

宮戸　でも、船木さんにしても、田村にしても、桜庭や高田さん、それこそ猪木さんにしても、みんな「明日は道場行きたくねえな」と思っても、合宿所で目を覚ませば、逃げない限り、絶対に朝の掃除から、先輩の面倒から、地獄のような練習から、ちゃんこ番から、しなきゃいけなかったんですよ。

——地獄が待ってるのがわかってても道場に行かなくちゃいけない（笑）。

宮戸　そう！　しかも、それを何年も続けなきゃいけないんです。そういった世界を通ってきた人間の顔っていうのは絶対に違いますよ。オーラとか大げさなことは言いませんけど、醸し出すムードや表情というのは、絶対に違うと思う。



2000年5月のヒクソン戦では、着流し姿に日本刀を片手に、"真剣勝負"を挑んでいった船木。4.29『DREAM.2』での田村戦では、どんな生き様を見せるか。

——地獄を通ってきた人間特有のものが顔に出るわけですね。

宮戸　だからプロレスラーじゃなくても、吉田（秀彦）選手なんかも柔道というジャンルでそういう地獄を通ってるから、プロのリングに上がったときに、共通する雰囲気があるんです。

——吉田選手は中学から講道学舎の寮生活ですもんね。それはそれは地獄でしょう。

宮戸　だと思いますよ。だから、そういうのを通った人とそうじゃない人っていうのは絶対違いますよ。だからいまの選手たちっていうのは、フリーターみたいな顔をした人がいっぱいいる。日本人はちょっと甘いと思うんだよね。海外なんかは、たとえばミルコなんかは、兵士の顔してるでしょ。

——確かに死と隣り合わせの局面を通ってきた顔ですよね。

宮戸　海外の選手は軍人顔してる人が多いですよ。それは格闘技だけじゃなく、サッカーのワールドカップなんか観ても、強い国の選手はみんなそうですよ。

——生き抜いてきた人間特有の顔なんですよね。

宮戸　だから、きっといま、日本人はみんな甘いんですよ。重い顔の人がいませんよね。休みたいときに休める境遇にいるから、みんなフリーター顔になっちゃうんです。そんな中でも、たとえば三崎（和雄）選手の海の男みたいな顔はいいけどね。

——海の男！

宮戸　これはこれで人間が出てていいと思う。フリーターであんな顔はいないでしょう。浜の大将、もしくは飯場の兄貴分みたいなね。

——船一艘持ってる感がありますよね（笑）。

宮戸　荒波を乗り越えたような顔をしてますよ。やっぱりね、フリーターやってりゃ、フリーターの匂いがしてくるのは当然ですもん。だからブラジルの選手なんて、ハングリーっていうかね、ヤツらはやっぱり日本人にない目つきを持ってますよ。結局、リング上には選手の生き様が全部出ちゃうんですよね。

——そういった醸し出すムードや、顔つき、すべて含めてプロなんでしょうね。

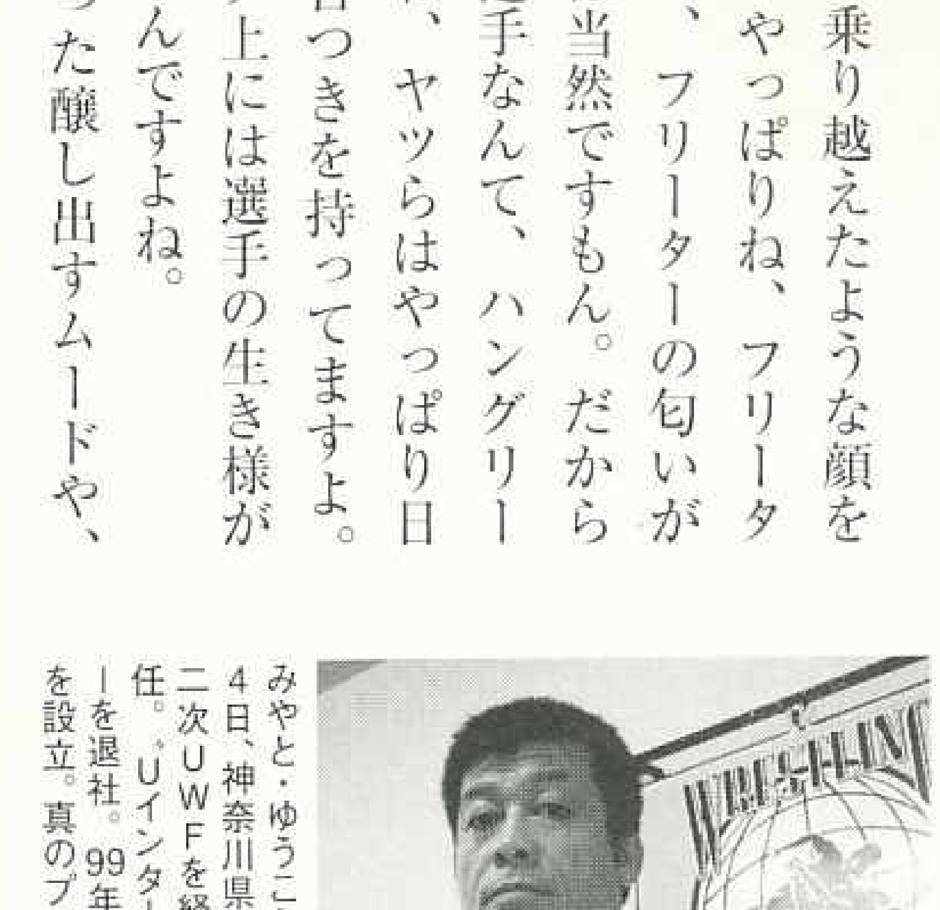
宮戸　だからね、タムちゃんと船木さんには、二人の歩んできた道、生き様をリングで見せてほしいと思う。船木さんにしてみれば、新日本、UWF、藤原組、パンクラス。さらにはヒクソン戦で引退したあと、格闘技とはまったく違う人生を歩んだことだって、必ず力になってるはずだから。そういった、二人が歩んできた人生を、リング上でぶつけ合ってほしいですね。

——それこそ、田村潔司と船木誠勝にしかできない試合になりますよね。

宮戸　僕らにしてみればね、やっぱり同じ時間を一緒にすごした人たちが、30代後半になっても話題になる中で試合をしてくれるっていうことは嬉しいことだし、誇らしいことですよ。だから若い人たちをアッと言わせるような試合をしてもらいたいな、と。僕はそういうものを望みたいですね。

——わかりました。今日はありがとうございました！

【08年4月3日　UWFスネークピット・ジャパンにて収録】



みやと・ゆうこう■本名・宮戸成夫。1963年6月4日、神奈川県出身。85年に第一次UWFに入門。第二次UWFを経て、UWFインターでは取締役に就任。"Uインターの頭脳"と呼ばれる。95年にUインターを退社。99年に「UWFスネークピット・ジャパン」を設立。真のプロレスリングを指導している。

いまこそ"真剣勝負"やれんのか!

FRANK SHAMROCK フランク・シャムロック

「フィジカルで上回るタムラが勝つだろうね」

かつてパンクラスでデビューし、船木とは1勝1敗の戦績を残し、リングスでは田村とも闘い引き分けている、アメリカMMA界のレジェンド、フランク・シャムロック。船木と田村、両方をよく知る彼は、この一戦をどう予想するのか？ 3.29『ストライク・フォース』でのカン・リー戦前日にフランクを直撃した！

聞き手／石井史彦　構成／堀江ガンツ

――フランクさん！　カン・リーとの大一番前にすみません。昨年大晦日の桜庭vs船木に続いて、4月29日に新団体DREAMのミドル級GP1回戦として、またしてもフランクさんと同世代のレジェンド同士、田村vs船木戦が組まれることになったのは、ご存知ですか？

フランク　へぇ～、タムラとフナキ？　それって本当なのかい？　ボクはタムラともフナキとも試合をしているけど、二人とも素晴らしいテクニックを持ったファイターだからね。いい試合になると思うよ。

――大晦日の桜庭vs船木戦のVTRはご覧になりましたか？

フランク　残念ながらまだ観ていないんだ。試合はサクラバが完全にコントロールしたとは聞いてるけど、実際に試合を観たわけじゃないから、ちょっとコメントできないな。

――では、田村選手とはリングスで一度闘っていますけど、どういった印象を持っていますか？

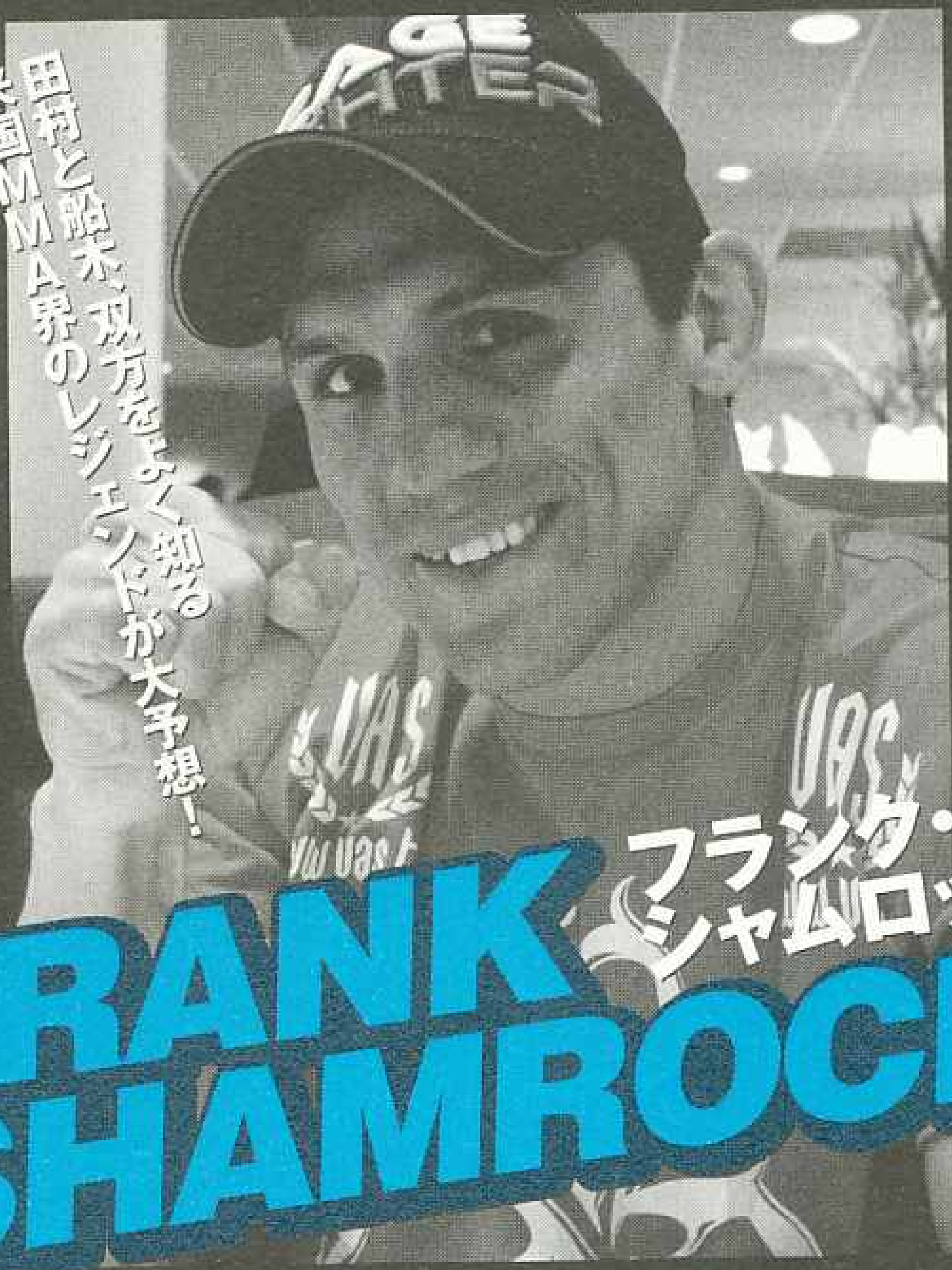
フランク　スタンドもグラウンドもできて、しかもフィジカルも強いファイターだね。彼との試合は素晴らしい内容だった思い出があるよ。

――では今回、田村選手と船木選手が闘いますけど、どういった結果になると思いますか？

フランク　自分の印象では、タムラのほうがフィジカル面で強いと思うから、プレッシャーのかけ方とかで、有利なんじゃないかな？　フナキは……、自分と同じで歳を取ったからね（苦笑）。それに、やっぱり現役を離れていた時期が長いのは気になるけど、格闘家としての練習は続けていたみたいだから、あとはどれだけ試合の勘が戻っているかだろうね。

――ズバリどちらが勝つと予想しますか？

フランク　タムラがプレッシャーをかけ続けるような試合展開で、勝利を収めるんじゃないかな？　タムラは体力的にフナキより上だから、試合が長引けば長引くほど、タムラが有利になると思うよ。逆にフナキは最初から積極的にいったほうがいいね。


田村と船木、双方をよく知る米国MMA界のレジェンドが大予想！

© Tom Casino

――2回戦以降、もし田村選手と桜庭選手が闘ったら、どうなると思いますか？

フランク　それは素晴らしいマッチメイクだね！　でも予想するのはとっても難しいよ。どうしてもどちらか選べというなら、サクラバかな。サクラバはタフな試合をたくさんこなしてきて、パンチを受けすぎていることや、年齢が気になるのは事実だけど、これまでの実戦からの経験に勝るものはないからね。タムラはとてもいいキックを持っているけど、パンチはそんなに重くないから、そこらへんもサクラバが有利に働くんじゃないかな。いずれにしても、実現したら素晴らしいね。勝ったほうとボクが闘いたいよ（笑）。


99年4月、UFCミドル級の現役王者としてリングスに登場したフランクは、エース田村と対戦。リングスルールのシュートファイトで行なわれたこの一戦は、一進一退の攻防の末、20分フルタイム闘い、同ポイントによる引き分けだった。


3.29『ストライク・フォース』で、同団体の世界ミドル級王座をかけて、ベトナム系の超人気ファイター、カン・リーと対戦したフランクは、相手の土壌であるスタンドで勝負し、右腕を骨折してまさかの敗北。試合後はリマッチを要求している。

――レジェンド対決なら、俺の出番だ、と（笑）。フランクさんの主戦場である『ストライク・フォース』には、三崎和雄選手が出場する予定ですけど、彼の挑戦を受ける気持ちはありますか？

フランク　ミサキが契約するっていう噂は聞いていたけど本当だったんだね。チャンスがあったらぜひ対戦したいよ。とてもいい試合になるんじゃないかな。

――三崎選手の試合は観たことありますか？

フランク　試合を通して全部は観てないけど、場面場面は観てる。彼はバランスのとれたいいファイターという印象だね。

――三崎選手とは逆に、フランクさんが日本の新団体である『戦極』やDREAMに上がる可能性はないんですか？

フランク　新団体が自分にコンタクトをとってくれれば可能性はあるんじゃないかな。まあ、ちょっとお金はかかるけど（笑）。チャンスがあればサクラバ、タムラとは対戦したいね。逆に彼らがアメリカに来てくれれば、もしかしたら、もっと簡単に実現するかもしれないね。

――あと、いまフランクさんは、兄のケン・シャムロックと論争を展開していますが、これが二人の対戦につながる可能性はありますか？

フランク　もちろん試合をしようと思ってるから、論争して盛り上げようとしてるんだよ（笑）。

――あ、やっぱりそうなんですか。そんな、あっけらかんと（笑）。

フランク　ケンとの試合は2009年に実現させようと思っている。いいアイデアだと思わないかい？

――確かに話題性は充分ですよね。

フランク　おそらくアメリカのファンはシャムロック家のことやいままでの歴史、たとえばパンクラスで試合していたこととかを知らないと思うんだ。MMAの歴史は非常に浅いので、俺たち兄弟同士で試合をすることで、ファンがMMAの歴史にも触れられるんじゃないかと思ってるんだ。

――なるほど。お二人の歴史を振り返ることで、同時にMMAの歴史を振り返るきっかけにする、と。

フランク　ほとんどのファンは、兄弟同士で試合をするなんてへんだと思っているだろうし、理解してくれないと思うけど、俺たちはお互いにいろんなショーに出場し、いろんな対戦相手とファイティングしながら育ってきたんだ。来年に向けて、ファンのみんながちゃんと理解してくれるようにメッセージを伝えられたら嬉しいよ。

【08年3月28日／米国カリフォルニア州サンノゼ、HPパビリオンにて収録】

煽りVとは何か？

**いまや格闘技に必要不可欠な〝文化〟に急成長!!
その功罪に迫る!!**



"60億分の1の煽りVアーティスト"佐藤大輔氏の登場と、そのハイクオリティな作品群や圧倒的な影響力によって、いまや日本格闘技界では絶対必要不可欠な要素となってしまった"煽りV"。さらに進化を続けている煽りVワールド、そして"煽る"とはなんなのか？その根源や功罪にまで踏み込んだ煽りV特集！　読めんのか？

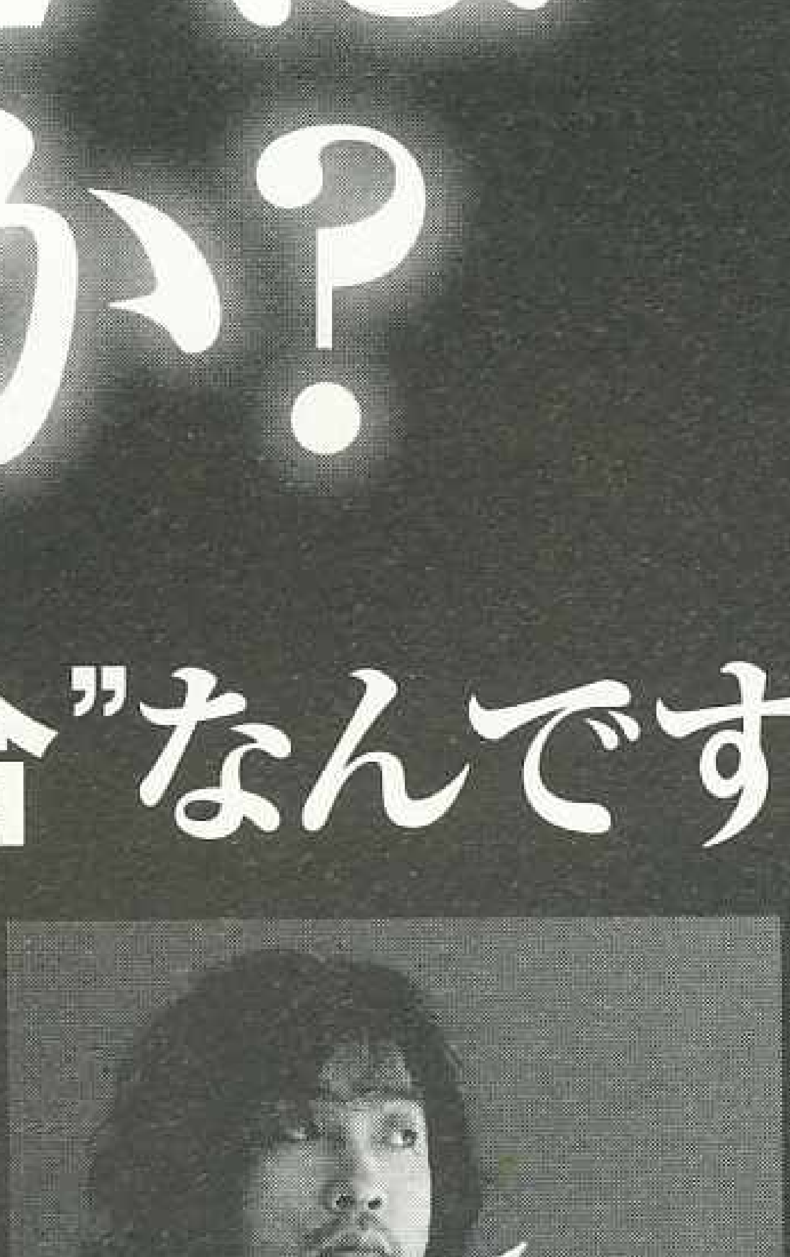


なぜ、煽りVは必要なのか？

「人間の本質も、“煽り”と“試合”なんです」

文筆家であり、音楽家

菊地成孔



その豊富かつ多彩な知識から、鋭く的確な論説を展開して、すっかりおなじみとなった文筆家&音楽家の菊地成孔氏が、今回はかねてからその規格外の才能を絶賛してきた佐藤大輔氏について、そしてナチスの宣伝省であるゲッベルスや、ミュージッククリップと音楽の関係など“煽り”の歴史から、人間の本質に至るまでズバリ言及!

聞き手／ジャン斉藤　大会撮影／乾晋也　写真協力／DREAM

煽りVとは何か

—今日は煽りVについてお話をうかがいます。

菊地　よろしくお願いします。とはいえ最初にお断りしておきますが、ちょっとここのとこ忙しくて、『戦極』やDREAMの立ち上がりの流れをつぶさに追えてないんですよ。なので映像をもらって観たんですが。

—DVDでTBSの地上派放送と、『戦極』のPPVを観ていただいて。

菊地　そのほかの情報もホントに斜め読みっていうか、コンビニで『格通』をパラパラめくった程度の斜め読みで（笑）。でも、先ほどうかがいましたが、僕が観た地上派放送は加工された佐藤大輔さんの煽りVなんですね。

—そうなんですよ。会場では、佐藤さんプロデュースによる煽りVが流されてますね。その完全版は二度と日の目を見ることなく、このままお蔵入りしてしまうんじゃないかって。

菊地　それは軽く驚きましたし、同時に腑に落ちる感じもあります。今回『戦極』と『DREAM・1』を観て思ったのは、佐藤さんはもう勇退されて関わってないんだな、と。

—あ、そう見えるもんですか？

菊地　はい。要するに佐藤さんの煽りVは完成度の高さと実際の効力において、スタンダードの枠にありましたから。新しい二つの団体が、すでに煽りVのスタンダードになっている佐藤スタイルに対して「自分たちはこうしよう」という態度が正反対に出た、というふうに見えました。ま、『戦極』のほうはストレートに「アレっぽくいこうよ」と（笑）。

—ダハハハハ！　そこは手に取るようにわかりますよね

菊地　一方ではあたりまえな方向性ですよね。「煽りVって、こういう感じでしょいま」といったイージー感。で、DREAMのほうは佐藤さんじゃない、ポスト・佐藤大輔みたいな人が「PRIDEはもう忘れろ」っていう流れの中、なるべく佐藤的じゃない、新しい方法を模索しているVに見えたんです。なので、佐藤さん制作↓他者が修正とかがって「ええー!!」そして「なるほど」と。まあ、その僕は仕事柄、リングに上がる側とPV作る側とどっちかっていったら、圧倒的にPV作るほうに近いわけですが。

—ええ。リングに上がる側ではないですね（笑）。



陽気かつアップテンポなBGMに「Q. どこに行ってたんですか?」「……アメリカ」。「Q. 何をしてたんですか?」「……練習」という不機嫌な"野獣"藤田とのやりとりが展開した『戦極』煽りV。対戦相手との舌戦も含め、コミカルサイドの佐藤氏のVっぽいムード満点ながら、どこかが決定的に違う気がしてならない、じつに不思議な出来映えの作品だ。

『戦極』の煽りVは「こういう感じでしょ」というイージー感が出ていた

菊地　だからこう、ある意味、試合以上に作り手の感じがわかるんですが、こういう仕事というのは、安易にやったらアウトで、頑張ればオーケーというほどシンプルじゃない。とはいえ、やっぱり『戦極』のほうはイージーであることの悪さが出てしまいましたね。あたりまえですけど、佐藤Vにはおよばないし。ただ「それでは第一試合を始める！」といった松本人志の『一人ごっつ』（フジテレビ系）の師匠の声みたいなアレはヘンでよかったけど（笑）。一方のDREAMは、これは大変な仕事だなというか、凄い四苦八苦してる印象でしたね。TBSによる二次加工ってのはねえ。なるほどねえ、と思いました。

—ナレーターが違ったり、言葉尻をちょっといじっただけで、だいぶ違うふうに見えたんですね。

菊地　選曲も大感動路線ではなく、抑えた感じで、タイポグラフの出し方とか、あらゆる要素が「上げすぎないように。クールにいこう。ポスト佐藤Vだ」と必死になっているように見えてしまいました。

—ただ、会場で観るとホントに違和感がないんですよね。オープニングの映像も凄くよくできてて。DREAMの新しい世界観をキッチリ伝えるピュアな佐藤さんの世界でしたし。でも、それがイジられてるとどうも。

菊地　尺も短くもなっているような気がしましたね。上がりすぎないよう、深追いしないように、短め短めで切りあげているように見えました。あの、不勉強で申し訳ありませんが、佐藤さんってテレビ局上がりの人ですよね？

—フジテレビですね。

菊地　それなら……TBS側は何がなんでもイヤでしょうね。

—ダハハハハ！　何がなんでもイヤ（笑）。

菊地　よしんば、佐藤さんに作らせたほうが数字を獲れたとしても、イヤじゃないかな。ただ、TBSによる二次加工、介入は、できあがったものだけ見る限り決して悪くはなかったです。ポスト佐藤に見えましたから。見えてしまった、と言ったほうがいいですかね。TBSがやったことに問題はあるけど。一方、いわゆるキッチュっていうか、キャンプなおもしろ感でいったら『戦極』はかなりよかったですよ。平気でバッタもん出すし（笑）、さっきも言った『一人ごっつ』の師匠の大仏の声みたいなアナウンスがあるし。「ドンドーン。第一問」って、クイズが出るのかと思いました。

—ダハハハハ！

菊地　選ぶ曲や音楽の使い方もそっくりで。ボブ・ディランがガーッと流れて、BGMの音量を超えて鳴り響き、もう泣けてくるという。ちょっとパロディみたいな（笑）。

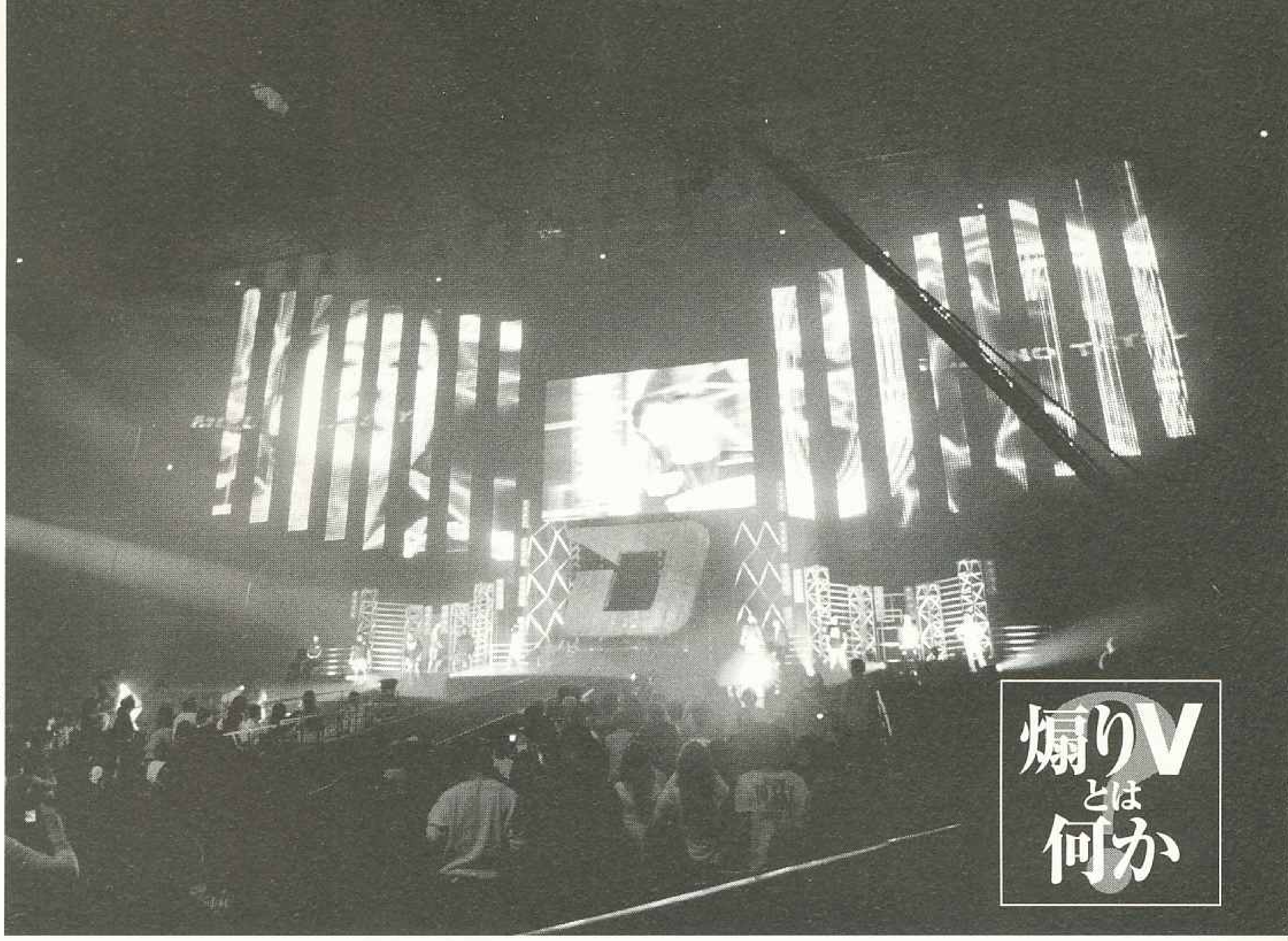
—印象的だったのは、藤田（和之）vsピーター・グラハムの試合のVですね。

菊地　僕はけっこうおもしろかったですけどね。バッタにしては（笑）。まあ、とりあえず立ち上げで『戦極』がああいう映像を作ったっていうのは記録すべきでしょ

う。演出がもっととんでもなくへんなことになるのを期待しますが。『骨法の祭典』みたいな。

——PRIDEとフジテレビが切れて、大輔さんがやれなかった時期が半年ぐらいあったんですけど、あのときはそういう感覚って感じました？

菊地　いや、あのときは単なる喪失に思えました。



通常の映画館のスクリーンの数倍サイズの超巨大なスクリーン（布）に映し出される大会前の煽りV。そこから怒濤のオープニングへ突入する、極上のライブショー。強烈な非日常空間でのド迫力な映像、音楽、光の洪水はまさしく現代によみがえったプロパガンダ体験と言える。

——崩壊の序曲として。

菊地　そうですね。そのあと戻ってきて、興行が再び完成したかのような。まあ、苦しさも含めて複雑なのはDREAMのほうですよね。『戦極』は軽ーくバカ負けさせられる感じで。念を押しますが、これはあくまで煽りVと演出に限った話ですよ。

——DREAMは、次回からPPV放送もやる予定なんですけど、そこでは佐藤さんによる煽りVが流れて、ナレーションも立木（文彦）さんで、という体制のようなんですが。どうやら地上波はまた違うようなんです。少なくとも佐藤さんによる完全版ではないみたいで。

菊地　あの〜、誤解されそうなんですが、とてもいい話だとも言えます。そこまで邪魔される才能が存在することは。少なくとも格闘技史の中には一度もなかったことでしょう。前の『kamipro』でも言ったと思うんですけど、こういった煽りVはかつてナチスの（ヨーゼフ・）ゲッペルスっていう近代的な宣伝のプロパガンダの天才がいて。のちのMTVの誕生までつながってくる人なんですが。この、ゲッペルスの残した言葉で有名なのは、「一番強いプロパガンダは、怒りや煽動ではなく、娯楽の中にある」というものでですね。

——ああ、凄くわかりやすいですね。

菊地　笑いと感動の中に大衆を動かす力があるんだという、佐藤さんのVはゲッペルスの時代に戻るぐらいの完成度があります。

煽りVの画面はテレビや映画よりデカい。プロパガンダ映像に近いんです

——そこはホントにそのとおりで、じつはDREAMの旗揚げ会見のときって三崎vs秋山戦の裁定の引っくり返しで、ファンのあいだでは凄くムードが悪くなってたんです。ところがその会見で「これから新しいイベントが始まる」っていう佐藤さんの煽りVが流されたんですけど、それがあまりにも素晴らしくてムードが変わっちゃったんですよ。

菊地　大切な問題とか、そういうのを全部なしにして、持っていきたいほうに持っていけちゃうっていうのは、ある意味、怖い力です。ゲッペルスは紙も使ったし、フィルムを使いました。敗戦直前にロシアがほとんどドイツの国境まで来てるってときに「まだ負けない!! 全然!!」というプロパガンダ映画を作ってたんですよ。

——そこまで任務に忠実でしたか（笑）。

菊地　まあ、ご存知のとおり、20世紀っていうのは宣伝の時代なんですよね。あの、こないだインタビューを受けたターザン山本さんの生前追悼本話とつなげてしまっていいのかわかんないですけど（笑）。

——どうぞどうぞ（笑）。

菊地　あの本に出ていた、いしかわじゅんさん曰く『プロレスを観なくても、『週刊プロレス』を読んでれば、観てることになる」っていうね。で、井上（崇宏）さんという方がおっしゃっていた「試合自体はつまんない試合もあるんだけど、『週プロ』自体はつまんなかったことはない」と。宣伝が興行を超えていたんだ、と。

——上位概念化しちゃってましたね。

菊地　こんな全能感にタッチしたら、人生も狂いますよ。だから読んでるコッチも、のめり込みながら同時に恐怖感も出てくる。「ヤバいなー。これなー」といった。で、DSEのほうは、再三再四言ってるようにすべてが完璧になっちゃった。煽りVは完璧。試合も完璧。『ハッスル』も持って文化的にも完璧、と。「もうこれは恐ろしいよ。潰されるよ」と。んで潰された。

——俗にいう、出る杭は打たれるというか。

菊地　そうですね。だから、ターザン山本さんも、一時期はプロレス界のゲッペルスだったと思うんですよ。まあ、傑出したラブレター力によって（笑）。

——ダハハハハ！　映像ではなく紙ですからね。

菊地　佐藤さんの煽りVは、会場で巨大画面で流されて、テレビよりも映画よりデカい画面で観られる。端的にあらゆるプロパガンダ映像に近いんですよ。ニュルンベルク党大会で、世界で最初にPAシステムやサラウンドシステムを導入したのはナチスですから。

——はぁ〜。そうなんですか。

菊地　スピーカーを地中に埋めたんですね。そこにいる人が低音でズシズシきて、煽りまくりの短いプロパガンダフィルムが流れて。あらゆるイベント演出の基礎

佐藤さんの扱いは、あり余る才能が恐れられて抑えられている感じ

を作りました。なんかナチスの話ばっかりしていますが（笑）。佐藤Vの圧倒的な力というのは、どうしてもそれを想起させるんですよ。単に宣伝効果ってことだけ言えば、TBSがそんなに検閲する必要はないわけじゃないですか。

――本来、そこまで牽制する必要はないですよね。

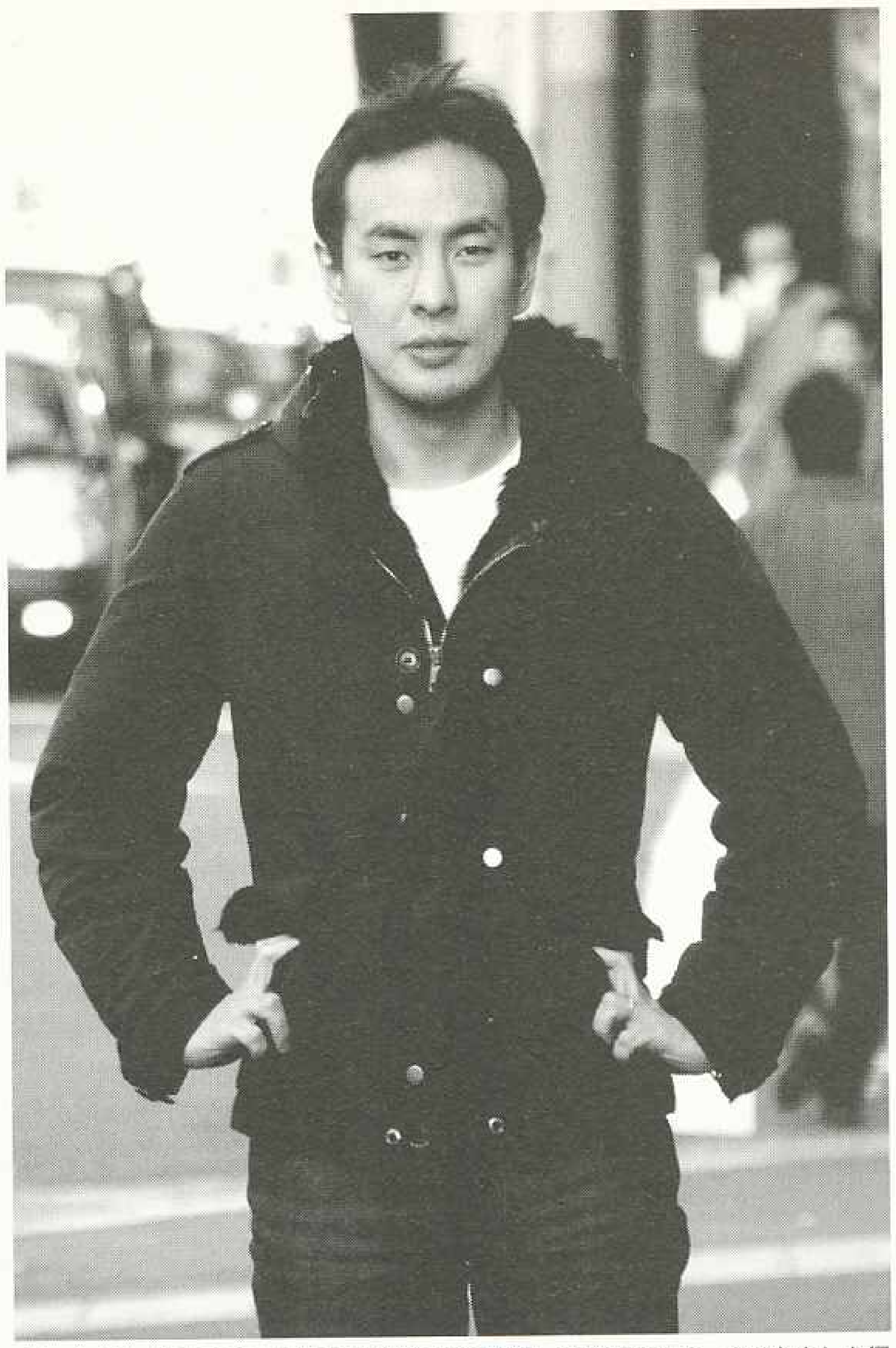
菊地　「このまま流したらPRIDEに見えちゃうじゃないか。PRIDEのイメージは一回忘れないと」っていう理由かもしれないけど、それは検閲じゃない方法でも調整できるだろうし。だから今回の佐藤さんの扱いは、ただ、あり余る才能が恐れられて抑えられてるだけだと思うんですよ。短縮したおかげでテレビ的にはサクサク進んでよかったとか、TBSで以前V作ってた人たちにも顔が立ったとか、そういうことすらあんまりなさそうだと思うんですね。

――そこにTBSなりの戦略は見えてこないですね。

菊地　ある意味、純粋に怯えっていうか。本当に優れてるものがおっかないっていう結果だと思うんですよ。一時期の前田日明さんのような。その点、佐藤さんご本人がいない『戦極』はお気楽にバッタもんを作れるというか（笑）。

――なるほど（笑）。

菊地　話を戻すと、20世紀はプロパガンダの時代で、本質よりも凝縮された宣伝のほうに力が傾くっていう時代だったわけです。曲はさておきPVがおもしろいから売れるという現象が生じる。という可能性について、MTV初期は問題にされました。



かねてより、佐藤氏の“煽り”の才能を高く評価していた菊地氏。その突出した編集センスの根底には『新世紀エヴァンゲリオン』やレイブパーティーといった90年代カルチャーとの共通性や、好きなものに関しては「銭金関係ない」といったモチベーション、ビジネス感覚のあり方も「とても90年代ぽい」と指摘している。

――以前、マイケル・ジャクソンの『スリラー』にたとえていただいたお話ですね。あのビデオがなかったら、あそこまでヒットしたのか？　っていう。

菊地　あれから約30年ですが、いずれにせよ「PVがいいから売れたって汚名を着せられたくないから、俺はあえてPVは作らない」っていうミュージシャンはとうとう現われませんでした。映画と映画の予告編も同じ関係だと思うんですよ。たとえば初期の角川映画は極端でした。

――ガハハハハ！　角川映画は確かにそうですね。

菊地　『人間の証明』の落差が一番凄いと思うんですが（笑）。で、PRIDEではそこが拮抗してたわけです。

――ああ、煽りと試合のバランスがとれていた、と。

菊地　試合も煽りVもどっちも凄いというのは、やはり怖いモノですよ。息が詰まる。なんとかしてどっちかの邪魔しようにも、試合の邪魔は難しいですからね。

――そこが今回の悲劇というか、より際立ってしまったところなんですかね。

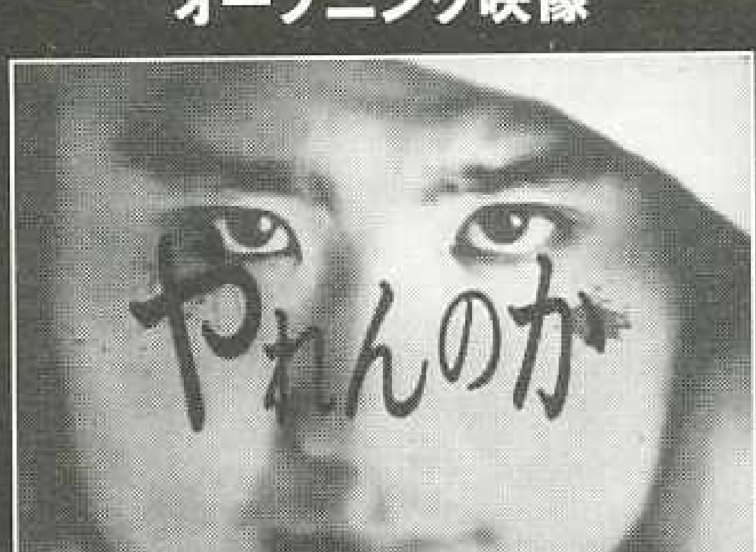
菊地　またターザンさんの話に戻りますが（笑）。あの本に登場する最初の女性（Oka―Chang）は、ターザンさんにラブレターもらってるあいだは凄くいいと思ってるんですね。で、会ってデートするとガクンと評価が落ちる。ある意味ヘルシーですよね。一番新しい恋人の方はそうでもないみたいですが。

――ダハハハハ！　まぁ、夢香さんは別格ですね。

何故、煽りVは必要なの

佐藤大輔 煽りV名作劇場

2006.10.31『PRIDE 武士道 ―其の十三―』
オープニング映像



フジテレビショック以降、佐藤氏の煽りVがもはや幻となっていた06年秋、『PRIDE 武士道 ―其の十三―』オープニングで、ナレーター・立木文彦氏とともに佐藤氏のVが待望の完全復活！　やがてイベント名となる名フレーズ「やれんのか！」を軸に、段違いのクオリティと凄まじい高揚感で“60億分の一煽りアーティスト”の健在ぶりを証明、ファンを熱狂させた。

2005.12.31『PRIDE 男祭り ―頂―』
吉田秀彦vs小川直也



柔道時代から11年にわたる宿命の一戦。その“光と陰”と記者会見などの過激な舌戦のBGMはモーツァルトの『レクイエム』！　プロレスを選んだ小川（破壊王の墓参りシーンも登場）と真剣勝負を選んだ吉田の対比に、「生き様を倒すのは、生き様」のキメ言葉、巌流島の夕陽とサディスティック・ミカ・バンド『黒船』がハマり、観る者を震撼させた名作中の名作だ。

2005.8.28『PRIDE GP 2005 決勝戦』
E・ヒョードルvsミルコ・クロコップ



問答無用の“世界最高峰の舞台”だった当時のPRIDEを象徴するこの試合。煽りVは、映画『ターミネーター』の旋律で、ミルコ・ヒストリーをクロアチアロケで丹念に追う構成。内戦に父の死と“生と死”のイメージが反復され、敗北を予期するような母のリアリスティックな言葉。そして迎え撃つ皇帝の姿と、ミルコの“闘う理由”を描ききった見事な4分34秒。

2005.6.2『PRIDE GP 2005 2ndROUND』
桜庭和志vsヒカルド・アローナ



「桜庭和志という生き方」というコピー、バックには叙情性あふれるFantastic Plastic Machineの『Reach For The Stars』の泣きの調べ。「おもしろい試合はしなくていい」と豪語する“勝利至上主義者”アローナと“ファンタジスタ”サクのコントラストを描き、ラストは敗戦の予感に美しい夕焼けがカットイン。サクの揺れる内面とファン心理を浮き彫りにした切ない傑作だ。

煽りVは必要なのか？

「佐藤以後の煽りVのあり方」を考えたときに、いっそのこともう煽らないのもいい

菊地　〝予告編と本編〟、〝宣伝と商品〟という分割は人間の根本的営為です。誰もが、すべての局面で煽りVと試合を行なっているわけです。

——煽りVはよくても、試合がしょっぱいと引かれるわけですね（笑）。

菊地　逆のほうがまだいいですね。どっちも両方素晴らしい、というのは、単に質量に還元すれば最高ですが、さっき言ったように恐怖感を植えつけます。予告と本編というのは、料理の前菜とメインみたいな、同等の連続とは意味が違いますから。

——確かにそうですね。

菊地　DREAMの状況っていうのは、まだどうなってくのかさっぱりわかんないですが。ただフジからフリーになって、TBSに移って、ちょっと攻撃的な仕事をしてね。上に削られちゃうなんていう、気骨のあるアーティストみたいな感じをやってるのは、佐藤さんだけとも言えますよね。

——選手よりも、闘ってる感じはありますよね。

菊地　DREAMの試合をクサすわけではありませんが、佐藤Vが完全復活したら、ヘタするとぶっちぎりでV先導の興行になるかもしれないですね。ですから佐藤さんには気の毒ですが、「寸止めにさせる」という現状の二次加工は、繰り返しますが悪くもないとも思います。再び繰り返しますが、TBSの圧力のあり方には問題はあるとはいえ。

——あと逆に煽りVに対して、「そんなものにこだわるのはおかしい」みたいな声も挙がってきてるんですよ。

菊地　それは健全であると同時に基本的に無力ですね。たとえば今回、DREAMと『戦極』をDVDで観たときに思ったのは、「佐藤以後の煽りVのあり方とは？」と考えたとき、いっそのこともう煽らないっていうね。昔のボクシング中継みたいな。「こいつ誰？」っていう状態から、観てるうちにどんどんわかるといったたぐいの獲得性が、煽りVをなくしちゃえば出てくると思いますね。

——煽りVのない試合って観てみたいですね。それでどれぐらい興奮できるか。



煽りV効果や演出によって、熱狂的ライブ空間を生み出している日本の格闘技団体。PRIDEの消滅によって、煽りVと試合の均衡のバランスが崩れかけている現在、煽りVというメディアはより先鋭化し、巨大化していくのか？　その未来は選手やファン、興行そのものの未来も内包している。

菊地　自分が出したばっかりの本の宣伝みたいで嫌らしいけど、ファッションショーの本（『服は何故音楽を必要とするのか？「ウォーキング・ミュージック」という存在しないジャンルに召還された音楽達について』菊地成孔著／INFASパブリケーションズ）を出したんです。そう聞くとあまりに格闘技から離れてると思う人っていっぱいいるけど、ランウェイがあって人が歩いてくるっていうイベントは格闘技とファッションショーしかないから。じつは図称的には同じもんなんですが。

——あ、確かにそうですね。

菊地　ランウェイがあって、音楽が流れて人が歩いてくるっていう。で、たまに踊る人がいるっていう。

——そこも同じですね（笑）。

菊地　で、たまに踊るときはユーモラスになるっていうのも同じなんですよ。踊りながら移動するっていうのは。だから須藤元気のダンスが全部コミカルだったわけで。シリアスなダンス入場って考えても思いつかない。

——う〜ん、ちょっと思いつかないし、見たくない（笑）。

菊地　もともと近代プレタポルテまでファッションショーの音楽は鳴ってなかったんですよ。ただの番号の札をつけた人が、ザワザワしてる会場の中で歩いてくるから、みんなただ服を見てるの。でもあるとき音楽も流れるようになって、動くようになった。そうすると会場は上がるわけ。で、ファッションショーにも音楽がよすぎて、それで上がっちゃったのか、服がよかったのかわかんなくなったりする可能性も出てきた。

——まさに煽りVと試合の関係ですね。

菊地　で、ファッションショーのジャーナリストって音聴いてないようになってるんですよ。ファッションショーにおける音楽は、ムエタイにおけるワイクーと同じで、ショーのあいだ、ずっと鳴っています。だから、「あ、いい音楽だな」って思って観ちゃうと、ある種、ごまかされたみたいな気分になっちゃう。だから、なるべく感覚的には音を遮断して観るようにしてると思うんですよ。

——なるべく煽られないようにするわけですね（笑）。

菊地　ヒザ一つ動かない、手拍子する人もいない。それがエレガントでクールでシックなんだという、非常に変わった様式です。演出も観ますが、とにかくなるべく服のかたちを観て、ドライに袖が何センチとかってやってくわけです。

——なんか格闘技におけるガチバカみたいな感じですね。

菊地　パリに行って、ショーの選曲家にインタビューをしてきたんですが、彼らは音楽がいらなくなったら仕事がなくなっちゃうし、あえて音楽がないっていうことをやったら、シラけちゃうのが怖くてどこのメゾンもやらない。だから煽りVもない、入場の音楽もない世界というのは今後は難しいでしょう。昔のプロレスはそうでしたが。

——そうですね。昔は入場テーマもないですし。

菊地　Uインターがちょっとそれを標榜しましたよね。照明を絞ったりして。全近代性の標榜というか、単なるレトロごっことも言えましたが、Uインターのあのこだわりは評価が高かった。しかし、潰れてPRIDEになった。もっと言えば、コ

ールや名乗り挙げもないんだ、と。それは野試合みたいで一瞬ワクワクしますが、無理でしょうね。

——そうでしょうね。

菊地　とはいえ名乗り挙げは元祖・煽りVっていうか。戦国時代に闘う前に「我こそは〜！」って名乗りを挙げて、向こうも同じく返して。で、そのあいだは闘わない、PRタイムなんだっていう。人間はどこまでオリジンにたどってっても、広告と本質に分かれるんですね。だから、広告を完全に取ってしまったら何が残るのか、影響するファクターをすべて取り払って、純粋にある対象だけを見つめるというのは言ってみれば永遠の夢です。だから、格闘技が煽りVや音楽なしでっていうのは現実的にはできないんだけど、そのことを想像しながら観るっていうイマジネーションを提言するぐらいがいいかもしれませんね。「なんにもないで観たら自分はどう思うのか、って考えながら観てみませんか？」と。

煽りVとは何か

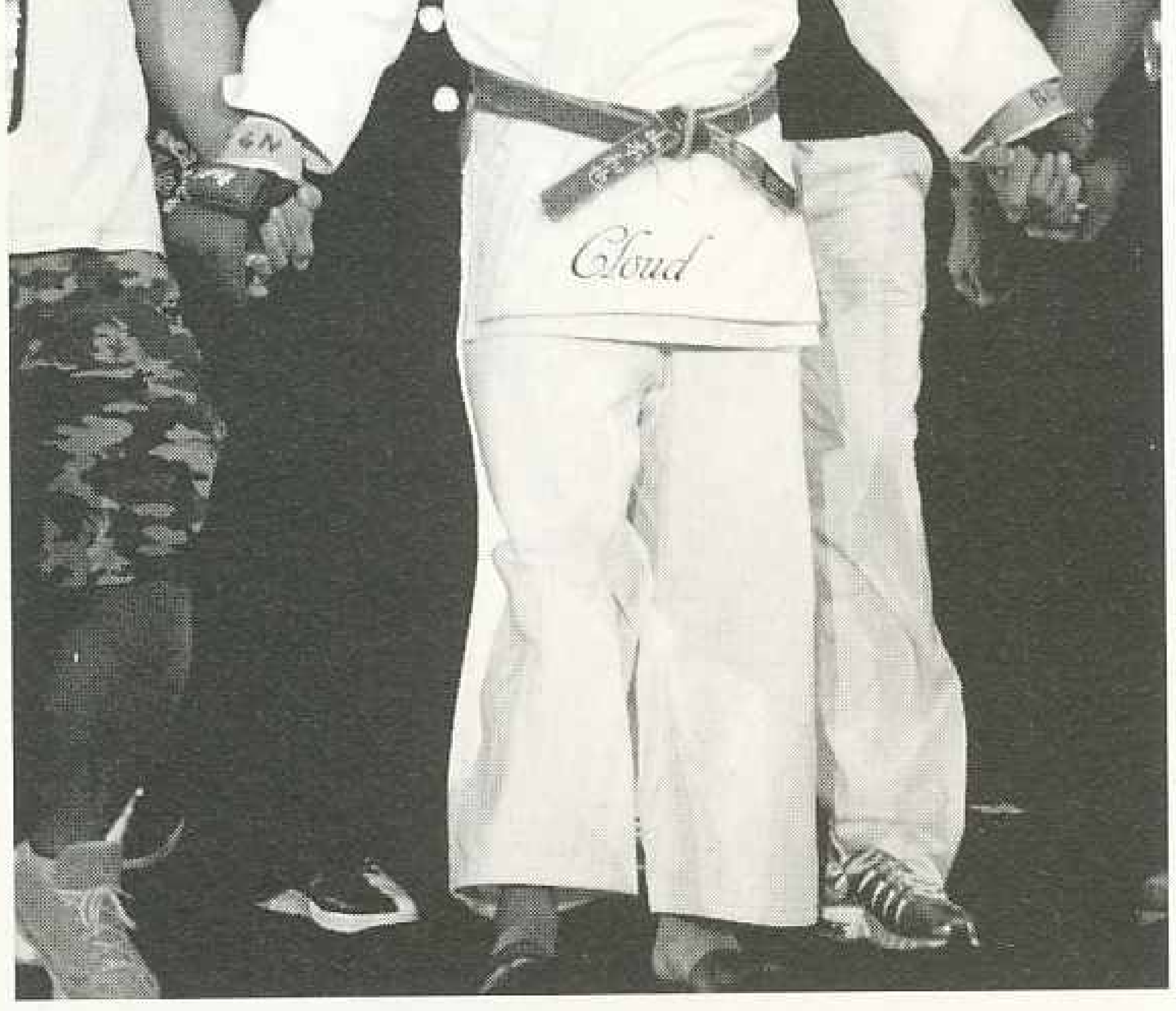
ランウェイに人が歩いてくるイベントは格闘技とファッションショーしかない

音楽を消して映画を観るように。

——そういう想像力は必要ですよね

菊地　僕らはPVが出る前は、ジャケットを見つめながら音楽を聴いてたわけです。頭の中でアルバムジャケットの絵を動かしてたんですよね。映画は最初、耳が聞こえなかったでしょ。サイレントだったから。で、音がつくまで30年ぐらいかかってる。19世紀まではオペラが全盛期で会場も広いし、衣装もあって歌があって、全部体感できるっていうメディアがあった。でも20世紀になって大量消費のマスメディアになってから、音もしない映画だけ観たり。絵のないレコードだけ聴くっていうことでスタートしてるんですね。

——そこからだんだん合体してくるっていう感じで。



菊地　20世紀の初頭から中盤までっていうのは、視聴覚メディアがいったん分離されるんですよね。で、再統合されてきた歴史なんだけど、それは生まれたてのメディアだからそうなってしまったわけで、そのときに僕らは、生後数カ月の、視聴覚が揃ってない、ヨチヨチの頃の記憶がよみがえるわけです。それが20世紀です。

——なるほど。

菊地　話がだいぶ逸れましたが、いずれにせよ宣伝と実質商品のどちらかをなくしてしまう、ということは本質的にできません。そんな中、総合格闘技界では佐藤さんが出るまで宣伝の天才っていうのは現われなかった。それも音楽界では現われてたし、政治でも現われてたしっていうことですよね。プロレスにおける古館伊知郎さんなんかもそうですね。

——ミュージックビデオを撮っていた人が世界的な映画監督になったりしてますからね。

菊地　ですから、言うならば、PRIDEに〝帝国感〟があったのは、佐藤大輔というゲッペルスがいたという側面が大きかった。佐藤さんに〝上げるも下げるも自分の思いどおりだ〟などという感覚がなかったのは明らかですが、では、〝自分の才能によってPRIDEが帝国化し、帝国化したから崩壊した〟という発想はお持ちかどうかうかがってみたいです。試合がすべてで、自分はただサポートしてるんだっていう意識が表層だったと思いますが。

——そこは格闘技に対しての思い入れが強いからだと思いますね。お金だけなら、もしかしたら『戦極』でやったほうがいいのかもしれないですし。

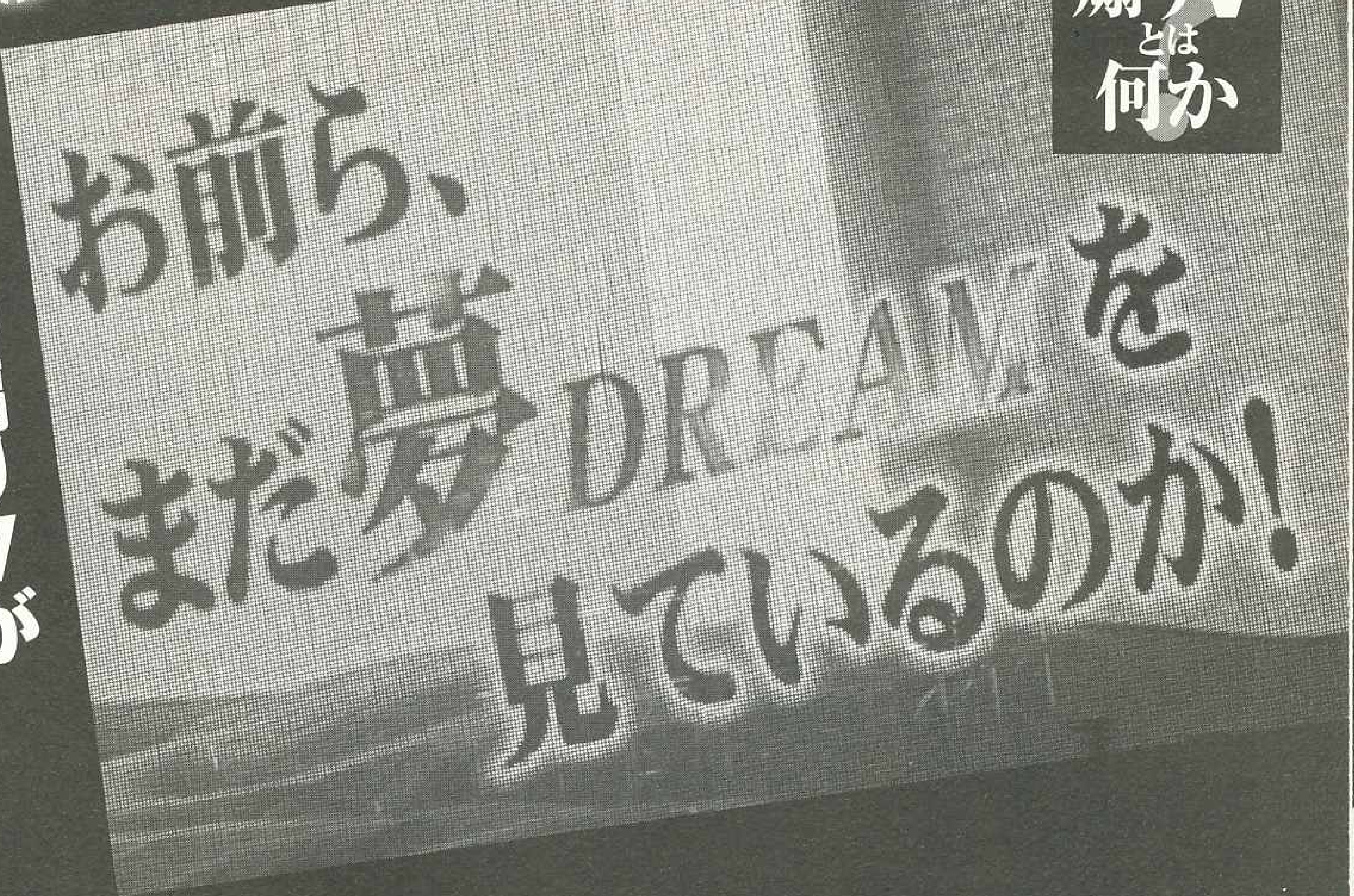
菊地　最後のPRIDE愛かもしれませんね。あの作風は、レイブ感って言うかなあ。人と人をつなげる力が凄い。プロパガンダの名人なのに、ターザンさんのようなよこしまな我欲が全然感じられない。ターザンさん批判じゃないですけど。

——ダハハハ！　どうもターザンとつながりますね（笑）。

菊地　青春っぽいんですよね。たしかご年齢は35歳位でしたか、ロストジェネレーションですね。レイブ感と青春感。PRIDEの末期はPRIDEファンのレイブでした。完成された完璧なモノというのは、効力があるときは「うわーうわーすげー」と言わせて、本当の姿が見えませんが、時が経てばキャラクターがはっきりしてきます。佐藤さんへの批判でもなんでもなく、違った作風のポスト・佐藤の出現が待たれますし、団体側は煽りVが持つ力をイマジネーションを駆使しながらコントロールするべきです。試合後に選手の紹介Vが流れるとか、おもいっきり短くするとか、フォームを全試合同じにするとか、いろいろあると思うんですよ。

——そこに我々も期待したいですね。今日はありがとうございました！

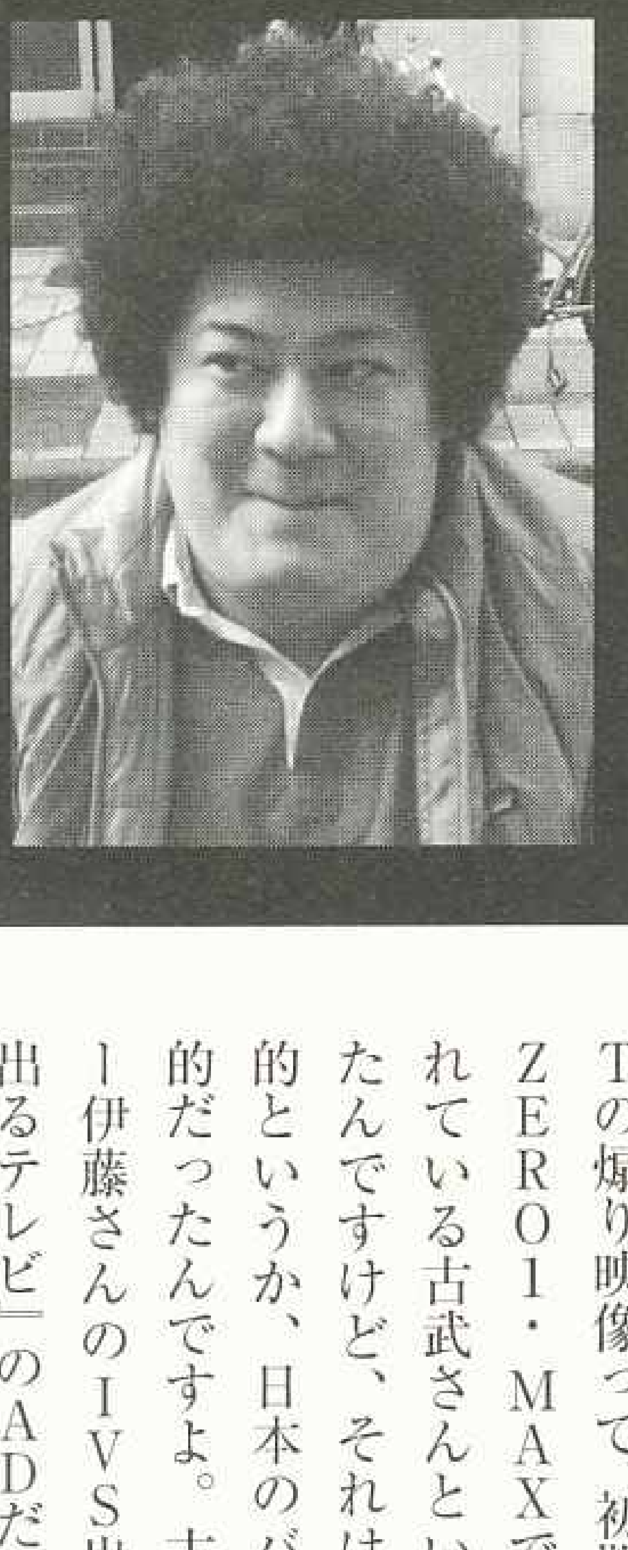
【08年4月7日／都内・菊地成孔氏の事務所にて収録】



煽りVとは何か？

"模倣の天才"が"煽りV"を語る

『戦極』の煽りVが作りたいです。それっぽいのを作る自信はあるんで！



プロレスラー＆DDTテック代表

マッスル坂井

プロレス界で"煽りV"といえば、やはりこの人、マッスル坂井の登場だ。プロレスラーとして以外に、映像制作などを手がけるDDTテック代表として自らも煽りVなどを制作し、『マッスル』では主宰者として煽りVも含めた総合演出を務める坂井。昨年暮れに放送された『マッスル牧場Classic』の最終回では「煽りビデオGP」なる企画も敢行するほど、深いこだわりを持つ坂井が語る"煽りV"とは？

聞き手／阿修羅チョロ

――今回は、実際に煽りVを作ったり、選手として煽られたりもしているプロレス界唯一の存在でもある坂井さんに「煽りV」について語ってもらえればと思っております。

坂井　よろしくお願いします。

――坂井さんは以前から佐藤大輔さんの煽りVとかを、かなり評価されてましたけど、プロレスの煽り映像って、格闘技のそれともまた違うところもあると思うんですよ。

坂井　プロレスと格闘技は違いますよね。WWEがちょっとしたブームになってからは、どこの団体もオープニングの映像とか、なんでもかんでもWWEのようなものを目指すみたいな風潮が凄くあったと思うんですよね。編集とか映像の加工とかでも。でもWWEの煽り映像って、結局、雰囲気だけで、確かにカッコいいんだけど、あんまり意味がわかんないのが多いんですよ。

――あ～、それはあるかもしれないですね。

坂井　それで、ボクが所属するDDTの煽り映像って、初期の頃は、いまZERO1・MAXで映像を担当されている古武さんという方が作ってたんですけど、それは非常にテレビ的というか、日本のバラエティ番組的だったんですよ。古武さんはテリー伊藤さんのIVS出身で『元気が出るテレビ』のADだった人なんで。

――へぇ～、そうなんですか。

坂井　要はマッコイ斉藤とかと同じ穴のムジナというか、後輩ですよね。だから、そういうテリーイズムがあって、前にサムライTVでやってた『チャンネル01』なんか完全にドS番組でしたからね（笑）。

――あ～、いまは引退した山笠Z信介選手とか、醤油を一気飲みさせられたり、かなりムチャさせられてましたからね（笑）。

坂井　半分、死にかけてたりしてましたからね（笑）。そういうのを平気でやるような人たちで。だから、へんな言い方だけど、『ガチンコファイトクラブ』とか『浅ヤン』とか、そういうのがウケてた時代だったんですよ。WWEの登場とともに、同時にプロレス的なバラエティ番組みたいなのが日本で注目されつつあったと思うんです。日本にとってのWWEは、『ガチンコファイトクラブ』とか、『浅ヤン』のモーニング娘。のオーディションみたいなものだと、ささやかながら言われていた時代で。

――そういう番組もそうですし、「モー娘。はプロレスだ」とか言う人も多かったですよね。

坂井　ですよね。そういう中でボクなんかが思うのは、プロレスはスポーツっていうよりもドキュメンタリー・バラエティという感じなんですよね。

――プロレスはバラエティであり、ドキュメンタリーであると？

坂井　そう思ってるし、そっちのほうが合うんですよね。ドキュメンタリーっぽいバラエティって言ったら、ずっと人気があるのがフジテレビの『めちゃイケ（めちゃ×2イケてるッ！）』とかじゃないですか。ほかのプロレスと比べたらWWEはおもしろいかもしれないですけど、でも番組としては『めちゃイケ』のほうがおもしろいと思うんで。やっぱり、WWEでビンス・マクマホンと

いう社長が「ユー・ファイヤー!」ってクビを宣告するよりも、日本は橋本(真也)さんの「負けたら即引退スペシャル」のほうがしっくりくるんですよ。あのときは、おちまさとがプロデュースしたんですよね?

——そうでしたね。

坂井 だから、煽りVとか、そのVTR単独ではなくて、あくまでも企画なんですよね。だから、制作者と映像を作ってる人が意思の疎通が取れてれば取れてるほどいいものができるんです。PRIDEでの佐藤さんの煽りVもそうだったと思うんで。

——DREAMの映像とか演出面はいろいろとたいへんみたいですけど、PRIDE時代は完璧に意思の疎通は取れていたでしょうね。

坂井 ですよね。そういう意味では手前味噌なんですけど、しっかりした煽りVを流し続けているZERO1とDDTは残ると思うんですよ。

——じゃあ、『ハッスル』の映像はどうかって言われたら、ボクはそういう映像ではないと思うんで。

——『ハッスル』の映像はなんと言えばいいんでしょうね(笑)。

坂井 なんなんですかね? 煽りVとも違うと思うし。

——試合の煽りとか意味合いを伝えるというよりは、サブストーリーって感じじゃないですか。

坂井 あ〜、そんな感じですよね。

——煽りVっていうのは会場はもちろんですけど、テレビ中継があってこその部分もあると思うんですが、そのへんはいかがでしょう?

坂井 いや、そこはそんなに関係ないと思いますね。とくに『マッスル』は意識してるんですけど、要は2時間だったら2時間、1時間だったら1時間のバラエティ番組をライブでやってます、みたいなのが理想ですから。生で撮ったものをライブで見せるっていうおもしろさだと思うんで。ZERO1もけっこうそうだと思いますね。そこは格闘技とプロレスの違いでもあると思うんですけど。

——プロレスのほうが、いろんな意味で全体的な構成をしやすいところはありますからね。

坂井 へんな話、総合のイベントだったら、全試合秒殺とかになって、2時間の作品を予定していたのに、半分で終わってしまう可能性もあるわけじゃないですか。

——そこは煽りVに限らず、坂井さんのように全体的な演出面を考えなきゃいけない人にとっては大きな違いですよね。

坂井 そうなんですよ。でも、プロレスの煽りVっていえば、最近は新日も気合い入ってますよ。

——それは気づきませんでした。

坂井 このあいだの中邑(真輔)さんと棚橋(弘至)さんのIWGP戦って凄く評判がよくないですか?

——観た人は、みんな口を揃えて「よ

中邑さんと棚橋さんのIWGP戦の煽りVは凄くよかったらしいです

かった」って絶賛しますね。

坂井 あの試合の煽りVが凄くよかったらしいんですよ。

——え、そうなんですか。

坂井 新日本の「ウッドベル」っていう映像関係をやってる鈴木さんって方がついに〝ボーイズ・ラブ〟っていう概念を知ったらしくて(笑)。

——中邑vs棚橋戦の煽りVにボーイズ・ラブが落とし込まれていたと?

坂井 そうみたいなんです。それがピタッとはまったらしくて。なんか二人の気持ち悪い部分だけを取り上げて、それこそボーイズ・ラブな感じだったみたいで(笑)。

——へぇ〜、それは観てみたいなぁ。

坂井 で、いま新日本はZERO1と対抗戦をやってて、それも盛り上がってるらしいじゃないですか。

——現場に行った人に話を聞くと、凄く盛り上がってるみたいですね。

坂井 じつは、あの対抗戦はリング上だけじゃなく、煽りVでも対抗してるんですよ。

——ほぉ〜、それこそDREAMでのTBSサイドと佐藤さんのチームのような主導権争いがある、と?

坂井 そうみたいです。新日の大会では新日の人が作る、ZERO1でやるときはZERO1の人が作ってって感じで。「オマエらの煽りには負けねえ」って。

——舞台裏でもかなりヒートしているわけですね(笑)。

坂井 そうらしいです。3月30日って、前田さんの『THE OUTSIDER』とか、自分も出させてもらった『GOKKO』とか、いろいろ興行がありましたけど、そういう煽りV効果もあって、一番盛り上がったのは新日本だったみたいですよ。

——そうなんですか。中邑vs棚橋がよかったっていうのは『週プロ』とかでも書かれてましたけど、煽りVがよかったっていうのは、あまり触れられてないですよね。

坂井 だから、ボクが触れてみました(笑)。違う大会に出てて、まったく関係のないボクが言うから信憑性も高いと思うし。

——そうですね(笑)。

坂井 でも、ボクの周囲は「新日本

『マッスル牧場Classic』では「煽りビデオGP」なる企画を敢行!



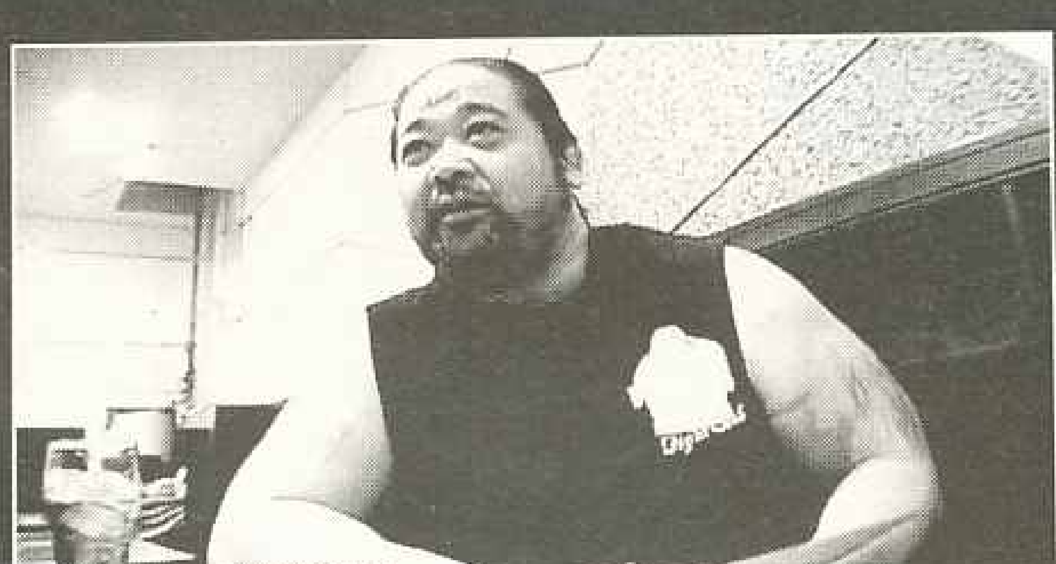
残念ながら昨年末で終了してしまった『マッスル』の地上波番組『マッスル牧場Classic』(テレビ埼玉)。記念すべき(?)最終回として坂井が企画したのが、プロレス界最強の煽りビデオディレクターを決める「煽りビデオGP 2007」だ。



最強の煽りVディレクターを決めるべく、坂井が自らとともに選んだのは、大日本プロレスの映像を手がける中村一徳氏、新日本から『マッスル』まで幅広く活躍する佐古俊介氏、暗黒組織666の映像&構成を手がけるセラチェン春山氏、サムライTVの人気番組『インディーのお仕事』担当の北島清次氏の5名。誰が一番煽れんのか?



この「煽りビデオGP」は各ディレクターが抽選で選ばれたマッスル戦士2名の煽りVを3分程度で制作、それぞれが自己採点し、一番点数が高かった人が優勝というきわめて特殊なルール。"模倣の天才"坂井は佐藤大輔テイストあふれまくりの煽りVで勝負に出るも、残念ながら優勝はならず(ちなみに坂井の自己採点は95点)。



初代煽りビデオGP覇者は自己採点96点の北島氏。その内容はディーノvs趙雲戦の見どころを日頃お世話になっているターザン後藤に語ってもらうというシンプルなもの。後藤の暴走トークはもちろん、この番組は必見です! 頑張って映像を入手せよ!

佐藤大輔さんが煽りVを作ったらおもしろいと思う団体はノアです！

の煽りVが凄いことになってるらしい」って声がホントに多いですから。どっちかっていうと制作者側が言ってるんですけど（笑）。

——自画自賛してるわけですか（笑）。そういえば、去年5月に越中さんがIWGPに挑戦したときの煽りVもよかったですからね。

坂井　ケンドーコバヤシさんがナレーターをやったヤツですよね。

——そうです。あの煽りVは越中ブームっていうのを再検証して、なぜここに登場するのかっていうのを全部説明して、観客もわかっちゃいるけども、越中さんが一言発するごとに会場は大盛り上がりで、いちいち腑に落ちる内容というか。

坂井　ここ最近考えてたんですけど、いま言ってた〝腑に落ちる〟っていうのがポイントじゃないかって。〝腑に落ちる〟っていうのが凄い大事だと思うんですよ。煽りVとかにも通じると思うんですけど。

——まあ、〝腑に落ちない〟煽りVとかもけっこうありますからね（笑）。

坂井　そうでしょ。だから、〝腑に落ちる〟ってことは、たぶんエンターテインメントだと思うんですよ。

——なるほど。それは〝納得〟とも違うんですか？

坂井　納得というか、逆に私小説とかって腑に落ちないじゃないですか。みんな書きたいこと書いてるだけだし、腑に落ちなければ落ちないほどいいと思うし。でも、エンターテインメントなものっていうのは、ある程度、腑に落ちないといけないと思うんですよ。

——ズバリ言って、TBSの格闘技番組の煽りVは腑に落ちないことが多いですからね（笑）。

坂井　全然、腑に落ちないでしょ。この前のDREAMの中継でも、まだブランドが確立してないのに「DREAMをかなえる」とか「DREAM、DREAM」言いすぎだよ、とか思ったし（笑）

——会場での煽りVは違ったんですけどね。ナレーションもおなじみの立木文彦さんでしたし。

坂井　そうだったみたいですね！

——ざっくりと説明すると、会場ではオープニングで『HERO'S』の〝☆〟のマークとPRIDEの〝イナズマ〟のマークが交差して〝DREAM〟になるような映像だったんですよ。

坂井　なんで、それを放送しないんですか？

——いろいろと問題が山積みみたいで。その映像を見たら一発で、どういう大会かわかるし、見たくなるんですけどね。そういう意味では、地上波で使われなかったのは腑に落ちませんでしたけど（笑）。

坂井　TBSの格闘技番組って「家族のために」的なモノばっかりだったじゃないですか。あのノリだったら、青木（真也）選手とかもはまんないじゃないですかね。

——相性は悪いかもしれませんね。

坂井　そういう意味では佐藤さんっていうのは、ちゃんと選手のキャラクターというか、信用してるのが伝わってくるんですよね。それに「家族のために」っていうのがあまりないのは、結局、純粋な競技としての総合格闘技を信じてるからだと思うし、それぞれの選手のパーソナリティを尊重してるから、あんまりよけいなことを言わなくて済むというか。それがTBSにはないんですよね。

——そうかもしれないですね。

坂井　青木選手に対しても「これじゃネタになりづらいな」ってTBSの人たちが思ってるのは手に取るようにわかりますからね！（笑）。

——アハハハハ！

坂井　まあでも、TBSでは亀田ファミリーの成功になぞらえてやると、あなっちゃうんでしょうね。

——なんだかんだあっても、亀田ファミリーは視聴率を獲りますからね。

坂井　それはわからなくもないんですけど、でもなんで違う方向というか、違うノリでやろうとしないんですかね。

——同じ地上波中継でも、先ほど話題に出た、おちまさとさんがプロデュースをした破壊王の即引退スペシャルは視聴率も高かったし、企画としては成功したじゃないですか。当時のプロレスファンからはテレビ局先導で引退が決められようとしたってことで批判の声もありましたけど。

坂井　でも、結果的には大成功ですからね。まあ、その番組を例に出すまでもなく、プロレスとバラエティの相性っていいと思うんですよ。ただ、プロレスと各テレビ局のスポーツ局との相性が悪いだけで（笑）。

——あ～、それはありますね（笑）。

坂井　だって、蝶野さんの最近の『ガキの使い』での活躍ぶりとか凄いじゃないですか。セミレギュラーみたいな感じになってますからね（笑）。

——中西さんとかも『さんまのスーパーからくりTV』でプチブレイクしましたし、TBSでも『オールスター感謝祭』とかプロレスラーは毎回活躍してますからね（笑）。

坂井　そうなんですよ。ノアさんとかもスポーツ局ですけど、あれがよくないんじゃないかって。

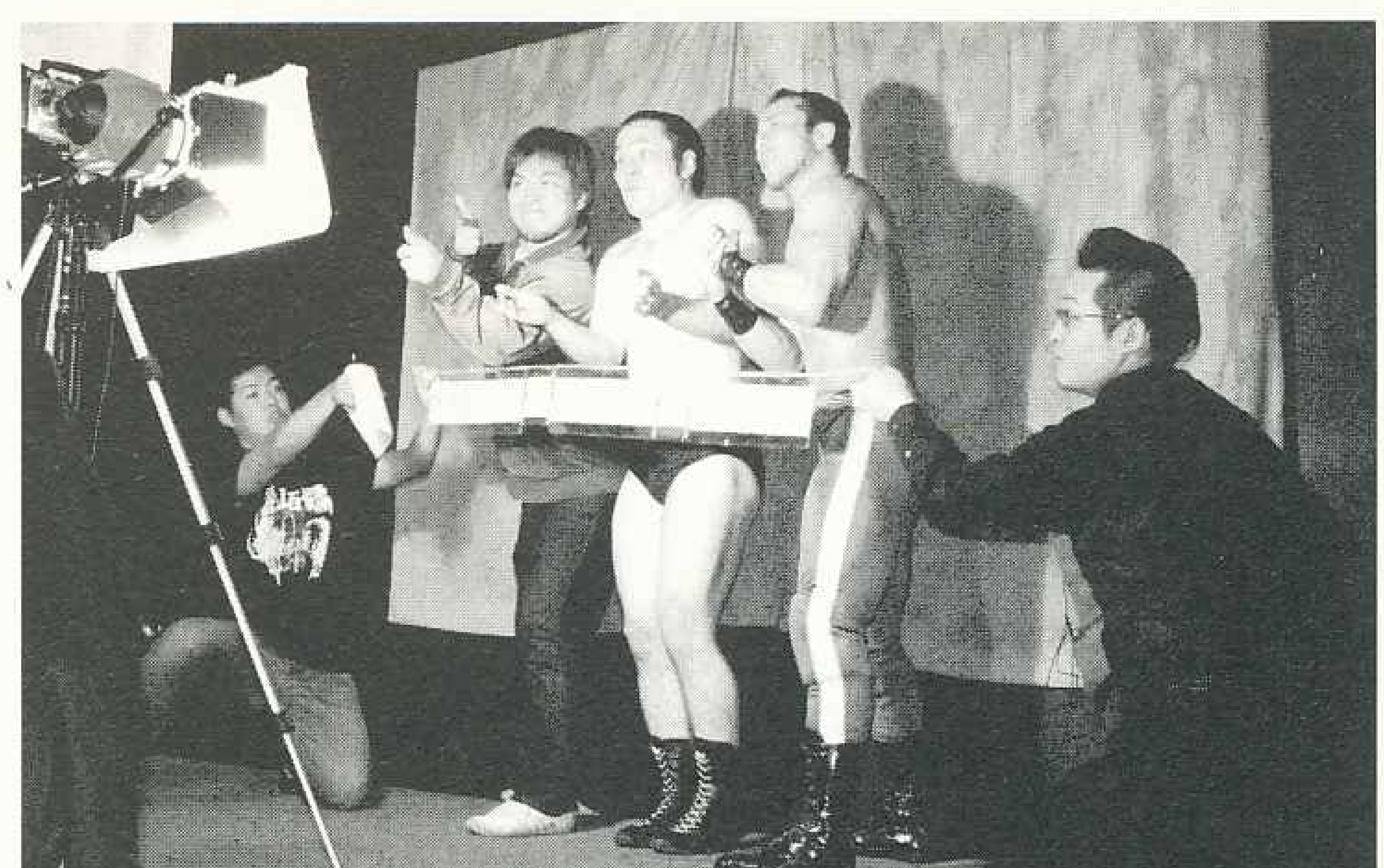
——テレ朝もそうみたいですけど、スポーツ局は頭が固いところが多いっていいますからね。

坂井　そうなんですよね。へんな意味じゃなくて、三沢さんは、いまの



佐藤大輔氏に撮ってもらいたいプロレス団体はノアという坂井。坂井も対戦経験のある森嶋以外にもキャラの濃い選手だらけのノアだけに素敵な煽りVとなることは間違いなし。それが観られたら21世紀も終わっていい!?

煽りVとは何か



06年9月の『マッスル11』では、大会中にWWEの煽りVっぽい映像を収録し、直後にその映像を観客に披露するという実験的な試みを行なった坂井率いるマッスル戦士。こちらの大会は翌日の追加公募と合わせ、すでにDVD化されているので興味のある方はゼヒ。魚を焼く網をカメラの前に置いて金網マッチに見せたりとか、そのアイデアの数々に驚かされること必至!

立場じゃなくなったら、もの凄くおもしろいことができると思うんですよね。

――『ザ・リーブ』のコマーシャルに出演中の三沢さんを見ても、ホントにイキイキしてますからね（笑）。

坂井　三沢さんのコマーシャルがあると思うとノア中継はチャンネルを変えられないですからね（笑）。そういう意味では、いい煽りVになってるかもしれない。

――そうですね（笑）。

坂井　でも、最近のリング外とか見てると、格闘技のほうがプロレスっぽくなってる気がしません？

――それはありますね。『戦極』での乱闘騒動だったり、K―1ワールドユースでのHIROYAと藤鬥嘩裟の試合前のシュートな舌戦だったり、格闘技のほうがプロレスよりもプロレスっぽいというか。

坂井　逆にいまのプロレス界って、スマートにしてたほうがマスコミに取り上げられるんじゃないかっていう風潮があるような気もするし。それは逆だろって思うんですけど。

――プロレスの魅力って、やっぱりスマートっていうよりはハレンチとかスキャンダルですよね。

坂井　ボクもそっちだと思います。それこそ、小川直也vs吉田秀彦っていう試合なんかはホントはプロレスのリングでやらなきゃいけないと思うし、佐藤さんが作ったような煽りVはプロレスが一番はまると思うんですよね。ちゃんとプロレスの中継枠を取って。

――なんとなくわかりますけど、詳しく説明してもらえますか？

坂井　やっぱり、総合格闘技ではなく、プロレスのほうがもっとゆとりを持って二人の闘いを見せられると思うし。さすがに、総合ルールで10分前後で試合が終わっちゃうと、さすがにズルッといっちゃうじゃないですか。まあ、しょうがないんですけどね（笑）。

――総合は秒殺も頻繁にありますからね。

坂井　でも、あれだけ煽ればプロレスでも絶対におもしろいですよ。もっと言うなら、あの煽り映像で、試合が四天王プロレスだったら相当おもしろかったと思いますよ。

――確かに（笑）。ちなみに、佐藤大輔さんが煽りVを作ったらおもしろそうなプロレス団体って、どこかあります？

坂井　どうですかねぇ………（しばらく考え込む）。あ！ノアがいいと思います！

――ノ、ノアですか（笑）。

坂井　ノアしかないでしょう。だって、いろんな意味で幻想ありますもん。

――〝ノアだけはガチ〟ですからね（笑）。まあ、ガチという意味では、総合を撮り慣れてる大輔さんもやりやすいかもしれないですし。

TBSさんに「いつでも待ってます」とメッセージを送っておきます

坂井　森嶋（猛）さんのああいうケレン味のないファイトとかは、やっぱ佐藤さんの煽りVがはまると思うし、森嶋さんがビッグスクーターに乗ったうしろに佐藤さんが乗って映像を撮ってるのを想像しただけでおもしろそうじゃないですか？

――アハハハハハ！　ノアの青木真也は森嶋ですか（笑）・



まっする・さかい■本名・坂井良宏。1977年11月5日、新潟県出身。早稲田大学在学中に映像班としてDDTに関わり、気がつけばプロレスラーに。現在はプロレスラーとしての活動以外にも、お笑いイベント、映画監督、雑誌コラムなど多方面で大活躍中……だったが、今回の取材直後に智歯周囲炎により緊急入院&手術。一日も早い回復をお祈りします。186cm、120kg。

坂井　森嶋さんが武道館のメインを終えて号泣してる画とかも観たいですし、あとは田上（明）さんが実家でやることがなくて「ずっと、この部屋で一日中寝てた」とか（笑）。

――石田選手の煽りVで、そんな場面があったような気もしましたけど、田上さんがやったら、それはそれで画になるでしょうね（笑）。

坂井　ほかにも三沢さんとか小橋（建太）さんとかキャラクターの宝庫ですし、アスリートも多いですからね。それにノアって一応プロレスラーのボクから見ても「スゲェな！」って思える団体ですからね。

――それは本気で実現してほしいなぁ。逆に坂井さんが煽りVを撮りたいイベントとかってあります？

坂井　昨年暮れに『マッスル牧場Classic』で、ボクをはじめとしたプロレス界を代表する煽りVディレクター5人で「煽りビデオGP」っていう企画をやったんですよ（49ページ参照）。

――自分で言いますか（笑）。坂井さんのほかに、新日本や大日本、サムライTVの煽りVディレクターらで、最強の煽りVディレクターを決めようという番組ですね。

坂井　そうです。ご覧になっていただけた方なら、ボクらが総合格闘技の煽りVを作ったら、まあまあおもしろいモノが作れるんじゃないかなってわかってもらえるんじゃないですかね。フフッ（自信たっぷりに）。

――凄い自信ですねぇ（笑）。確かに、あの番組を観た人なら、選手という素材は抜きにしても、優秀なディレクターなら、おもしろい作品や感動する作品を作れるんだなって思わされましたからね。

坂井　でしょ。TBSさんに「いつでも待ってます」とメッセージでも送っておきましょうか（笑）。

――「DREAMの煽りVを作ってくれ」と連絡が来る可能性もあるかもしれませんからね。可能性は非常に低いでしょうけど（笑）。

坂井　（聞く耳をもたず）ぜひ我々に撮らせてほしいですよ！　私も一応、DDTテックという映像関係の会社もやってますし、正直、外貨を稼がないといけないですからね。

――そういえば、『戦極』の煽りVはどう考えても佐藤大輔テイストを狙ってるとしか思えないんですよ（笑）。

坂井　そ、そんな、ボクらに言ってくださいよぉ！

――アハハハハハ！

坂井　まさにボクらの仕事じゃないですか、それ。いくらでも、そっくりに撮りますし、絶対にうまくできる自信ありますよ！　それに、プロレス&格闘技の映像ディレクターとしては、キャラクターだけだったら業界内でのバリューもありますからね！（キッパリ）

――まあ、そうですよね（笑）。

坂井　無理だったら、選手として出るっていう手もありますけどね（笑）。

――そっちも狙ってますか（笑）。では、マッスル坂井と『戦極』のコラボの実現を期待してます！

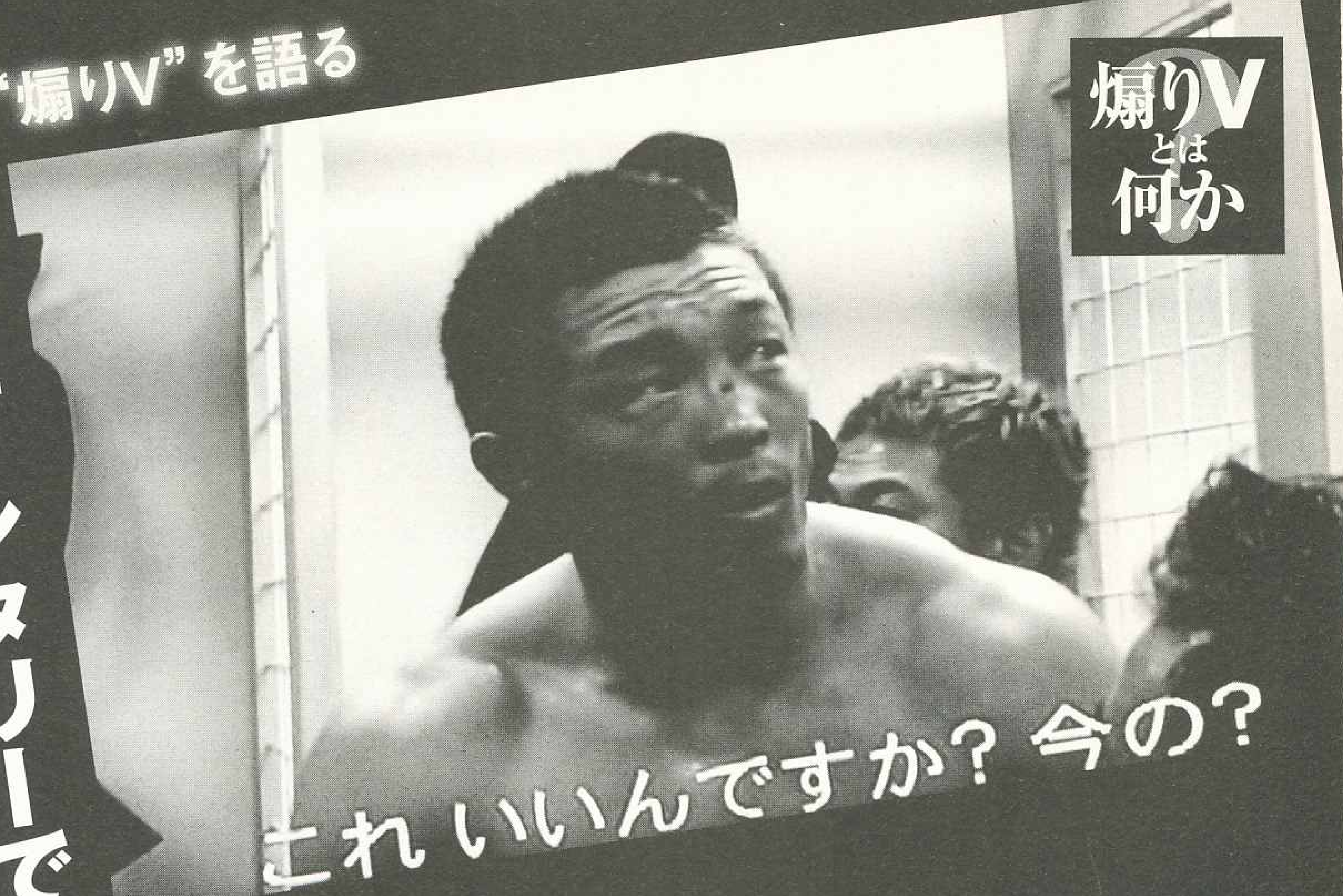
坂井　……DREAMもやりたいんだけどなぁ。

【08年4月5日／都内某所にて収録】

煽りVとは何か

ノンフィクション
映像の鬼才が"煽りV"を語る

ドキュメンタリーで重要なのはメタファー（暗喩）があるかどうかなんです



映画監督／ドキュメンタリー作家

森達也



今回は日本を代表するドキュメンタリー作家である森達也氏に、佐藤大輔氏が制作しPPV放映された『ドキュメンタリーやれんのか！ 完結編』をご覧いただき、独自の視点で分析してもらいながらお話をうかがった。日本屈指のドキュメンタリストはそこに何を見たか？

聞き手/真下善之

――今回は〝煽りV〟についてお話をうかがいたいんですが、森さんは佐藤大輔という方のことはご存知ですか？

森　はい。ドキュメンタリーを撮ってる知り合いを通じて名前は知ってましたね。あとは『ＹｏｕＴｕｂｅ』で格闘技映像を見てるときに名前を見かけたり（笑）。それと何かのブログで「佐藤大輔は誰にも越えられない！」みたいなことが書かれているのを目にした記憶もありますよ。

――「佐藤大輔は神！」とかですね（笑）。それで今回は、ドキュメンタリー作家である森さんに、佐藤さんが監督して、ＰＰＶで放送された『ドキュメンタリーやれんのか！ 完結編』をご覧いただきました。

森　おもしろかったです。映像的な話から始めれば、編集自体はアメリカンテイストだと思いました。カットバックがもの凄く早くて、いろんな映像を、文脈や時系列に合わせずに畳み込むようにインサートするあたりが。

――凄く現代的な編集ですよね。

森　だから全体的にミュージッククリップのような印象も受けました。アメリカのドキュメンタリーに多いスタイルです。最近だとマイケル・ムーア（★注1）に代表される手法ですね。

――『ボウリング・フォー・コロンバイン』や『華氏９１１』をヒットさせたマイケル・ムーア監督っぽい、と。

森　編集のテイストという意味ですよ。べつにムーアでなくてもいいのだけど、名前を言えば誰もが知る人だろうからたとえに使いました。たとえばドキュメンタリーにおける実写の映像にいきなりアニメーションを挟んでくるような手法です。音楽にたとえるならメロディよりリズム重視という感じかな。

――わかりやすくたとえていただいて恐縮です（笑）。

森　僕は映像作家の中ではかなり映像のセンスのないほうだから、偉そうに言える立場じゃないんだけど（笑）。こういうアメリカ的な、というかミュージッククリップ的なドキュメンタリーの対置としては、ヨーロッパや日本の伝統的なドキュメンタリー映像がありますよね。基本は長回し。泥臭いものが多いんです。だから、そういうものしか観てない人にとってはかなりシャープで斬新な感覚の手法でしょうね。

――確かに格闘技・プロレスというジャンルでもなかなか目新しい感じでしたね。

森　こういうテイストのドキュメンタリー映像は、これまで格闘技・プロレスのジャンルでは作られてこなかったでしょうね。それと客に必要以上に媚びていないこと。つまりテレビ的じゃないんです。これも感じました。ただこれは媒体特性を考えないといけない。個人的にはおもしろかったんですが、格闘技に興味のない外部の人が観たときについてこれるのかな？　とは思いました。作り手が格闘技ファン以外を全然、意識に置いてない印象もあって。

――煽りＶは誰にもわかりやすく作ってると思うんですけど、こちらは意図的にマニア向けに、非常に濃く作ってますよね。

やっぱり思いが薄ければ 映像も薄いものになってしまいます

森　そうですね。そういう意味では、割りきってやられてるのかなって。やっぱり作り手である佐藤さんの「自分が観たい」っていう視点や欲望を強烈に感じますし。たとえばファンなら、誰しもバックステージに興味がいくじゃないですか。そのあたりを濃密に入れ込んであるし、もし僕が撮るとしても、ああいうかたちにするでしょう。そこは共感できますね。

——石田（光弘）選手に負けたギルバート・メレンデスが「ファーック!!」って絶叫してたりして（笑）。

森　うん。あそこは印象に残るよね（笑）。敗者はそっとしておこうみたいな日本的な美学があるじゃないですか。でも本当は負けたほうにこそドラマがあるし、プロなんだからそのくらい我慢しろよってずっと思っていた。だからよくぞ撮ってくれたとは思いますよ。あとはやっぱり、一連の秋山（成勲）選手のシーン。試合前や、相手の三崎（和雄）選手が出陣するところとか、試合のハプニングから試合後まで丁寧に追ってるでしょう。秋山選手関連のシーンだけを切り取っても一つのドキュメンタリーとして成立できそうですし、素晴らしいと思いますよ。その一方で、斬新な映像感覚もある。

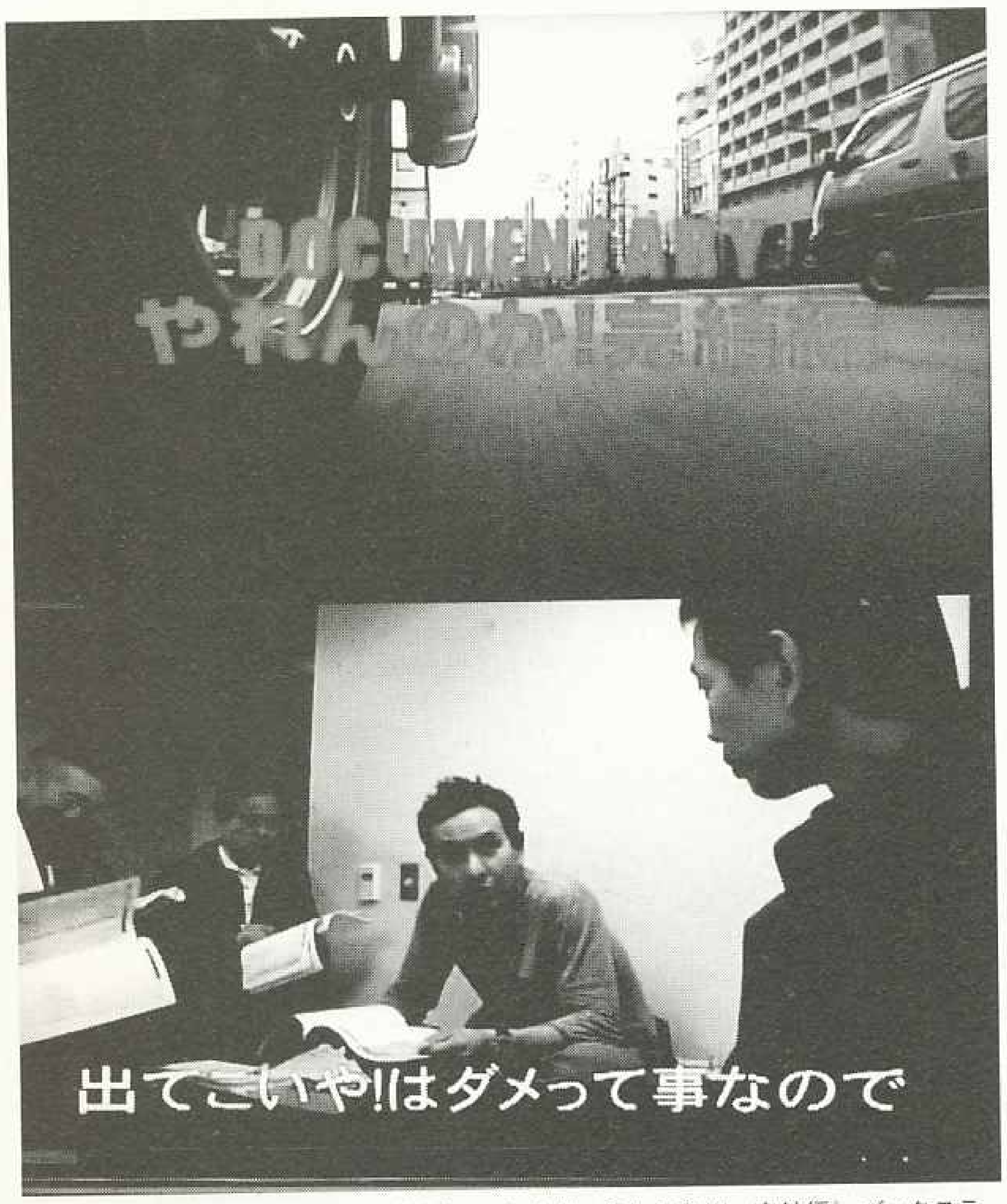
——佐藤さん的な感覚のドキュメンタリーというのは世界的には多いんですか。

森　少なくないですよ。やっぱりムーアの影響は大きいのかな。

——マイケル・ムーアがドキュメンタリーブームの立役者と言われてることに関して、森さんは否定的な発言もされてますね？

森　まぁ、ちょっと屈折した否定なんですけどね（笑）。でも、昔のムーアの作品はホントに秀作なんです。自動車工場の従業員の解雇問題をテーマにした『ロジャー&ミー』は大傑作でしたし。アメリカの銃問題を取り上げた『ボウリング・フォー・コロンバイン』までがギリギリですね。個人的にはどんどんダメになってきている。

——作品より、ムーア自身がメディアになってしまった、と。



知られざる大晦日の真実に迫った『ドキュメンタリーやれんのか！　完結編』。バックステージで繰り広げられる普段は見られない選手の人間模様が、"煽りVアーティスト" 佐藤大輔独自の視点で切り取られている。

森　アメリカの医療保険問題を取り上げた『シッコ』にしろ、イラク戦争の現状を取り上げた『華氏911』にしろ、その問題提起は本来ならABCやCBSとか、あるいは『ニューヨーク・タイムス』や『ワシントン・ポスト』のような既成のマスメディアがやるべきことなんです。でもその既成メディアがとくに9・11以降、機能停止の状況になってしまっている。だからムーアの主張が注目されるという構図があるし、そこに自分の居場所を作ってる感じがある。あとは、最近の作品に関していえば、メタファー（暗喩）が非常に乏しくなっていると思いますね。

——メッセージ性のほうが強調されてしまって、直接的な表現が多くなっている、と。

森　うん。メタファーって、普遍性を持てば持つほど万人の胸に届くようになるんですよね。逆にマニア向けにするとメタファーは浅くなると思うんです。おそらくこのあたりのことは、佐藤さんも悩みどころだったんじゃないですかね。

——おもしろいのは試合だと完全にヒールの秋山が、ドキュメンタリーになると一転して秋山に感情移入して見たくなるような構成になってたことなんです。

森　もちろん、ドキュメンタリーでは作り手の主観や思い入れをどこかに託すわけですから。そう考えると佐藤さん的な主人公は秋山だったということでしょう。とくに控室で秋山が自分の試合映像を見て、最後の顔面への蹴りに関して「これ、いいんですか？」って聞いてる場面、あれは本当に鳥肌が立つくらい凄い映像だと思いますよ。

——〝魔王〟の底知れない本性を、かいま見たって感じで。

森　そこで妙なバランスをとろうとしてないのがよかったと思います。実際に作品としての厚みも増してましたし。

——もう一つ、煽りVのお話もお聞きしたいんですが。知識がない人でも、煽りVを見れば試合の方向性や意味が理解できて、便利ではあるんですけど、煽りVがないと楽しめないファンが増えてるのは心配な部分もあるんです。

森　それはね……、しょうがないんじゃないかなぁ～。

——ダハハハハ！　しょうがないですか（笑）。

森　やっぱり足し算なんですよね。目的は文字どおり〝煽り〟ですから。エンターテインメントっていうのはちょっといいと思ったらドンドン加えていくし、見た目はどんどん豪華になっていく。ただし、あるときに飽きるんですよね。でもそれは飽きられたときにまた考えればいいことで。飽きられる前に飽きられたらどうしようとか考えてもしょうがないから。

——たとえば、古舘伊知郎さんの実況も革命的だったんですが、古舘さんじゃなくなったときって凄い喪失感はありましたね。

森　そこもだんだんと慣れていきますから。佐藤さんもそうですけど、やっぱり思い入れですよ。実際に古舘さんはあのとき懸命にプロレスを研究してたと思いますから。

——森さんは著書の中で、「すべての映像には、作家の主観が表われる」とおっしゃってましたけど。

森　やっぱり思いが薄ければ絶対に映像も薄くなっちゃいます。そこは似たようなものを作ろうとしてもコピーしようがないですね。

——古舘さんも過剰な主観が入ってたからこそ気持ちよく乗れたっていうのはありますよね。

森　だから、時代ごとにいろんな才能のある人が現われていろんな足し

映像は全体的にリスク管理が強くなりすぎているきらいがあります

算をするわけで。それはいいんじゃないのかな。でも表現って究極的には引き算ですよ。そういえば……佐藤さんはフジテレビを辞めたのはいつ頃なんですか？

——一昨年の10月くらいですけど、それが何か……？

森　いや〜、あのフジテレビを辞めるということだけでね。映像業界の人間は全員、頭を垂れますよ！

——ダハハハハハ！　そういうもんですか（笑）。

森　いまや日本の企業で一番給料が高いと言われているところですよ。だって、〝生涯賃金6億〟とか言われてるじゃない？　そういう部分を捨ててまで「撮りたい。作りたい」という気持ちがあるのはすばらしい。

——それだけに格闘技に関しては妥協したくないっていう気持ちも強いでしょうし。いまはTBSの中継チームの中で、悪戦苦闘しているようですが、やはりテレビ局のような組織の中では作家性を貫くのは難しいことなんでしょうか？

森　それは、無理でしょう！（キッパリ）。

——あ、ズバリ無理ですか。

森　ただね。よくみんな勘違いしてますけど、作品にとって規制というのは、あったほうがいい場合が多いんですよ。僕が最近、テレビで映像をやらない理由は「規制があるから」と思われがちなんですが、そうではないんです。むしろ規制があったほうがそれをどうクリアするか？　どう裏をかこうとか工夫のしがいが出てくるので、結果的にクオリティが高くなるんです。映画に限らず、たとえば文学とか音楽とか、言論の自由がない国で時おり珠玉のような作品が生まれることってありますよね。

——最初から自由だったら、自由の意味を考えることもないですし

森　まぁ、僕の場合はそもそも作品テーマ自体がぶつかりすぎちゃうからテレビではできないんだけど（笑）。

——天皇制みたいな、デリケートな企画ばかり扱われてますから（笑）。佐藤さんもDREAMの会場で流した煽りVと、地上波では、ナレーションや映像のニュアンスを変更せざるをえなかったみたいです。

森　地上波では、毒気のある部分を中和しちゃってるんでしょうね。でも適度の毒って大切です。「その部分がイヤだ」という人もいるんでしょうけど、それが全部漂白されたらつまらないでしょう。

——森さんも以前、作ったドキュメンタリーにテレビで放送直前に急遽、「モザイクを入れろ」という指示があったとお聞きしました。

森　精神障害者を撮ったときの話ですね。僕は極力、モザイクは入れたくない主義ですから、撮影された被写体の了解もちゃんと取っていたんですが、放送寸前でプロデューサーから「ダメだ！」と鶴の一声が入って、全部にモザイクを入れることになってしまった。もう僕は「どうぞ好きにやってくれ」って状態でね。

——それは、ツライですねぇ。

森　ただ、それはテレビ局のプロデューサーなり責任ある立場の人間としては仕方ない。これで苦情が来たら自分の出世にも響くし、ひいては家族を路頭に迷わせることになるかもしれない。

——スポンサーなんかも含めて、そういう事情が複雑に込み入ってくるのが、テレビなんでしょうね。

森　だから単純な批判はできません。テレビは特別に影響力が大きいメディアですから。ただ、映像に関しては、とくにここ数年、全般的にリスク管理が強くなりすぎてるきらいはありますね。たとえば、公開中止になった映画『靖国 YASUKUNI』（★注2）の問題もそうでしょう。

——劇場への抗議や妨害行動などから、自粛する上映館が続出して、話題になってますね。

森　警戒しすぎな感じはありますね。韓国なんかであれば、あの程度の圧力ぐらいだったら上映しちゃうんでしょうし。

——逆に話題作りになって、プロレ



ドキュメンタリーの中には、"60億分の一の男" エメリヤーエンコ・ヒョードルとの試合を前にして一層ナーバスになっているのか、大きな身体を縮めるホンマンの姿も。その全体からかもし出される "異形" の雰囲気はほかの格闘家とは一線を画すものであり、森氏が興味をそそられるのも納得の存在感だ。

★注1＝マイケル・ムーア
1954年4月23日生まれ。アメリカ合衆国ミシガン州出身の作家兼映画監督。89年に、生まれ故郷の自動車工場が閉鎖され失業者が増大したことを題材にしたドキュメンタリー映画『ロジャー＆ミー』で監督としてデビュー。その後、アポなし取材をはじめとした独自の手法で笑いと批評精神にあふれた作品を次々と発表。02年、アメリカ銃社会の抱える問題点に迫ったドキュメンタリー『ボウリング・フォー・コロンバイン』を発表、カンヌ映画祭で特別賞を受賞。04年には、9月11日の同時多発テロ以降のアメリカ社会をテーマにブッシュ政権の実態を掘り下げたドキュメンタリー『華氏911』を発表、カンヌ映画祭の最高賞パルムドールを受賞した。アメリカ社会の銃・人種問題、あるいは企業の不正に対して鋭いメスで切り込んでいく気鋭のジャーナリスト。

★注2＝『靖国 YASUKUNI』
07年制作の李纓監督による97年から10年間にわたる靖国神社の取材に基づいたドキュメンタリー映画。1933年から終戦まで靖国神社で作られていた靖国刀の刀鍛冶職人と、終戦記念日を中心とした靖国神社の境内の映像が主に収録されている。08年3月に開催された香港国際映画祭では最優秀ドキュメンタリー賞を受賞。中国人監督による靖国神社にまつわる映画作品ということもあり、公開前からさまざまな注目を集め、文化庁による助成金問題や映画の公開中止問題、肖像権問題など内外で波紋を呼んでいる。

★注3＝『TOKKO ―特攻―』
07年公開の日系アメリカ人監督リサ・モリモトが第二次世界大戦で日本軍が編成した体当たり攻撃〝特攻〟の真実に迫ったドキュメンタリー映画。自分の亡き叔父が元特攻隊員だったことを死後に知ったリサは、叔父の足跡を追うべく日本を訪れ、親族や特攻隊員の生存者たちにカメラを向けてその体験談に耳を傾けていく。北米最大のドキュメンタリー映画祭で上映され、大きな反響を呼んだ。

★注4＝『ヒロシマナガサキ』
07年公開の日系アメリカ人監督スティーヴン・オカザキが原爆の被害に対する認識と関心を世界に呼び起こしたいという思いのもと、25年の歳月をかけて完成させた作品。監督がインタビュアーとなって広島原爆・長崎原爆の被爆者14名と、投下に関与した米国側の関係者4名に取材。原爆投下がもたらした悲劇を見つめ、核兵器の脅威を訴える貴重な記録映像や資料を交え、ヒロシマ・ナガサキの真実を描く。

★注5＝『A』
当時、テレビディレクターの森達也があくまでも中立的立場を固持しつつ、94年の松本サリン事件や95年の地下鉄サリン事件などで日本中を震撼させたオウム真理教（現・アーレフ）の広報担当者・荒木浩を被写体とし、社会とオウムの双方を撮り続けた98年制作のドキュメンタリー映画。森はオウムを〝悪〟として描くことを強要するテレビプロデューサーと衝突し、最終的に自主制作映画として本作品を完成させた。

ス的にいえばいいアングルというか（笑）。新聞の社説も全紙が『靖国ＹＡＳＵＫＵＮＩ』を取り扱うほどでしたし。

森　これは監督にも言ったのだけど、あの映画自体が掲げる問題提起そのものは、とくに強いものではないと僕は思います。反日とか反天皇制などのニュアンスで言えば、去年公開された『ＴＯＫＫＯ―特攻―』（★注３）とか『ヒロシマナガサキ』（★注４）のほうがよっぽど強烈です。ならばなぜ今回の作品がこれだけの問題になってるかというと、監督が中国人だからですよ。『ＴＯＫＫＯ―特攻―』と『ヒロシマナガサキ』の監督は日系アメリカ人ですから。中国人が靖国を撮ったというその部分で、まずは保守派や右翼が大騒ぎしている。まあ同時に、少し前にプリンスホテルが日教組の会場使用を直前に一方的なキャンセルをしたという騒動もあったけれど、危機管理意識が過剰になりすぎているから、こんな事態になってしまう。

――ちょっとでも先鋭的なイメージがついてると、リスクを回避する部分はありますね。実際、次回から佐藤さんはＰＰＶだけになるという話もあるようですし。

森　それもいいんじゃないかな。ある程度だったら規制も必要ですけど、あまりにも配慮しないと作れないようであれば、そこでグズグズ悩まずに違うフィールドで表現していくことも考えたほうがいいんじゃないかな？　佐藤さんも自由にやりたいことができるでしょうし。いずれは格闘技を題材にした映画を撮るのもいいと思うし。

――オウム真理教のドキュメンタリー『Ａ』（★注５）を発表するメディアがなかったことで、自主上映した森さんだけに説得力ありますね。そういう意味でＰＰＶはひとつの〝逃げ場〟になります。

森　ひと昔前を考えたら、そういう逃げ場はほぼなかったけど、いまはネットも衛星放送もあるわけだし、発表の場は作れますから。２時間に編集されたドキュメンタリー自体は、『やれんのか！』というイベントを超えてはない。あくまで、メイキングの範疇ですよね。やっぱりそこで僕なんかが考えるのはメタファーがあるかないかなんですよ。これはプロレスの見方にも通じるんです。（ジャイアント）馬場や（アントニオ）猪木の試合を観ながら、なぜ僕たちはあれほどに高揚したのか。やっぱりメタファーがあったからです。（ブルーザー・）ブロディとか（カール・）ゴッチとか、一時期の長州（力）とか前田（日明）とか、試合から何かを想起させてくれる要素が強いんです。名レスラーってみんなそうですよ。逆にメタファーを紡げないレスラーはどうしても強い印象を残せない。坂口（征二）とかジャンボ鶴田とか、圧倒的な身体能力は誰もが否定できないのだけど、試合の印象がどうしても薄い。



煽りVとは何か？

もり・たつや■1956年5月10日、広島県呉市出身。映画監督、ドキュメンタリー作家。98年にオウム真理教の荒木浩を主人公とするドキュメンタリー映画「A」を公開、海外でも高評価を受ける。現在はテレビ・ドキュメンタリー制作や、執筆活動を中心に活動。近著に「悪役レスラーは笑う」（岩波新書）、「死刑」（朝日出版社）など。

僕がドキュメンタリーを撮るなら悲哀のあるホンマンに焦点を当てます

――格闘技というワクを超えたもののメッセージまで、見えてくるかどうか。

森　いまの段階では格闘技のドキュメンタリー以上ではないわけで。そこに通じてさらに違うものが含まれているものも観たいですよね。たとえば、いまの社会のいびつさの問題であったり。それはなんでもいいんですけど。

――それこそ秋山成勲だったら、日本と韓国の問題が浮き彫りになるようなものとか。ちなみに、もし森さんが『やれんのか！』のドキュメンタリーを制作するとしたら、どこに焦点を当てますか？

森　うーん……（熟考して）。そうだなぁ。やっぱり気になるのは秋山と、あとは（チェ・）ホンマンかな。

――ほぉ～。森さんの撮るチェ・ホンマンは観たいですよ！

森　彼には興味がありますね。ホンマンは巨人症という部分や、私生活も含めて興味深いです。普通の格闘家よりも明らかに悲哀があるはずだし、アンドレ（・ザ・ジャイアント）なんかも日本人嫌いって言われてましたけど、じつはそうじゃなかったようですね。日本に限らずどこにいてもホテルからは一歩も出ないような日常だったようです。

――人間嫌いな部分とか。共通項はあるかも知れませんね。

森　異形のものだけが持つ悲しみのようなものを、格闘家の中ではホンマンが一手に引き受けてる感じがします。ホンマンがカメラや人目につくのを嫌がってるという部分はないですか？

――韓国でも取材場所がホテルのロビーだったのを個室に変更してほしいとお願いされたり。一般人には見られたくない感じでしたね。

森　いまの話を聞いても、もし僕が撮るんであったらホンマンですね。まぁ、こんなこと言っちゃいけないけど、佐藤さんも作家性をドンドン追求して表現する場所が限られてきた場合には、最終的にはＰＰＶすらもあきらめて、自主制作してほしいね（笑）。

――ダハハハハ！　相当にコクの深いものは作れそうですけど。

森　たとえば、冬木薫さんのドキュメントを撮るとかさ。

――うわ～!!（笑）。

森　冬木弘道と橋本真也を愛した女、非常に興味深いよねぇ。

――それは森さんに撮っていただきたいです。今日はありがとうございました！

【08年4月4日／都内・新宿の喫茶店にて収録】

＜RADICAL 特選劇場＞
船木誠勝の"対談シリーズ"でDREAMが10倍おもしろくなる!?


no.86「船木×田村対談」


no.87「船木×宇野対談」

●4.29『DREAM.2』ミドル級GPで対決する船木と田村の対談が、本誌No.86号で実現していた！ 船木は、エンジン全開で第二次UWF時代のイタズラ話や「よく目をつぶって車やバイクを運転する。それで死んだら運が悪い」という自らの奇行も次々に披露！ "偏屈者"田村も絶句の破天荒な対談は必読！

●本誌No.87には、何かと話題の宇野薫と船木の対談が実現！「僕には殺気が足りない……」と相談する宇野に、船木は「殺していいよ！」と断言！ はからずも"主催者推薦枠"でのDREAM参戦で、周囲から殺気を向けられている宇野。"死闘"に臨む宇野の心境は、この対談の中にある？

船木誠勝と田村潔司の超U級対談はRADICALで読める!!



注 No.92以降の「Kamipro」はこちらでは取扱いがありません。http://www.enterbrain.co.jp でお買い求めください。

バックナンバーは電話で注文できます!
03-5368-1797
販売元 (株)ダブルクロス 平日 13:00〜19:00

元祖！紙のプロレス BACK NUMBERはすべて50%OFF

特集 神秘とは何か？
no.14 780yen⇒390yen
佐山聡・大槻ケンヂ・プロボディガード清水白鳳・鈴木みのるたち格闘神秘を膨らます！／遠藤幸吉インタビュー

特集 インディペンデントの逆襲
no.15 780yen⇒390yen
あんた誰？ 山口日昇試練のインディ・レスラー10番勝負！／K－1とは何か？ 石井館長・ターザン山本・サダハルンバ

特集 実況パワフル北朝鮮
no.17 780yen⇒390yen
あの北朝鮮での「平和の祭典」を語りまくる！ アントニオ猪木＆永島勝司・村松雄祀・破壊王・ブル中野

パンクラス公式読本「矛」「盾」
各1260yen⇒630yen
97年当時のパンクラシストが勢揃い!! ゴッチさん、佐山聡、なぜか馬場さんも登場するパンクラス公式読本二部作!!

紙のプロレス RADICAL BACK NUMBER no.16〜87

格闘ノストラダムス！
no.16 780yen '99.03
[表紙：エンセン井上] アントニオ猪木、環境問題を『紙プロ』で語る!／引退後初! 前田日明インタビュー／石川孝司

"新"プロレスとは何か？
no.32 840yen '00.10
[表紙：小川直也] 田村潔司に快勝！ A・ホドリゴ・ノゲイラ／ドラゴンの大爆笑10 藤波語録／ラッシャー木村

『猪木祭り』いよいよ開幕ーッ！
no.34 840yen '01.01
[表紙：小川直也] 田村潔司に快勝！ ノゲイラインタビュー／ドラゴンの大爆笑10 藤波語録／ボブ＆オバチャンチン

純プロレスを徹底検証！
no.35 840yen '01.02
[表紙：サクマシン（イラスト）] ZERO-ONE本格始動 橋本真也／プロレススーパースター列伝 ジョー樋口／杉浦貴

燃えよ、闘魂の火種!!
no.36 840yen '01.02
[表紙：橋本真也（イラスト）] ノアから独立！ 高山善廣を確認せよ!!／ヴォルク・ハン──ノゲイラに狼の伝言

小川直也は是か非か？
no.38 840yen '01.05
[表紙：髙田延彦（イラスト）] 忘れ物の正体は。髙田延彦／ヴォルク・ハンの最強の遺伝子 E・ヒョードル

前田日明は是か非か？
no.39 840yen '01.06
[表紙：前田日明] 前田道場新エース・金原弘光／怪物か!? それとも…… 藤田和之座談会／壮絶なる格闘人生・藤原敏男

地上最強のプロレスとは？
no.40 880yen '01.07
[表紙：アントニオ猪木] 蘇れ！ Uインター＆キングダム伝説！ 高山善廣×金原弘光／熱いこの叫びを聞け！ 大谷晋二郎

"最後の黒船"WWF来襲!!
no.41 880yen '01.08
[表紙：ビンス・マクマホン・ジュニア] リングス10周年！ ヴォルク・ハンが振り返る／真樹日佐夫×三池崇史

アントンパワー大爆発!!
no.42 880yen '01.09
[表紙：アントニオ猪木] ドン荒川×橋本真也のトンパチ伝承対談／"ヒャッホーの真実" 辻よしなり／高山×宮戸×金原

聖戦『PRIDE.17』迫る!!
no.43 880yen '01.10
[表紙：桜庭和志] ブラジリアン・トップチーム 3大柱インタビュー／金原弘光×サスケの新日本プロレス学校同窓会

サク連敗と『PRIDE』の未来
no.44 880yen '01.11
[表紙：桜庭和志、ヴァンダレイ・シウバ] その修羅場の数々！ シーザー武志／怪物伝承対談！ 高山善廣＆杉浦貴

一寸先はハプニング!!
no.45 880yen '01.12
[表紙：アントニオ猪木（ホームレス姿）] 悪魔の書、現る！ ミスター高橋／ジェラルド・ゴルドー人生相談

田村潔司、『PRIDE』討ち入り!
no.46 880yen '02.01
[表紙：田村潔司] さらばリングス！ 金原×和田、浅草キッド／ならず者DEEPで勝利！エル・カネック／キラー・カーン

WWE日本侵攻、5秒前!
no.47 880yen '02.02
[表紙：ビンス・マクマホン・ジュニア] "天才"武藤敬司が『紙プロ』驚愕の初登場！／噂の馳浩がミスター高橋本を語る！

桜庭、満開の日は近い!
no.48 880yen '02.03
[表紙：桜庭和志] 奇跡のメガトン対談！ 小川直也 vs ノゲイラ＆スペーヒー／和田最強伝説が遂に現実に！ 金原弘光

究極の格闘技大戦争勃発!
no.49 880yen '02.04
[表紙：ミルコ、ヒクソン、小川、桜庭] 和田さん快勝記念鼎談！ 高山＆金原＆和田／菊田早苗とは何者か!?

50号記念企画てんこ盛り号
no.50 880yen '02.05
[表紙：桜庭和志]「地方発世界」開始！ 小川＆橋本／リングスロシア軍団の軌跡／パンクラス取材解禁！

揺るぎなきプロレスの確立
no.51 880yen '02.06
[表紙：橋本真也] 両国国技館だよ、全員集合！ 橋本真也／『PRIDE』の魅力をマン開！ 小池栄子／武藤敬司人生相談

戦慄の『LEGEND』前夜!!
no.52 880yen '02.07
[表紙：橋本真也、小川直也] 全身プロレスラー・高山善廣／USAの渡世人ドン・フライ／ロシアン・トップチーム

『Dynamite』ド直前号!
no.53 880yen '02.08
[表紙：桜庭和志] ノーフィアー×無謀奕・対談!! 高山善廣×美濃輪育久／独占肉弾スクープ！ マット・ガファリ

『Dynamite!』を大総括!
no.54 880yen '02.08
[表紙：アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ] "首の皮一枚" ホイス＆エリオグレイシー／ジョシュ・バーネット

髙田vs田村、夢限大の真剣勝負!
no.55 880yen '02.10
[表紙：髙田延彦]「真剣勝負」発言から7年、田村潔司が激白！／金原が『PRIDE』参戦！／メガトン級の男、ボブ・サップ！

驚ガクの6周年記念号
no.57 840yen '02.11
[表紙：高山善廣] サップとタイマン勝負!! 高山善廣／新たなる"U"が始動!! 田村／ミスター高橋×大槻ケンヂ

夢の対談、大連発号!
no.58 880yen '03.01
[表紙：武藤敬司＆船木誠勝] 夢幻のファンタジー対談 武藤×船木／Uスタイル対談 田村×髙阪／宮戸×安生×鈴木健

最後の皇帝、『PRIDE』上陸
no.59 880yen '03.02
[表紙：エメリヤーエンコ・ヒョードル] いざノゲイラ戦!! E・ヒョードル／アメリカン・ドリーム ダスティ・ローデス

『PRIDE』は変貌&再生する!
no.60 880yen '03.03
[表紙：エメリヤーエンコ・ヒョードル] ノゲイラ撃破!! E・ヒョードル／驚愕の格闘芸術対談!! 武藤敬司×須藤元気

ゼロワンvs新日5.2戦争!
no.61 880yen '03.04
[表紙：橋本真也＆小川直也] 裏番組をブッ飛ばせ！ 橋本真也×小川直也／1年間の沈黙を破った!! ヴォルク・ハン

ミルコの首をカッ斬ってみろ!
no.62 880yen '03.05
[表紙：ミルコ・クロコップ] ヴァーと登場！ 佐々木健介／現役復帰？ 船木誠勝／ヒョードルが藤田を一刀両断！

マット界、超絶リボーン!!
no.63 880yen '03.06
[表紙：橋本真也＆小川直也（イラスト）]「お前は男だ」劇場炸裂！ 髙田延彦／『PRIDE』REBORNを大総括!!

PRIDEミドル級GP直前!!
no.64 900yen '03.07
[表紙：桜庭和志] "異次元格闘技戦戦" 田村潔司×吉田秀彦を大展望!!／『PRIDEミドル級GP』出場全選手インタビュー

皇帝vsミルコ闘争本能決定戦!
no.65 880yen '03.08
[表紙：ミルコ・クロコップ] 最後の皇帝大炎上！ ヒョードル／ミルコついに皇帝戦へ／闘魂ストーカー、イズマイウ

ミルコ『武士道』電撃出陣!
no.66 880yen '03.09
[表紙：ミルコ・クロコップ] ミルコ緊急インタビュー／マッハを破った男、長南亮登場！／『東スポとは何か？』

ミルコvsノゲイラ、迫る!!
no.67 880yen '03.10
[表紙：ヴァンダレイ・シウバ] ノゲイラ戦緊急インタビュー！ ミルコ／『PRIDEミドル級GP』決勝戦インタビュー

大晦日・格闘技大戦決定!!
no.68 880yen '03.11
[表紙：髙田延彦PRIDE統括本部長] 大晦日三つ巴決戦に出撃宣言！ 髙田延彦／曙とは何者か!?／桜庭和志

『ハッスル1』開催ド直前!
no.69 900yen '03.12
[表紙：橋本＆小川] 出てこい！ 泣き虫！ 橋本＆小川／『泣き虫』著者、金子達仁登場！／田村潔司／美濃輪育久

04年末の格闘戦争を大総括!
no.70 880yen '04.01
[表紙：ミルコ・クロコップ] シウバに近藤有己が宣戦布告！／健介＆北斗WJの真実を語る！／紙プロ大賞＆語録発表

『ハッスル2』で大フィーバー!
no.71 880yen '04.02
[表紙：ハッスルイラスト]『PRIDE GP』優勝宣言！ ミルコ＆ノゲイラ／川田利明初登場！／猪木vsアミン戦の真実

『PRIDE』に格闘ロマンを見よ!
no.72 840yen '04.03
[表紙：ヒョードル、ミルコ、ノゲイラ] GPの大本命をオランダでキャッチ!! エメリヤーエンコ・ヒョードル／山本KID徳郁

最も過酷な道を行く男!!
no.73 880yen '04.04
[表紙：小川直也] GP出場決定、緊急インタビュー！ 小川直也／PRIDE・GP出場全選手 パーフェクトガイド

感じろ、ハッスル魂!!
no.74 880yen '04.05
[表紙：小川直也] PRIDE・GPでハッスル成功！ 小川直也／リベンジロード発進!! 桜庭和志／ミック・フォーリー

英雄誕生の気運高まる!!
no.75 880yen '04.06
[表紙：小川直也、桜庭和志、吉田秀彦] シルバ戦直前に大ハッスル宣言！ 小川直也／奇蹟の独占インタビュー！ 髙田総統

プロレス爆発へ最後の挑戦!
no.76 880yen '04.07
[表紙：桜庭和志] 小川の"盟友"と"宿敵"が奇蹟の対談!! 破壊王×ノゲイラ／厳しくも、飄々と戦路を進む！ 桜庭和志

小川vsヒョードル決定!!
no.77 880yen '04.08
[表紙：小川直也]「相手がヒョードルだろうと俺はハッスルする!!」小川直也／狙うは皇帝の首ひとつ！ ミルコ

PRIDE GP徹底総括号
no.78 840yen '04.09
[表紙：小川直也] 衝撃の敗戦直後、独占インタビュー！ 小川直也／小川の敗戦をどう見る!? 髙田延彦／谷川貞治

髙田総統がビターンと降臨
no.79 840yen '04.09
[表紙：髙田総統] キャプテンに休息無し！ 小川直也／特別付録・髙田総統ポスター／谷川さんも推薦『曙は是か否か？』

守護神ミルコが外敵狩り!
no.80 880yen '04.10
[表紙：ミルコ・クロコップ] ミルコ独占インタビュー／ハッスルお家騒動、小川直也／「袋とじ企画」グリズリー岩本

究極のSADAME、迫る!!
no.81 880yen '04.10
[表紙：桜庭和志] ヒョードルの弱点を発見!? ノゲイラ＆ノゲイラママ／新日本でハッスル成功！ 小川直也／草野仁

ミルコ激白! 打倒皇帝!
no.83 880yen '05.01
[表紙：ミルコ・クロコップ] 04年『PRIDE男祭り』を大総括／05年ハッスル大進撃発表！ 小川直也／橋本×船木対談

RTTが皇帝に宣戦布告!!
no.84 880yen '05.02
[表紙：セルゲイ・ハリトーノフ] "殺人落下傘"が3強越え宣言!! セルゲイ・ハリトーノフ／田村潔司がPRIDE GPを語る

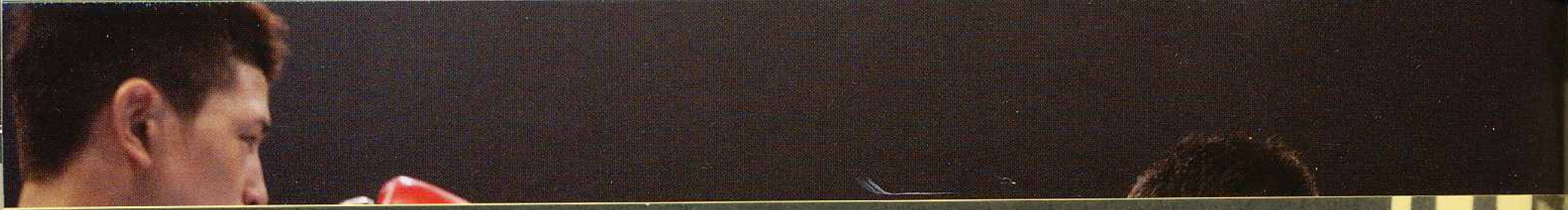
『PRIDE』vs『HERO'S』開戦!
no.85 860yen '05.04
[表紙：前田日明＆髙田総統] PRIDE GP2005特集 桜庭、田村、高田／パンクラス2大王者対談 髙坂剛×近藤有己

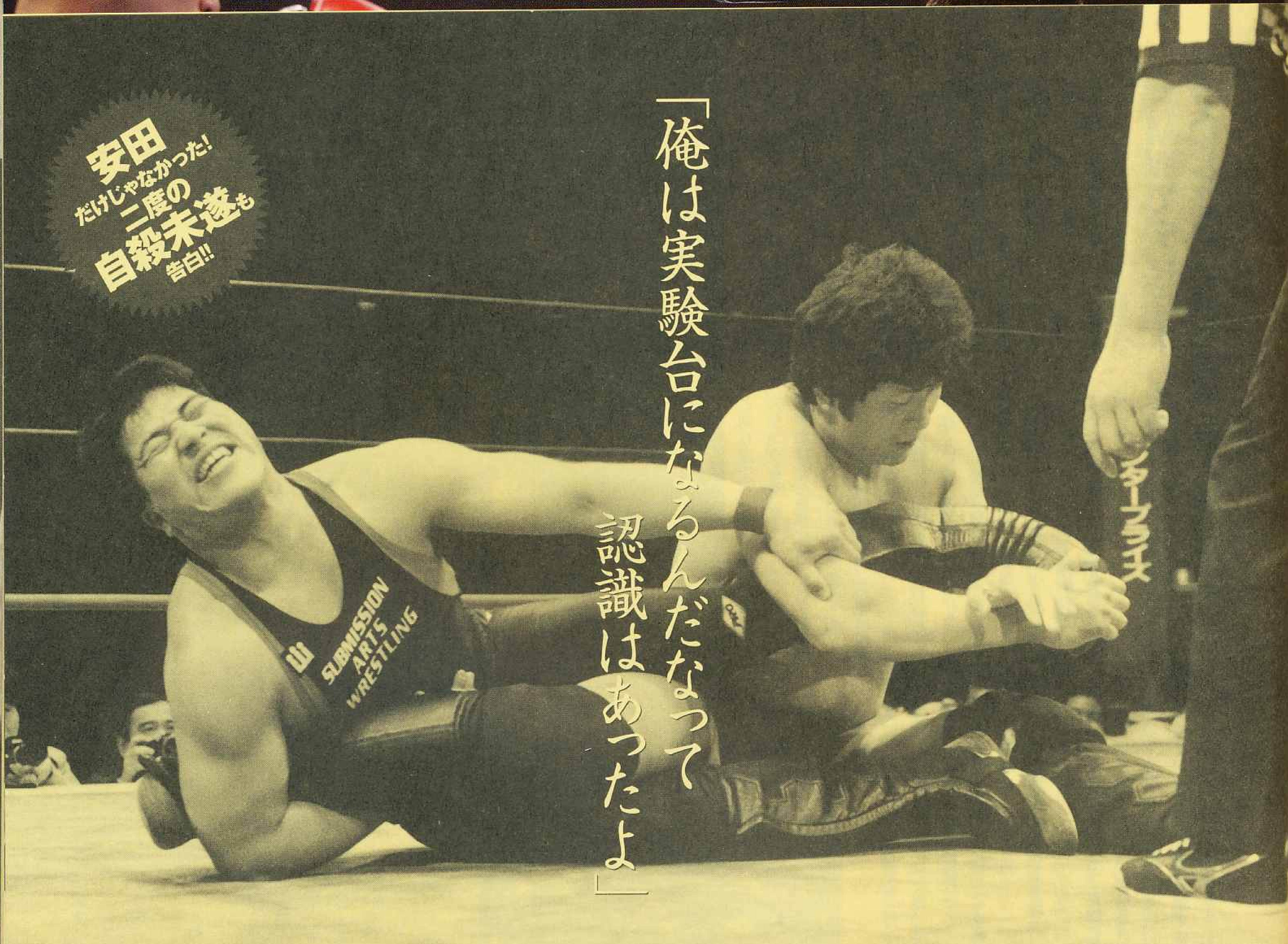
PRIDE GP直前大解剖号
no.86 860yen '05.04
[表紙：ヴァンダレイ・シウバ] 大物再会！ 超U級対談が実現!! 船木誠勝×田村潔司／ダンプ松本が全女解散を語る!!

PRIDE GP開幕&大総括!
no.87 860yen '05.05
[表紙：吉田秀彦] 敗れてなお咲く花あり! 吉田秀彦／船木誠勝×宇野薫／金原弘光×池田大輔

通販方法 ▼No.91までのバックナンバーは書店で扱っておりません。下記の通信販売をご利用ください。
!『kamipro Hand』で注文 " 電話注文 03-5368-1797 # メール注文 kapra@kamipro.com

※通販方法はすべて代引きとなります。手数料は315円です（代引き金額によって異なります）。※送料は一律500円（何冊でも可。離島山間部は除く）となります。※郵便振替は現在受け付けておりません。ご了承ください。



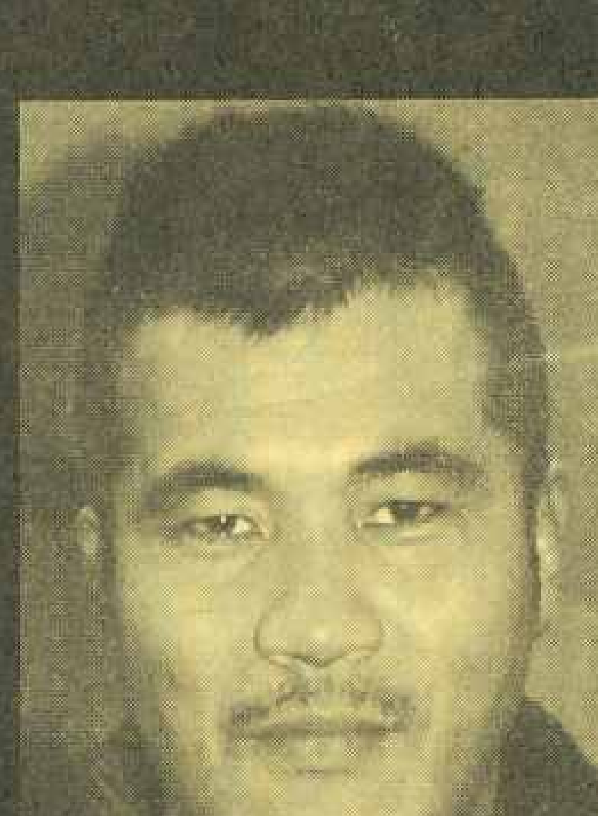


「俺は実験台になるんだなって認識はあったよ」

前田とも闘った現役ファイターが語る

初期リングスの真実

木村浩一郎



『kamipro』No.120&121で掲載した修斗事務局長・若林太郎氏のインタビューは、かつて前田日明の右腕だった若林氏から明かされた初期リングスの知られざるエピソードを中心に好評を博した。それを受けて今回登場するのは、初期リングスにたびたび参戦し、現在もプロレスラーとして活躍する木村浩一郎だ。ヒクソンとも闘った男が語る"初期リングスの真実"。そして、最後には驚ガクの事実も発覚!?

聞き手／阿修羅チョロ

FMWでデビューしたはいいけど、プロレスをナメちゃったんだよね

——PRIDEから総合格闘技に興味を持ったファンは、リングスというとノゲイラやヒョードルを生んだ団体ぐらいの認識しかないと思うんですけど、いま出ている当時のDVDを観ても、木村さんも出ていた初期リングスって相当におもしろいんですよね。……っていうと中期がおもしろくなかったのかってなりますすけど（笑）。

木村　いや、ホントおもしろいと思うよ。いろんな意味でグチャグチャだったからね（笑）。

——ホント、実験の場だったたというか。で、ここ最近、木村さんも仲のいい若林太郎さんのインタビューをやって、初期リングスの話とかもしてもらって好評だったんですけども、そのへんの話を実際にリングで闘われていた木村さんに話をしていただければと思ってまして。

木村　はい。なんか、若林さん、けっこう踏み込んだ話とかしてたんでしょ？

——していただきましたね（笑）。そもそも木村さんってリングスに出る前にプロデビューしてるんですよね？

木村　デビューしたのはFMW。

——あ、そうでしたね。その頃はサブミッションアーツレスリング（SAW）に所属してたんでしたっけ？

木村　まだ入ってない。代表の麻生（秀孝）さんは（大東文化）大学の先輩で、そういうのもあって入ったの。入ったっていうか、「ウチに来い」って感じで。

——それからはサブミッションアーツ所属としてプロレスや、それこそリングスとかにも出ることになるわけですよね。

木村　そう。まあでも、それは麻生さんがおいしかったんじゃない？

——と言いますと？

木村　サブミッションアーツ所属で出れば、サブミッションアーツに多少お金が落ちるでしょ。自分は実際のギャラは知らなったからね（笑）。

——ああ、そうでしたか（笑）。

木村　そんなこんながあって。まあ、それがあったから念願かなってプロレスデビューもできたし、よかったんじゃないの。

——念願かなってというと、やはりプロレスラーに憧れてたわけですか？

木村　そうだね。俺らの世代はやっぱり佐山さん、初代タイガーに憧れてずっと夢見てて。だから佐山さんと同じ道で、中学で柔道、高校でレスリングをやって。

——木村さんってレスリングの実績ってどのぐらいだったんですか？

木村　沖縄国体で3位。同期は桜庭（和志）とかがいたね。

——実際に闘ったりもしました？

木村　いや、階級が違うから。あと、俺が高校3年生のときに1年生で同じ階級に藤田（和之）がいた。

——その頃は将来的にプロレスラーになろうと思って格闘技をやっていたって感じなんですか？

木村　俺の年代はまだ総合っていうのも確立されてなかったし、プロレスラーになるっていうのが長年の夢だったからね。

——それで実際に上がったのがFMWだったわけですね。

木村　そうそう。FMWから来たのか、大仁田（厚）さんから来たのか知らないけど、話があって。で、夏休みだし、1シリーズだけ出ようかなってことで1シリーズだけ出ることにして。

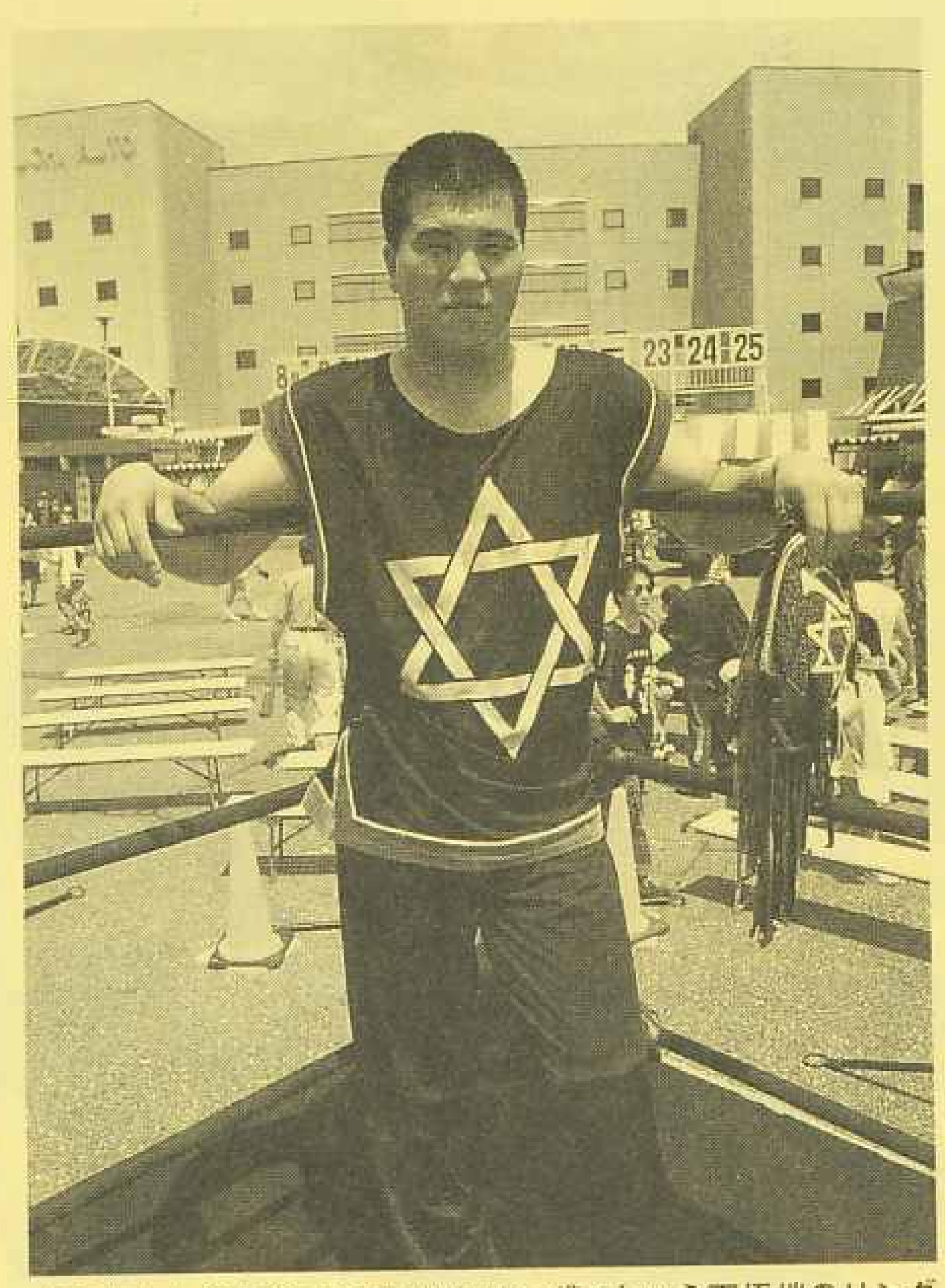
——プロレス的な練習をしてリングに上がったんですか？

木村　いや、一切なし（笑）。その頃のFMWって総合格闘技トーナメントとかやってて、けっこう模索してた時期だったからね。

——ある意味、なんでもありの時代でしたよね。

木村　そうだよね。で、実際にデビューしたはいいけど、プロレスをナメちゃったよね。

——プロレス的な練習もせずに、そこそこ通用したからですか？


大東文化大学在学中にFMWとリングスという両極端のリングに上がっている日本唯一のプロレスラーが浩一郎だ。その後は将軍KY若松プロデュースの宇宙パワーとしてインディーマットを中心に活躍。03年3月のDEEPではマスクマンのスペル・パピヨンとしてタッグマッチながら7年ぶりに総合ルールに挑戦した。

木村　うん。そこでたとえば新日本に入ってたら、また違った俺ができただろうし。要は当時のFMWって、スパーリングやっても俺が余裕でガチで勝ってたし、そうなると力関係が逆転するんだよ。それでも俺に文句を言ってたのは、いまでいうシャーク土屋とかだったかな（笑）。

——文句を言うのは女子プロレスラーでしたか（笑）。

木村　そうそう（笑）。「リング作れよ」とかいつも怒られてたね。でもコンバット豊田さんはいつも優しかった。

——あ、そうでしたか。プロレスをナメて、こんなことやってられるかとはならなかったんですか？

木村　いや、それはないよ。プロレスの仕組みはわかってきたからね。でも凄い葛藤はあったよ。やっぱり描いてたものと違うわけじゃん。いまでも覚えてるよ、大仁田さんに「倒れ方はそうじゃねえ」とか言われたの。そういうのが凄いショックで、俺のほうがリアルなのに。そんなこともあったねぇ……（しみじみと）。

——この団体でトップに立ってやろうとか、そういう野望はなかったんですか？

木村　いや全然考えてない。だって当時は大仁田 vs ターザン後藤がメインで、年中血流して「オリャー！」とか言ってるでしょ。俺もホントにね、大学生の思い出作りだった。

——夏休みの思い出作りでしたか（笑）。

木村　そうそう。でも、それが一番俺のいけなかったところ。だって大学生でさ、プロレスラーになっちゃってさ。それでFMWは1シリーズ終わって辞めたんだけど、また普通の学生に戻ったんだ。そのあとW★INGの格闘三兄弟につながるんだ。

——あ～、格闘三兄弟（齋藤彰俊、徳田光輝）として活躍されてましたよね。その頃のエピソードって何かあります？

木村　W★INGでは齋藤彰俊が「打撃のほうが強い」って言ってきたから、「バカな、組み技だよ！」と言って、本気で激論したり練習もよくやった。まあ、俺がいつもグラウンドでいじめてたけどね（笑）。

——W★INGでも、まだプロレスの練習はほとんどやらないまま試合に出てたんですか？

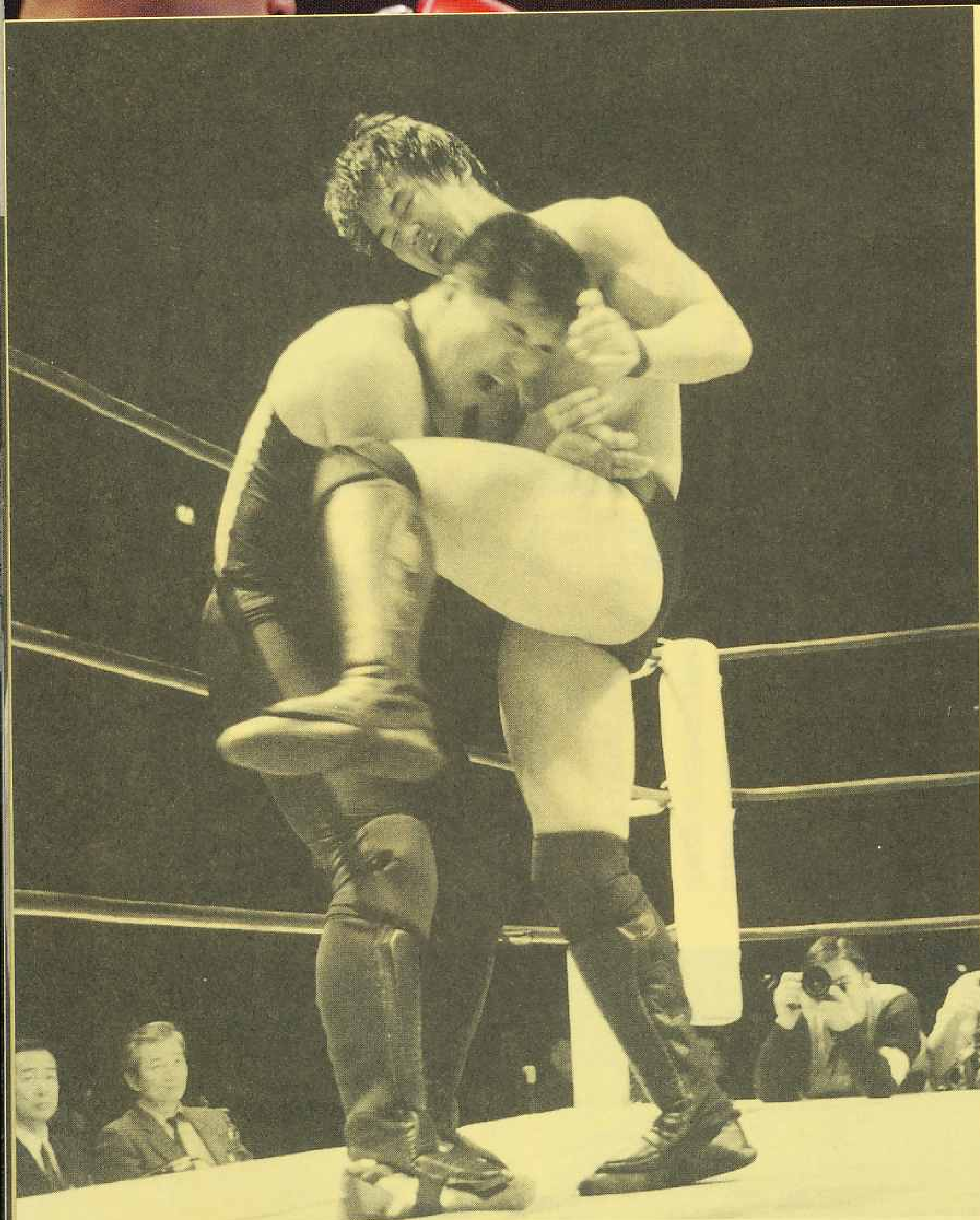
木村　いや、そんなことないよ。多少はしてたよ。FMWの頃もリッキー（・フジ）さんとかに教わってたし。

——リッキーさんがプロレスの師匠的な存在だった、と？（笑）。

木村　そうだね………いや、でもどうかなあ？　リッキーさんはホントにそう思ってるけど（笑）。

——思い出作りでプロレスに出たと





92年1月25日の東京ベイNKホール大会で、リングス初となる日本人対決として実現した木村浩一郎vs長井満也の一戦。大会翌日から大学の卒業試験を控えていた浩一郎は30分近く闘い結果的には長井に敗れたものの、調整不足ながら互角に渡り合えたことが、その後の格闘人生に大きな影響を与えることになったという。この試合から約15年後、二人はフーテン・プロのリングなどで再び対戦している。

いうことでしたけど、ギャラ的にはそんなによくはなかったんですか？

木村　うん。でも、べつにお金じゃないよ。長年の夢がかなうんだからさ。自分がその世界に入れて神聖なるリングに上がれるんだから。それに自分にとってプロレスの原点っていうのは佐山さんの初代タイガーだったけど、もちろんUWF、前田日明っていうのにも憧れてたし。俺が高校のときは、もうUWFが全盛だったから。

――スタイル的にはFMWよりもリングスのほうが上がりたかったリングではあったんじゃないですか？

木村　そりゃそうだよ。最初のグロム・ザザ戦と次の長井満也戦はまだ大学生だったし。

――たしか、長井戦の翌日が卒業式だったんですよね？

木村　違うよ、卒業試験だったんだよ。長井戦の翌日から卒業試験。

――それは大変でしたね（笑）。ちなみにリングスはサブミッションアーツつながりで出ることになったんですか？

木村　きっかけは治郎丸秋穂さん。

――若林さんのインタビューでもよく出てきた初期リングスのプランナーだった方ですよね。

木村　そう。治郎丸さんっていうのはサブミッションアーツの名付けの親で、麻生さんと治郎丸さんは仲よかったんだ。そこで次郎丸さんは麻生さんに「木村を前田日明のスパーリングパートナーにできませんかねぇ」みたいなこと言ってたらしいんだよ。リングスができたばっかりの頃って日本人の選手がいなかったでしょ？

――旗揚げ直後は前田さんしかいませんでしたからね。

木村　でも、麻生さんはなんか知らないけど、その話を俺に言わなかったんだよね。

――それはなぜなんですかね？

木村　いや、わかんない。それで治郎丸さんは「木村は無理だ」って判断したらしいんだ。でも、ホントに偶然、コンビニで治郎丸さんに会ったんだよ。

前田とも闘った現役ファイターが語る

初期リングスの真実

開会式の30分ぐらい前に「今日はガチで」っていきなり言われたの

――ほぉ。そこでその事実を初めて知らされた、と？

木村　そうそう。そのときに「お前、なんで俺の話、断るんだよ！」って言われて。「え、なんですか、それ？」って言ったら「え、お前聞いてないの？　じゃあとりあえずウチに来い」って、初めて治郎丸さんちに行って、そこで全部の話を聞いたんだ。

――なんで麻生さんは言わなかったんですかね？

木村　それはいまでもわかんない。俺も面倒くせえなって思ったんだけど、やっぱり前田さんに会いたいじゃん。で、いろいろあったんだけど、治郎丸さんがあいだに入ってくれて、サブミッションアーツとしてリングスに上がったんだよ。まあ、政治だな、政治（笑）。

――政治家でしたか（笑）。でも、もし話がスムーズに進んでいればリングスジャパンの木村浩一郎が誕生してたかもしれないんですね。

木村　あったかもなぁ。で、おまえが聞きたい話をすればいいんだろ？（笑）。

――若林さんも話してたグロム・ザザとのガチの話とか、しゃべれる範囲でお願いします。べつに暴露とかさせたいわけではないですので（笑）。

木村　わかったよ（笑）。

――でも、リングス一発目が強豪のザザが相手っていうのも凄いですよね。

木村　そうだよな。じつはあの試合ははじめはプロレスだったんだよ。

――それは若林さんも言ってましたね。

木村　そうなんだよ。当日のオープニングセレモニーの30分ぐらい前。18時ぐらいかな。いきなり治郎丸さんに呼ばれて「浩ちゃん、今日はガチでいってね」って言われたんだ。

――それはホントにいきなりなんですか？

木村　そうだよ。「前田にも言ってあるから大丈夫」って感じで。たぶん心配するなってことで、そう言ってくれたんだろうけど。

――ちなみに、ファン時代はUWFとかはどういう目で見てたんですか？

木村　真剣勝負。

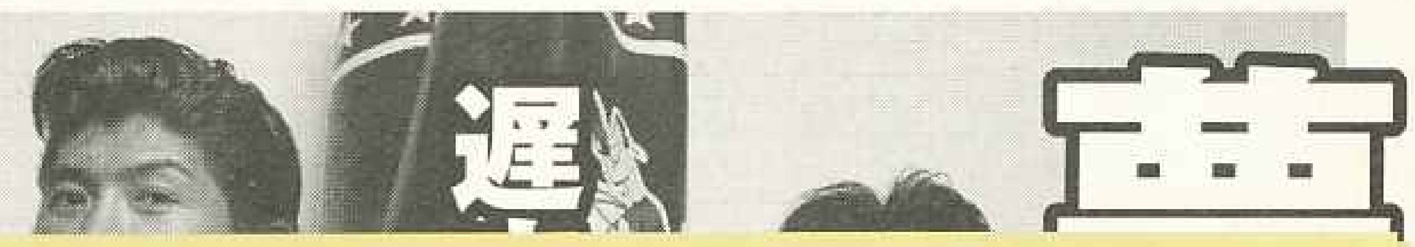
――え～、でも「実際に格闘技をやってる人はわかる」とかよく言うじゃないですか。

木村　いや、あのね、ホントにやらないとわかんないよ。……しかし、『kamipro』はこええなあ（笑）。

――いやいや（笑）。で、そのザザ戦はどうなったんですか？

木村　いや～、言い方難しいなぁ。あの試合は俺が○○だったんだよ。それで治郎丸さんが「前田日明にちゃんと許可とったからガチでやれ。大丈夫だから」って言われて、俺は「どっちなんだよ」って頭がパニックになったよ（笑）。

――そう言われて木村さんはどう思ったんですか？



ガチに変わったんだから気合いも入るしワクワクしたよ

木村　だからね、俺はこう思ってたんだよ。前田さんは「ウチは真剣勝負だから」ってマスコミとかに言ってたよね？

——当時はマスコミ的にもそういう認識だったと思います。

木村　だから、そういう意味で、俺が実験台になるんだなって認識はあったんだ。

——そういえば若林さんも西（良典）さんから「なんで俺の試合はつまんないって言われるんだろう」って悩みを打ち明けられて、「ガチだからでしょ」ってやりとりがあったっていうのは聞きましたけど（笑）。

木村　そうだよ、西さんもガチだったからね。いきなりさぁ、プロレスからガチに変わるんだよ。だったら、ひょっとしたら勝てるチャンスもあるわけじゃん？　○○からガチに変わったんだから、気合いも入るし、ワクワクしてたよ。

——なるほど。

木村　だってさぁ、○○だったら俺だって受けないよ。でも、○○だったから受けた。当然だろ？

——まあ、そうですよね。当時はロシア勢とも一緒に練習とかもされてたんですよね？

木村　普通に（ヴォルク・）ハンとか（アンドレイ・）コピィロフとも練習したけど、やっぱりロシア人は凄かったなっていまでも思うよ。

——それは技術的にですか。

木村　技術なんかそんなになかったよ。いや、技術はあるんだけど、技術っていうのは知ってれば防げるもん。じゃあ何かってったら、やっぱり力なんだよ。アイツら背筋力がハンパねえよ。

——コピィロフとか、ヒザ十字固めとか両脚で絞められただけでタップしそうになるって言いますもんね。

木村　ホントそうだよ。アイツらおかしいんだよ（笑）。

——ロシア人はおかしかった（笑）。

木村　ザザ戦も「前田さんには許可とった」って言われたのに、終わったら前田さんにメチャクチャ怒られたんだぞ。

——そうだったんですか（笑）。治郎丸さんは守ってくれなかった、と？

木村　全然守ってくれないんだよ（笑）。でも俺は偉かったよ。前田さんには「治郎丸さんが大丈夫だって言った」とは言わなかったんだぞ。

——じゃあ「すいません」と謝ったわけですか？

木村　そりゃあ謝るよ。でも凄いよな？　俺、日本初？（笑）。

——初なんですかね（笑）。

木村　知らねえよ。だけど身内にダマされた感じだよね（笑）。

——だったら、そこで治郎丸さんとケンカとかあったんですか？

木村　いや、全然。

——前田さんを怒らせて「もう使わない」とか言われたりはしませんでした？

木村　だってコマがねえじゃん（笑）。

——そうですよね。その頃は、他の試合は自分の試合とは違うなっていうのは観ててわかったりしました？

木村　そりゃ、観たらわかるよ。ファン時代はわかんなかったけどさ（笑）。

——いまになって考えれば、なんで自分だけガチンコなんだっていう思いとかは？

木村　最初はそんなに考えてなかったけど、結局それが原因で辞めるからね。

——それが直接の原因だったんですか？

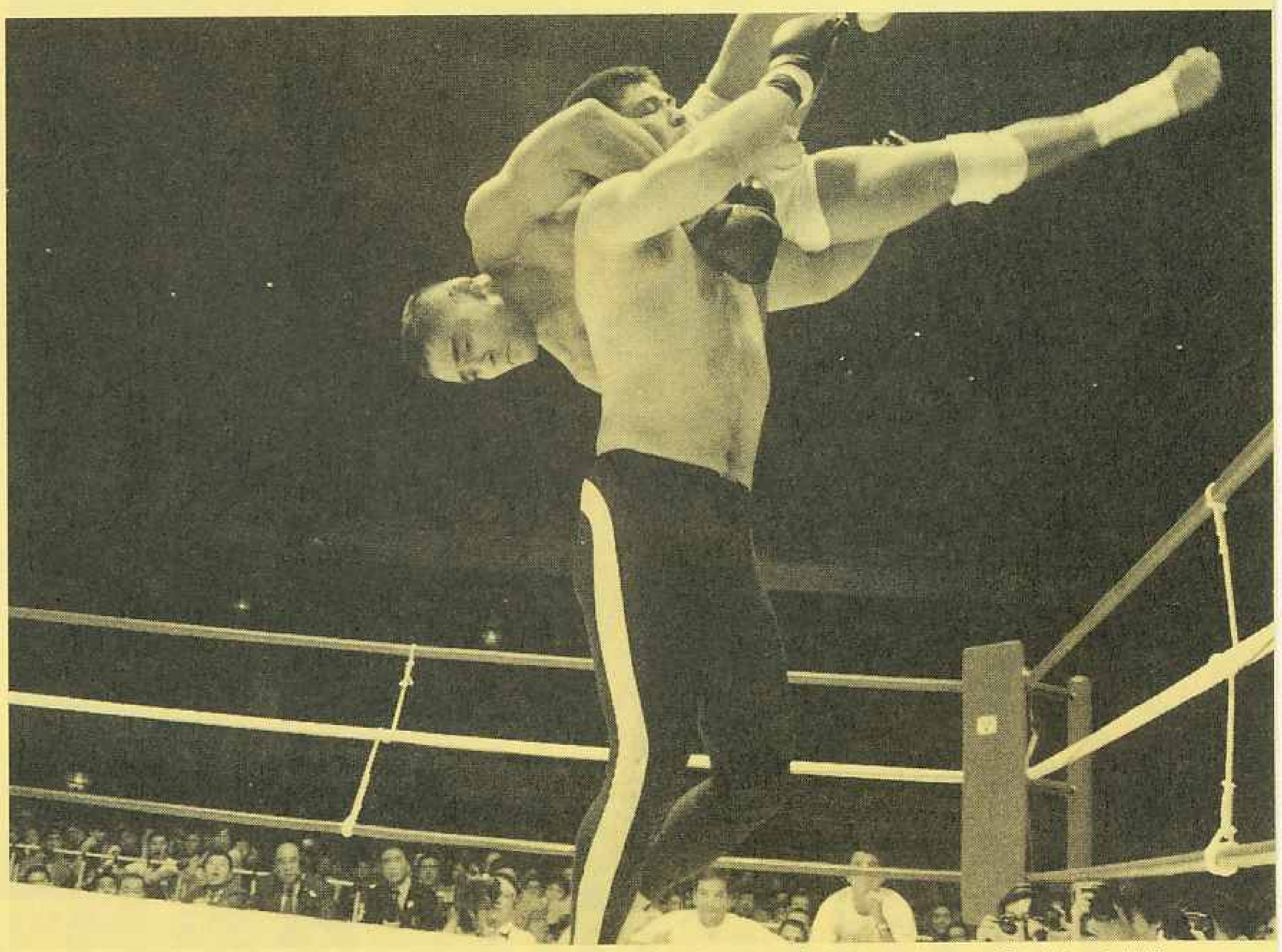
木村　原因っていうか、バカらしくなっちゃって。でも、原因があったとしたら2戦目の長井戦かな。たしか、92年1月25日のNKホール。

——覚えてますねぇ。

木村　そりゃそうだよ。試験前だったから（笑）。だって、長井選手は当時リングスジャパンで毎日練習してるわけだよ。俺はもう翌日から卒業試験だよ。単位がヤバかったから4年でもほとんど授業なんだよ。だから、ほとんど練習ができなかったから、じつは秒殺されても仕方ないもんな。それに自分の中で納得のいく負け方したら、もう頭下げてリングスジャパンに入ろうと思ってたんだ。

——結局、納得いく負け方じゃなかったんですね？

木村　そう。打ちのめされたらホントに入ろうと思ってたけど、でもいい勝負したじゃん。それで「なんだよ、リングスは」みたいになっちゃって。生意気だよな（笑）。



1995年4月20日、日本武道館で開催された「バーリ・トゥード・ジャパン・オープン」ではヒクソン・グレイシーと対戦した浩一郎。トーナメント一回戦ではトド・"ハリウッド"・ヘイズに不覚を喫するも、選手の棄権もありヒクソン戦が実現。浩一郎はタックルで持ち上げるなど善戦するも、最後はヒクソンのスリーパーでタップ。

——プロレスに続いてリングスまでナメちゃいましたか（笑）。

木村　だって、毎日練習やってるヤツが、明日から卒業試験の俺を倒せないんだよ。「何やってんだよ！」って。

——そう思ってもおかしくはないですよね。逆にリングスに入ったら、日本人選手として前田さんの次に行けるんじゃないかっていう気持ちはなかったんですか？

木村　いや、全然。俺はそこまで欲ないからさ。それはいまも変わらないけどね。いまだってプロレスがしよっぱいの自分もわかってるし、ガチばっかりじゃツライし（笑）。だから、いまでいう格闘プロレスをやってるヤツってプロレスが苦手なヤツなんだよ。俺も含めて（笑）。

——なるほど。逆にそれがリアリティを感じさせるってところもありますけどね。でも、若い頃って、単純に強さっていう部分では自信もあったんじゃないですか？

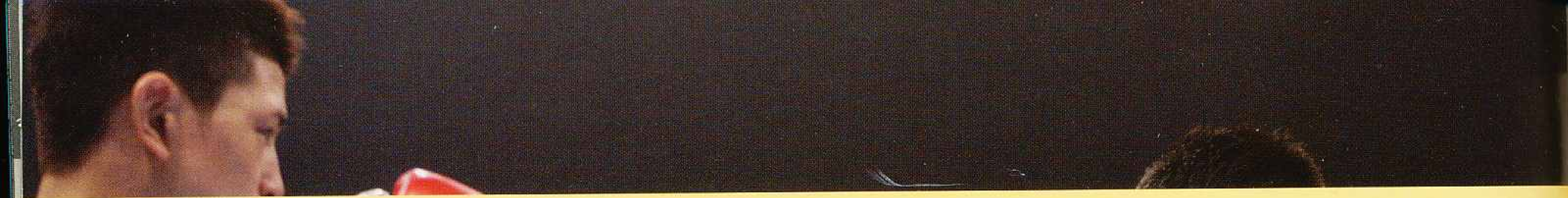
木村　いや、全然。上には上がいくらでもいるんだよ。

——「最強になりたい」って青臭いこともとくに思わなかったんですか？

木村　そういう欲は俺はなかったなぁ。リングスは「世界最強はリングスが決める」ってキャッチフレーズがあったけど、俺はそういうのはなんとも思わなかったし。

——じゃあ、リングス時代を振り返ると、プロレスに続いて、いい思い出作りができたって感じですか？

木村　思い出以上じゃない？　高校生から観てた前田日明のもとで闘



えたし、だって俺、前田vsニールセン戦を観て「スゲエ！」って思って、そっから前田ファンになったからね。だから前田さんに会えたときはそりゃあ嬉しかったけど、猪木さんほどオーラは感じなかったけどね。

――そうでしたか。やっぱり猪木さんのオーラは凄かったですか？

木村　そうだね、プロレスラーで感じたのは猪木さんぐらいかな。天龍さんはこええなって思ったけど(笑)。

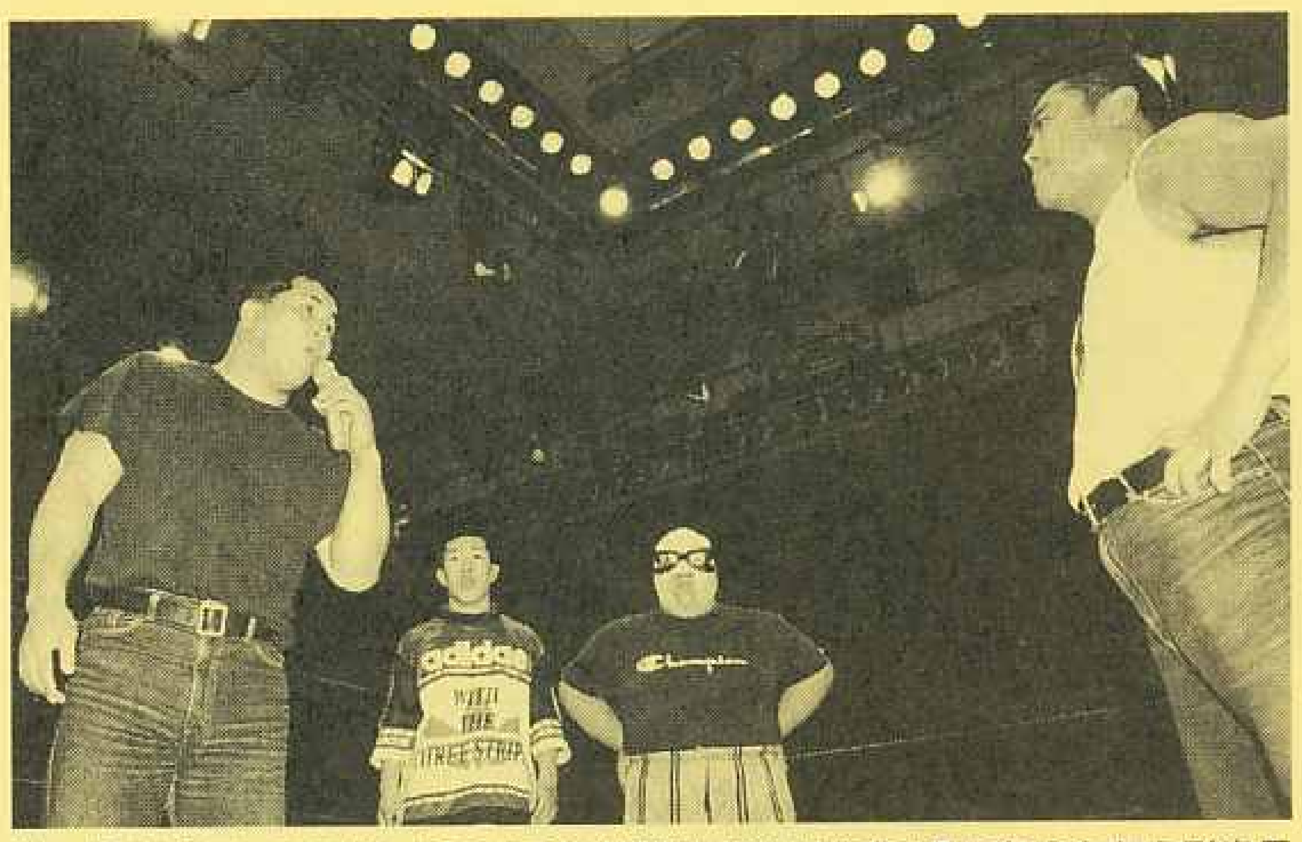
――ちなみに佐山さんはどうだったんですか？

木村　佐山さんは別格だね。あの人は憧れだったから。

――じゃあ、プロレスでも格闘技でもそうですけど、当時、木村さんの鼻を折ってくれる人がいたら、その後の人生も変わっていたのかもしれませんね。

木村　そうそうそう(笑)。そうなってれば違ってただろうね。

――どっぷりプロレスに浸かってたかもしれないし、リングスに入ってたかもしれない。



浩一郎がプロレスのリングでガチを仕掛けたのが95年6月に行なわれた剛竜馬率いる冴夢来プロレス後楽園大会。当時のチームメイトの秋山文生が断りもなく冴夢来プロレスに入団したことに激怒し、メイン後のリング上で秋山を制裁してしまったのだ。この事件は、大きな波紋を巻き起こした。

木村　だからリングスで言えば長井戦、プロレスで言えばFMW。それだけの差だよ。

――対極ですけどね（笑）。

木村　そうだよな。そう考えたら凄いな、俺（笑）。

――凄いですよね。早かったのか遅かったのか（笑）。

木村　早いだろ！　俺が大学生でプロレスラーになったから、当時は「僕も大学生だけどなれるんですか？」って問い合わせがけっこう来たらしいよ。

――ある意味、木村さんの功罪というか、当時プロレスラーやプロ格闘家を目指していた人を勘違いさせちゃった部分もあるかもしれないですね。

木村　そうかもしれないな。だって、ホントにそのへんの大学生のお兄ちゃんがプロレスラーになれちゃったんだから。普通に長井戦の次の日は卒業試験行ったからね、顔腫らして、脚パンパンにして（笑）。

――でも結局、その後の木村さんを見ると、思い出作りだけでは終わってないわけじゃないですか。それこそヒクソン戦があったり、宇宙パワーとしてプロレスもやってるわけですし。

木村　そうだね。長井戦のあとに大学を卒業して（リングスの）実験リーグとか出てたからね。

時間が押しててヒクソン戦の前は控室にも戻れなかったんだよ

――何回ぐらい出てましたっけ？

木村　本戦2回に実験リーグ2～3回。本間（聡）君にも勝ってるし、けっこうやってるんだよ。でも、結局そういうのが原因で離れたんだけどさぁ。なんで俺がガチでやらされて……とか考えたら「俺ってなんだよ」って、ちょっと疑問に感じちゃって。

――それでリングスから離れることになった、と？

木村　感じちゃったら、もうダメだよね。だったら地元に帰って、ちゃんと就職でもしようかなって。

――え、就職ですか？

木村　そう。プロレスの試合とかやれば食えたしね、そういう時代だったから。ただ、当時のリングスはWOWOWもついてたし、プロレスなんかより全然ギャラもよかったんだけどさぁ。

――その後、95年に『バーリ・トゥード・ジャパン』でのヒクソン・グレイシー戦があったわけですけども、その頃は新格闘プロレス所属でしたっけ？

木村　違うよ、西日本プロレスだよ。西日本にいながらヒクソンとやったんだよ（笑）。

――凄い（笑）。当時からヒクソンは凄く強いというイメージがありましたけど、そういった選手と闘えるっていうのは感慨深いものはあったんですか？

木村　あんまりねえな。あのときはトーナメントだったろ？　ヒクソン戦の前に一回戦で負けたけど、敗者復活で勝って。でも、普通さ、試合終わったら控室に帰るんだけど、あのときは帰れなかったんだよ。時間が押しちゃってて返してもらえなかったんだ。

――それだけの理由で控室に戻れなかったんですか？

木村　そうだよ。そのときはリングの下で待ってたもん。時間オーバーしたら会場の追加料金払わなきゃいけないとかなんとかで。だから試合が終わって、「じゃあいまから5分で」って言われて。

――そんな状態でヒクソン戦を闘ってましたか。

木村　俺だけ元気だったけどね。あの大会って日本人で唯一無傷なのが俺だけなんだよ。全然腫れてもいないし。

――たしか、一回戦はK―1ファイターのトド・〝ハリウッド〟・ヘイズにフロントチョークで負けたんですよね。

木村　そう。あのときは関係者に「総合の練習は全然やってないから大丈夫だよ」って言われてたんだけど、実際は凄い練習してたみたいだからね。身体も大きかったし。

――確かに身体は大きかったですよね。で、肝心のヒクソン戦なんですけど。

木村　まあ、「ヒクソンとやって凄いですね」ってよく言われるけど、べつに好きなことやってただけだから。

――そのあと出たビデオとかを観ると、バックステージで「キムラか。ヤツはちょっと手強いぞ」みたいなことをヒクソンが言ってるんですよね。

木村　だから、逆に言えば、それまでは、まともに格闘技をやった人間とヒクソンは闘ってこなかったんだよ。

――400戦無敗とか言われてましたけども。

木村　いまは誰もそんなこと本気にしてないでしょ（笑）。

――まあまあ、そうですけども。実際、敗れてしまったわけですが、闘ってみて敵わないなって思った部分はありました？

木村　全然ねえよ（キッパリ）。

――また即答しますねえ（笑）。じゃあ、よけい悔しかったんじゃないですか？

木村　だから泣いたんじゃん、あのとき。何に負けたって、飲まれちゃった、みたいな。まあ、それも含めての実力なんだけどね。

――大会場の雰囲気に飲まれたところがあった、と？

木村　飲まれちゃったねぇ。「あら？」っていうかさ。……だからもう一回やらしてくれてたら、高田さんや船木さんなんかより全然いい試合する自信はあるんだけどね。

――ちなみにヒクソン戦はギャラはよかったんですか？

木村　そりゃあよかったよ(笑)。向こうに比べたら、全然なんだろうけど。でも、そんなに凄いの？　ヒクソンとやったのって。

――やりたくてもなかなかできる選手じゃないじゃないですか。

前田とも闘った現役ファイターが語る
初期リングスの真実

木村　そっか、6人しかいないもんね。西さん、俺、山本（宜久）、中井（祐樹）さん、髙田（延彦）さん、船木（誠勝）さん。

――日本人ではそれだけですからね。

木村　そこだけじゃん、凄いの（笑）。

――ヒクソン戦のあとは格闘技っていうよりもプロレスのほうが多くなっていきますけど。

木村　ヒクソン戦が終わって、ちょっと本気でどうしようかなって考えてたんだよ。

――それは格闘家としてですか？

木村　まあ、生き方だね。ホントにあのあと空白の時間があって、俺はやり残したことはなかったかと考えたときに、マスクマンになりたいなって思って。

――もともとの憧れはタイガーマスクだったわけですからね。

木村　そうそう。で、先輩の渡部（優一）さんは仮面ライダーやってたじゃん。

――仮面シューター・スーパーライダーですね。ちょっと戻りますけど、結局はヒクソンにも打ちのめされたって意識はそれほどなかったんですか？

木村　ううん、そんなことないでしょ。だって負けたじゃん。

――悔しくて泣いたとは言いますけど、どうしてもリベンジしたいとか、そういう気持ちは湧いてこなかった、と？

木村　やれたらやりたいっていうのはあったけど、そう簡単にできるもんじゃないっていうのはわかってたし。それに、飲まれた時点でもう負けじゃん。だから負けは負けで認めてるよ。負けたんだから、もう何を言ってもしょうがないしね。

――まあ、そうですよね。

木村　試合中に鼻の中に指突っ込まれたとか、そんなのしょうがないじゃん。日本人がやらないことをヒクソンはできただけで。それが闘いなんじゃない？　そういう意味で俺が甘かったんだよ。

――甘かったといいますと？

木村　俺は思うんだけど、ロシアとかブラジルとかとくに感じるけど、ガイジンの凄いとこって、「よーい、ドン！」でさ、「やれ！」って言われたら100が出せるんだよ。友だちだったヤツの顔面が殴れるんだから、それは凄いと思う。

――国民性の違いはあるでしょうね。で、そのあとは宇宙パワーというマスクマンとしての活躍が中心になっていくわけですけども。

木村　マスクマンになりたかったからね。やっぱり、マスク被るとプロレスラーになった気がするっていうか。しゃべりにしても、なんか違った自分が出るんだよ。

――宇宙語をしゃべってましたからね（笑）。で、ここ最近は選手のほかに『AX』やG-SHOOTOとか女子格闘技イベントも手掛けてましたよね。

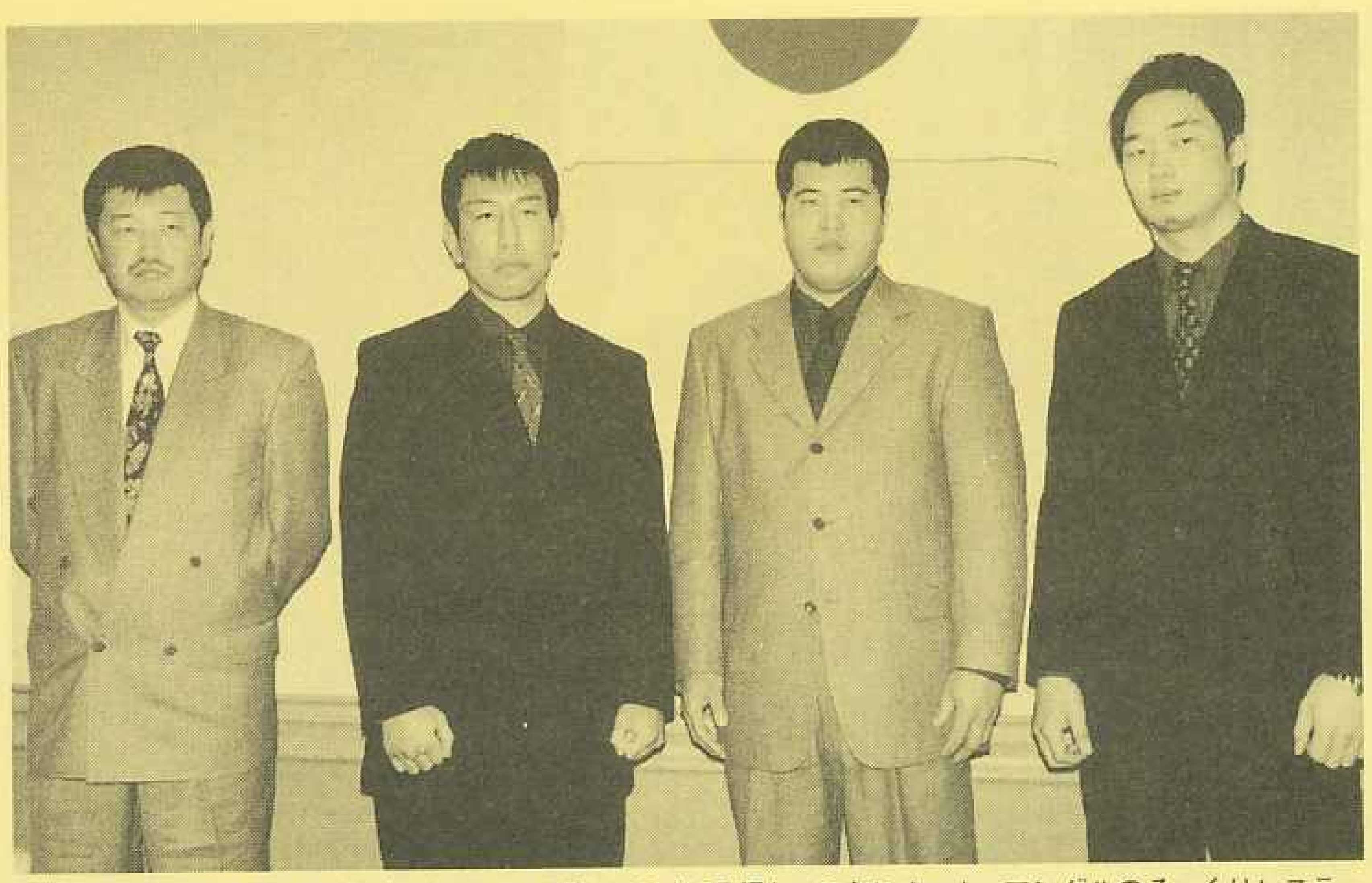
木村　いろいろ騙されたりもしたけどね（苦笑）。べつに儲けようと思ってやったわけじゃなくて、全国にいる女子選手に闘う場を与えようと思って始めたんだけど、ホント、いろいろとあったんだよ。話すと長くなるんだけど。

――一昨年は、お台場でやった『レッスルエキスポ』にも関わって女子格闘技の大会とかもやってましたけど、あれはどういう経緯だったんですか？

木村　あれもいろいろあって、「じゃあ頑張りますよ」みたいな感じで押しきられちゃったんだけど、もうそこで疲れちゃって。で、G-SHOOTOの本興行も損しなければいいかなぐらいのレベルでやってたんだけど、行き詰まりになっちゃって。それで若林さんに相談して男とミックスしてやることになったんだよ。

――「バトルミックス」という大会ですね。

木村　そう。で、俺からは「試合がおもしろいか、チケットが売れる選手だけをください」って要望出して。それが通ったんで、今年の1月からの大会は黒字になってたの。ただ、大問題は、いまは閉めちゃったけど、浅草橋に出した修斗の道場だったんだよね。



2000年4月に後楽園で旗揚げしたJPWAではメインに登場し、のちにカート・アングルのそっくりレスラーとして全日本にも参戦したショーン・ヘルナンデスを下した浩一郎。ZERO-ONE入団前の佐藤耕平や元バトラーツの岡本魂らも参戦していた。

自殺未遂とか、すべての問題は浅草橋に出した道場だったんだよ

――木村さんも深く関わってたパラエストラEASTですね？

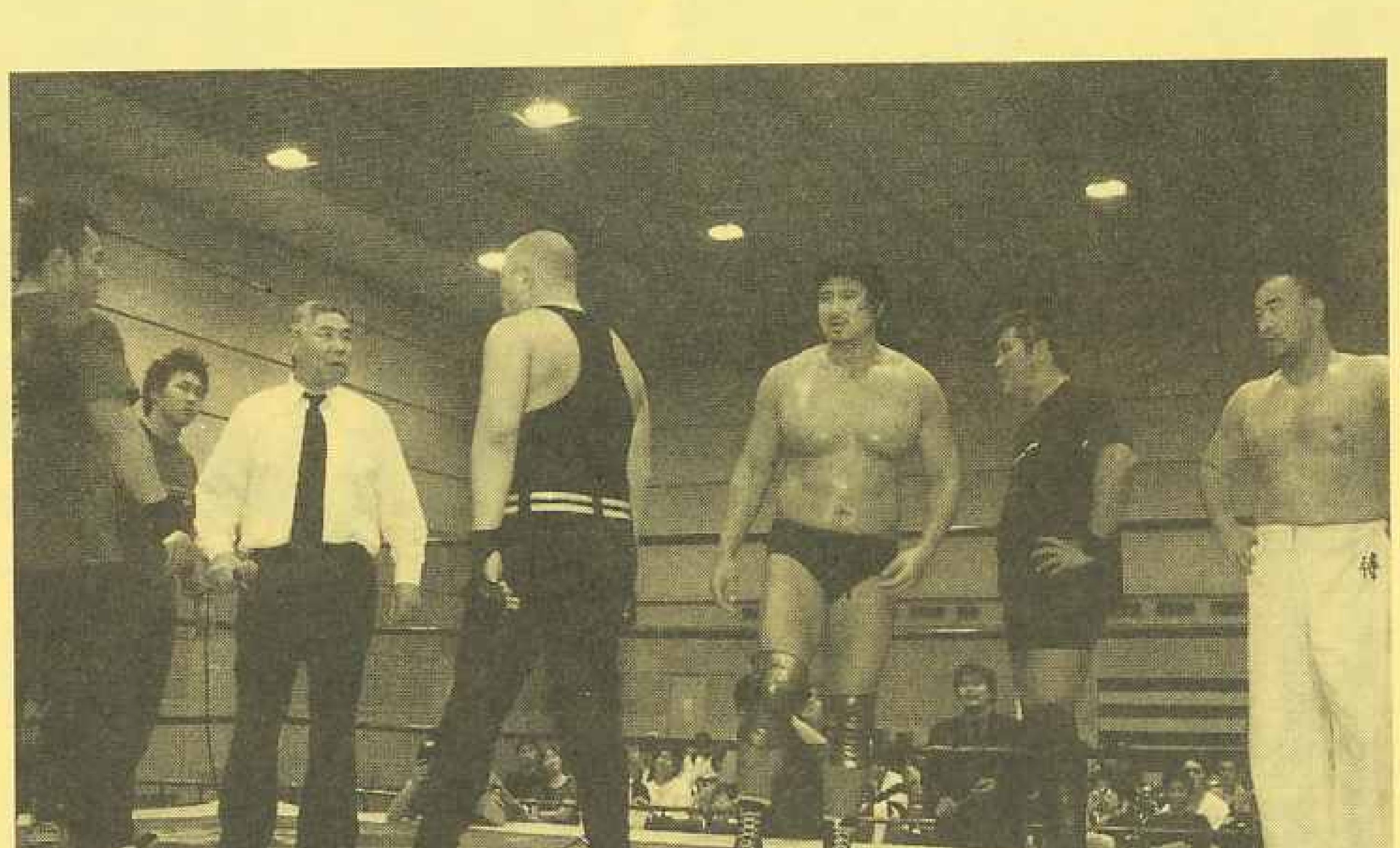
木村　そうそう。あれがすべての失敗だったね（苦笑）。いまから考えると。最初の話では、昼間は女子プロレスで使って、夜はヨガとか何かしらの道場をやるって話だったんだけどね。

――結局はパラエストラEASTでやることになるわけですよね。

木村　「夜は修斗で、パラエストラの名前を使ってできないか」と。捕まった『ゴング』の前田（大作）さんの下の人から頼まれたんだけどね。

――そうみたいですね。前田さんから直接の話ではなかったんですか。

木村　前田さんとも会ったけど、直接ではないよ。まあでも、修斗つながりで若林さんや中井（祐樹）さんとも話して「パラエストラ」って名前を使わせてもらえて。最初は『ゴング』系の話を持ってきた人にも「格闘技の道場は簡単にはいかないから無理です」って断ってたんだけ



“マグマ”でおなじみのWJにも現在はハッスルで活躍している安生洋二らとともに参戦していた浩一郎。ギャラ未払いなどが表面化すると“LAVOR UNION（労働組合）”なるユニットを立ち上げ、リング上で永島勝司専務を追及したことも。ちなみに永島氏は今年5月には「昭和プロレス」なる大会を開催する。



前田とも闘った現役ファイターが語る 初期リングスの真実

ど、昼は女子プロで練習したりして使うので「箱代は出るよ」って言われたんだけど、フタを開けたら俺が真ん中にいたんだよ（苦笑）。

——そしたら、オープン前に前田社長が捕まったりとドタバタがあったわけですよね。

木村　そうそう。12月にお金が入る、入らないっていうのがあって。修斗側が俺の会社が不動産契約するんだったら全面協力するってことで、道場借りるのに結局ウチの会社が借りて、俺が個人の保証人になったんだよ。それで1000万円近くかかっちゃって。しかも翌年の1月7日には道場開きも決まってたんで工事も突貫でね。

——ギリギリで間に合った感じなんですね？

木村　すげえ急がしたもん。俺も若林さんも「リングだ、マットだ」って走り回ってね。で、1月にオープンしたんだけど、会員さんもいきなり28名も入会したんだよ。

——ほぉ。たしか、若林太郎さんの弟の若林次郎さんがコーチを務めていたんですよね。

木村　あの人は社員で、あと佐々（幸範）くんって世界柔術チャンピオンも講師で。

——オープン当時は不安もとくになく「頑張ってやっていくぞ」ぐらいの気持ちだったんですか？

木村　不安だらけだよ。だって金なんかないんだよ。最初に決めてた、女子プロが練習で使うから箱代は出すっていう話もいきなりなくなってるし、ランニングコストは家賃も含めて80万ぐらいかかるから、イベントのあがりを入れても、だいたい月々50万ぐらいの赤字を俺が捻出することになったんだよ。

——それは大変ですよね。

木村　大変なんてもんじゃないよ。それで運命の3月1日だよ。

——運命の3月1日ですか。

眠れない日が続いて、先生が出してくれた薬を大量に飲んじゃったの

木村　当初は不動産取得費、箱代、1月から3月までのランニングコストは『ゴング』の関係者がで払うことになっていて、それで話し合って合意してたんだよ。ところが3月1日に不動産屋からの「家賃が払われてない」という電話から始まって、リングやマットなどの内装関係からもそういう電話が続いてね。要は不動産取得費しか払われてなかったんだよ。

——うわ～。

木村　それは『ゴング』の関係者が払ってるはずのお金だったんだけど、倒産しちゃったのもあって連帯保証人の俺の会社が残りを払わなきゃいけなくなって、それでもう、「うわ～！」ってなって……。

——それはツライ状況ですね。

木村　催促の電話が毎日入るから不安で眠れないし、毎日お金のことを考えて「これはヤバイ」と思って病院に行ったんだよ。そこでハルシオンと安定剤のデパスって薬をもらったんだけど、俺は鬱病って診断されたんだよ（苦笑）。

——あ、鬱病だったんですか。

木村　そう。ホント、地獄だったよ。まあ、いまでもつらいんだけどね（苦笑）。この歳になって初めてお金に困ったり、ホントにごはんが食べられなかったんだよ。で、その病院の先生は「メシぐらい毎日食べにおいで」って言ってくれたんだけど、行けないじゃん、この歳になると。子どもだったら行けるだろうけどさ（笑）。

——そんな親切な先生がいるんですか？

木村　いるんだよ。その薬を出してくれた先生っていうのも、普通に風邪ひいて行った病院の先生で、五反田にある「タカラクリニック」の高良先生っていうんだけど。で、先生は俺が格闘技をやってるって知ったら「アキレス腱固めってホントに痛いの？」とか聞いてきたから、かけてあげたら感動してね。それからの付き合いだから。

——アキレス腱固めがきっかけでしたか（笑）。

木村　そう（笑）。それからは金銭面とかでも援助してもらったりして、いまではその先生の秘書として働いてるんだよ。

——へぇ～、それもまた凄い出会いですねぇ。

木村　ホント、命の恩人だし、感謝してもしきれないぐらいなんだけど、当時はもういっぱいいっぱいになって、先生が出してくれてた、その薬を飲んじゃったんだよね。去年の6月18日の金曜日に。

——それこそ、マット界的には安田忠夫さんの自殺未遂騒動がありましたけども、その裏で木村さんも同じようなことがあったわけですね。

木村　そうだね。へんな話だけど、俺も安田（忠夫）さんみたいに薬を飲んでから5人ぐらい友だちに電話したんだよ。

——安田さんも何人かにメールを送ったみたいですけど、もしかしたら誰かに助けてもらいたいって気持ちがあったんですかね？

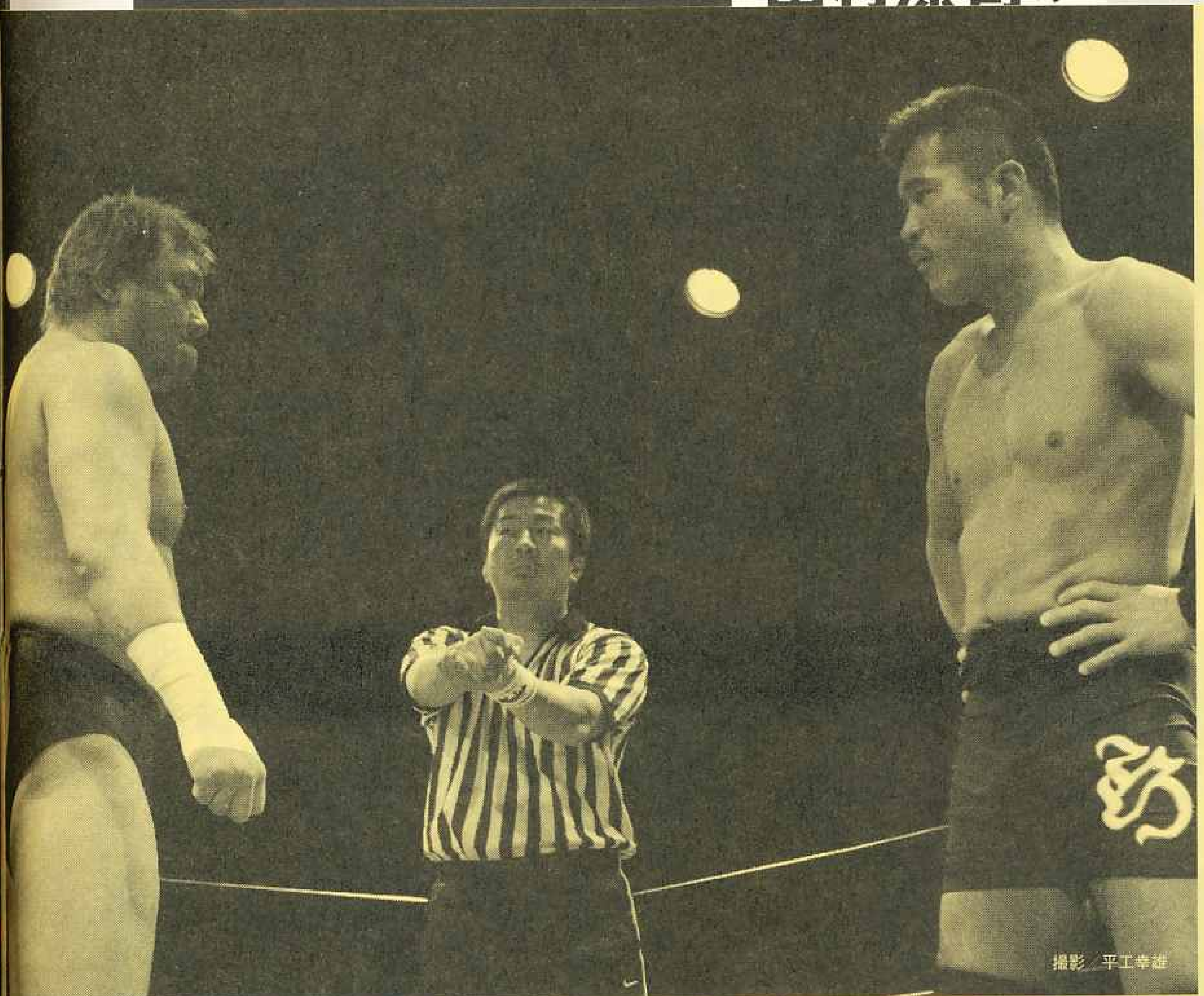
木村　ううん、全然。「あと誰にすっかな」みたいな感じで電話してた。「死ぬからあと頼むね」って。でも死ぬか死なないかなんてわかんないじゃん、医者じゃないし。でも飲んだんだよ、無意識にプチプチプチッて開けて。



女子総合格闘技の老舗団体スマックガールではレフェリーを務めていた浩一郎だったが、2001年10月には当時の女子総合のスター選手だった星野育蒔をエースに新団体『AX』を旗揚げ。しかし、翌年に活動休止。



2004年11月には修斗の女子イベント『G-SHOOTO』を立ち上げ、統括プロデューサーに就任した浩一郎。Zepp Tokyoで開催された旗揚げ戦は音楽やダンスも取り入れ、ド派手な旗揚げ戦となったが、その後は紆余曲折あり、現在は男子選手も交えての『バトルミックス』として開催されている。


撮影 平工幸雄

さまざまな苦労もあってか現在は体重も85kg前後という浩一郎。今年の3月23日には一度目の自殺未遂直後に出場したという池田大輔のフーテン・プロモーションに参戦、池田と闘うもアキレス腱固めで敗れている。

いろいろやったんだけど、状況は変わらず、9月に二度目の……

——結局、どうなったんですか?

木村 友だちが明け方に鍵を借りてきてくれて。そしたら俺はゲロ吐いてて、あと5分か10分で窒息死するって状態だったみたい。

——窒息死寸前で発見された、と?

木村 そう。それで救急車で運ばれて、胃を洗浄して。

——いまは離婚されたみたいですけど、家って二つあったんですか?

木村 俺、ずっと単身赴任じゃん。群馬にいるんだよ、子どもは。

——そうなんですか。で、病院はすぐ退院できたんですか?

木村 そうなんだよ。凄いんだよ、車イスに乗ったり、心電図でつながれてもしゃべってたんだよ。「殺すぞ、おまえら!」って医者に。それを友だちが写メとかで撮ってんだよ（笑）。俺は記憶がないんだけど、それで医者がビビッて「帰ってくれ」ってなったんじゃない?

前田とも闘った現役ファイターが語る
初期リングスの真実

——そうなんですか。

木村 で、次の日の朝、普通に起きたんだよ。それが日曜日の朝で。でも土曜日の朝のつもりだから、「あぁ、起きた。打ち合わせ行かなくちゃ」って言ったら「何曜日だと思ってるの?」って聞かれて。「だって土曜日だろ?」って言ったら「日曜日だよ、何やってんすか」とか言われて。その日曜日が池田（大輔）さんの『バチバチ』の試合だったの。

——え、試合が組まれてたんですか。

木村 そう。それで知人が池田さんに電話してくれて「すいません、木村が練習中にどうたらこうたら」って言ってくれたんだけど、俺は試合に出るつもりで「うるせえ」って言って池田さんに電話して「いまから行くから」って試合に行ったんだよ。けっこう、ヤバイ状況だったみたいですけどね（笑）。

——それは無茶しすぎですよ!

木村 それが一回目。

——え、一回目って、もしかして、二度目もあるんですか?

木村 そうなんだよ（苦笑）。

——うわ〜。それほどまでに追い込まれていたんですね?

木村 追い込まれていたっていうか、もう、支払いができずにいた業者の人たちに対する思いだよね。でも、払いたくても払えないんだもん。いろんな業者から「いいかげん、いつ払ってくれるんですか?」とか、多いときは16社ぐらいからきたんだよ、電話が。

——16社! それはしんどそうですね。ボクも額は少ないですけど、借金の取り立てにあったことがあるんで、気持ちはわかります（笑）。

木村 毎日ガンガン電話がかかってくると、ホント「すいません」しか言えなくなるんだよ。で、もうダメだって思って。それで、そのあとも道場閉めたりいろいろやったんだけど、状況は変わらず、9月に二度目の自殺未遂（苦笑）。

——また睡眠薬とかですか?

木村 いや、当時は車があって、アメ車に乗ってたんだけど。夜の打ち合わせが終わって、山手通りを走ってたら、センターが工事してんの。で、ふと右側を見たら、デカい柱があるんだよ。あれにぶつかったら楽になるんじゃねえかって思ってさ、ガーッとスピード出して。夜だからよく見えなかったんだけど、柱の前にあった鉄骨に激突して、右のタイヤは飛んで、ラジエーターも弾けて、スライドドアの右側は太腿ギリギリまできて、フロントガラスが割れて、エアバッグが「バンバーン!」って2発出て……、それでも無傷だったんだよ（苦笑）。

——うわ〜……。いまとなってはですけど、さすがプロレスラーというか（笑）。ちなみにそれはいつの話ですか?

木村 去年の9月16日。

——エッ、そんな最近の話なんですか?

木村 そうそう（苦笑）。で、その日も試合だったんだよ。『新選組』って知り合いのところの大会で。

——車が大破したのに試合には出たんですか?

木村 うん。無傷だったしね（笑）。で、その話も顛末がちゃんとあって、車両保険入ってて全損したから、それで未払いだった選手へのギャラが払えたっていう。

——不幸中の幸いというか（笑）。

木村 ホントそうだよ。

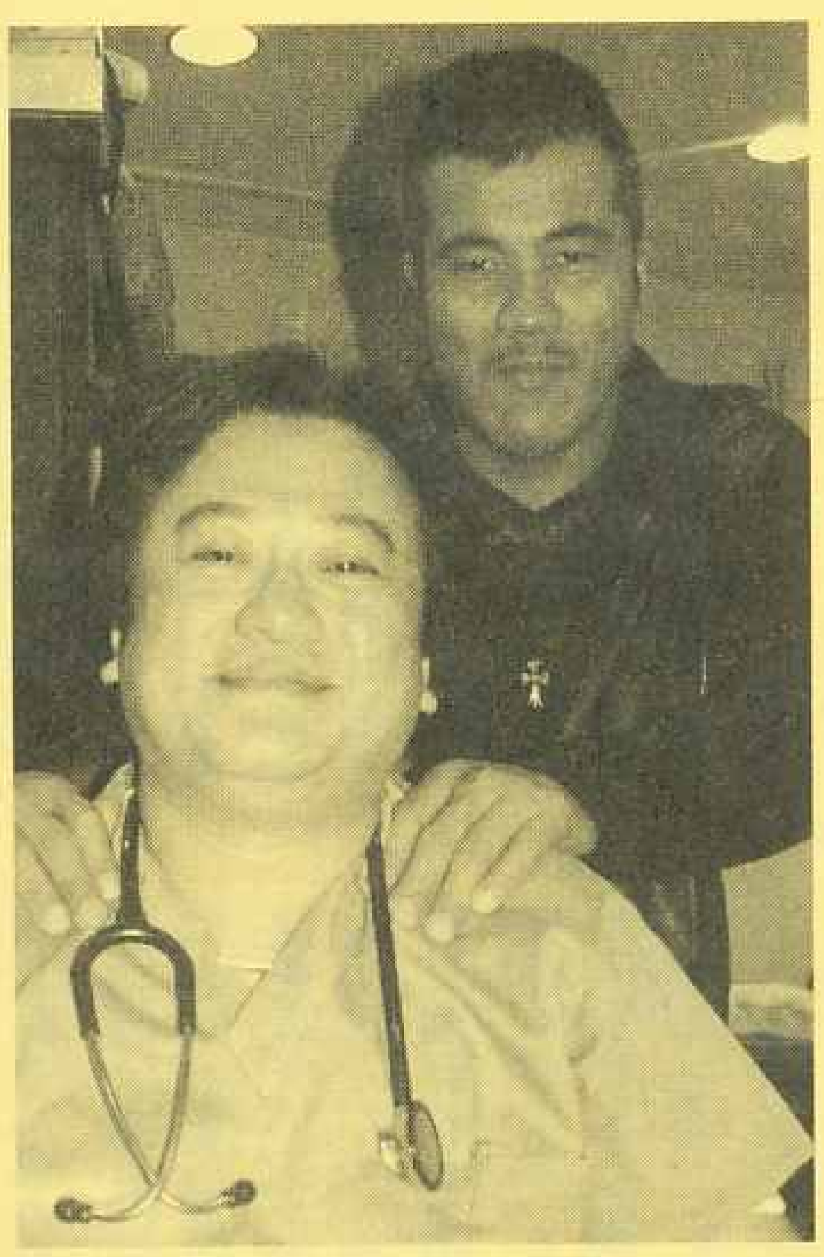
——いろいろ大変かとは思いますが、先生の秘書をやりつつ、今後もプロレスは続けていくんですか。

木村 まあ、タイミングが合えばね。やっぱりプロレスラーになることが夢だったから。でも夢は夢のままのほうがよかったかなとも思ったけど。でも、波瀾万丈だろ、俺?（笑）。

——波瀾万丈すぎますよ!（笑）。ボクとはケタというか額は全然違うとは思いますけど、これからも頑張って返済していきましょう!

木村 チョロに言われなくても頑張ってやってくよ（笑）。

【08年3月20日／都内某所にて収録】



きむら・こういちろう■1969年11月18日、群馬県出身。FMWでプロデビュー後はリングス、新格闘プロレス、西日本プロレス、DDTなどで活躍。『AX』やG-SHOOTOなど女子総合格闘技にも深く関わる。昨年1月にはパラエストラEASTを立ち上げるも、現在は閉鎖。現在は“命の恩人”でもあるタカラクリニックの高良毅先生（写真左）の秘書を務めつつ、素顔と宇宙パワーを使い分けプロレスラーとしても活躍中。183cm、87kg。



4.9 K-1 MAX広島大会で大爆発! K-1ワールドユースがMAXを凌駕した!!

10代による極上の"真剣勝負"!! HIROYA vs 藤鬥嘩裟に鳥肌全部立った!!

君はHIROYAvs藤鬥嘩裟を目撃したか? 4.9 K-1MAX広島大会でついに実現した"アンダー20"運命の一戦は、両者の度を超えた意地の張り合いと舌戦によって、凄まじくヒリヒリ感あふれる大激戦となった。10代の二人が格闘技界に投げかけた巨大な"波紋"、その正体に迫る!!

構成/真下義之 撮影/乾普也

いまこそ"真剣勝負"やれんのか!



“ガキッぽい感情”の魅力が大爆発!!

HIROYA vs 藤門嘩裟はなぜ、名勝負になりえたのか?

テレビ観戦ではあったが、4・9K-1 MAX開幕戦は文句なしに〝世界最高峰〟といえる内容だった。魔裟斗のノンストップ・ラッシュに唸らされ、アンディ・サワーのハイキックには王者の底力を感じた。それでも、今大会でもっともインパクトを残したのはワールドユース対決、HIROYA vs 藤門嘩裟だ。そう断言する。

この一戦は、ほかのどの試合よりも〝闘い〟としての濃度が際立っていた。今号でフィーチャーされている言葉でいうなら〝真剣勝負〟である。単なる勝ち負けを超えた試合。己の全人格をかけ、負ければ存在そのものを否定されかねないリスクを背負っての闘い。負けたほうがどうなってしまうのか、想像することさえためらわれるような〝真剣勝負〟は、二人がリングに上がる前から始まっていた。

HIROYA、16歳。藤門嘩裟、15歳。未来だけを見ていればいい年齢の、背負うものなど何もないはずの二人は、しかし試合にいたる過程で重たい何かを自ら背負っていった。

先手を打ったのは藤門嘩裟だ。J-NETWORKのリング上で対戦表明。カード発表の記者会見では、「負けません！」の一言に思いを集約させた。その思いつめた表情に触発されたのか、以前はインタビュアー泣かせの〝優等生〟だったHIROYAもキラー化する。曰く「いまの僕には勝てない」、「相手じゃない」。

この会見で取材陣を唖然とさせた両者は、その後も発言をエスカレートさせていった。

「わからせてあげたい」(HIROYA)

「寝言は寝て言ってろ」(藤門嘩裟)

挑発合戦の凄まじさ、そのあまりの危険な雰囲気に、立ち技格闘技にはまるで関心がない本誌編集部さえ惹きつけられた。濃厚に立ち込める〝真剣勝負〟の匂いは、ジャンルの壁など簡単に突き破るのである。

公開練習でHIROYAのどんな技が危険かと聞かれた藤門嘩裟は、会見のとき同様に「ないです」とバッサリ。所属する藤ジムの加藤重夫会長も「モノが違う。負けたらおかしい」と豪語する。対するHIROYAは加藤会長の1RKO宣言に「負けたらなんて言い訳するか楽しみ」と返し、さらにセコンドのKICKBOX・鴇稔之会長まで「(相手が)何をもって逸材なのかわからない」と見下してみせるのだからたまらない。

彼らはあくまでも本気で言っていた。自分を崖っぷちに追い込むため、ファンを煽るためのリップサービスではなかった。リップサービスは、プロ意識の表われとして悪いことではない。「頑張ります」しか言えないよりは数段上の表現といっていい。

だが〝わざとやってる〟〝あえて言っている〟とさとられた瞬間、ほんのわずかではあっても安っぽさが漂



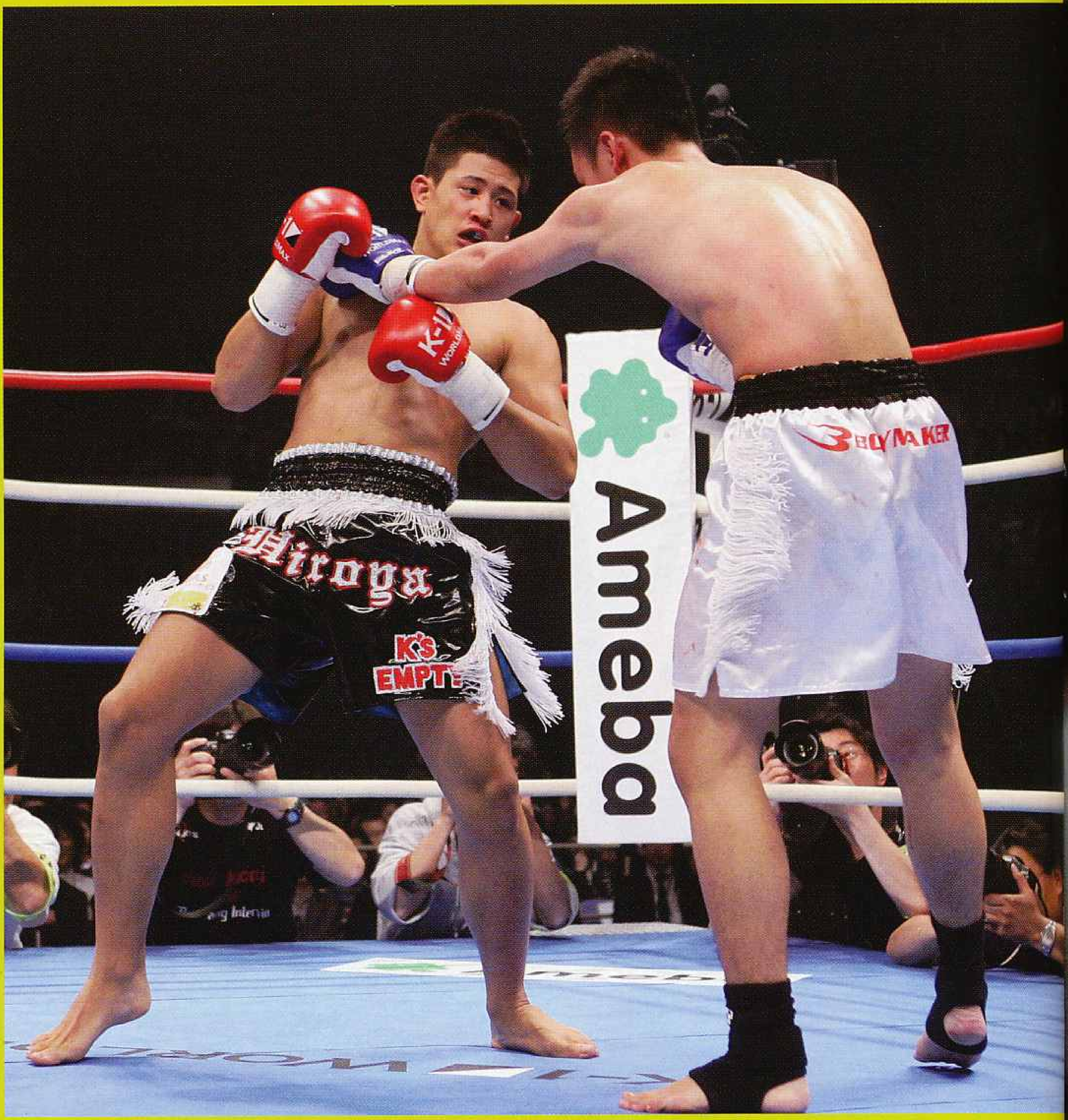
「見えない!　そして手が3本に見える!」と加藤会長が絶賛する前蹴りに徹底的にこだわり抜いた鬥嘩裟だが、隠れた得意技バックブローも見事にヒット!　K-1ルールへさらに適応すれば末恐ろしい選手になることは間違いない。



「よーし!　よしよしッ!」と試合中のアドバイスで、一際目立っていたのがご存知、加藤会長。鬥嘩裟に"極真魂"を叩き込んだ業界屈指の名トレーナーだけに、次なる一手、さらなる二人三脚ぶりに期待は膨らむばかりだ。



鬥嘩裟が大好きな映画『パイレーツ・オブ・カリビアン』のテーマでやや緊張の面持ちで入場すれば、HIROYAは四つ打ちのダンスミュージックで、ケンカ上等の厳しい表情で登場と、入場でも二人のコントラストは際立っていた。



[4.9 K-1 ワールドユース 2008特別試合]
広島・広島グリーンアリーナ

○HIROYA vs 藤鬥嘩裟×
(3R 判定 3-0)

異様な緊張感にあふれたこの一戦、試合は前蹴りを怒濤のごとく打ちまくる鬥嘩裟、前蹴りや大振りのパンチで対抗していくHIROYAといった構図。2R、鬥嘩裟はHIROYAの顔面を前蹴りで打ち抜き、鼻から出血させる。HIROYAは3R、強烈なボディを炸裂!　これが決定打となる。鬥嘩裟は崩れることなく最後まで闘い抜くも、HIROYAが3-0で判定勝利を挙げた。

う。"わざと"や"あえて"が小賢しく思えてしまうのだ。

だが、HIROYAと藤鬥嘩裟には小賢しさなど微塵も感じられなかった。きっと彼らには、自分を崖っぷちに追い込んでいるという意識すらなかっただろう。自分のほうが強い、絶対に勝てると信じきって、それを言葉にしていただけなのだ。彼らが抱いた自信、発した毒にはなんの混じりっけもなかった。だからこそ、この一戦の凄味は、ワールドユース本来のセールスポイントである若さやさわやかさ、「大人顔負け」といった常套句が及ばぬ領域にまで達したのである。

冷静に見れば、二人の因縁は"売り言葉に買い言葉"の連続で生じたものだ。根っこにあるのは「あいつ、気にいらねぇ」というガキっぽい感情だろう。ガキの言うことがガキっぽいのはあたりまえ?　まあ、確かにそうだ。ただ、HIROYAと藤鬥嘩裟のガキっぽさは、年齢だけが理由ではないように思える。むしろ、それは見る者のハートを沸騰させる才能のような気がするのだ。

たとえばアントニオ猪木である。日本人対決がタブーだった時代に団体の大看板・ジャイアント馬場に挑戦状を叩きつけたのはガキっぽい行動ではなかったか。ボクシングの現役世界王者モハメド・アリと闘うことで世間と勝負しようという野望もガキっぽかった。プロレスを格闘技に戻そうとしたUWFも、世界中の強豪を集めて一夜で真の王者を決めるK-1も、競技のワクを超えて強さを競うバーリ・トゥードという試合形式も、やはりガキっぽい。そもそも強さを追求すること自体、ガキっぽい行為ではないか。

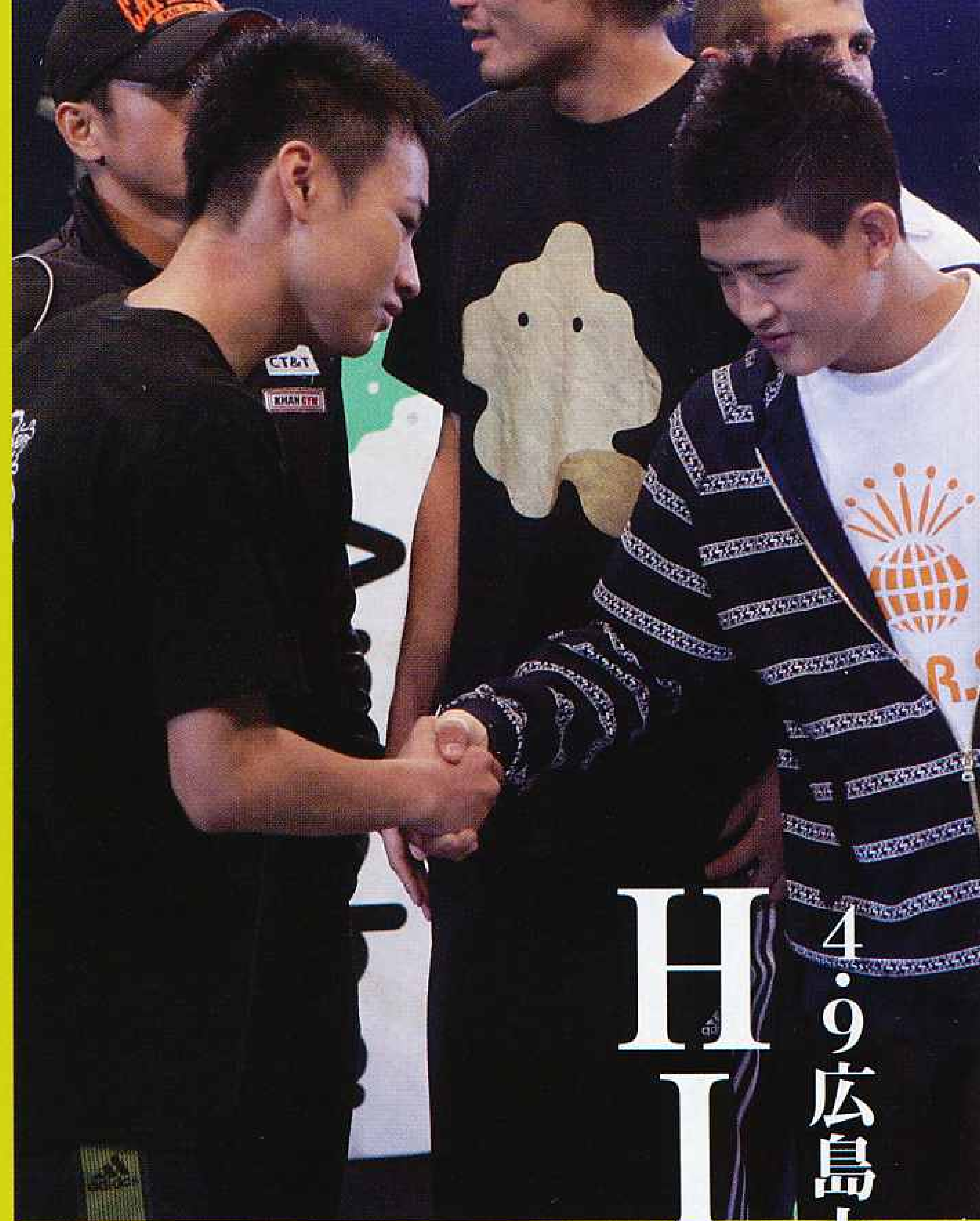
HIROYAと藤鬥嘩裟が、かつての猪木クラスのカリスマになるという保証はもちろんない。ただ確実にいえるのは、格闘技の世界では大人の分別よりもガキっぽい感情のほうが圧倒的に魅力的だということだ。

本誌で"真剣勝負"がテーマになるのは、現在のマット界にそれが足りないからだ。うまく立ち回ること、自分の価値を落とさないことばかり気にかけ、強さよりも"強く見せる"ことに軸足を置く。そんな人間が少なくないのである。「○○が××戦のオファーを蹴ったらしいよ」、「リスクが高いと踏んだんだろうね」。そんな会話があたりまえのように飛び交うこの世界で、HIROYAと藤鬥嘩裟のガキっぽさは稀有な輝きを放っていた。

この試合を生観戦せずに原稿を書くことに、引け目を感じないわけではない。だが誤解を恐れずにいえば、試合を観なくてもかまわなかったとさえ筆者は思っている。HIROYAと藤鬥嘩裟は、己のガキっぽさに忠実だった。ガキっぽさを隠そうとせずにリングに上がり、罵倒し合った相手と向き合い、そして結果が出たのである。

一人は勝利を手にした。もう一人は、この敗北を背中に貼りつけたまま生きていく。試合内容や技術論など問題ではない。結果の重み、事実の残酷さだけでも、HIROYA vs 藤鬥嘩裟戦は名勝負と呼ぶに値する。

(橋本宗洋)



4.9広島大会でいったい何が起こったのか? テレビでは流れなかった
HIROYA vs 藤門嘩裟

圧倒的な緊張感! 地上波でもバッチリ中継されたことで、多くの方が〝アンダー20〟の黄金カード、HIROYA vs 藤門嘩裟をご覧になっただろうが、ここではこの試合の〝テレビに映らなかった部分〟をレポートしたい。

試合後、関係者や記者陣もあちこちで「円嘩裟くんはいいねぇ!」とか「HIROYAは強いよ!」と興奮を口にしていたが、谷川FEG代表も「今日、みんなが一番観たかったカードじゃないでしょうか」「15歳と16歳があれだけの勝負論と緊張感を持ってやるとは」と上気した顔で、大絶賛!

その期待度を証明するように、これまでオープニングマッチ扱いだったワールドユースの試合が、現・世界王者アンディ・サワーの試合を差し置いた第7試合、休憩前のトリの位置に一気に〝飛び級〟していたのだから驚きだった。

それもあってか「こいつは何があったって、緊張しねぇんだから!」と円嘩裟の魂のトレーナー・加藤重夫会長が常々語っているこの言葉も、この日ばかりは事情が違ったのかもしれない。プロのリングの経験はあるとはいえ、この大舞台で闘う円嘩裟はこの試合がK-1デビュー戦でもあったからだ。

入場では、フードをスッポリと被って登場した円嘩裟。後楽園ホールでは、堂々と振り回していた右腕も控えめに一度上げただけ。いつもの「集中しきってるから、よく覚えてない」ほどの異様な没入感は感じられず、リングでシャドーをするあいだは、不安げな表情も見受けられた。

一方、HIROYAは自身のホームという自覚が強いのか自信満々。前回は『I LOVE HIROYA』と入ったキュートなTシャツで笑顔を振りまいていたが、今回はドン・ナカヤ・ニールセン戦時の前田日明ばりのゴンタ顔でふてぶてしく入場! まさに本当は恐ろしい、キラーHIROYAの誕生だ。

会場の反応は広島という地もあってか、どちらかに肩入れした声援というより、両者からほとばしる殺気と攻防をかたずを飲んで見つめるという格好。静まり返った会場では「よーし! よしよしッ!」「効いてない! 効いてないッ!」という加藤会長の怒声が鳴り響く。

判定決着には、両者ともに納得のいかない表情を浮かべていたが、HIROYAは「初めての広島で、お好み焼きを食べて楽しかったです!」と一転、無邪気な16歳に戻ってマイク。円嘩裟は、ワールドユースの監督・前田憲作から声をかけられたあと、すぐに退場してしまった。

「まぁ、僕は負けちゃったんですけど……それだけです」。いつ何時も、異様な負けん気を発揮する円嘩裟もこの日のコメントルームでは伏し目がちに返答。それでも勝負を分けたHIROYAのボディ攻撃には「ボディは効かなかったんですけど……徐々に動けなくなってしまって」とばかり、ノーダメージを強調し、「今度は勝つ自信があります!」とまたまた断言するからたまらない。

もっともHIROYAのほうも「前蹴りは全然効いてないけど、鼻血が出やすいんで出ちゃいました」「今後も闘う可能性はあるんで、仲よくする気持ちはない」とこれまた徹底した意地を貫いていたのだが。

だが敗戦を喫した円嘩裟は、さすがに控室で1時間ほどうなだれて放心状態だったという。この試合に懸けていた加藤会長もショックを隠しきれなかった様子。だが円嘩裟の積極果敢なファイトをモニターで目にしていた同じ控室の日本人ファイター城戸康裕や、アルトゥール・キシェンコと対戦したジョーダン・タイのチームから肩を叩かれ、はげまされていた模様だ。

また加藤会長も普段の厳しい言動とは変わって、この日は「いい試合だったぞ」「また頑張ればいい」と優しく奮起をうながし、谷川代表も円嘩裟の控室に自ら足を運んで、今後も継続参戦してほしい旨を伝えたという。

大会翌日、朝イチで『みのもんたの朝ズバッ!』(TBS系)に出演したHIROYAとは対照的に、なんと円嘩裟は早くも翌々日から練習をスタートさせている。

やはり、どこまでいっても反発し合う両者だ。どこまでいっても水と油。

…が、じつは大会終了後、選手が集合する場面でなんと握手を交わすシーンもあった!

だが、上の写真をよく見てほしい。なんと二人とも互いに視線をまったく交わしていないのだ。周囲が笑顔に包まれる中、闘い終わってノーサイドの法則はこの意地っ張りの両者には、適用されないのか?

最後の最後まで、二人の〝異質さ〟は際立っていた。そう、HIROYA vs 藤門嘩裟という過剰なドラマは、まだまだ始まったばかりなのかもしれない。

（真下義之）



意気消沈しながらも、HIROYAとの体格差に関しては「いや、感じなかったです」「ダメージ? ないです!」と決して弱みを見せない円嘩裟。そのかたくなな意地の張りっぷりは、あっぱれだ。



試合前は円嘩裟戦を「自分のためにならない」とキラー発言していたHIROYAだが、試合後は「思ったより差が出なかった」と語り、「自分は勉強が足りなかった」と真摯に反省する態度も。

熱いのはユースだけじゃない!!　4.9 K-1 MAX広島大会レビュー



[世界一決定トーナメント FINAL16]
◯佐藤嘉洋 vs ムラット・ディレッキー×
(3R 判定3-0)
魔裟斗との対戦を再三希望している佐藤の相手はトルコ出身の実力者。ローキックと前蹴りを主体に"負けない"反復殺法で、判定勝利を奪ったもの、翌日の抽選では、魔裟斗の相手をドラゴに奪われ、自身の相手はブアカーオになる悪運ぶりを発揮!



[世界一決定トーナメント FINAL16]
◯魔裟斗 vs ヴァージル・カラコダ×
(3R 0分22秒 KO)
MAXの"絶対的主役"魔裟斗の08年度最初の試合は、元ボクシング王者・カラコダとパンチで真っ向勝負! 3Rに右フックがズバリと命中! 見事なKO劇でメインを飾り、「みんな見ててよ。俺はガンガンやるからさ!」とトーナメント優勝宣言をブチ上げた。





MAX初の地方大会だったが、「地方だからといって、決して手を抜かない」と谷川代表。好勝負連発にゴキゲンで、メインの魔裟斗も「もう達人の域ですねぇ」とベタぼめ!

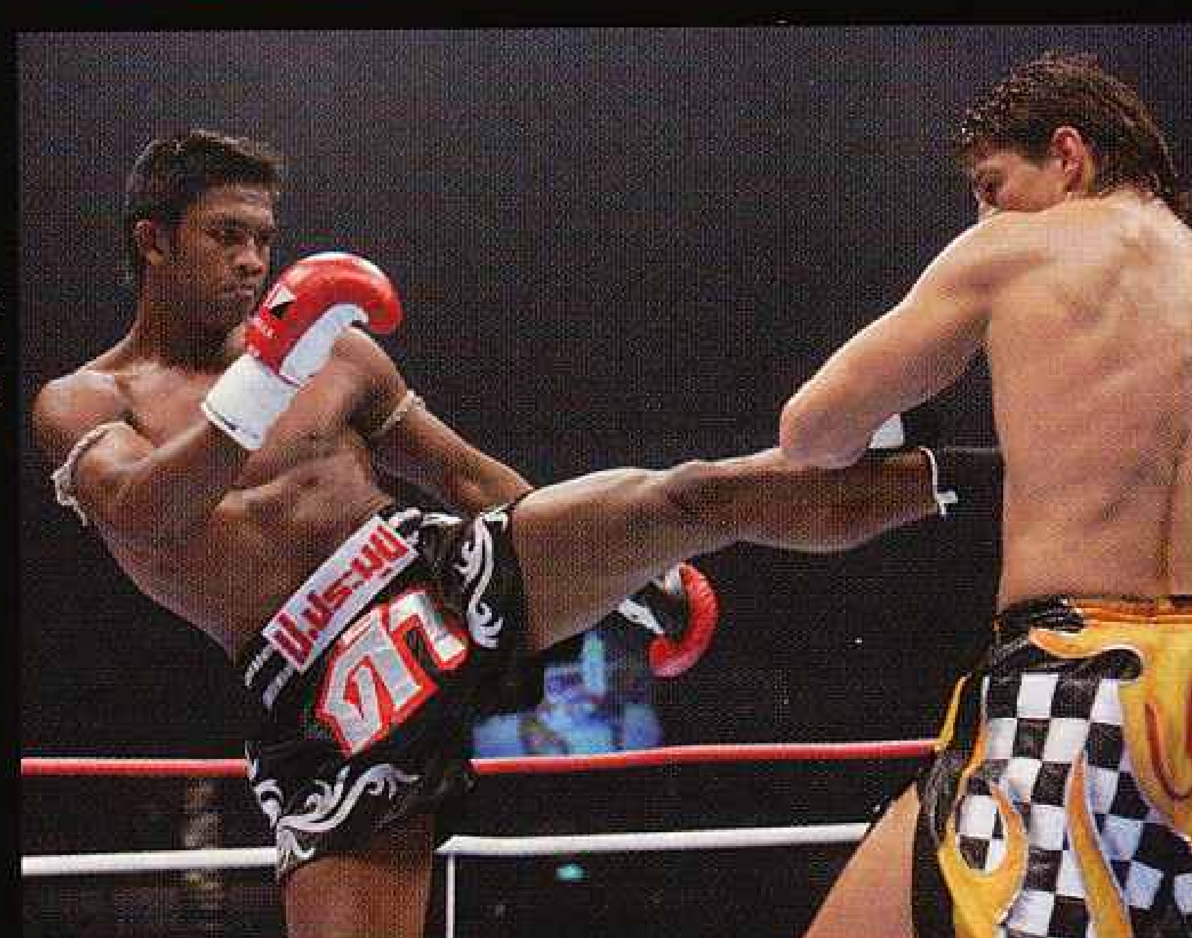


"世界最高峰"の8人がメイン後に勢揃い。だが、翌日のカード抽選では、対戦コールが集中したことに魔裟斗が「ムカついてきた」と不快感を表明! 怒濤の2回戦も見逃すな!



[世界一決定トーナメント FINAL16]
◯ブアカーオ・ポー.プラムック vs アルバート・クラウス×
(延長R 判定 3-0)
元世界王者同士という"負けられない理由"を持つブアカーオとクラウスが1回戦から激突! ブアカーオが試合を支配し、延長Rでは押されたもの、最後は判定勝利。"絶対王者"が今年も8強に進出だ。

[世界一決定トーナメント FINAL16]
◯城戸康裕 vs イム・チビン×
(1R 0分40秒 KO)
日本代表トーナメントで飛び出した期待の新鋭・城戸は、開始早々にヒザ蹴りを爆発! これがチビンのアゴを捉えて、わずか40秒でKO! この秒殺劇に城戸は「ヤバ〜イ! ウッホッホ!」と歓喜のマイク。



世界一決定トーナメント FINAL8
『K-1 WORLD MAX 2008』
東京・日本武道館
7月7日(月) 16:30開場／18:00開始

主要対戦カード
魔裟斗(日本／シルバーウルフ) vs ドラゴ(アルメニア／ショータイム)
ブアカーオ・ポー.プラムック(タイ／ポー.プラムック) vs 佐藤嘉洋(日本／フルキャスト／名古屋JKファクトリー)
アンディ・サワー(オランダ／シュートボクシング・オランダ) vs ワレン・スティーブルマンズ(南アフリカ／ボスジム)
城戸康裕(日本／谷山) vs アルトゥール・キシェンコ(ウクライナ／キャプテンオデッサ)

チケット料金
SRS席／23,000円　SS席／14,000円　魔裟斗応援シート／14,000円
S席／10,000円　A席／6,000円

お問い合わせ
FEG TEL.03-3796-5060





[世界一決定トーナメント FINAL16]
◯ドラゴ vs GORI×
(3R 2分56秒 TKO)
MMAが主戦場のGORIがアメリカ代表として参戦。今日も"ドラゴダンス"で登場のドラゴが変幻自在の打撃で、GORIをかく乱。最後は左のフックでGORIを轟沈させた。



[世界一決定トーナメント FINAL16]
◯アンディ・サワー vs マイク・ザンビディス×
(延長R 2分05秒 KO)
昨年の世界王者・サワーは"鉄の拳"ザンビディスと大激戦を展開! 両者の打撃が交錯するノンストップバトルは、延長戦でサワーがハイキックで劇的決着!



[オープニングファイト K-1ワールドユースルール]
◯瀧谷渉太 vs ヴィッタリー・リスニアク×
(3R 2分56秒 TKO)
ユースの新鋭がまたも登場! プロデビュー以来、4戦4勝4KOの瀧谷(18歳)が、突進ファイトを貫き判定勝利。



[世界一決定トーナメント FINAL16]
◯ワレン・スティーブルマンズ vs サロ"ザ・シシリアンドン"プレスティ×
(2R 1分6秒 KO)
未知の強豪同士の対戦は、スティーブルマンズが2Rの序盤にヒザ蹴り、フックを次々と炸裂させ、KO勝利!



[世界一決定トーナメント FINAL16]
◯アルトゥール・キシェンコ vs ジョーダン・タイ×
(3R 判定3-0)
弱冠21歳の"死神"キシェンコは、この日もハイレベルな攻防を展開。手数で勝ったキシェンコが判定勝利。



“皇帝”ヒョードルはどこへ向かうのか!?

レッドデビル代表
ワジム・フィンケルシュタイン氏 独占インタビュー

ここでしか読めないスペシャル企画が満載!!

まだ見たことがない!?　いますぐアクセスするんだ!

kamipro.com
MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
カミプロドットコム

http://www.kamipro.com

実！ 毎日アクセスしてください！

ニュース

プロレスも格闘技もまとめて読める! マット界のニュースを日々更新します

日々、大小のニュースであふれかえっているマット界。プロレスファン、格闘技ファンのニーズにいっぺんに応えるニュースを大放出。重大カードを発表する記者会見、衝撃的な参戦選手の発表、気になってごはんもノドを通らないような試合結果などいち早くお届けしています。



フォトニュース

思わず心が温まるナイスな笑顔! 表に出てこない写真をお蔵出し!

毎日、編集部員が駆けずり回って取材活動をしている中でポロっと出てきたナイスな写真。世に出る前に葬り去られてしまう前に、こちらでポンとお蔵出し！ ギターを抱えて歌う木口先生、MMA初勝利にはにかんだ笑みを浮かべる若翔洋、プロレス探険隊（金沢“GK”克彦隊長&小松隊員）とともに笑顔を見せる永田さんなど、思わず心が温まる写真ばかりをピックアップしています。





『kamipro』編集部界隈の“熱”と“空気”をデジタル化!! マット界のフレッシュな話題とヨタ話を毎週配信します!!

カリスマ司会者**原タコヤキ君**presents

mimipro

週替わりゲスト紹介



THE PEHLWANS代表
井上崇宏
本誌や『ハッスルオフィシャルサイト』などでもおなじみの変態ライター。切れ味鋭い取材には定評がある。最近は木村カエラにどっぱまり中。

ターザン山本! 追悼特番で“山本”の秘話が炸裂!

▼4.1配信
「ターザン山本! 追悼特番」

『生前追悼ターザン山本!』発売当日の4月1日に配信されたターザン山本! 追悼特番では、冒頭から泣き崩れるなど不安定な感情のまま収録に突入。本の話題、つまり“山本”の話題でおおいに盛り上がった。『テリー伊藤ののってけラジオ』(ニッポン放送)で明かしたラブホテルでの情事の後日談や“山本”とのガチンコバトル秘話を大公開!



ハッスル事情通ライター
八木賢太郎
本誌の奥付には必ず登場する永久非番ライター。子育てと副業の不動産経営の合間を縫って、独自のパイプで『ハッスル』情報を収集する。

本誌前編集長・山口日昇を最もよく知る男が初登場!

▼3.19配信
「『DREAM.1』と『ハッスル』について」

毎号、本誌の奥付で“非番”として名前だけは載っているのに、本誌でのお仕事はほとんど担当していない八木賢太郎が『mimipro』初登場。山口日昇・本誌前編集長との腐れ縁を振り返りつつ、『DREAM.1』と『戦極』の演出や煽りVTRから見えた違い、そして10歳の息子さんが『ハッスル』を観たときの意外な反応について語りまくりだ!!



野良犬
阿修羅チョロ
本誌編集部の野良犬。インディー、小ネタ、弱火ギャグにはめっぽう強いが、前歯はない。7月に『THE OUTSIDER』出場決意か!?

『THE OUTSIDER2』に出撃!? 危険な男の爆弾トークが炸裂!

▼4.10配信
「『THE OUTSIDER』にあの男が出撃か!?」

阿修羅チョロという名前を背負い、日々ニュースに追われまくる男が、とっておきの秘蔵ネタをしゃべり倒す! 『kamipro』編集部在籍10年目となる今年、磨きをかけまくった自爆芸が炸裂。勢い余って7月の『THE OUTSIDER2』出撃宣言まで飛び出した!? 明日なき男のつんのめり気味な暴走トークをお楽しみください。

※バックナンバーもお楽しみください!!

このほかにもコーナーが充実! 毎

最新号情報

表紙の写真、記事の内容、発売日情報など本誌最新号の情報をいち早くお知らせます

「いつ発売するんですか?」「誰のインタビューが載ってるんですか?」「売り切れちゃって買えなかったんですけど、どこに行けば買えますか?」そんな悩みを一発で解消! 本誌の最新情報を「発売日前に知りたい!」という人は、ぜひkamipro.comでチェックしてください。さらに、エンターブレインの通販サイト「eb!ストア」とリンクしているので、最新号もバックナンバーも通販で購入可能です。





kamiインタビュー

注目の選手、話題の震源地に話を聞け! kamiインタビューは旬の人が続々登場

月刊誌ということで締め切りの特性上、泣く泣くスルーする話題やネタを当サイトでお蔵出しすることも多々あります。ここでしか読めない独占インタビューをドカンと投下するので見逃し厳禁! 選手だけじゃなく、関係者やパパ(?)にも話を聞いちゃいます。いままで登場したのは青木真也、永田克彦、石田光洋、「余分なことすんな!」でおなじみの青木正さん(青木真也パパ)など。



kamipro books

死んだら、大好評!! 大増刷決定!

生前
追悼 ターザン山本！

浅草キッド
いしかわじゅん
堀辺正史
更級四郎
松本晴夫
杉山頴男
谷川貞治
山口日昇
金沢克彦
市瀬英俊
小島和宏
菊地成孔
Oka-Chang
原タコヤキ君
椎名基樹
井上崇宏
堀江ガンツ
古関夢香



定価=1470円（本体1400円+税）
B6変型判 304ページ



英雄と黒魔術の3年間

それは誰のリングだったのか——?

検証・HERO'S



一つの時代

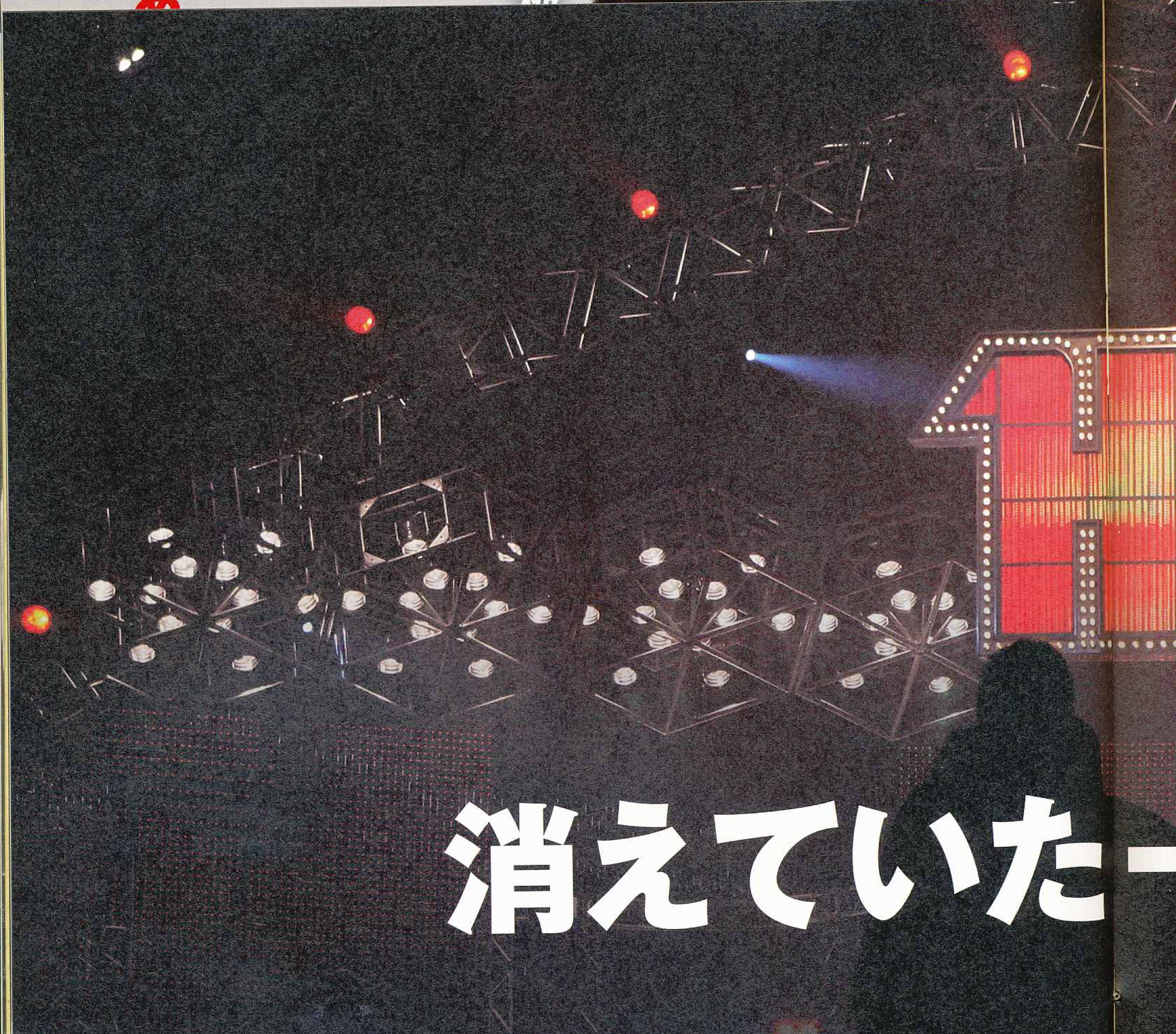
2007年は、多くの格闘技ファンにとって〝PRIDE消滅の年〟として記憶されていくことだろう。あの事件によって、日本の格闘技界はすっかり様変わりしてしまった。だが、もう一つ忘れてはいけないことがある。2007年には、PRIDE以外にも重要なイベントが〝消滅〟したのだ。そう、『HERO'S』である。

これは冗談でもなんでもない。DREAMのスタートに伴ない、『HERO'S』は消えたのだ。そのときは誰もそう思わなかったが、昨年10月の韓国大会は、『HERO'S』のファイナル興行だった。

『HERO'S』は、その〝マス向け〟な大会作りもあってコアなファンから嫌われ、揶揄され続けてきた。しかし好きか嫌いかはともかく、『HERO'S』が一時代を築いたことは間違いないのだ。2003年以降、K―1 vs PRIDEという構図の中でテレビ中継とともに巻き起こった格闘技ブーム。視聴率で常にリードしていたのは『Dynamite!!』であり、その中心には魔裟斗や曙とともに『HERO'S』のトップファイターもいた。

山本KID徳郁がカリスマとして君臨し、所英男が大ブレイクし、須藤元気もK―1MAXと違い主役の一人としてのポジションを築いた。時に前田日明スーパーバイザーの言動が波紋を呼び、ヘビー級の試合では失笑が起き、唐突に（それにあくまで単発で）K―1ファイターがMMAマッチに挑む。そして〝魔王〟秋山成勲の出現。

確かに、『HERO'S』はマニアの熱狂的な支持を得るような大会ではなかった。だ



消えていた—

が、だからといって〝とるに足らないもの〟などでは決してなかったはずなのだ。そして、繰り返すがこの大会はもはや消滅してしまったのである。

『やれんのか!』チームが演出を手がけ、『やれんのか!』ファイターが大挙、参戦するDREAMを、簡単に〝『HERO'S』が名称変更した大会〟と言うことはできない。いくらTBS中継の手法が以前と変わらないものであっても、DREAMはあくまでも〝新大会〟なのだ。『HERO'S』のファイターやスタッフは、去年までとまったく同じ気持ちで大会に臨むわけにはいかないだろう。

PRIDE消滅→『やれんのか!』開催→大連立。そういう流れの中で、DREAMは生まれている。このベクトルだけを考えれば、DREAMに見るべきは旧PRIDE勢のドラマだろう。ただし、それはDREAMの〝2分の1〟だ。残りの半分は、もちろん『HERO'S』である。DREAMが『やれんのか!』と『HERO'S』が合体してできた新たなステージである以上、そこには大連立→『HERO'S』消滅という、いわば逆サイドから見るべきドラマもあるはずなのだ。『HERO'S』トップファイターの出場がなかった『DREAM・1』では見えなかったものが、これからは見えてくるだろう。

DREAMを考えるにあたって、『HERO'S』は欠かせないピースである。いま『HERO'S』という過去に光を当てるのは、DREAMという未来を考察することでもあるのだ。

（橋本宗洋）



05.7.6 『HERO'S 2005ミドル級世界最強王者決定トーナメント』代々木第一体育館

1

◯所英男【延長R 0分08秒 TKO】アレッシャンドリ・フランカ・ノゲイラ×

『HERO'S』といえば、やはりこの試合! "フリーター"所英男が、修斗世界ライト級王座を7年間守り通した"絶対王者"であるペケーニョことノゲイラを撃破! 所はこれまで数々の強豪を絞め落としてきたノゲイラのギロチンチョークを耐え抜き、動きの止まらない寝技で対抗。そして、延長戦に持ち込むと、スタミナが切れかけたノゲイラを電光石火のバックブローで倒し、パウンドでKO! 大金星を挙げ、一夜にしてお茶の間のスターとなったのだった。これまでボブ・サップらモンスター路線のイメージが強かった"K-1 MMA"が、若いニュースターを生む『HERO'S』に生まれ変わった記念碑的試合と言えるだろう。

『HERO'S』のベスト50をセレクトしつつ、『HERO'S』を"変態"的に振り返る、"変態"座談会『HERO'S』バージョンを開催! DREAMの誕生により、事実上の活動休止となった『HERO'S』。そのリングはいかなる意味を持っていたのか、"変態"たちが徹底的に検証する。ちなみに、『Dynamite!!』はこのベスト50には含まれていないので、別枠でお楽しみください!

ガンツ　格闘大連立、そしてDREAMの発足によって、惜しまれつつというか、たいして惜しまれることもなく（笑）、終了の宣言もないままになくなってしまった『HERO'S』。今日は『HERO'S』を振り返りたいなと思いまして、『HERO'S』に詳しい専門家のお二人にお越しいただきました!

井上　えっ、どの二人?

ガンツ　どのって、アナタとアナタ……。

井上　何、指差してんだよ（笑）。ハッシーは詳しいと思うけど、俺は詳しくないですよぉ。

橋本　俺は多少詳しいですよ。

ガンツ　（無視して）まずですね、『HERO'S』消滅を悲しんでるファンっていうのを見たことがないですよね。だから、そもそも『HERO'S』ファンっていたのかっていう疑問があるんですけど。

橋本　これは結論から言うと、いないんだよ（キッパリ）。

ガンツ　ガハハハハ!　最初からいない。

橋本　これは今日の話の中心になると思うんだよね。

ガンツ　そして詳しくはないけど、このためにわざわざ『HERO'S』Tシャツを着てきた井上さんは?

井上　はい、言葉が足らないので、ビジュアルだけでもと思いまして（笑）。まず『HERO'S』はですね、このロゴTシャツがカッコいい。

ガンツ　確かにPRIDEロゴTシャツよりカッコいいなあ……というか、着てる人を見たことないから新鮮なのか（笑）。

井上　だから、PRIDEファンというのが存在していたにもかかわらず、『HERO'S』ファンっていうのがいなかったっていうのは、やっぱりPRIDEというのはイベント全体のトータルパッケージで世界観を表現していたけど、『HERO'S』は参戦していた個々のファイターのパーソナリティというかキャラクターを前面に打ち出してて。だからKIDファンなり所英男ファンなり、ファイターそれぞれのファンがいて、それが一つの場所に集まってたということですよね。

橋本　そういうことですね。

井上　だから、どこまでいってもブラックマンバは愛されなかっただろうし、俺以外で『HERO'S』Tシャツを着てる人を見たこともないし（笑）。

ガンツ　そもそも『HERO'S』には最初の出生のいびつさっていうのが思い出され

座談会出席者

●**井上崇宏**　有限会社ペールワンズ総帥にして、"変態"レギュラー。「『HERO'S』には詳しくないよ!」と言いつつも、船木誠勝とはメル友、桜庭和志とも気心が知れているという情報通。本座談会には『HERO'S』Tシャツを着用して出席。

●**橋本宗洋**　日本最重量級ライター。前号のキン肉マン"変態"座談会に出席するなど、最近は"変態"の仲間入りをしつつある。本誌で開催してきた『HERO'S』系の座談会にもたびたび出席してきた自他ともに認める『HERO'S』通である。

●**堀江ガンツ**　本誌編集部。ちっちゃい頃から熱狂的なプロレスファン&UWF信者としてならし、『kamipro』編集部に入ってからもUWF研究家を自称。"変態"座談会の主宰者でもある"変態"のカリスマである。



07.10.28『HERO'S KOREA 2007』
ジャンチュン体育館
◯秋山成勲【1R 4分45秒 KO】
デニス・カーン×

あの“ヌルヌル事件”から約11ヵ月。無期限出場停止処分を受けていた秋山成勲が、ファンからの「復帰が早すぎる」という批判がありながら、“ホーム”ともいえる韓国で復活。しかし相手がPRIDEウェルター級GP準優勝の実力者デニス・カーンということで“制裁マッチ”的な見方もあったが、秋山はなんとこの強豪をアッパー一発でKO! 恐ろしいまでの強さを見せ、“ヒール”から“魔王”へと巨大化したのだった。



06.5.3『HERO'S 2006 ミドル級世界最強王者決定トーナメント開幕戦』
代々木第一体育館
◯山本KID徳郁【1R 0分04秒 KO】
宮田和幸×

これぞ“神の子”! と言いたくなる、まさに神がかりの一戦。KID自身が「化け物」と称するオリンピック・レスラーである宮田。同じレスリング出身のKIDは苦戦するのではと思われたが、ゴングと同時に走りだしての跳びヒザ蹴りで宮田を秒殺KO! 試合時間、わずか4秒。「ヤバい、カッコよすぎる、俺」というKIDのコメントどおり、スターになる選手特有の、格闘の神が降りてきたかのような劇的な勝利を挙げたのだった。





06.10.09『HERO'S 2006 ミドル級&ライトヘビー級世界最強王者決定トーナメント決勝戦』
横浜アリーナ
◯秋山成勲【1R 1分58秒 腕ひしぎ十字固め】
メルヴィン・マヌーフ×

魔王がその実力を知らしめた一戦。これまで連勝を続けながら、MMAの強豪との対戦がなかったため、その実力は未知数だった秋山。そのため下馬評ではマヌーフ有利と見られていたが、秋山は本物だった。恐るべき打撃でKOの山を築いてきたマヌーフの猛スピードのパンチをかいくぐり、スタンドで組みつくと、回転しながら鮮やかな腕十字で一本勝ち!『HERO'S』ライトヘビー級のベルトを強奪したのだった。

ますよね。それがのちのちまで影響してたというか。最初のコンテンツとこんなに変化したイベントもないんじゃないかっていう。何しろ当初はリングスでやってたメガバトルトーナメントをやるはずだったんですよ。

井上 ああ、そうだ! 『HERO'S』メガバトルトーナメント。

橋本 スタート時の構想は「リングス復活」ですもんね。これ、忘れられがちなことだけど、上井(文彦)さんもいたからね。

井上 いや、忘れられないよ、忘れようにも(笑)。

ガンツ なぜか上井さんが『HERO'S』のイベントプロデューサーになってましたからね(笑)。

橋本 最初は上井プロデューサーがやるイベントに、FEGが選手派遣で協力をするって話だったんだよね。

ガンツ だけど旗揚げの会見で、上井プロデューサーと前田日明スーパーバイザーが「ヒーロー? ヒーローズ? どっちやったっけ?」ってやりとりを檀上でやってて。

一同 ガハハハハ!

井上 船場吉兆の謝罪会見ばりに声が漏れてたっていう(笑)。

ガンツ プロデューサーとスーパーバイザーが大会名すらよくわかってないんだから(笑)。そして旗揚げ戦のオープニングセレモニーはリングスのテーマ曲で、前田SVもちゃんと赤いリングス審議委員のジャケットを着てましたよね。

橋本 最初はホント、第二次リングスっていうのを濃厚に出してたよね。

ガンツ あのコンセプトにGOを出したのは誰なんですかね?

井上 やっぱり、あの前田日明が沈黙を破ってマット界に帰ってきたってことにあの瞬間は凄い価値があったっていうか。FEGは前田を獲得したことで、何か凄い“うねり”を起こせるんじゃないかっていう希望を抱いたんだよね。

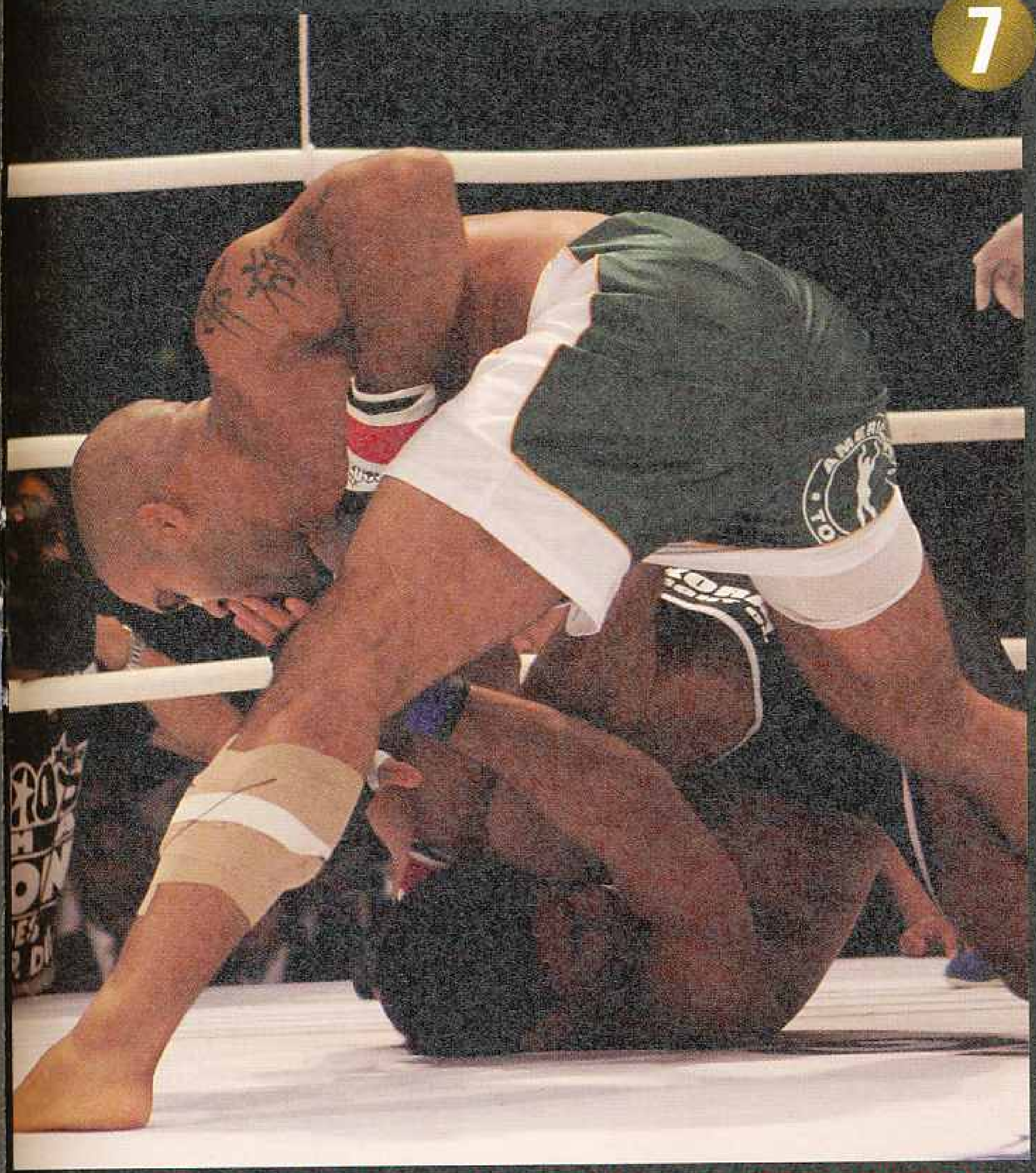
橋本 それが格闘技界的にはあまり効果をもたらさなかったってことなのかな?

ガンツ いや、リングスを復活させるなら、ちゃんとやればいいのに、ヒース・ヒーリングをいきなりリングスUSA所属ということにしたりとか、イアン・シャファーをリングス・オーストラリア所属にしちゃったり。上っ面なことばっかりやってたんですよね。

橋本 マルプロ軍団がリングス・ロシアになったりね(笑)。

ガンツ クリストファー・ヘイズマンなんて、長年、リングスに貢献してきたのに、自分と敵対してるシャファーにリングス・オーストラリアを名乗られてるんだから、やってらんないでしょう(笑)。

橋本 オレは、さっき井上さんが言ったみたいに、『HERO'S』を観に行ってたファンというのは、まず人を観てたんだと思うんだよね。たとえば、日本のアイドルバンドみたいのがいるとして、彼らが夏フェスに出るとするじゃないですか。そのアイドルバンドを観に行くファンの子は、それが『ロックインジャパン』なのか『フジロック』なのか『サマーソニック』なのかっていうのはまったく気にしてない。でも、PRIDEファン的な人種っていうのは、たぶん「フジロックに行く」っていうトータル的な世界を求めて観に行ってる人たちなんだよね。だから、『HERO'S』はお目当てのバンドが出てるか出てないかっていうだけの話であって、それがどこのリングなのかっていうのはまるで関係ないんだよ。『HERO'S』消滅がそんなに話題にならないの



07.7.16『HERO'S 2007 ～ミドル級世界王者決定トーナメント開幕戦～』横浜アリーナ
◯J.Z.カルバン【1R 0分35秒 TKO】ビトー・"シャオリン"・ヒベイロ×

『HERO'S』のリングで向かうところ敵なしの活躍を見せるカルバンと、優勝候補最右翼と見られていたシャオリンが、トーナメント準決勝で激突。この超実力派対決、試合前は五分五分と見られていたが、蓋を開けてみれば、なんとわずか35秒で決着。カルバンが強烈なパンチでシャオリンを秒殺KO。その強さは、いよいよ手がつけられなくなり、このままブッチギリでトーナメント二連覇をはたしたのだ。



05.3.26『HERO'S』
さいたまスーパーアリーナ
◯ヨアキム・ハンセン
【3R 4分48秒 KO】
宇野薫×

記念すべき『HERO'S』第1回大会で生まれた名勝負。大味な試合が続いたこの大会において、この元・修斗世界ウェルター級王者同士の一戦は、期待どおりのハイレベルな攻防を展開。序盤、グラウンドを中心に試合を優位に進めた宇野が、最終ラウンドでハンセンの戦慄のヒザ蹴りを食らい逆転KO負けを喫したものの、中軽量級のおもしろさを見せつけ、『HERO'S』を"総合のK-1 MAX"化させるきっかけとなった。



05.9.7『HERO'S 2005 ～ミドル級世界最強王者決定トーナメント 準決勝～』
有明コロシアム
◯須藤元気【2R 3分47秒 三角絞め】
高谷裕之×

KIDと並ぶ『HERO'S』の大スターながら、同階級のMMA実力派との対戦から遠ざかっていたため、一部マニアからは疑問視される節もあった元気。しかし、元気はミドル級トーナメントでオリンピック・レスラーの宮田和幸を腕十字で下すと、続く準決勝では日本人軽量級で屈指の打撃を誇る高谷相手にワンチャンスで寝技に持ち込み、三角絞めで一本勝ち。2戦連続一本勝ちで雑音を実力で消し去ったのだった。

も、KIDが観たいとか宇野が観たい、所が観たいんであって、それが『HERO'S』なのかDREAMなのかはどうでもいい。だからイベントの消滅になんの衝撃もないんだろうね。

ガンツ　そういう意味では桜庭和志が『HERO'S』に電撃登場してきたときの会場のリアクションの薄さは理解できますね。

橋本　だから『kamipro』読者というか、PRIDEファンが『HERO'S』を嫌ってたのは当然の話で、PRIDE的な価値観からしたら、わけがわかんないっていうか、まったく価値観に合わないことをやってるわけだから。だけど、もともとPRIDE的な価値観を目指してないんだからしょうがねえじゃんっていう部分もあるよね。

ガンツ　しょうがねえじゃん(笑)。

橋本　そりゃあ最初はPRIDEを目指したところは多少なりともあっただろうけど(笑)、イベントは生き物だからね。やっぱり高田本部長に対抗して前田SVっていう図式はあったはずだしさ。そういえば、旗揚げ戦の大会コピーが「世の中には前田日明が足りない」だったよね。結果、足りなくはなかったけど(笑)。

ガンツ　『HERO'S』は、のちにKID、元気、宇野、所が出揃ってからガラッと変わりましたよね。そのきっかけになったのが、2回目の大会で所英男がブレイクして。

橋本　ミドル級トーナメント1回戦で、ペケーニョから大金星を挙げてね。

ガンツ　『HERO'S』ってその4人のイメージしかないですよね。

橋本　その4人のイメージと、やっぱりアラン・カラエフとかキム・ミンスとかのイメージだよね。

井上　オレの『HERO'S』って……、なんか会場がエロかったんだよね。

ガンツ　会場がエロ!!　何を言い出してるんですか(笑)。

橋本　確かに客席のローライズ率が妙に高かったですよね。全体にお尻見えそうな子がいっぱいいたでしょ。

井上　これは『HERO'S』じゃないんだけど、あの山本(ターザン山本!)がいまだにK-1MAXだけはちゃんと観に行くんだよね。あれも会場がエロいからですよね、絶対(笑)。

橋本　リアルな意味で会場の空気を吸いに行くっていう(笑)。

井上　まあ、この「エロい」っていうのは女性の格好がという意味じゃないんですけど。まずですね、K-1MAXでKIDが村浜(武洋)をKOした試合があったじゃないですか?　俺はあの村浜戦でのKIDのダーティーな感じとか大っ嫌いだったのね。

ガンツ　わからなくもないです。要は我々"変態"とは相容れない人生(笑)。

井上　KIDちょっとマナー悪いぞ、みたいな。いまはそんなことないですけど。当時そんなKIDを、『HERO'S』の観客は総立ちで大歓迎してたのよ。女性ファンとかキャーキャー言ってて、もう満場一致で支持みたいな。あれって、たぶんメスの本能というか根源的な部分で「肉体的に強い男が好き」ということだと思うんですけど、男性ファンも無条件で「KID、カッケー」みたいな。たぶん客層がそんなオスとメスで支配されてたから、会場にエロを感じたんだろうね。

橋本　だから"変態"がいらない、"変態"が口を挟めない、"変態"を育ててないリングなんですよ。

ガンツ　ですよね。"変態"に優しくないというか。

橋本　バリアフリーじゃないね。



06.8.5『HERO'S 2006
ミドル&ライトヘビー級世界最強王者
決定トーナメント準々決勝』
有明コロシアム
○桜庭和志
[1R 6分41秒 腕ひしぎ十字固め]
ケスタティス・スミルノヴァス×

10



PRIDEから電撃移籍をはたした桜庭の『HERO'S』第一戦の相手は、"リトアニアの高田延彦" ことスミルノヴァス。桜庭はシュートボクセ仕込みの打撃で向かっていくが、逆に右フックを食らいダウン。さらにパウンドを浴びてKO寸前となるが、ブレイクに救われ、腕十字で大逆転勝利。前田SVは「桜庭が死んだらどうすんだ!」とレフェリングを批判したが、I 編集長は「リングで死ねたら本望でしょうが!」と絶叫した。

8



05.9.7『HERO'S 2005 〜ミドル級世界最強王者決定トーナメント 準決勝〜』
有明コロシアム
○宇野薫[2R 判定3-0]所英男×

アレッシャンドリ・フランカ・ノゲイラをKOし、一躍大ブレイクをはたした所と、総合格闘技パイオニアの一人である宇野の新旧アイドル対決。試合は期待どおりのスピーディな一戦となったが、動き回る所に対し、宇野は体格差で押さえ込み、パウンドでダメージを与えていく。所は最後まで手を変え品を変え一本勝ちを狙っていくが、宇野の牙城は崩せず。接戦を制した宇野はKID戦へとコマを進めた。

9



05.9.7『HERO'S 2005 〜ミドル級世界最強王者決定トーナメント 準決勝〜』
有明コロシアム
○山本KID徳郁
[2R 0分38秒 KO]
ホイラー・グレイシー×

「グレイシーとタイマン張りたい」と、じつに"らしい" 表現で、かねてから熱望していたKIDのホイラー戦が、トーナメント枠で実現。KIDは1ラウンドにフロントチョークの体勢に入られ、ファンをヒヤリとさせるが、これを冷静に脱出すると、得意の打撃勝負へと持ち込む。ホイラーもスタンドでの成長ぶりを見せたが、KIDの右フックがモロにヒットしKO! ホイラーが失神する姿は一つの時代の終わりを感じさせた。

これぞ

Dynamite!! BEST 5

3



2005年
山本KID徳郁 vs 須藤元気

1



2003年
ボブ・サップ vs 曙

4



2006年
秋山成勲 vs 桜庭和志

2



2004年
魔裟斗 vs 山本KID徳郁

5



2005年
中尾芳広 vs ヒース・ヒーリング

『HERO'S』ベスト50の番外編として、ここでは最も『Dynamite!!』らしい試合トップ5をセレクト! 1位はやっぱり『Dynamite!!』を『Dynamite!!』たらしめたサップ vs 曙戦。カエルのように前のめりにダウンした曙の姿が映し出された映像は瞬間最高視聴率43.0パーセントを記録した。いま考えると、本当に凄い数字!! また4位にはマット界のみならず世間に大波紋を巻き起こした秋山vs桜庭戦。"魔王"誕生を呼び起こした奇跡の一戦だが、この物語はいまでも現在進行形〜。5位も『Dynamite!!』らしいといえば『Dynamite!!』らしいが……。ハッキリ言って、オマケです!

ガンツ 住めない世界というか、住む世界が違うというか。

井上 そうそう。「なんかこの国も住みにくくなってきたな……」っていう(笑)。

ガンツ それは「いまの若い者にはついていけない」っていう感じとも違うんですけどね。

井上 もう、剥き出しのオスとメス。だから格好もエロイんだと思う。もう女の子なんかパンツ一丁みたいな格好してたしさ。

橋本 パンツ一丁はないでしょ(笑)。だから変態的な価値観の中では、KIDってどこまでいってもヒール的な光り方しかできない。ヒールとしてカッコいいっていう。だけど『HERO'S』ではあっという間にそれがベビーフェイスとして受け入れられる、そういう人たちが観てたんですよね。

井上 だってハッシーなんか基本的に村浜人間でしょ?

橋本 完全に村浜ですよ!

井上 俺だってKIDか村浜かっていったら……、KIDかなぁ。

一同 ガハハハハ!

井上 まあ、多少憧れはありますよ。だって、強いんだモン……(笑)。

ガンツ 完全にメスじゃないですか(笑)。そういうバイオレンスな匂いを振りまいていたKIDが象徴のリングだから、なかなか"変態"は住みにくかったっていうのがあるんですかね。

井上 うん、これはあくまで当時のKIDのイメージね。

橋本 だからガンツはよくわかるだろうけど、当時の俺らの唯一の拠りどころが所クンだったんだよね。

ガンツ 『kamipro』の間口も所クンでしたね。

橋本 変態専用通用口みたいなね。

ガンツ (須藤)元気もチラッと"変態"に目配せしてくれるのが嬉しいっていうか。いいヤツだなって。「俺たち"変態"にも気を使ってくれてる」と(笑)。



06.8.5「HERO'S 2006 ミドル&ライトヘビー級世界最強王者決定トーナメント準々決勝」有明コロシアム
○J.Z.カルバン［1R 0分30秒 KO］高谷裕之×

『HERO' S』登場2戦目となったカルバンは、"喧嘩番長" 高谷と対決。開始早々、カルバンはいきなりの真空飛びヒザ蹴りを命中させ、ダウンした高谷にパウンドでタコ殴り! わずか30秒で底知れぬ強さを見せつけた。



07.9.17「HERO'S 2007 〜ミドル級世界王者決定トーナメント決勝戦〜」横浜アリーナ
○アンドレ・ジダ［1R 1分20秒 TKO］
アルトゥール・ウマハノフ×

ロシア特殊部隊「スペツナズ」に所属していたウマハノフと "殴り屋" ジダの対決。ノーガードで挑発するウマハノフ相手に、ジダは飛びヒザ蹴りから怒濤のラッシュで秒殺!!　見事にロシアの幻想を打ち砕いた。



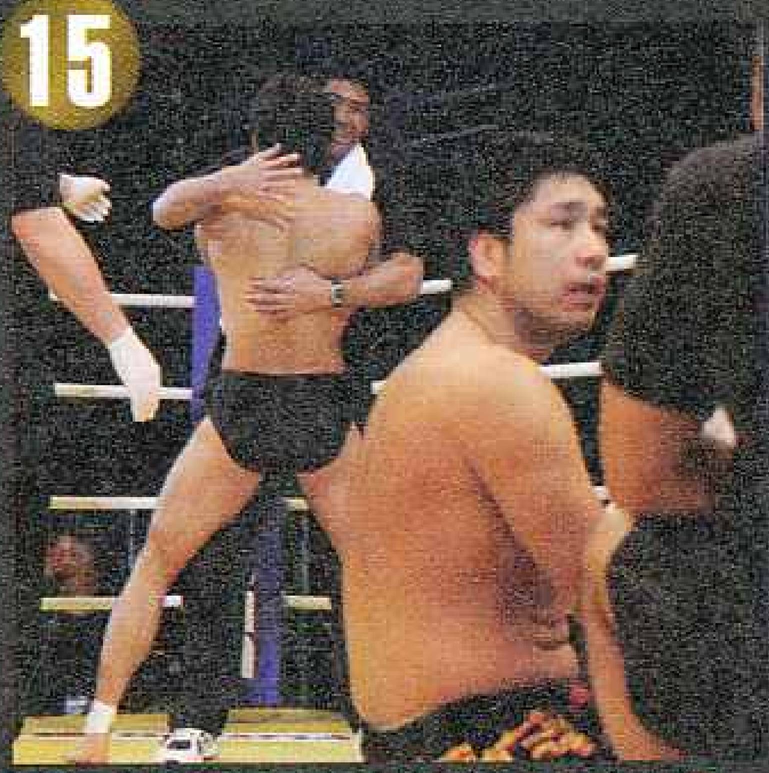
05.9.7「HERO'S 2005 〜ミドル級世界最強王者決定トーナメント 準決勝〜」有明コロシアム
○山本KID徳郁［2R 4分04秒 TKO］宇野薫×

この日、2試合目となるミドル級GP準決勝で夢のカードが実現! 試合はスタンドでの激しい打撃戦! 2ラウンド、回転の速いKIDの右フックで宇野がカット! 出血が止まらず、KIDがドクターストップで決勝へ駆け上がった。



06.10.09「HERO'S 2006 ミドル級&ライトヘビー級世界最強王者決定トーナメント決勝戦」横浜アリーナ
○秋山成勲［1R 3分01秒 KO］
ケスタティス・スミルノヴァス×

桜庭を苦しめたスミルノヴァス相手に、秋山は余裕さえ漂わせ、なんと! 鋭いハイキックでダウンを奪い、パウンドで一気にスカ勝ち! 格闘家転向わずか2年弱で、悪魔的な攻撃力を装填したことを満天下に知らしめた。



07.3.12「HERO'S 2007 開幕戦 〜名古屋初上陸〜」名古屋レインボーホール
○柴田勝頼［1R 0分09秒 TKO］山本宜久×

戦前、山本は「教えている人が引退した船木さんでしょ?　ナメるなという感じ。ボコボコにしてやりますよ」と発言するも、試合開始後、飛び出してきた柴田にラッシュを食らい、わずか9秒でKO負け。これもヤマヨシらしさ?



06.5.3「HERO'S 2006 ミドル級世界最強王者決定トーナメント開幕戦」代々木第一体育館
○ブラックマンバ［1R 0分43秒 TKO］所英男×

フリーターを休業し、格闘家専念を宣言した所は、色物と思われていたマンバと対戦。リングサイドでみのもんたが声援を送る中、所のタックルにマンバのヒザが絶妙のタイミングで突き刺さり、所はまさかの失神KO負け。



07.9.17「HERO'S 2007 〜ミドル級世界王者決定トーナメント決勝戦〜」横浜アリーナ
○ユン・ドンシク［1R 1分29秒 腕ひしぎ十字固め］
セルゲイ・"弁慶"・ガレシック×

FEGに移籍してからメルヴィン・マヌーフに激勝して勢いに乗るユンが、難敵ガレシックと対戦。KO率の高いガレシックをテイクダウンすると、見とれるような華麗なムーブで一気に腕十字を極め、急成長ぶりを見せつけた。

橋本　パンクラスの頃からの付き合いじゃないか、って（笑）。

ガンツ　で、宇野薫はホントは我々"変態"の仲間のはずなのに、知らん顔するんですよ（笑）。

一同　ガハハハハ！

橋本　そうそう！　もともとU系の大ファンなわけだから。でも本人がべつになんかしたわけじゃないけど、勝手にメスに好かれたっていうさ。

ガンツ　"変態"を通して語るとわかりやすいですねえ、『HERO'S』は。

井上　"変態"の対義語がオス・メスですからね。いわゆるミーハーっていわれる人種、あれもオス・メスですよね。

ガンツ　こないだ突然ハンドボールが人気出ちゃった、みたいなのとも凄く似てるんじゃないですか？

橋本　あっ、そうそうそう！

ガンツ　「ハンドボールなんかルールも知らないでしょ」っていう客層で突然会場が満員になっちゃったり。

橋本　宮崎選手のことを気に入ったら、ハンドボールって競技に興味はなくても会場に行くような人たちでね。

ガンツ　きっとハンドボール界の"変態"たちは落ち着かないでしょうねぇ。

一同　ガハハハハ！

ガンツ　「悪いんだけど違うんだよな〜」って思ってるはずだよ。知らないけど（笑）。

橋本　でも、肯定的にとらえると逆に画期的だよね。格闘技でそういう世界を作ったっていうのは。

ガンツ　選手もそうですよ。●●●もこないだの『DREAM・1』の会場で「へんな客だなあ」って言ってたらしいですからね。

橋本　まあ、そうだろうね。

ガンツ　要は、べつに凄いスターが出てきて応援してるわけでもなく、なんか知らないけどPRIDEに出てた人をみんな持ち上げてるっていう。

井上　だからPRIDEファンっていうのは基本的に男らしくないよね。"変態"って、男らしくない。真に男らしい格闘技の応援の仕方っていうのはさ、お目当てのヤツだけをとにかくひいきして「レッツゴー！　殺っちまえ！」みたいな（笑）。さらに負けたら即「金返せ！」って言える人はもっと男らしい。たとえば秋山がどんな悪さをしようが、変わらず応援し続ける人っていうのも凄い男らしいじゃん。だからイベント自体を愛しちゃうとか、そういうのってさ……。

ガンツ　オタクですよね（笑）。

井上　オスでもないメスでもない、まさに"変態"じゃん（笑）。プロレスファンとかもね、オス・メスってあまりいないよね。

橋本　つまり『HERO'S』がエロいっていうのは、オスを観に来るメスがいっぱいいたからエロかったんでしょ？　逆に言うとノーマルなオスとメスの関係が成り立ってるわけですよ。だけどやっぱPRIDEファンは変態だからさ。

ガンツ　まあ、ホモッ気がありますよね。

橋本　まさに"変態"思考ですよ。関係がオス1対メス1じゃないもんね。ルール説明でワーッてなったりとかさ、オス1対大会1ってわけわかんない単位だからさ（笑）。

ガンツ　じゃあ正常なリングなんだね、『HERO'S』って（笑）。

井上　そうそう、『HERO'S』はとても正常ですよ。

橋本　格闘技としてどうかっていうのは別として、エンターテインメントのありかたとしては、わりと普通というか。

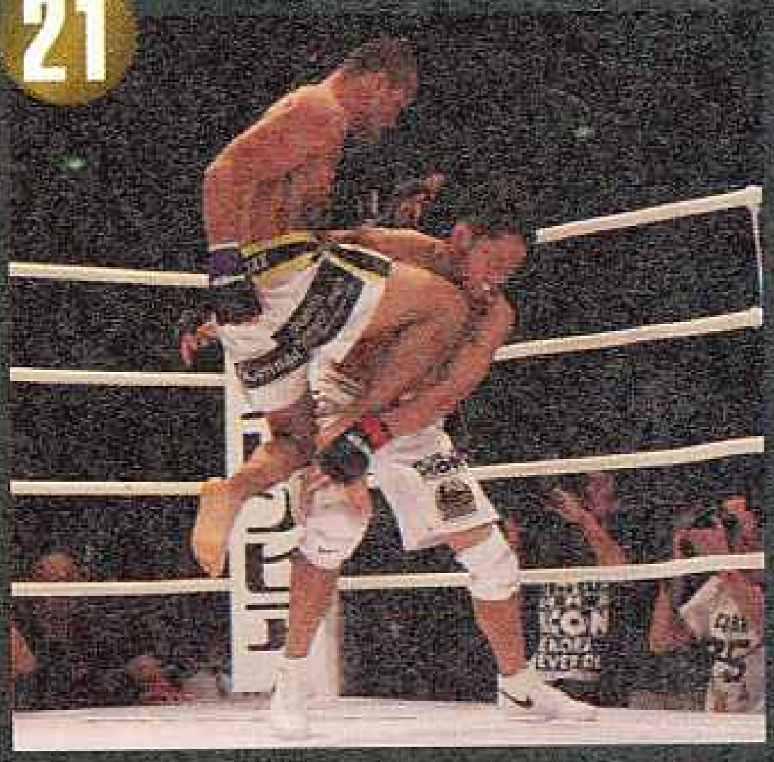
ガンツ　さっき、一通り『HERO'S』の



23

05.7.6『HERO'S 2005ミドル級世界最強王者決定トーナメント』代々木第一体育館
○レミギウス・モリカビュチス[1R 1分14秒 KO]
村浜武洋×

K-1 MAXで闘ってもいいような打撃の巧者がミドル級GPの1回戦で激突! 序盤からレミギウスは回転の速い打撃でド肝を抜き、飛び込みざまの左フックで村浜をKO葬! あまりに鮮烈なこのKOシーンは、その後何度も使われることに。



21

07.9.17『HERO'S 2007～ミドル級世界王者決定トーナメント決勝戦～』横浜アリーナ
○アンドレ・ジダ[2R 判定3-0]宇野薫×

準決勝からGPに参加したジダは、初優勝を狙う宇野にアッパー、ヒザ蹴りで攻め立て、ダウン寸前に追い込む。宇野は寝技で活路を見出そうとするが、1ラウンドの攻防でアゴを骨折しており、無念のドクターストップ!



18

05.9.7『HERO'S 2005～ミドル級世界最強王者決定トーナメント準決勝～』有明コロシアム
○須藤元気[2R 4分45秒 腕ひしぎ十字固め]宮田和幸×

GP2回戦で好カードが実現! 序盤から宮田は豪快に元気をブン投げ、テイクダウンを奪いまくって主導権を握る。しかし、徐々に元気のパンチが当たり出し、宮田が崩れたところへ流れるような動きで元気が腕十字でタップを奪った。



24

06.3.26『HERO'S』さいたまスーパーアリーナ
○ジェロム・レ・バンナ[1R 2分24秒 KO]
秋山成勲×

総合格闘家に転向した秋山が2戦目で、体重差30キロのバンナと対戦。道衣を着て臨んだ秋山は、寝技で一本を狙いに行くものの、バンナの打撃に苦しめられ、最後はヒザ蹴りでKO負け。この試合が秋山のMMAで唯一の敗戦。



22

06.10.09『HERO'S 2006 ミドル級&ライトヘビー級世界最強王者決定トーナメント決勝戦』横浜アリーナ
○J.Z.カルバン[1R 0分39秒 フロントチョーク]
ハニ・ヤヒーラ×

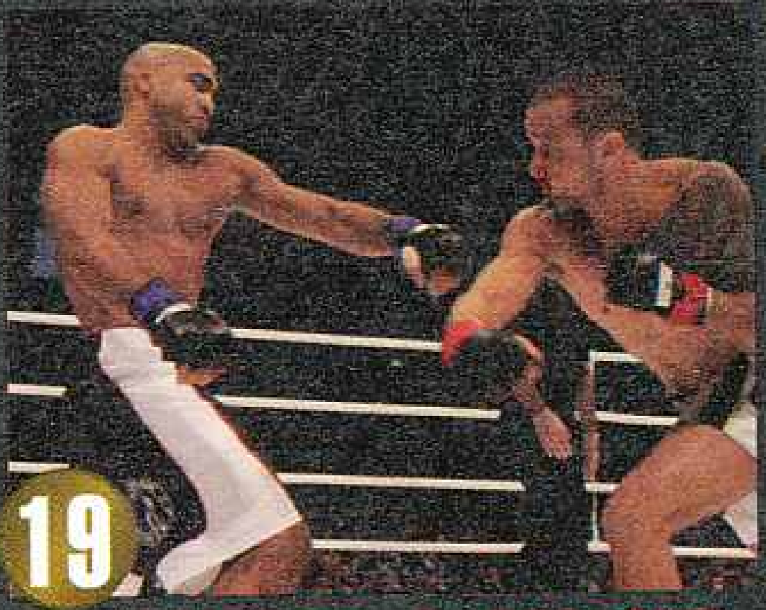
"現代ストリート版ヒクソン"カルバンが"ヒクソンの弟子"ヤヒーラと対戦。ハイレベルな寝技の攻防が予想されたが、タックルに来たヤヒーラをがっちり受け止めたカルバンが、あっさりギロチンで絞め落とした。



20

07.9.17『HERO'S 2007～ミドル級世界王者決定トーナメント決勝戦～』横浜アリーナ
○桜庭和志[1R 6分20秒 腕ひしぎ十字固め]
柴田勝頼×

この試合での桜庭は、スタンドで重い打撃を放ち、寝技でも強烈な鉄槌をガンガン落とす"キラーサク"モード。最後はしっかり柴田を腕十字葬! 試合後にリング上で、復帰を表明していた船木誠勝に対戦を表明した。



19

07.9.17『HERO'S 2007～ミドル級世界王者決定トーナメント決勝戦～』横浜アリーナ
○J.Z.カルバン[1R 4分48秒 腕ひしぎ十字固め]
アンドレ・ジダ×

試合前から両者熾烈な視殺戦。序盤、ジダの打撃をもらってフラつくカルバンだが、すぐに相手をテイクダウンして蘇生。抜群の寝技力を見せつけ、1ラウンド終了間際にキッチリ腕十字を極め、見事二連覇を達成! 強いッ!

大会結果を見たんですよ。確かにオス・メスの話で言うと、ミドル級はホントに素晴らしいんですけど、第1試合からのカード構成がメチャクチャなんですよ。

橋本 うん、メチャクチャだね。

ガンツ これはいま冷静に振り返ると、絶対に失敗するよねっていう。だからイベントとしてはどうしようもないですよね。

橋本 だからカード構成とか気にしてるのが〝変態〟なんだよ(笑)。それこそノーマルな、ストレートな人は、ヘタすりゃKIDの出番までロビーでタバコ吸ってりゃいいやっていうさ。

井上 お、男らしい……(ポッ)。

橋本 だけど〝変態〟はカード構成とか、合い間にへんな試合があると気になるのよ。笑い話としてでも気になるのよ。だけど『HERO'S』のファンは「興味ないのは観ない」って言うだけだから、気にしないよね。

ガンツ まったく観てないもんね。そりゃ僕らはどんどんどんどん嫌いになっていくっていうか(笑)。

橋本 でも、谷川さんがどうしてそういう世界に見切りをつけたかといえば、PRIDEがなくなったからでしょ。

ガンツ あと、そういう熱が終わっちゃったんですよね。一時期の女子プロブームみたいなもんですよ。

橋本 冷めだしたら早いんだよね。

ガンツ 周期的にやってきますから。クラッシュギャルズ引退、みたいな。

橋本 それこそKIDがいなかったら、宇野がいなかったら、所がいなかったらってなっちゃうわけだから。キム・ミンスしかいない、みたいなね(笑)。

ガンツ ハンドボールの宮崎選手がいなくなって「まだ毎週試合やってますよ」なんて言っても、誰も観ないよっていう。

橋本 ただ、「確かに輝いていた」っていうことだけは一応言っときたいよね。

ガンツ さっき、PRIDEがなくなったからって言いましたけど、ここまでわかりやすいだけのリングだったら格闘技は成立しないですもんね。

橋本 わかりやすいだけのリングが成立してたのは、一方でわかりにくくてコアなこともやってるPRIDEがあったからだよね。PRIDEがあるから「じゃあ、ウチは違うことで」ってやれてたけど、PRIDEがなくなっちゃったから、「まずはコアなものがないとヤバイな」っていう意識でDREAMになったんだよね。だから大事なのは、そのDREAMまでわかりやすい方向に行っちゃうのかどうか。

ガンツ まあ、それはないでしょ。

橋本 まあ、DREAMの中にも〝変態〟はいるからね。

ガンツ ところで、唐突ですけど『HERO'S』のベストバウトはなんですか?

橋本 所vsノゲイラ戦じゃないの?

ガンツ 『HERO'S』を『HERO'S』たらしめた試合というか。

橋本 試合内容とか衝撃とか意味合いとか、すべて含めてベストバウトだったよ。『HERO'S』らしさに加えて〝変態〟の間口にもなったしね。ガンツは?

ガンツ ボクも所vsノゲイラは「これで『HERO'S』が生まれた」っていう試合だと思うし、一番好きではありますけど、それ以上に一番衝撃的だったのは『HERO'S』のラストマッチですよ。秋山vsデニス・カーン戦。

井上 ああ、そうかぁ。

橋本 あれが『HERO'S』最後の試合になるのか。

ガンツ 逆に言うとあれが『HERO'S』



29
07.7.16『HERO'S 2007 ～ミドル級世界王者決定トーナメント開幕戦～』横浜アリーナ
○ヒトー"シャオリン"ヒベイロ［2R 1分54秒 肩固め］
宮田和幸×

ミドル級GP1回戦で、宮田は優勝候補の一角シャオリンと対戦。序盤は宮田が打撃を主体に、試合の主導権を握るが、徐々にスタミナを切らした宮田は、シャオリンにじわじわ攻め込まれ、肩固めで逆転負けを喫した。



25
06.10.09『HERO'S 2006 ミドル級&ライトヘビー級世界最強王者決定トーナメント決勝戦』横浜アリーナ
○J.Z.カルバン［2R 判定3-0］
宇野薫×

準決勝でアイヴァン・メンジバーに勝利した宇野は、決勝でカルバンと対戦。スピンキックやグラウンドで下から粘るが、カルバンの強烈無比なパウンドの連打に苦戦し、結局判定負け。宇野、悲願の初優勝はならず。



30
07.7.16『HERO'S 2007 ～ミドル級世界王者決定トーナメント開幕戦～』横浜アリーナ
○ブラックマンバ［1R 4分47秒 TKO］所英男×

前回マンバに秒殺負けを喫した所が、ミドル級GP開幕戦で再戦。リベンジしたい所は足関節を中心に攻めるが、グラウンドでマンバのパンチを浴び続けTKO負け。所には同じ相手に連敗という厳しい現実が突きつけられた。



26
07.9.17『HERO'S 2007 ～ミドル級世界王者決定トーナメント決勝戦～』横浜アリーナ
○山本KID徳郁［3R 判定3-0］ビビアーノ・フェルナンデス×

約10ヵ月前に北京五輪出場への挑戦を表明し、プロ格闘技活動を休止していたKIDが、この試合でMMAに復帰。ビビアーノに腕十字を極められかけて危ない場面もあったが、スタンドの打撃でダメージを与え、判定勝ちを収めた。



31
06.8.5『HERO'S 2006 ミドル&ライトヘビー級世界最強王者決定トーナメント準々決勝』有明コロシアム
○宇野薫［2R 3分30秒 チョークスリーパー］ブラックマンバ×

宇野はミドル級GP準々決勝で、『HERO'S』デビュー戦で所英男を秒殺KOしたマンバと対戦。序盤、宇野も所と同様、タックルに合わせたヒザ蹴りをまともに食らうが、なんとか寝技戦に持ち込み、2ラウンドに裸絞めで逆転勝ち!



27
06.10.09『HERO'S 2006 ミドル級&ライトヘビー級世界最強王者決定トーナメント決勝戦』横浜アリーナ
○所英男［1R 1分50秒 腕ひしぎ十字固め］金子賢×

俳優業を休業して格闘技に取り組む金子が『HERO' S』に登場。戦前、前田SVの「俺が現役なら半殺し」などの発言が注目されたが、試合で金子はラバーガードなどの技術を披露。しかし寝技で一日の長がある所に腕十字で一本負け。



33
07.10.28『HERO'S KOREA 2007』ジャンチュン体育館
○キム・ミンス［1R 3分46秒 TKO］ミノワマン×

韓国での試合にもかかわらず、ミノワマンは大人気! 試合ではミンスがミノワマンの攻撃を受け止め、体重差を利用して左右のフック、ヒザ蹴りなどで圧殺。試合後、ミンスはミノワマンのお株を奪うSRF8回を四方にキメッ!



32
05.7.6『HERO'S 2005ミドル級世界最強王者決定トーナメント』代々木第一体育館
○山本KID徳郁［3R 1分23秒 TKO］
イアン・シャファー×

『HERO'S』旗揚げ2戦目でKIDは須藤元気をKOしたこともある打撃の達人シャファーと対戦。1ラウンドはシャファーのパンチで追い込まれたものの、3ラウンドにはKIDが右フックで逆転勝ち!『HERO' S』のマットをKID色に染めた。



28
05.7.6『HERO'S 2005ミドル級世界最強王者決定トーナメント』代々木第一体育館
○レイ・セフォー
［2R 0分30秒 KO］
キム・ミンス×

ついにセフォーが総合の舞台に初登場! 柔道銀メダリストのミンス相手に、腰の強いところを見せ、相手のバックに回るなど、総合にもしっかり対応。最後はハイキックでミンスをKO! またセフォーの総合が見たいぞッ!



34
07.3.12『HERO'S 2007 開幕戦 ～名古屋初上陸～』名古屋レインボーホール
○桜庭和志［1R 1分26秒 腕ひしぎ十字固め］
ユーリー"プレイボーイ"キセリオ×

桜庭は秋山との"ヌルヌル事件"以来の試合。対するユーリ・キセリオは黒い道衣にプレイボーイのバックプリントという奇天烈な格好で登場。だが、桜庭は落ち着いてキッチリ腕十字を極め、忌まわしい記憶を払拭した。



35
07.7.16『HERO'S 2007 ～ミドル級世界王者決定トーナメント開幕戦～』横浜アリーナ
○メルヴィン・マヌーフ［1R 2分13秒 KO］ベルナール・アッカ×

"闘うお笑い芸人"アッカが"狂拳"マヌーフと対戦。なんとか組み付きたいアッカだが、逆に投げられ暴風雨のような打撃を食らう。アッカも負けずに打ち返すが、最後はマヌーフの強烈な左右のフックを浴びて轟沈。

をぶち壊したんですよ。

橋本　とてつもなく『HERO'S』らしからぬことをやってみせたよね。

ガンツ　『HERO'S』の旗揚げのメインも秋山だったんですよね。

橋本　最初と最後のメインって秋山だったのか……。なんか、ちょっと背筋が寒くなるような符合だね。

ガンツ　あのデニス・カーン戦で『HERO'S』をぶち壊して、いまのDREAMというかPRIDE的世界観にガーッと流れてきて。あの試合がなかったら『やれんのか!』の爆発もなかったし。

橋本　秋山で始まって秋山で終わってたんだね。

ガンツ　そういう大衆的なものを秋山によって強引に終わらされたっていう。しかも、あの韓国大会は深夜放送ですからね。一気にゴールデン向きじゃない世界観に（笑）。

橋本　そういえば、あの最後の韓国大会には黄金のミドル級のスターは誰一人出てないね。

ガンツ　ちゃっかりヤマヨシ（山本宜久）は出てましたけどね（笑）。というわけで、最後のPRIDE変態座談会同様、『HERO'S』の最後もやっぱりヤマヨシで（笑）。

井上　最後の韓国大会の前日にさ、映像用の取材で「相手がシルムなんで、ちょっと一発投げてみたいね」って言ってたんだけど、普通投げるっていったらさ、スープレックスとかそういうことじゃん? なのにインタビュアーが「背負い投げですか?」って素っ頓狂な返しをしたのよ。だけどヤマヨシ、「……うん、背負い投げもいいな」って。「あっ、こいつ乗った!」みたいな。

一同　ガハハハハ!

ガンツ　それでシルムの選手のミドルキックで悶絶KO負けしてましたからね（笑）。ヤマヨシはホント最高ですよ。最初のキム・ミンス戦だってさ、十中八九勝ってるところをさ、途中で須藤元気のマネし始めちゃって（笑）。ナメたジャブとかやってるうちにバコーンッてやられちゃってね。それとドン・フライ戦。

井上　それ、どんな試合だっけ?

ガンツ　ヤマヨシのローキックで、ドン・フライがもうフラフラになってきちゃって、ローキックだけやってりゃイケるところだったんだけど、なんか知らないけどまたこれ（須藤元気ムーブ）が（笑）。たぶん「元気カッコいい」と思ってたんでしょうね。一緒に練習とかしてて、ちょっと相田みつをにかぶれたりするような感じで。

井上　ガンツくん、ぜひ柴田戦の解説もお願い（笑）。

ガンツ　あれは完全に番長モードで。過去



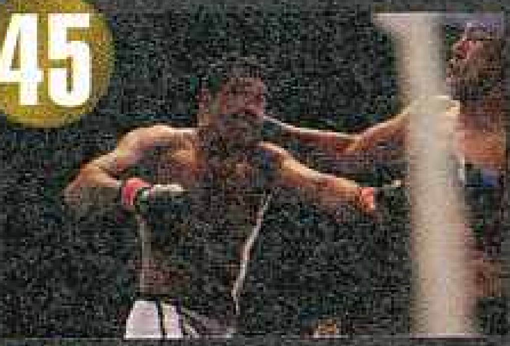
43
05.7.6『HERO'S 2005ミドル級世界最強王者決定トーナメント』
代々木第一体育館
○ボブ・サップ［1R 3分44秒 KO］アラン・カラエフ×

懐かしい谷川モンスター路線時代を象徴する一戦。賞味期限切れのサップとロシアの腕相撲王者カラエフの闘いは、序盤から両者ラッシュをかけるが、序盤から両者スタミナ切れ。先にパンチが当たったサップが勝った。



44
07.3.12『HERO'S 2007 開幕戦 ～名古屋初上陸～』
名古屋レインボーホール
○マイティ・モー［1R 2分37秒 TKO］キム・ミンス×

"豪腕サモアンフック" マイティ・モーのMMAデビューの相手は、ある意味、『HERO'S』の名勝負製造機であるミンス。やられっぷりには定評があるミンスが、周囲の期待どおり、サモアンフックでKO負け。



45
06.3.15『HERO'S 2006』
日本武道館
○キム・ミンス［2R 1分32秒 スリーパーホールド］山本宜久×

"日本のキム・ミンス" ヤマヨシと、"韓国のヤマヨシ" ミンスの、ある意味、夢の対決。本家ヤマヨシはローキックを中心に試合を優位に進めるが、須藤元気を意識してかカッコつけて半身になってるうちに逆転KO負け。さすがだ。



46
05.3.26『HERO'S』
さいたまスーパーアリーナ
○ボブ・サップ
［1R 1分12秒 KO］
キム・ミンス×

前日の会見で「メダルをかけろ！」「オリンピックに出てみろ！」と醜い舌戦を繰り広げた両者が、ゴングと同時にひたすら殴り合い。サップは鼻血を吹き出しドクターチェックを受けるが、再開後、パンチで突っ込み逆転勝ち。



47
07.7.16『HERO'S 2007 ～ミドル級世界王者決定トーナメント開幕戦～』
横浜アリーナ
○ハレック・グレイシー［1R 3分05秒 袈裟固め十字固め］柴田勝頼×

プロレスラーvsグレイシー。この脈々と続く因縁の一戦は、新世代へと受け継がれる――。が、試合はまったく進化せず総合黎明期のような内容に。打撃ができないハレックに倒されると、柴田は成す術なく一本負けを喫した。



48
06.8.5『HERO'S 2006 ミドル&ライトヘビー級世界最強王者決定トーナメント準々決勝』有明コロシアム
○ドン・フライ［1R 4分52秒 チョークスリーパー］山本宜久×

我らが日本格闘技界の番長ヤマヨシが、男塾塾長と対戦。明らかに調整不足で腹も出て動きが悪い塾長に対し、ヤマヨシは打撃で優位に試合を進め「今日こそ勝つか!?」と一瞬思わせるが、やっぱり逆転負け。期待を裏切らない男だ。



49
07.10.28『HERO'S KOREA 2007』
ジャンチュン体育館
○イ・テヒョン［1R 1分03秒 TKO］山本宜久×

ここまで『HERO'S』3戦全敗。もはやあとがないヤマヨシはシルムのテヒョンと対戦。相手は総合デビュー戦だけに、さすがに勝つかと思われたが、なんとミドルキックに悶絶! 秒殺KO負けを喫してしまった。さすがすぎる……。



50
06.5.3『HERO'S 2006ミドル級世界最強王者決定トーナメント開幕戦』
代々木第一体育館
○浜中和宏［1R 1分22秒 アームロック］WAKASHOYO×

相撲界のキング・オブ・ロックンロールこと若翔洋が、WAKASHOYOに改名して登場。当初はヤマヨシとの夢の対決が予定されていたが、ヤマヨシ負傷のため代打で出てきた浜中に、あっさり一本負けを喫してしまった。



36
05.11.5『HERO'S 2005 in SEOUL』
オリンピック第1体育館
○ハリッド・"ディ・ファウスト"［2R 判定2-0］金原弘光×

我らが金ちゃんが、『HERO'S』の韓国大会に初出場。K-1WGPでも活躍するハリッドの打撃をかいくぐり、腕十字を極めかけるが、惜しくも逃げられ、1-2の判定負け。「絶対に判定がおかしいよ!」とおおいにボヤいたのだった。



37
05.7.6『HERO'S 2005ミドル級世界最強王者決定トーナメント』
代々木第一体育館
○ピーター・アーツ［1R 1分39秒 TKO］若翔洋×

K-1vs相撲。その顔合わせだけで、出オチ感丸出しのこの一戦。総合デビュー戦の若翔洋は積極的に電車道でアーツに突っ込んでいくが、押し相撲だけで倒す武器をもっていなかったため、ワンツーからのパウンドでKO負け。



38
06.5.3『HERO'S 2006ミドル級世界最強王者決定トーナメント開幕戦』
代々木第一体育館
○ドン・フライ［2R 3分50秒 フロントチョーク］曙×

この前年の『Dynamite!!』で "素人" ボビーにも敗れ、いよいよあとがなくなった曙が、男塾塾長と対戦。プロレス心がわかる塾長は、曙のよさを必死に引き出すかのような闘いぶりを見せるが、曙はやっぱり完敗だった。



39
06.3.15『HERO'S 2006』
日本武道館
○所英男［1R 0分49秒 三角絞め］池田祥規×

『HERO'S』初の武道観大会のメインに抜擢された所は、かなりの緊張がありながら、極真空手の池田を冷静にテイクダウンし、三角絞めで一本勝ち。"攻防" は見せられなかったが、勝利でメインの責務をはたした。



40
05.3.26『HERO'S』
さいたまスーパーアリーナ
○LYOTO［3R 判定3-0］
B.J.ペン×

現在はUFCのライト級とライトヘビー級のトップファイターとなっている両者の対戦が、こんなところでちゃっかりと実現。 ペンは積極的に仕掛けるが、さすがに3階級違う体格差は崩せず、LYOTOに判定負けを喫した。



42
07.7.16『HERO'S 2007 ～ミドル級世界王者決定トーナメント開幕戦～』横浜アリーナ
○金泰泳［延長R 判定3-0］田村潔司×

"ヌルヌル事件" 後、真っ先に "秋山狩り" を宣言した田村が、『HERO'S』に初登場。ここで勝てば大晦日に秋山戦が確実視されていたが、寝技に持ち込んでも金を極めきれず、延長戦の末、判定負け。大きな星を落とした。



41
05.3.26『HERO'S』
さいたまスーパーアリーナ
○須藤元気［1R 2分54秒 ヒールホールド］
ラモン・デッカー×

キック界の伝説の男が寝技の練習一週間でMMAをやってしまう、初期『HERO'S』らしい一戦。元気は足を負傷していたが、寝技に持ち込み一本勝ち。なお、デッカーの所属はなんと「リングス・オランダ」ということになっていた。

に一緒に練習してたから柴田の力量を知ってるつもりなわけですよ。「若手プロレスラー？ バカ言っちゃいけないよ」みたいな。「オラ、来いよ！」って。

井上 教えてやりてえ、試合前のヤマヨシに（笑）。

ガンツ 「まずはビビらしたろ」ってことで、痛いローを放って「これが総合格闘技だよ」って。

井上 挨拶代わりの（笑）。

ガンツ それでおもいっきり踏み込んで痛いロー打ったら、顔面がガラ空きで……。

井上 手紙書きてえ、試合前のヤマヨシに（笑）。

ガンツ そこにバコーンッて当てられちゃって終わり（笑）。それとヤマヨシvsWAKASHOYOっていうドリームマッチがオープニングファイトに組まれてたことがあったんですよ。

橋本 桜庭が初めて登場したときの代々木大会だよね。

ガンツ そんなドリームマッチが第一試合の前の試合で組まれてて。「これは観なきゃいけない！」って慌てて会場に向かって。

井上 どんな試合だったの？

ガンツ いや、行ったらヤマヨシがケガしてて浜中に替わってて。『HERO'S』はそれだけが心残りですね。

橋本 あとはどんな試合があったっけ？

ガンツ それだけ。全4試合。全部名勝負ですねえ。

橋本 ヤマヨシが4回出たっていうのが凄いよな。

ガンツ 『HERO'S』はヤマヨシが初代・魔王だったということで。今日はありがとうございました！

【08年4月1日／kamipro編集部にて収録】

HERO'Sスーパーバイザーよ、永遠なれ!

テレビじゃ聞けない 前田語録

05年春、「世の中には前田日明が足りない!」のコピーとともに、3年ぶりにマット界の表舞台に帰ってきた日明兄さん。
それから約3年間、『HERO'S』のスーパーバイザーとして、主に記者会見で大活躍。
そして今春、『THE OUTSIDER』プロデューサーに華麗なる転身を遂げた日明兄さんの、
テレビにはなかなか映らなかった素晴らしい発言の数々をここでは振り返ってみよう。

構成／堀江ガンツ（本誌・前田日明ウォッチャー）　写真／乾晋也



猪木のオッサンを誰か早く老人ホームに連れていけ!

▶【05年2月16日、『週刊プロレス』】

「歳をとるごとに恨みが増す」という日明兄さんが5年の時を超えて、『第2回メモリアル力道山』で行なわれた猪木vsタッキー（滝沢秀明）を大批判！　その怒りの根源は、猪木がタッキーとちゃんとしたプロレスをやったから。逆に言えば、タッキー相手に、あの前田が観ても「真剣なプロレス」に見える試合をしてしまうアントンは、やっぱり天才だといえるだろう。

ヒーローズやなかったっけ?

▶【05年3月1日『HERO'S』旗揚げ記者会見】

じつは当初、『HERO'S』と書いて「ヒーロー」と読ませるはずだった『HERO'S』の大会名。しかし、内部でも話が行き届いてなかったのか、旗揚げ記者会見の壇上で、プロデューサーとスーパーバイザーによる「ヒーローズやなかったっけ？」（前田）「ヒーローズと書いて、ヒーローと読むんですよ」（上井）という会話が、行なわれていたのだ。そして結局、みんなが「ヒーローズ」と呼び間違えるので、正式呼称も「ヒーローズ」に変更！　結果的に前田SVの呼び間違えが、「ヒーローズ」を生んだのだ！

やっぱりそうですか……

▶【06年9月13日、テレビ朝日系『オーラの泉』に出演】

テレビ朝日系『オーラの泉』に出演した日明兄さん。江原啓之曰く、前田をこの番組に連れてきたのは、なんと三島由紀夫！　さらに注目の前田の前世は、中国の皇帝の息子（皇子）とのこと。それを聞いた日明兄さんは神妙な顔で一言「やっぱりそうですか……」。ちょっと「やっぱり」って、自分でも前世が皇子だと思ってたの!?　奇跡のようなこの番組、最後に江原啓之に「闘いのカルマは終わりにせよ」と言われ、美輪明宏には「刀をすべて処分しなさい」と言われてしまった日明兄さん。その後、どうなったか気になるが、『THE OUTSIDER』を開催しているところを見ると、闘いのカルマはちっとも終わっておらず、刀も処分してないものと思われます。

俺、前世で中国の皇帝だったときと、武将だったときがあったんだよね。その記憶がフラッシュバックすることもある

▶【06年11月7日更新、『HERO'S』携帯サイト】

『オーラの泉』出演後のコメント。フラッシュバックしますか……。大向美智子との対談希望！

現在、PRIDEや『HERO'S』など日本格闘技界で活躍する一流選手の80パーセント以上を私が発掘した

▲【05年10月6日、『HERO'S』韓国大会記者会見】

なんとかも百回言えば本当になるといいますが……。

『たまごクラブ』と『ひよこクラブ』を読破してるからね

▲【07年7月23日、『HERO' S』携帯サイト】

かつては「ヴィトゲンシュタイン（哲学者）全巻読破!」を自慢していた超読書家として知られる日明兄さん。そんな格闘王もいまやパパ。ヴィトゲンシュタインから、一気に『たまごクラブ』と『ひよこクラブ』読破に変わったようです。

ざまあみろ!

▶【07年10月6日、『HERO'S』記者会見】

PRIDE FC WORLD WIDE全社員が解雇され、日本事務所が閉鎖された直後、コメントを求められた前田SVは「ざまあみろ！」、「●●は●●の世界に帰んなさい！」など、前田節を大爆発！　勢いあまって、「PRIDEのイメージのせいでリングスにつきかけたスポンサーにも手を引かれた」と、リングスがいつまで経っても"やるやる詐欺"状態なのをPRIDEへ責任転嫁！　案の定、谷川FEG代表が謝罪するハメとなったのでした。

だんだん俺に似てきたね。手と足とチンポがデカいんだよ!

▲【07年7月23日、『HERO' S』携帯サイト】

息子さんはお父さんに似てきたそうです。親しい知人に「見てみぃ、この色！　このツヤ！」と、ちんちんを自慢している可能性もあります。

『THE OUTSIDER』の叩き上げを束ねてリングスという発展型にしたい

▲【08年2月15日、『THE OUTSIDER』記者会見】

衝撃事実発覚！『THE OUTSIDER』の発展型が第二次リングスだった！　でも、リングスって、オリンピック競技を目指してたんじゃ……。

K-1もPRIDEもリングスから派生した

挨拶がなかった

▶【06年10月8日、『HERO'S』直前記者会見】

金子賢参戦に怒りが収まらない日明兄さん。「挨拶に来たら、俺もいいすぎたかなと思ったかもしれないけど、これじゃあしょうがない」と、試合前日になってもスーパーバイザーである自分に挨拶がないことを嘆いた。っていうか、「半殺し」発言って挨拶があったら撤回しちゃうぐらいのものだったの？ いや、これはいかに挨拶、礼節が大事なのかということなんだろう。

あの闘い方が、無言の抗議のようにも見えて……

▲【06年1月1日、『Dynamite!!』を総括】

元横綱である曙と、素人のタレントであるボビー・オロゴンのマッチメイクを批判した日明兄さん。試合前は「曙が面目を保つためには、ボビーを殺すぐらいのことをしないと」と、物騒なアドバイスを送っていたが、試合は曙が亀になったまま殴られ判定負け。その曙の闘い方を日明兄さんは「(マッチメイクに対する) 無言の抗議に見えた」と語ったが、それは考えすぎなような……。

誰も自分の言うことを聞いてくれなくてスーパーバイザーっていったい何なのかな？

▲【06年8月6日、『HERO'S』一夜明け会見】

桜庭vsスミルノヴァス戦において、桜庭が半失神のままパウンドをもらい続ける姿を見て、リングサイドから「止めろ!」と叫んだ日明兄さん。しかし、レフェリーもジャッジもドクターも、一向に止める気配なし。そんな自分の言うことを聞かないリングサイドスタッフの姿を見て、日明兄さんは「スーパーバイザーっていったい何なのかな?」と、就任1年半経ったところで、ようやく自らの肩書きに疑問を覚えたのでした。ホント、スーパーバイザーってなんだったのでしょう……？

プロレスは5カウントは反則OKだからね。そのときは俺がいろんな技を教える

▶【05年6月21日『東京スポーツ』】

5・14新日本ドーム大会に前田の弟子、山本宜久が乱入。永田さんと乱闘したことを受けて、永田vs山本を「総合ルールならいつでもやらせる」と断言！ なんとその理由は「反則5カウント以内OKのプロレスルールじゃ永田が死んじゃう」から。そんな慈悲深い日明兄さんは、もしプロレスルールでの対戦となった場合は「そのときは俺がいろんな技を教える」と、秘伝の反則技伝授を予告！ さすが『THE OUTSIDER』プロデューサーといえるだろう。

クルーザー・ウエートのチャンピオンクラスとニールセン戦のルールでやってみろ！

▲【05年4月25日、前田日明記者会見】

永田さんの「俺のヒョードル戦とあんたのニールセン戦を一緒にするな!」という発言に日明兄さんが激怒!「じゃあ、やってみろ」とばかりに、ニールセンと同じキックボクシングのクルーザー級チャンピオンとの対戦を永田さんに迫った。しかし、よく考えてみると、クルーザー級(約90キロ以下)で総合未経験のアメリカ国内のキックボクシング王者って、かなりおいしい相手のような……。

『UFCの資金力に対抗すべく、『HERO'S』とリングスがスクラムを組んで共闘していく！

▶【07年9月24日、第1回リングスファンミーティング】

PRIDEをも飲み込んだ、巨大な資金力を誇るUFCに対抗すべく、日明兄さんが『HERO'S』とリングスの共闘を高らかに宣言！ しかし、『HERO'S』はこの発言の次の大会で、終了のアナウンスもなく、DREAMに変わるかたちで自然消滅。そして、リングス復活の声は一向に聞こえてこない……。

山本KIDクラスが20人ぐらいいます

▲【05年3月1日『HERO'S』旗揚げ記者会見】

マット界復帰にあたり、世界各国のMMA試合VTRを観たという日明兄さん。するとたちまち山本KID級の逸材を一気に20人も発見！ さらに「その上のレベルのヤツが間違いなく3人いる」と断言！「私には見えるの」とばかりに、衰えを知らぬ選手発掘能力を早くも発揮したが、なぜか『HERO'S』には"KID級"がなかなか参戦せず……。しかし、これはきっと第二次リングスの隠し玉として温存しているのだろう。そうに違いない！

▼【08年1月23日、『格闘技通信』】

大晦日の『Dynamite!!』で、所英男を下した田村潔司に、トロフィーを投げつけた日明兄さん。その怒りの原因を『格通』でぶちまけた！……って、どうでもいいけど、日明兄さんのコメントが、ミスター・ポーゴ化してきているような……。

谷川くんに聞いて！

◀【『ゴング格闘技』No・172】

専門誌『ゴン格』インタビューで、「『KID級の選手を3人見つけてきた』という選手はどうしたんですか?」と突っ込まれた日明兄さんは、「まだ出てないよ」と、出場を否定した上で、「谷川くんに聞いて」と、問題をサダハルンバに丸投げ！ あれだけ仕事の早い谷川Pが「KID級」3人を出場させないとは、何か考えがあるのか、それとも……。

元気君のような"魚釣り戦法"だと、凄く試合がつまらなくなる

桜庭とやるには100万年早いよ

◀【05年9月8日、『HERO'S』大会総括】

『HERO'S』ミドル級トーナメントで、宮田和幸と高谷裕之を相手に連続一本勝ちで勝利し、見事、決勝進出をはたした須藤元気。多くの人が絶賛した試合だったが、日明兄さんは元気の打ち合わない戦法が気に入らないらしく「試合がつまらなくなる」と断罪!「全員があれをやったらどうなるんだろうって、凄く考えるんですよ」と、格闘家全員が須藤元気スタイルになることを危惧したが、ズバリ言って、それは考えすぎだと思います。

▶【05年2月16日、『週刊プロレス』】

驚愕の新事実発覚！ 日本格闘技界の二大メジャーの源流はリングスだった！ すべての道はリングスに通ずるのか……。確かにK-1はリングスの興行システムを参考にし、PRIDEはリングス出場経験の選手が多数上がっていたが、それを「派生」と言いきるところが素晴らしい！ やっぱりすべての道はリングスに通じるのだ。

『世界最強の男はリングスが決める』というのをPRIDEさんの手を借りて証明させてもらってる

▲【05年3月1日『HERO'S』旗揚げ記者会見】

ヒョードルやノゲイラは、最初にリングスが日本に呼んだ選手。だから彼らはリングスの選手。というわけで、リングス最強！ という素晴らしい三段論法を披露してくれた日明兄さん。しかし、この発言だと、PRIDEチャンピオンは世界最強だと認めてしまってもいるような……。

UFCにもルートがある

▲【08年2月15日、『THE OUTSIDER』記者会見】

またまた衝撃事実発覚！『THE OUTSIDER』にはUFC出場のルートがあった！ かつて、日明兄さんは、新日本プロレスの"過激な仕掛人"新間寿に「ウチはモハメド・アリのジムにもルートがある」と、新日本入門を口説かれたが、なんだかデジャヴ……。

俺が現役やったら半殺しにしてるよ！

◀【06年10月3日、所英男vs金子賢戦発表記者会見】

タレント金子賢が『HERO'S』初参戦。自分がかわいがる所英男との対戦が決定し、日明兄さんが激怒した！ 所に対して「半殺しにしろ」と、"殺人未遂指令"を行なったかと思えば、さらに自らの手で始末する意思すら表明。しかし、120キロ近い日明兄さんと70キロの金子賢って、ずいぶんなマッチメイクのような……。

「PRIDEのイメージのせいでリングスにつきかけたスポンサーにも手を引かれた」と、リングスがいつまで経っても"やるやる詐欺"状態なのをPRIDEへ責任転嫁！ 案の定、谷川FEG代表が謝罪するハメとなったのでした。



初期プロデューサー

上井文彦が語る

HERO'S誕生の裏側

「全部台本どおり読んだだけですよ!」

いまとなっては意外なことだが、『HERO'S』の旗揚げは、ここに登場する上井文彦が立ち上げたビッグマウスのプロジェクトだった――。3年前、前田日明を表舞台に引っぱり出した上井氏が、当初、前田とともに思い描いていた『HERO'S』とはどんなものだったのか? また、そこに隠れたさまざまな登場人物の"思惑"とは!? 上井氏の言葉から探れ!

聞き手　ジャン斉藤　撮影　平工幸雄

――今日は『HERO'S』とはなんだったのか? というテーマで、『HERO'S』の旗揚げに携わった上井さんにお話をうかがいたいと思います。

上井 最近のことはまったくわからないけど、初期の『HERO'S』のことなら僕ぐらいしか話せる人間はいないよねぇ。

――そうですよね。なにしろ上井文彦プロデュース興行でしたし。そもそも『HERO'S』の旗揚げの話はどこから浮上したものだったんでしょうか?

上井 まずね、僕が新日本プロレスを辞めて、05年の1月21日にビッグマウス立ち上げの会見を前田(日明)さんと一緒にやったでしょ。

――リングス休止後、沈黙を保っていた前田日明をひさしぶりに引っぱり出した会見ですね。

上井 そのときに前田さんが「上井さんがやるのであれば、とりあえずスーパーバイザーというかたちでやります」と言ってくれて。……まあ、いま考えれば当時から〝歪み〟はあったのかなあと思いますけどね。

――歪みといいますと?

上井 僕はプロレスをやりたかった。でも、前田さんも当時から〝スーパーUWF〟をやりたいと言ってたんですよ。そんな感じで僕らのあいだでもやりたいプロレス観にズレはあったんですけど。それでもなぜ前田さんが必要だったかというと、ビッグマウスにカリスマ的存在の人がほしかったんですよ。

――要は団体の象徴として、誰かを立たせたかったということですね。

上井 そう! 当時、前田さんはずっと隠れたまんまでしたからね。そこは誰か引っぱり出さないといけないということもあったし、僕とこじれてた仲もやっと修復でき

たから。

―そのビッグマウスは新生『WRESTLE—1』（以下『W—1』）をやるという話じゃなかったでしたっけ？

上井 それはね、前田さんと話をする前から『「W—1」をやりたいな』と思ってたんですよ。実際に4月23日にやると一度は発表してたでしょ？

―結局延期になりましたけど。旧『W—1』はFEGが絡んでいたイベントでしたし、新生『W—1』も主催はFEG。ということは、ビッグマウス設立からFEGとは協力体制にあったということですか？

上井 そういうことですね。のちにプロレス興行をやったビッグマウス・ラウドは全然関係なかったけど。ビッグマウスはFEGと僕とが半々でやってたものだったからね。

―すると、『W—1』やビックマウス設立は上井さん主導のプロジェクトというわけでもなかったんですね。

上井 あのときの僕にはそんな力はなかったんで、FEGと共同で……いや、共同というか、もう完全にFEG主導ですよね。結局、僕は新日本を辞めたばかりで、いきなりイベントをやるなんて難しかった。だから、最終的な決断はFEGが握ってましたよ。

―だから、ビックマウスのスーパーバイザーだった前田日明がそのうち『HERO'S』にも関わるようになったと？

上井 そう。前田さんを引っぱり出せたことは、『HERO'S』にとって大きな魅力に感じてたんじゃないですかね。

ビッグマウスはFEGと僕とが半々でやってたものだからね

―FEGも『HERO'S』の象徴となる人間を探していたということですか。

上井 そういうことでしょうね。そして、前田日明が出てくるとしたら、プロレスよりも総合格闘技で使うほうがいいと思ったんでしょう。そのへんの経緯は僕にはわからないですけどね。ただ、先に4月23日に『W—1』を横浜アリーナでやると発表した。だから、僕らはそれありきで動いてたんだけど、どうもFEGの動きがおかしいと思ってたんです。そうしたら、谷川氏が「上井さん、ちょっと相談があります」って。

―はいはい（笑）。



05年1月21日、プロレス興行の旗揚げを目指し、ビッグマウス設立を発表した上井氏。そこにスーパーバイザー・前田日明氏の姿があったことは、マット界に多大な衝撃を与えた。しかし、その後旗揚げが発表されたのはプロレス興行ではなく総合格闘技『HERO'S』に……。

上井 「上井さん、総合格闘技をやりましょう！ そしてTBSで放送しましょう」って。そして「だから、そのイベントのプロデューサーになってください」って言われてね。でも僕、総合なんかわかるわけないじゃないですか。でも「お願いします。やってください」って。

―上井さんの推測でかまわないんですけど、そのビッグマウス設立の段階から、FEGは『HERO'S』をやろうと思ってたんですかね？

上井 ……いや、それはわからないですね。ただ、もしかしたら総合のイベントをやるにあたってPRIDEとFEGのあいだでなんらかの取り決めがあったのかもしれない。ダミーとして上井と前田日明が表に出るんだったら、見え方としては別ものになるじゃないですか。だから、僕らはちょうどいい存在だったんでしょう（苦笑）。あくまで推測ですけど。

―PRIDEとFEGのあいだで取り決めがあったというのは、FEGは総合をやらない、PRIDEは立ち技をやらないという一種の不可侵条約的なものだったんですかね？

上井 いや、真実はわからないですよ。だけど、そういうことがあったのなら、上井も出しゃばりだし、前田日明もカリスマ的存在だし、僕らにやらせるのがちょうどいいんじゃないかってね……。

―とはいえ、上井さんは『HERO'S』をやることに抵抗はなかったんですか？

上井 そりゃ迷いましたよ！ でも、イエスorノーを選択できるような立場ではなかったんですよね。でも僕はまだいいですよ。ビッグマウスの人間として「プロデューサーをやってください」と言われたら「やりましょう！」と言わないといけない立場だから。でも、前田さんの場合は全然関係ないから。

―ビッグマウスならまだしも

上井 だから、そこで前田さんをうなずかせるのに苦労したんですよ。最初に僕が口説いたら、「絶対にイヤだ!!」って言われましたからね。ほかにもいろんな人が口説いたんですよ。それでもずーっとノーだったんです。で、最終的には僕が前田さんの家に呼ばれたんだったかな。そこで、前田さんの胸の内を聞かされたんですよね。ここでは絶対に言えないんですけど。

―何か条件を提示されたんですか？

上井 いや、条件というか、胸の内ですよね。「上井さん、それを理解してくれるんだったら、あえて乗せられたフリをして乗ろうか」って。それで、もう一回谷川氏も交えて話をしてしぶしぶOKしてもらったというかたちですかね。

―前田さんとしては力を蓄えて、いずれリングスを復活させようとする腹づもりだったわけですよね。

上井 まあ、前田さんは前田さんなりに、PRIDEが消滅したまでは凄く計画どおりにいったんじゃないですかね。ただ、そのまさかDREAMができるとは思ってなかったんじゃないのかな。真意はわからないですけど「獅子身中の虫になって、腸食い破って……」という感じだったと思いますよ。

―そうして前田日明『HERO'S』スーパーバイザーが誕生したということになる

んですね。

上井　ええ。それで3月26日に最初の『HERO'S』をやろうということになったんですけど、やると決まってから1ヵ月しかない状態だったんですよ。でもね、記者会見から何から全部段取りができてたんです。要は、『HERO'S』をやるにあたって、表に立つ人間だけがいなかったということですよね。

──ということは、象徴に前田日明をはめるだけだった、と。

上井　だから僕らはちょうどいい存在だったんですよ。FEGも「これしかない!」と思ったのかもしれないですよね。ただ困ったのが、悪いけど本当に僕、総合わからないから会見でしゃべったことは全部台本どおりだったんですよ。

──全部台本どおり!!

上井　だって、知らないんだもん!!　イアン・シャファー?　誰?　ヨアキム・ハンセン?　誰?　スタン・ハンセンなら知ってるけど(苦笑)。

──ダハハハハ!　ベタですねぇ(笑)。

上井　で、秋山(成勲)選手も最初に出たじゃないですか。

──メインイベントでジェロム・レ・バンナと試合しましたね。

上井　でも、当時は知らないですからね、「秋山の下の名前なんていうの?」って。名前覚えるのに必死だったんですから。

──イベント名称も「ヒーロー」なのか「ヒーローズ」なのかって会見中に前田さんと確認し合ってましたよね(笑)。

上井　そうそう!　僕ね、記者会見でどれだけ人がいようと慌てたことはないんだけど、あのときだけは緊張した。アドリブでしゃべるのは得意だけど、「このセリフをしゃべってください」って言われて話すのは苦手だし、はたして僕がそのとおりにしゃべって迷惑がかからないかなって。だから、「頼むから自分に質問しないでくれ!」って祈ってたんですよ!

──ダハハハハ!

上井　そんな感じで、記者会見があるたびにFEGから「こう言ってください、ああ言ってください」って言われるわけですよ。だから、いわゆるプロデューサーとはいっても"お飾り"なんですよね。

──上井さんとしては『HERO'S』を始めるとはいえ、心はやっぱり『W-1』だったんですよね?



05年3月26日に行なわれた『HERO'S』旗揚げ戦。その解説席にはサダハルンバと、そして船木の姿があった。上井氏によると、船木復帰の仕掛人はサダハルンバだといい、当時から復帰の構想を思い描いていた推測。恐れ入るばかりである。

これだから谷川氏は徳川家康ばりの策士だって言われるんですよ

上井　うん。でも、一連の流れで3月26日に『HERO'S』が決まりました、と。その段階でハナからプロレスをやるつもりはないとわかるでしょ?　それで僕に『W-1』のキャンセルの話をさせてね、"延期の上井"が定着したわけですよ。プロレスファンはみんな『W-1』の開催を楽しみにしてたのにねぇ……。

──『HERO'S』とその後の関わりはどうなっていったんですか?

上井　だから言ったの。僕、べつにテレビに出たいわけでもないし、わからない総合のプロデューサーをやる気もない。そこまでして出たくないですって。だから、谷川氏に「1回目は約束だったからちゃんと前田さんを連れてきました。でも、今後は前田さんをプロデューサーにして僕は降ります」って。

──なるほど。そこから前田さんとの仲もこじれていった感じですか?

上井　うーん、ビッグマウス・ラウドをやり始めた頃まではよかったんですけど、やっぱり船木(誠勝)選手が復帰すると宣言して盛り上がってからでしょうね。

──あ、船木さんの復帰がきっかけだったんですか?

上井　いやいや、それ自体はきっかけじゃないですよ。つまり、船木選手と前田さんを会わせた"仕掛人"は谷川氏だったんですよ。結局、船木選手は『HERO'S』でも解説をやってたじゃないですか。だから、いわゆるそういうふうにセッティングをしようという谷川氏の思惑があったんじゃないですかね。で、最終的にこういうかたち(現役復帰)になりましたからね。谷川氏にとってはベストな感じで進んだんじゃないかなと思います。これだから谷川氏は徳川家康ばりの策士だって言われるんですよ。

──いわゆる"黒魔術"ですよね。一つお聞きしたいんですが、前田さんは"スーパーUWF"をやりたかったということですけど、それって具体的にどんなものだったんでしょう?

上井　それをやるにあたって、僕は田村(潔司)とも会いましたよ。「"スーパーUWF"をやらないか」ということで。ヴォルク・ハンや高阪剛とか、いわゆるUスタイルができる連中を集めてUWFのスタイルをやろう、と。もっと総合に近い闘いをやろうということだったと思いますよ。あとランディ・クートゥアーを呼んでやろうという話もありましたしね。

──ラ、ランディ・クートゥアーですか!!　なぜだ(笑)。

上井　そうですよ(キッパリ)。ギャラとか関係なく、夢としてはそういう話が出てましたね。

──なるほど。リングス、スーパーUWF、『W-1』……いろいろな思惑から生まれたイベント、それが『HERO'S』だったということですね。

【07年4月2日/都内・某所にて収録】



よく『訛ってる』って言われますよ（川田）

栃木が生んだ二大格闘スター

あんまり訛ってないよね？（ガッツ）

ガッツ石松×

栃木県粟野町（現・鹿沼市）出身

川田利明

栃木県下都賀郡出身

『ハッスル』のリングで突如、ボノちゃんの口から飛び出した川田利明に対する暴言——「栃木の田舎っぺ」が日本格闘技界を揺るがす大きな波紋を巻き起こした。「栃木をバカにするな!」「栃木県民に謝れ!」と栃木LOVEに燃える“モンスターK”と、同じく栃木出身のスーパースター・ガッツ石松のスペシャル対談が実現してしまったのだ。それぞれのリングで頂点を極めた男たちが、故郷の栃木について語りまくった60分一本勝負！ いざゴング!

聞き手／堀江ガンツ（栃木県宇都宮市出身）　撮影／山口比佐夫（静岡県出身）

I♥栃木

スペシャル対談

―今日は、栃木県が生んだ二人のスーパースターにお集まりいただきました！

ガッツ　あ、栃木県出身なの？

川田　はい。下都賀郡の藤岡町出身です。

―ちなみに聞き手の僕も栃木県宇都宮市出身です（笑）。

川田　ガッツさん、いま『ハッスル』のリングで、ボノちゃんってヤツが、僕のことを「栃木の田舎っぺ」って言うんですよ！（言いつけるように）。

ガッツ　田舎っていったら、あっちのほうがよっぽど田舎じゃないの？

―でも同じ田舎でも栃木の田舎より、ハワイの田舎のほうがカッコよく聞こえちゃうんですよね（笑）。

ガッツ　福島にもハワイはあるけどな。

川田　常磐ハワイアンセンター（現スパリゾートハワイアンズ）ですね（笑）。

―だから今日は、お二人に栃木の素晴らしさをおおいにアピールしていただきたいんですよ。川田さんの少年時代、やっぱり地元のスーパースターといえば、ガッツさんですよね？

川田　そうですね。じつは僕、小学校4年生のときに、ガッツさんがボウリング場にいたのをお見かけしたんです。

ガッツ　地元で？

川田　栃木市のボウリング場です。僕が小学生のときなんですけど、お見かけして、ダッシュで色紙を買いに行って、当時チャンピオンだったガッツさんのサインをいただいたことがあるんです。いまだに、その色紙もずっと取ってあるんですよ。握手もしてもらって。

ガッツ　パレードかなんかやったときかなあ？　私たちはそういうの大事なんだよね。若者とか子どもたちとかいろんな人が「サインして」とか「握手してくれ」とかね。それを忘れちゃいけないんだ。

川田　僕がそういう色紙に「サインをください」ってもらったのって、ガッツさんだけなんですよ。いろんなタレントさんとか、誰かに頼まれてっていうのはあるんですけど、自分で色紙にサインをもらったのはガッツさんだけですよ。

ガッツ　自分が格闘技やってるとね、そういう人を見るとヒーローだもんね。

川田　でも、僕はその頃、格闘技は全然ダメだったんですよ。中学時代から相撲の試合とか出るようになって、高校でレスリングの強い学校に誘われて、そこでずっと3年間やって。

ガッツ　昔、全日本だったんですよね。

川田　そうです。高校で一つ上の先輩だった三沢（光晴）さんが全日本に入ったので。

ガッツ　俺はプロレス観てて、いい選手だなっていうのはずっと記憶に残ってたんだよ。川田さんが栃木出身だっていうのはさっき知ったんだけどね。

川田　ありがとうございます。

ガッツ　俺もプロレス好きでね、ボクシング辞める頃、もう少し体格があったらプロレスラーになろうと思ったぐらいでね。でも身体がデカくないからやらなかったんだけど。やってても遊びになっちゃうからね。いくらボクサーといえども、プロレスのルールで身体のデカい人とやったら勝てないから。ボクシングのルールでやったらプロレスラーとやっても、こっちが強いんだけどね。好きだからずっと観てたよ。凄くタフな人だなと思って観てたもんね。

川田　ありがとうございます。その頃のツケで身体がもうガタガタなんですけど。

ガッツ　どんなにやられても立ち上がる。プロレスっていうのはある面ではホントの底力がないと最後にフォールを取れないんだよね。

―ガッツさんとプロレスの関わりは、意外と多いですよね。

ガッツ　新日本の（アントニオ）猪木さんの関係でね。

川田　リングに上がられたこともありましたよね。

ガッツ　そう、2回ぐらいレフェリーやった。

―格闘技戦のレフェリーやられたり、ドン荒川さんとちょっと試合したりとか。

ガッツ　そう、リング上でコケてやったらさ、ボクシングだったらパンパーンと打てば楽にいけるんだけど、それやっちゃおしまいだから。自然にやってたらくっつかれてね、首絞められたらダメだもん、すぐあれだね、OK農場になっちゃったもん。

―OK牧場じゃないんですか（笑）。

ガッツ　うん、農場もあるんだよ。ダメなのはOK牧場じゃなくて、OK農場。あのときは農場だった。

川田　栃木にはどれぐらいまでいたんですか？

ガッツ　俺、15歳までしかいなかった。ホントは高校行きたかったんだけどね、行けないんで、代わりに栃木の家庭裁判所は行きましたけど。

―なかなか行けないところに（笑）。

ガッツ　あと鹿沼の警察署ね。で、群馬の少年院っていうのが「おいでおいで」って呼んでたけど、俺は行かないで済んだ。で、中学校を出た二日後に東京に出てきたんだよね。あの頃はやることねえからな、ゲームがあるわけじゃねえし、何があるわけじゃねえから。

栃木県基礎データ



栃木県は関東地方の東北部に位置しており、群馬、茨城と並んで北関東と称されることが多い。東は茨城県、西は群馬県、南は茨城、埼玉、群馬の3県、北は福島県に接している。県庁所在地は宇都宮市は、東京から約90km、JR東北新幹線で約50分。

面積は6,408平方キロ、全国で20位の面積だ。関東地方では最大の面積を誇っている。人口は201万5,882人（平成20年3月1日現在）。主な農作物はいちご、にら、かんぴょう（いずれも全国1位）。日光東照宮は世界遺産に登録されている。

I ♥ 栃木
ハッスル対談



『ハッスル』のリングで川田と敵対するボノちゃん（曙）が発した「栃木の田舎っぺ」という発言を聞いて「そんなこと言ったの!?」とガッツさんも目を丸くした。

川田　僕、藤岡町には15歳までいて、高校は足利だったんですけど、特待生で学校の敷地の中にずっと入れられちゃったんで、自分も地元は15歳で離れて。まあ、一応足利も栃木なんですけど。

ガッツ　文学の街だからね、足利はね。

川田　でも、勉強は全然しなかったです。

ガッツ（唐突に）あんまり訛ってないよね？

川田　そうですか？　けっこう「訛ってる」って言われてるんですけど。

ガッツ　全然、訛ってないよ。で、高校では何をやってたんですか？

川田　アマチュアレスリングだけ、ずっとやってました。

ガッツ　ああ、ホント？

——栃木の中では都会である宇都宮にはしょっちゅう行かれてたんですか？

ガッツ　宇都宮なんてその頃は知らなかったよ。

川田　僕も知らないですね。

——宇都宮を飛び越えて東京への憧れみたいなものがあったんですか？

ガッツ　やっぱり誰でも47都道府県からみんな東京ってところは……アメリカの合衆国と同じように、都道府県の合衆国みたいなもんだよね、東京は。みんな人が来るじゃん。夢を託すにはね、東京しかないよ。

——栃木からは出てきやすいっていうのもありますよね。

川田　距離的にはそんなに離れてないから、栃木は田舎じゃないと思うんですけど。

ガッツ　いまはね。昔は国道4号線しかなかったから。

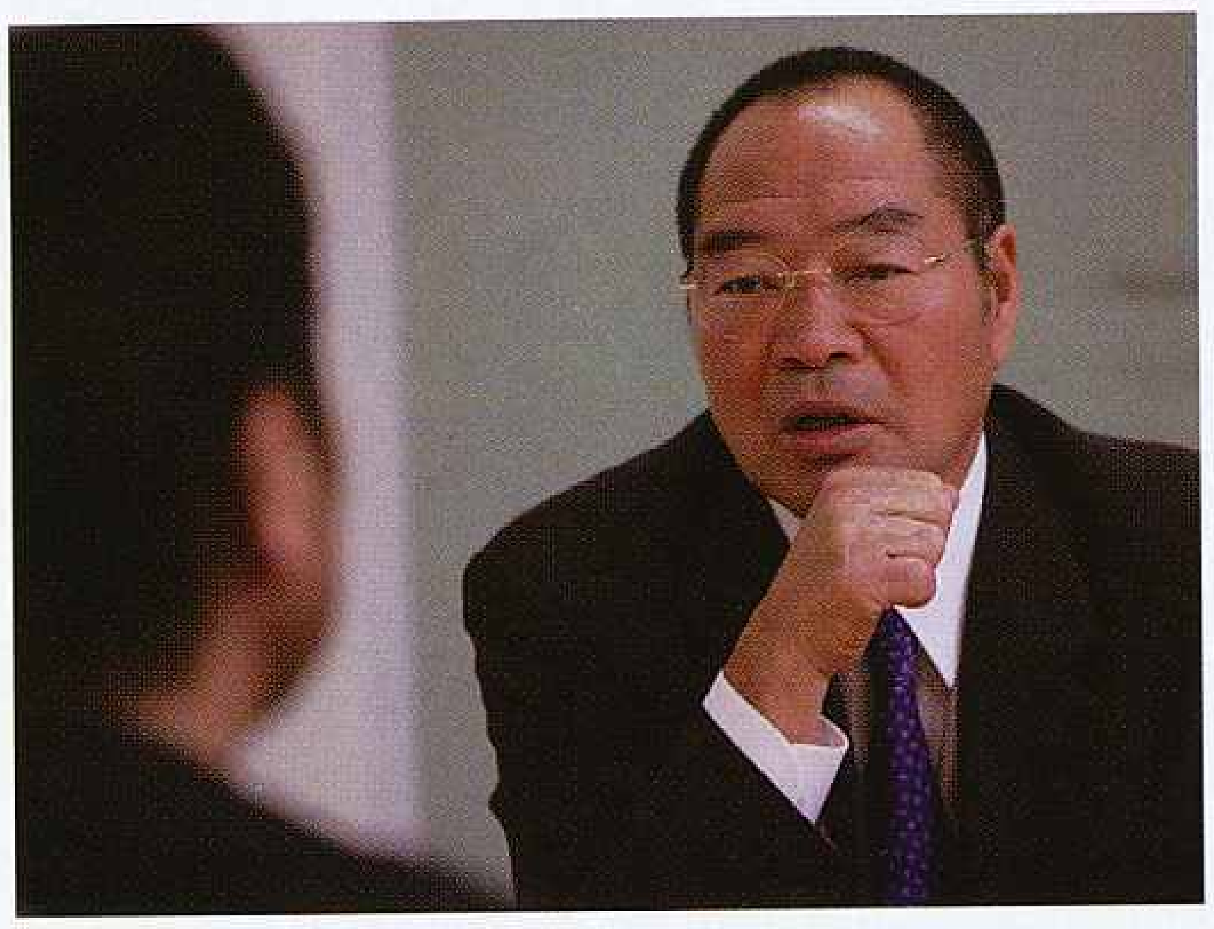
——日光街道ですね。

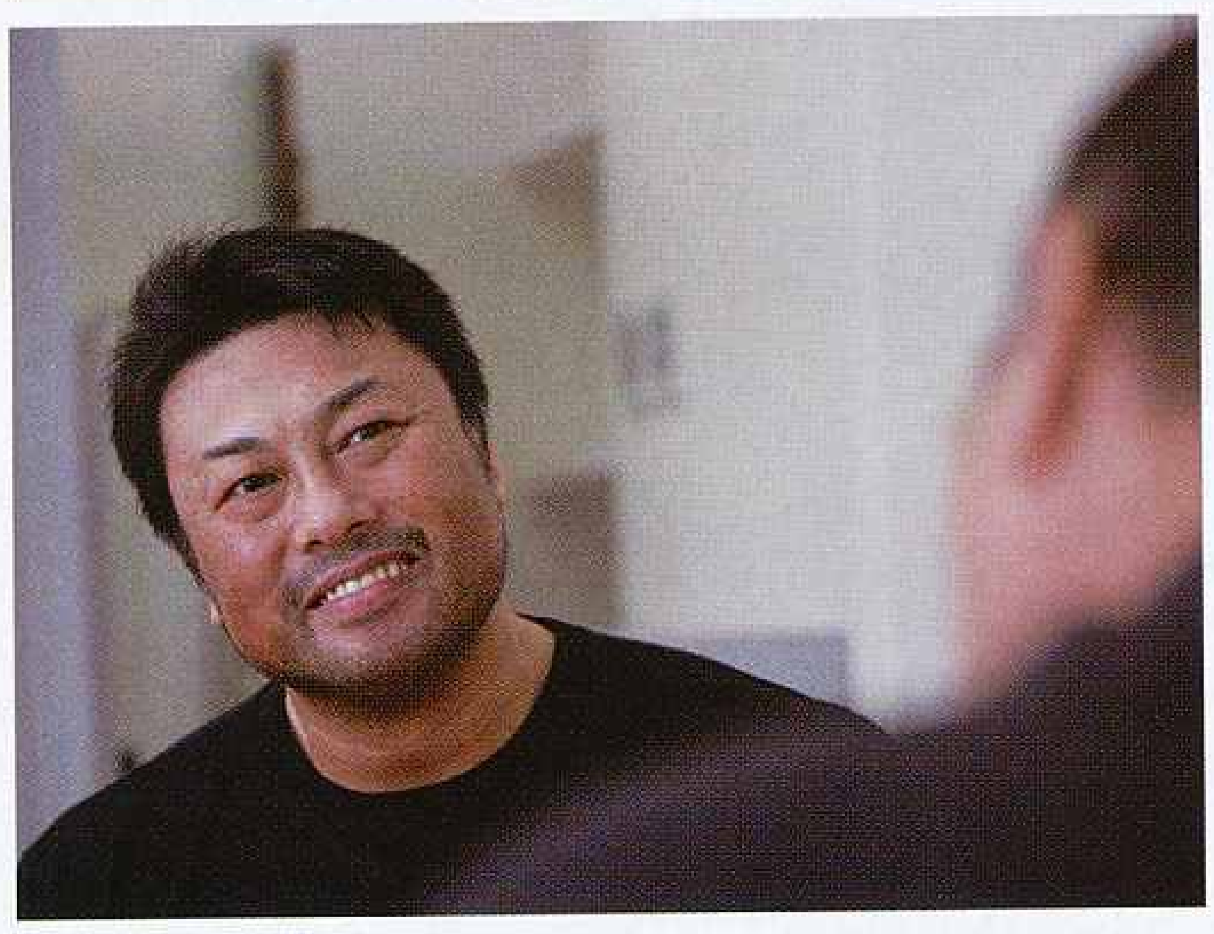
ガッツ　いまは通勤圏内だけどね。でも、栃木は総務省が調べた「住みたくない県」でケツから3番目なんだよ。

川田　住みたくない県なんですか！　それはいけませんねえ。

ガッツ　そこらへんがさ、曙が言ってる「栃木の田舎っぺ」っていうのとつながってくるんだよ。昨今はね、少しランクが上がって15～16番目になったみたいだけどね。栃木県ってアピールがヘタなのかもわかんない。

川田　それはあるかもしれないですね。





——栃木、というか宇都宮は餃子とかで有名ですけど。

川田　それは最近の話ですよね。宇都宮が餃子で有名になったのも、佐野がラーメンで有名になったのも。

——確かに、ここ10年ぐらいですよね。

川田　僕らが住んでる頃にはなかったですね。僕がいた頃はかんぴょうぐらいですかね？　あと「しもつかれ」は小さい頃によく食べてました。

ガッツ　大根とか人参が入っててね。

——あれは他県の皆さんには「とても食べられたもんじゃない」って言われるんですよ（笑）。

ガッツ　えっ、そうなの？

——「ゲ○みたいで気持ち悪い」って言われましたよ（笑）。

ガッツ　子どもの頃はよく食べたよね。いわゆる保存食だな。

川田　そうですよね。僕も子どもの頃よく食卓に出てました。

——あと、栃木県ってことでいうと有名人がそれほど出てないんですよね。お二人以外だと、ホントに有名なのはジャズの渡辺貞夫さんぐらいで。

ガッツ　あと田中正造さんね。

——そういう歴史上の人物になっちゃうんですよね。

川田　あと船村徹さん。山口智子さんは栃木にあるどっかのホテルの娘だってテレビで見たことありますよ。

——あとは、つぶやきシローさんですか。

川田　あれはでも違うらしいんですよ！　ホントは埼玉県人って噂があります。

——そうなんですか！　ニセ栃木人!?

川田　売り出すためにああいう訛りをつけたっていう噂で。

——お笑いではU字工事っていう栃木弁で漫才やるコンビがいるんですけど、最近、栃木で売ろうとする人って、わざと栃木弁でしゃべるんですよね。

ガッツ　自分の確立した何かを一つ持ってないと、やっぱり人っていうのは認めないよね。名声はね、ホントに瞬間の輝きみたいなもんでね。

——ガッツさんもボクシングの頂点を極めて、一つの大きな武器を持って芸能界へ進むという道のりでしたよね。

ガッツ　そうだね。芸能界でもそう簡単には受け入れられなかったしな。スポーツ選手から芸能界でやったっていうのは俺が初めてだからね。

——ガッツさんは〝歌って踊れるハッスラー〟の元祖みたいな感じですよね（笑）。川田さんはいまリング上で歌を歌われたりしてるんですよ。

川田　『ハッスル』のリングに関してだけですけど。

——『ハッスル』は芸人さんが試合をしたりとか、いろいろお客さんに楽しんでもらおうということでやってるんですけど。

ガッツ　そういえば、俺の事務所にも連絡が来たらしいよ。

川田　あ、そうなんですか！

ガッツ　「リングに上がって誰かとやってくれ」って。だけど俺はやっぱりね、自分の道をやってきてるから、そういうことはできない。やるんだったらホントにやるけどね。でも、いまはやる気ないし。「レフェリーならやるよ」って言ったんだ。

——こういう機会に出ていただけるだけでもありがたいです。川田さんは激しい

小学校4年生のとき栃木市のボウリング場でガッツさんにサインをもらいました（川田）

試合もやりながら、試合開始前に歌ったりしてるんです。
ガッツ　時代だね。それでいいんじゃないの？　時代に合わせてね。エンターテインメントっていうのかな。
川田　ガッツさんも三度笠で入場したり、エンターテインメントを先取りしてましたよね。
ガッツ　ああ、早かったよな。
川田　あの時代にそういうことをやってたって凄いですよ！
ガッツ　やってたっていうか、やらされたんだけどね（笑）。
川田　やっぱり最初は抵抗ありました？
ガッツ　まあね、恥ずかしくて下向いてたね。でも試合のときは花道で胸張って。人を花にたとえて、花に囲まれて……。あれが一番の花道じゃないの？　それを三度笠で下向いてさ、浪曲が流れてさ。
川田　正直なところ、僕もやらされてる感はあって。
——そうなんですか!?（笑）。
ガッツ　やるからにはね、自分のものにしちゃったほうがいいよ。
川田　そうですね。中途半端なことは、一番お客さんにも受け入れてもらえないから、やるんだったら突っ走っちゃわないと。

それはいけませんね！　俺は曙のほうがよっぽど田舎もんだと思いますよ（川田）

——ガッツさんの芸能活動はプロレスに通じるというか、バラエティとか出てもお笑いの方に「おもいきりツッコんでこい」っておっしゃるって聞いたんですけど。
ガッツ　そうそう。
——それって、プロレスと一緒ですよね。遠慮されたら困っちゃう。
川田　やっぱりテレビとか観てて、素晴らしいなと思います。
ガッツ　バカなふり、死んだふりがいかにできるかだろうな。そういうのは経験と、自分の底力がないとできないんだよね。こっちもプロだからさ。昨今やってるヤツなんて、俺からしたらみんな赤子だよ。俺らの先輩は（高倉）健さんとか（菅原）文太さんとか、そういう人ばっかりだもん。俺なんか気がついたらもう59歳だもんな。来年赤い下駄じゃなくて……（チラッと聞き手を見る）。
——ちゃんちゃんこ……すいません、ツッコミが弱かったです（笑）。
ガッツ　そこだよな。芸能界も34年やってるから。そこはちょっとバカなふりして入ってかないと。人間っていうのは、最終的には人が見てその人の価値観っていうのが生きるわけだから。
——川田さんも、リングでお笑いに近いことをやったりするじゃないですか。それでいろいろ言われたこともあるわけですよね。
川田　はい。
ガッツ　バカに「バカ」って言われること、いくらでもあるよ。そしたら「カバ！」って言い返すんだけど。
川田（真顔で）カバですか。
ガッツ　まあ、あくまでもバラエティだから。「ガッツさん、なんかおもしろいことありますか？」って言われたら「今日はタクシーで来たんだけど、運転手が『どこ行きますか？』って言うから『そこを右に左折してくれ』って言ったら『ハァ？』って言ってた」とか言っときゃいいんだよ。
一同　ガハハハハ！
川田（真顔で）「右に左折」ですね。
ガッツ　それでいいの。「ガッツさん、座右の銘はなんですか？」。「そうだなあ、座右の銘は右が1・2で左が2・0だ」ってやってりゃいいの。
——それは「座右の銘」ではなく、「左右の

I ♥ 栃木
ハッスル対談



3.17『ハッスル・ハウス』で実施された「ハッスル栃木県DAY」で配布された「I LOVE 栃木」とプリントされた特製ルミカライトを持ってゴキゲンの栃木二大スター。



目」ですね（笑）。

ガッツ それで成立するんだよ。「好きな数字は？」って言われたら「そうだなあ、ラッキーセブンの3かな？」とかやってりゃあね。

川田 そういうのがスラスラ出てくるのが素晴らしいですよ！

ガッツ 格闘でも芸能でもどの道を歩くにしても、自分にとっては同じ道だから。常に研究してるわけですよ。川田さんもプロレスでスタミナとパワーでやってきたっていう実績があるんだから、それを誇りとして何をやってもいいんですよ。

川田 一つの道で頭が固いまま終わっちゃうより、できることをやりたいんです。いま『ハッスル』というリングに上がってるんですけど、頭が固いままプロレスラーで三冠チャンピオンになったとか、そういう実績をずっと引きずってたら、それはそれで終わっちゃうし。ある程度、頭を柔らかくして弾けるのは必要ですよね。

ガッツ 昔は頭が固くてもよかったけど、いまは時代が時代だからね。

川田 その時代の流れに沿っていくことも大切かなって思って。

ガッツ 時代に流されたほうがいいですよ。でも、頭が固いってところがまた一つの個性で、それは大事なことだよね。だから誰がどこでどうしようがずっと全日本に残ったっていうのは、栃木県の気質だね。

川田 気質なんですね。

ガッツ そういうところを人が認めるんだよ。

川田 ガッツさんはタレント活動以外にも、講演活動をやられてますよね。

ガッツ うん、全国でやってますよ。今度、広島国際学院大学ってとこの客員教授になるんで、若者に社会学を教えていこうかなって思ってますけどね。机上の論理でなんでも経験、体験がないまま情報が氾濫してる世の中で生きてるじゃないですか。でも、そういうもんじゃないんだよ。失敗して何かを学ぶんですよね。失敗を恐れちゃいけない。

総務省が調べた〝住みたくない県〟で栃木はケツから3番目なんだよ！（ガッツ）

川田 政治のほうはもう興味ないですか？

ガッツ 政治は疲れたね。燃えつきた、13〜14年前に衆議院議員に立候補したんだけど。比例の全国区であれば、いくらでもバッジをつけることはできる。いまでも声はかかるけど、政治はやらない。政治はやらなくても、いろんなことを提言はできると思うんだよね。

川田 あのとき凄いお金を使われたんですよね。

ガッツ そう、3億も借金したから。

川田 それ、その選挙だけでですか？

ガッツ そう、2年間で。利息入れて4億。全部返しました。

川田 へぇ〜っ！

ガッツ 利子も揃えて全部返した。返すために毎日働いてね。借金のない人生っていいねぇ！（ニッコリ）。

――いまだったら宮崎県の東国原知事ばりに、栃木県知事選とか出て、栃木をアピールしてほしいですけどね。

ガッツ いやいや、もうパワーがなくなった。だって、一生懸命、政治活動を2年間やって否定された結果、残ったのは借金ですよ。あと身体がボロボロでしょ、全部が否定されたわけですよ。あんな思いはしたくない。だったら芸能界とかで好きなことやってね、OK牧場ってやってたほうが気が楽ですよ。

――それこそOK牧場ですね（笑）。ほかにもいろんなジャンルに挑戦されてますよね。映画もやってましたけど。

ガッツ 映画も一つ考えてるけどね。昨今、事件が多いでしょ。で、犯罪者が守られて被害者がないがしろじゃないですか。犯罪者は国家のお金で国選弁護士で守られて、調書ではホントのこと言うけど、裁判になったら「知りません」って言う。それで水かけ論になっちゃって、守られてるわけじゃないですか。被害者は自分で何から何まで全部やって、泣き寝入りしてるだけですよ。

川田 おかしいですよね！

ガッツ 私は『罪と罰』という映画を考えてて、いま脚本書いてるんだけど。だいたいできあがったんですけどね、ただ金がねえだけで。それが同じパンチを2回もらわないってことなんですよ。

――どういうことですか？

ガッツ 私は20年前に『カンバック』って映画を作ったんですよ。それでいろんな

頭が固いってところがまた一つの個性で、大事なことだよ。栃木の気質だね（ガッツ）

失敗したから。そういう人とちゃんと手を組んでね、できるようになったらやろうかな、と思ってます。

川田　ぜひそのときは、ぜひ僕にオファーを……（と頭を下げる）。

ガッツ　犯罪者はみんなぶっ殺すんですよ、人を殺したヤツは。死刑廃止論者もいるけど、なんのために5年間も10年間も司法がちゃんと審議をして、最高裁が死刑というハンコを押すわけじゃないですか。そのために何年間もやってきたわけでしょ。なんで殺さないんですか、と。裁判なんかする必要ないじゃないですか。だから裁判で死刑にできないヤツ、悪いことやっても野放しになってるヤツを誰かがぶっ殺すんですよ。そういうドラマなんですね。

川田　いろんなことを考えてらっしゃるんですね。

ガッツ　そういうことが世の中を動かすことにもなるんですよ、政治家にならなくても、世の中に提言できると思うんですよ。

川田　おかしいことといっぱいありますからね。

——郷土復興のアピールをする対談なんですけど、郷土以上に日本復興というか壮大な話になってきましたね。

ガッツ　故郷再生っていったってねえ……あぁせい、こうせいっていってねえ。

一同　ガハハハハ！

ガッツ　そうせいって言ったって、故郷はやらねえからな。勝手にしろって。

川田　住みたくない県っていうのは困ったもんですねえ。

ガッツ　でも昔から凄く豊かなんですよ。土地もそうだしね、東京にも近い。徳川家康が、世が世だったら江戸を栃木に持ってったんだから。で、死ぬ前に「俺は関東平野を眺めていたい」ってことで、日光に東照宮を持ってきたんだよ。

——ハワイ出身の曙に「田舎っぺ」と言われる筋合いなく、豊かな生活をしてる、と。

川田　田舎者ったって……僕は自分が小さい頃に育った田舎があるっていうのはいいことだと思いますけどね。

——川田さんも大一番の前によく行かれてましたよね。

川田　鬼怒川合宿とか、タイトルマッチとかの前によくやってたんですけど。

——川原で石を持ち上げたり。

川田　まあ、それは一応写真を（笑）。

——ガハハハハ！

川田　ホントのトレーニングで石は使わないじゃないですか（笑）。

ガッツ　まあ、気分転換ですからね、合宿なんていうのはね。

川田　そうですね。

ガッツ　まあ、東国原知事じゃないけど、栃木の再生だったら、できることはできるんだよ。栃木県っていうのは東北自動車道の通過地点じゃダメなんですよね。



かわだ・としあき■1963年12月8日、栃木県出身。82年のデビュー以来、"俺だけの王道"を貫いて全日本プロレスを主戦場として闘ってきたが05年にフリーとなり、現在は『ハッスル』のリングを主戦場に歌、踊り、お笑い、試合と大活躍。183cm、105kg。

がっつ・いしまつ■1949年6月5日、栃木県出身。66年にプロデュー、74年WBC世界ライト級王座を獲得（防衛5回）。引退後は俳優やタレントとして映画やテレビの世界で活躍。味のある演技と、天然ボケのキャラで大人気に。広島国際学院大学の客員教授としても活動している。

宇都宮あたりにもの凄い国の土地がありますから。「子ども叱るな来た道だから、年寄り笑うな行く道だから」って言うけど、お年寄りの老人ホーム的なものを栃木県立で作っちゃうんです。そして、みんな歳を取ったらそこに行くんだというね。通過地点じゃなくて東北に行く途中に降りていこう、おじいちゃん、おばあちゃんに会いにくる。そういうランドにすると、全国からみんな集まりますよ。そしたら活性化もできるし。

川田　いま田舎暮らしブームで、温泉つき住宅とかあるんですよね、宇都宮周辺に。団塊の世代の人たちがリタイアしてそっちのほうに行くのが流行ってるらしいですよ。

——栃木のためにもガッツさんに壮大なプランを実現させていただきたいですね。

ガッツ　のんびりいたいんだけどねぇ。でもさ、曙が「栃木の田舎っぺ」って言うこと自体、嬉しいよね。曙が栃木って知ってんだからね。

一同　ガハハハハ！

川田　そうですよね、栃木の名前が出てくるだけでもいいですよね。

ガッツ　「おまえ、訛ってねえじゃねえか、栃木は訛ってんだぞ、コノヤロー！」ってな。（唐突に川田に向かって）でも、あんまり訛ってないよね？

川田　いや、訛ってるって言われますよ（笑）。

【08年4月2日／都内・ハッスルエンターテインメント事務所にて収録】



インリン様女神「FIGHT」Tシャツ
[Lady's M ホワイト×ブラック] ¥3,990（税込）

現在、『kamipro Hand』で絶賛発売中。
ハッスルのグッズ売り場でも販売します!!





インリン様女神「FIGHT」Tシャツ[☆]
[M, L, XL グレー] ¥3,990（税込）





インリン様女神「LOVE」Tシャツ[☆]
[Lady's M, M, L, XL ホワイト]
¥3,990（税込）

インリン様女神「LOVE」バッグ
[ベージュ] ¥1,890（税込）





I編集長"殺し"Tシャツ[☆]
[M・L・XL ブルー] ¥3,990（税込）



マサ斎藤Tシャツ[☆]
[M・L・XL ブラック] ¥3,150（税込）

kamipro SHOPPING

『kamipro』通販方法

★通販はすべて代引きです。お支払いは、現金、デビットカード、クレジットカードの中から選べます。

★全国どこでも送料一律500円です。（何枚でも可。離島・山岳部の方はお問い合わせください）

★代引き手数料は315円です。（代引き金額によって異なります）

『kamipro Hand』でご注文の場合

詳しくは『kamipro Hand』の通販コーナーをご覧ください。ご注文後、確認メールを送りますので注意してご覧ください。

電話でご注文の場合

平日13:00〜19:00
（株）ダブルクロス
TEL.03-5368-1797



ハッスル2008Tシャツ
[KID 130・S・M・L・XL グレー]
¥3,990（税込）



ハッスルNEW Tシャツ
[KID 130・LADY'S M・M・L・XL ホワイト、ブラック、パープル]
¥3,990（税込）



インリン様 MONSTER Tシャツ
[LADY'S M・M・L ホワイト、ライトブルー]
¥3,990（税込）

[kamiproオリジナルTシャツ サイズ表]
☆マークのものがKamiproオリジナルTシャツです

（単位はcmです）

サイズ	S	M	L	XL
身丈	66	70	74	78
身巾	49	52	55	58
袖丈	19	20	22	24





KamiproマスクTシャツ[☆]
[S・M・L・XL ホワイト×レッド] ¥3,990（税込）



青木フンドシ Tシャツ[☆]
[M・L・XL ブラック] ¥3,990（税込）



マッスル スターウォーズ Tシャツ[☆]
[S・M・L・XL イエロー] ¥3,150（税込）

ケータイサイトでセール実施中! いますぐアクセス!!

非会員でもショッピング可能!!

アクセス方法

DoCoMo	iMenu	メニューリスト	スポーツ	格闘技／大相撲
au	トップメニュー	カテゴリで探す	スポーツ	格闘技
vodafone	メインメニュー	メニューリスト	スポーツ	格闘技
WILLCOM	趣味&スポーツ	スポーツ	総合	
	エンターティメント	TV・メディア・本	本	

※もしくは「kamipro」で一発検索

kamipro Hand

[QRコード]

※価格はすべて税込みです

“マット界随一の文豪”が

Handに殴り込み!! 新連載を堂々開始!!



毎週月曜日 アゲアゲでお届け!!

毎日更新のブログも必見！





最狂布陣の kamipro Hand コラムはコチラ !!

月 “マット界随一の文豪”がついに参戦!!
“DJ GOZMA”郷野聡寛の『MONDAY NIGHT FEVER』

火 毎週のニュースを独断と偏見でランキング!
ニュース特選！『kami の一週間』

水 マニア格闘技の真髄を読め!
橋本宗洋の『格闘裏グルメ』

木 アメリカMMA事情を週イチでお届け
デューク東郷の『USA Cool 宅急便モバイル』

金 “プロレス冒険家”がマット界を斬る!
金沢“GK”克彦の『こちらプロレス村役場』

土 マット界の事件を徹底追求!
kamipro事件簿

日 インディー界をぶった斬る!
プロレスキャスター三田佐代子の『サムライな日々』

大会、会見も即日速報！ 編集部員の日替わりkamiblogも必見!!

kamipro Hand

携帯サイト「kamipro Hand」への簡単アクセス方法

1 QRコードでクイック・アクセス!!
2 http://kamipro.dsn.ne.jp/hand/ を入力して直接アクセス
3 hand@kamipro.com へ空メールを送信

アクセス方法

DoCoMo	iMenu ▶ メニュー／検索 ▶ スポーツ ▶ 格闘技／大相撲 ▶ ※もしくは「kamipro」で一発検索!!
au/TU-KA	トップメニュー ▶ カテゴリ検索 ▶ スポーツ・レジャー ▶ 格闘技 ▶
Soft bank	メインメニュー ▶ メニューリスト ▶ スポーツ ▶ 格闘技 ▶
WILLCOM	趣味&スポーツ ▶ スポーツ ▶ 総合 ▶ / エンターティメント ▶ TV・メディア・本 ▶ 本 ▶

kamipro Hand [QRコード]

[お問い合わせ]（株）ダブルクロス TEL.03-5368-1795



我が師・井上義啓

“ターザンの野郎”ことターザン山本！のせいで語れなかった“真実”

井上譲二



井上義啓一周忌追善本『底なし沼』スペシャル外伝

昨年末に発売した井上義啓一周忌追善本『底なし沼』で多くの方々にI編集長との思い出を語っていただいた。こちらからオファーをしていたものの残念ながら出ていただくことができなかったのが、今回ご登場いただく“フランク井上”こと井上譲二氏だ。06年に休刊した『週刊ファイト』の最後の編集長でもある井上氏に、I編集長や“戦友”ターザン山本との思い出を語っていただいた。

聞き手／坂井ノブ

の文豪”が

――今日は井上讓二さんの師匠にあたるI編集長（井上義啓）のこと、そして盟友のターザン山本！さんのことをうかがいに大阪まで来ました！

井上　よろしく。

――じつは昨年末にI編集長の一周忌追善本『底なし沼』にインタビュー出演していただこうとご連絡をしたんですが……。

井上　それに関して、おたくの担当者の方に謝らなきゃいけない。去年の11月ぐらいですかね。「大阪に行くんで、井上さんについてインタビューしたい」というご連絡をいただいて。

――やっぱりI編集長を語るうえで井上さんは欠かせませんから。

井上　そのとき私は返事を保留にしたんです。で、ほかの件で山本さんと話してるときに「『kamipro』からこういう話が来た」と。すると山本さんがね、「いまほかの出版社でI編集長の企画が動いてるから断ってくれ。その本を一緒に作ろう」と言ってきたんです。

――ターザン山本！編集のI編集長本ですか。

井上　私と山本さんの仲もあるし、「わかりました」と。それでおたくの担当の方に、「ある世話になってる人がそういう企画を出してるんで、ちょっとできそうもない。でも、もう一回考えてみますから、3日後に電話ください」と。大恩人の井上さんのことなんで、たとえノーギャラであっても出る気はあったんですよ。また山本さんとほかの用件で話してるときに「『kamipro』には絶対に協力するな。『kamipro』なんか潰れてしまえ!!」とか言ってましたよ。

――そんなこと言ってましたか！

井上　なんか逆恨みしてるような感じでしたね。携帯サイトの連載を切られたからかな？

――え〜っ!?　連載が終わったのは、ずいぶん前の話なんですけどね。

井上　『kamipro』さんとは『週プロ』編集長時代からの仲でしょ。

――そうですよ！　それが「潰れてしまえ!!」って、あのオヤジ（笑）。

井上　「とにかく『kamipro』さんに理由を説明しなきゃいけない」っていうようなことを山本さんに言ったら「いや、説明する必要ない」と。そこで困るのは私ですわ。『kamipro』さんに断る理由をハッキリ言えない。まあ、最終的に言いましたよ、「世話になってる人も同じ企画で動いている」と。

――そんな事情があったんですね。

井上　そうすると、担当者の方は「ギャラが不満なのかな？」って思ったんでしょうね。最初は「○万円」って言われてたんだけど、「×万円にします」と。こっちは山本さんとの関係もあるからそういう問題じゃないんですよね。

――ですね（笑）。

井上　受けたい気持ちは当然もの凄くあったんです。井上さんの本なら私が出なきゃおかしいと思ったし。

――そうなんです。僕らとしても、ぜひ出ていただきたかったんですけど。

井上　そういう気持ちが強かったんだけど、山本さんのせいで、それができなかった。

――なるほど。そういうことがあったんですか。ちなみにターザン企画のI編集長本は……。

井上　知らないです。その後、その件についてなんの連絡もなかった（笑）。

――ハハハハ！　無責任だなあ。

井上　だから『kamipro』さんにはホントに申し訳がなくてね。私の本（『プロレス「暗黒」の10年』）の後書きで、井上さんの追悼本を出してくれた『kamipro』さんにお礼を書いてますけど、ご覧になりましたか？

――もちろんです！　ありがとうございました。

井上　やっぱり井上さんにとって一番供養になるのはね、天国に召されてからもね、自分について語られるとか、脚光を浴びることが一番なんですよ。天国の本人が一番喜ぶんです。だけど『ファイト』が潰れてしまったから、私の力じゃどうにもならない。で、『kamipro』さんが採算度外視してまでやってくれた。私はこの本は売れないとみてたんですよ。

――いやあ、採算度外視とまではいかないんですけど（笑）。

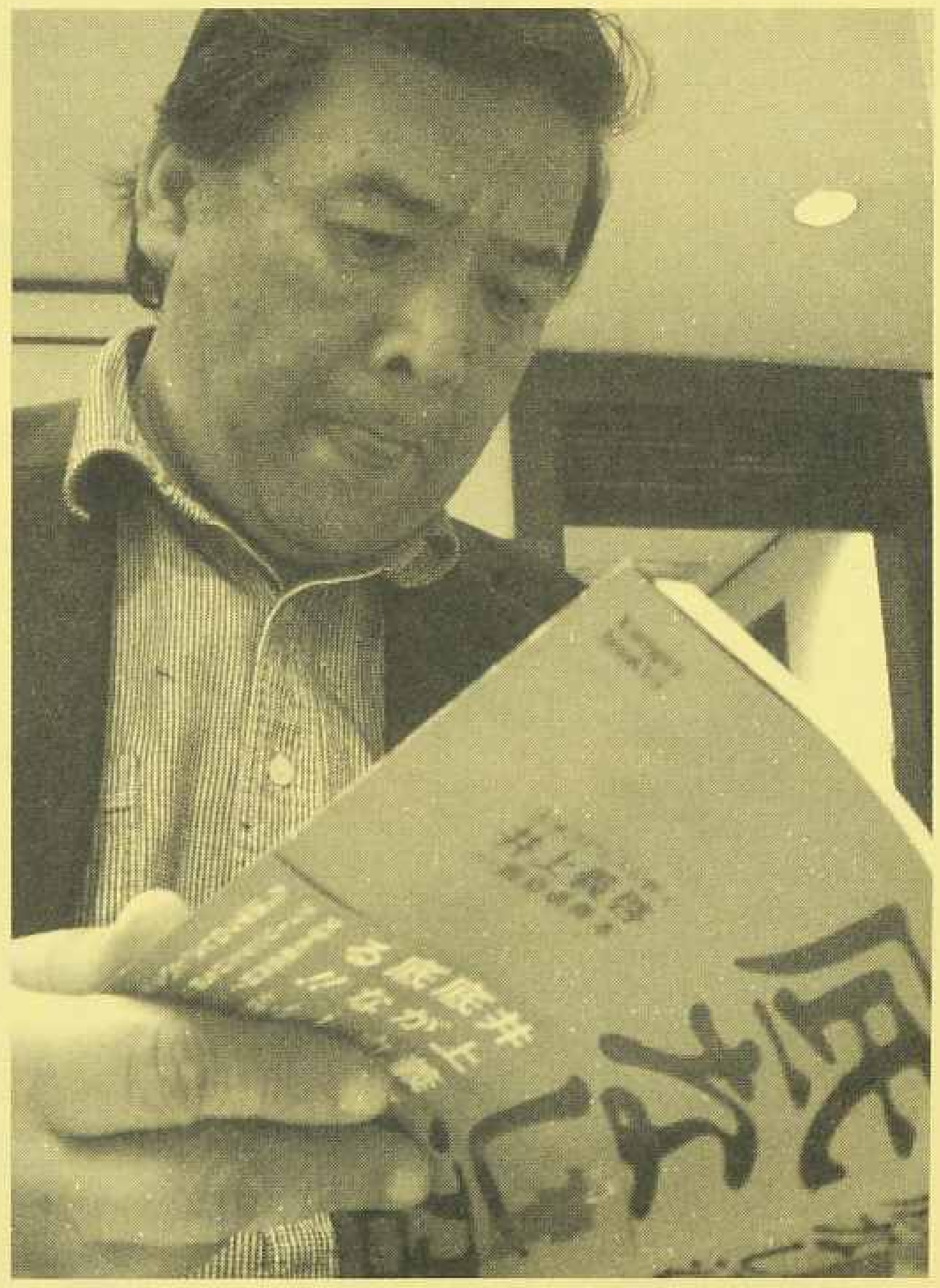
井上　いやいや、いいんですよ。ホントは『ファイト』でやるべきことなんだけど、もうなくなったからどうしようもない。だけど、まさかI編集長の追悼本を出す出版社が現われるとは夢にも思ってなかったです。生前の井上さんは、本人は否定してたけど、露出したり注目を浴びるのが嫌いな人じゃないんですよ。山本さんとはまったく違うタイプの人間なんだけど、じつは嬉しいんですよ。

――そうですよね！　僕らもそんな気がしてました（笑）。

井上　やっぱりあの方のファンのみならず、とくに古株の団体関係者に知っていただきたいのは、井上さんは凄く純粋な方で、凄い善人で。ある種、お金にも興味ないんですよ。自分の給料やボーナスを取材費に回すようなところがあって、お金を稼いでやろうとか、贅沢しようとか、そういうところもまったくない。そして他人の悪口は言わない。

――この業界の人間とは思えないですね（笑）。

井上　これは日本人ではちょっと



山本さんのせいで、出られなかったんです。もの凄く後悔してますよ



フランク井上こと井上讓二氏の長年の取材キャリアの中からとっておきの秘蔵写真を御開帳！ この写真は76年11月、京都正武館でイワン・コロフに直撃取材を行なったときのもの。手前に写っているのはI編集長だ。

珍しいんじゃないかなあ。もちろん、会社に対してちょっとグチめいたことは言うけど、人を恨まない凄く純粋な方でした。外の交流がなかったというか、人付き合いを苦手にしてたっていうかね。

——シャイな方ですよね。

井上　これは昭和30年代の話だけど、各社の記者たちが全国を巡業するじゃないですか。それで選手と麻雀したり、花札やったり、酒飲んだりしてる仲だった。でも、井上さん一人だけその輪の中から外れてるの。仲間外れにされたんじゃなくて、自分のほうから入らなかった。それだからよけいに誤解されて、よく知らない人からは「陰湿なんじゃないか」って思われてたらしいけど。

——そう思われてもおかしくなかった、と。

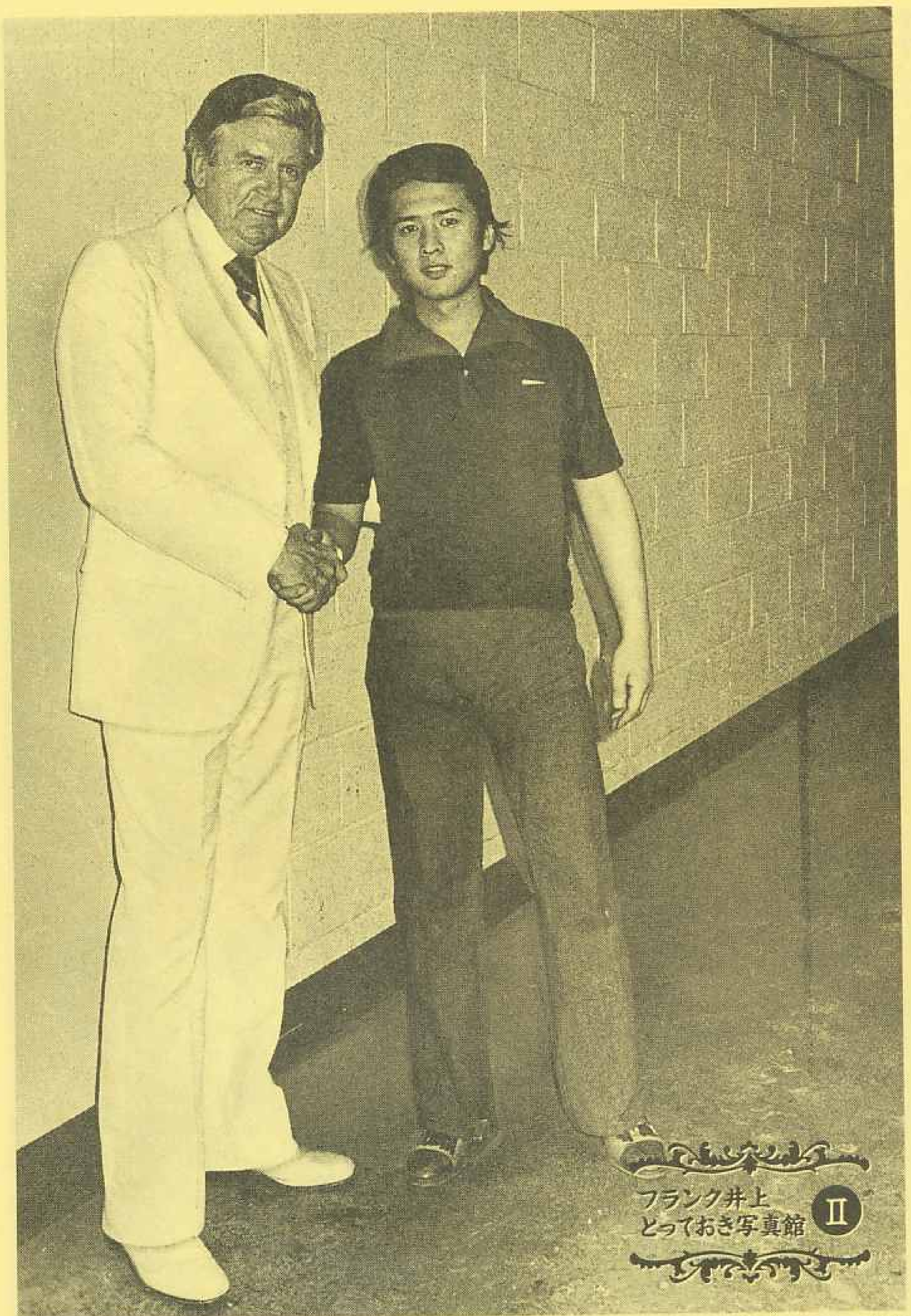
井上　それに、全日本プロレスと新日本プロレスが冷戦構造にあった70年代から80年代初めにかけて、『ファイト』はやっぱり猪木新聞というか、井上さんは猪木と新日本のいいことばかりを書いてたから、全日本の馬場さん周辺からは人格まで悪く言われてましたよ。

——それくらい猪木さんを書きまくっていたわけですね。

井上　でも、それはホントの井上さんの人間性を知らないからでね。そうやって誤解されていたのが一番残念です。これは絶対に書いていただきたい。『kamipro』さんを通じてファンや団体関係者に知ってもらいたいために、今回は二つ返事でインタビューをOKしたんです。

——ありがとうございます。

井上　で、いま言ったように、井上さんはお金にまったく興味がないし、部下に対してもあんまり注意したり怒ったりしなかったんですよ。若い頃の私は反発したり言い返す人間でしたけど、あの人からキツく言われても絶対に言い返さなかった。もう人間として、愛すべき人間だったから。完璧に信頼できる人間。私は20～30代の頃、そんなに気の長いほうじゃないから、普通だったらやり返すんだけど、あの人にだけは絶対に刃向かわなかったというか。もう人間的に100パーセント信頼してたんで。間違っても部下のチョンボとか欠点を会社の社長に告げ口するとか、そんなことは絶対にありえない。



77年6月、米国ニューヨークの"プロレスの殿堂"マジソン・スクウェア・ガーデン（通称MSG）で現在のビンス・マクマホンWWE代表の父親にあたるビンス・マクマホン・シニアとともに。白いスーツがじつにダンディだ。

——そんなI編集長と最初に出会ったのはいつ頃ですか？

井上　私が中学2～3年の頃。よく大阪府立体育会館にビッグマッチを観に行ってたんです。それで会場で見かけるようになって。あるとき私が住んでた神戸に帰る電車の中で一緒になって声をかけたのが最初です。20歳のときにはもう知り合いになってたんで、大学1年か2年のときには、英国マットを『ファイト』で取材して。その頃は新日本の会場に出入りして、控室にも井上さんと一緒に行ってましたよ。それから5～6年後に社員になってニューヨークに行きました。

——アメリカ特派員というかたちで取材されてたんですよね。

井上　あの頃の思い出といえば、『ファイト』のタイガー・ジェット・シン特集と、ローラン・ボック特集かな。ホントに売り切れになったんです。

——伝説のシン特集ですね。

井上　I編集長も亡くなる半年ぐらい前に「あれは私の誇りだ。キミのおかげだ」と言ってくださってね……（しみじみと）。私も社長賞もらいましたよ。当時10万円ぐらいだった。新大阪新聞社で10万円って異例中の異例なんです。

——そうなんですか（笑）。

井上　まだ会社の景気がよかった頃とはいえね。アンドレ・ザ・ジャイアント特集とタイガーマスク特集、ハンセン特集や長州特集もやりましたけど、やっぱりボックとシンが一番売れましたよ。シンは『ワールドプロレスリング』で試合が放映されたおかげで一気に完売ですよ。完売なんて珍しいよ、新聞で。

——確かに聞いたことないですね（笑）。I編集長はポケットマネーから取材費を出されてたっていう話もありますね。

井上　そうですね。あとは一時的に立て替えてもらったり。だからこそ、部下は力を発揮できたと思いますよ。本当にいろんなことを経験させてもらいましたね。

——ターザンとは真逆ですね（笑）。

井上　やっぱりね、新聞記者や編集者というのは、飲む、打つ、買うのうちの二つぐらいはしないと、ホントにいい仕事できないんです。ストレス解消という意味でね、真面目一本じゃね、おもしろい記事を書けないし、おもしろいインタビューもできない。で、おとなしいヤツよりはちょっとゴンタのほうがいいし、生意気というか、ズケズケ質問できるというか。井上さんも若いときに『新大阪新聞』の記者やってる頃はね、パチンコやったり競馬を少しやったりしてたらしいですよ。

——あ、それは意外なエピソードですねぇ。

井上　あと井上さんが20～30代の頃にね、三谷さんっていう美人の同僚がいたらしいんだけど……、その人にフラれたみたいなんだよね。

——えっ、そんなことがあったんですか！

井上　フラれたというか、その人が結婚しちゃった。で、井上さんは婚期を逃したという話です。その方の写真は見たことありますよ。私が井上さんから聞いた話じゃないですけどね。井上さんはこんな話は絶対に自分からはしないから。

——まあ、しないでしょうね（笑）。

井上　井上さんの同僚から、その女性に思いを寄せてたって話を聞いて。おそらく告白もできなかったんじゃないかな、ああいう性格だから。で、その人の結婚以降は女性と交際したことはなかった、私の知るかぎり。だからべつにホモとかじゃないですよ。山本さんは『噂の眞相』で「馬場とホモ」とか書かれてたけどね。

——師弟揃ってホモ疑惑（笑）。

井上　それもありえない話でね（笑）。ジョークならまだしも。

——いまの山本さんのお盛んぶりを見てると、それはないなってわかるんですけどね。声も甲高いしホモっぽい印象はあるかもしれないですけど（笑）。

井上　歌枕（力）って色白の若いの連れ回してたし、そういう雰囲気は確かにあるよ。だけど、実際はそうじゃない。

——その歌さんもいまは山本さんから離れちゃいましたからね。

井上　そのへんの経緯は知らないんですよ。で、女性と一緒になったんでしょ？

——古関夢香さんですね。生前追悼本にも出演してますけど、話を戻します（笑）。I編集長の「ここが凄いな！」と思ったのはどんなところですか？

井上　あの人の記事スタイルとか内容も凄いけど、原稿用紙20枚、30枚ぶんなんて我々は6時間も7時間もかかって書くわけ。でも、井上さんは1時間半で書くんだよね。

——ホントに筆が速いですよね。

井上　それもね、ガンを患ってからもスピードはほとんど衰えてなかった。ムッチャクチャ速いよ！　ページに穴が開いたときも電話1本したら、30～40分後に百何十行の原稿がくる。そうやって助けられたことは何度もありますね。

——いわば最強の助っ人。

井上　あと、03年3月に『ファイト』が新日本プロレスから取材拒否通告を受けたときに凄く心配して励ましてくれたんですよ。「気にしないで頑張ってな」という電話がかかってきて。気にしてたのは会社だけでね、私は全然気にしてなかったんだけど。I編集長は「『kamipro』を見てごらんなさいよ、何団体から取材拒否を受けてるかわかんないよ、1団体ぐらいどってことないでしょ！」って、こういう励ましをしてましたよ。

——ありがたい光栄なお言葉です（笑）。I編集長は編集長を退かれて、フリーという立場で『ファイト』に寄稿されていたんですよね。



87年、カナダ・ミルトンにあるタイガー・ジェット・シンの豪邸に突撃取材を敢行！ ちなみに写真左はシンの母親（故人）だ。井上氏は79年にもシン特集号の取材でトロントにある自宅に突撃をしている。文字どおり“虎穴に入らずんば虎児を得ず”だ。

井上　57歳か58歳で退職しましたね。自分から辞めたんです。よく言ってましたから、「もう俺の文章はダメだ」と。

——ご自分で？

井上　うん。猪木がもう全盛期じゃなくなったから。あと、よく言ってたのは、「プロレスが●●●だってことはみんな知ってるんだから、もう書いていいんだよ」とか。何十回この言葉を聞いたことか。だけど、やっぱり先導して書くわけにはいかないし……。一番驚いたのはプロレスに対してインポテンツになって、格闘技にのめり込んでしまったことですよ。

——晩年のI編集長はプロレスというジャンルにさめてましたねぇ。

井上　はい。来る日も来る日も総合（格闘技）のことばっかりで。たまにプロレスの話題が原稿に入ってても、プロレスを落とすような内容で。「ロープのあいだを走ってる運動会」とかね、そういうことをよく書いてたの。

——書いてましたね（苦笑）。

井上　私は一生懸命そこを削って。直接本人には聞いたことがないんですけど、いまのプロレスに失望してしまったのかな……。もの凄く純粋な方でしたからね。

——逆に僕らからすると、I編集長が書いたりしゃべったりした文章って、若いファンの感性と凄くマッチしていたと思うんですけどね。

井上　話をさえぎるようで悪いけど、馬場さんの日プロ時代、（フリッツ・フォン・）エリックや（ブルーノ・）サンマルチノと闘ってた頃は凄かったんですよ。スタミナもあったし、跳躍力もあった。でも、晩年の馬場さんはお笑いというか……失笑されてたでしょ？　なんか、そのへんが井上さんの全盛期と晩年にオーバーラップするんですよ。

——I編集長の記事も読者から失笑されてるんじゃないか？　と。

井上　言い回しもさることながら、「ミルコがUFCのチャンピオンになる」とか「近い将来、プロレスからジュニアとかタッグがなくなる」とか「ワンマッチのみのPPV」とか。視聴料3000円で5分か10分で試合が終わったら、誰も金なんか払わないよ！　ムチャクチャな提言ですよね。

——典型的なI予言ですね（笑）。

井上　私はあの人に恥かかせたくなかった。私の編集長時代、井上さんには休刊まで『ファイト』に原稿を書いてもらってましたけど、「ここはこういうふうに変えたらどうですか？」と私の疑問を突きつけて言うと、「じゃあ、キミに任せるわ。キミが編集長なんだから」と。そういうふうに、あの人に極力恥をかかさないように、原稿を直してたつもりですよ。晩年の記事を読者はどういうふうに思ってたのかな……。

——『kamipro』の読者アンケートでは常に「おもしろい記事」の上位に入ってましたよ。

井上　意外だなぁ。

——『kamipro』ではI編集長のインタビューや原稿はかなりニーズが高かったんですよ。

井上　そうだったんですか……。あの方は、シャイなんだけども、ある



原タコヤキ君が涙を流してくれたという話を聞いたときは凄く嬉しかった

種、本心は脚光を浴びたい、目立ちたいところがあって、ウケを狙ってるわけですよ。人がやらない提言やアイデアとか。

──誰も考えないようなことを発表していくっていうのは、1億人誰もがネットを使って自分の考えを発信できる時代には、凄く有効なんじゃないかって思うんですけどねぇ。

井上　的を射てりゃいいですよ。そんな手もあったかっていうね。ところが、「プロレスからタッグマッチがなくなる」とか「プロレスも●●●●でやる」とか、それはありえないでしょ?　私はあの人を、馬場さんの晩年のような、ちょっと失笑を買うようなあれにしたくなかったから。

──その葛藤は大きかったんですね。ガンであるということをI編集長から聞かされたのは、いつ頃だったんですか?

井上　05年の7月。本人からの電話で直接、聞きました。亡くなる約1年半前ですか。まあ、ショックでしたよ。やっぱりね、亡くなって悲しいよりも寂しいですね。月に1~2回は会ってましたんで。亡くなったのが12月の中旬で、10月頃はまだ原稿を書いてました。あと3年、できれば5年ぐらい生かしてあげたかったですけどね……。

──ホントに亡くなる直前まで原稿を書かれてましたね。

井上　抗ガン剤を打ちながら……。私は2週間に一回ぐらいのペースで自宅にお見舞いに行って、亡くなる前日にも顔を出そうと思ってたんですよ。でも、また別の機会にしようと思って行かなかったら……その日に亡くなってたんです。

──そうだったんですか。

井上　あれは不思議だったなぁ……。ちょっと話が前後しちゃいますけど、井上さんがガンだということは、私から新大阪新聞社の上層部や『ファイト』の人間に伝えてあるんですよ。だけど、闘病中の井上さんのことを心配したり、亡くなったときにお線香をあげに行ったりとか、そういう話はまったく聞かないです。でもね、「原タコヤキ君がお線香をあげにきて涙を流してくれた」という話を知ったときは凄く嬉しかった。

──原タコヤキ君はI編集長から直々にFAXをいただいたりして、ずっと親交がありましたからねえ。

井上　闘病期間中に容態を心配したり、お見舞いの電話したり、あるいは亡くなったときにお線香をあげたいとか、俺に聞けば住所はわかることでしょ?　そんなこともしないヤツがね、亡くなってから井上さんの原稿を書いてるヤツもいるわけですよ。そういうのが腹立つんですよ!!　誰とは言わないけども。追悼本にしても、本来ならば『ファイト』の連中がやらなきゃいけないことだけども。でも、なくなってしまったから作れない。だから、私はこの本に出なきゃいけなかった。でも、ターザンの野郎が……。しかも、彼は『kamipro』さんが企画・編集した『生前追悼ターザン山本!』に二つ返事で名前を貸しているでしょ。ホント、節操のない厄介なオヤジですよ(笑)。

──ターザンの野郎は節操のない厄介なオヤジですね(笑)。

井上　もの凄く後悔してますよ。だからね、第三弾は必ずノーギャラで!

──まだ第二弾が出版されたばかりですから(笑)。その「ターザンの野郎」とは、かなり長い付き合いになりますよね。

井上　もう30年ぐらいかな。

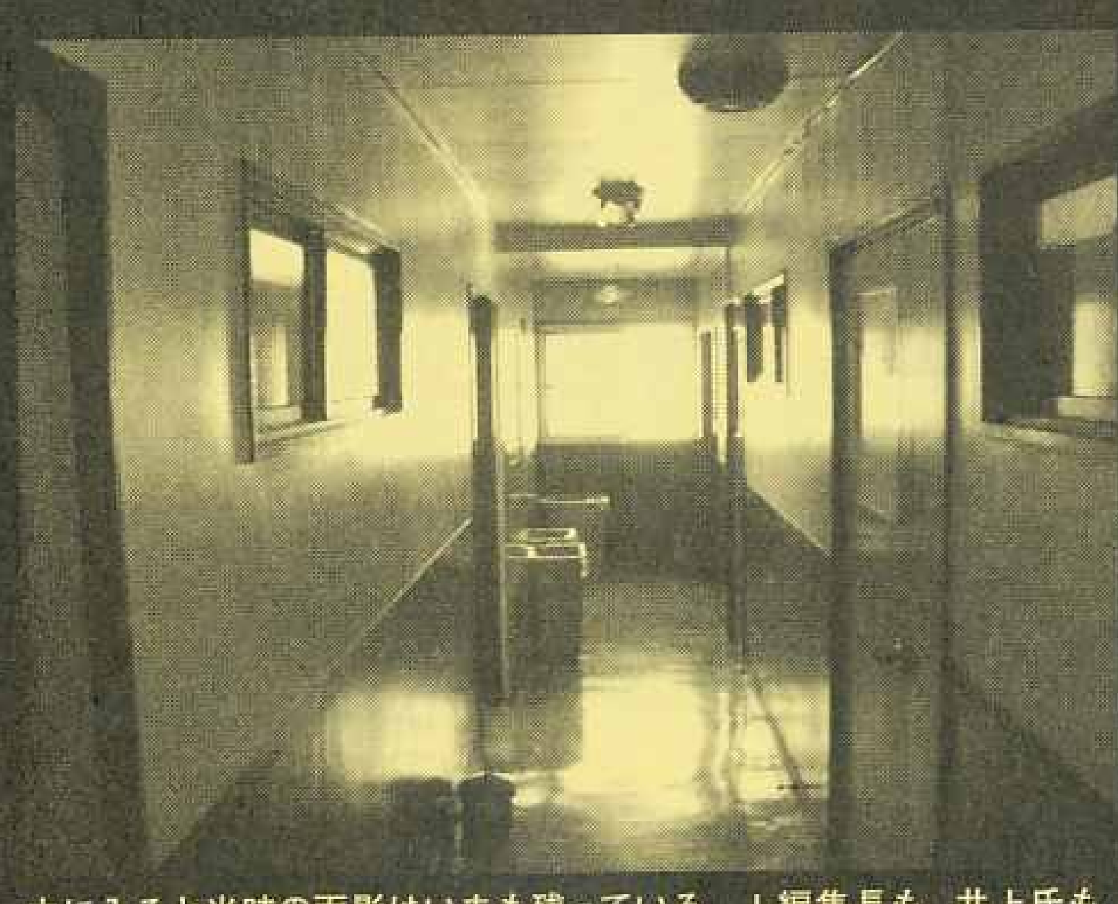
──一緒に編集部で机を並べた時期はなかったという話ですけど。

井上　そうですね。私が新大阪新聞社の社員になってから、山本さんも社員だった時期はありますけど、私は一時帰国はするけど、ずっと海外に行ってましたから。一緒に『ファイト』を作ったことは一度もないです。年齢は私が6~7歳下なんですけど、キャリア的には5~6年長い。そんなの自慢する気はないけどね。ただ、山本さんとなぜ30年も付き合ってるかっていうと、基本的に悪人じゃないし、裏がない。そこなんですよ、私との付き合いは。いまでもそうだし、もちろん山本さんのことを嫌いじゃないし、さっきあんなこと言ったけども、頭にもきてないし(笑)。自分が言うぶんにはいいんだけど、他人が山本さんの悪口

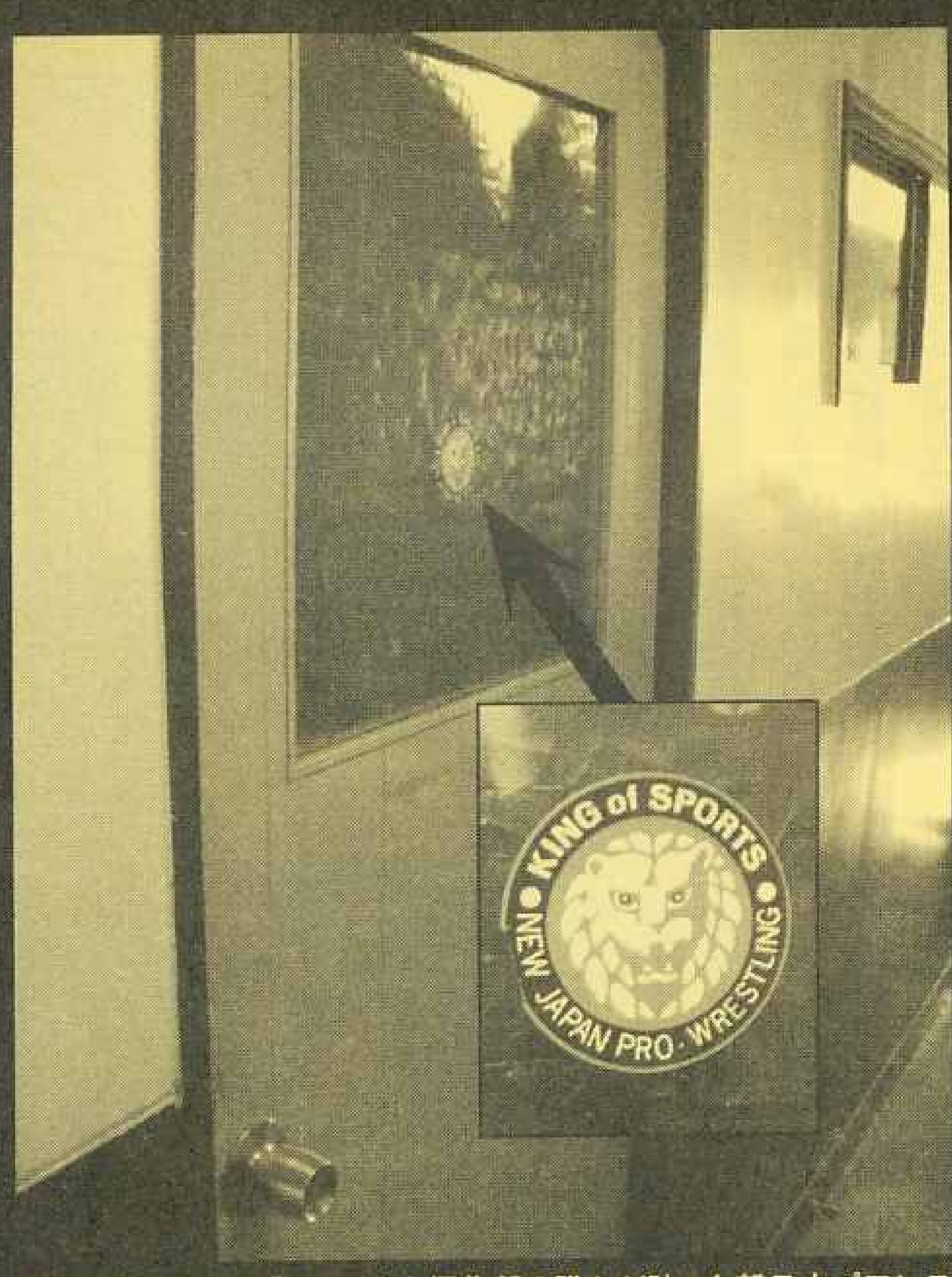
嗚呼！思い出の『ファイト』黄金時代!!
1980年代に使用していた『ファイト』編集部を探索!!



井上氏に連れられて野田阪神駅から徒歩10分、大阪市福島区大開町のかつて『週刊ファイト』編集部があった場所を探索！ サンケイ総合印刷株式会社の社屋に間借りしていたのだ。



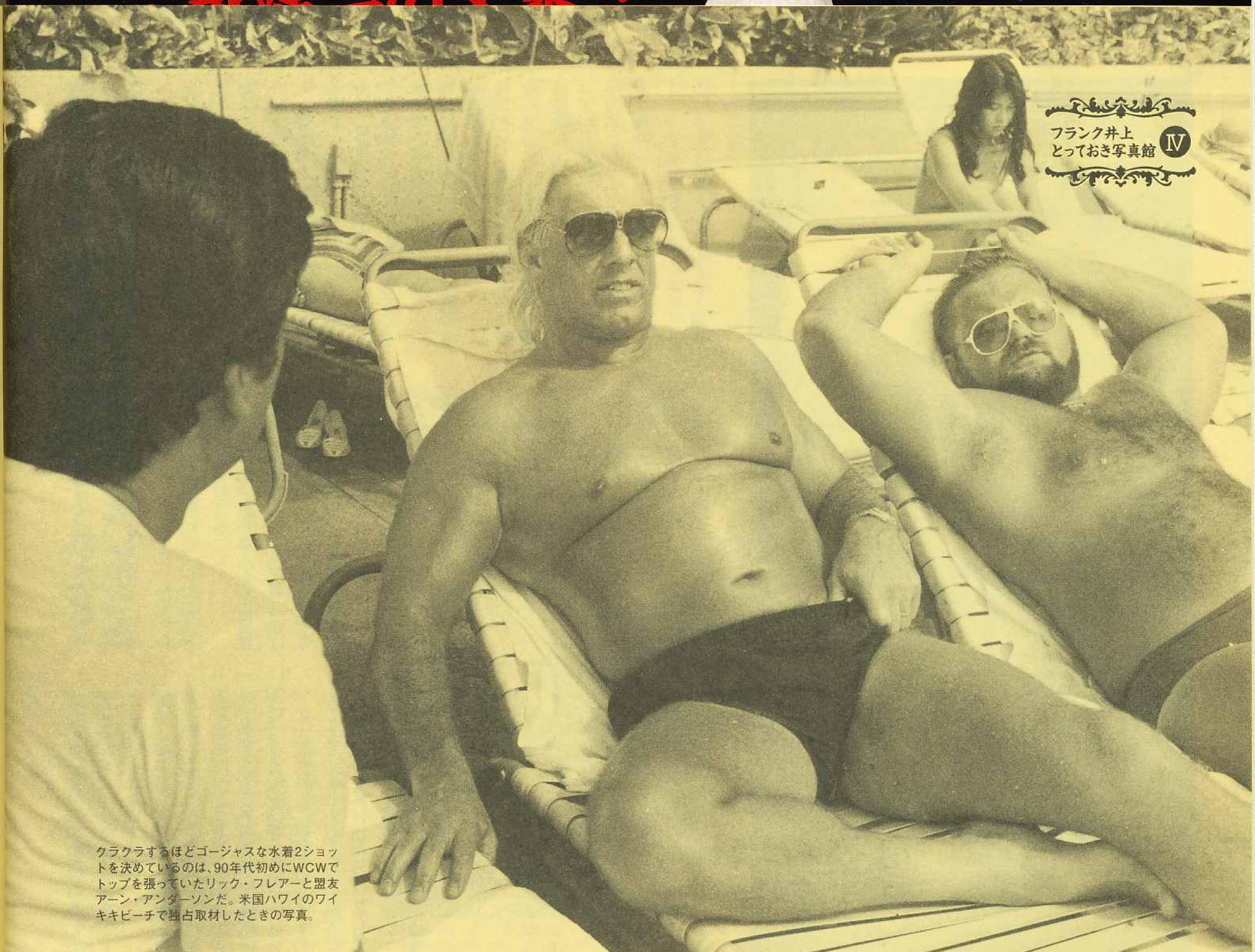
中に入ると当時の面影はいまも残っている。I編集長も、井上氏も、ターザン山本！氏も、研修期間中の金沢"GK"克彦隊長も、かつてこの廊下を通っていたのだ。現在は業界紙の編集部になっていた。



入り口のドアには『ファイト』編集部の誰かが貼った新日本プロレスのロゴシールがいまもそのままの状態で残っていた。新日本に激しく肩入れした紙面構成だったが、当然思い入れも深かったのだ。

の文豪"が

フランク井上 とっておき写真館 Ⅳ



クラクラするほどゴージャスな水着2ショットを決めているのは、90年代初めにWCWでトップを張っていたリック・フレアーと盟友アーン・アンダーソンだ。米国ハワイのワイキキビーチで独占取材したときの写真。

言ってると腹が立つね。

――山本さんはホントに誤解されやすい人じゃないですか。

井上　まあ、最初に山本さんに会ったときは誰もが嫌がるでしょうね。

――見た目のインパクトもありますし。

井上　汚らしいから生理的に嫌だとかね。あと若い編集者に威張ったりするし。

――僕もわけがわからないまま怒られた経験がありますけど（笑）。

井上　これは書いてもらっていいけど、水道橋の駅前に『ニューヨーカーズ・カフェ』は二つあるんだけど、山本さんの説明が悪かったせいで、待ち合わせをしてた『スポーツ報知』の記者が、もう一つの『ニューヨーカーズ・カフェ』に行ってしまったらしいんだよね。山本さんはそれを延々と説教してね。「君はどうのこうの」って（笑）。笑える話なんだけど。

――説教されるほうはたまったもんじゃないですよね。

井上　その記者だって38歳ですよ。子どもだって二人いるのに。でも、若い頃の山本さんは、人と怒鳴り合ったり、外でケンカするタイプじゃなかったんですよ。あの頃の山本さんは自分より年下の人も「さん」づけで呼んで敬語でしゃべってたよ。

――それは意外だ！（笑）。

井上　いまとは全然違う。やっぱり『週プロ』の編集長時代はモテモテだったし、脚光も浴びたし、いい意味でも悪い意味でも変わってしまったんでしょう。昔からギャンブルは凄かったけど、女性関係とかはあんまりハデじゃなかった。もともと文学青年タイプだから。

――逆にちょっと奥手というか。

井上　そうそう、プラトニックラブというか。学生時代に結婚してるでしょ。20歳そこそこの頃、ヤクザが開帳してる賭場に行って、約40年前の金で25万円も負けて。払わないとヤクザが取り立てに来るから奥さんの実家の親が肩代わりしたって。そこから始まってるの、破滅のエピソードは。

――そこがきかっけなんですか（笑）。

井上　で、最初の奥さんとのあいだに一人娘がいて、おそらくその娘がいま40歳ぐらいでしょう。

――全然会っていらっしゃらないんですよね。

井上　会ってないと聞いてます。

――二人目の奥さんとも別れて、すべてを失なってたんですよね……。

井上　うん。普通だったら頭がおかしくなりますよ！

――凄い話ですよねぇ。

井上　本人は平然としてますけど、あんまりデカい苦痛とか悲劇を味わうと精神的におかしくなりますから。

――おかしくなったのかもしれない（笑）。『週プロ』全盛の頃、巻頭の原稿をいろんな方々と電話して話した中で作られていったそうですけど、井上さんも関わってたんですか？

井上　私も電話を受けてましたね、かなり。で、山本さんが編集長時代に、私が『週プロ』の巻頭を書いたことも2～3回あります。

――実際に書いたこともあったんですか！（笑）。

井上　彼が『レッスルマニア』に行ってる週とかに3回ぐらいね。

プロレスを観たことある人が全員死なないかぎりチャンスは来ません

──あ、3回も（笑）。

井上　電話で「こういうふうに書いたらどう？」っていうことは、しょっちゅう話してました。だから編集長時代の巻頭記事は、何ヵ月に一回はほとんど私が話した内容でした。

──全盛期の『週プロ』の巻頭を『ファイト』の編集長が決めていた（笑）。

井上　ただ、やっぱりこれは、当時のプロレスファンの皆さんが認めてると思うんだけども、山本さんはやっぱり素晴らしい才能を持ってたんですよ。とくに第一次UWFの原稿は本当に素晴らしかった。『ファイト』でも当時連載してて、素晴らしい記事を書いてた。全盛期は第一次、第二次UWFの頃ですよ。当時の山本さんは新日本とかUWFの道場に行って、足でネタを稼ぐということをちゃんとやってましたから。

──精力的に取材をやってた頃であり、ちょうど『ケーフェイ』が出た頃ですね。

井上　あの本は業界的には騒然となったけど、やっぱりインターネットがない時代でしょ。それとデカい出版社じゃなかったから。ミスター高橋の本は講談社だったし、読売とか一般紙でもの凄いデカい広告を打ってましたから影響力は比べものにならないぐらい大きいわけですよ。だから『ケーフェイ』はそんなには売れなかった。せいぜい知り合い同士の口コミでしょ。ミスター高橋の本みたいに10万部近くも売れなかったのが幸いだった。内容的にも高橋本ほどドギツくないですよね。

──みんな知ってたけど書かないっていうことだったわけですよね？

井上　まあね、専門誌は書いちゃいけない。取材拒否とか出入りしづらくなるとかじゃなくて、やっぱりそれは守らなきゃいけないことだから。スポーツ新聞でも絶対に守ってることだし。

──ミスター高橋本以降、プロレス業界の不況はどうにもならないところまできてるということは本の中でも書いてましたよね。

井上　確かにああいう暴露本で去っていくファンもいるけど、初めて観た人にとってプロレスは絶対におもしろいものだと思うよ。凄いアクションだし、いまの技は凄く華麗というか、ダイナミックでしょ、アクション・プロレスというのかな。

──アクション・プロレス！（笑）。

井上　イケメンで体格のいいヤツの試合をどんどん流したら、たとえばKENTAみたいな選手の試合をテレビで流したらまた新しいファンを獲得できる。視聴率も獲れる可能性はあると思う。テレビ局はホし、東京ドームも満員になるようなントに3年ぐらい辛抱するつもりでやってほしい。だからテレビがゴールデンタイムでなくても、せめて夜の22時台ぐらいに放送してくれないと、以前の状態には戻らない。やっぱりジリ貧でしょう。

──以前からずっと言われてますけど、プロレス復興の鍵はやはりテレビですか。

井上　ハッキリ言って、テレビがつかないかぎり、向こう300年プロレスの復興はない。

──向こう300年も！

井上　うん。地球がなくなるのが早いか、プロレスがなくなるのが早いかっていうぐらいのね。

──そこまで！　ただ、それぐらいの状況には追い込まれてますね。

井上　ただやっぱり暴露本とか、総合格闘技の大ブレイクもあるんだけど、90年代のうちに人間のできる技、ケブラーダにしても、なんにしても出つくしてる。

──それはおもしろい見方ですね。

井上　今度は、それこそ吊り輪や鉄棒を作って、体操の選手をスカウトでもしないかぎり、新しいウルトラC的な技は出ないですね。もう出つくした。

──『ハッスル』で体操の池谷幸雄さんがやってますけど、確かに進化できないところまでいっちゃた感はありますよね。

井上　もう出つくしてファンは見飽きてますよ。これ以上、人間のできることはない。タッグマッチでジャイアントスイングで回されるヤツの頭にドロップキックを見舞ったりとかね。もう考えすぎだし、やりすぎてる。プロレス団体がメジャー団体2～3つだけで、技を規制してたら、出つくすことはなかったでしょうね。

──じつはTAJIRIさんとも同じような話をしたことがあるんですけど、いまは技が進化しすぎちゃってて、お客さんがわからなくなってる、と。しぐさ一つ、表情一つで湧かせられるような状態になれば、もっと違ったプロレスになるんじゃないかという話でした。技が進化しすぎることによって、いいことは何もないっていうのがTAJIRIさんの持論なんですよ。

井上　それはアメリカ人と日本人は国民性が違うんで、そこに持っていくのは難しいと思いますけどね。極論すれば、プロレスを観たことある人が全員死なないかぎり……デカいチャンスは回ってこないと思う。

──それは凄まじい極論ですね（笑）。

井上　つまりお客さんをすべて入れ替えないとダメということですね。これだけ団体が増えちゃったら、もはや規制できないでしょ。アメリカだと中堅とか前座の選手が、メインイベンターのウイニングショットを勝手に使ったら、それこそ一発でクビですよ。

──日本だったら、何人のクビが飛ぶんだっていう（笑）。

井上　これもよく言われることなんだけど、メインまでの試合でね、凄い技を出して、最後に盛り上がらなかったら、これはどうしようもないんでね。それをわかってても規制できないよね、新日本にしてもどこにしてもね。へんな話、同じムーブをやったら若いヤツのほうが見映えいいしスピードもあるんですよ。

──そうでしょうね。

井上　メインに出るのは30～40代の選手だから、20代の選手とはスピードが違うから。前座試合がメインイベントを引き立てなきゃいけないのに、途中で一度ボルテージを上げてしまったら、最後に落ちてしまって、なんか消化不良で帰ることになってしまう。だからセオリーを守らないと。

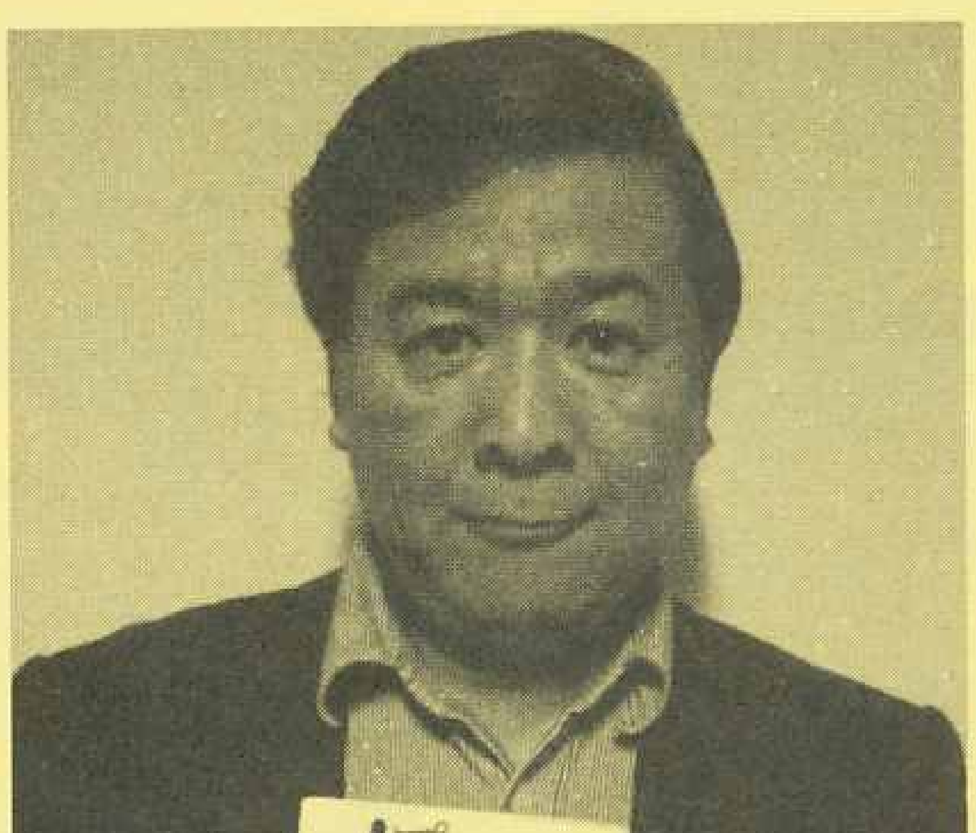
──でも、一度崩しちゃった以上は、もう戻れないでしょうね。

井上　ああ、ダメですよ。だからいま言ったように、いま地球上にいる人がみんな死なない限りはプロレスの再興はないです。

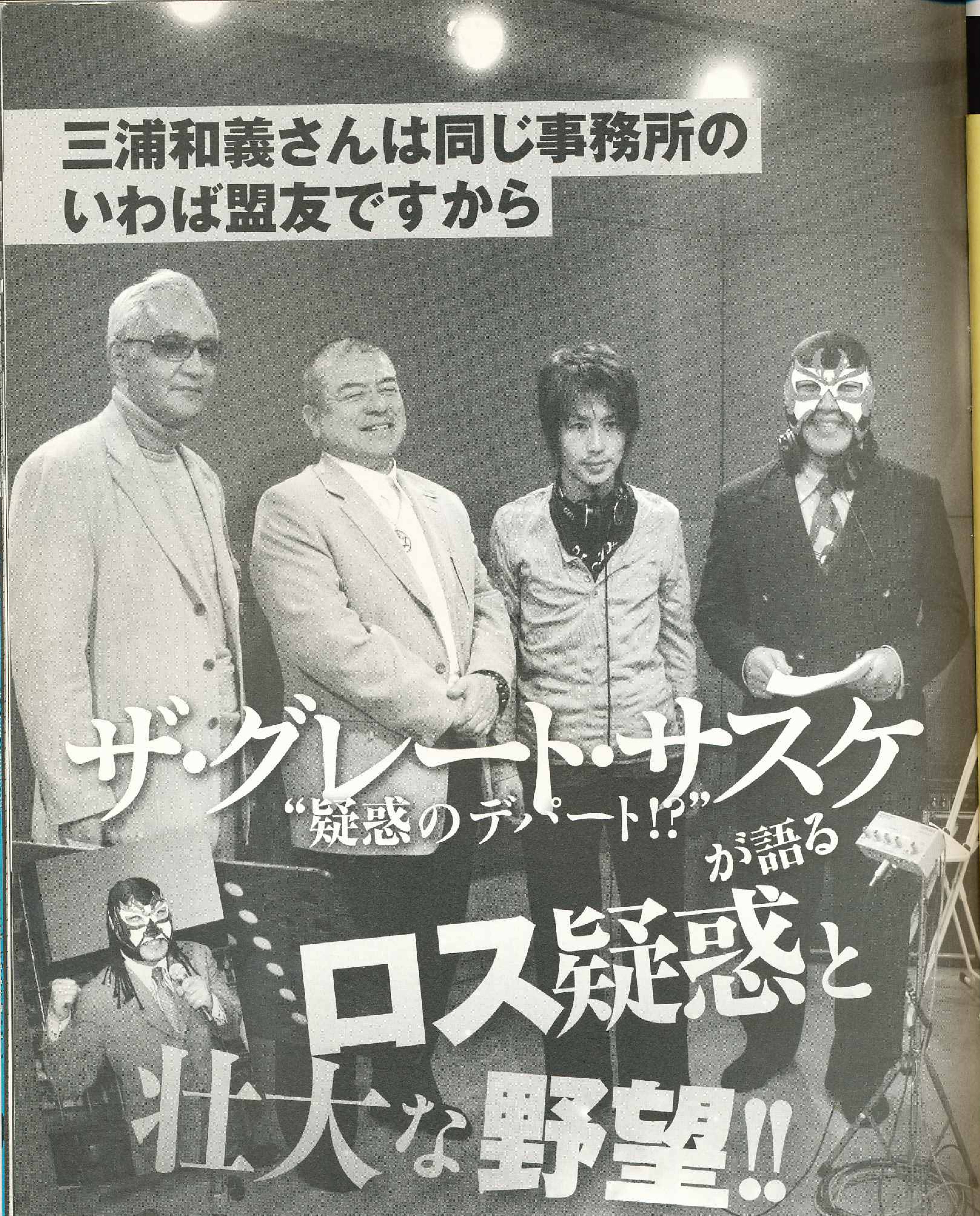
──ハハハハ！　極論だ（笑）。

井上　まあ、それは言いすぎだけど、それぐらい難しいと思いますよ。

【08年3月21日／大阪・福島区『すかいらーく』にて収録】



いのうえ・じょうじ■1952年、兵庫県出身。大阪芸術大学文芸学部卒。『週刊ファイト』では米国特派員としてニューヨークに駐在。海外取材を通して数々のスクープを仕掛け、I編集長のもとで『ファイト』黄金時代を築き上げた。94年6月から06年9月の休刊まで編集長を務めた。現在はフリーの立場で、『Gリング』などで執筆中。今年、ここ10年のプロレス界を通して「歴史的失速」を検証した『プロレス「暗黒」の10年』（宝島社）を出版した。



三浦和義さんは同じ事務所のいわば盟友ですから

ザ・グレート・サスケ “疑惑のデパート!?” が語る ロス疑惑と壮大な野望!!

『kamipro』でのサスケというとUFO研究家としての活動が有名だが、それ以外にも幅広い課外活動をしているのは皆さんもご存知だろう。そんなサスケが先頃サイパンで身柄を拘束された“ロス疑惑”で知られる三浦和義元社長の支援ライブを行なうとの情報をキャッチ!　一部では“疑惑のデパート(?)”とも呼ばれるサスケがロス疑惑、そしてアントンも顔負けの壮大な野望を語ります!!

聞き手／阿修羅チョロ

三浦さんと最後に会ったのは身柄を拘束される1週間前でした

——サスケさん！ 今日は〝ロス疑惑〟でおなじみの三浦和義元社長について、たっぷりとお話を聞かせてもらえればと思います！ ……どれだけ『kamipro』読者のニーズがあるのかはわかりませんけど（笑）。

サスケ いやいやいや、『kamipro』の読者なら問題ないでしょう！

——そ、そうですか。早速ですが、サスケさんは先頃サイパンで身柄を拘束された三浦元社長の支援ライブをテレンス・リーさんと開催されるみたいですね。

サスケ そうなんですよ。まあ、私もボーカルとして何曲か歌わせてもらいますし、サスケファンも必ず満足してもらえると思います！

——それは楽しみです。三浦元社長が身柄を拘束されたサイパンといえば、プロレス界ともなじみの深い場所ですし、ロス疑惑の捜査官をしていたジミー佐古田さんの甥もケイジ・サコダというリングネームでプロレスをやっていたりと、何かとマット界とも接点がありますからね。

サスケ へぇ〜、そうなんだ。いろいろとプロレス界と縁があるわけですね。では、まず私と三浦さんの関係からお話ししましょうか？

——はい、お願いします！

サスケ 私はですね、三浦さんと同じ芸能プロダクションのアルファジャパンに所属してまして、公私ともに付き合いがあったんです。で、今回の一件に関して、正直、このまま黙っているのもどうかな？ という部分もあって。何か支援できることはないかと考えてたんですよ。

——それで、テレンス・リーさんのバンドとの支援ライブの企画が立ち上がったわけですね。

サスケ それもそうなんですけど、このライブのメインは、あくまでも横浜開港150周年記念ですから。日程も以前から決まっていましたしね。そのサブテーマとして、三浦さんの支援を盛り込んだというところが正直なところです。

——そうですか。サスケさんは、三浦元社長がサイパンで身柄を拘束されたことに関しては、ぶっちゃけどう思ってます？

サスケ え〜、ここはマジメに語らせてもらいますけども、よろしいでしょうか？

——どうぞどうぞ。

サスケ やはりですね、一時不再理（※事件の確定判決がある場合には、再びその事件の実体審理をすることを日本の法律では認めていない）というのが日本ではありますし、また日本の最高裁の判決で〝無罪〟という判決がすでに下されているわけですから、その最高裁の判決というのは非常に重たいものだと思ってるわけです。

——ええ、確かに。重たいものだと思います。

サスケ それが何か覆された……とまでは言わないまでも、ある種、踏みにじられたのかなというような気はしますね。

——たしか、最高裁の判決で〝無罪〟が確定したのは2003年でしたね。

サスケ そうです。たしか、カリフォルニア州でも、それまでは一時不再理、向こうで言うところのダブル・ジョバティっていうものがあったはずなんですよ。

——ダ、ダブル・ジョバティ!? それってプロレス技かなんかですか？

サスケ そうそうそう、ダブル・ジョバティっていうのはツープラトンで……って、プロレス技じゃないから！

——乗りツッコミありがとうございます（笑）。

サスケ まあ、マジメに説明するとですね、ダブル・ジョパティというのは、ある罪に対して一度刑に処せられたら、同じ罪で罰せられることはないというアメリカの法律なんですよ。

——ほ〜、さすが元県議会議員！

サスケ （無視して）2004年にそのダブル・ジョバティの法改正がなされてるということで、はたして2004年以降の部分から、2003年の判決にさかのぼって、そういったものを適応するのはありえるのかなということは正直疑問に思ってるんですよ。

——そうですか。サスケさんとの関係を知らない人からすれば、なんで支援するんだろうという意見もあると思うんですが。

サスケ それに関してはテレンス・リーさんも会見で言ってましたけども、要するに裁判を受ける権利っていうのは誰でもあるわけです。今回、三浦さんは異国の地で突然ふいに拘束されて、海外ですから当然、多額の弁護士報酬を払わなきゃいけないとか、そういうことも出てくると思うんですよ。最終的な判断というのは司法のレベルでつけるにしても、平等に裁判を受ける権利がある以上は、それに対する支援はするべきだろう、と。もちろん、同じ事務所の、言ってみれば盟友という部分も大きいですけどね。

——ちなみに、三浦さんと最後に会ったのはいつになるんですか？

サスケ サイパンで身柄を拘束される1週間ぐらい前かな。その日に会ったのが最後でしたね。

——そんな最近に会ってたんですか？

サスケ そのときは小田原地裁での裁判でお会いしたんですよ。

——なんでまた裁判所で。もしかして……!?

サスケ （さえぎって）いやいや、私は関係ないんですけども、三浦さんご自身の裁判があったんですよ。

——小田原地裁というと、例のコンビニでの万引き事件の裁判ですか？

サスケ そうです、そうです。

——あの騒動は知事選の前でサスケさんを密着させてもらってた時期の出来事でしたけど、コンビニの防犯カメラの映像を投票日にサスケさん



3月25日、都内にてTBSの『サンデージャポン』などでおなじみのテレンス・リーとともに会見を開いたサスケは、2009年6月2日の横浜開港150周年を記念し、今年4月5日を皮切りに「三浦和義支援イベント〜ヨコハマから、昭和の歌を風にのせて〜 ザ・グレート・サスケ＆テレンス・リーバンド 横浜開港150周年チャリティーライブ」と題したイベントを偶数月の計8回、横浜のライブハウス『ベイジャングル』にて開催することを発表。サスケは一発目となる4月のライブは試合が入っているためビデオメッセージでの登場となったが、6月からはボーカルとして何曲か披露するとのこと。サスケマニアは横浜に集合！
★問／ライブハウス『ベイジャングル』
※神奈川県横浜市中区長者町3-7-1YSビルB1 TEL.045-241-0777

と一緒にワイドショーで観た記憶があります（笑）。

サスケ　そうそう、あったねぇ（笑）。

——あの事件も三浦さんは「やってない」と犯行に関して全面否認してるみたいですが、あそこまでビデオに映っているのに凄いなぁって逆に感心させられましたけど（笑）。

サスケ　でも、あそこのコンビニには防犯カメラが十数台あって、その映像をコンビニ側が警察じゃなくテレビ局に差し出したことから考えると、三浦さんはハメられちゃったんじゃないかなと思うんだよね。

——防犯カメラが十数台って確かに多すぎる気もしますね。それに三浦さんといえば、これまでマスコミ関係を中心に５００件近く提訴して、約8割方は勝訴してるんですよね（笑）。



こちらの写真は06年2月、横浜市内のスタジオで行なわれた三浦和義初プロデュース映画『風雲児』のレコーディングにサスケが音楽プロデューサーとして参加したときのもの。サスケは挿入歌を歌う織田無道と村戸至を「そこは重低音でズズズイ〜ッと！」、「は〜い、ここが泣かせどころですよぉ！」など独自の感性でプロデュースしていた。

サスケ　そうそう！　三浦さんは、いつ何時でも裁判で闘ってますから。

——猪木イズムですね（笑）。ちなみに、同じ事務所に所属する前までは三浦元社長に対して、どういう印象を持ってました？

サスケ　私はロス疑惑の当時はまだ小学生でしたけど、リアルタイムでニュース映像を観てて、もらい泣きしてましたよ。

——も、もらい泣きしてましたか！

サスケ　病室のベッドで三浦さんが「かずみ、かずみって１００回も２００回も叫んだんだよぉ！」って泣きながら答えている映像を観て、もらい泣きしましたねぇ……（しみじみと）。

——でも、大人になって、いろんな事実とかも知って、それこそ疑惑の目で見たりはしなかったですか？

サスケ　疑惑に関しては正直あんまり感心はなかったですね。でも、逮捕されたときは、たしか中学生だったんですけど、そのときは臨時ニュースで映像が出てね、夜11時ぐらいだったと思うんですけど、あれは衝撃的でしたよ。「えーっ、疑惑がホントになっちゃったのかよ！」なんてね、子ども心に思いながら観てた記憶がありますね。

——それから数年経って、実際に初めて会ったときのイメージって、どんな感じでした？

サスケ　物腰の柔らかい方で、それこそロス疑惑の真っただ中のときに見せた、ある種、攻撃的な部分っていうのは、まったく感じなかったですね。ホントにおとなしい感じの方で。その後、三浦さんとは映画の仕事も一緒にやったりしましたしね。

——三浦元社長がプロデュースをした『風雲児〜長者番付に挑んだ男〜』という映画ですね。のちに、資金持ち逃げとか、いろんなトラブルが表沙汰になってましたけど（笑）。

サスケ　そうそうそう（笑）。そのトラブルに関しては私よりも荒井社長のほうが詳しいんで、あとで社長に聞いてください。

——わかりました（笑）。しかし、三浦さんもそうですけど、サスケさんの所属するアルファジャパンは織田無道さんといい、けっこうトラブルに巻き込まれますよね（笑）。

サスケ　ねっ、ねっ、ねっ！　まあ、『風雲児』という映画に関して言えば、あれはほぼ実話で、主人公の方自体がトラブルに巻き込まれたから映画になったわけであってね。トラブルが起こるべくして起こった映画なのかもしれない（笑）。

——イヤな映画ですねぇ（笑）。ちなみにサスケさんって、サイパンは何度か行ってます？

サスケ　私はねぇ、サイパンとかはあまり興味ないですから。

——プロレスラーはサイパン好きが多いですけどね。

サスケ　多いよねぇ。私は行ったことがないんで、なんとも言えないんですけど、基本的にみんなが行くところってイヤなんですよ。だから、サイパンとかハワイに行くぐらいだったらロスとかのほうが全然いいね。

ロス疑惑当時は小学生でしたけど、ニュースを観てもらい泣きしましたね

——まさに"ロス疑惑"ですね（笑）。逆に、海外通のサスケさん的に気になっている国とかあります？

サスケ　おっ、よくぞ聞いてくれました！

——どこかオススメの国でもあるんですか？

サスケ　やはり、いまだったら、内モンゴルとタイは熱いですね！

——"熱い"って季節的にですか？

サスケ　いやいや、確かに暑いかもしれないけども、それ以上に熱い！　私も仕事で近々行く予定ですから。

——あ、そうなんですか。でも、タイで仕事って、もしかして……。

サスケ　（さえぎって）いや、ムエタイの修行をするわけじゃないんですけど（笑）、ちょっと、ある資源の関係の仕事をいまやってるんですよ。

——ある資源の関係の仕事？

サスケ　まあ、言ってみればトレジャーハンティングといいますか（笑）。

——それならわかりやすいです。トレジャーハンティングといえば、ここ最近、猪木さんも熱くなってるみたいですけど、とくに関連性はないんですか？

サスケ　残念ながら猪木さんとは関係ないんですけど。猪木さんが狙ってるのは財宝船でしたっけ？

——そうですね。自分がもらった島の近くに財宝船がいくつか眠ってい

いやいや、私を信じてください！やましいことはしてないですから

るらしくて、あとは引き上げるだけみたいなことをよく言ってますね。

サスケ ほぉ〜、それは凄いですねぇ。ただ、私もね、猪木さんに負けじと、すでにそれに近いところまで到達してるんですよ。……まあ、ここだけの話ですけど。

——貴重なスクープネタ、ごっつあんです！（笑）。

サスケ （小声で）とくに内モンゴルに関してはね、すでに、あるものを発掘してる最中ですから。

——え、最中なんですか？

サスケ ええ。ですから、今年は内モンゴル方面で大きな動きがあると思うんで、頭の片隅にでも入れておいてください。

——了解しました。

サスケ まあ、海外だけではなく、私は日本国内でもガンガン、トレジャーハンティングしてますんで。

——あ、そうなんですか。最近はプロレスのほうもかなりの試合数をこなしてますけど、全国津々浦々で宝探しをしてるんですか？

サスケ いやいや、ある局地的なスポットがあるんですよ。

——へぇ〜。こっそり、その局地的なスポットを教えてもらえませんか？

サスケ これはね、『kamipro』さんといえども、残念ながら言えないんですよねぇ。

——それは残念です。

サスケ 残念ながら言えないんですけども、ここだけの話、北のほうです。それ以上は私の口からは言えません！（キッパリ）。

——極秘情報ありがとうございます（笑）。トレジャーハンティングにもいろいろとやり方があると思うんですけど、サスケさんがやっているトレジャーハンティングはどんな方法なんですか？　イメージ的には徳川埋蔵金のような、とりあえず掘るって感じですか。

サスケ そうですね。ただ、私の場合は手掘りなんです。

——へ？　手掘り（笑）。

サスケ まず、見つけるには手掘りからですから。で、手応えをつかんだら本格的に機械掘りに突入するんですけど、ほぼ手掘りの作業は終わってますからね。

——じゃあ、近日中にも機械掘りの段階に突入するわけですね。

サスケ そういうことです！　まあ、今年中には公開できると思いますよ。

——今年中に公開できますか！　まあでも、猪木さんも同じようなことを言って、いまだ公開されてないしなぁ。

サスケ いやいやいや、私を信じてください！　決して、やましいことをしてるわけではないですしね。

——そうですか。ちなみにサスケさんが狙っているのは一攫千金なんですか？　それとも貴重な遺産の発掘が目的とか？

サスケ しいて言えば、日本のためですよね。もしくは日本経済発展のためというか。

——また大きく出ましたねぇ。



ざ・ぐれーと・さすけ■本名非公開。1969年7月18日、岩手県出身。みちのくプロレス会長。180cm、90kg。右がサスケの所属する芸能事務所「アルファ・ジャパンプロモーション」の会長にして、よき理解者の荒井英夫氏。

課外活動 インパクト・ベスト4



映画好きが高じて水野晴郎監督と夢の『シベ超』タッグを結成！

自らも監督経験を持つなど、かなりの映画好きとしても知られるサスケ。『紙のプロレスRADICAL』時代の05年2月には、のちにサスケ自身も出演をはたした水野晴郎監督の人気シリーズ『シベリア超特急』の第5作公開を記念し、対談も実現。サスケも参戦していた新宿プロレスのリングでは映画にも登場したシベリアン・タイガーやシベリアン・タイガーJr.がプロレスデビューしている。



ブルガリアの国立大学内にプロレス学校を設立、学長に就任するも……。

「私たちはヨーロッパでプロレス革命を起こします」と02年2月に荒井会長とともにブルガリアの国立大学内にプロレス学校を設立し、学長に就任するとの会見を開いたサスケ。現地での映画出演も決まっていたというサスケだったが、このプロジェクトは思うように生徒が集まらなかったこともあり立ち消えに。ちなみに、この会見に出席した六條華は芸名を変え歌手＆モデルとして活躍中。

サスケ　いやいや、ホントにそうですから。個人のためではなく、あくまでも我が日本の経済発展のために掘って掘って掘りまくる、と。

——日本のために掘って掘って掘りまくってください（笑）。猪木さんの財宝船と、サスケさんのお宝と、どっちが先にお披露目できるか楽しみにしてます！

サスケ　いや、猪木さんには申し訳ないんですけども、私のほうが早いですね（キッパリ）。

近々、北京近辺でなんらかの大きな会見をやることになるでしょう！



こちらは昨年9月16日に代々木第二体育館で開催された織田無道プロデュース『無道SPRIT』の会見での一枚。豪華なメンツで開催された大会だったが、今月1月に予定されていた台湾大会はいまだ開催されず。織田無道もかつてサスケと同じ芸能事務所に所属していたのだ。

——おっ、自信満々ですね！

サスケ　これに関しては自信がありますから。近々、タイも内モンゴルもどっちも行きますしね。まあ、いま言った2ヵ所は極秘なんですけど。

——またまた極秘情報！（笑）。

サスケ　タイと内モンゴルは極秘なんですけど、返す刀で、中国の北京近辺を経由する予定なんですよ。

——返す刀で中国まで足を延ばす、と？

サスケ　そうそう。そこで、なんらかの大きな記者会見をやることになるでしょう！

——北京近辺で大きな会見!?　ちなみに、その会見はプロレスとは無関係なんですかね？

サスケ　一切関係ないです。そこからは一気に政治的な動きになるんですけども。

——それは現地向けの会見ってことですか？

サスケ　いや、全世界に向けてです。いや、むしろ、日本向けかな。

——じゃあ、『kamipro』でも行かざるをえないぐらいの会見になるんですかね？

サスケ　そう！『kamipro』さんも食いつくような会見になると思いますよ。これは間違いない！

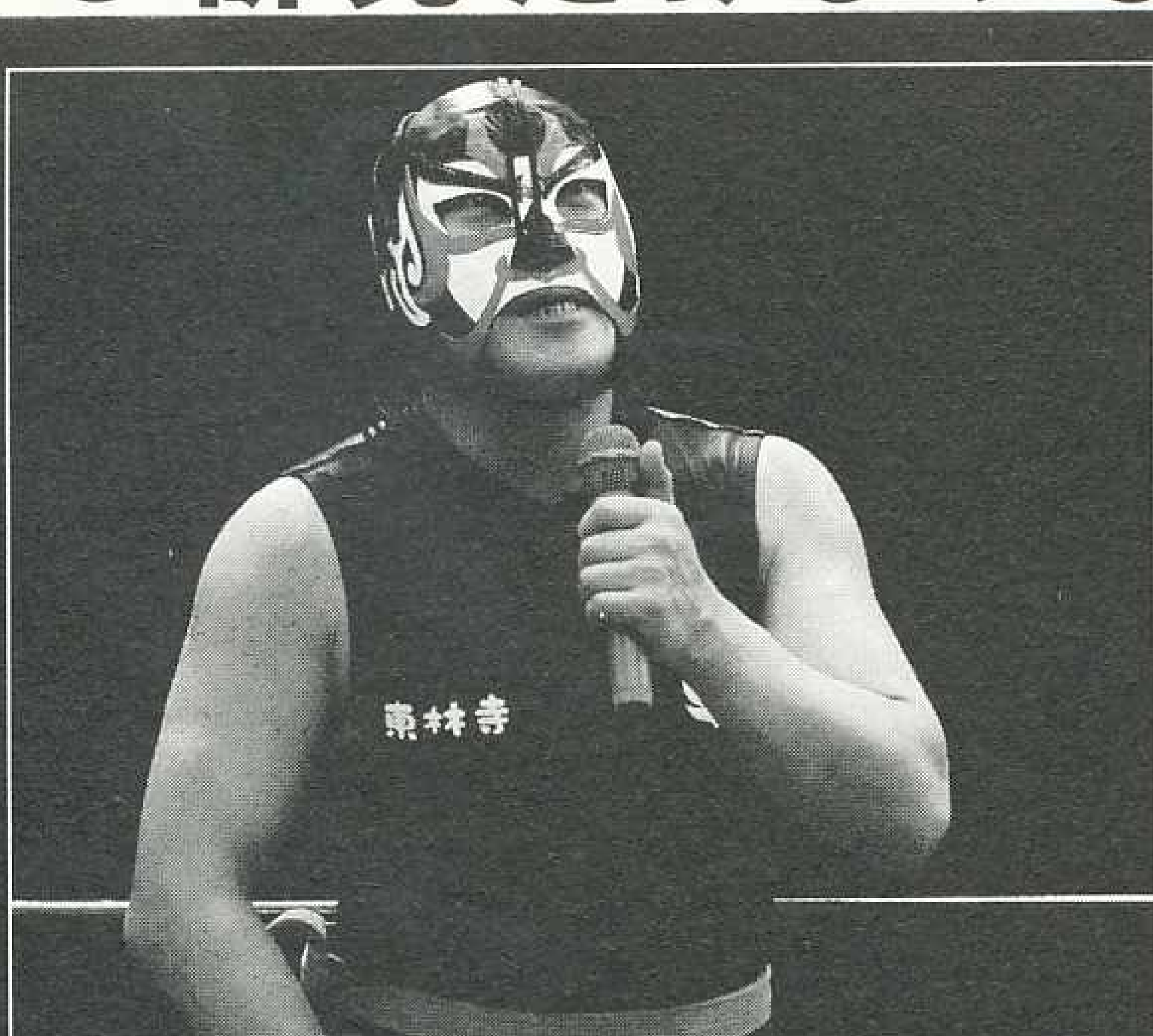
——ほぉ～、それは楽しみですねぇ。

サスケ　それに関しては非常に政治的な会見になるとは思いますけど、ときには闘い、ときには歌い、またあるときにはトレジャーハンティングもする、と。そういうわけで、今年の私には期待していてください！

【08年3月27日／都内某所にて収録】

UFO研究だけじゃない！ サスケのズンドコ

移動パスタ屋の経営に名乗りを挙げるも、あえなくとん挫！



知事選落選から数カ月、サスケが新たにブチあげたのが移動パスタ屋の経営だった。『kamipro』ではサスケから移動パスタ屋への思いと具体的なプランまで、たっぷり語ってもらい、あとは開店を待つばかりだったのだが、結局は諸問題もあってとん挫。その後、佐藤兄弟からはパスタ攻撃も食らうなどしたサスケだったが、現在はカレー屋の経営を画策中……。はたして、どうなる!?



岩手県知事選に立候補するも残念ながら落選……。

岩手県議員として実績を積んだサスケは07年4月の岩手県知事選に出馬。世界初の覆面知事誕生を期待し、投開票が行なわれた4月8日は本誌でも密着取材を敢行したのだったが残念ながら落選。その後しばらくは表舞台からは姿を消していたサスケだったが、07年8月の「ふく面ワールドリーグ戦」で復帰してからは、さまざまな団体で精力的すぎるプロレス活動を行なっている。

明が“法の外”の魅力



「生きる都市伝説」、「夜櫻會三代目総長」、
「新宿のカリスマ」らが大暴れ!

「格闘技とは暴力である!」

鬼才・前田日明よみがえらせた

不良たちのステゴロ大会

THE OUTSIDER

ジ・アウトサイダー　3.30 ディファ有明

ビビりながら潜入リポート!!

前田日明総帥がプロデュースする噂の“不良ケンカ大会”『THE OUTSIDER』がホントに開催された！ 全国の不良、ワルたちを集めて闘わせるという、この前代未聞の大会で、いったい何が起こったのか？ UWF変態座談会シリーズでもおなじみ、フリーライターの椎名基樹がビビりながら、命懸けのリポートをお届けします！

文／椎名基樹　撮影／菊池茂夫　構成／堀江ガンツ

鬼才。

辞書を引いてみると、【人とは思われないほど、才能がある人】とある。しかし一般的に使われるときは、鬼才・荒木経惟だとか、鬼才・つげ義春だとか、アナーキーな社会的立ち位置にある人で、さらに作風が極めて個性的で、作品がそのまま新しいジャンルを作り出してしまうような人を指すように思う。破壊と創造が同時に行なわれる、クリエイティブな存在といったところだろうか。

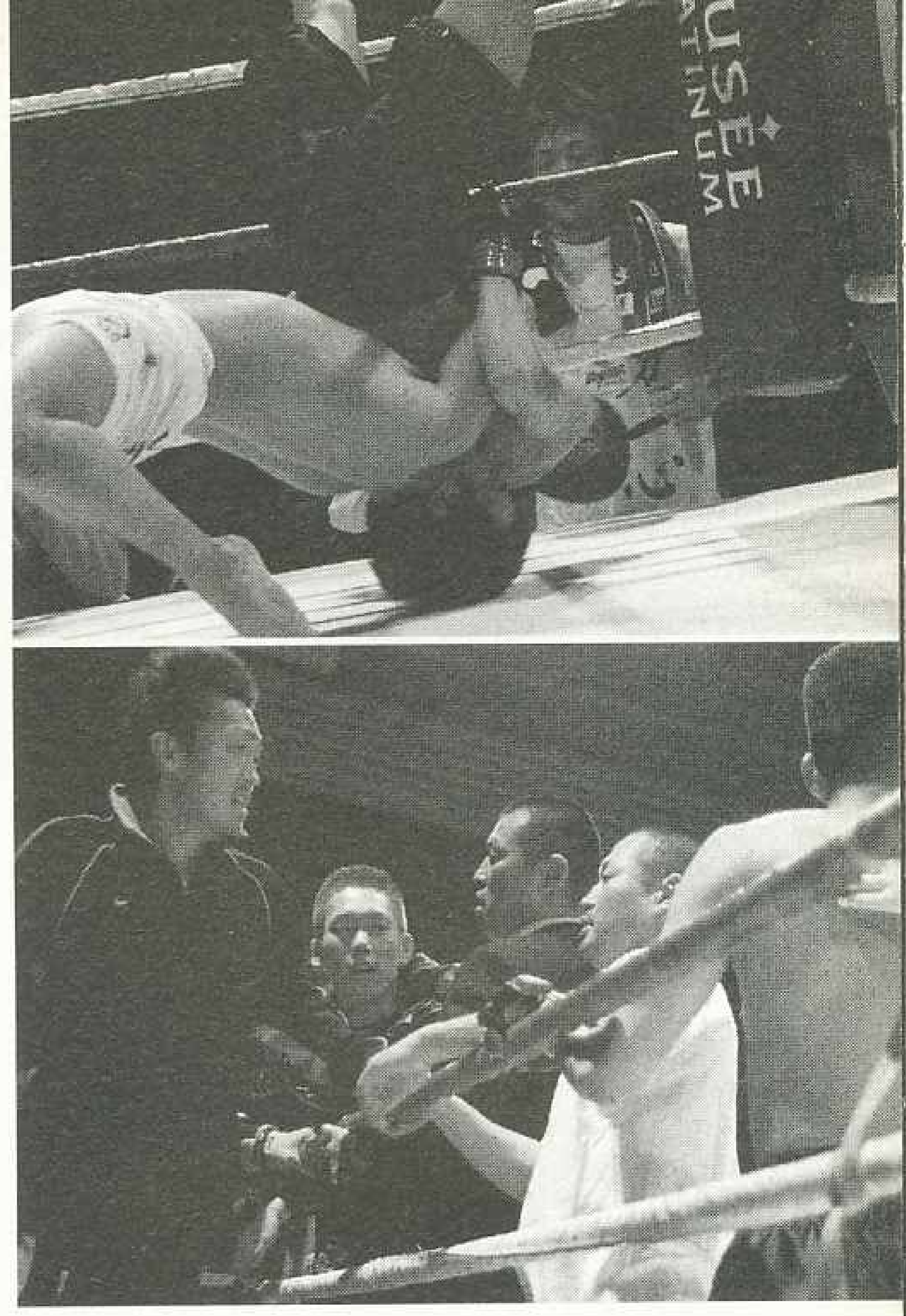
アントニオ猪木、佐山サトル、前田日明。思えば筆者が心惹かれ追いかけてきたのは、プロレスラーの鬼才の系譜であった。藤原組長は、なるほど芸術を愛する創造的な人であるが、鬼才の範疇ではないと感じる。高田延彦もまた、UWF→PRIDE→『ハッスル』と、見事なほどいつも時代の先頭を走っているが、そのタイプではない。

優れたプレイヤーであると同時に、優れたプロデューサーであるのが、筆者が考える、プロレスラーの鬼才の条件だ。またそれは「世の中とプロレスをする」タイプだと言い換えることができるかもしれない。そうなると、やはり猪木、佐山、前田ということになる。それにしても、その技の美しさでは、プロレス史上でも特筆することができるであろう3人が、名プロデューサーであることが、とても不思議に感じるが、まあ、それは蛇足。次の機会に考えよう。

その前田が立ち上げた新イベント『THE OUTSIDER』。まさに鬼才・前田日明の面目躍如である。世の中の不良を集めて、闘わせる、そしてその大会名は『THE OUTSIDER』と聞いたとき、頭をポカリとやられたような衝撃があった。なんと新鮮な大会コンセプト。それにピッタリのインパクト大の大会名。総合格闘技の競技化、組織化（ボクシングのような）ばかり考えがいってしまう、筆者の固い頭に気づかされる思いだった。

前田は、現在は総合格闘技の黎明期であると言った。まさにそのとおりである。

総合格闘技にはまだまだ切り口があるのだ。

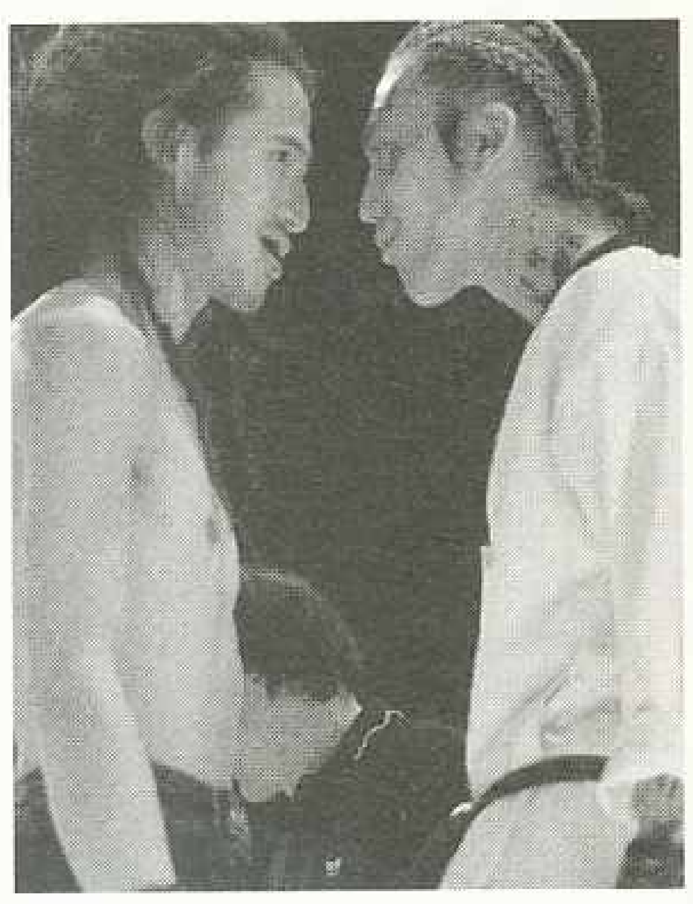


第1試合、“山口の暴走戦士”秋山翼選手は、“ハマの狂犬”黒石高大選手をジャーマンでぶん投げ、チョークで一本勝ち。しかし試合後、黒石応援団がリングに乱入！　秋山に殴りかかろうとするのを、村上和成が身を挺して制止。さすが乱闘のプロだ。「ケンカ禁止」のはずなのに、初っぱなから凄いよ！

第1試合からいきなり〝タイマンテレフォン〟的大ハプニング発生！

何よりこの大会に対する胸の高鳴りはどうだ。記者発表されたとき、期待で想像は膨らみ、大会当日、会場に向かう電車の中ではドキドキしっぱなし。子どもの頃、年に一度しか来ないプロレスの巡業に行くときのような興奮をひさしぶりに味わった。さすが鬼才・前田プロデューサーは、興行のツボがわかっている。

この気持ちは、筆者だけではないらしく、ネット上では大会前から盛り上がり、祭り状態だったと聞く。その大きな要因は、有名女優のダンナの『舎弟』が、殺人事件に巻き込まれ、大会出場選手の不良の方もその関係者だったという、なんとも物騒な理由だったらしいが、そんなイレギュラーなことが起こってしまうのも、この狂ったコンセプトなら当然と感じてしまう。



今大会、最も総合格闘技からかけ離れていたのが、〝新宿のカリスマ〟瓜田順士vs〝ストリートファイト100戦100勝の東京ストリートウルフ〟aym-jet（アユム・ジェット）の一戦。総合のセオリーのかけらも感じられないこの一戦が、じつは一番『THE OUTSIDER』らしかったりした。

また会場で知り合いに会ったのだが、一緒に来ていた彼の奥さんは、用心のために、一応お金は靴下の中に入れてきたと言うので、さすがに笑ってしまった。しかし、そんな中坊魂をいい大人に呼び戻してしまう興奮が、この大会にはあるのだ。

かく言う筆者も会場入りするときはビビりまくり。ゆらゆら歩く不良にビビり、入り口に置かれた、長～いロールスロイスのリムジンにまたビビる。入場時、金属探知機を身体にあてられビビり。寝不足で行ったため二度ほど自販機でホットコーヒーを買ったのだが、それを席に持ち帰るとき、なみなみと注がれた紙コップを持つ手がぷるぷる震えて、ペコペコ頭を下げながら、そろーりそろりと歩く、ヘタレぶり。

そんな中、第1試合では、ジャーマンで場外へ投げ捨て、興奮した不良セコンドたちが、大挙リングに押し寄せ、それを村上和成が制すという、『夕やけニャンニャン』の「とんねるず タイマンテレフォン」のような大ハプニング！　期待どおりの展開に、さらなる期待が高まる。

しかし、そこからセミ前くらいまでの20試合近くは、突然トーンダウン。期待どおりとはならなかった。言ってみれば、格闘技を習った者同士の普通の試合の連続。よくよく考えるとそうなることは、当然といえば当然なのだが、まるでグラウンドパンチありのアマ修斗を見ているようであり、中には恐ろしくレベルの低い試合もあり、現在のアマ修斗はきっと非常にレベルが高いだろうし、不良もたくさん出場しているであろうから、見学無料のアマ修斗と比べ5000円も払って観に行く価値を考えてしまった（こちとら自腹じゃ！）。そもそもアマ大会と銘打っており、何をもってアマというのだろうか？　選手にファイトマネーが支払われないってこと？

それでも、1試合が3分2ラウンドと短く、選手入場などの大会の仕切りが、サクサクと進んでいくので、



かつてリングス『KOK』を開催する際、ラウンドガール公開オーディションを行なうほど、ラウンドガールにはうるさい日明兄さん。今回もビキニ姿のかわいい女の子二人が務めたが、不良の中にビキニがいると何かドキドキしてしまう。

今大会で“オラオラ度”が最も高かったのが、この“ハマの最恐ギャング”高垣勇二選手。ギョロ目を見開いての挑発は、“暴走柔道王”時代のオーちゃんを観るかのよう。奇しくも“前橋の暴走柔道王”の異名を持つ中村啓紀選手を下した。





『THE OUTSIDER』MVPは「夜櫻會三代目総長」加藤友弥選手が受賞。全試合終了後、受賞者全員と前田日明、エンセン井上、村上和成で記念撮影。それにしても、みんないいツラしている。

それほどストレスは感じない。選手入場のとき、それぞれのキャッチフレーズをリングアナが叫ぶのだが、それがいちいちおもしろい。「生きる都市伝説降臨」「成り上がりマン」「顔面美容整形マシーン」等々、桜井康雄が付けたような、古き良きプロレスのキャッチプレーズが並ぶ。

全22試合、1試合終わるごとにいちいち、前田日明とエンセン井上、村上和成が順番に勝利者賞を手渡すのだが、その3人の顔ぶれがまた恐ろしくて、嬉しい。「何をもってアマなのか?」と前記したが、こうした演出がアマっぽい。

リングスもその団体名に則してか、ウイニングローレルや国別対抗戦など、五輪（オリンピック）をモチーフにしたと思われる演出が特徴的だった。輪が重なるリングスのマークもロス五輪のロゴをモチーフにしているると思うのだが、それは前田の趣味によるところが大きいのだろう。

さて、途中普通であった試合であったが、ラスト3試合から俄然不良度がアップして会場は一気にヒートアップ。肩をいからせ、オラオラと声を発して相手を威嚇する高垣勇二選手は、まさにグラップラー刃牙で、タイソン（っぽい選手）に勝ってしまった、暴走族・柴千春そのものだった。見ていて凄くおもしろかったが「オラ来いよ」と相手を煽るのを見て、「オマエが行けよ」と正直思ってしまった。最後はフロントチョークで勝ったのだが、ヒカルド・アルメイダでさえ習得するのに1年かかったという、難易度が高いこの技を彼が本当に極められるのか非常に疑問。相手が単に苦しくなってギブアップしたようにも感じる。

“新宿のカリスマ”が放つ妖気と狂気を見よ！

セミには注目の新宿のカリスマ・瓜田純士選手が登場。大会前にリングスのHPにアップされたちょっとビジュアル系バンドふうの写真よりずっと、妖気漂う迫力がある。相手選手とともに両者ともガリガリに痩せているのが、格闘技から遠ざかり、不良同士の闘いの風情を盛り上げる。

瓜田選手は、ただの不良というだけでなく、狂気を感じる。当日は道衣のようなものを着ていたのだが、チラシ写真で見る彼の身体は全身刺青。それもほかの人とは違い、すごく雑で下手な絵が混然と彫られており、非常に自虐的だ。ブログで自分の指を食いちぎったことを告白していたとかなんとか。生きることすなわち狂気なり。そんな迫力。勝利のあと、彼の奥さんが狂喜乱舞し、係の人に制されていたが、奥さんもケバくて、妙なお色気。さすがだ。

メインは、「夜櫻會」三代目総長の加藤友弥選手と、首都圏の不良でその名を知らない者はいないと言われる「生きる都市伝説」与国秀行選手が対決。試合が始まると、どちらの応援団かわからぬが、大勢で揃いの白いTシャツに着替え一致団結。筆者がビビりまくった不良さんたちであるが、この頃になるとどこかかわいらしく思えてくる。与国選手はマッチョだが、わりと普通の見かけで、それが格闘家ではない、喧嘩士としてのリアリティを生んでいる。

それにしても「生きる都市伝説」といっても、筆者は当然その名前を知らない。しかし会場は伝説の登場に異様な雰囲気に。知らぬ世界の、しかし非常に価値のあるタイトルが懸かっているのがヒシヒシと感じられ、いままで味わったことがない不思議な感覚があった。

この先、この『THE OUTSIDER』がどうなっていくのか、まったく予想はできない。回が進むにつれ、ボブ・サップが牙をもがれていったように、その魅力を失なっていくことも充分予想できる。しかし、現時点でこの大会には、他の大会にない格闘技にとって、とても重要な要素にあふれている。

話は逸れるが本誌・変態座談会で、他のメンバーが長井満也vs木村浩一郎を観ていることに、変態的劣等感を抱き、さっそくDVDでチェックした。そのDVDの中で前田は「格闘技は突き詰めれば暴力である」と言いきっていた。佐竹雅昭がインタビュアーを務めるじつに軽い企画の中ではあったが、確かにそう言っている。

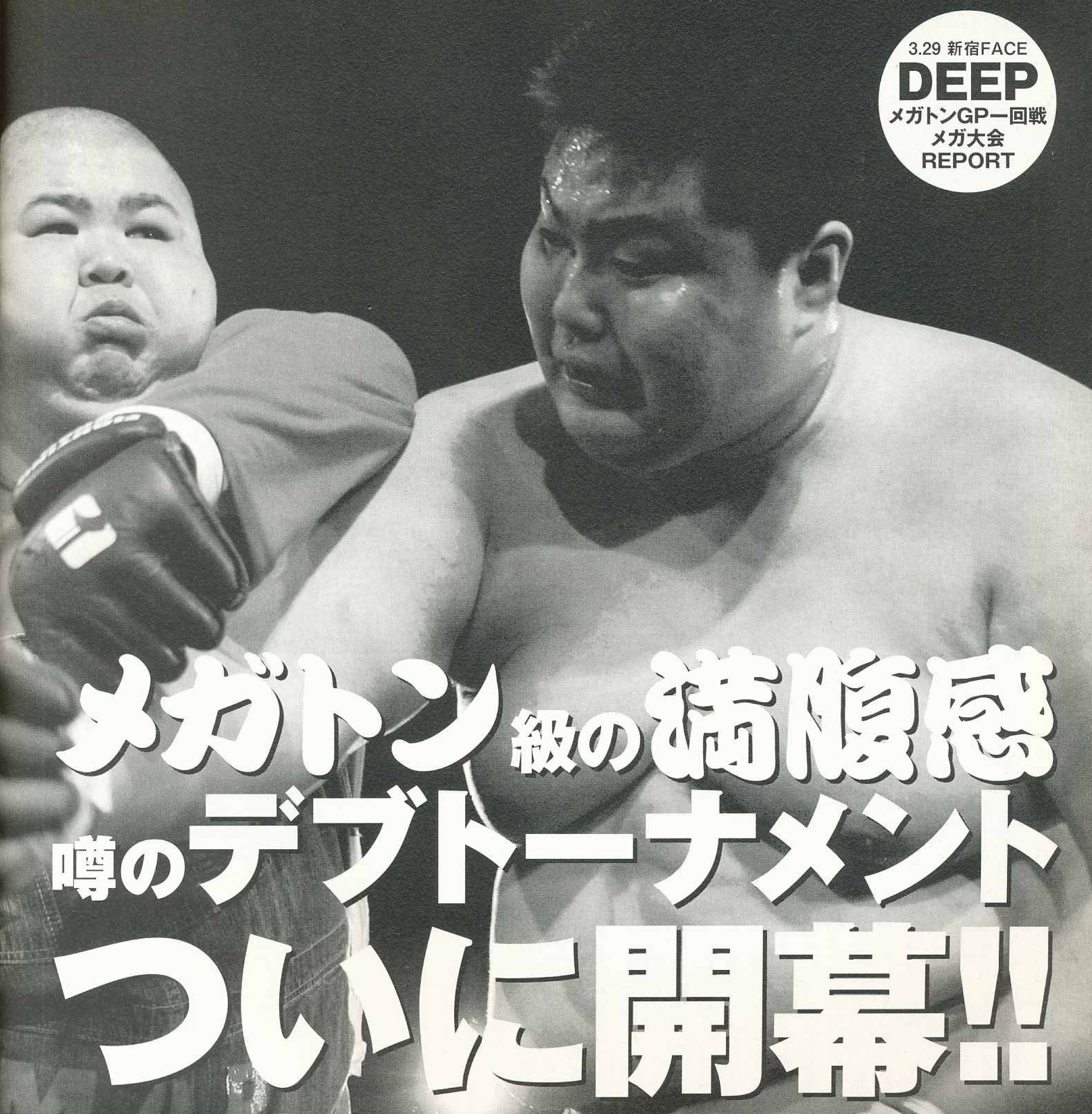


エンセン井上もプレゼンテーターとして登場。前田日明、村上和成とともに、『THE OUTSIDER』にピッタリすぎる人選だ。

これまで格闘家がよく「格闘技は暴力ではない」と言うのを聞いて、非常に違和感があった筆者は、その前田発言をとても快く感じた。ファンが「クソ高いチケット」を買ってまで、いったい何を観に来るというのだ。気取ることはない暴力に決まっている。リングは法の外だから魅力があるのだ。筆者は柔術家が好きだし、彼らの技が好きだ。しかし、その技も暴力をかいくぐって極まるからカタルシスがあるのであって、そもそも技術的に高度なチョークも暴力そのものだ。

格闘技は所詮暴力である。その認識は高いプロ意識であり、それを充分理解しているプロデューサーが鬼才・前田日明である。そう思わされた『THE OUTSIDER』であった。

3.29 新宿FACE
DEEP
メガトンGP一回戦
メガ大会
REPORT



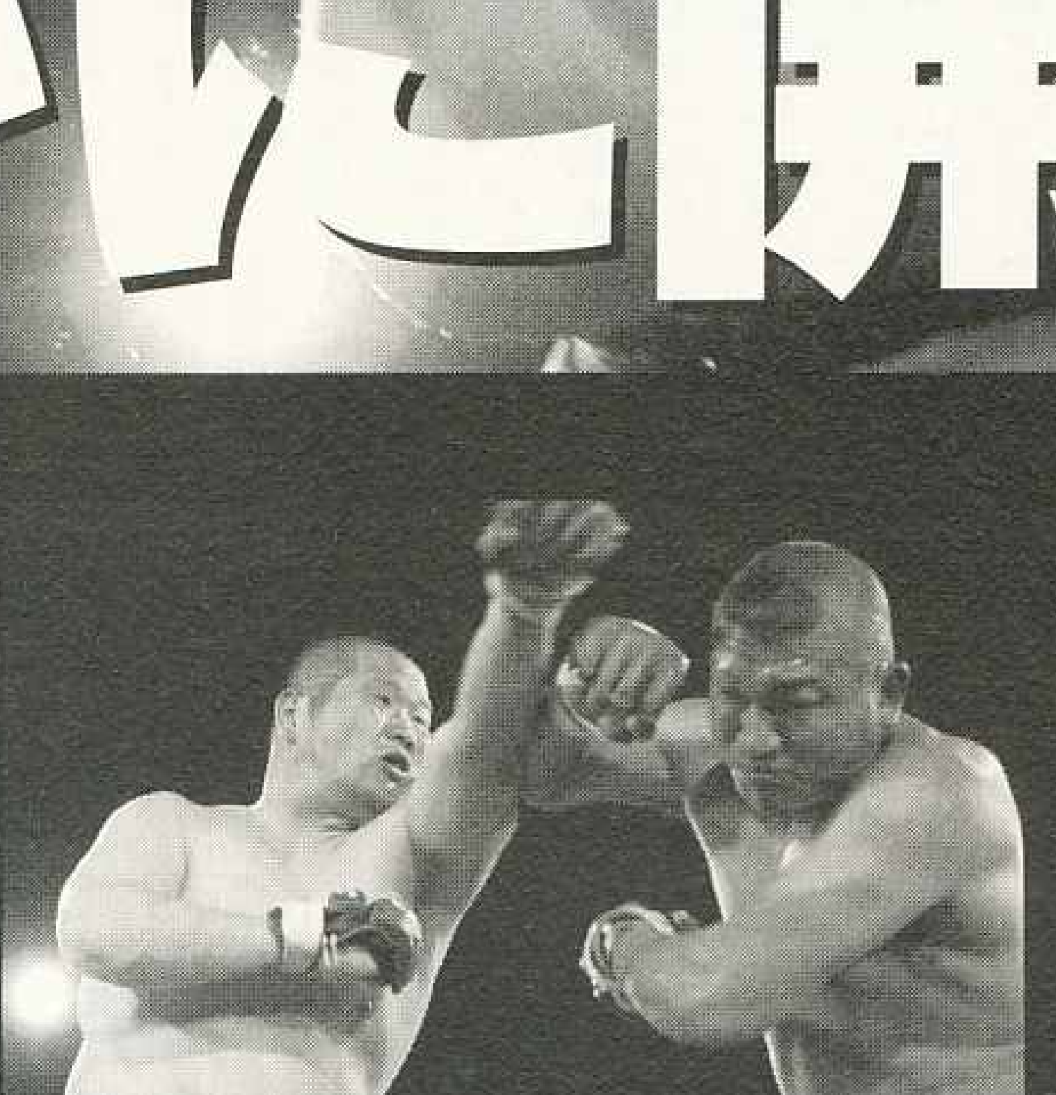
メガトン級の満腹感
噂のデブトーナメント
ついに開幕!!



◯川口雄介(BLUE DOG GYM) **vs 高原信好**(正道会館)**×**

【1R 40秒 KO(コーナー際でパウンド)】

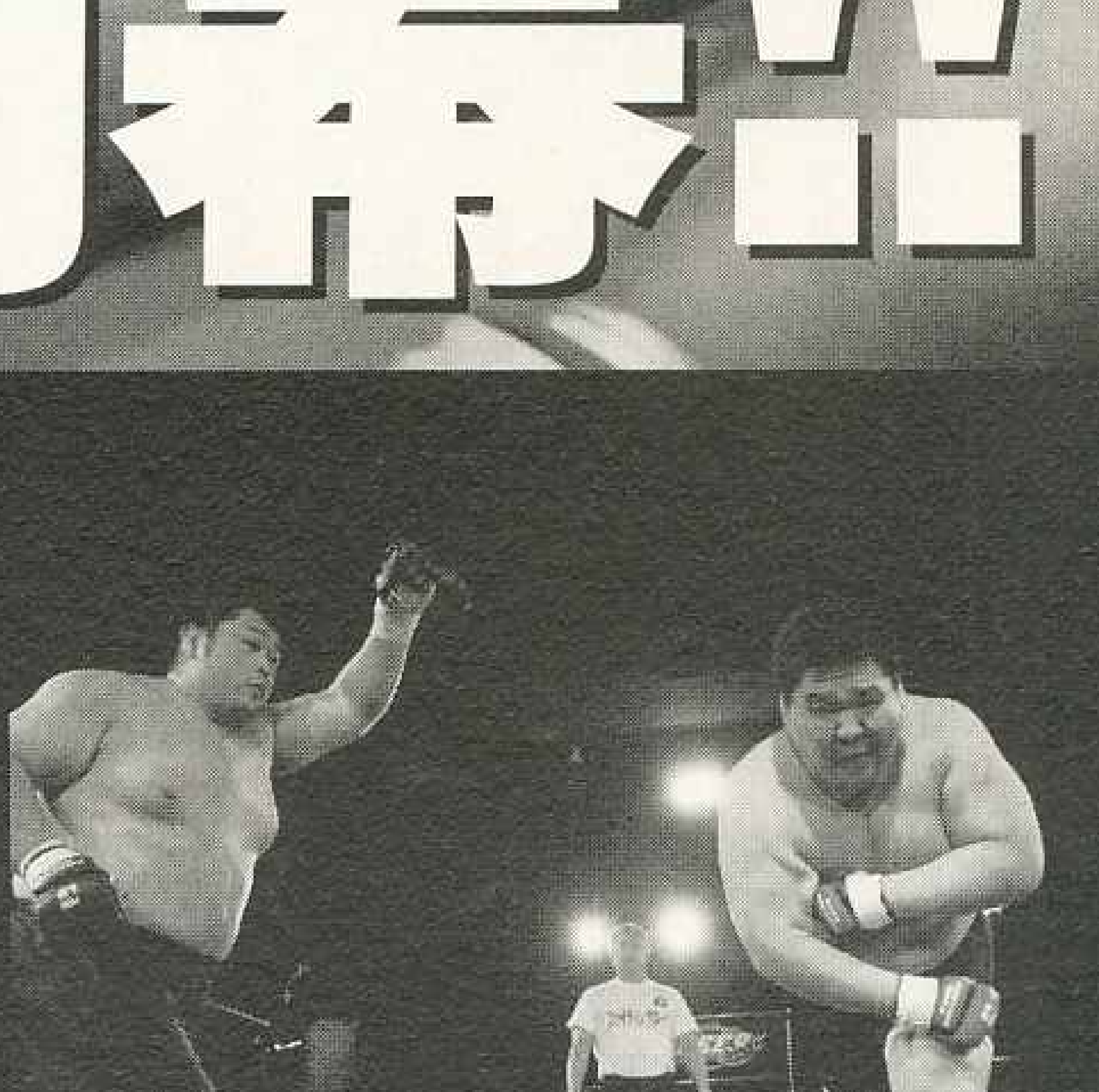
過去のDEEP本戦でも、ほかのデブ勢とはひと味違った強さを発揮していた川口雄介が正道会館の高原信好を40秒葬！ 下馬評どおりに、優勝候補らしい勝ちっぷりを見せた。このトーナメント、準決勝以降は純粋な総合としても見応えのある試合が続出しそうだ。



◯中村護(ALLANCE-SQUARE) **vs マッスルヒラヌマ**(JUNGLE MUSCLE GYM)**×**

【2R 判定3-0】

勝つために身体を絞ってきてしまうほどトーナメントにかける意気込みが人一倍強かったマッスルヒラヌマ(右)だが、中村護のTK譲りのテクニックを打開できず、無念の1回戦敗退。大勢駆けつけた応援団もガッカリだった。逆に中村は要注目の存在になってきた。



◯馬場口洋一(Team Paon) **vs 鶴亀金太郎**(フリー)**×**

【1R 1分22秒 TKO(パンチ)】

K-1でピーター・アーツとも対戦経験のある馬場口洋一(元若翔洋・右)は鶴亀金太郎をTKOで下し、嬉しい総合初勝利！ リングを走り回ってのガッツポーズを見ていたら、「何があっても、続けるって素晴らしいなあ」としみじみ思わされたりして。

胸焼けしそうな超ボリューム!!

K―1モンスター路線がハリウッド映画ならメガトンGPは佐伯流着ぐるみ怪獣映画だ

業界内外で、ひそかに高い注目度を誇っていた『DEEPメガトンGP』が3月29日、新宿FACEで開幕した。16人の出場選手全員、4人の実行委員のうち3人(そのうち一人は本誌でもおなじみのメガトンライター・橋本宗洋)、そして二人のラウンドガールが100キロ超という、もはやムダなまでに徹底されたコンセプトで話題になった、めくるめく「デブの祭典」だ。

開催会見ではライス1キロの特製カレーが出され、入場式では選手、実行委員、ラウンドガール計22人、じつに2・5トン超がリングに上がる。ルールは選手のスタミナを考慮して3分2ラウンド・インターバル3分というメチャクチャさ。当日、会場で配られたカード表には「世界初!」とうたわれていたが、そりゃそうだ。こんなことをここまで大まじめにやるプロモーターは、世界中探しても『DEEP』佐伯繁代表しかいない。普通ならこの大会もヘビー級グランプリなんだが、それが「デブ・トーナメント」に化けてしまうところが佐伯マジックだ。

1回戦に名を連ねた中には『DEEP』の裏名物となっていたヘビー級マッチの常連たちもいれば、馬場口洋一（若翔洋）ら初参戦選手も多数。しかもその中にはサンジャポ・ファミリーもいれば朝青龍の元付き人もいたりと、話題性もタップリときた。これだけのメンバーが集まるのも、『DEEP』ならではだ。

佐伯代表の口からこの企画を最初に聞いたのは、たしか昨年7月の大阪大会のあとだったと思う。この日はメインの中尾受太郎vs國奥麒樹真が大きな見せ場のないドローに終わってしまったこともあって、ストレスが溜まっていた佐伯氏は「怪獣トーナメントやりたいねえ」と言い出したのだ。

K―1モンスター路線と比較されることが多いこの企画だが、佐伯代表の言葉は最初から「怪獣」だった。チェ・ホンマンやモンターニャ・シウバ、バタービーンらは、なんだかんだ言っても世界中から金も手間もかけて集めた選手たちで、まあハリウッド映画のモンスターみたいなもんだ。一方のメガトンGP勢は、日本が誇る着ぐるみ怪獣たち。スケールは違うかもしれないが、こっちはこっちでまた別の味わい深い魅力がある。たまに背中のファスナーが見えちゃうこともあるけど、気にするな!



○熊郷克彦（フリー） vs 有山いいとも!!（サンジャポファミリー）✕
【2R 判定2-1】

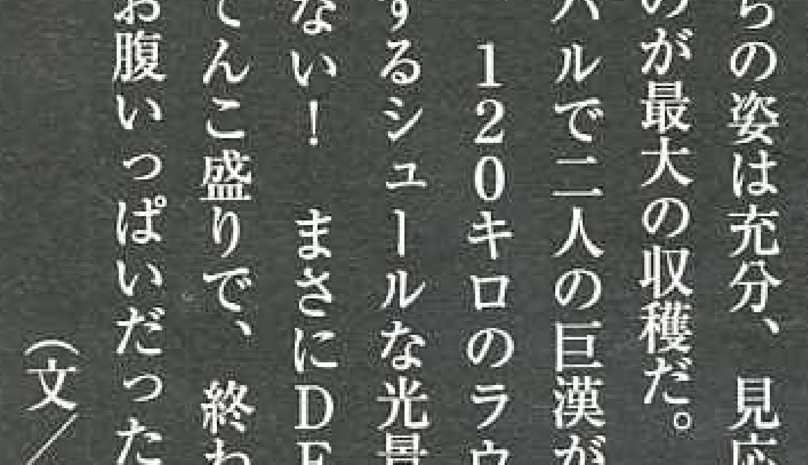
サンジャポ・ファミリーで総合初参戦の有山いいとも!!（左）のパンチが、朝青龍の元付き人・熊郷克彦にガンガン当たる様はまさに異次元空間！ 試合は熊郷が僅差で判定勝利したが、有山は大会MVPといってもいい闘いを見せた。これでこそメガトンGP！

普段のヘビー級戦では1分前後の殴り合いで決着がつくことが多いが、この日、1ラウンド決着は8試合中3試合のみ。5試合が判定になったのは意外な気も……。佐伯代表は「トーナメントだからみんな負けられないというのが出てしまった」と振り返り、準決勝以後は「5分・3分の2ラウンド制」に変更することを示唆した。

まさに、怪獣好きの佐伯代表が自分のおもちゃ箱をひっくり返してソフビ人形を「ガオーッ」とか言いながら闘わせているようなトーナメントだったわけだが、怪獣たちは思いどおりに動いてくれなかったというところか。でも、有山いいとも!!のひたむきな健闘が光ったり、馬場口が感激の総合初勝利を飾るなど、予想外の産物も多々あった。何より、おふざけに見えた企画の中で、真剣に闘っていたおデブさんたちの姿は充分、見応えがあるとわかったのが最大の収穫だ。

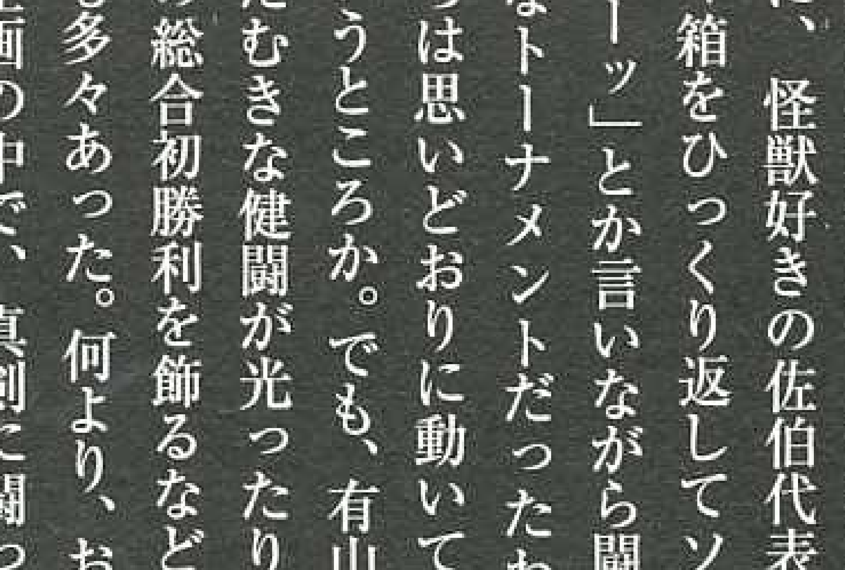
インターバルで二人の巨漢がハアハア息をつく中、120キロのラウンドガールが生CMするシュールな光景はここでしか見られない！ まさにDEEPな非現実空間がてんこ盛りで、終わってみたらしっかりお腹いっぱいだったのだった。げふぅ〜。

（文／高崎計三）



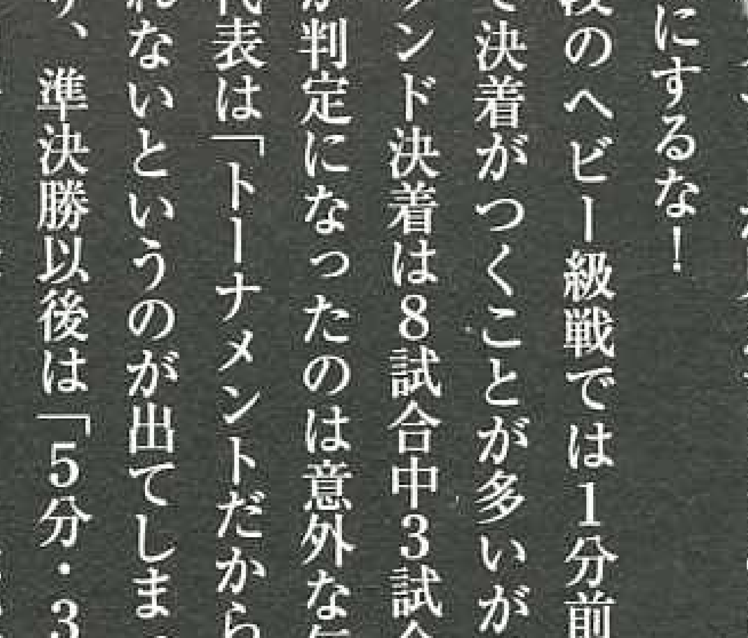
○井上俊介（吉田道場）
vs 小島良祐（武門会）✕
【2R 判定3-0】

「裸の大将」のコスプレで入場する井上俊介（左）は吉田道場らしくない？ でも試合はしっかりとした技術で小島良祐に判定勝ち。



○折橋謙（CORE） vs
和歌武蔵和樹（RANGER品川ジム）✕
【2R 判定3-0】

やや見合う時間が長かったものの、和歌武蔵和樹（左）を圧倒して2回戦に進出した折橋謙。総合キャリアでは参加選手中随一だ。



○小阪俊二（ファイテングマスター）
vs 保坂忠広（フリー）✕
【2R 判定3-0】

元パンクラス・メガトンの保坂忠広も復帰出場したが、我龍真吾の愛弟子・小阪俊二に判定負け。ロボコンパンチは炸裂せず……。



○和歌嵐（手塚道場） vs
鈴木崇之（U-FILE CAMP）✕
【1R 37秒 KO（マウントポジションからのパウンド）】

パンチの衝撃に肉が歪む！ トーナメント第1試合は和歌嵐（左）がU-FILEの鈴木崇之を37秒TKOでド派手に幕を開けた。

新 卓球少女(似)松下ミワの ハガキ愛ランド

新年度から最新シリーズが始まりました! HIROYA vs 藤門嘩裟戦ばりに眞と五月がたいへんなことになるという噂だけは聞いていますが、ちょっとした噂だけでブログが炎上したりするので、そのへんはいつものように大人な対応をお願いします!! それでは今号もスタートしましょうー! 3、2、1、姑、姑、うー、嫁いびり!! (2ちゃんねる)。

kamipro121号へのお便り紹介

▼谷川さんのインタビューがよかったです。今回もハズレなしのおもしろさでしたね。選手に必要なのは人生のいつどこで輝くことができるかを自分自身で感じ取ることが重要だと述べるところが素晴らしいです。やはり、日本の格闘技界はサダハルンバがいるかぎり大丈夫だと安心しますよお!

【神奈川県・長瀬誠さん・会社員・41歳】

⬇ここまでのサダハルンバプッシュは最近では珍しい!「んあ~、嬉しいこと言ってくれるなあ(満面の笑みで)」ときっと喜んでくれるはずですよおおお。

桜庭和志インタビューは、ひさしぶりの『kamipro』登場でたいへん興味深かった。『PRIDE』と『HERO'S』の違いについて答えづらそうなところがおもしろかった。

【香川県・横山太郎さん・会社員・36歳】

⬇桜庭の登場は、なんとも2年ぶり。しかも、前回の登場がHGとの〝ハードゲイ対談〟というから凄い。

GKスペシャルプロレス探検隊がおもしろかった。永田兄弟の煽りVは今年のベスト煽りV大賞だと思います。あのVTRがまた見れるなら、弟の試合も我慢して観れます。

【埼玉県・石山雄紀さん・高校生・17歳】

⬇今号ではその煽りVの〝続き〟を掲載しております。存分にご堪能くださいませ。

「ガイジンさんいらっしゃい」特集のLUIZインタビューがおもしろかった。この選手は絶対にキ●●イです。カッターで傷つけるのはほかにいません。今後に期待しています。

【大阪府・三好万太郎さん・会社員・37歳】

⬇LUIZの取材を勧めてくれた青木真也は『kamipro Hand』のブログで「誌面になるとルイスの危険さは半分位しか伝わらないすな」と一言。本当はもっとクレイジーなんでしょう!

川尻さんのインタビューがよかった。「主催者推薦枠とか、全然納得いかないですよね」。この言葉は当然だと思う。

【兵庫県・阿田健太郎さん・大学生・21歳】

⬇実際、宇野選手が主催者推薦枠に決定いたしました。石田VS宇野には俄然注目が集まります。

キン肉マン〝変態〟座談会は僕も直撃世代です! ウルトラマン→仮面ライダー→石ノ森→永井豪→少年ジャンプ→ドリフ→ひょうきん族→プロ野球→プロレス(新日本)→ファミコン→UWF→K-1→総合格闘技……全部直撃です!

【愛知県・加藤達也さん・大工・38歳】

⬇〝変態〟世代に大ウケだったこの座談会。右に挙げてもらった項目も、いずれ〝変態〟座談会のテーマになるかもしれませんね~。

キンボ・スライスの記事がおもしろかったです。僕も『You Tube』で初めて観たときは衝撃でした。

【広島県・岡部怜央さん・学生・16歳】

⬇確かに、なんだかわからないけど凄い! あれはヤバインじゃないでしょうか。

『プロレス馬鹿一代記』の若林健治インタビューがよかった。僕が子どもの頃はプロレスが熱かったんです! 大一番の試合でどちらに付くかで派閥が生まれ、その結果によって自分のクラス内のポジションが決まってましたから。

【大阪府・山内義久さん・自遊業・39歳】

⬇そういう話は『kamipro』周辺の〝変態〟たちからいっぱいうかがっております。

金子賢のインタビューがよかった。『kamipro Hand』の連載コラムも興味深く読ませてもらっていますが、今回の本人の言葉には途中で何度も「え?」と思考がストップしました。ここにも〝底が丸見えの底なし沼〟があるのですね。

【栃木県・稲葉修さん・会社員・35歳】



⬇全編にわたってお読みいただきありがとうございます! ご本人のあまりのぶっちゃけぶりがたまりませんっ!!

才賀紀左衛門くんインタビューがおもしろかった。カワイイ顔して言いたい放題って感じで。K-1ワールドユースは単なるさわやか路線じゃないってことを藤門嘩裟くんとは違ったかたちで表わしています。この姿勢、非常にいいですね!!(掛布調)。

【神奈川県・廣木和宜さん・会社員・43歳】



⬇HIROYA vs 藤門嘩裟戦もいいですが、才賀紀左衛門 vs 藤門嘩裟も観たい! モンちゃんの毒舌と藤門嘩裟&加藤会長がどんなふうにバチバチやるのか、これは期待を上回るはず!!

「DREAM産みの苦しみ座談会」が興味深かった。成功とはいいがたいDREAMだからこそ続くように、試行錯誤と改良を繰り返してほしい。

【鹿児島県・井上憲一さん・中学教師・40歳】

⬇産みの苦しみは現在進行形!? 早く脱出してください~。

121号・おもしろかった記事ランキング

1位	キン肉マン“変態”座談会
2位	若林健治
3位	K-1ワールドユース特集
4位	金子賢
5位	キンボ・スライス

ミノワマンも交えて本格的に語ったキン肉マン“変態”座談会が堂々の1位に君臨~ッ。3位は一部で熱狂的ファンが増幅しているという噂のK-1ワールドユース全16ページ大特集!! ヒリヒリするボーイたちの攻防には目が離せませんよ! 『kamipro Hand』企画の出張板として掲載し、“ホンネ”がザックザックとこぼれ出た金子賢インタビューは4位という結果でした~。

kamipro Special 08年LATE SPRING おもしろかった記事ランキング

1位	佐藤大輔
2位	2.10大連立特集
3位	五味隆典
4位	ジョシュ・バーネット
5位	バック・トゥ・レスリング特集



3月中旬発売の『kamipro Special 2008 LATE SPRING』にもおハガキたくさんいただきました~。なんと第1位は煽りVアーティストの佐藤大輔インタビュー! 大連立後、煽りV作成における“苦悩”を語ったこのページは業界内外に大きな“波紋”を呼んだとか、呼ばないとか。そして2位にランクインしたのはプロレスの大連立を振り返った2.10大連立特集。30代後半世代にビンビン響いたようです~。3位&4位は巻頭の『戦極』大特集。はたして2発目となる有明コロシアム大会はどんな感じになるんでしょーか!?



神奈川県・亜衣さん➲『DREAM.2』ミドル級GPへの参戦が発表された桜庭。対するはアンドリュース・ナカハラに決定~ッ! どんな選手かいまだ不明ですが、名前の迫力はトップクラスです。

東京都・サカモトカズヤさん➲こちらは、同じく『DREAM.2』ミドル級GPで船木誠勝との対戦が決まった田村潔司。



緊急募集

若き有志たちよ、集まれ!!

"変態"ワールドユース大募集！

世の中には"変態"が足りない……。というわけで、ほぼ毎号行なわれ、4割打者級のヒットを重ねている"変態"座談会シリーズ。しかし、若き"変態"を育成せねば、この芽は途絶えてしまう！ そんな危機感を覚えた本誌では「我こそは正真正銘の"変態"である！」という若き有志を大募集〜ッ!! 現"変態"座談会メンバーが、真の"変態"であるかを厳しく審査する予定だ。UWFのみならず、新日本、PRIDE、K-1……どんな"変態"でも大歓迎。K-1ワールドユースばりに、大人顔負けの"変態"っぷりで殺しに来るべし!!

◇募集要項◇

「変態と私」というお題をもとに400字程度の文章で変態度をアピールしてください。また、課題とともに❶〜❹の項目を記入し、下記の宛先までお送りください。

❶お名前　❷年齢（※対象年齢は20歳以下です）
❸職業　❹住所＆電話番号

◇宛先◇

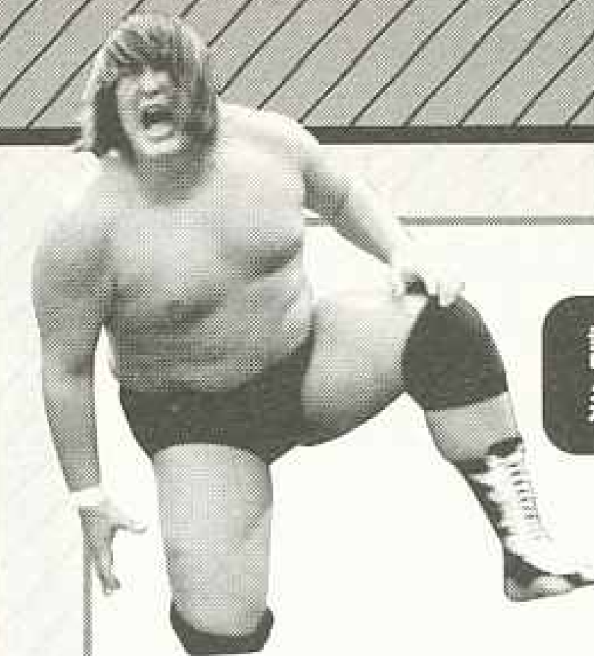
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ケ谷5-16-6 パレ・ジュノ2F
（株）ダブルクロス「"変態"係」まで！



福岡県・江本洋さん➡
ハガキの裏には「川尻達也」と書いてありましたが、ビックリするくらい川尻には見えません。



こちらも、HIROYAというより、前に『kamipro』編集部にいたすがさわくんみたいです。



読者ページのヒーロー
森嶋猛の大応援コーナー

紙の森嶋

さて、GHC王座獲得後、間髪入れずにグローバルタッグリーグ戦'08に参戦した森嶋。……しかし！ なんと初戦で森嶋&モハメドヨネ組が早くも脱落か!? 初っぱなな3月29日に対戦した力皇&秋山に無念の敗戦。2戦目となった4月6日の田上&潮崎戦では森嶋自らフォールを奪うなど挽回を図ったが、10日の高山&佐野戦では時間切れドローとなっている……。締め切りの都合上、このページではここまでしかお伝えできないので、あとは『週プロ』を読んでください！ ひとまず、残りの日程は下記のとおりです〜。

グローバルタッグリーグ戦'08における森嶋のスケジュール

4月13日	vs 三沢光晴&小川良成 in 博多スターレーン
4月15日	vs 佐々木健介&中嶋勝彦 in 熊本興南会館
4月20日	vs バイソン・スミス&斎藤彰俊 in 大阪府立体育会館第二競技場
4月23日	vs ディーロ・ブラウン&ブキャナン in Zepp Nagoya
4月27日	vs 丸藤正道&杉浦貴 in 日本武道館

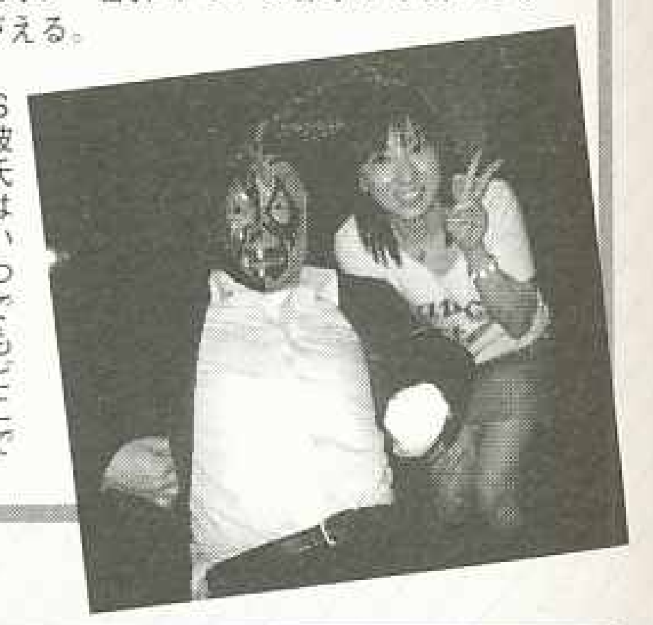
衝撃ショット!!

常連投稿者S波氏、またまた登場！ されど、これが涙のラスト投稿か!?



S波氏が一番弾けている様子が写真からうかがえる。

ご存知、常連投稿者のS波氏の写真をまたまた入手！ この日は女子プロ界のアイドル風香とRGと一緒に"暴れた"模様〜。しかも、この日の様子は風香のブログに二度にわたって掲載されているとのことで、風香のブログによると「仙波さんはブログチェックがひじょ〜に厳しくて、載せるたびに何度も苦情がくるんです（笑）」と指摘されていたりするのだった（掲載日は3月14日と16日）。しかし、このコーナーをおおいに盛り上げてくれたS波氏が、「もう、今後は投稿できないかもしれない」と何やら不穏な発言……。う〜ん、なんだかよくわからないので、今後も自由な投稿をお待ちしておりまーす！



S波氏はいつでもどこでもマスクを携帯している。

ザ・目撃!!

スクープ！

●今年の2月末に仕事で代々木に行ったとき、御社近くの某ヒグチドラッグでジャイ子さんらしき人物発見！ 普通に自転車で買い物にきていました。声をかければよかった！
【石川県・浅井清治さん・会社員・35歳】

●先日の金曜、酔っぱらいでごった返す中目黒周辺で柴田勝頼選手を発見しました。大きなボストンバッグを担いでいたので、おそらくトレーニングの帰りだったのかなと思ったしだいです。ちなみに、柴田選手に気づいていたのは僕だけだったみたいです。
【kamipro Hand投稿】



さあ、明るい未来への列車に乗ろう！

上井駅長の人生相談

さあ、駅長相談の時間がやってまいりました。今回は若い女性からのお悩みが届いているようですね。それでは今日も上井さんにズバッと答えていただきましょう！ それではスタート!!

友だちが占いにハマって困ってます

お悩みごと

■友人に関するお悩み
（宮崎県・匿名希望さん・20歳・学生・♀）

今日は友人のことで相談があります。じつはいま友だちが妙な占い師にハマって困っています。一番最初に連れていった張本人がこの私なので非常に責任を感じているのですが、そのときに言われたことが凄く当たっていたらしく、そこからのめり込むようになってしまいました。その占いもそんなに安い値段（1回2万円）ではないので、いつ借金し出すかも心配です。上井さん、こんな友だちを早めに救出するにはどうしたらいいでしょうか？

上井駅長

20歳の女の子の学生から僕に質問が来るの!? なーんで、僕みたいなおっさんに（笑）。しかし、のめり込んだらもう自分が気がつくまでダメ！ でも、これだけは言っておくけど、本物の占い師というか、そういう人はそんな高価な金額は取らないよ、絶対に。確かに世の中にいろんな現象があって、透視能力がある人もいるかもしれないけど、本物と言われる人は世の中に出てきてないですよ。僕も生年月日と名前だけでドンピシャ当てられた人がいて、凄いなあと思ってる人がいるけど、そういう人は実際に高価な生活もしてないし、清貧な生活をしているよね。だって、よく考えてよ。なぜそんな2万円も必要なの？ ね！

ただ、若いとハマるからねえ〜。僕だって一時期は精神世界を極めようと思って、そんな本ばっかり読んでたからね。だから「怒らないようにしましょう」とか書いてあると、「やっぱり怒りはいけないんだ」とか思ったりさ。

でも、本当は僕がこんなこと言える立場じゃないんですよ。だって、僕らが新日本プロレスをやってたときだって一緒じゃない。アントニオ猪木という人物にハマってたわけだから。いまでもそう。他人から見たら「バカだねえ、プロレスなんてもう時代じゃないのに」って思うかもしれない。でも、言ってもわからないんですよ、僕なんか。だから、やればいいんです。僕みたいにドツボにハマるまで！ ただ、2万円も取るのはおかしいということだよね。だから、アドバイスとしては「やめたほうがいいんじゃない？」ぐらいしか言えません。あとは本人次第！

匿名希望さん、おわかりになりましたでしょうか？「やめたほうがいい」とひそかに促しつつ、たとえご友人がドツボにハマっても、優しく見守ってあげてください。
※人生相談ドシドシ送ってください！ また、悩みが解決した人もぜひ結果をご報告ください!!

おハガキ募集!!

どんどんおハガキください！ ケータイからでもOK!!

ご意見、ご感想、苦情、抗議、お悩み、ダメだし、ほめ殺しなど、どんなことでもけっこう！ お便り、お待ちしています！

こんな情報お待ちしています！

●ザ・目撃!!
●おもしろ写真投稿
●選手に対するご意見、試合の感想
●その他、世の中に訴えたいことがあればなんでも!!

以上、すべてのお便り・イラストの宛て先&メールアドレスは
radical@kamipro.com
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ケ谷5・16・6
パレ・ジュノ2F
（株）ダブルクロス　kamipro編集部
「初期化」係まで。
携帯サイト『kamipro Hand』からの投稿もできます。

マット界の日程、そして情報をツープラトンで一網打尽!!

kamipro よろず情報局

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

Calender & Information

Fight & Event APRIL 4

3 SAT.
◆DRAGON GATE／山口・シーモール下関（18:00）
◆大日本／埼玉・桂スタジオ（15:00）
◆みちのく／岩手・IBCホール（14:00）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（15:00）
◆大分AMW／大分・セントレジャー城島高原（15:00&19:00）
◆MAKEHEN／東京・新木場1stRING（25:00）
◆修斗／東京・JCBホール（17:00）

4 SUN.
◆DRAGON GATE／兵庫・明石市立産業交流センター（17:00）
◆大日本／埼玉・桂スタジオ（17:00）
◆ユニオン／東京・北沢タウンホール（13:00&18:00）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（15:00）
◆大分AMW／大分・セントレジャー城島高原（15:00&19:00）
◆WAVE／大阪・デルフィンアリーナ（17:00）
◆風香祭り／東京・新木場1stRING（12:30）

5 MON.
◆新日本／東京・後楽園ホール（18:30）
◆DRAGON GATE／愛知・愛知県体育館（17:00）
◆大日本&El Dorado合同興行／埼玉・桂スタジオ（15:00）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（15:00）
◆大分AMW／大分・セントレジャー城島高原（15:00&19:00）
◆NEO／東京・後楽園ホール（12:00）

6 TUE.
◆大日本／大阪・IMPホール（13:00）
◆El Dorado／大阪・IMPホール（17:30）
◆DDT／東京・後楽園ホール（12:00）
◆マッスル／東京・後楽園ホール（19:00）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（15:00）
◆大分AMW／大分・セントレジャー城島高原（15:00&19:00）
◆JWP／東京・板橋区立グリーンホール（13:00）
◆NEO／東京・板橋区立グリーンホール（17:00）

8 THU.
◆メビウス／東京・新宿FACE（18:30）

9 FRI.
◆OZアカデミー／東京・新宿FACE（19:00）

10 SAT.
◆みちのく／岩手・一関市総合体育館（18:30）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（17:30&19:00）
◆武勇伝／大阪・IMPホール（17:30）
◆横浜／神奈川・横浜にぎわい座（19:00）
◆MARS／東京・新宿FACE（未定）
◆ジャガー&飛鳥プロデュース興行／東京・ディファ有明（18:30）

◆DRAGON GATE／広島・広島県立総合体育館（18:00）
◆大阪／大阪・デルフィンアリーナ（18:00）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（17:30&19:00）
◆全日本キック／東京・後楽園ホール（18:00）
◆センダイガールズ／宮城・エコキャンプみちのく（12:45）

27 SUN.
◆パンクラス／東京・ディファ有明（16:00）
◆新日本／大阪・大阪府立体育会館（16:00）
◆NOAH／東京・日本武道館（17:00）
◆DRAGON GATE／福岡・博多スターレーン（17:00）
◆大阪／大阪・デルフィンアリーナ（14:00）
◆みちのく／宮城・エコキャンプみちのく（13:45）
◆K-DOJO／愛知・刈谷市産業振興センター（17:00）
◆フーテン・プロ／神奈川・ラゾーナ川崎プラザソル（17:00）
◆VKF／大阪・アゼリア大正（15:00）
◆R.I.S.E.／東京・大森ゴールドジム（17:30）
◆WAVE／東京・新木場1stRING（18:00）

28 MON.
◆DRAGON GATE／長崎・ncc&スタジオ（18:30）
◆大日本／東京・後楽園ホール（19:00）

29 TUE.
◆DREAM／埼玉・さいたまスーパーアリーナ（16:00）
◆新日本／三重・桑名市体育館（16:00）
◆全日本／愛知・愛知県体育館（16:00）
◆DRAGON GATE／山口・下松市民体育館（18:00）
◆ZERO1・MAX／東京・後楽園ホール（18:30）
◆大日本／静岡・キラメッセぬまづ（13:00）
◆大阪／大阪・IMPホール（15:00）
◆NEO／東京・板橋グリーンホール（18:00）
◆JWP／東京・後楽園ホール（12:00）

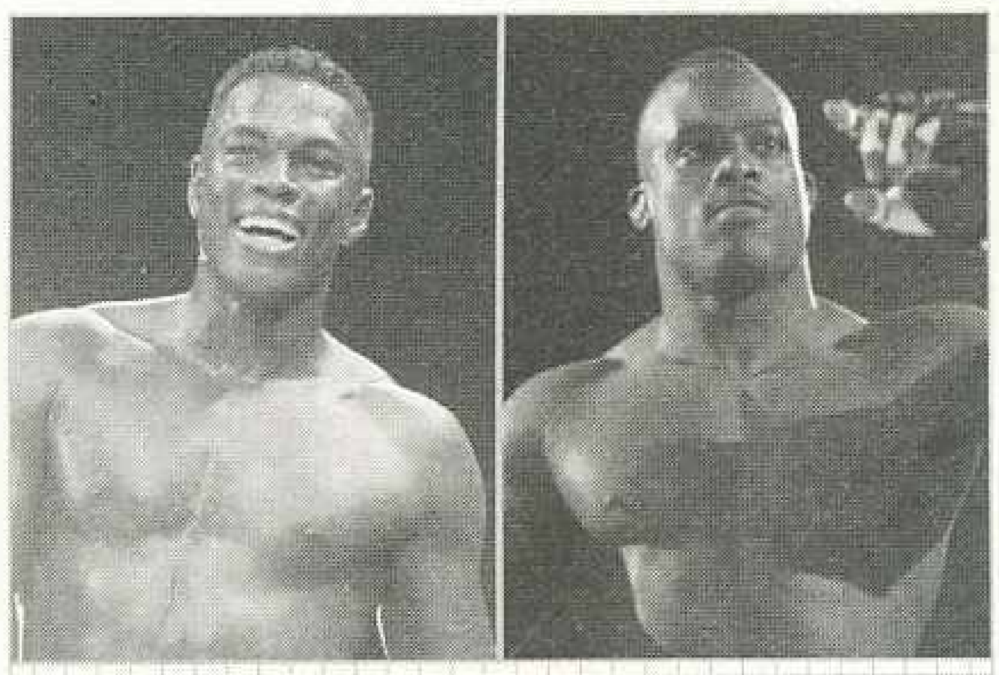
22 TUE.
◆新日本／大分・大分イベントホール（18:30）
◆NOAH／岐阜・恵那市民体育館（18:30）

23 WED.
◆全日本／愛媛・アイテムえひめ（18:30）
◆NOAH／愛知・Zepp Nagoya（18:30）
◆DDT／東京・新木場1stRING（19:30）

24 THU.
◆新日本／福岡・博多スターレーン（18:30）
◆全日本／香川・高松市総合体育館（18:30）
◆El Dorado／東京・後楽園ホール（19:00）

25 FRI.
◆新日本／福岡・博多スターレーン（18:30）
◆NOAH／石川・石川県産業展示館（18:30）
◆DRAGON GATE／兵庫・SITE KOBE（19:00）
◆チーム・ベイダー興行／東京・新木場1stRING（19:00）
◆NEO／愛知・日本ガイシスポーツプラザ（18:30）
◆SMACK GIRL／東京・後楽園ホール（19:00）

26 SAT.
好カードがオランダで実現！
ヨーロッパグランプリも開催!!



『K-1 WORLD GP 2008 IN AMSTERDAM EUROPE GP FINA』
オランダ アムステルダム、アムステルダムアリーナ

決定対戦カード
レミー・ボンヤスキー vs メルヴィン・マヌーフ
ヤン"ザ・ジャイアント"ノルキア vs ビヨン・ブレギー
ダグ・ヴィニー vs ザビット・サメドフ

◆全日本／広島・広島県立ふくやま産業交流館（18:30）

Fight & Event May 5

1 THU.
◆みちのく／岩手・久慈市第二体育館（18:30）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（19:00）

2 FRI.
◆新日本／東京・後楽園ホール（18:30）
◆みちのく／岩手・北上市文化交流センター（18:30）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（19:00）

決定対戦カード
【ライト級タイトルマッチ】
（王者）B.J.ペン vs ショーン・シャーク（挑戦者）
中村和裕 vs ソクジュ
ヴァンダレイ・シウバ vs キース・ジャーディン
ティト・オーティズ vs LYOTO

◆ハッスル／東京・有明コロシアム（17:00）
◆全日本／岡山・岡山県卸センター（18:30）
◆NOAH／宮城・仙台サンプラザホール（18:00）
◆DRAGON GATE／長野・松本やまびこドーム（18:00）
◆ハードヒット／東京・新木場1stRING（19:00）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（17:30&19:00）
◆DEEP／東京・新宿FACE（未定）

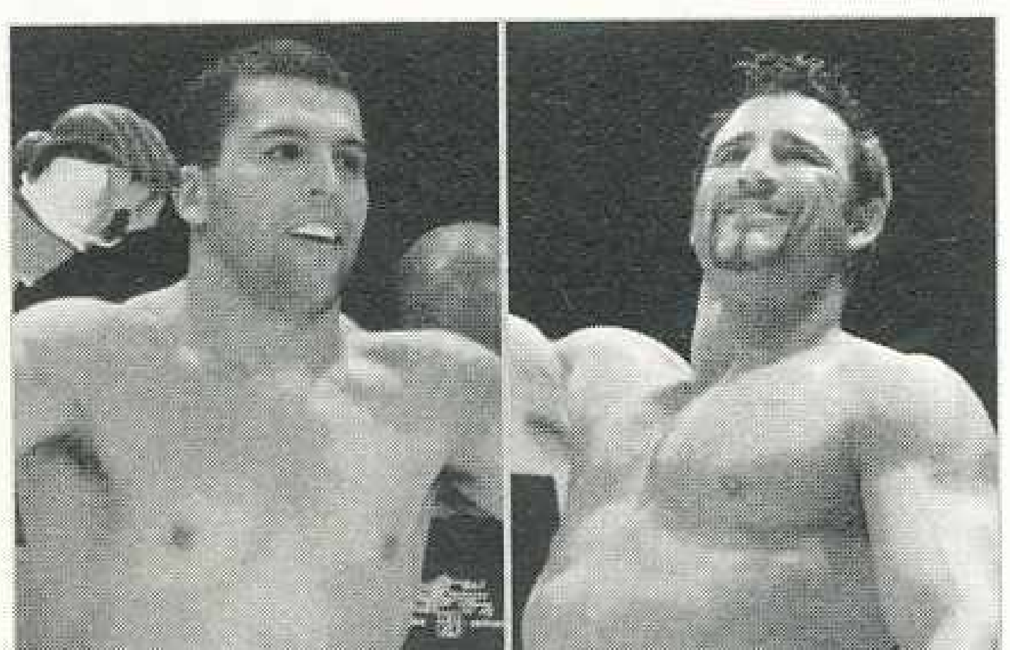
25 SUN.
◆全日本／兵庫・神戸サンボーホール（17:00）
◆DRAGON GATE／静岡・アクトシティ浜松（18:00）
◆大日本&El Dorado合同興行／愛知・中村スポーツセンター（12:00）
◆DDT／愛知・中村スポーツセンター（17:00）
◆IWAジャパン／東京・新宿FACE（12:00&18:30）
◆パンクラス／大阪・アゼリア大正（未定）
◆修斗／北海道・Zepp SAPPORO（15:00）
◆新日本キック／東京・後楽園ホール（未定）
◆WAVE／東京・新木場1stRING（18:00）

26 MON.
◆新日本／東京・Zepp Tokyo（19:00）
◆NOAH／青森・青森産業会館（18:30）

27 TUE.
◆新日本／東京・Zepp Tokyo（19:00）
◆NOAH／北海道・函館市民体育館（18:30）

30 FRI.
◆NOAH／北海道・釧路市コミュニティ体育館（18:00）

31 SAT.
キンボは誰と闘うの？
ニンジャとバローニが対決！



『CBS ELITEXC SATURDAY NIGHT FIGHTS』
米国ニュージャージー州、ニューアーク・プルデンシャルセンター

決定対戦カード
ムリーロ・ニンジャ vs フィル・バローニ
【EXCミドル級タイトルマッチ】
（王者）ロビー・ローラー vs スコット・スミス（挑戦者）
出場予定選手
キンボ・スライス

◆DRAGON GATE／兵庫・神戸サンボーホール（18:00）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（17:30&19:00）
◆全日本キック／東京・新宿FACE（18:00）

※主催者側の都合により、時間等変更する場合があります。あらかじめご了承ください。また、興行日程を一部割愛しております。詳細は各団体のホームページ等をご参照ください。

◆DRAGON GATE／東京・後楽園ホール（18:30）
◆DDT／東京・新木場1stRING（19:30）

15 THU.
◆新日本／大阪・Zepp Osaka（19:00）
◆NOAH／東京・後楽園ホール（18:30）
◆DRAGON GATE／栃木・古河市三和健康ふれあいスポーツセンター（18:30）

16 FRI.
◆新日本／愛知・Zepp Nagoya（19:00）
◆全日本／鳥取・鳥取県立産業体育館（18:30）
◆DRAGON GATE／神奈川・横浜赤レンガ倉庫（18:30）
◆佐々木貴自主興行／東京・新木場1stRING（19:30）

17 SAT.
◆全日本／福岡・中間市体育文化センター（18:00）
◆NOAH／東京・ディファ有明（18:00）
◆DRAGON GATE／愛知・刈谷市産業振興センターあいおいホール（18:00）

18 SUN.
◆戦極／東京・有明コロシアム（16:00）
◆全日本／福岡・アクロス福岡（18:00）
◆NOAH／茨城・つくばカピオ（17:00）
◆LOCK UP／東京・新木場1stRING（18:00）
◆DRAGON GATE／岡山・玉野市宇野港（15:00）
◆大日本／静岡・藤枝蓮華寺池広場（18:00）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（13:30&15:00）
◆JWP／東京・東京キネマ倶楽部（13:00）
◆修斗／広島・広島産業会館（15:00）
◆ZST／東京・ディファ有明（未定）

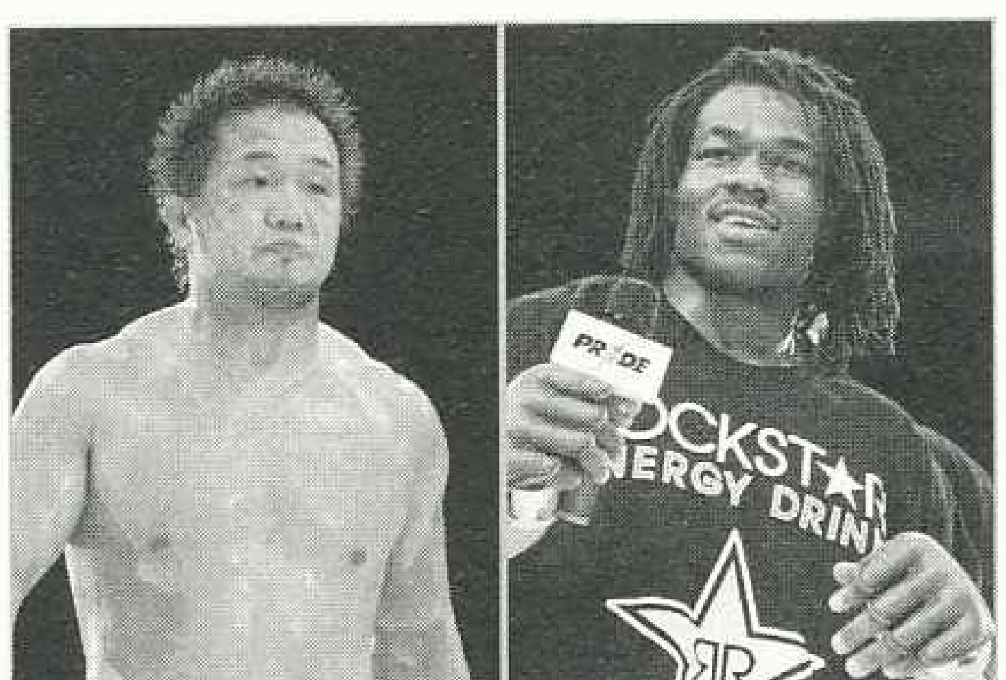
19 MON.
◆全日本／大分・大分イベントホール（18:30）
◆DEEP／東京・後楽園ホール（18:15）

20 TUE.
◆新日本／宮城・Zepp Sendai（19:00）
◆全日本／熊本・興南会館（18:30）

21 WED.
◆全日本／宮崎・佐土原中央体育館（18:30）
◆NOAH／富山・富山産業展示館（18:00）

23 FRI.
◆全日本／山口・柳井市体育館（18:30）
◆NOAH／新潟・新潟市体育館（18:30）
◆大日本／東京・後楽園ホール（19:00）
◆仙台女子／宮城・Zepp Sendai（19:00）

24 SAT.
カズとソクジュにシウバも参戦！
ライト級タイトルマッチ開催!!



『UFC84 ILL WILL』
米国ネバダ州ラスベガス、MGMグランドガーデン

11 SUN.
ベスト4に勝ち残るのは誰だ!?
DREAMライト級GP2回戦開催!!



『HEIWA DREAM.3 ライト級グランプリ2008 2ndROUND』
埼玉・さいたまスーパーアリーナ（16:00）

決定対戦カード
石田光洋 vs 宇野薫
川尻達也 vs ルイス・ブスカペ
ヨアキム・ハンセン vs エディ・アルバレス
出場予定選手
永田克彦
チケット料金
VIP=100,000円、RRS=30,000円、スタンドS=17,000、スタンドA=7,000円
◎問=DREAM事務局 03-5775-5065

◆全日本／東京・後楽園ホール（12:00）
◆NOAH／京都・福知山三段池公園総合体育館（17:00）
◆DRAGON GATE／石川・石川県産業展示館（17:00）
◆大阪／東京・新宿FACE（12:30）
◆R.I.S.E.／東京・ディファ有明（未定）

12 MON.
◆全日本／栃木・栃木県総合文化センター（18:30）
◆昭和／東京・後楽園ホール（19:00）

13 TUE.
親子の物語もクライマックスへ！
ボノちゃんはどこにたどり着くのか!?



『ハッスル・ハウスvol.36』
東京・後楽園ホール（19:00）

出場予定選手
高田総統、インリン様、ボノちゃん、川田利明、天龍源一郎、坂田亘、HG、RG
チケット料金
ハッスルVIP=10,000円、スタンドS=7,000円、スタンドA=5,000円、B=3,000円
◎ハッスルエンターテインメント 03-5464-1731

◆WAVE／東京・新木場1stRING（19:00）

14 WED.
◆全日本／新潟・長岡市厚生会館（18:30）



団体INDEX

50音順及び
アルファベット順

Dvd

寝技師たちのカーニバル!!
地上最高峰のテクニックを目に焼きつけろ!

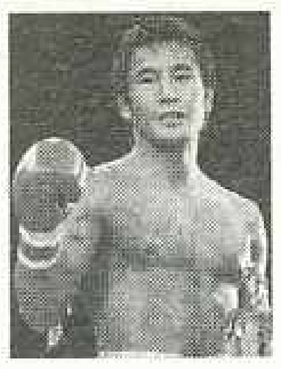


2007年5月5～6日に米国ニュージャージー州で行なわれた『アブダビ・コンバット・クラブ2007』がDVDで登場!! 日本でもおなじみのファブリシオ・ヴェウドゥム、ハニ・ヤヒーラ、バレット・ヨシダらも大活躍。マニアも大満足の合計600分の収録時間は見ごたえ充分！ 5.18『戦極 ～第二陣～』に参戦するホジャー・グレイシーも“北欧の巨人”ユノラフ・エイネモとのスーパーファイトで登場！ 日本デビューを前にDVDでその強さをチェキラッ!!

★「ADCC 2007 The 7th World Championship」(ビデオメーカー)
★定価13,440円(税込) 5月13日発売

Movie

世界王者の最強の演技!!
ゴールデンウィークは劇場で魔裟斗を見よ!!



ゴールデンウィークに“シルバーウルフ”が全国の映画館に登場！ K-1 WORLD MAX 2003王者の魔裟斗が日本コミックを原作とする香港映画『軍鶏 Shamo』で熱演！ 映画では主演のショーン・ユーが対戦を迫る“カリスマ空手家”菅原直人役を演じる。格闘シーンでは、気合いが入りすぎ、ショーンが「これ以上できない」と泣きを入れるほどのガチンコバトルを披露!! GWは日本&香港の才能が集結して製作したバイオレンス・アクションを堪能すべし!!

★『軍鶏 Shamo』(製作/アートポート+ポニーキャニオン)
★公開/5月3日新宿トーア他全国ロードショー ★HP/http://www.shamo-movie.jp

Gym

サクの公式ジムがオープン!!
時には厳しく、時には笑って楽しく強く!



「笑う門に福来る！」ついに桜庭和志の公式ジムが完成！“笑い声(laughter)”にラッキーナンバーを合わせた「laughter7(ラフターセブン)」が都内・品川区大森にオープン！ 86坪という広々としたスペースに、クリーンで最新のトレーニング機器を完備！ 桜庭和志をはじめ、浜中和宏、高橋渉、佐藤豪則といった歴戦のプロファイターが直接指導！ 格闘技を始めたい人は、キツい練習もサクと一緒に笑って乗りきれ!! (ニコニコ)

★「Laughter7」 ★HP/http://www.laughter7.com
★東京都品川区南大井6-3-8 ガーデニア大森2F ★問/03-6807-1770

Gym

格闘エリート一家の本拠地が完成!!
“神の子”の育て主がレスリング魂を全力注入!!



山本KID徳郁の父であり、ミュンヘン五輪レスリング代表の山本郁榮氏が都内・大田区中馬込に「ヤマモト・スポーツ・アカデミー(YSA)」をオープン！ もちろん“神の子”KID、レスリング世界選手権覇者の美憂&聖子姉妹も協力。フィットネスコース、チャイルドコース、そしてKIDが代表を務めるプロトレーニングコース(KRAZY BEE)でジム生を募集中! 天才アスリート揃いの山本イズムを継承し、マジヤバい(KID調で)ことになっちゃおう！

★「ヤマモト・スポーツ・アカデミー(YSA)」
★東京都大田区中馬込2-8-1-1F ★問/03-5742-29058

Book

“最強”よりも“最高”追求する
“インディー界の知恵者”高木三四郎の自伝が完成!!

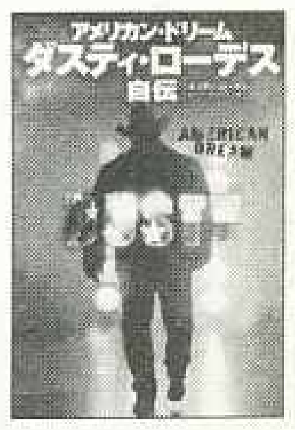


DDTのエースとして活躍しつつ、大会をプロデュースするインディープロレス界の頭脳・高木三四郎の自伝がサブカル系書籍でおなじみの太田出版から発売！混迷するマット界で文系的発想を武器に、次々に別ブランドの大会を成功させ、奇々怪々なレスラーを創出して注目を浴び、観客動員を増やし続けるその舞台裏を公開!! 衆議院選への出馬秘話やマッスル坂井との対談も収録! 時代の先を行く斬新な発想からプロレスの楽しみ方を学べ!!

★『俺たち文化系プロレス DDT』高木三四郎著(太田出版)
★定価1,575円(税込)発売中

Book

アメリカン・ドリームとは何か?
アメリカン・プロレスの権化ダスティ・ローデスの軌跡!!



1970～80年代にNWA世界ヘビー級王座に3度も輝いたダスティ・ローデスは、配管工を営む家庭から“アメリカンドリーム”をつかみ取った超一流レスラー。古くは全日本&新日本プロレスに来日し、04年にも親子で『ハッスル』に来日をはたすなど、いまでも現役ハツラツ！ 社会の厳しさにあえぐ諸君よ! リング上でショーマンシップの真髄を体現しつつ、リング外ではシビアなビジネス感覚を貫いたローデスから“成り上がり術”を学べッ!

★『ダスティ・ローデス自伝』ダスティ・ローデス&ハワード・ブロディ著
★定価2,520円(税込) 発売中(エンターブレイン)

Event

サイン会だ!! コラ、エーッ!!
友情でIWGPタッグを獲るんだエーッ!!



「もうリングに上がるのが怖い」と言い残し、昨年10月の後藤洋央紀戦後に長期欠場に入っていた天山広吉。今年の2.17両国大会で復帰するも、GBH軍に裏切られ、レジェンド軍にも集団リンチを受けるなど、救いのない状況に陥っていた。そこへ飯塚高史が手を差し伸べ、友情タッグが実現！ 4.27(日)大阪大会で真壁&矢野とのIWGPタッグ選手権を控える天山&飯塚が、前日にサイン会&撮影会を実施。オマエら、必ず来いよ！ ガッチャメラエーッ！

★「天山広吉&飯塚高史 サイン&撮影会」 ★開催日/4月26日(土)開始18:00
★場所/闘魂SHOP大阪店 ★問/06-6211-7805

Event

音楽とプロレスの融合!!
過激なハードコア集団がついに東京初進出!!



DVD&VJを導入し、音楽とハードコアプロレスの融合を掲げる広島発の『ダブプロレス』が、4.28広島、5.1東京 5.3大阪を回るゴールデンウィークツアー「fools on the club ～バカがクラブにやってくる～」を敢行!! 音楽が鳴り響くクラブで、有刺鉄線脚立を使った空中落下などの過激なスタイルで、地元広島で話題沸騰中!! 初進出となる東京大会は、リングを使わないお得意の“バックヤードスタイル”。汗、血、ビールが飛び散るイベントを体感セヨ!!

★『ダブプロレス』 ★公式ブログ/http://www.dove-pro.net
★問/dovepro-tokyo_nopain.nogain@hotmail.co.jp



KAMIPRO-COLUMN
コラム

イラスト◎師岡とおる

第30回

『ショーケン』は買ってすぐ読みました

花くまゆうさく リングの汁

先月は、後楽園での修斗観に行ったけど、二つのチャンピオンシップでそれぞれ勝ってほしい人（門脇英基、上田将勝）が二人とも勝ってチャンピオンになったのがうれしい。

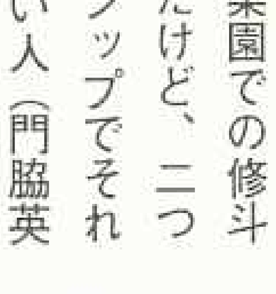
ひさびさ登場のバレットに圧勝した日沖発選手の強さも目立ったが、その日沖をルミナが指名して今後がおもしろくなってきた。日沖vsルミナの勝者が門脇に挑戦の流れになったらいいなぁ。

この日に試合した徹肌イ郎選手が、4・5『CAGE FORCE』にも出場し、一本勝ちしたこともうれしい。そのまま向こうのトーナメントでも活躍してほしい。

あと、メイン観てつくづく思ったのは、その先に攻撃があるラバーガードは観ておもしろいけれど、守るだけのラバーガードは観ていてつらい。守りとしては完璧だけど。

話題の『THE OUTSIDER』は観ていないが、真のリアル・THE OUTSIDER状態は、昔の修斗時代の高谷選手で充分観てる。後楽園での高谷vs日沖戦はリングサイドで観てたが、あんときは凄かったというかひどかったよね。怒鳴り声に囲まれて、鼓膜破れるんじゃないかと不安になった。リングサイドはカオスだった。あんときの日沖選手とセコンドの鈴木社長の姿は忘れられない。

先月も書いたけど、谷川P協力ならTBSも絡めそうなので、深夜にマッコイ斉藤演出で『THE OUTSIDER』をやればいいのにね。



先に『ショーケン』（萩原健一著／講談社）読んでいたから、みんな大絶賛な『ぼくの週プロ青春記』（小島和宏著／白夜書房）はまだ読んでないんだけど、いま少し冒頭読んだら、おもしろいわコレ。仕事やめて、このまま読みたくなってきた。みんな絶賛してるのも納得。プロレス観てた最後の時代の話だから、すんなり入っていける。シッシー編とか、安西グレイシー編とかそれぞれ各自が書いてシリーズにしてもおもしろいんじゃないかな（テキトーな提案）。

ブロディの奥さんの本も読みたくなってきたし、さっきロード・ウォリアーズのDVDはAMAZONで買っちゃった。

『週プロ』といえば、こないだ世界中で注目の映画『片腕マシンガール』初上映を観るために、北海道の『ゆうばりファンタスティック映画祭』に行ったら、最近テレビでプチブレイク中の安西グレイシーさんを目撃しました。目当ての映画はどれだったのかしら？

グレイシーといえば、『戦極』にホジャー来ますが、5・5浜松でやる『ヒクソン・グレイシー杯』にクロンも来ます。こないだも、『パン・アメリカン柔術選手権大会』でまた全試合一本勝ちで、完全優勝したクロン。いよいよ日本で試合が観れるのでたのしみ。



Hanakuma Yusaku
◎監督・脚本・撮影・編集した『人間爆弾』、ガンダーラ映画祭で4月上映中。

“男の憧れ”マサ斎藤の

GO FOR BROKE!

〜獄門記〜

No.2 親友ブラッド・レイガンズと築いた新日本黄金期

——マサさん！　今回もマサさんと往年の名レスラーの交流について、お話をうかがっていこうと思いますけど、ブラッド・レイガンズなんかはマサさんの盟友と言ってもいいんじゃないですか？

マサ　そうだね。彼とは試合もよくやったし、新日本では一緒に組んでビジネスもやったし、無二の親友っていってもいいヤツだな。

——もともとの出会いはAWAですか？

マサ　いや、最初はニューヨーク（WWF＝現WWE）よ。彼はアマチュア出身でAWAに入ったんだけど、ニューヨークが親父（ビンス・マクマホン・シニア）の時代は、AWAと交流があってね。俺もブラッドも何カ月かニューヨークで試合してた。そこで初めて会ったのかな。

——当時の彼はどんな人でしたか？

マサ　もの静かで、いるかいないかわかんないヤツだったよ（笑）。

——いるかいないかわからない（笑）。

マサ　真面目でさ、見た目どおりよ。アメリカの田舎の素朴な男って感じで、飲んで騒いだりもしないし。だから最初はそんな仲良くもなかった。

——マサさんとタイプが違いましたか（笑）。

マサ　でも、彼もアマチュアでオリンピックに行ってたから、共通点はあったんだよな。彼はアマチュアで凄く強くてね。大学時代は無敵で、モントリオール（76年）で4位かなんかで、モスクワでも代表だったんだよ。でも、モスクワオリンピックはアメリカがボイコットしたじゃない。だからブラッドはよくジョークで「アメリカ政府を訴える」って言ってたよ（笑）。

——訴えるですか？

マサ　「政府がボイコットなんかしなければ、金メダルを獲れていたから、俺も人生も違ってた」ってな（笑）。

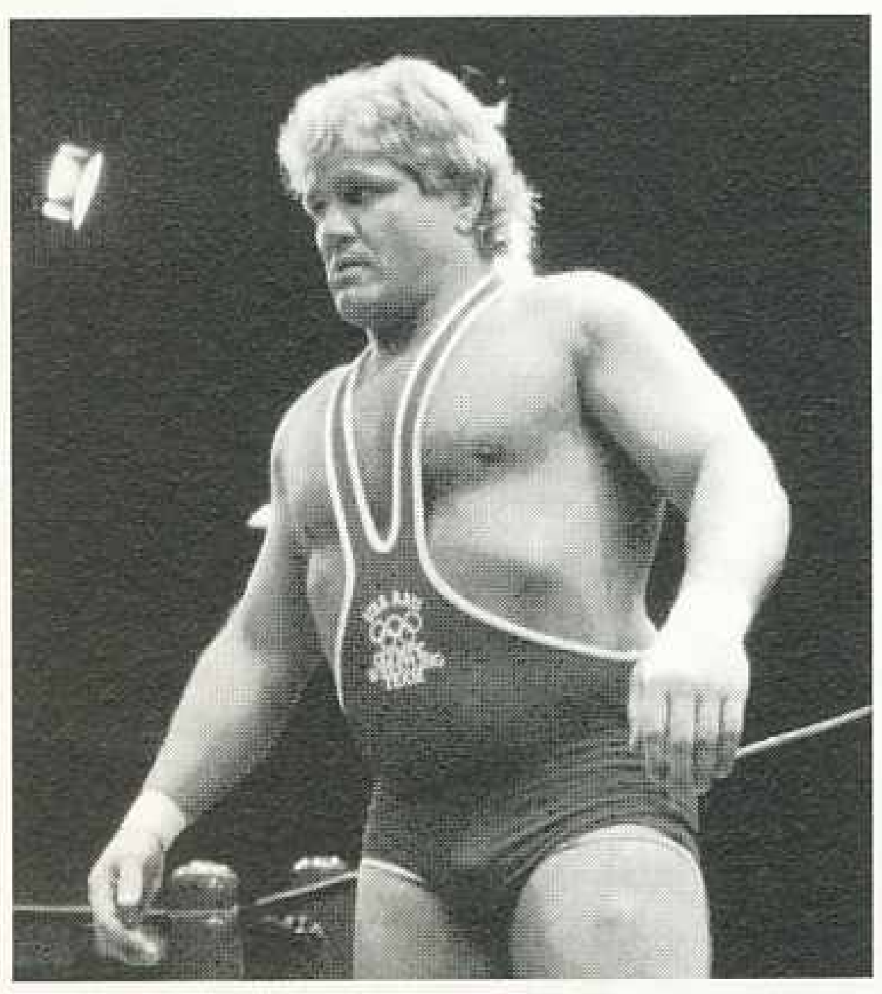
——へぇ〜、それぐらい強かったんでしょうね。

マサ　モントリオールが4位でしょ？　次のモスクワではメダル確実って言われてたらしいからね。体力も凄くてさ、あいつアマチュアの頃、ダン・ゲーブル（伝説的なアマレスラー、ミュンヘン金メダリスト）にシゴかれて、100キロ級なのに毎朝10マイル走ってたらしいよ。

——10マイルといったら、16キロぐらいですか。

マサ　朝から10マイルはねえよな。毎朝、ハーフマラソンやってるようなもんよ。

——体重100キロの人間としては、驚異的ですね。新日本では選手のブッキングなんかもやってたんですか？



プロレスラーとしてだけでなく、ブッカー、コーチとして、マサさんとともに90年代新日本黄金期を支えたブラッド・レイガンズ。ブロック・レスナーがUFC参戦前にコーチを受けるほど、シュートの実力にも定評がある。

マサ　そう、俺と組んでね。80年代末にソ連のレスラーが日本に来たとき、ブラッドと組もうと思って、俺がミネアポリスまで行って話をつけたんだよ。それで日本、アメリカ、ソ連の三国対抗戦をやるうえで、アメリカはブラッドに任せたんだ。

——ブラッドの人脈でレスリングができる選手を集めたわけですね。

マサ　それから90年代に入って、ブラッドにはいろんな選手を送ってもらったよ。いつも二人で金の卵を探してさ、ブラッドが目をつけた選手のテープを送ってきて、俺もイケると直感した連中を、彼の道場で日本でウケるプロレス教えてね。

スコット・ノートンとか、ドン・フライ、ブライアン・ジョンストンなんかは、みんなブラッドがプロレスを教えて、新日本に送り込んだんだよ。

——ほぉ、さすがに本格派揃いですね。

マサ　あと女子レスラーでボインのヤツ。

——ボイン？　ジョーニー・ローラーかメデューサですか？

マサ　違う違う。よく六本木に遊びに行ってたヤツだよ。

——私生活は知りませんよ（笑）。

マサ　いたろ。ぼよよ〜〜ん、ぼよよ〜〜んってヤツ。

——ああ！　レジー・ベネット。

マサ　そう！　あいつもブラッドが教えたレスラーよ。ブラッドはレスリング・スクールやってたからね。あとはナスティ・ボーイズなんかもそうだね。あいつらメチャクチャよ。

——ナスティ・ボーイズはメチャクチャっぽいですね（笑）。

マサ　ナスティは素行不良ってほどじゃないけど、飲むのが好きだよね。警察に捕まらない程度に騒ぐのがうまかった。一度さ、あいつらの片割れが一人、巡業中にどっかにいなくなっちゃったんだよ。ホームシックにかかって勝手にアメリカに帰ろうとしたんだよな。で、たぶん、成田空港にいるだろうってことで、成田まで探しに行ったら、空港のベンチで寝てんだよ。

——人騒がせですね（笑）。

マサ　ホントよ。それで帰国しようとした、そもそもの発端っていうのがさ、六本木の『ハードロック・カフェ』で飲んでるとき、フライドポテトを取った取らないでケンカになったっていうんだから、バカバカしいだろ（笑）。

——フライドポテトが原因で職場放棄ですか！（笑）。

マサ　ホント、子どもなんだよ（笑）。

——そういう手のかかる荒くれレスラーたちを、マサさんとブラッドで手なずけていたって凄いですね。

マサ　やっぱり、みんなブラッドの実力を知ってるから、怒らせたら怖いっていうのがあったんだよ。それに真面目で人がいいからボーイズに尊敬されていた。だから仕事はやりやすかったよね。そのブラッドと組んでやってた仕事が、どんどん大きくなって、WCWと仕事をするようになったんだよ。

——ああ、あれはブラッドとの仕事の延長でしたか。

マサ　もともとブラッドは、エリック・ビショフ（当時のWCW副社長）とハイスクールの友だちで、ブラッドがエリックを日本に連れてきたことで、新日本とWCWの交流はスタートしたんだよ。

——へぇ、そうだったんですか。

マサ　そのときは、サニー・オノオなんていう、へんなヤツもついてきててさ。あいつら遠慮して、ホテルはツインの部屋でいいとかいうんだよ。男同士で一緒に泊まるっていうから、「おまえら、もしかしてオカマか？」って聞いたのよ。

——そんな単刀直入に聞きましたか（笑）。

マサ　そんなの平気よ。だって男同士で一緒の部屋に泊まってたらおかしいじゃん。でも、そんなバカ話をしながらやってたら、交渉もうまくいって、新日本とWCWの交流が始まったんだよね。

——オカマ疑惑が結んだ縁でしたか（笑）。では、今月はこのへんで、次号も引き続き、90年代新日本プロレス黄金期のお話をお願いします！

Masa Saito◎60年代末〜80年代前半、アメリカン・プロレス黄金期を腕一本で渡り歩いたプロレスラーの中のプロレスラーにして、男の中の男。カルピスが大好きだがいまは甘いものを控えている。

ブッカーKの ぶっかけ! 格闘裏情報

第28回

私だけが知っている マウリシオ・ショーグン 大ブレイクのきっかけ

Booker K◎本名、川崎浩市。シュートボクセをはじめ世界各地の強豪外人を招致する敏腕ブッカー。

小路晃がいなければ、マウリシオ・ショーグンはいなかったのです……と、書いたところで唐突すぎるでしょうね。じつは二人のあいだには奇妙な因縁がありました。今回はそのエピソードをご紹介しましょう。

あれは2003年の9月のことです。アメリカでIFC主催によるワンデイトーナメントが行なわれました。優勝は8人で争われ、実力者レナート・ババルや、リングスで活躍したトム・サワー、パウロ・フィリオもエントリーしていたんですから、当時にしてはかなりハイレベルな舞台。そうそう、いまをときめくフォレスト・グリフィンもいました。

そのフィリオの相手に、日本からじつは小路選手の参戦が決定していたんです。ところが、10月に新ブランド『PRIDE武士道』がスタートを切ることになり、PRIDEからの熱心なオファーもあったことでその計画は立ち消えに。契約書にサインしたあとの変更。困った私は小路選手の代役をいろいろ思案した挙句、当時はまだグリーンボーイだったマウリシオ・ショーグンを推薦しました。当時はまだ88キロ。彼をそろそろPRIDEへ送り込もうということも考えていたので、その前にインターナショナルな舞台で経験を積ませておきたかったという狙いもあった。

いまでこそ整備されておりますが、当時の海外の試合は何が起こるかわかったもんじゃありません！　驚くなかれ、そのIFC、グローブは自前で用意しないといけなかったのですから……。そんな大会運営だったせいか、ショーグンの相手だったパウロ・フィリオはセコンドは来たのに本人は大会を急遽欠場。代役は柔術の世界チャンピオン、エリック・バンダレイに。試合は、スタンドで圧倒していたショーグンが、よせばいいのにエリックの庭であるグラウンドへ移行。ところが周囲の心配をよそに、寝技でも柔術世界王者相手を押しまくって勝利を収めたのです。

そうして駒を進めた2回戦。相手はレナート・ババル。1回戦と同じくスタンドでは主導権を握っていたショーグンでしたが、ババルにグラウンドに引きこまれ、フロント・チョークで一本負け。しかし、これはスタミナ切れの敗北であって、これがワンマッチなら……と期待を抱かせる内容でした。その証拠にこのトーナメントの闘いぶりを高く評価されたショーグンは、いよいよPRIDE行きの切符を手中に収めます。

このトーナメントがなかったら、小路選手が欠場しなかったら……。ショーグンのPRIDEデビューは遅れていたでしょう。あそこでしょっぱい試合をしていたら、声がかからなかったかもしれなかった。つまり、あのミドル級GPの優勝はなかったのかもしれないのです。いやあ、人生ってどこでどうなるかホントにわかりませんよ。

それから一ヵ月後の『PRIDE武士道』、ショーグンの相手は小路選手でした。



金ちゃんの どこまでやるの？

●第22回● いい試合をしよう！の巻

イラスト◎中川画伯

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中!
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

3・26パンクラスの後楽園大会で、パンクラスのミドル級チャンピオン、竹内出選手相手に1年ぶりに試合をしたんだけど、いや～、ひどい試合だったよ(苦笑)。

応援に来てくれた皆さんに申し訳ない気持ちでいっぱいだったよ。

1ラウンドはともかく、2ラウンドと3ラウンドは、ずっとコーナーで膠着する展開が続いちゃってね。観に来てくれた知り合いの人に、試合後、「俺は相撲を観に来たんじゃねぇ!」って言われちゃってさ(笑)。ホントに押し相撲やってるだけみたいな展開になっちゃったからね。やっぱり竹内選手はチャンピオンだけあって、力が強かった。それでもなんとか動いて展開を作りたかったんだけどさ、それができずに申し訳ない気持ちでいっぱいですよ。

俺なんかUWFインター出身で、自分から攻めて試合を展開させるっていうことを、デビュー当時から叩き込まれてるからさ、判定負けっていう結果以上に、自分自身が不完全燃焼で、ガックリきたよ。

ただ、最近思うのはさ、昨今、格闘技界はファンも減ってきちゃって、大変な時期なわけじゃん？　今回の後楽園ホールもちょっと寂しい入りだったしさ。こういう厳しい時代こそ、全選手がKO、一本を狙いにいく試合を心がけて闘わないと、どんどんお客さん来なくなっちゃうよ。

だって、膠着するだけの試合なんて、お金払って観たいと思わないでしょう。やっぱり俺たちはお金を取って試合を見せてるんだから、お客さんがワクワクして盛り上がれる試合をしないとダメだよね。

格闘技の会場に、お客さんがなかなか来なくなった原因っていろいろあると思うけど、やっぱりその原因の一端は俺たち選手にあると思うんだよね。俺も含めて選手は、勝つことは一番大事だけど、KO、一本を狙う試合をいまこそ目指さないと、格闘技自体が廃れてしまうよ。

選手って満員のお客さんの前で試合したいもんだし、満員の盛り上がった会場だったら、より力も出るしね。それが、この前みたいな試合をしてたら、知り合いなんかにも「また観に来て」って言いづらいよね。そういうのが悲しくて。申し訳ありませんでしたって、謝るしかないよね。

このあいだの試合は、俺も相手に膠着させずに極める力があればよかったわけだから、そこは凄く反省してるし、もっと頑張らなきゃいけないな、と思うんだけどね。

UFCなんかでもさ、つまらない試合をする選手は、すぐにクビになるって言うじゃん。PRIDEだって、つまらない試合をしたら呼ばれなくなるから、とくにガイジンなんてアグレッシブに闘って、名勝負だって生まれてきたわけでしょ？　プロの格闘技はそうじゃなきゃダメだよね。

俺は何もノーガードの打ち合いや、ディフェンスを考えない極め合いをしろと言ってるわけじゃないんだよ。そんなのプロじゃないからね。でも、格闘技に限らず、プロ野球なんかだってそうじゃん。4番バッターを毎回敬遠してたら、誰も観なくなるでしょ？　プロってそういうもんだと思うけどな。

だから格闘技界には、いまこそ宮戸(優光)さんが必要だよね(笑)。Uインターの頃、宮戸さんに「いい試合をしろ!!」って、さんざん言われたからね。それで自分ではいい試合をしたつもりでも、控室に帰ると「しょっぱい!」ってダメ出しだから(笑)。

今回の試合なんて、宮戸さんが観てたら、どれだけダメ出しされるか……。だから、俺もなんとか次は、いい試合をして、そして勝たないとね。そうじゃなきゃ、ホントに応援してくれるファンの人たちに申し訳ないよ。



kamipro Handで好評連載中!!

ゴー・フォー・ブログ！日刊マッスル坂井

〜僕の人生を変えた立川談志〜

日曜日（3月9日）に録画しておいたNHK・BSハイビジョン『立川談志きょうはまるごと10時間スペシャル』を観る。その名のとおり10時間まるごと立川談志なのだ。

NHKにある膨大なアーカイブの中から厳選された落語の数々、談志ファンの著名人や弟子たちによる座談会、福田和也氏によるロングインタビュー、NHKでここ何年かで制作されたドキュメンタリー番組や完全録り下ろしの古典落語「居残り佐平次」とそのメイキング映像（これは去年までに放送されたドキュメンタリーの続編になっている）。それだけでも超ボリューム満点だというのになぜかTBSで放送された『情熱大陸』（談志と志の輔の親子会に密着したもの）まで一本まるまる入っているのだ！

10時間ぶっ続けで観るとは思わなかったけど、本当に最後まで観続けてしまった。「ちょっとは仕事しろよ！」って感じだけど、あんなのを観せられたら何もできやしない。寝るのも忘れて観た。画面から、談志から目をそらすことができなかった。

大学生だったとき、落語にハマったことがあった。ちなみにプロレスを観始めたのも同じ頃だ。

学生時代は漠然と映画監督になりたいと思っていたが、映画を観ることには完全に飽きてしまっていた。その代わりに落語とプロレスを観るようになった。アニマル浜口ジムに行って、その帰りに浅草演芸ホールに通った。

演芸ホールの昼の部で柳家小三治を見て、その後、プロレスラーを目指す青年たちに囲まれてひたすらスクワットや腕立て伏せをやる。なんだかよくわからないが、充実してんだかしてないんだかよくわからない日々をすごしていた。

よくわからなさで言えば、いまも負けてないが、いま以上に何者でもなかった当時はそれなりに焦ってただろうし、それなりに必死だった、はずだ。

そんな中で観た立川談志の独演会は超衝撃的だった。こんな凄い人が世の中にいるのかと思った。あのとき聞いた「粗忽長屋」は確実に僕の人生を変えた。

だからその後、いろいろあって高木三四郎さんと出会ってプロレスの世界に入ってなかったら、ひょっとして芸人か落語家を目指していたかもしれない。その可能性は非常に大きい。

ここ数年間、すっかり落語を聞くことがなくなったが、やっぱり落語は凄い。いや立川談志が凄い。

10時間の番組の中で映し出される立川談志のすべてが落語なのだ。人生のすべてが落語なのだ。

「落語とは人間の業の肯定である」や「人生と落語の一体化」といった立川談志の有名な言葉があるけれど、それを実践することがどれだけしんどいことかが、残酷なまでに、ありのままに描かれている。地獄絵図だ。

高座で「芝浜」が飛んでしまったとこなんか、どこの動画サイトの衝撃映像よりも目を背けたくなる残酷な映像だった。

「談志のは落語じゃない」とか言う人がいるけど全員順番に殴り倒したい。落語かどうかなんて落語家が考えればいいことで、こっちは笑えりゃいいのだ。惚れられればいいのだ。そういうことを、いつになっても言い続けるわかんない奴らがいるから夜も眠れないんだ。

落語家である前に立川談志でいなければいけないことはつらいだろうなあ。睡眠薬と安定剤を飲んで布団に横になるけど、結局寝れなくて机に向って落語の勉強をしてしまう。

苦悩の原因が落語なのに、落語しか救われるものがない。

ああ、こんなに長く書くんだったら、もうすぐ締め切りの『Gリング』のコラムをこれにすればよかった。

こんなことというの恥ずかしいけど本当に感動した。70歳をすぎてもあんなに闘えるんだな。



撮影／平工幸雄

落語好きが高じてか、07年1月3日の『マッスル・ハウス3』では大会中に後楽園に『笑点』ならぬ『頂点』のセットを組み、実際に大喜利を行なったことも。坂井はガチンコお笑いイベント「ダイナマイト関西」や、3月30日に行なわれた吉本芸人プロレス『GOKKO』でも大喜利の強さを発揮している。

今回の原稿は3月19日に『kamipro Hand』にて掲載されたモノを再掲載したものです。なお、現在『kamipro Hand』にて好評連載中の「ゴー・フォー・ブログ！日刊マッスル坂井」は『kamipro』のウェブサイト『kamipro.com』に移行し、さらにパワーアップ＆リニューアルして近日スタート予定です。こちらもお楽しみに！ 3、2、1、マッスル！マッスル！

椎名基樹のサムライ二味

第25回

プロレス史上最強の武闘派

引っ越しをして1ヵ月あまり経つが、まったく片付かない。いまだにダンボールの摩天楼の中に暮らしている。それもこれもガラクタ収拾癖のせーで、どーでもいいフィギュアやらCDやら書籍やらが整理しきれぬほどに散乱。埃っぽいっしカビ臭いし、鼻がムズムズしっ放しだし、いいかげん、健康にも悪いと思うのだが、捨てる勇気がない。

書籍といっても大半は漫画とプロレス&格闘技本という低知能丸出しのコレクション。肉体労働を最後にしたのはきっとはるか昔15年以上前の引っ越しのバイトだったろうか。本の整理をしようにもまったくはかどらぬ。それどころか、ついつい整理途中の本を読みふけってしまうのは、よくある話。

バーリ・トゥードが始まった初期の特別本が予想以上に多い。当時、自分がのめり込んでいたことをあらためて実感。

安生洋二がヒクソン道場破りを語るインタビューなど興味深く読む。その中でプロレスラーになる前に安生が、レスラーになるなら自分の住む街の人間くらいは全員倒さなければならないと決意し、たまり場に行っては、「この中でオレと闘ってくれる人?」と無差別にケンカを売っていた時期があり、一度も負けたことがなかったと語っていて、やっぱ安生はおっかねえなと、遠くを見つめる茶色懸かった無表情な目の彼の写真と合わせて、思う。

あらためて考えれば、ヒクソン道場破り、前田日明殴打と、安生がしでかした蛮行は、他の追随を許さない、イリーガル度。プロレス史上最凶の武闘派として、のちのち、おおいに語られるに違いない。

前記したように、引っ越しから1ヵ月あまり経つのだが、いまだにテレビもつながっていない。元来のものぐさに合わせて、ダンボールの摩天楼のせいであるのだが、よって大好きなサムライTVも、WOWOWのボクシング中継も、K―1の放送もまったく観ることができない。

スポーツ新聞だけは、毎日届けられており、それが唯一の格闘技のニュースソース。気になるのは、やはり紛糾しているDREAMのライト級トーナメント。

1回戦を闘っていない宇野薫らに、川尻、石田が不快感を表わしているとか。川尻、石田の主張は当然であるが、言われる宇野もまたかわいそうな印象。選手にこんなことを言わせてしまうのは、ひとえに主催者の責任。興行にまったくプラスにならぬ舌戦だ。



プロレスラーになる前は無差別にケンカを売っていた時期があるという、まさに"アウトサイダー"な安生。上の写真は1999年11月14日に開催された『UFC―J』の会場内で前田日明を急襲したあと、パンクラスの高橋義生（現・和生）と満面の笑みで握手を交わす安生。たしかに、プロレス史上最凶の武闘派と言えるかもしれない。

そもそもトーナメントなどは、機が熟してからやるもので、興行の運営面でも競技を統括するコミッションの面でも、これから作り上げる段階であるのに、どーしてトーナメントなどやったのだろう?

DREAMつーくらいで、ワンマッチでいくらでも夢のカードが組めるメンバーが揃っているというのに。旗揚げ興行の失敗は、トーナメントであるがために、次に進みたい選手が、負けたくない闘いを強いられたからではないか?

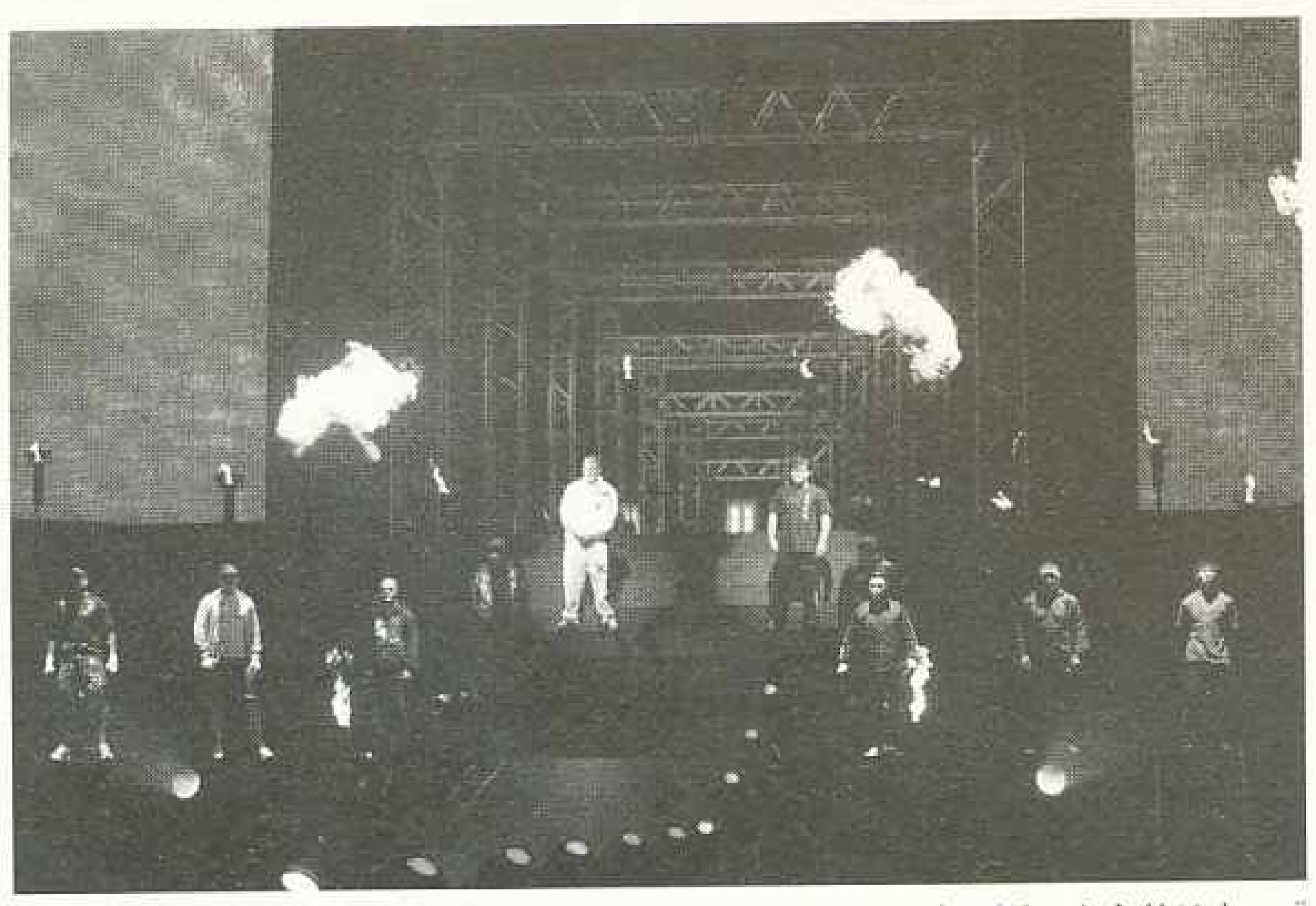
青木vsカルバンもトーナメントじゃなかったら、青木もあの場で闘う気になったのではないか? と邪推してしまう。

結局、青木vsカルバンの裁定は没収試合となり4・29『DREAM・2』で再戦。「カルバンは反則とも言えない微妙なもの」と笹原氏。いったいどーゆー意味だろう? 本誌・前号で笹原氏の「競技的な判断がある一方で、ファンの人たちのモヤモヤした気持ちもあるわけですからね。そこは充分に理解しています。だから、その両方が成り立つかたちで結論を出したいなと思います。どんな結論を出すにせよ、すべてのことにしっかりと向き合って、その判断には責任を負いたいと思ってますし」という言葉を読んで、これからまた、不測の事態が発生→不可解な中断→不可解な裁定という、日本格闘技のお家芸が繰り返されていくことを確信。「すべてのことに向き合って」の「すべて」とはいったい何を指すのだろう? ただ耳障りだけが良い言葉。ファンをバカだと思っているのか? あまりにもイケシャーシャーな感じがするのだが……。よくそんなこと言えるな、と。

KIDにしたってワンマッチなら、植松でもいいしトイカツでもいいし、佐藤ルミナなら最高だし（勝田のカタキ討ち!）、門脇でもいいし高谷でもいいし、いくらだってあると思うのだが。

それにしても、どーしていつも日本の格闘技界はややっこしいのだろう? 前号・本誌のダナ・ホワイトの「日本のテレビ業界とMMAビジネスには、妙な力が働きすぎている。いいかこれを腐敗と言うんだよ」つーのは、まさにそのとおり! とにかくUFCの日本での放送を熱望。もしかして、この件にも日本の格闘技界の妙な力が働いてる?（←疑心暗鬼）。

【PS】先月号で『戦極』のナレーターは『ダウンタウンの24時間笑っていけない病院』で「板尾創路のブラックジャック!」と叫んでいた人なのか? と書いたところ、「その声は板尾創路さん本人ではないか?」とご指摘受けました。そー言われるとそんな気がします。ご指摘ありがとうございました。

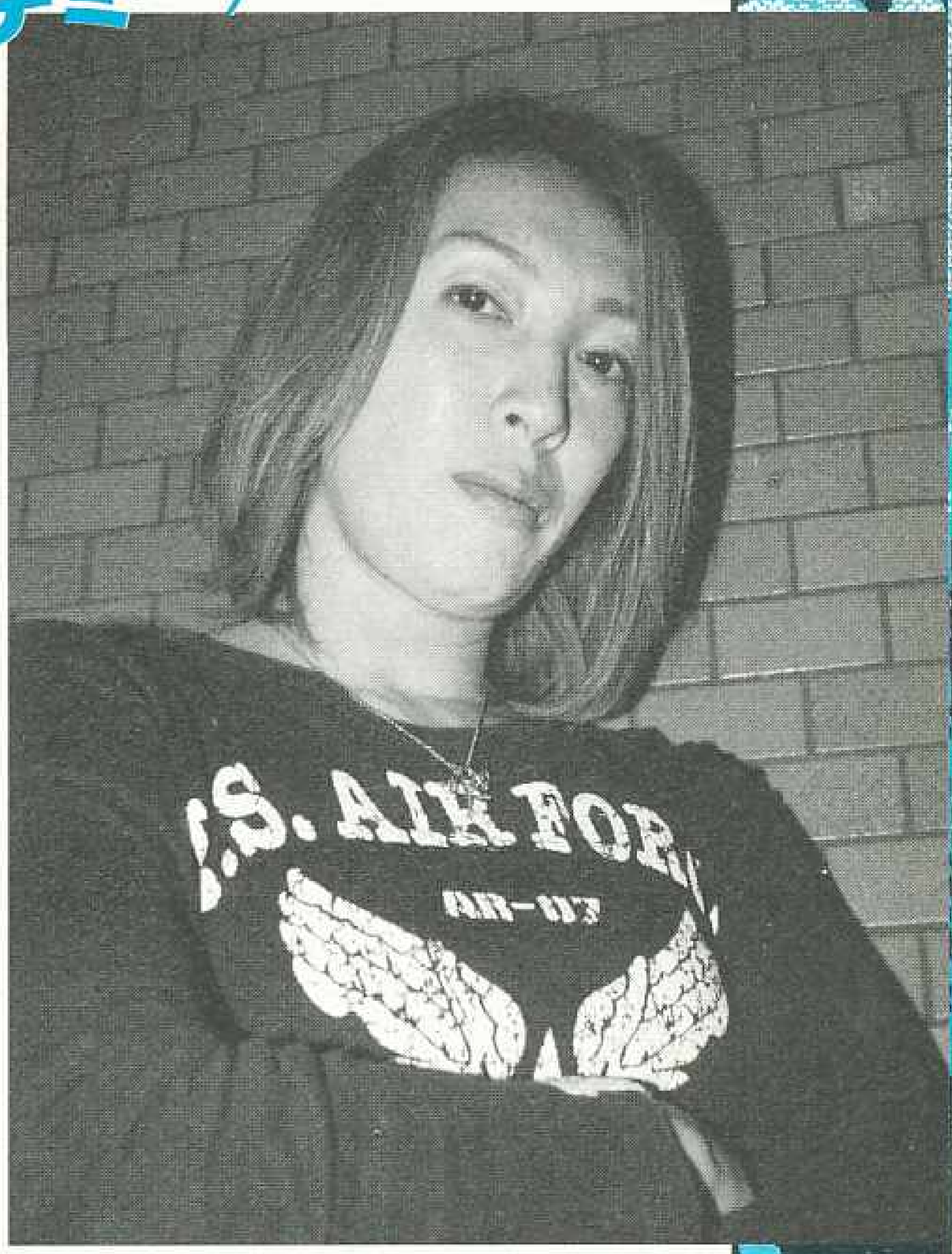


まさに"戦国"といった感じの大会演出だった3.5『戦極』旗揚げ戦。大会前はウェブ上での『戦極』ブログにて「遠い宇宙からあの声が降臨する」と関係者が意味深に予告していたが、その正体は、すでに皆さんもご存知のとおり『ガンダム』のシャア役の声優、池田秀一さんだった。5.18有明大会はどうなる?

イナズマKのハードコアドージョー Special

痛みは快感!? 女子のハードコア道！

女子デスマッチファイターの先駆者が登場
尾崎魔弓（OZアカデミー）



おざき・まゆみ■本名は尾崎まゆみ。1968年10月28日生まれ。86年、ジャパン女子プロレスにてデビュー。ヒールユニットGUREN隊の一員として活躍。92年からはJWPに所属し、JWP認定ジュニアチャンピオンをはじめ、数々のタイトルを獲得。96年にOZアカデミーを結成97年からはフリーとしてGAEA JAPANを中心に試合に出場。現在はOZアカデミー自主興行を定期開催するかたわら、他団体のマットにも積極的に参戦。「愛され嫌われるヒール」として正統派ファイトからハードコアマッチまでこなす、女子プロ界のビッグネーム。身長158cm、53kg。

1986年のデビュー当初から、20年以上という長きにわたり一貫してヒールの道を突き進む尾崎魔弓。今回は女子プロレス界屈指のデスマッチファイターでもある尾崎のハードコアな側面にズームイン！

ハードコア列伝1 恐怖！ 後頭部に穴が!?

まずは尾崎がヒール道へ足を踏み入れたきっかけに耳を傾けた。「ある日、当時コーチだったグラン浜田さんから『明日からヒールになれ』って言われたんだ。でも、もともとはクラッシュギャルスに憧れてプロレスに入ったから最初の頃は嫌々だったな」と意外な秘話を披露。

そんな彼女の大きな転機となったのは風間ルミとのタイトルマッチ。「勝ってベルトを巻いたときに『もしベビーだったら私はまだチャンピオンになれてなかった』って考えたら気が楽になったんだ」と当時を振り返る。

ヒールの醍醐味に気づいた尾崎は、「キューティー（鈴木）とライバル関係になって、ファンの〝やめろ尾崎！〟って罵声を聞くのが快感になってきたね。フフフフ」と、完全にヒールの才能を開花。その魅力に取り憑かれていく。そんな尾崎のデスマッチ初体験はJWPでダイナマイト関西と行なったドレスアップワイルドファイト（JWP版ストリートファイト・デスマッチ）。「この一戦で私の違った一面が出たね。普通のプロレスとは違う快感があった」と、そのときの衝撃を語る。

そして、97年4月18日にはFMWで引退間近の〝邪道姫〟工藤めぐみと〝ノーロープ有刺鉄線バリケードマットダブルヘルデスマッチ〟で対戦。「工藤が引退したら有刺鉄線マッチをやる機会が一生ないと思ったから絶対にやりたかった。そこでまた違うおもしろさに目覚めたね」と尾崎は感慨深げな表情を見せる。

有刺鉄線に対しては「確かに怖さはあった。でも、傷つかないようなフル装備で出ていくのはカッコ悪いと思って、Tシャツを短く切りこんで意気込みを見せたんだ。そこはプライドだね」と、そのプロとしての美学を語る。試合の感想としては「初めての痛みに衝撃を受けたね。場外の有刺鉄線バリケードに頭から落ちて、後頭部にブツっと穴が開いたのもわかった」と、その恐怖体験を告白！ しかし「そりゃ未知の痛みっだたけど、それが次第に快感に変わってったんだよね（笑）」と豪快に笑い飛ばす尾崎、まさにデスマッチファイターの鏡だ！

ハードコア列伝2 蛍光灯デスマッチに開眼!!

さて、次なるデスマッチアイテムとの遭遇は蛍光灯だ。05年3月25日の長与千種プロデュース興行では、長与&高木三四郎&伊東竜二組vs尾崎&シャドウWX&アブドーラ小林組というミックスタッグで〝1000メートル有刺鉄線&100本蛍光灯トルネード6人タッグデスマッチ〟というムチャな試合を敢行！

「日常生活で、蛍光灯で頭殴られることはまずないだろ（笑）。2、3日後に蛍光灯の破片が頭から出てきてビックリだよ。でも試合はもの凄く興奮して、人生こんな楽しいことがあるんだって思ったな」と、なんとも〝らしい〟コメントが飛び出した。

そして、06年6月4日にはアブドーラ小林と組み、いまやデスマッチファイターとして第一線で闘う宮本裕向と木村響子の、初の蛍光灯デスマッチの対戦相手として胸を貸すかたちで大日本プロレスに参戦。

試合では堂々としたファイトを見せた尾崎だったが「普通のプロレスも命懸けだけど、デスマッチは世の中的にさらに否定される存在だから成立させるのが難しい。大日本の選手と一緒にやらせてもらって、いままで楽しくておもしろいとだけ思ってた自分が恥ずかしくなった。これは真剣にやらないとなって思ったよ」と、蛍光灯デスマッチのさらなる奥深さを痛感。

その試合で尾崎は頭から大流血となったが「あれは木村に蛍光灯で叩かれて、パックリいったんだ。試合のあと、レフェリーの（李）日韓ちゃんに見てもらったら『あー、これなら縫わなくて大丈夫です』だってさ（笑）。スゲーと思ったよ。これを常にやってる大日本の選手は、ほんと尊敬するよ」と、ますます蛍光灯に興味をつのらせていくのであった。

ハードコア列伝3 観客も凶器持ち込みアリ!?

あまり知られていない事実だが、尾崎は06年11月3日、アメリカ・インディアナ州で、マッドマン・ポンドらが所属するIWAミッドサウスが行なった、世界初の女子オンリーのデスマッチトーナメントにも参戦している。

「会場に着いてトーナメントだって聞いたんだよ（笑）。1回戦はチェーンデスマッチ、準決勝はオカマキャラの男と、やぐら型の蛍光灯デスマッチで試合して勝った。結局、決勝で負けちゃったんだけどさ。最後、リング上にはお客さんが持ち込んだへんな凶器が歩けないくらいバーッて置いてあった（笑）」となんと観客が〝凶器持ち込み自由〟だったことを告白！

「丸い蛍光灯に画鋲がついてたり、どうやって使うんだって感じだったな（笑）」と、異国の地での異様なデスマッチ体験を語ってくれた。

さて、きたる5月4日に日本初の女子だけのデスマッチ&ハードコア大会『ハードコアレディース～退かない女たち～』が開催されるが、女子デスマッチファイターの先駆者である尾崎はもちろん参戦。

「どうしても、男子の興行で女子がデスマッチやると、オマケ的に見られちゃう。男がいないとできないとかね。それを女子だけで成功させれば、女子でもこんなにできるんだって世間にアピールできるし。女子でデスマッチやりたい人には願ったりかなったりだしね。いろんな面でプラスの興行だと思う」と、成功への意気込みを語る。

さらには、「今度またデスマッチ大会をやるなら私がプロデュースしたいね」と、次なる女子デスマッチ大会への意欲も話してくれた。尾崎魔弓のデスマッチへの情熱は、これからも炎上していきそうだ！



トレードマークの赤と銀のツートンカラーのチェーンで、相手の首を締めつけていく尾崎。5月4日の『ハードコアレディース』では有刺鉄線ボードマッチに挑む！



イラスト◎ゴローちゃん

う〜ん、ハッスル、ハッスル！（感慨深げに）。『ハッスル1』の解説でガンバリすぎてしばらく出禁っぽくなっていた掟ポルシェが、ついにハッスル女子レスラーを雪解け萌え直撃！　今月のゲストは舌ッ足らずな独特トークと脇澤美穂系のルックスにファン急増中の＼(^o^)／（バンザイ）チエ選手！　ダウナー系山瀬まみみたいな口調に脳内変換して読んでください！

掟　長与千種さんに憧れてガイアの入団テストを受けたこともあったとか？

＼(^o^)／チエ（以下・チエ）　はぁい。横浜の道場まで行って受けたんでスけど、過呼吸になってしまって（笑）。

掟　それに向けての運動とかやってなかったんですか？

チエ　中学時代、バスケ部には入ってましたけど、うちの学校は練習もゆるかったんで。たぶん緊張してたんでしょうね。KAORUさんが紙袋を持ってきてくれて、口にあてられたんスけど。

掟　応急処置で二酸化炭素を吸えば過呼吸は治りますからね。

チエ　だけど、そんな知識がなかったんで、ちっちゃい頃とか袋被ったりすると「死ぬよッ！」とか言われてたから、「この人に殺されるのかも」と思って（笑）。

掟　このままでは私がインフェルナルされてしまう！　と（笑）。

チエ　はぁい。なので、紙袋のすき間を開けて、口を全部塞がないで、ちょっとだけ、開けながら吸ってました（笑）。

掟　KAORU選手、すいません！　ちなみに、小さい頃はどんなお子さんでした？

チエ　外で遊んでました、鼻水たらしながら（笑）。

掟　ガハハハ！　鼻水が止まるようになったのはいくつぐらいですか？

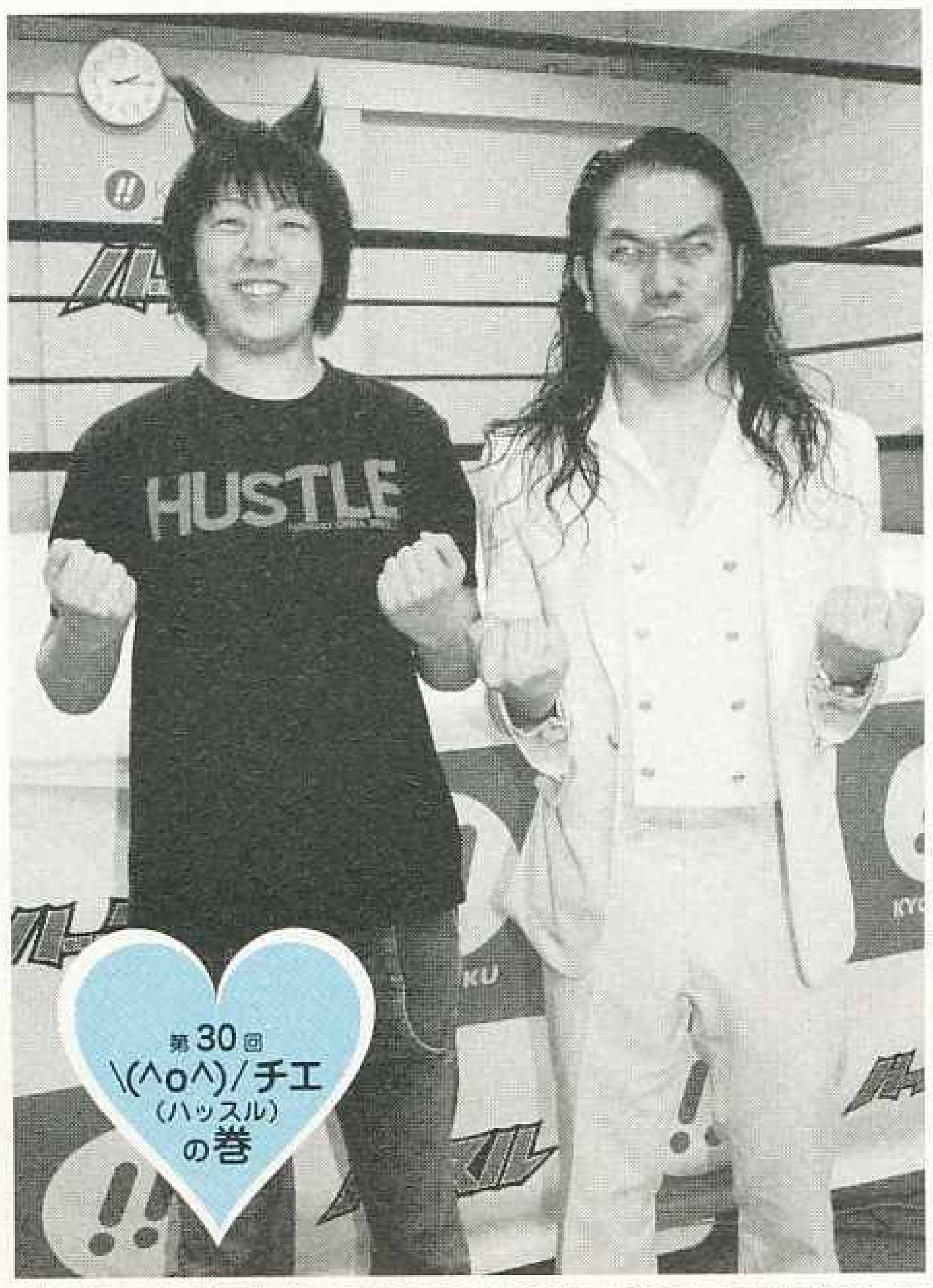
チエ　（即座に）中学生ぐらい。

掟　また、長いことたらしてましたねぇ（笑）。高校時代からはプロレスラー目指してレスリングを始めたみたいですけど、ずっと男子生徒と一緒に練習してたんですよね？　男子の中に一人だけ女子っていうのはイヤじゃなかった？

チエ　いや、最初は〜、何もわからなくぅ。でも、ときどき基礎トレーニングで、ちょっとへんな格好するのがあったんスよ。なんか二人組になって背筋を鍛える〝駅弁〟っていうのがあって。

掟　モロじゃないですか！（笑）。

チエ　自分は全然そういうこと知らなくて、普通にやろうとしたら、男子のほうが恥ずかしがるんですよ（笑）。



ばんざい・ちえ■本名・石井千恵。1983年4月5日、長野県出身。学生時代はレスリングで活躍し、名門・中京女子大学卒業後はレスリングを続けながらプロレスラーを目指し、06年10月に『ハッスル』でデビュー。同年8月の『WRESTLE EXPO』お台場大会では総合格闘技ルールにも挑戦し、勝利を収めている。168cm、64kg。

掟　駅弁から恋が生まれたりとかは……。

チエ　あんま、なかったでス（笑）。

掟　男子校の中に女子が一人だけいると、凄いモテたりするっていいますけどね。

チエ　いや、チヤホヤはされないですけどぉ、けっこうかわいがってもらいました。

掟　どんなかわいがられ方を？

チエ　やっぱ、男子と比べたら、あんまり強くないじゃないですか？「タックル入れよ！」とか言って、もう先に手でガードしてたりするんスよ。そんなところにバレバレのタックルで入ったら、顔蹴られて、鼻ガーンってやられたりとか。

掟　あ、そんな「いっちょもんだろか」的な意味でのかわいがりで（笑）。

チエ　でも、練習のときは厳しいんでスけど、普段の生活はみんな優しかったでス。

掟　でも、大学ではレスリングの名門・中京女子大に入って、今度は女だらけになるわけですよね？

チエ　はぁい。周りがみんな女だから、手を抜いて、ずっとスウェット生活でした。大学のときは出会いとかまったくなかったンで。合コンとかもしたことないし。

掟　ちなみに、どんな男性がタイプ？

チエ　優しい人っていうか、素な人！人と接してるときと、二人っきりのときと違かったりすると「あれっ？」とか思ったりするじゃないスか？

掟　そういうことはいままで何度も？

チエ　いや、ないスけど（笑）。

掟　想像上はあった、と（笑）。

チエ　はぁい。自分、妄想族なんスよね。

掟　二人っきりの場面を妄想し続けて早25年？　直接的な浮いた話とかなかったんですか？

チエ　いやっ、ありましたよ！　大学のときとか。

掟　合コンもしたことないのに！

チエ　女子のレスリング部は少ないんで、男子に混じって練習したりすることが多いんで、いろんな大学に友だちができて、そういう友だちからの付き合いとか。

掟　期間としては？

チエ　半年ぐらいッ！（得意げに）。

掟　半年間は楽しかったですか？

チエ　夢のような生活でした。

掟　どんなデートをしてたんですか？

チエ　付き合ってた人とは、とくに何も……。2回ぐらいしか会えなくって。

掟　えっ、2回しか会ってないんですか？

チエ　東京と名古屋だったんで。で、その人には結局フラれて、それでそのあとに、友だちが、なんかカッコいい人を紹介してくれたんスよ。

掟　おっ、さらに浮いた話追加！

チエ　その人とは付き合ってはないスけど、すっごい楽しかったッスね。ディズニーランド行きましたよ！

掟　おっ、ついにベタベタなデートの殿堂に！　妄想上では何回も行ったディズニーランドはどうでした？

チエ　いや、チョー緊張して！　でもすっごい楽しかったッス！（笑）。2時間とか並んでても、あっという間なんスよ！

掟　最近はどうですか？

チエ　飲みに行くぐらいでスね。

掟　飲むとよく記憶をなくしたりするみたいですね。

チエ　はぁい。あと、記憶とともに何かなくしてまス。財布とかカバンとか。あとネズミと格闘してたり。

掟　酔ってネズミと格闘!?　それ、タニー・マウスじゃないですよね？

チエ　違いまス。教えてくれたんでスよ、渋谷駅の警察の人が。カバンがなくなったんで、交番に行ったんでスけど、「アンタ、昨日ここの前でネズミと闘ってたじゃん」みたいなこと言われて……。

掟　ちなみに対戦結果は？

チエ　わからないでス（笑）。もしかしたら、ヤラれたかも……。記憶がないんで。

掟　ほかに、お酒の失敗談は？

チエ　あ！　一回、川田さんに電話して「いま、六本木で飲んでるんで早く来てくださいッ！」って言ったあとで潰れちゃって。そのあと何回も電話が来てたのに気づかなくて、六本木交差点でずっと待たせたことがありまス。

掟　アマンド前でデンジャラスKが待ちぼうけ！（笑）。さすがに怒られました？

チエ　あとから言われました。そのときは酔ってて電話も気がつかなくて、朝起きて着信を見たら「あっ、そうだ！」って思い出して。でも、呼んだのは覚えてるんスよ。

掟　覚えてなきゃ困りますよ！


KUSHIDAに続く生え抜きハッスラー第2号のチエ。男子やモンスター相手に闘うのは日常茶飯事。先日は8歳のカンフーくんともタッグを結成。顔文字を使用したリングネームはおそらく世界初！

Okite Porsche◎掟ポルシェ■4・28(月・祝日前)深夜、申し訳ないとで掟ポルシェDJ@札幌Mole(狸小路2丁目)、5・3(土・祝)申し訳ないとで掟ポルシェDJ@三宿Web、5・11(日)ロマンポルシェ。ライブ@富山大学。詳細は掟ポルシェブログを参照！【http://blog.excite.co.jp/porsche/】



「Let me entertain you」と歌う男が背負った業

Yuzuru Sato ◎ 1976年、静岡県生まれ、千葉県育ち。クラブ・ミュージックなど音楽の解説を書いたり放送作家をやったりしています。棚橋選手の成長に驚いています。予想GUYです。恐縮です。

『DREAM・1』観ました。

佐藤大輔さんのオープニングVTRはグッときたものの、正直試合は渋め。かなりイライラしましたが、帰宅し、考え、自分、正直浅いかもと考えを改めました。

なぜなら、じつはオープニングの段階で、すでに我々に「開幕スベるよ」という「不吉な予言」が提示されていたから。その予言は、全選手入場式で使用された「21世紀、全英で最も売れているアーティスト」ことロビー・ウィリアムスの「Let Me Entertain You」の中にありました。煽りで不吉な予言とはじつに大胆不敵です。

06年に全44公演で260万人を動員したツアーでギネスに認定される一方、最近では「歌手をやめてUFO研究家になりたい」と、アリゾナの光学天文台の望遠鏡で毎日18時間も宇宙からのサインを捜し続ける男、ロビー・ウィリアムス。

ツチノコ捕獲に失敗し、自分のツチノコを語るアントニオ猪木を超える「あっちの世界の住人」ぶりを見せつける彼は、かつて全英に君臨したアイドル、テイク・ザットの元メンバーでした。

貴公子揃いの中で豪快にドラッグ&アルコール中毒に陥り、オアシスのライブに泥酔して乱入。めでたくグループから追放された彼は、傷心の中、テレビの司会をしながらソロ活動を模索します。

その後、2枚のシングルが全英2位を記録するも、話題の中心はパーティでのご乱交や激太りの報道ばかり。挙げ句、ついにはクスリと酒の中毒でリハビリ施設へ入所。そんなドタバタから復帰し、生まれたアルバム、それが「Let Me~」を収録した97年発売の『Life Thru A Lens』でした。

ところが本作。期待とは裏腹に全英チャート、なんと11位。テイク・ザットにはるかにおよばぬスベりっぷりを披露してしまいます。そう、『Life Thru A Lens』は、「不穏な幕開け」という業を背負った作品だったのです。

しかし、PRIDEのために会社を飛び出した男が、不吉な予言だけでそのアルバムの曲を使うわけがない。

というのも、『Life Thru A Lens』は、のちにシングルカットされた「Angel」のヒットを機に最終的には空前の大ヒットを記録。その中で新たなロビー像を確立した決定打。それが「Let Me~」だったのです。

PVではKISSのコスプレで登場。白塗り&胸毛全開で踊り狂う姿に、もはやテイク・ザットのイメージは皆無。「地獄は消え、天国は現われた、もう何も恐れることはない」「君を楽しませたい」と自らの苦い人生を投影させ、弾けまくる姿は、まさにアイドルを超えたリアル・エンターテイナーでした。そう、同曲は過去の呪縛から解き放たれた象徴の曲。つまり、佐藤大輔さんは再起の舞台で、ファンへ、空白の季節を乗り越え、決意のメッセージを投げかけていたのです。

ちなみに「Let Me~」はダンスとロックが出会い、ポップ・ミュージックの可能性に「夢」を抱かせた時代へのオマージュ・ソング。この日はケミカル・ブラザーズの「Marvo Ging」という、やはり当時の空気を感じさせる曲を使用し、見事に場の空気を支配していました。選手の背景や煽り文句のみならず、音楽にまで執拗に意味を塗り込める。この執念と情念こそ、煽りVアーティストの伝達力の根源。やはり、神は細部に宿るのです。

不吉な予言。震えるメッセージ。もはや煽りの範疇を超え、魔性のVアーティストと化した佐藤大輔さん。いま、そのVは、至高の輝きを放っています。



鉄火場ゴングショー

賭博とは 極上の プロレスである

田中太陽の二本場 / 天才・武藤敬司の賭博観

Taiyou Tanaka
◎日本プロ麻雀協会所属のフリープロ。"観戦記の鬼"として一部の麻雀ファンのあいだで根強い人気を誇る。

「ギャンブラーは、そうであろうとなかろうと億万長者のように生きていくものだ」

これは伝説的ポーカープレイヤー、ジョニー・モスの名言である。「ギャンブラー」を「プロレスラー」に、「億万長者」を「最強の男」に置き換えてみると、また違った真実が見えてくるような気がしないでもない。はたしてギャンブルという名の鍵は、プロレスという〝他に比類なきジャンル〟のコレクトキーとなりうるのか? そんなわけで今月もまた、無駄話をつづらせていただきます。

ギャンブリング的ゲーム理論をもってしてプロレスを語ろうとするならば、やはり麻雀というゲームの出番がどうしても多くなる。プロレスが特殊なスポーツであるように、麻雀もまた特殊なギャンブルであるからだ。

ポーカーやバカラといった西洋ギャンブルに比べて麻雀は、ワンゲームあたりの時間が極度に長い。そのため射幸心はかきたてられにくいが、長時間を要するぶん技術介入が多く、戦術の幅も広いのが麻雀の特徴である。結果よりも過程を楽しむという点で、この種目は〝ギャンブル界のプロレス〟といえるのだ。

そして、あまた存在するギャンブル好きレスラーのなかでも、とくに麻雀を好んだのが武藤敬司なのである。あるいは知性とひらめきを駆使して闘うこのゲームを通じて、武藤のインテリジェンスあふれるプロレスセンスは磨かれていったのかもしれない。

新日本プロレス在籍時代の武藤は、やはりというべきか上井文彦駅長らと破天荒な麻雀ライフを送っていたようである。あるときなどは、雀荘へ持ち込まれたグレート・ムタ関連キャラクターグッズの契約書を、ロクに読まぬまま麻雀の片手間にサイン。結果、たいへん不利な契約を結んでしまったという、いかにも武藤らしいエピソードも残っている。

また、武藤は〝プロレスラー代表〟として、麻雀関係の仕事を数多くこなしていることでも有名である。フジテレビの人気麻雀番組『THEわれめDEポン』生放送スペシャルや、テレビ朝日の正月恒例番組『朝まで麻雀スタジアム』に出演し、プロ雀士や雀豪芸能人相手に真剣勝負を繰り広げたこともあった。豪快な勝利をものにしては「やったー!」と天真爛漫に喜び、負ければ「くそー!」と頭を抱える武藤の姿は、まさしくプロレスのイメージそのものであったことをよく覚えている。

このほかにも、大手オンラインゲームサイト『ハンゲーム』主催の麻雀大会へゲスト参加、『週刊ゴング』誌上麻雀大会出場、人気麻雀ゲームソフト『プロ麻雀極NEXT』にキャラクターとして登場など、武藤の〝麻雀タレント活動〟は枚挙にいとまない。某有名雀荘へのゲスト来店した際、付き人として帯同したのは安田忠夫だったという、これまたらしい話もある。


このように公私に渡って麻雀と関わってきた武藤だが、全日本プロレス社長就任を機にやめたという。その際、こんなことを言っていたそうだ。

「もうギャンブルはやらない。なぜなら、これこそがギャンブルだから」

ギャンブルをこよなく愛した武藤敬司は、いよいよギャンブルそのものを仕事にしてしまったらしい。いや仕事をギャンブルにしてしまったのか? あるいは武藤にとって「ここまでが遊び」「ここからが仕事」というような線引きなど、あってないようなものなのかもしれないが。賭け事には人格が出るとよくいうが、ギャンブルという〝真実の鏡〟に映った武藤の正体は、やはり我々のよく知る武藤敬司であった。

生き残った男たちの咆哮

DREAM LIGHT WEIGHT GP 2008 2nd ROUND



石田光洋

〃主催者推薦枠〃について物議をかもす



DREAMライト級GPで見事に2回戦にコマを進めた石田光洋と川尻達也。それぞれチョン・ブギョン、ブラックマンバとの激闘を制しての進出だけに、次戦のカード発表会見では〃主催者推薦枠〃について「これでもか～これでもか」とばかりに不快感をあらわに！よし、ならば『Kamipro』で不平不満をブチまけてもらおう！と、勇んでインタビューを敢行したものの……？

聞き手／ジャン斉藤　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也

大激白!!

のハズだったんですが……。

川尻達也



いまこそ"真剣勝負"やれんのか!



昨年のHERO'Sミドル級世界王者決定トーナメント準決勝でのアンドレ・ジダ戦以来、今回が約8ヵ月ぶりの復帰戦となる宇野。波紋を呼んでいる主催者推薦枠での参戦となるが、HERO'S日本人選手の象徴として石田戦での戦いぶりに注目が集まる。

宇野選手とは2年前に修斗で闘うはずだった ボクはあの日からずっと対戦を待っていました(石田)

――今日は、ヒートアップするライト級GPのお話をうかがいにきました!

川尻&石田 よろしくお願いします(あまり元気なく)。

――川尻選手は今回の主催者推薦枠について「原稿用紙10枚ぶんくらい言いたいことがある」とのことでしたので、ちょうど10枚ぶんのスペースを用意させていただきました(笑)。

川尻 マジっすか。そうですか。

石田 ……。

――(冷たい反応に戸惑いながら)いいやあ、しかし、先日の会見はおもしろかったですね。お二人とも"主催者推薦枠"に怒られて、怒られて!

川尻 ……。

石田 はい。

――怒られてましたねぇ。アハハハハ……むむう。

川尻 なんか……すいません。たったいま練習が終わったばかりで、頭がボーッとして気の利いた言葉が浮かんでこないんです。

石田 ……。

――あ、そうだったんですか。それならそれで早く言ってくださいよ、もう!

川尻 それに……。

――それに?

川尻 会見で言いたいことは言っちゃったんで。だから困ったなあ、と。

――それはボクも困るなあ。石田さんは違いますよね? 主催者推薦枠にはやはり納得がいかないですよね。ね? ね!? ねっ!!

石田 (疲れきった表情で)……いや、あのときはそう思いましたけど。

――もう一度思いましょうよ!

石田 (無視して)同じことをネチネチ繰り返すのは小学生みたいですし。カッコ悪いですから。決まったことに目標を絞ってやるだけです。

川尻 まあ、ボクもね、正直、言いたいことはたくさんあるけど。

――じゃあ、言いましょうよ!

川尻 (無視して)ボクはそれを言える立場じゃないので。好き勝手を言えるくらいになるまで強くならなきゃしょうがないという思いですね。

――それでもネチネチ聞いてしまうんですけど。

石田 記者会見でも言いましたが、ボクがどうこう言って決まるものでもないので、決まったことに関して文句を言うつもりはないですし、あとはやるだけです。宇野(薫)選手を勝ち進ませたくないという気持ちはもちろんあります。

――川尻選手は『HERO'S』のチャンピオンとかだったら推薦枠でも納得いくと言ってましたよね。それは宇野選手に不満があるんですか?

川尻 ……個人に対する感情とかってことですか?

――はい。

川尻 とくにないですよ……あったほうがおもしろいですか?

――そうなんですけど(笑)。石田選手は宇野選手と対戦することになったときはどう思いました?

石田 ああ、出場するんだなっていう感じでしたね(淡々と)。

――闘う以前に出場するんだな、と。何か燃えるものとかありますか?

石田 燃えるものはありますけど、お話をいただいてやりますと言った時点で、プロとしてやるしかないって感じですね。

――記者会見のときにキラー発言を連発されてましたよね。あれはプロ意識がなせる業だったんですか?

石田 そうですね。それとやっぱり納得いかない部分はありましたので、ちゃんと自分の口で自分の言葉で言おうと思いました。

川尻 ボクは前号の『Ｋａｍｉｐｒｏ』のインタビューで推薦枠の選手とは筋道が違うからやりたくないと言いましたけど。どうせ宇野選手が出るなら俺がやらしてほしかったという気持ちはありましたけどね。

――川尻選手の2回戦の相手はルイス・ブスカペに決定しましたが、一度勝ってる相手との再戦に関してモチベーションはいかかでしょう?

川尻 うーん……、相手は誰でもいい気持ちがあったので、あとは闘うだけですね。一番対戦の可能性は少ないと思ってたのでビックリしましたけど(苦笑)。

――ちょっとテーマを見出すのは難しいですよね。だからこそ内容が問われるんじゃないですか?

川尻 そうですね。今回負けたら初対戦時(05年7月7日・PRIDE武士道・其の八)からの3年近くが無駄だったということなので。

――石田選手vs宇野選手はファンも注目の一戦ですが、川尻さんは客観的にこの試合をどう見ますか?

川尻 負けた方がすべてを失なうでしょうね(キッパリ)。

――なるほど! インタビューがいよいよ盛り上がってまいりました!!

石田 ボクもそれは感じてます。負けたら会見であんな発言をしたボクがバッシングを受けるだろうし。

――負けたらすべてを失なうというのは、これ以上にない真剣勝負ですね。

石田 プレッシャーはありますよ。でも、川尻くんも記者会見でボクに




2回戦対戦カード発表会見で石田が宇野の推薦出場に関して「正直納得してません。決まったのであとはやるだけですが、1回戦で潰し合いして勝ち上がった選手とやりたかった」と珍しく語気を強めれば、川尻も「言いたいことは原稿用紙10枚ぶんくらいあるので、それは石田君に託して僕は目の前の試合をやる」と煮えたぎるものを押さえるかのようにコメント。因縁うずまく日本人対決の行方ははたして?

いまの状態で偉そうなことは何も言えない……ほんとは俺も言いたいことあるんですけど（川尻）

気持ちを託してくれると言ってくれてるので、そのプレッシャーを嬉しいと思えるようにしてます。前はプレッシャーから逃げたくてしょうがない自分がいたんですけど、こういうプレッシャーを味わえる機会は選手としてほかにほとんどないじゃないですか。自分のやれることを精一杯やって当日ベストなコンディションで宇野さんにおもいきりぶつかりたいというそれだけですね。それで出た結果なら納得もいくので。

――宇野選手はそれくらいの相手だということですね。

石田　宇野選手とやれることに関しては嬉しいですよ！　修斗の環太平洋の王座決定戦（06年2月17日・代々木競技第二体育館）の最初のオファーってじつは宇野選手できたんですよ。だからやれるなら凄い楽しみにしてたんですけど、結局実現しなくて。そのときから絶対にいつか闘いたいと思ってました。

――いやあ、そういう話が聞きたかったんですよ！（笑）。

石田　隣に川尻くんがいてこういうこと言うのもなんなんですけど、その決定戦の2年前に川尻くんとやって（04年3月22日・後楽園ホール）、そのときに宇野選手は修斗とUFCのチャンピオンになりたいと言ってたんで。ボクの中では絶対に受けてくれると思ったんですね。ボクに勝てばランキングが1位になって、川尻くんが当時持ってた世界ウェルター級王座にも挑戦できるかもしれなかったですし。そういう意味でもワクワクしてたんですけど、結局闘えなくて……。あのときは残念に思いましたね。ボクはあの日から宇野選手との対戦をずっと待っていました!!



かわじり・たつや■1978年5月8日、茨城県出身。T-BLOOD所属。00年4月にプロ修斗でデビュー。04年12月に修斗ウェルター級王座に。『武士道・其の七』からPRIDEに参戦。05年のPRIDEライト級GP1回戦の五味隆典戦では歴史に残る勝負を展開した。その下がることのないアグレッシブなファイトスタイルから“クラッシャー”の異名を持つ。171cm、69.9kg。

いしだ・みつひろ■1978年12月29日、茨城県出身。T-BLOOD所属。01年7月にプロ修斗でデビュー。06年2月に修斗環太平洋ウェルター級王者に。『武士道・其の拾』からPRIDEに参戦し破竹の4連勝。06年『PRIDE男祭り』で五味隆典と対戦しPRIDEで初の敗戦。07年『やれんのか！』では、ギルバート・メレンデスとハイレベルな攻防を繰り広げた。168cm、69.9kg。

TATSUYA KAWAJIRI × MITSUHIRO ISHIDA

川尻　……それ、凄いネチネチじゃん！（笑）。

石田　……あ！

――ダハハハハハ！

川尻　2年越しのネチネチだよ！　〝ウチのエスペランサ〟はさわやかで売ってるんで（笑）。

――大丈夫です！　宇野さんに対するさわやかな想いでした（笑）。

川尻　まあ、宇野選手も選ばれた人間ですからね。被害者っていうのもあれだけど。宇野選手がどうっていう話じゃないですからね。

――ところで、お二人の1回戦の評判はいかがですか？

川尻　入ってきてますね。かんばしくないです（笑）。ダメ出しされたりしますし。テレビ的にはつまらないということじゃないですか。

――石田選手と（チョン・）ブギョンのほうは大幅にカットされちゃってましたね。

石田　ハイライト扱いでしたね。それを観た知り合いが負けたかと思ったほどに出来の悪い試合でした。

――えー、そういったこともあって、今日は舌が滑らかじゃないっていうことでよろしいでしょうか？（笑）。

川尻　そうですね、この状態で偉そうなこと言っても調子に乗ってるだけって思われますからね。何も言えないですよ。言いたいことがあっても、言えないですよ！

――ボクも仕事上ネチネチ聞くしかないんですよ！

川尻　……ほんとは俺も言いたいことあるんですけど（笑）。

――じゃあ、言っちゃいましょうか！

川尻　いやあ、何も言えないですね。

――もしかしたら、ボクのことをからかってませんか？（笑）。

川尻　いやいや。言えないですよ～。青木くんもそうだと思いますよ。

――青木さんにはさっき話を聞いてきたんですけど、「谷亮子のお尻の肉づきがいい。ククク！」とか騒いでましたよ。

川尻　全然関係ないじゃん！（笑）。

――じゃあ、青木vsカルバン戦の予想をしていただけます？

川尻　予想というか、前回途中まで見た感じでは、カルバンが1ラウンド10分というのを気にしてか、最初あまり攻めてこなくて、青木くんは相手の攻撃をよく見てましたね。青木くんは自分の距離でミドルなりで自分から手を出してペースを握ってたかな？　っていう感じかな。それがカルバンの作戦だったのかもしれないし、どうと言えないんですけど。見た感じでは青木くんがペースをつかんでたかなと思いましたね。

――石田さんも楽しみですか？

石田　ボクも凄い楽しみですね。

……はい。

――ありがとうございました（笑）。あの―、『DREAM・2』には行かれますよね？

川尻　たぶん行くと思います。

――どの試合が楽しみですか？　まだ全カードは出揃ってないですけど。

石田　ケガール・ムサシとデニス・カーンの試合が凄く楽しみです。

川尻　ボクは青木vsカルバンだったり、あとは田村選手vs船木選手。

――UWFに興味あり！　さ、話を膨らませましょうか（笑）。

川尻　けっこう、こういう闘いが好きなんですよ。お互いに生き抜いた道があると思うので、それをぶつけ合う感じじゃないですか。

――じゃあ、川尻さんも田村さんの入場テーマで手拍子したりとか？　♪チャチャチャ、チャチャチャ、チャチャチャチャチャチャ！　って？


川尻　……知りません。

――聞いたボクが悪いですね。アハハハ……。では、こういうムードでまとめさせていただきます。

川尻　すいません。ホントは原稿用紙15枚くらい言いたいことはあるんですけど。

――絶対にバカにしてるでしょ！

【08年4月9日／都内・JBスポーツにて収録】



オレが生まれたのは
犯罪や暴力があふれた街だった

暴力と競技の最先端!
GP優勝候補はこの男だ!!

EDDIE ALVAREZ

エディ・アルバレス

いまやMMAの首都となった格闘大国アメリカ。エディ・アルバレスは、
そのムーブメントの現在を伝えることができるファイターの一人といって差し支えないだろう。
14試合中判定決着はたった一戦のみ。レスリング技術を活かして相手をなぎ倒し、
鉄槌という暴力を持って試合に終止符を打つ。巨大なふるまいにかけられ、
生き残ってきた男の凄味がそこにある。DREAMライト級はアメリカに染まってしまうのか!?

聞き手　上杉初期設定　撮影　タイコウクニヨシ　試合撮影　乾晋也

MFCで王者になっても、建設現場で働いていたんだよ

――アルバレス選手、1回戦突破おめでとうございます！

アルバレス（無邪気な笑顔で）サンキュー！

――今回のアンドレ・ジダ戦はブッチギリで大会ベストバウトの評価を受けて、すっかり「新星誕生！」というムードなんですよ。

アルバレス　そうなのかい？　じつはオレもワクワクしているんだよ。このトーナメントに出られるだけでも凄いことなのに、2回戦に駒を進めることができたからね。それにさいたまスーパーアリーナは憧れの場所だった。

――あ、そうなんですか。

アルバレス　うん。PRIDEをテレビで観ていて、「いつか、ここで闘うんだ！」って自分に言い聞かせていたもんだよ。その舞台で闘うことができたんだから、オレにとってはまさに〝ドリーム〟だよ（笑）。

――へえ～、もともとPRIDEファンだったんですね。

アルバレス　そうだよ。オレはアメリカ人だけど、UFCよりもPRIDEのほうが断然、好きだった。ルールもPRIDEのほうが激しいし、四角いリングのほうがいい。

――試合では、グラウンド・コントロールが素晴らしかったですが、もともとレスリングの経験があるんですよね。

アルバレス　そうなんだ。ハイスクールのとき、2年連続で全米6位になったよ。

――2年連続で全米6位！　それって凄いことなんですよね。よくわからないですけど（笑）。

アルバレス　まあね。MMAファイターの中には、もっと凄い実績を持っている人もいるけどね。もともとスポーツはなんでもできて、ベースボールもやっていたんだ。でも、ハイスクールに入ったとき、レスリング部のコーチが来て、「おまえは背が低すぎるから、ベースボールには向かない」と。おまけに「レスリング部に入らないと、腕を折る」なんて脅されたりもした（笑）。だからレスリング部に入ったんだ。

――どんな勧誘方法ですか！（笑）。

アルバレス　まあ、いまとなってみれば結果的にいい判断だったよ。それは昨日の試合からでもわかってもらえたと思うし。



［3.15『DREAM1』ライト級グランプリ1回戦］
さいたまスーパーアリーナ

○エディ・アルバレス vs アンドレ・ジダ×
(1R6:47 TKO)

序盤から激しいパンチの応酬を臨むジダに、アルバレスは冷静にテイクダウンを狙う。ジダの狂拳が何度かグラつかされたアルバレスだが、タックルで強引になぎ倒す。ポジションをキープし、ヒザ、鉄槌の連打。ジダは横を向いたままフリーズ！

――で、高校を卒業して、そのレスリング技術をバックボーンにMMAファイターになった、と。

アルバレス　というか、大学にも行かず、ストリートファイトに明け暮れるようになったんだ（苦笑）。ちょっと荒れていてね。

――あら、アウトサイダーに（笑）。

アルバレス　ペンシルバニア州のケンジントンという町で育ったんだけど、そこはガラがよくないっていうか、ラフなエリアでね。（映画の）『ロッキー』が撮影された場所。有名なボクシングジムがあるんだけど、よくトラブルに巻き込まれるんだよ。バーとかストリートでね。

――物騒な地域で暴れていたんですね。

アルバレス　ドラッグの密売とか、犯罪や暴力があふれた街だった。日本で言ったら、新宿のようなものなのかな？

――新宿にどんなイメージを持っているんですか！（笑）。

アルバレス　違うのかい？（笑）。とにかく生きていくにはハードな場所だったよ。同時にそこで生まれ育つというのは、ファイターとして成長するということさ。オレは勝ち続けた。そのうち本当のファイターと闘ったらどうなるのかテストしてみたくなったんだ。それにケンカばかりしていても、なんの意味もないなってむなしく感じていたしね。

――それでプロの世界に入った、と。

アルバレス　半年でプロデビューして、2年半で7連勝。MFCでチャンピオンになったんだ。でも、ファイターとしてのキャリアの転換点はチャンピオンになったことじゃなくて、MFCがボードッグと提携したことだね。ボードッグと契約したことで、オレはやっとフルタイムのファイターになれたんだ。それまでは、オレは建設現場でコンクリートを運んだりしてたよ。でも、ボードッグとサインしたことで、仕事を完全に辞めることができた。

――ところが、そのボードッグがあっという間に崩壊というか、イベントを行なわなくなって。

アルバレス　もの凄く不安になったよ！　当時は、かなりいいファイトマネーをもらっていたし……。ストレートに言うと、彼らはムダにお金を使っていた。

――やっぱり！（笑）。カルビン・エアー代表には会いましたか？

アルバレス　バンクーバーで会ったよ。誰とでも気軽に接するナイスガイだった。彼は大金を失なっている状況でも、「もっとMMAに関わりたい」って考えていたんだ。MMAがホントに好きで、ほかの仕事をほったらかしていたぐらいにね。あの情熱は凄かったなあ。

――残念ながら、うまくいかなかったわけですけどね。

アルバレス　個人的なことを言えば、ラッキーなことに、すぐにエリートXCと契約を結ぶことができたから、よかったけど。

――かつてボードッグとMARSが提携した縁で、MARSの両国大会（06年8月）に参戦していますよね。

アルバレス　MARSはよかったよ。ミスター・アマノ（天野勇気元代表）はジェントルマンだったしね。あのときはいい思い出しかないな。MARSは計量のときから、バックステージで大混乱していたけど、それも含めて楽しかったし。

――ズンドコを楽しむ余裕があったなんて（笑）。そのMARSも当時の勢いはないですね。

アルバレス（顔をしかめて）なんかオレが関わった団体は、そういうことばかりになるね（笑）。DREAMがそうならないことを祈るよ。

――次の質問に移ります（笑）。GPを勝ち上がった選手の中で、誰が一番の強敵だと思います？


アルバレス　たぶん、ヨアキム・ハンセンじゃないかな。彼の経験とアグレッシブなスタイルは、頭一つリードしているよね。昨日の試合だけを基準にすると、JZカルバンよりも強いんじゃないかな。

――ハンセンのほうが上ですか！

アルバレス　昨日の試合の印象に基づいての話だけどね。まあ、ハンセンでもJZでも、オレは負ける気はしないよ。今回は準備期間が短かくて、オレのすべてを出しきることができなかった。5月の大会はもっと期待していてくれ！

【08年3月16日／都内・ホテルにて収録】

EDDIE ALVAREZ■1984年1月11日、アメリカ出身。エリートXC所属。恐るべき身体能力を持ち、寝ても立っても打撃で攻めまくる。ライト級GPには一階級を落としての参戦となる。177センチ、70キロ。



いまこそ"真剣勝負"やれんのか!

アルバレスとはアグレッシブな
グッドマッチになるだろう

再生した"処刑人"が全方位に宣戦布告!!

JOACHIM HANSEN

ヨアキム・ハンセン

強くて怖い"ヘル・ボーイ"がついに帰ってきた! 3.15『DREAM.1』ライト級GP1回戦では、
ボクシング出身の"ハードパンチャー"朴光哲を相手にド迫力の打撃戦を展開!
突貫ファイト&クールなグラウンドさばきで試合を支配し、その実力の健在ぶりを満天下に証明!
2回戦のエディ・アルバレス戦でも壮絶な潰し合いが観られそうだが、
そんなハンセンの変わらぬ"メタル・ジャンキー"ぶりや中川画伯によるハンセンの似顔絵批評から
2回戦の相手についてまで"北欧の処刑人"にズバリ直撃!!

聞き手/真下義之 撮影/タイコウクニヨシ 試合撮影/乾晋也

メタルの聴きすぎで"メタルヘッド"になっちまったんだよ（笑）

――ハンセン選手、『DREAM・1』での試合（vs朴光哲戦）は見事な勝利でした！

ハンセン フフフフ。ドウモアリガトウ（不敵な笑みで）。

――じつはあの試合は地上波のゴールデンタイムで一番最初に放送されたんですよ。

ハンセン じゃあ、オレの勝利がジャパン中に流れたってワケだ（笑）。

――まぁ、テレビ的には相手が日本のスーパースター、山本KID徳郁のジムの選手なのが大きかったんですが（笑）。

ハンセン たしかジムの名前は……『KRAZY BEE』だっけ？

――ええ。メタル・ジャンキーのハンセン選手には、親しみやすい名前かなって。

ハンセン 何？ 『KRAZY BEE』がメタルっぽい名前だって？ ノーッ!!（とおもいきり否定）

――あ、メタルっぽくはない（笑）。

ハンセン ユーはメタル・テイストを誤解してるようだな。まぁ、彼はかなりハードパンチャーで警戒してたけど、結果的にアゴや頭をかなり打たれてしまったね。

――でも試合後には、頭を殴られたことに「自分は石頭、"金属"のような頭をしてるから助かった」と語ってましたね。

ハンセン あれはノルウェーのことわざに、「説教ばかり聞かされると、頭が固くなる」というのがあるんだけど、そこにひっかけて「オレはメタルの聴きすぎで、メタルのような頭（メタル・ヘッド）になっちまった」と言ったまでなんだよ（笑）。

――ダハハハハ！ 北欧のメタル・ジョークでしたか（笑）。以前はサンダーボルトの曲でしたが、今回の入場曲も格好よかったですよ。

ハンセン だろ!? あのスレイヤーの曲を聴くと凄く集中できるし、ムチャクチャ興奮してくるんだよ！

――なるほど。じゃあ最近もメタルを聴きまくりですか？

ハンセン オフコース。オレの人生は常にメタルとともにあるからね。ただメタルといっても、最近はもっぱら"クラシック"専門なんだ。モーターヘッド、ディープ・パープル……そしてアイアン・メイデン！

――メタル界の"レジェンド"。日本でも再結成公演をしたばかりです。

ハンセン へぇ～。オレは10代に彼らのライブを体験してから、脳天から足のつま先まで完璧にヤラれてるし、再結成ライブも2回観てる。まさにフェイバリットなんだよなぁ。

――それに聴くだけに飽き足らず、バンド活動も活発にやってるんですよね。

ハンセン ああ、最近もスタジオにこもって曲作りしたし、曲のストックもかなりあるし、CDデビューの話まで出てるんだよ。

――CDデビュー!?

ハンセン ノルウェーのメタルレーベルからなんだけど、この話も具体的に動きそうだから、期待してくれよ！

――多彩ですねぇ～。で、今日はイラストも得意なハンセン選手にぜひ見てもらいたいものがあるんです（と『kamipro Special 2008 LATE SPRING』のライト級GP特集のイラストを見せる）。

ハンセン ワッハッハッハッハ！ コイツは傑作じゃないか！

マネージャー ククククク！ 額のシワなんかとくに似てるなぁ（笑）。

ハンセン ヘイ、このイラストレーターはなんていう名前なんだ？

――ええっと……、中川画伯です！

ハンセン ナカガワ・ガハク？ ヘイ、そのガハクに「ベリー・グッド！」と言っておいてくれよ。ただし！

――ただし？

ハンセン 俺の顔はこんなに大きくないけどな（笑）。……ところでこのゲージはなんと書いてあるんだ？（と戦力分析の表に関して、通訳に勝手に聞き始める）。何？ これがスタンド打撃で、こっちがグラウンドだって……？（と怪訝な表情で）。

――う～ん。なんか、やばい雰囲気だなぁ……。

ハンセン ヘイ！ このゲージはおかしいぞ！ とくにサブミッションは低すぎるんじゃないか？

――す、すみません！ 朴戦でのグラウンド技術を観て、確かに低かったなと反省していたんですが……。

ハンセン だろ？ 打撃からグラウンド、全局面で猛トレーニングを積んでいるんだから。ちゃんと評価してくれよな。

――以後、気をつけます！ 話は変わりますがハンセン選手はPRIDE消滅後、UFCへ行く選択肢はなかったんですか？

ハンセン いや、プランは実際にあったんだ。ただ、さまざまな面で条件が合わず時間ばかりが経ってしまった。そうこうしてるうちにオレのトレーナーやマネージャーまでが去ってしまったんだよ（とうつむいて）。

――信頼していたスタッフがバラバラになってしまった。

ハンセン ホントにつらかったね……。そういう時期を乗り越えたからこそ、このDREAMに懸けている。ベリー・エキサイティング・プロモーションだし、コンペディター（競争相手）もたくさんいるからね。

――ちなみにGPの2回戦で闘う相手の希望はありますか？

ハンセン （即座に） 誰でもいい！ カワジリ、イシダ、アオキとカルバンはわからないが。ジダに勝利したアルバレスだってオーケーだ！

――アルバレス戦は観たいですよ！

ハンセン フフフ。彼とはアグレッシブなグッドマッチになるんじゃないか？ もちろん勝つのはオレだがね（4月4日の会見で、2回戦の相手がアルバレスに決定）。

――そのアルバレスも坊主頭なんですが、ハンセン選手は一度だけ髪の毛を伸ばしてましたよね？

ハンセン いや……。あれは単なる気まぐれだったんだ（笑）。「伸ばしたら、かわいいかな」と思ってさ（と照れくさそうに）。

――実際、キュートでしたよ（笑）。

ハンセン サンキュー。でも若い頃はドレッドヘアでもの凄い量の髪のときもあったんだ。

――そんなに剛毛でしたか（笑）。

ハンセン まぁ、いまは帽子がすっぽり入る、このヘアが気に入っているよ（笑）。

――それでは2回戦も"メタル・ヘッド"で快進撃を期待してます！

【08年3月16日／都内・ホテルにて収録】



［3.15『DREAM1』ライト級グランプリ1回戦］
さいたまスーパーアリーナ

○ヨアキム・ハンセン vs 朴光哲×
（3R 判定3-0）


"KRAZY BEEの特攻隊長"朴光哲も打撃で果敢に攻め込んだが、逆ギレ気味の挑発にバックドロップ気味のブン投げ、寝技でも圧倒など"処刑人"が本領発揮で見事な判定勝利を奪取！ 2回戦のエディ・アルバレス戦では熾烈な打撃戦必至か!?



©中川画伯

どうだいこのイラスト！ かつては「出版社にマンガの持ち込みをしたこともある」という元マンガ家志望だった"処刑人"ハンセンも仰天した中川画伯ワークスがコレだ！

JOACHIM HANSEN■1979年5月26日。ノルウェー出身。第6代修斗世界ウェルター級王者にはカルバン、五味も下す。打撃の"当て勘のよさ"は脅威的であり、ライト級GPの陰の優勝候補と言える超実力者。



GP出場選手全員を極める自信があるよ

“リトル・ノゲイラ”が語る名門BTTの逆襲

LUIS BUSCAPE

ルイス・ブスカペ

3.15『DREAM.1』で成長著しい宮田和幸を得意の寝技で下し、DREAMライト級GPの2回戦に進出、川尻達也戦が決定したブスカペ。所属するブラジリアン・トップチームは昨年、ノゲイラ兄弟、パウロ・フィリオ、マリオ・スペーヒーらの大量離脱があったが、ブスカペはそんなチームの危機をどう受けとめていたのか? 新生BTTの軽量級を牽引する男にライト級GPへの意気込みとともに、名門BTT再生について話を聞いた。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／タイコウクニヨシ　試合写真／乾晋也

ノゲイラやパウロはボクのアイドル いまでも〝兄弟〟であることに変わりない

――昨日は宮田和幸選手相手に見事な一本勝ちでしたね。試合の感想はいかがですか？

ブスカペ　ミヤタは優秀なレスラーで、打撃のセンスもあるけど、グラウンドはそれほど強くないイメージがあったから、少しでも隙があったら極めてやろうと思ってたんだ。そのための練習をしっかりと積んできた成果が出たね。

――戦前は宮田選手をテイクダウンすることは難しいと思われていましたけど、そのへんはどう突破しようと思いましたか？

ブスカペ　確かに、彼からテイクダウンを奪うのは簡単なことじゃないよ。でも、テイクダウンできないなら、引き込んでスイープすればいいし、その自信はあったから、あせりはなかったね。スタンドでもガードできていたから、彼の打撃はほとんどもらってない。あとは自分の柔術があれば、必ずスイープして極めるチャンスがあると思っていたよ。

――今回はどんな選手と練習してきましたか？

ブスカペ　ブラジリアン・トップチーム（BTT）には優秀な選手がたくさんいるから、練習相手には事欠かないよ。だからみんなと練習したけど、とくに（ホジマー・）トキーニョ、それから師匠のムリーロ（・ブスタマンチ）と一緒に練習したね。

――打撃は別のところで練習してるんですか？

ブスカペ　ムエタイはBTTでセルジオ・クーニャに習っている。それからボクシングはアカデミア・ノーブレアルトで、クラウジオ・コエーリオにコーチしてもらっているよ。

――じゃあ、寝技だけでなく打撃もしっかりできる環境にあるわけですね。

ブスカペ　そうだね。すべてのトレーニングがハイレベルにある。それがBTTさ。

――しかし、素晴らしい環境にもかかわらず、BTTでは、昨年大きな分裂がありましたよね。そのことについて、どう思っていますか？

ブスカペ　BTTは大きな家族みたいなものだった。だから、兄弟と離ればなれになるのは、本当に寂しいよ。でも、成長した〝兄〟たちが独立していくのは、どんな家族にも起こりうることさ。だから、ボクはポジティブに捉えようと思っている。そして、いまBTTはトキーニョをはじめとした新しい才能が伸びてきている。だから我々にとって去年は苦しい年ではあったけど、今年はまた新生BTTとして大ブレイクするんじゃないかと思っているよ。

――では、BTTの危機は脱したわけですね。

ブスカペ　そうだね。ノゲイラ兄弟やパウロ（・フィリオ）、そしてゼ・マリオ（・スペーヒー）が抜けたあとも、チームがペースダウンしなかったことが大きかったと思う。毎日顔を合わせていた〝兄弟〟がいなくなるというのは、単に練習相手がいなくなるということだけじゃない。毎日一緒に遊んだり、冗談を言ったりするかけがえのない存在を失なうことなんだ。だから、心にぽっかり穴が空いて、練習に身が入らなくなったこともある。でも、そんなとき、我々のリーダーであるムリーロが、先頭に立ってジムで激しいトレーニングを行なって、みんなを引っぱっていってくれたんだ。それで、みんながそれまでどおり、ハードトレーニングを積めたことが大きいよ。

――では、より団結力が強くなった部分もありますか？

ブスカペ　まさにそのとおりで、残った人間の絆がより深まったよ。でも、出ていった彼らも、兄弟であることには変わりない。実際にリオの街中でも顔を合わせることがあるしね。でも、練習場には彼らの姿がない。その寂しさを紛らわせるために、残ったメンバーはお互い「頑張っていこう」と声をかけ合って練習している。その成果が今年、きっと出てくると思うんだ。

――ミノタウロやパウロがUFCやWECのチャンピオンになったことも刺激になってますか？

ブスカペ　もちろん、いい意味で刺激になってるよ。とくにボク個人的には、MMAの世界に入るきっかけとなったのが、ミノタウロとパウロなんだ。まだボクが故郷のパライバ州ジョアンペソワに住んでいた頃、テレビでミノタウロやパウロの試合を観て、MMAをやろうと思ったんだよ。だから、ボクにとって二人はアイドルであり、彼らがアメリカで素晴らしい結果を残したということは、ボクにとっても素晴らしいインスピレーションになったね。

――ブスカペ選手がテレビでご覧になられたというのは、PRIDEの試合ですか？

ブスカペ　いや、パウロはブラジルでやった『HEROES』という大会で、ミノタウロは日本のリングスだね。

――リングス！　それはずいぶん前ですね。

ブスカペ　うん。ボクのMMAの原点だからね。ミノタウロが（KOK）トーナメントで優勝する姿を観て憧れたんだ。

――なるほど、そうでしたか。そして、今大会はブスカペ選手がBTTの代表ですけど、たとえばATTのJZカルバンに対してライバル意識みたいなものはありますか？

ブスカペ　ライバル意識なんてまったくないよ。じつは彼とは兄弟みたいな関係なんだ。ジェシアス（JZカルバン）と出会ったのは、もう7年も前、リオのカーウソン・グレイシー柔術アカデミーで初めて会って、彼の存在自体は、その前のウニベルソ・アトレチコ・ファイト・チームに所属していた頃から知っていた。だから、ホントは闘いたくないけど、これはGPだからね。二人とも勝ち進んでファイナルで闘うことになったら、お互いプロだから、全力で闘うつもりだよ。

――もし闘うとなったら、JZは一番の強敵になると思いますか？

ブスカペ　それは間違いないね。いまの彼は本当に充実している。兄弟と闘いたいとは思わないけど、彼を倒さなければ優勝はないだろう。でも、ボクも寝技に持ち込めば、今大会のメンバーの誰でも極める自信はある。そのために、もっともっと練習するし、日本のMMAファンに「柔術は最強だ」ということを見せるつもりだよ。

【08年3月16日／都内ホテルにて収録】

LUIS BUSCAPE■1982年3月19日、ブラジル出身。03年9月、修斗に初来日。04年7月からPRIDEに参戦し、阿部裕幸、今成正和、帯谷信弘らを破ったBTT軽量級の雄。なお〝ブスカペ〟とは、ポルトガル語で〝ねずみ花火〟の意。172センチ、70キロ。



［3.15『DREAM1』ライト級グランプリ1回戦］
さいたまスーパーアリーナ
○ルイス・ブスカペ vs 宮田和幸×
（1R 7分37秒、裸絞め）
立ち技で勝負したい宮田は、ブスカペのタックルを潰していくが、ブスカペは1ラウンド後半、ついにグラウンドで上になると、サイドからバックマウントへ流れるように優位な体勢を奪う。そしてチョークで見事に一本勝ちを挙げた。



「試合も結婚も前にガンガン攻めるのが大切なんだね」

「そうだよ。ちなみに俺は女房には攻められたけどね!」

……美しき兄弟愛。

DREAM煽り映像出張版!?

永田さん兄弟が語る 総合格闘技と結婚

永田裕志×永田克彦

波乱含みの幕開けとなったDREAM旗揚げ戦で、一服の清涼剤(?)となったのが、兄・裕志がインタビュアーを務めた永田克彦の煽り映像だ。その観るものを優しい気分にさせる、なんとも言えないほんわかムードの"続き"が誌上で実現! 仲むつまじい二人が繰り広げる"永田兄弟劇場"のはじまりはじまり～!

聞き手／堀江ガンツ　撮影／平工幸雄

——今回はDREAM旗揚げ戦で大好評だった克彦選手の煽り映像の"夢の続き"ということでお願いします（笑）。

克彦 ハハハハ。兄貴に出演してもらったやつですね。

裕志 『kamipro』のやることだから、そんなことだと思いましたよ（笑）。

——本誌の魂胆はわかってましたか（笑）。

裕志 なんかあの映像、意外と評判みたいですね。

——あのほのぼのとした空気は最高でしたよ！　それを誌面で再現するのはなかなか難しいと思いますが、今日は仲むつまじい兄弟対談ということでお話をお聞きしたいと思います！

裕志 了解です！（敬礼ポーズ）。

——DREAMでは裕志さんは克彦さんのセコンドを務めてましたが、格闘技会場はひさびさだったんじゃないですか？

裕志 格闘技自体は『HERO'S』で克彦が宇野（薫）選手と横浜アリーナでやった試合（2007年7月16日）とか観に行ってますけど、今回の会場だったさいたまスーパーアリーナはひさしぶりでしたね。

——もしかして『INOKI BOM-BA-YE』でのミルコ・クロコップ戦（01年12月31日）以来ですか？

裕志 そうかなと思ったんですけど、中西（学）選手のK-1参戦（03年6月8日）を観に行ってましたね。

——あー、なぜか中西選手がK-1ルールで"マオリ族最強の男"TOAと闘った試合ですね（笑）。で、今回の克彦選手vs（アルトゥール・）ウマハノフは裕志さんの目から見ていかがでしたか？

裕志 うーん、単純に自分の持ってる力をフルに発揮できてないと思いましたね。

——まだ弟はあんなもんじゃない、と。

裕志 克彦は身につけた打撃を有効に使うことを意識しすぎたのか、本来の持ち味であるレスリングの力が影をひそめたかな、と。グレコローマンで全日本選手権を何回も獲った時期の克彦は、自分から前に攻めるスタイルだったんですよ。

——グレコだったら誰にも負けないんだからその長所をもっと活かせということですね。お兄さんはこう言ってますが、克彦さんはいかがですか？

克彦 そのとおりだと思いますね。もっと前にガンガン出なきゃダメだったなと試合後に反省しました。

——相手のことを見すぎてしまった、と。

裕志 もうちょっとアグレッシブに攻めてほしかった。彼のコーチに聞くと、練習時はそれができてるみたいなんですよ。試合になると勝手も違うんでしょうが。

——裕志さんは煽り映像でも「攻めろ」ってアドバイスしてましたもんね（笑）。

克彦 「試合も結婚と一緒だ、攻めなきゃ」とか言ってましたね（笑）。

裕志 なんかうまく作ってましたね、あの映像。あ、こうきたかと（笑）。

克彦 ボクも入場前に裏からあの映像を見てたんですが、緊張感がほぐれてリラックスできました（笑）。

——あと、裕志さんはセコンドでもかなり大声を出していて、煽り映像と同様に目立ってましたよ（笑）。

克彦 一番よく聞こえましたね、甲高い声なんで。

——会場にも響き渡ってました（笑）。

裕志 でも、本当は俺の声を打ち消すくらいにお客さんを熱狂させなきゃダメなんですよ！　あと大会の放送でも俺のミルコ戦の映像ばっかり流れちゃダメ（笑）。

——ダハハハハ！　ご自身からそんなネ

タ振りを（笑）。ミルコ戦のハイキックシーンはホントに何度も流れてましたね〜！

裕志　おかげさまでずいぶんおいしい思いをさせてもらいました（笑）。そうじゃなくて、本当は克彦の試合が流れないと！

――まったくそのとおりだと思います！　で、ミルコとはDREAMの会場で再会できたんですか？

裕志　できなかったです。彼はVIP待遇だから控室もほかの選手と違って個室なんですよね。

――そこへわざわざ訪ねていくのも（笑）。

裕志　誰か連れてってくれないかと思ったんですけどね（笑）。まぁ、ヨソ様の大会でワガママ言っちゃいけないですし。

――また会場で遭遇する機会があるんじゃないですか？　もしかしたらライト級の決勝が行なわれる7月大会あたりでミルコも試合するかもしれないですし。

裕志　そうか、じゃあ克彦が勝ち残ればいいんだ！　そうすればセコンドで会場に行くんだから。

克彦　じゃあ、頑張って次の試合で結果を出さないと（笑）。

――克彦さんのモチベーションが一つ追加ですね、お兄さんとミルコの再会という（笑）。そもそも克彦さんがレスリングを始めたのは裕志さんの影響で？

克彦　もちろんそうです。兄貴と同じように高校から始めました。

――克彦さんにとっては大学でバリバリ活躍してたお兄さんは憧れだったと。

克彦　常に目標でしたね、背中を追い続けてました。

裕志　気づいたら俺は追い抜かれてたんですけど（笑）。（克彦のほうを向いて）そうだ、俺が教育実習に行ったときにおまえは高校生だったんだよな。

あの煽り映像のおかげで緊張感がほぐれてリラックスできました（克彦）

――裕志さん、教育実習に行かれてるんですか!?

裕志　そうそう、そのとき克彦は高校2年生で。大学だけじゃなくて高校も母校が一緒で、当然授業も教えましたし、放課後は部活動にも参加しましたよ。



克彦はライト級GPの2回戦対戦カード発表会見に、石田光洋、青木真也、川尻達也の"『やれんのか！』三銃士"とともに出席。「5月11日の二回戦は出てきてくれるほうとやるだけです。最高の試合をして勝つだけ、目標は優勝です」と力強く優勝宣言！

――克彦さんとしては教育実習生として実の兄に教えてもらうのはどんな気分だったんですか？

克彦　当時のボクは全然弱かったんで、兄と比較されてつらかった部分もありましたね。でも、逆に自分のなかで兄は凄い存在だったので誇らしかったですよ。

――ウチの兄貴は日本のレスリング界のトップだぞ！　と。

JI ＞NAGATA KATSUHIKO

克彦　そうですね、当時のオリンピック候補だったわけですから。

――裕志さんは最初から克彦さんにレスリングの才能を感じてました？

裕志　正直、才能に関してはわからなかったですが、とにかく一生懸命になんでもこなす努力家でしたね。そういう意味ではそこそこ頑張るだろうとは思ってました。でも、高校のときに彼は全国大会行ってないんですよね。

――それはメダリストの意外な事実です。

克彦　いつも県大会で負けてましたね。

裕志　だから大学で成長したんだよな。日体大って高校のときに実績のある人間よりも、たいして強くないのを大学で強くするっていう風潮があって。

――まさに克彦さんは大学から才能が開花し始めたわけですね。

克彦　いや、そういうことでも……

裕志　（さえぎるように）開花しまくったよ、狂い咲きだよ！（笑）。

克彦　いや、開花したっていうか……。やっぱり大学のレスリング部に入った当初は弱かったですから。周りは全国大会で上位に入る選手ばかりだったんで、最初はレベルの違いを感じてつらかったですね。先輩と練習してもボロ雑巾状態でしたし。慣れない合宿生活とかもあって1年生のときは地元が恋しかったですね。

――過酷な練習環境に加え、日体大レスリング部って部員も大勢いますよね？

裕志　一学年20人くらいですかね、だから全国から総勢80人が集まってることになりますね。

やっちゃっていいんだね？　永田克彦MMA全試合レビュー！



05.12.31『K-1 PREMIUM 2005 Dynamite!!』
○vsレミギウス・モリカビュチス
（2R終了 判定3-0）
当初、対戦相手は所英男の予定だったが、所のZSTの盟友・レミーガに大会直前にカード変更。試合はテイクダウンで終始上のポジションをキープした克彦がプロデビュー戦を勝利で飾った。



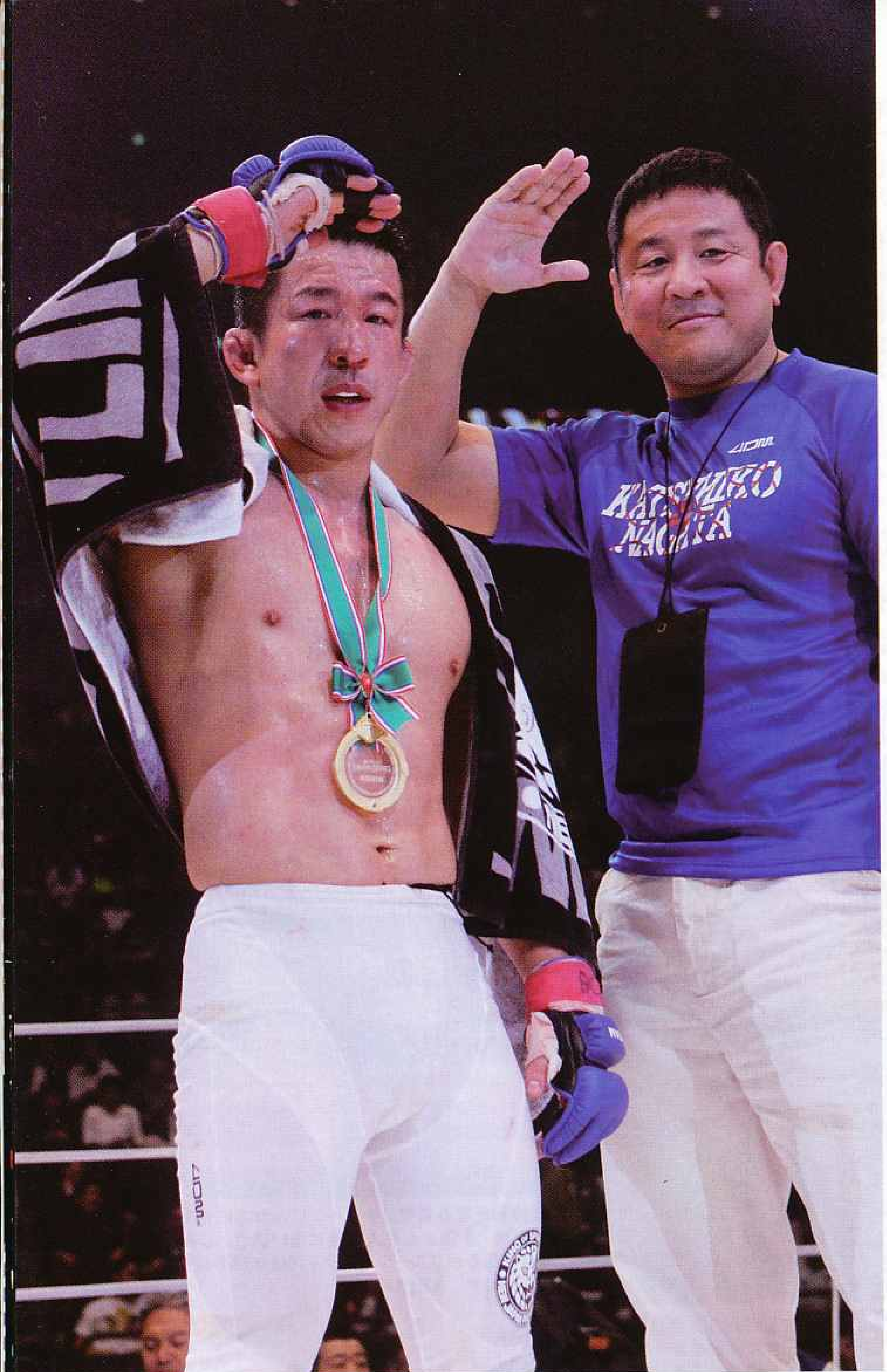
2006 06.5.3『HERO'S 2006』
×vs秋山成勲
（2R 2分25秒 KO）
こっそり実現してた魔王・秋山との一戦。体格差をはねのけようと克彦はフットワークを駆使するが、徐々に秋山に打ち合いで追い詰められ、最後は予想外の後ろ回し蹴りで無念のKO負け。



06.12.31『K-1 PREMIUM 2006 Dynamite!!』
○vs勝村周一朗
（1R 4分12秒 TKO）
克彦はこの一戦に備えて10kg近く減量。児童養護施設で働く"リアルタイガーマスク"勝村は変則的な攻めを見せるが、最後はパワーで勝る克彦が嵐のようなパウンドで仕留めた。



2007.6.2『Dynamite!! USA』
○vsイザイア・ヒル
（3R終了 判定2-1）
名門アメリカン・キックボクシング・アカデミーで修行を積んだ克彦の海外総合初試合。相手の打撃をかいくぐって再三テイクダウンするも、そこから展開を作れず課題を残す一戦に。



オリンピック出場して総合でも結果を残して……俺がはたせなかったことを克彦はやった(裕志)

――学校内だけでも相当なサバイバル戦ですよね。

克彦 競い合えるという意味では最高の環境でしたね。大学OBのオリンピック選手が練習にきて、いつもトップレベルの技術を肌で感じることができたんで。

――裕志さんは卒業されたあとも大学に練習に行ったりしてたんですか?

裕志 行ってましたよ、この道場に住んでたときも。最初は新弟子だから一年間は私的な外出が禁止なんです。だから大学への出稽古ついでに遊びに行って(笑)。

――ダハハハハ! 練習ついでに羽を伸ばしてましたか(笑)。

克彦 それで蝶野(正洋)さんに怒られたんだよね?(笑)。

裕志 そうそう、当時の選手会長が蝶野さんだったんですけど、おもいっきりお灸をすえられました(笑)。

――〝黒いカリスマ〟に〝青い正義〟が叱られましたか!(笑)。

克彦 単なるサボりだもんね(笑)。

裕志 俺が道場生のときはまだ猪木さんが現役で、道場で練習されるときは若手が補助につくしきたりがあったんです。で、猪木さんが練習にいらしたときに、たまたま大谷(晋二郎)、高岩(竜一)の両選手しかいなくて。ボクも石澤(常光)選手も中西さんもなんだかんだで外出してたんで、それを聞いた選手会長がさすがにオカンムリになった、と(笑)。

――将来を有望視されていたアマレス三

NAGATA YUJI × NA

銃士が揃って道場を抜け出してたと(笑)。

裕志 真面目な克彦にはできないことですね。こういう部分はボクのほうが長けてました(笑)。

――克彦さんは世渡り的な部分も裕志さんには教えてもらったりするんですか?

裕志 (さえぎって)こういうことは教えてもらうものじゃなく盗むものですから(キッパリ)。

――ダハハハハ! ヘンに説得力がありますね(笑)。

裕志 ただ、ボクがそんなことをしてるあいだに克彦は真面目に練習に取り組んで全日本選手権を6連覇したり、世界選手権に何度も行ったりして。しかもオリンピックには二度も行って、一回はメダルまで獲ってるんですから。弟ながら凄いことですよ、俺が成しとげられなかったことをやったわけですから。

克彦 いやいやいや(恐縮して)。

裕志 さらに俺が結果を出せなかった総合格闘技でもしっかり足跡を残してるわけだから(笑)。

――ダハハハハ! また自分でネタ振りを(笑)。あと、煽り映像ネタでいえば克彦さんの婚約ですけど、お相手の方はなんでも女優の木村佳乃に似てるとか?

克彦 はい、あとは浅野温子とか。

――おぉ、トレンディな美人系(笑)。

裕志 たしかに浅野温子に似てるかも知れねえな。

――もう裕志さんもその方と一緒にお食事とかはされたんですか?

裕志 何度かしましたよ。最初に会ったのが去年のIWGPの防衛戦で真壁(刀義)とやって血まみれになった試合後なんですよ(07年7月6日・後楽園ホール)。

――よりによって初対面があの血みどろ試合後ですか!(笑)。

裕志 はい、そのあとに焼肉屋に行って(笑)。だいたいね、克彦が婚約とか重要なことを伝えるときは、家族では俺が一番最後なんですよ。妹とか親には先に報告するくせに!

――克彦さん、それはまたどうしてなんですか?

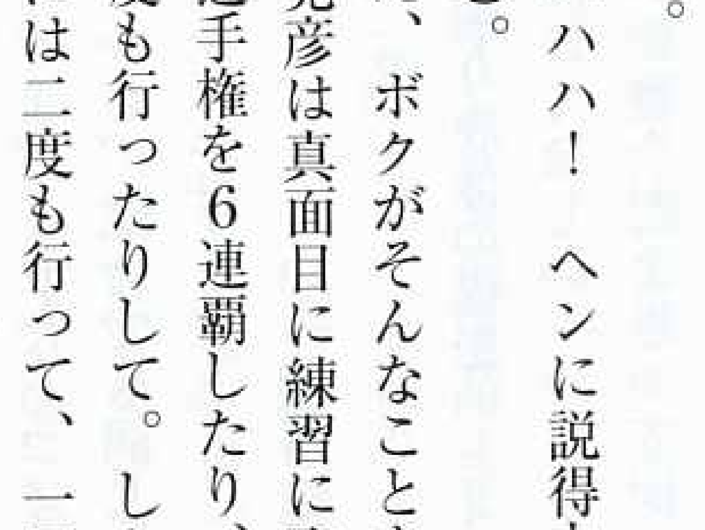
克彦 いや、その……。

裕志 なんか俺に紹介するのに不都合でもあるの?(ジロリ)。

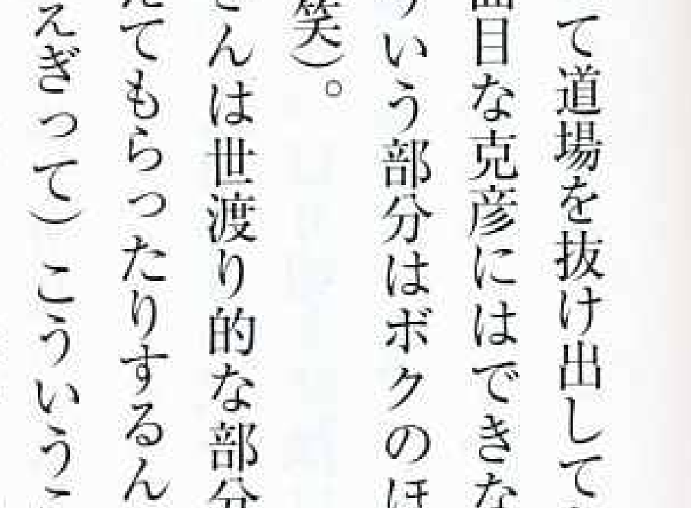
克彦 まぁ……とくに何か意識してるわけでもないんですけどね(苦笑)。

――ちなみにお兄さんはその初対面のときにも煽り映像みたいに「攻めたの?」とか聞いたんですか?(笑)。

裕志 いやいや(笑)。そのときは試合後で精根がつきはててますから。血まみれだから早く肉食べてエネルギー補給しなきゃってことで頭がいっぱいでしたよ。



2008.3.15「DREAM1」ライト級グランプリ1回戦
○vsアルトゥール・ウマハノフ
(2R終了 判定3-0)
その強烈な打撃で日本人を葬り去ってきたウマハノフを前に克彦はスタンドでも応戦。グラウンドでもたえず上を取りにいく姿勢を見せ続けて判定勝ち、2回戦進出を決めた。



2007.7.16「HERO'S 2007～ミドル級世界王者決定トーナメント開幕戦～」
×vs宇野薫
(3R終了 判定0-3)
トーナメント1回戦で組まれた唯一の日本人対決。適正体重での試合とあって克彦は百戦錬磨の宇野の動きに食らいついていくが、スタンドとグラウンドの技術に勝る宇野にベースを握られ苦杯をなめた。



苦節10年、IWGPヘビー級王座初挑戦となる真壁はチェーンにハサミにセコンドの介入と、極悪非道の限りをつくして王者・永田さんを大流血に追い込む。しかし赤く血にまみれ、白く目をひん剥きながらも我らがブルージャスティスは必殺のバックドロップを連発して劇的な王座防衛。すごいよ!!　永田さん！

ウチの両親は兄貴の流血で免疫ができてるのか僕の試合でも意外に落ちついてます（笑）（克彦）

―では、克彦さんの婚約の話題に絡めて、裕志さんと奥さんとのなれそめも少しお聞きしちゃいますけど、初デートが立ち食いうどん屋だったというのは本当ですか？

裕志　前に何かで嫁のそんな発言が載ってましたね（笑）。いや、うどんを食べようとしてお店に入ったら、たまたま立ち食いだっただけですよ！

―初デートなのに立ち食いというのもなかなか斬新ですよね（笑）。

裕志　でも本人はべつに気にならなかったみたいですよ。体育会系の人間とあまり接点がなかったようで、僕みたいなのが新鮮だったみたいです。

―奥さんにとってはニュータイプだった、と（笑）。克彦さんは婚約者の方との初デートはどちらで？

克彦　たしか、砧公園だったような気がします。

裕志　砧公園⁉（素っ頓狂な声で）。

克彦　お互い練習と仕事で忙しかったんで夜に誘ったんですけど。公園でノンビリしましたね。

裕志　夜の砧公園⁉（また素っ頓狂な声で）。

克彦　なんていうかな、誰もいないところでのびのびできる空間がほしくて。そのほうがいろいろ親密というか、雰囲気がよくなるというか……。

裕志　それ、〝親密〟っていうより〝濃密〟だろ（笑）。

―ダハハハハ！　なんか言い方がやらしいですね（笑）。

克彦　いや、あの、砧公園は広いし、夜はあんまり人もいないから……。

YUJI NAGATA KATSUHIKO

裕志　あ、そういえば俺もうどんを食ったあとは代々木公園行ってたわ（笑）。

―お兄さんも公園に行ってましたか！（笑）。

裕志　周りはカップルだらけでノンビリできませんでしたけど（笑）。

―立ち食いでせわしなくて、代々木公園でもせわしなかった、と（笑）。ちなみにお兄さんは奥さんを攻めたんですか？（笑）

裕志　ボクは攻められたんですよ！（ちょっと自慢げに）。

―あ、克彦さんに送ったアドバイスと自分は逆だったわけですね（笑）。

裕志　どちらかといったら女房のほうから求愛してきましたから！　ボクは〝バンプ〟を取ったわけです！

―ダハハハハ！　永田さんのプロレススタイルどおり、しっかり受け身を取る、と（笑）。

裕志　だからそういうこともあって、弟カップルはどっちからいったのか興味があったんですよ。そしたらコイツが攻めたっていうから、試合でも同じように攻めのスタイルでいけよって。

―なるほど、そういう裏事情があったわけですね（笑）。

裕志　で、煽り映像の撮影のときに「結婚のことを聞いてほしい」ってカンペが出たので、いい機会だと思って聞いたわけです。

―ここぞとばかりにツッコんだ、と（笑）。

裕志　ただ、永田克彦の試合を料理にたとえると、やっぱり煽り映像はそれを色づける絵皿でしかないんで。あと料理がうまいかどうかは本人にかかってますしね。

―克彦さんは今回、GPの前に婚約を発表したというのは何かご自分のなかで期するものがあったんですか？

克彦　いいタイミングで試合があったっていうのは関係ありますね。婚約と試合が重なればこっちとしても気合いが入りますし。

―お相手の方も嬉しいですよね。

克彦　向こうのご両親も喜んでくれて。YAHOOニュースに出たこともあって、電話がひっきりなしで携帯の電池がすぐ切れたって言ってましたね。

―それは忘れられない思い出になりますね。ちなみに裕志さんの結婚発表のときはどんなかたちだったんでしょうか？

裕志　僕は『東スポ』一本でしたね！

―ダハハハハ！　プロレスといえば『東スポ』！　それは素晴らしいです（笑）。

裕志　僕は新弟子の頃から結婚するときはいっぱしになって、『東スポ』の一面を飾らなきゃといけないという思い入れがありまして。これは新弟子の頃から『東スポ』の当時デスクだった柴田（惣一）さんと約束をしていたんです。ボクの場合は本当に関係者にも内緒にしてたんで。

―奥様は喜んでくれましたか？

裕志　喜んでくれたんじゃないですかね？　周りからの反響もありましたし。

―克彦さんは結婚式が6月29日ということですが、順調にトーナメントを勝ち上がっていけば試合の合い間に挙げることになりますよね？

克彦　どっちも準備でいろいろ大変ですけどね（苦笑）。ある意味、結婚式も自分の〝興行〟だって考えてるんで。

裕志　〝興行〟って凄いな、おまえ（笑）。

克彦　ちょっとヘンかな？（笑）。足を運んでもらう方によかったと思ってもらえ

自分のすべてを出しきるのが一番大事！ たとえダメでもまた一からやり直せばいい（裕志）

るように、自分なりにプロデュースしたいなと思ってます。

裕志 なるほどね、立派になったもんだ。

克彦 プロとして5月11日の試合もしっかりやって、6月29日も試合だと思って気合いを入れてやろうと思ってます。

――では克彦さんは5月、6月、7月といい緊張感が続きそうですね。

克彦 そうですね、正念場なんで気を引き締めます。

――ちなみにV旅行を兼ねた新婚旅行のご予定なんかは？

克彦 いやぁ、そこまではまだ考えてないです。

裕志 おまえが考えるよりカミさんが考えたほうがいいだろ？

克彦 まぁ、一通り終わって落ち着いたら考えます。どっか南国でノンビリできたらなとは思うんですけど。

――南の島だったら、"天国に一番近い島"ニューカレドニアあたりはどうですか？（笑）。

裕志 南国って聞いた瞬間、なんかツッコまれるだろうなと思いましたよ（笑）。

――裕志さんは今年の2月17日の両国大会を緊急欠場しなければ、試合後に奥さんとニューカレドニアに旅行に行かれる予定だったんですよね？

裕志 そうですね、まだちょっと行けないですね。天国に一番近い島どころか天国に行きそうだったんで（笑）。

――そんな天国に行きはぐれた裕志さんは復帰戦のご予定は？

裕志 まだ決まってないですね。早くて5月、遅くても6月かなと。

――そうなると次に永田裕志が見られるのは克彦選手のセコンドの可能性も？

裕志 かもしれませんね。今度は俺じゃなくて本人が試合で魅せてほしいですね。

――何かプロとしてのアドバイスは克彦さんにありますか？

裕志 やっぱりプロとして勝敗だけじゃなく内容も問われてきますよね。この世界で生き残るためには他人の何倍も努力しないと。周囲から期待されることを感謝して、おもしろくない試合をしたら次はないと思って精進してほしいです。

――なるほど。

裕志 これは真面目な話、次の大一番でおもしろくない試合をしたら、次の契約なんかないと思わないと。プロってそれぐらい厳しいものですからね。

――ということですが、克彦さんの心境は？

克彦 自分でも崖っぷちだと思っているので、トーナメントで生き残る以上にプロとして自分の生き残りをかけてこれからの試合には臨んでいこうと思います。悔いが残らないように自分を出しきれば結果はついてくると思うんで。ガンガン前に出て攻めまくります！

――試合に関しては婚約者の方も心配されるんじゃないですか？

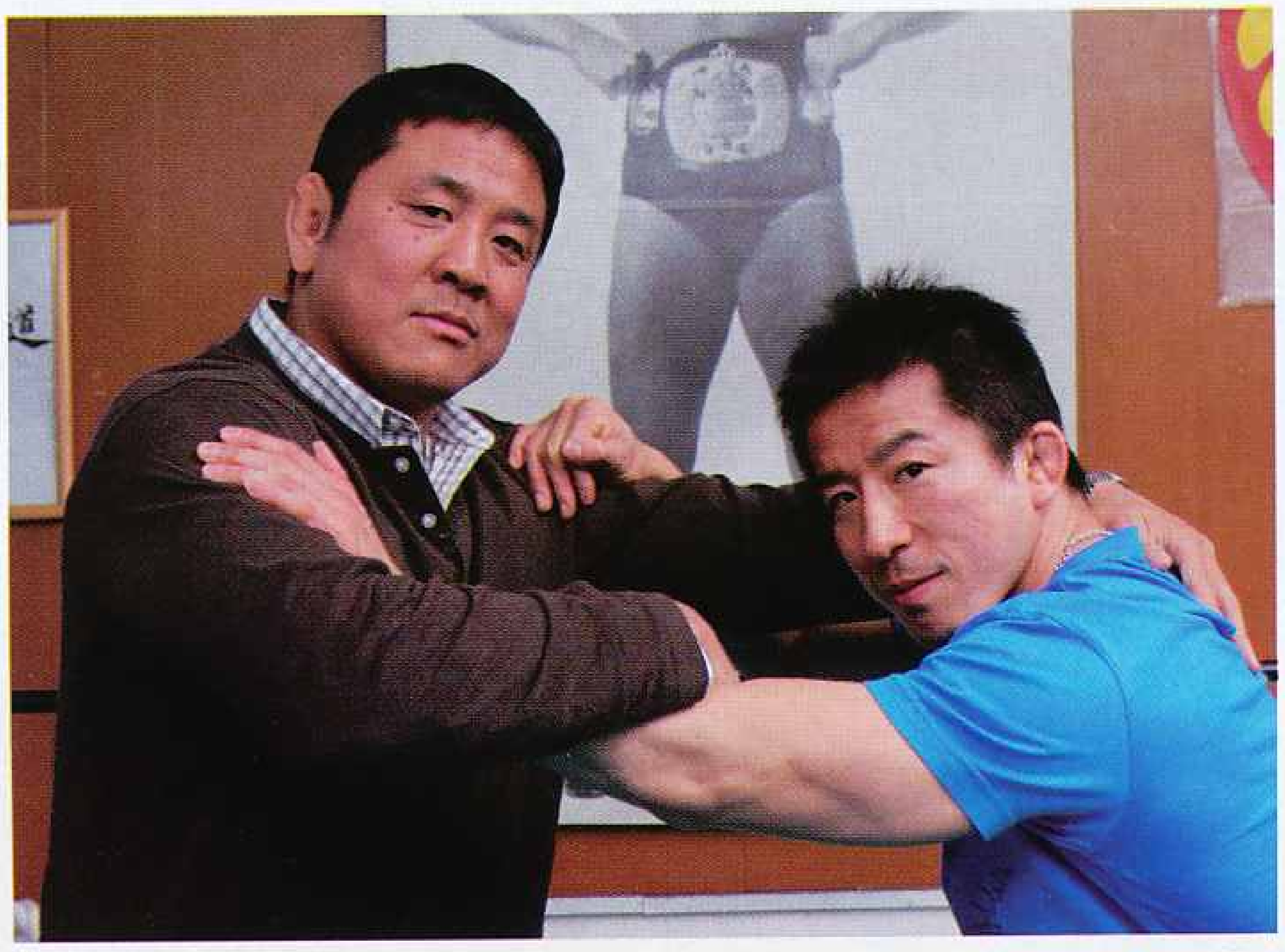
克彦 もう気が気じゃないみたいですよ、心臓が止まりそうになるって言われます。ウチの両親は兄貴の流血とかで免疫ができてるのか、意外に落ちついてるんですけどね（笑）。

――ダハハハ！ そんなところでお兄さんの怪我の功名が（笑）。

克彦 兄貴が首から急角度で落ちてるのとか、相手のヒザが顔面に落ちたのとか観てますからね。

――裕志さんは試合でけっこう凄い目に遭ってますもんね（笑）。

裕志 真壁とのタイトルマッチでは両親の目の前でハサミを突き刺されて血まみれになりましたからね（笑）。



ながた・ゆうじ■1968年4月24日、千葉県東金市出身。アマレス全日本学生王者の実績を引っさげ、92年に新日本プロレス入門。01年にはG1優勝。03年にはIWGPヘビー級王座の連続防衛記録の偉業を打ち立てた"ミスターIWGP"。06年には個人事務所『ナガタロック』を設立。現在はリング復帰に向けて療養中だが3,15『DREAM.1』には弟・永田克彦のセコンドとして登場した。183cm、108kg。

ながた・かつひこ■1973年10月31日、千葉県東金市出身。00年、シドニー五輪のレスリング（グレコローマン69kg級）で銀メダルを獲得。05年大晦日『Dynamite!!』で総合格闘家デビュー。07年、HERO'Sミドル級トーナメントに出場するも1回戦で宇野薫に敗戦。今年は『DREAM.1』のライト級グランプリに出場、1回戦でアルトゥール・ウマハノフに判定2-0で勝利。5月19日に2回戦に臨む。170cm、70kg。

――ダハハハ！ それだけ凄惨なシーンを観れば免疫もつきますよね。

裕志 あのときは父親の誕生日が近かったので、IWGPを防衛して大きなお祝いをするつもりだったんです。それなのに目の前で息子が大流血だもんな（笑）。

――まさに血がにじむほどの親孝行だったと（笑）。さて、克彦さんの2回戦の相手がこれまた強敵ですよ！ 4月29日のDREAMで再戦が行なわれるJZカルバンvs青木真也の勝者ですからね！

克彦 はい！ どちらも魅力的な選手なんで闘えるのが楽しみです。

裕志 これはどっちにしろテレビ放送はされますね！

――ダハハハ！ 1回戦は残念ながらダイジェストでしたからね（笑）。今回は大会のメインにもなりそうですね。

裕志 自分のすべてを出しきるのが一番大事だよ。あとはなんとでもなるよ！ たとえダメだったとしてもまた一からやり直せばいいわけだし。

――数々の修羅場をくぐってきた裕志さんの一言だけに重みがありますね。克彦さんはデビュー以来最大の大一番になると思いますが？

克彦 注目が集まるのは嬉しいですよね。プロになって大きな会場で試合経験を積めるということは、毎回オリンピックを経験してるようなことだと思ってます。次もその舞台を存分に楽しんで、悔いなく闘いたいですね！

裕志 大丈夫だよ、俺がセコンドにつくんだから。……また煽り映像にも駆り出されるのかな？

――ダハハハ！ 克彦さんの次戦、そして煽り映像にも期待してます！

【08年4月2日／東京・新日本プロレス道場にて収録】

いまこそ
“真剣勝負”
やれんのか！

青木vsカルバン戦、宇野薫問題を語る!!



DREAMにかかる二つの呪い



DREAMイベントプロデューサー

笹原圭一

“夢の舞台”として華々しいスタートが期待されたDREAMだったが、幕を開ければ青木vsカルバンのノーコンテスト裁定とそれに伴う処遇、さらに主催者推薦枠を巡る紛糾と厄介な問題を抱える事態に。この苦境をどう打開していくのか、またDREAMが目指すものとはいったいなんなのか。PRIDE誕生からイベントに関わり、DREAMのイベントプロデューサーである笹原氏に展望を聞いてみた。するとそこにはDREAMを取り巻く“二つの呪い”の存在が明らかに……!?　怖いよ～！

聞き手／ジャン斉藤

—笹原EP、おめでとうございます！ 今回は『DREAM・1』のときに比べると、かなり早いカード発表でしたねぇ。

笹原 ありがとうございます。……って、いきなり嫌味ですか？

—とんでもない!!（笑）。

笹原 いやいや、だってミドル級GPのメンバーはまだ揃ってないですから。

—まさか大会直前に選手を公募したりは……。

笹原 ああ、その可能性もなくはないですねぇ……って、何を言わせるんですか。もうある程度は固まっています！ 発表してないだけです。

—やっぱり、16人を揃えてマッチメイクするのは難しい作業なんですか？

笹原 そうですねぇ。GPというシステムは、PRIDEのときもやっていましたけど、いろいろと考えさせられるもんなんですよ。

—といいますと？

笹原 最初にやったのは2000年の無差別級GPでしたよね。で、そこから2003年のミドル級GPまでやらなかったことが、大きな財産になったんですよ。

—ズバリ言えば、充分な物語があったということですね。それでいて、その物語をGPという舞台に放り投げることでよりおもしろさが膨れあがって。

笹原 そうなんです。でも、2006年ぐらいには顔ぶれも似通ってきましたし、無差別級という“禁じ手”を使ったりして開催したわけじゃないですか。あのときのPRIDEであってもGPを開催することは、四苦八苦してたんですよ。

—ましてはスタートしたばかりのDREAMではっていう？

笹原 ただ、トーナメント形式だからこそ、多くの観客が熱狂できるドラマが生まれやすいんですけど。一つの興行が“点”で終わらず、“線”につながりますから。

—いまはそのドラマがどう転がるのか見えてこないですよね。異例の“没収試合”となった青木vsカルバン戦の裁定に両選手は納得されてるんですか？

ライト級GPのスポーツライクなイメージを壊したいと考えています



ライト級GP2回戦進出をはたした石田、川尻、永田。そしてカルバンとの再戦が決定した青木は「言いたいことは腐るほどあるけど、勝ちたいじゃなく勝ってみせるという試合をします」と憮然とした表情。日本人選手には“悪夢”から目の覚めるような活躍に期待が集まる。

笹原 青木選手にしろ、カルバンにしろ、それぞれ言い分はあるでしょうね。青木選手からすれば、実際に首にダメージを負っているワケですから。

—でも、カルバンからすれば反則負けというのも納得がいかないわけですよね。

笹原 そうでしょうね。VTRで判定しようにもかなり微妙なんですよ。首のところにすべってるような感じで当たっているんで。故意なのか、不可抗力なのか、ホントどちらとも言えない感じなんですよ。

—今日の記者会見、青木さんはイラ立ちを隠そうとはしませんでしたね。

笹原 青木選手からすれば、目の前のカルバン戦のことが精一杯で、2回戦のことは考えられないということだと思いますね。考えられないから、先のことは言ってくれるな！ と。それはそのとおりだと思います。

—先ほどの会見で青木さんは「2回戦のことは正式には聞いていない。それは主催者の都合です」とまで言われてましたけど。カルバン戦はともかく、2回戦の交渉がまとまらなかったということではないんですか？

笹原 いや、発表することに関して理解はしてもらってます。ただ、試合が終わってみないことには約束はできませんということですね。勝ってもケガをして欠場という事態になったら、またファンに対して申し訳ないということになりますし。

—青木さんはカルバンと闘うことに対して問題はないんですよね？

笹原 もちろんです。ただ、やっぱり大晦日と3月の試合を経て、この一戦に対する気持ちもだいぶ変わってきてると思うんですよ。

—その葛藤は、確実にあるでしょうね。

笹原 それは当然だと思います。それはこのカードだからこそだと思うんですけど、だからこそ我々もやらせたいんですよ。もちろんファンの皆さんも決着を見たがってるでしょうし。

—2回戦で青木vsカルバン戦をやって、主催者推薦枠をなくすという選択肢はなかったんですか？

笹原 もちろん、そういうアイデアもありました。

—選択しなかったのはどういう理由があったんですか？

笹原 それはライト級GPって、選手が若いということもあって、スポーツライクなイメージが強いと思うんです。だからこそ、青木vsカルバン戦はこういうかたちで決着をつけてほしいし、宇野選手を2回戦から登場させることによって、そのムードを壊したいという試みがあったんです。

—それによってドラマ性は確かに増しました。でも、競技として見ればおかしな話ですよね。『HERO'S』の“黒魔術”を毛嫌いしていたファンからすると、「またか……」という感じだと思うんですが。

笹原 そこは難しいところですよね。PRIDEのときも競技だけを重んじてやっていたかといえば、そうじゃなかったんですよ。それこそ桜庭vsホイス戦だってその最たるも

のだと思います。トーナメントでホイスの試合だけ無制限ラウンドってありえない話じゃないですか。
——全然ありえないですね（笑）。
笹原　そういう歪みが何かドラマを作ることもあるんですよね。で、競技ももちろん大切ですよ。なぜなら選手は過酷なリングで身を削って闘っている。そのリングに殉じるためには、まず前提として、競技として確立されていなければリングに上がろうとすら思わないでしょうし。そこに対しては本当に真摯じゃなきゃいけないという思いはあります。だから選手には100パーセント信頼して闘ってもらえる環境を作っていかなきゃいけないでしょうし。
——命を懸けて闘うわけですからね。
笹原　そうです。医療体制とかもそうですし、ルールも当然そうです。そこは、この競技に関わる者であり、ましてやプロモーターという立場であれば、大きな責任があると思っています。
——一連の決断を下した理由には、GP開幕戦となった『DREAM・1』で、イベントの危機感を覚えたということもあるんですか？
笹原　危機感というと、ちょっと違うんですけど、もっとおもいきったことをしなくちゃとは感じました。確かに主催者推薦枠というのは安易にやるべきものじゃないです。ただ、開幕戦で16人揃わなかったことを、逆手にとってライト級のスポーツライクなイメージを打ち破って、もっとドラマ感を出すために誰が必要かといえば、宇野薫っていうファイターはうってつけだと思いました。
——じゃあ、選手の怒りは計算のうちということですか？
笹原　もう当然。1回戦を勝ち上がった選手は、みんな、そう思うでしょう。普通は。
——宇野さんが今日の会見に来られなかったのは、スケジュールの都合なんですよね。
笹原　そうです。我々としても、なんとか出席していただきたかったんですが、逆にほかの出席者に火をつけてしまうかたちになってしまって。
——ところで川尻vsブスカペ戦って、再戦のテーマが見えづらいじゃ



DREAM旗揚げ会見ではPRIDE、HERO'Sのファイターたちが一堂に会し、まさに夢の舞台の実現に大いなる注目が集まった。しかし結果は食い合わせが悪いどころか、いまだに噛み合ってすらいないのが現状だ。

トーナメントにドラマ感を出すには宇野薫というファイターが必要です

ないですか。一部で噂されていた川尻vs宇野戦が崩れた影響なのかなって思ったんですけど。
笹原　川尻vs宇野戦はGPにかぎらず、私も観たいカードではありますね。今回の話をすれば、川尻vsハンセン戦にしようかっていう話もあったんです。で、ブスカペvsアルバレス。
——うーん、それは渋い（笑）。
笹原　川尻選手目線だったら川尻vsハンセンのほうがおもしろい。ただ、川尻選手とハンセンの因縁ってドラマ性で言えば、そこまで深いストーリーがあるわけじゃないじゃないですか。
——一度、修斗でやってますね。
金的のアクシデントで不完全燃焼になってますけど。
笹原　で、ブスカペvsアルバレスよりも、ハンセンvsアルバレスのほうが断然おもしろい。決め手はそこですね。
——この一戦を制したほうが、興行の中での存在にぐっと重みを増しますよね。つまり、〝主語〟になりえるというか。
笹原　そういう意味では、みんなテーマがある中で、一番テーマが見出しづらいのが川尻選手なんですよね。ブスカペも強豪ですけど、一度やってますし、勝利だけじゃなくてプラスアルファが求められるわけですから。
——川尻さんもテーマがない闘いだからこそ、一皮むくチャンスだということですか？
笹原　チャンスだと思います。というか、これがチャンスだと感じられるかってことですよね。
——話は戻りますが、宇野選手のドラマは興味深いですよね。
笹原　そうですよね。ある意味、このトーナメントの主役だと思います。
——もともと宇野選手は2回戦の主催者推薦枠じゃないと出ないという話だったんですか？
笹原　もちろん1回戦に出てほしいという話をしていたら、「ケガがあって出られない」ということで。でも、我々からすれば、『HERO'S』の象徴的な選手でもあるので、ぜひ出てほしかった。そのためにそうせざるをえなかったということですね。
——そこに駆け引きはなかったんですか？
笹原　ないです、全然。
——誰にも言いませんから。ここだけの話で。
笹原　何を言ってるんですか。何もないですよ！　だって、考えてもみてください。2回戦から出てくるって、ある意味メチャクチャ過酷ですよ。いまの宇野選手に対する状況が物語ってるじゃないですか。当然、本人もこうした状況になるだろうことをわかったうえで、出るという決断をしたわけですよ。その宇野選手

KEIICHI SASAHARA

DREAMのリングはまだ何を奪い合うのか見えてないんです

の胸の内を想像しただけでも相当ドラマチックじゃないですか。だから宇野選手には、いままでの『HERO.S』とかでも見せたことのない姿が見られるんじゃないかって期待してますけど。

――そのライト級と比べると、ミドル級はむしろスポーツライクさが足りないんじゃないかっていう（笑）。

笹原　真逆ですよね（笑）。田村vs船木戦とか、評判はいいですけどね。

――よく田村さんがすんなりトーナメントに出てきましたね。

笹原　まあ、桜庭さんもそうだと思いますけど、本音としてトーナメントは出たくないんでしょう。でも、興行的に熱を作っていかなくちゃいけにない。つまり桜庭さんは興行を背負ってるという感覚があるんでしょうね。間違いなく。

――ボクはいまの桜庭さんの捉え方って、もの凄く複雑なんですよ。格闘技って何が起こるかわかんないですけど、たとえば今回の対戦相手を含めての評価って、もの凄く微妙なところですよね。これは桜庭さんの物語をつなぐためのカードという側面はあるんですか？

笹原　それは、いきなり1回戦から桜庭vs田村を組めればそれに越したことはないですけど。そんなの絶対に無理じゃないですか（苦笑）。

――まあ、そうなんですけど（笑）。

笹原　さすがに現実的に難しいんです。いずれそういうゴールを目指しながら開幕戦を行なうということですよね。

――そういうことをひっくるめて、今回のミドル級GPで興行を背負ってほしい人は誰ですか？

笹原　いや、べつに誰でもいいですよ。やっぱり背負うって凄く大変なことじゃないですか。自分で口から出して言ったところで、言うのは簡単ですけど、実際にそれだけの結果を残してやっていくことは大変なことなんで。誰が背負ってくれても全然いいですよ。

――やはり、そこはプロモーターの思惑、選手の視線、ファンの熱が合致したところで生まれるものだったりしますよね。

笹原　そうですね。あとは時代背景とかもあるんでしょうし。そういうものの究極は高田vsヒクソン戦でしょうね。

――あそこまでのドラマはなかなか作れないですよね。

笹原　僕らは高田vsヒクソン戦が原風景としてあるんです。だってプロモーター側さえも次はないと思ってやってましたから。逆にあの試合があったおかげで、ずっと続けてこられた部分はあると思うんですよね。あの試合を超えないといけない！って。

――ああいう真剣勝負は人を惹きつけますよね。

笹原　あのムードは高田vsヒクソン戦まではいかないまでも作らなければいけないなとは思いますけどね。だから、高田vsヒクソン戦は、よくそのドラマを定義づけるときに負けたほうにもドラマがあるみたいな言い方をするじゃないですか。でも、勝ったほうはやっぱり輝いてましたもん。



旗揚げと同時に2階級で王座を巡るGPが開催されるDREAM。ファイターにとっては過酷な闘いの連続となるが、観る側にとっては感情移入しやすいのがトーナメント。金色に輝くベルトにどんな価値感が宿るのか？

――そうですか。自分はいつも分が悪いほうを応援しちゃうので、負けたほうに目が行きがちで（笑）。

笹原　当然負けたほうも、それは高田さんはもちろん見事なまでのドラマはあったと思うんですけど、やっぱり勝ったほうがすべてを持っていく感じってあったんですよ。

――そう考えるとヒョードルは、小川直也だのミルコだのいろんな選手を養分にしてきましたもんね。

笹原　勝ったほうが全部持っていけるっていうか、圧倒的に輝く舞台なのか勝負論なのかっていうのをやっぱり作らないとダメですよね。そうしないと敗者が輝かないですからね。

――ミドル級GPには、いまのところそういう“総取り感”が感じられなくないですか？

笹原　要するにDREAMのリングで何を奪い合うのかまだ見えていないんですよ。価値観っていう言い方が正しいのかはわからないですけど、そういったものがない中では勝負論はなかなか生まれにくい。僕らがそういう仕組みを作るしかないと思いますけど。あとは本当にお金ですよ。

――世の中、金ですか！（笑）。

笹原　たとえば優勝者が選手のファイトマネー総取りですってなったら、それは凄い熱気が生まれます。まぁ、現実的じゃないですけど。

――DREAMの価値観がまだ明確じゃないから、物語性も見えづらいところはあるんですね。そう考えるとPRIDEって凄かったんですね。

笹原　そうなんですよ。奇跡的なんですよ。PRIDEが簡単にできているように見えるんですけど、あれって本当に凄い積み重ねがあったからなんですよ。それが“60億分の1”みたいな言葉が空虚じゃなくて、血が通っていたと思うんですよね。やっぱりそれは時間がかかることだと思います。

――この前『戦極』や『DREAM.1』を観て、PRIDEの“呪い”が解けるのはけっこう時間がかかるなあと思ったんですけど。で、ここにきて、『HERO.S』の“呪い”もあったのかって（笑）。

笹原　“呪い”が二重にかかってますからね（笑）。

――かかってる実感ってありますか？

笹原　呪いは感じませんけど、どうしても二つの大会のイメージを意識の下で引きずっちゃうところはあるでしょうね。だから僕らは、何かこう素っ裸になって踊り出すくらいの勢いでやらなきゃって思いますけど。

――なるほど。

笹原　それにはやっぱり、やる側が「えっ？　そんなのやっていいの？」っていうぐらいのことをおもいきってやらないとダメだと思うんですよ。

――そうですね。だから、自分は青木vsカルバンの再戦を発表したときに、「これはPRIDEの呪いが解けるチャンスかもしれない」って思ったんですよね。

笹原　そういう意味では、後楽園ホールあたりでワンマッチ興行とかやりたかったんですけど……、いろいろ難しいんですよねぇ。

――我々みたいに好き勝手に言うほど簡単ではない（笑）。

笹原　いえいえ。

――では、『DREAM.2』と『DREAM.3』に期待してます！

【08年4月4日／都内ホテルにて収録】



いまこそ“真剣勝負”やれんのか!

HIROYAvs藤門嘩裟戦&THE OUTSIDERに夢中のサダハルンバが大提言!

マット界には幻想が足りない!



K-1イベントプロデューサーにして“格闘技評論家”（←幻想?）

谷川貞治

**今号も“格闘技評論家”サダハルンバにマット界の動向を直撃!
一部で大注目されていたHIROYAvs藤門嘩裟戦の直後にインタビューしたということもあって、
サダハルンバはこの一戦について語りまくり、興奮を隠せぬ状態。
しかし、この試合からマット界に不足している“幻想”についても語ってくれた。
はたして、サダハルンバの考える“幻想”とは?　そして“幻想”の作り方とはいったい!?**

聞き手／ジャン斉藤

鬥嘩裟くんは世の母親たちの涙を誘うような闘い方をするんだよね

谷川　斉藤く～ん、山本さんの本（『生前追悼ターザン山本！』）って売れてるの？

――おかげさまで、死んで大好評です!!

谷川　んあ～！　あの本、確かにおもしろいもんねぇ。ボクはね、（古関）夢香さんのインタビューがホント笑った!!　幻想があるねぇ、夢香さんという人には。

――それは何よりです（笑）。

谷川　あと本全体の印象としては、なんだか懐かしいなあという感じがしたなあ。

――ターザン山本！の個人史というよりは、90年代の元気があったマット界がよくわかる仕組みにもなってますからね。

谷川　そうそうそう。そういう懐かしさがある。でも、よかったねぇ、売れて。

――最近のターザン関連書籍って、かなり数字が芳しくなかったんですよ。今回の本はその3倍は売れてるみたいです！

谷川　へえ～。死んでたったの3倍かあ。

――ダハハハハ！　まあ、そのベース自体が想像以上に低いんですけどね（笑）。

谷川　で、山本さんはなんて言ってるの？

――喜んでるみたいですよ。ただ、いじられることでおもしろくなっているのに、自分自身がおもしろいんだみたいな勘違いがまた始まっちゃったらしくて。

谷川　んあ～。山本さんにありがちなパターンだねぇ。

――まあ、ターザンの話はともかく。今月も"格闘技評論家"の谷川さんにいろいろお話をうかがいたいんですけど、昨日の藤鬥嘩裟vsHIROYA戦はおもしろかったですね！

谷川　おもしろかったねぇ～（しみじみと）。藤鬥嘩裟はひさびさに凄い素材だね～!!

――まだ15歳だからあたりまえなんですけど、まだ完成されてない感じがもの凄く魅力的ですよね。まだまだ磨きがいがあるというか。

谷川　あと加藤会長も凄いよね！　なんかさ、大会前日の記者会見で聞いたんだけど、会見前に鬥嘩裟くんを20キロも走らせたらしいからね。

――ザ・極真!!（笑）。

谷川　それに一日に60ラウンドのスパーリングをやってるんだって。そんなヤツいないよ、プロでも！　ホント将来が楽しみだよね。

――HIROYAくんの場合って、ファイターとしての完成形が見えるじゃないですか。

谷川　HIROYAくんは見えるよね。正当派というか、魔裟斗的になっていく感じ。顔つきもずいぶん変わったし、少年のかわいさがなくなって、凄くふてぶてしさが出てきたというか、もともと持っている自我の強さが出てきてる。鬥嘩裟くんはまだ想像はつかないから、どういうふうになるのかがわからない。だって、いちいちおもしろいもん。負けちゃったら自殺でもしちゃうんじゃないかなって心配してたんだけど。



青木vsカルバン戦なみに昨年末から"おあずけ"となっていたHIROYAvs藤門嘩裟戦。勝負はHIROYAがものにしたが、試合後のコメントで「ボディは効かなかったんですけど、徐々に動けなくなってしまって……」と言える藤門嘩裟もまた"勝ち"である！

――それくらいの幻想があるってことですね。

谷川　幻想あるよねぇ。試合が終わったあとに鬥嘩裟くんの控室に行ったんだよ。そうしたらシャワーを浴びてて会えなかったんだけど……きっとシャワーを浴びながら泣いてたんだなあって。

――ダハハハハ！　そうあってほしいですね（笑）。あと彼女ができたらどうなるんだろうとか興味ありませんか？

谷川　（唇を尖らせて）それは作ってほしくないなあ。

――んあ～！　鬥嘩裟くんを汚すな！　と（笑）。

谷川　いやあ、ちょっと大事に育てたいですよ。あと思ったのはさ、鬥嘩裟くんは世の母親たちの涙を誘うような闘い方をするんだよね。

――サダハルンバのコンピュータがもうそんな答えを弾き出しましたか（笑）。

谷川　なんか、母性本能くすぐるんだよね～。子どもを持ってない人でも、自分の子どもが闘ってるように見えるじゃない、鬥嘩裟くんって。

――いてもたってもいられない危うさがあるんしょうね。今回の試合って、戦前から盛り上がってたじゃないですか。肝心の試合もよかったですし、この先の語りがいもある。大人のファイターも見習わないといけないものがありますよね。

谷川　うん。最近の中でおもしろかったものって、鬥嘩裟くんの試合と、前田（日明）さんの『THE OUTSIDER』だもんねぇ。

――ほうほう。

谷川　やっぱりさ、チーマーとか暴走族の方々のステゴロのケンカって見たことないから、普通に興味があるじゃない。で、その人たちがどのくらい強いのか、何を背負ってるのか、その人たちの周りはどうなってしまうのか？　乱闘があるのか？っていう興味も凄くあった。

――試合を基点にして妄想が膨らんでいくということですか？

谷川　そう。会場で「何が起きるんだろう？」っていう幻想が凄くあった。で、ここ最近はK－1MAXやDREAMとか、いろんなイベントがあったけど、一番幻想があったのはHIROYAvs藤鬥嘩裟戦、そして『THE OUTSIDER』かな。『THE OUTSIDER』は満員になったし、いまの時代、やっぱり"幻想"にお金を払うってことですよね。

――リアルファイトだからこそ、よけいに幻想が生命線になってるのかもしれませんね。

谷川　鬥嘩裟くんには幻想があった。やっぱり加藤会長と藤鬥嘩裟の師弟関係は、『あしたのジョー』のジョーと段平に見えてくるし、そこには極真も見えるもん。

――最近の格闘技界って、負けちゃうと幻想が崩れてしまうと思われがちじゃないですか。でも、そんなことは全然ないってことですね。

谷川　負けて膨らむ場合だって当然あるよ。その幻想はすぐメッキがはがれるものもあれば、どんどん幻想が膨らむこともあるんだけど。

――いまの格闘技って競技的なフィールドに片足を起きつつ幻想を作り出さないといけないから、けっこう



本当に開催されてしまった日明兄さんプロデュースの3.30『THE OUTSIDER』。サダハルンバはこれを全面バックアップする姿勢をとっていたが、終わってみると、そこには"不良のケンカ大会"に魅了されたサダハルンバがいた。

スポーツというのはもう何かしらドラマがないと見られなくなってる

大変ですよね。

谷川　凄く難しい。でもね、確かにそこのバランスは重要だけど、だいたい格闘技にかぎらず、スポーツというものは、もう何かしらドラマがないと見られなくなってるでしょ。

——そのスポーツが持つゲーム性だけで成立させるのは難しいってことですか？

谷川　競技性以外のもう一つの目線がないと見られなくなってる。それはやっぱり幻想があるものに惹きつけられると思うなあ。朝青龍もそうだし、亀田親子もそう。「どんなもんなんだろう？」「何が起こるんだろう？」というそんな幻想が、いまの格闘技界に足りないなって。

——そうすると、最近のDREAMってどうですかね。

谷川　DREAM!?　ボク、笹原くんたちに任せっぱなしだから、最近のことはよく知らないんだよね〜。

——あれれ〜？　青木vsカルバン戦の強引なスケジュールや、宇野選手の主催者推薦枠は、谷川さんの黒魔術じゃ……。

谷川　違〜〜う!!　ホントにDREAMのことは知らないんだよ。いろいろ誤解されるから、ボクはあんまりDREAMを語らないほうがいいと思うけどなあ。

——それ、逆にもの凄く不自然ですよ！　じゃあ、"格闘家評論家"として語ってください。

谷川　そうだねぇ。DREAMのミドル級GPはおもしろいんじゃない。顔ぶれはメチャクチャ豪華だし。

——ありきたりな意見だなあ（笑）。物語は確かに重厚なんですけど、興味のない人間の首根っこをつかまえて振り向かせる力が足りない気がしませんか？

谷川　だから、なんていうかなあ。DREAMはちょっと風向きを変えないとダメだよね。

——ライト級GPは青木vsカルバン戦と宇野vs石田戦の経緯がよくも悪くも波紋を起こしていて、一つのきっかけになりそうですよね？

谷川　選手の頑張り次第では、きっかけになる感じはするよねぇ。

——で、ミドル級GPはというと……。

谷川　そうだねぇ……。一番大きなきっかけになると思うのは、●●●●●●●●●●●●●ことじゃないかなあ。

——……それ、鳥肌全部立ちましたよ！

谷川　ねっ!!

——でも、それって現実的な話なんですか？

谷川　いやあ、知らない（キッパリ）。

——ダハハハ！　ミドル級GPはまだ1回戦のカードが出揃ってませんけど、桜庭さんのカードってどう思います？　相手は極真空手のアンドリュース・ナカハラ。

谷川　桜庭vs極真はメチャクチャ興味はあるけどね、ボクは。

——ホントですか!?　ボクはまったく心躍らないですねぇ。

谷川　ほら、ボクは極真幻想を持ってるから。それにアンドリュース・ナカハラはただでは転ばないと思いますよ。サクちゃんのアバラくらい軽く折りそうだもん。

——いや、確かに格闘技って何が起こるかはわからないし、ナカハラが勝ってもおかしくない。試合がスイングするかもしれない。でも、そういうワクワク感が浮き上がってきてるかといえば……。

谷川　なってないよね〜。それはね、ティシェイラ選手も一緒なんですよね。

——K—1に参戦する極真の世界王者ですか。

谷川　ホントはメチャクチャ巨大な幻想あるはずなのに。まずは試合させないとダメなのかなあ。

——いまの桜庭さんもここ最近はヒリヒリする試合をこなしてないから、そういうムードを作りづらくなってるところはありますよね。

谷川　うん。

——やっぱりDREAMからすると、桜庭さんのこの先を見据えて、興行論的にこういうカードを組まざるをえないということなんですか？

谷川　いや、そんなことないはずですよ。サクちゃんにとっては相手じゃなくて、トーナメントがイヤだということですよね。

——じゃあ、秋山成勲とも……。

谷川　まあ、サクちゃんはやりたくないだろうね。秋山くんはやりたいだろうけど。

——その二人がやることも、大きなきっかけですよね。

谷川　ボクはいつかどこかで実現すると思ってるんで。それよりいまのDREAMは、ありえない展開がどんどん起こっているので、そこをどう転がすかということを問われていると思うなあ。



DREAMミドル級GPで最も幻想を抱けるファイターといえば秋山成勲。対戦相手が誰であれ、絶対に試合を観ずにはいられなくなるその魔力は、いま誰よりも強い。

幻想でいうと秋山くんがダントツ いまの秋山くんには誰もかなわない

――ちょっと見え方が変われば、メチャクチャおもしろいんですけどねえ。

谷川　おもしろい!!　青木くんの件だって、宇野くんの件だって、こんなにおもしろいことはないと思うんだけど、なぜかいまの時代はネガティブに捉えられてるからねぇ。

――それ、完全に黒魔術だと思われてるからですよ！(笑)。

谷川　ボクっぽいよねぇ。起きてることが笹原プロデューサーっぽくないんだよな〜。想像のつかないところに事態が転がっちゃってるから。いまやってるK−1MAXとかのほうがよっぽど笹原くんっぽいよね。歯ごたえがある試合ばっかりでさ。

――確かにそうですねぇ。やっぱり、いまのファンって、PRIDEのイメージを持ってDREAMを観たりとか、『HERO'S』のイメージを持ってDREAMを観ていたりすると思うんです。その二つのイメージをいい意味で吹き飛ばすインパクトはほしいですよね。

谷川　ここはちょっと流れを変えてほしいなあ。

――話を戻すと、先ほどおっしゃった●●●●以外で幻想を作れるのってなんだと思いますか？

谷川　やっぱり秋山くんだよねぇ。

――魔王ですか！　黒い幻想ですねぇ(笑)。

谷川　秋山くんってやっぱりおもしろいんだよ。いま秋山くんがなんと歌手でデビューしちゃって、その歌が韓国のヒットチャート4位になってるの。で、「秋山くん、凄いね、4位だって？」ってほめたら、「いやー、4位ですからねぇ」って。え、1位を狙ってるの⁉　っていうかさあ。

――さすが魔王(笑)。

谷川　そういうところがね、みんなのヒール感を含めて琴線に触れるんだろうなって思ったね。

――魔王とか呼ばれたり、ヒール扱いされてることには抵抗があるんですかね？

谷川　あんまり気にしてないね。秋山くんの周辺はもの凄く気にしているかもしれないけど。気にしてたら大晦日のあの花道は歩けないよ。試合できる精神状態にはならないし、普通だったら動揺するよ。だから、幻想でいうと秋山くんがダントツですよ。もちろんKIDくんにもあると思うし、サクちゃんにもあると思うし、宇野くんとか、青木選手にもあると思うけど、いまの秋山くんには誰もかなわない。

――そういう幻想って、作ろうと思って作れるもんですか？

谷川　個人的なことを言うと、作れたか作れないかは別にして、作りたいなとは思ってました。ボクが好きなのはやっぱり『空手バカ一代』とか梶原一騎とか、アントニオ猪木とか。幻想で成り立っているプロレスや格闘技だったからね。だから、試合内容や、ストーリーのおもしろさというよりは、ボクは幻想が大好きだったんですよ。でも、いまの選手でなかなかそういう人っていないもんね。

――幻想を抱かせるには、何かしら背負ってないと難しいですよね。もしくは誰かからすべてを奪ってきた凄味があったり。

谷川　そうそう。90年代の最大の幻想は、グレイシー柔術でしょ？　そういう存在が出てくると、この業界って活性化するんだよね。

――そういえば、魔裟斗選手って、いまの日本人格闘家の中では一番背負っているものが大きいはずなのに、なかなか幻想が感じづらいですよね。

谷川　そうだね〜。あのさ、魔裟斗くんってメチャクチャ凄いんだよ!!

――さすがにそれは知ってますよ！(笑)。

谷川　魔裟斗くんはさ、全格闘家の鑑だよ！　だってカラコダなんて蹴ってれば勝てるのに、ちゃんとボクサーの世界王者に殴りにいってKOしてさ。

――そうですよね。1回戦で魔裟斗が負けたら今年のK−1MAXはたいへんなことになっちゃうじゃないですか。

谷川　ヒヤヒヤしたよ〜!!　あれはできることじゃないねぇ。あの魔裟斗くんに達人っぽい凄さというか、そこは幻想じゃないけど、他人ができないことをあたりまえのようにやっちゃうんだよね。だからいまの魔裟斗くんは、ボクらの理想の魔裟斗をいとも簡単に達成しちゃっている凄味があるんですよ。

――谷川さんの今年は幻想がキーワードですか。

谷川　そうだねえ。このあいだの『THE OUTSIDER』も、HIROYA vs藤門嘩裟も幻想があったから、みんな見入るし、凄くおもしろく思える。幻想がなかったら観ないもん!!

――んあ〜！　観ないもんって(笑)。



4.9K-1MAX広島大会にて、トーナメント1回戦でヴァージル・カラコダと闘った魔裟斗。パンチを得意とするカラコダ相手に、魔裟斗はあえてパンチで勝負！　この魔裟斗の男気あふれるファイティングスピリットがいつもサダハルンバをうっとりさせてやまないのである。

SADAHARU TANIKAWA

谷川　たとえばさ、今度、武蔵vs澤屋敷をやるけど、最大のテーマは本人たちが幻想をどう作れるかってことだよ。何か自己表現しなきゃいけないし、ただスポーツとしてのK−1をやるだけじゃダメだと思うなあ。

――そこから渦は起きてこないですよね。逆にプロモーター側が幻想を作るときってたとえばどんな手段がありますか？

谷川　一番それができるのはマッチメイクですよ。壊すのも作るのも。基本的に作ろうと思ってやってるけど。

――結果的に壊してしまうときもあるんですよね？(笑)。

谷川　(唇を尖らせて)　そんなの、興行は水物なんだからさあ。

――ダハハハ。

谷川　でも、選手のコントロールが効かなくなってくると、プロモーター側もあえて壊そうとするよ。

――壊しますか!!(笑)。

谷川　そういうのは逆にいうと、興行としての幻想になるんだろうね。

――ズバリ、PRIDEはそうでしたね。

谷川　そこはさ、興行側としても勝負なんだよね。だから、秋山vsデニス・カーン戦なんて、秋山くんを潰すマッチメイクに見えるかもしれない。でも、秋山くんがそれを乗り越えちゃうから！　そのへんの期待度が高い選手がファンが期待するハードルを越えてくれたら一番嬉しい。魔裟斗くんにしても、もの凄く安心できる。たとえば興行側だと佐藤vs



主催者推薦枠というかたちでDREAMライト級GP2回戦から参戦することが発表された宇野。宇野自身3月14日『DREAM.1』前日会見以来、公の場に姿を現わしていないが、この男の途中参戦はライト級GPに火をつける要素になることは間違いない。

SADAHARU TANIKAWA

推薦枠を納得させるほうがたいへんだった。でもここで宇野くんは必要

魔裟斗は本当はやりたくない。どっちか潰れちゃうというか、ましてや魔裟斗くんが潰れたらどうしようというのがどっかにあるから。でも、魔裟斗くんを観てると「やらせたいなぁ」と思えちゃうから。

——谷川さんは選手を甘やかしているつもりはないんですか？

谷川 ボクはないなあ。

——ホントですか⁉（笑）。

谷川 ホントだよ〜。ボクは甘くないことを甘いように見せて納得させちゃうから。それに、いまのほうがファイターに対して命令形にマッチメイクできると思うんだけど。

——ホントですか⁉ なんかダマされてる気がする（笑）。

谷川 いやいや、ボクはK−1とPRIDEの対立時代のときのほうがファイターにコントロールされてたよ。もの凄く選手に気を使ってたしさあ。「PRIDEでは1泊余分に泊まらせてくれました」とか「ファイトマネーが1000円高かった」とか言われるだけでドキドキしていたもん。

——ダハハハハ！ なんて、みみっちい話でしょうか（笑）。

谷川 でも、あのときはそういう状況だったんだよ。いまは意識するライバル団体がないから「だったら出なくていいよ」って突っぱられるからねぇ。

——そうですよね。いまはお金の話になったらキリがないですし。

谷川 ホントにキリがない。ファイターには「ボクらは与えられた材料で充分選手を育てていくだけだから、キミはどっちが得かを考えて」っていうような暗黙のプレッシャーをかけられるよ。

——すると、宇野さんの主催者推薦枠というのは裏側で何か駆け引きがあったわけじゃないんですね？

谷川 全然ないよ、そんなの。それに宇野くんはこういうかたちで出るのはイヤだったみたいだから。

——本人からしたらイヤですよ。

谷川 宇野くんに推薦枠を納得させるほうがたいへんだった。でも、ここで宇野くんは必要だし、重要なポジションにいると思うけどね。

——これで石田選手との試合はかなり盛り上がりますよね。

谷川 でしょ？ とくに日本人では胸を張ってPRIDEの選手と対抗させられるよね。その存在感から技量から何から。

——そこはスポーツ性だけのおもしろさじゃないですね。

谷川 いやあ、スポーツ的視点だけでは絶対に難しいよ。話はズレるかもしれないけど、野球中継ってなんでおもしろくないかわかる？

——いや、わからないです。教えてください!!

谷川 それはさ、解説者がつまらないんだよ〜！

——ああ、それってご自分の解説がうまいってことを主張したいんですか？（笑）。

谷川 （鼻をピクピク膨らませながら）まあ、そうなんだけどさ〜。

——ククク。やっぱり谷川さんのリアクション解説がないとさみしいですねぇ。

谷川 それに比べて野球の解説って暗いし、やけに選手のダメなところをけなすし、幻想がまったく生まれない！ 解説上手のボクがやったほうがいいと思うなあ。

——「バットが折れた!!」とか「ボールが速いなあ」とか、なんて初心者に優しい解説（笑）。

谷川 それにスポーツって、みんな意外と観ないもんだよ、最近は。今年は北京オリンピックだけど、オリンピック予選もあんまり視聴率がよくないみたいだし、注目もされてないんだよね。このあいだの柔道も井上康生、鈴木桂治、YAWARAちゃん（谷亮子）も出たのにそんなでもなかった。

——やっぱりオリンピックのおもしろさって、結局はナショナリズムだったりしますよね。

谷川 そうそうそう!! 一昨年のワールドベースボールクラシックや、今回のハンドボールもそうだけど、理不尽な出来事があったりして、ナショナリズムをいかに高揚させるかだよね。

——はっはー。それで今回のDREAMで谷川黒魔術の〝黒い差別〟が炸裂したわけですねぇ。

谷川 炸裂してな〜い!! 誤解を招くこと言わないでよ、もう！ 単純に競技としての完成度をファイターとかスポーツマンは目指すべきだけど、プロモーター側はどうやってドラマにしていくが問われるんだと思うよ。それは幻想を作り出すってことにもなるけど。

——もの凄く話の腰を折りますけど、ターザン山本！さんに幻想はありますか？

谷川 みんなは山本さんに幻想はあるの。だけど、山本さんが自分で壊しちゃうのよ。あれにはもの凄くガッカリする！ 理想のターザン山本！はいまみたいじゃないのよ。「本当はいまの山本さんが理想だ」と言われたら、それは悲しいでしょ。

——それは大事ですね。理想の秋山成勲、理想の桜庭和志、理想の青木真也に本人たちがどう応えるか。

谷川 まあ、DREAMにしても、いかに理想のファイター像に沿うようなマッチメイクやストーリーを作って、そこで選手が頑張るか頑張らないかですよね。

——最近、谷川さんの理想に応えてくれなかった人って誰ですか？

谷川 誰だろうなあ……。前田さんかなあ。

——ほほう（笑）。

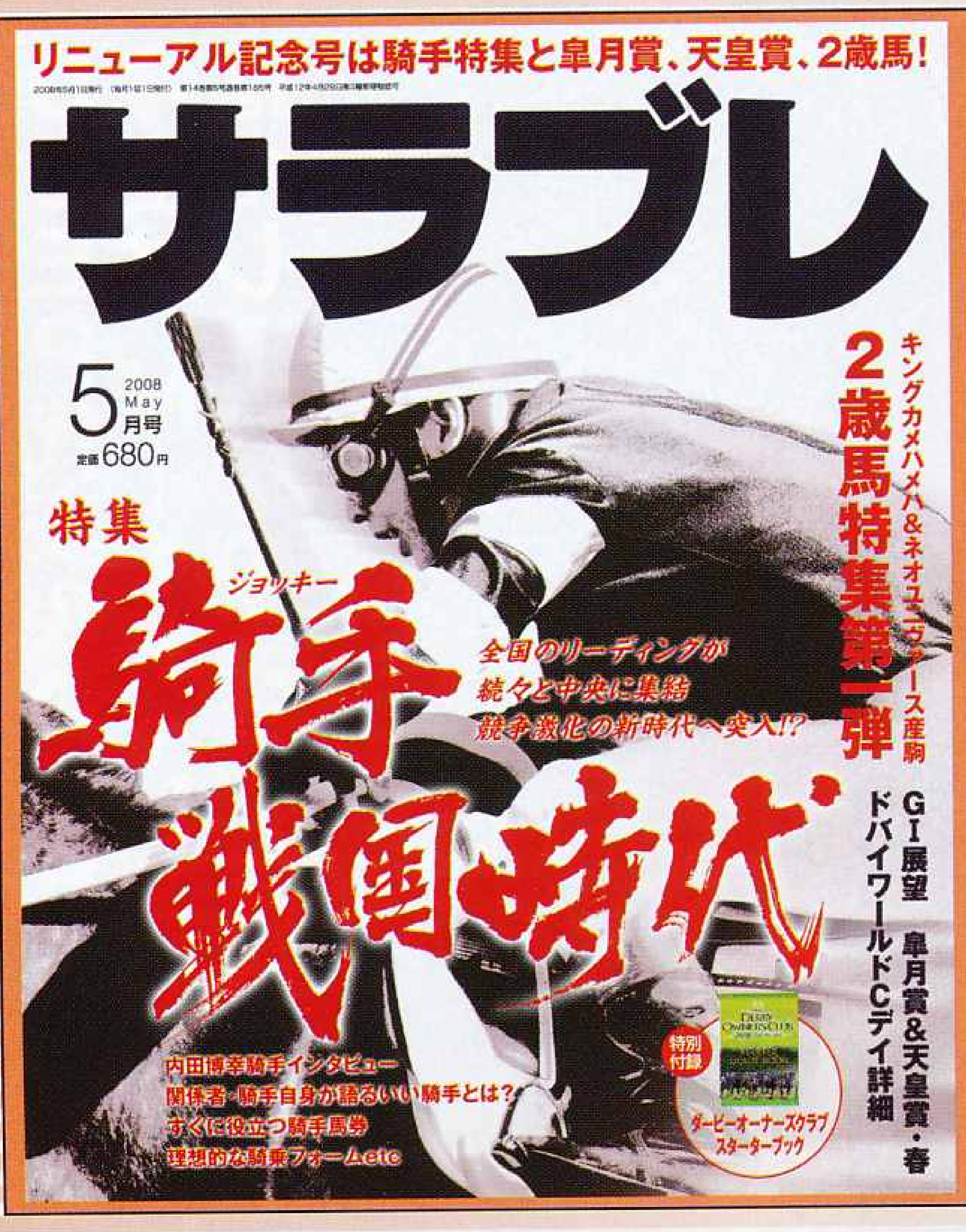
谷川 いやあね、昨日前田さんがわざわ広島までK−1を観に来てくれたんですよ。で、せっかく来てくれたから佐藤選手の試合のプレゼンテーターをやってもらったんです。そこで田村選手のときのようにトロフィーを投げつけたら、理想の前田さんだったのになあって。

——ダハハハハハハハハハハ！

谷川 「なんでそんなことするの!!全然関係ないのに！」っていうか。でも、それが前田日明だよなあ……（うっとり）。

——以上、理想のサダハルンバでした!!

【08年4月10日／都内某所にて収録】



サラブレ5月号　絶賛発売中　定価680円

豪華仕様で読み易く!　リニューアル記念号

競争激化が著しい騎手の世界をあらゆる角度から分析!

特集 **騎手戦国時代**（ジョッキー）

内田博幸騎手インタビュー／ユタカをつかまえる騎手は現れるのか!?／坂井千明氏が語るU-22Jockeys／調教師・騎手に聞くよい騎手とは!?／騎手馬券術FILE／騎手データ大作戦!／騎手の騎乗技術に迫るetc

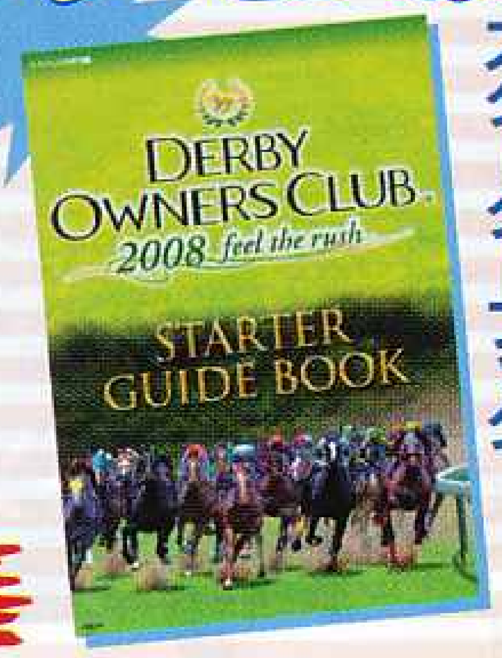
特別企画

春のGI展望
長谷川仁志と柏木集保が混戦を読み解く!
天皇賞・春
トライアルから導く皐月賞的中への道
皐月賞

2歳馬特集 ▶第一弾◀
ダービー馬はダービー馬から! 今年産駒デビューの新種牡馬
ネオユニヴァース&キングカメハメハの2歳馬産駒をPickUp

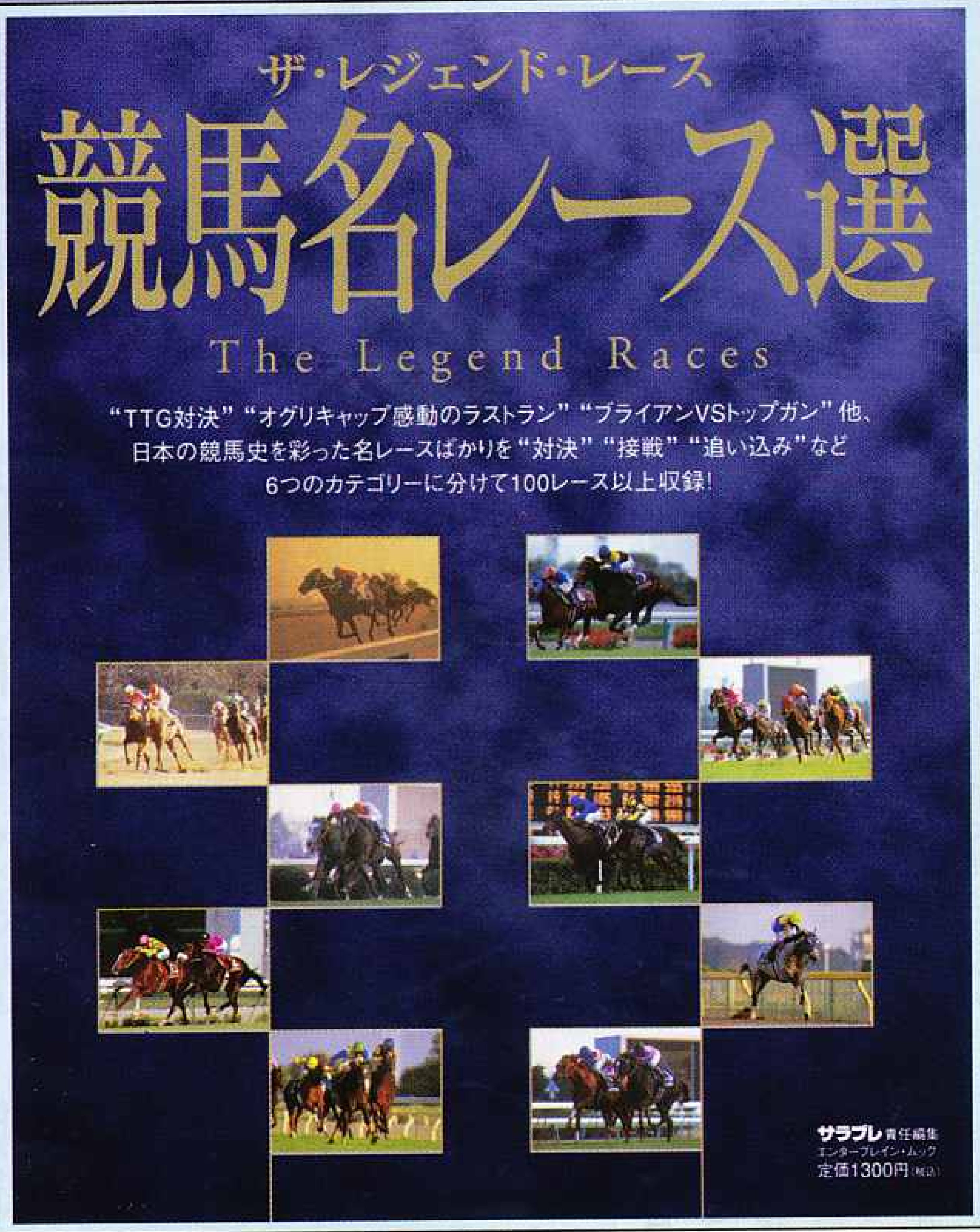
ゲーセンで大人気

特別付録小冊子 ダービーオーナーズクラブ スターターブック



その他、新連載&リニューアル企画満載

競馬月刊誌 サラブレは毎月13日発売!



ザ・レジェンド・レース

競馬名レース選

The Legend Races

サラブレ編集部・編

これだけは知っておきたい日本競馬史に残る名勝負を100レース以上収録!

"TTG対決" 1977年有馬記念、"オグリキャップ感動のラストラン" 1990年有馬記念、"ブライアンVSトップガン" 1996年阪神大賞典、"頂上決戦" 1997年天皇賞・春、"帝王奇跡の復活" 1993年有馬記念、"常識破りの三冠獲り" 1983年菊花賞、"悪夢の大波乱" 1987年有馬記念、"3強ダービー" 1972年・1993年・1999年ダービー、"歴史を塗り替えた史上最強牝馬" 1997年天皇賞・秋 他

AB判　160ページ
定価1300円(税込)
絶賛発売中

ケータイサイト
サラブレmobile
月額 315円(税込)

すべてのキャリアで3Gに対応していますが、一部非対応機種があります。詳細はサイトにアクセスしてください。

iモード　メニューリスト▶趣味/娯楽▶競馬/競輪/競艇▶サラブレモバイル
EZweb　EZトップメニュー▶カテゴリ検索▶懸賞・くじ・ギャンブル▶競馬▶サラブレモバイル
Yahoo!ケータイ　メニューリスト▶趣味・レジャー▶競馬・公営競技▶サラブレモバイル

enterbrain　株式会社エンターブレイン　〒102-8431　東京都千代田区三番町6-1　電話0570-060-555(代表)　http://www.enterbrain.co.jp/



©real

DEEP代表&DREAM広報が今度は『M−1チャレンジ』日本監督に就任！はたして、その真意とは!?

なぬ!? 渦中のヒョードルとロシアで密談!?

3、2、1、メガトン！ メガトン!!

佐伯繁

旗揚げ前に『M-1グローバル』からの離脱が明らかになった“最強皇帝”ヒョードル。そんな渦中の男の隣でニッコリ笑顔を浮かべるのが“メガトン”佐伯繁DEEP代表だ。現地時間の4.3『M-1チームチャレンジ』なる9ヵ国10チームによる対抗戦をメインとする大会に“日本チーム監督”としてロシアへ足を延ばした佐伯さんを帰国後に捕獲。ヒョードル問題、そしてドタバタ続きのDREAMについて話を聞いてみました！

聞き手／阿修羅チョロ

——え〜、今日は『M—1チームチャレンジ』（以下・『M—1チャレンジ』）の日本監督に就任し、初采配となるロシア大会で勝利を収めた佐伯監督にヒョードル問題を中心に話を聞かせてもらえればと思ってます！

佐伯　いや〜、3日前に日本に戻ってきたばっかりなんだけど、ヒョードルに関しては、よくわかんないんだわ。

——え〜、そうなんですか。じゃあ、違う人に話を聞こうかなぁ。

佐伯　いやいや、ちょっと待ってよ！ M—1のロシア側のワジム（・フィンケルシュタイン）さん（レッドデビル代表）さんにも会ったし、アメリカ側のモンテ（・コックス）さんも前から知ってるからね。そういえば、モンテさんはM—1はやめて、新しい大会をやるんだよな。

——『アドレナリン』って大会をやるみたいですね。

佐伯　ロシアへ出発する前に「ヒョードルがM—1を脱退するんじゃないか」って騒がれてたんで、どうなるんだろうって思って行ったんだけど、向こうでヒョードルに会ったら凄いニコニコしてたよ。会場では俺の隣に座ってたしね。

——ほぉ、実際に会ってるんですね。じゃあ、ヒョードルの今後の動向とか情報はつかんできたんですか？

佐伯　いや、全然。いきなり俺の隣に座ってきて、横見たらニコって笑うから俺もニコッとしたんだけど、俺は英語もロシア語もしゃべれないし、どっちかというとガイジンは苦手なもんで、用事があるフリしてその場を去ったの（笑）。

——何やってるんですか！（笑）。

佐伯　まあ、マスコミは「ヒョードルは次にどこに上がる」とか興味があるんだろうけど、正直な話、DEEPに上がる可能性はまったくないでしょう。

——残念ながらないでしょうね（笑）。

佐伯　そうでしょ。今回はヒョードルも協力する『M—1チャレンジ』という大会の話が自分たちのところへ来て、それで「協力します」ってなってロシアに行っただけのことだから。

——ちなみに、今回の話があったのは、いつぐらいなんですか？

佐伯　今年の2月とか、最近だよ。ただ、ロシアっていうのは難しい国で、いやいやロシアだけでなく海外全般に言えるんだけど、なかなか物事が進んでいかないんだわ。どこまで本気かもわからんし、昔、韓国でイヤな思い出もあるしね。

——直前で中止になった大会とかもありましたからねぇ。

佐伯　今回も正式決定してから大会まで日程もなかったからホントに大変だった。国別対抗戦のチーム数とかも最初の話とは変わったし。当初は日本チームもAとBの2チーム作るプランもあって、実際に10人セレクトしてたからね。

——それが半分の5人になってしまった、と（笑）。

佐伯　そうそう。で、なんで俺が監督になったかっていうと、ぶっちゃけた話、いまでもよくわからんけど、人望があると思われたんだろうな。それでメンバーの編成を頼まれたってわけ。

——まあ、そのへんは佐伯さんは顔が広いですから、適任かもしれませんね。

佐伯　そう？　まあ、最終的に日本チーム二つじゃなく、韓国チームも作ってほしいってことになったんだけど、それが決まったのが3月10日すぎとかだよ。

——DREAM旗揚げ戦の直前じゃないですか？

佐伯　そうそう。そこからビザの申請のためにパスポートや写真を集めたりドタバタしてたんだよ。15日にはDREAMがあったし、あともう一つ、このあいだ韓国で旗揚げした大会なんだっけ？

――メインで地元のチェ・ムベとゲーリー・グッドリッジが闘った『The KHAN』ですか。

佐伯 そうそう。あの大会にも日本人選手を二人出してたんで、その手配も重なったんだよ。もう、頭がパンク寸前になってたんだけど、そしたら今度は青木vsカルバン問題だよ！（苦笑）。

――うわっ、また重なりましたねぇ。

佐伯 もう、全部が同じ時期だからな。

――でも、佐伯さんがロシアに行ってるあいだもDREAMは大変なことになってたんですよ。主催者推薦枠に宇野さんが選ばれたことをはじめライト級GPの諸問題、ミドル級GPのほうもマッチメイクが難航してるみたいですし。

佐伯 あ〜、そうみたいだね。

――「そうみたいだね」って、他人事じゃないんじゃないですか？（笑）。

佐伯 まあそうなんだけど、いろんな意味で旗揚げするってことはホントに大変ですよ。いろんな反省点が出てくるの仕方がないと思うし、正直な話、まだ『やれんのか！』チームとFEGチームが噛み合ってない気がするし。まあでも、それがDREAMって感じなんだよね。ちょっと前まで敵だと思っていた人たちと一緒に仕事してるわけでしょ。

――まあ、そうなりますよね。

佐伯 俺は敵だと思ってないよ。谷川（貞治）さんとも悪い関係じゃなかったし、TBSの人とも仲がよかったりしたし。でも、求める方向性だとか、細かいいろんな部分の調整がうまくいってないわけでしょ。こんだけマッチメイクが遅れてるっていうのは。

――まあ、そういうことなんでしょうね。

佐伯 そういう意味で、まだ選手とプロモーターのあいだの信頼関係がしっかりとできてない気がするんだよな。

――と言いますと？

佐伯 たとえばだけど、「負けてもいいから凄い試合をしてほしい」とかプロモーターってよく言うじゃん。

――それこそ、佐伯さんはよく言ってますよね。「判定狙いの堅くてつまらない試合をする選手よりもアグレッシブな選手を使う」って。

佐伯 そうそう。でもね、それを選手に求めるんだったら、団体とかプロモーターサイドがそうなるような条件とか関係性を作らないといけないわけ。

――まあ、当然そうなりますよね。「負けてもいいから凄い試合をしてほしい」って言われて、アグレッシブに攻めたにもかかわらず、結果的に負けたらもう使われなくなったとか、よく聞く話ですからね（笑）。

正直な話、まだ『やれんのか！』チームとFEGチームが噛み合ってない気がする

佐伯 そうでしょ。それに結局、時間が経てば内容よりも勝ち負けの評価になるんだよ。

――それこそ、1敗してる選手と無敗の選手のどちらか一人選ばなきゃいけないとなったら、無敗の選手のほうが需要は高いでしょうね。

佐伯 そういう部分も含めて、信頼関係を構築しないといいマッチメイクなんてできないから。これは自分に対してもいい聞かせてる部分もあるけど、「選手が試合をOKしてくれない」とか「あの選手はわがまま」とかよく言うけど、スケジュールやら相手の名前を出すのが遅くなるのはプロモーター側にも問題がある場合が多いんで、実際には。

――選手との信頼関係という点では、佐伯さんは言いたいことを言ったり、ときには言われたりもしてますけど（笑）、かなり自信があるんじゃないですか。

佐伯 いや、ないよ！（キッパリ）。

――あ、そうでしたか（笑）。なんだか、いまのDREAMは関係者やイベントサイドは選手に気を使って、選手は選手で、わりと好きにやってるようなイメージがあるんですよ。そこそこ名前のある選手だったらわがままを聞いてもらえそう、みたいな感じで（笑）。

佐伯 それ、どういうこと？

――たとえば、ミルコクラスの大物だったら、会見とかルールミーティングを欠席するのも、ある意味、しょうがないかなと思うんですけど……。

佐伯 （さえぎって）いやいや、ミルコでも認めちゃダメだと思うよ。そういうのを認めちゃうと、いろんな部分で選手とプロモーターサイドに距離感ができちゃうの。「アイツはオッケーなのに俺はダメなの？」って思わせたら、そこで不信感が生まれてくるから。そういう特例を認めちゃうのはよくない。そういう意味では、選手よりもプロモーターサイドに問題がある場合が多い気がするな。

――そういう子に育てた親が悪い、と？

佐伯 そうそう。もちろん、選手が天狗になって勘違いするってこともよくあるけど、それはある意味、プロモーターがそういう選手に育てちゃったってことだから。子どもがグレるのは、だいたいが親に原因があるって言うじゃん。

――よく言われますよね。

佐伯 だから、状況にもよるけど、プロモーターが力で押さえ込むのが最善かっていったら俺はそうではないと思うし。ぶっちゃけた話、俺だって、ときどき力で押さえ込むこともあるしな。でも、それじゃなんの解決にもならんし。そうでしょ。

――は、はい。さすが監督に就任しただけあって、今日の佐伯さんはひと味違う気がします。では、最後にボクが考案した〝戦極ポーズ〟で締めましょう！

佐伯 なんでだよ！（笑）。まあでも、自分が見た印象を言うなら、『戦極』は選手みんなが大会を盛り上げようと一致団結してるように見える。

――旗揚げ戦での選手のマイクアピールを聞いても、みんな〝戦極愛〟が感じられましたからね。

佐伯 でしょ。その理由はなんでかはわかるよ、言わないけども（笑）。

――言えませんか（笑）。

佐伯 それに比べるとDREAMは、いまのところメンバーが集まってる感じがするじゃん。

――〝集まってるだけ〟って感じもしますけど（笑）。それに、いろんなところから一流選手が集まったはいいけど、団結力は感じられませんよね。

佐伯 そのへんも含めて、いろいろ改善するところも多いと思うし、それはやりながら変えていくしかないでしょ。まあ、俺もできる範囲で頑張りますわ！

――今後も引き続き佐伯監督の活躍に期待してます！

【08年4月8日／都内・DEEP事務所にて収録】

9カ国参加の国別対抗戦！ 4.3『M—1チームチャレンジ』ロシア大会 "チーム佐伯"白星発進!!



佐伯監督率いるチーム佐伯のメンバーは中村大介（U-FILE CAMP）、濱村健（CMA京都成蹊館）、渡辺悠太（ALLIANCE）、桜木裕司（掣圏会館）、藤井克久（CORE）の5名。初戦はチームロシア相手に3勝2敗で勝利！



4.3「M-1チャレンジ」ロシア大会にはヒョードルの弟のアレキサンダーもスーパーファイトに登場。シルバオ・サントスなる相手にパンチで1ラウンドTKO勝利。レフェリーとして島田裕二、野口大輔の二人も参加した。



DEEP代表、DREAM広報、メガトン実行委員、そして『M—1チャレンジ』日本代表監督と、格闘技関係だけでも、さまざまな肩書きを持つ佐伯さん。本人の希望もあり今回は渋めの表情でキメてみました。

夢の続きへ再発進！
読プレを当ててワオワオしよう!!

夢なら〜、覚めないで〜!

kamipro PRESENTS



応募要項

ハガキに応募券を貼り、①〜⑧の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2008年5月23日以降発送予定です)。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事＆その理由⑥つまらなかった記事＆その理由⑦kamipro本誌でやってほしいことは?⑧ホームページ(kamipro.com)で好きな企画は?

【宛先】〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス『kamipro』編集部「みんな大好き夢香日記」係まで

※締切は2008年5月22日(木)当日消印有効

kamipro
122
応募券
一、十、百、
戦極、戦極!!

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

DREAM



1 名様

DREAMオフィシャルTシャツ

[ブラック／¥4,200(税込)]

3.15『DREAM.1』ではメインの青木vsカルバンが没収試合となるなど、試練の旗揚げ戦となったDREAMのオフィシャルTシャツ。これを着て3度目の正直を観に行こう！

DREAMアカウントTシャツ

[ホワイト／¥4,200(税込)]

「その夢、危険」なキャッチコピーよろしく、4.29ミドル級GPでは田村vs船木のU対決、桜庭参戦、"魔王"秋山の行方も気になるDREAMのアカウントTシャツを1名に！



1 名様



1 名様

DREAM オフィシャルフェイスタオル

[ホワイト／¥2,100(税込)]

5.11『DREAM.3』では石田vs宇野がついに正面激突！ ますますヒートアップするライト級GP2回戦、観客席で手に汗握るあなたにフィットするDREAMフェイスタオルが登場。



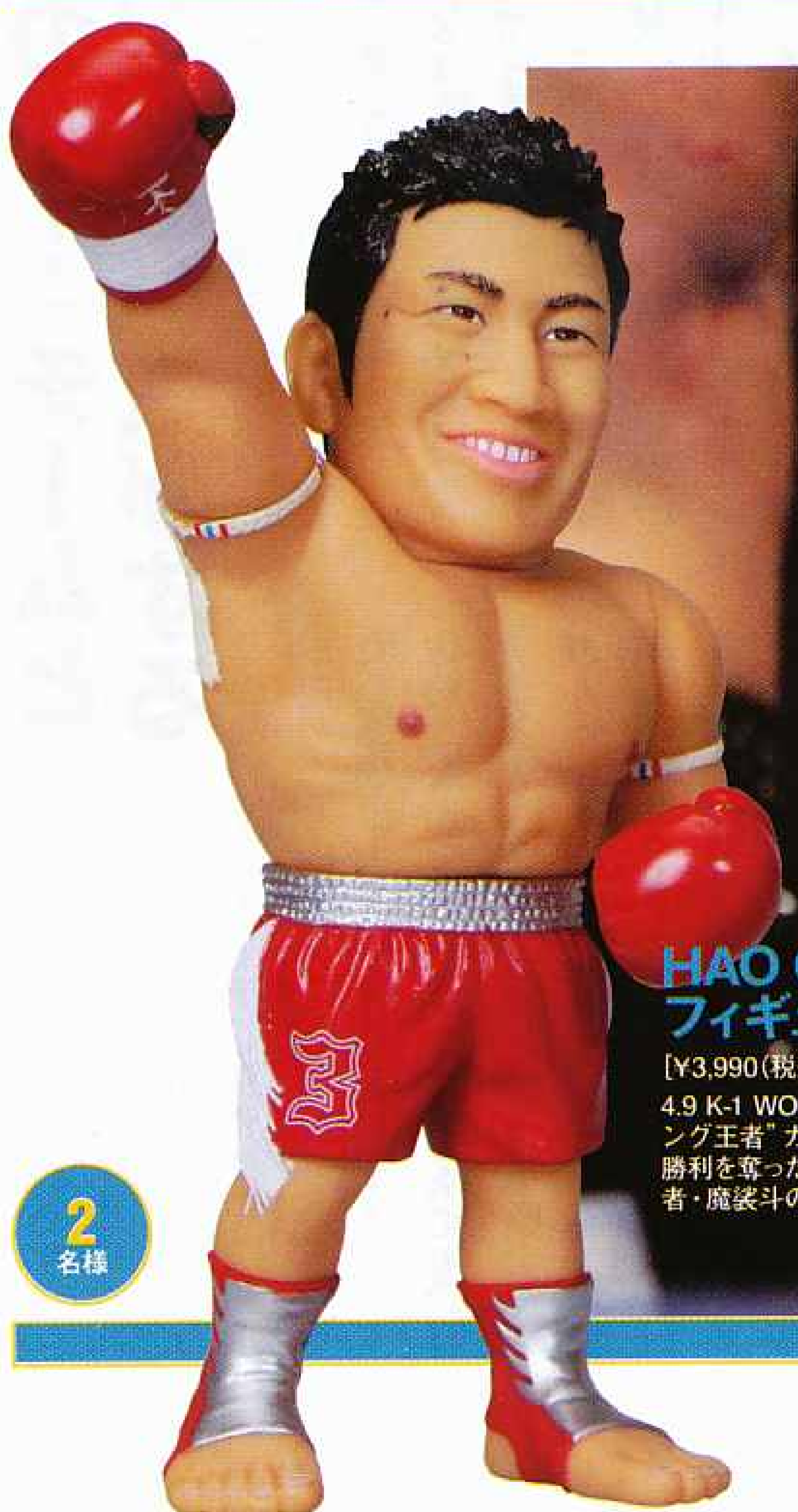
ミノワマン＆須藤元気サイン色紙

1 名様

今号で実現した異色のカリスマ対談では、入場パフォーマンスやコスチュームについておおいに語り合った、ミノワマンと須藤元気の貴重すぎるサイン色紙を2名様にプレゼント！

DREAM ■ http://www.dreamofficial.com/

K-1



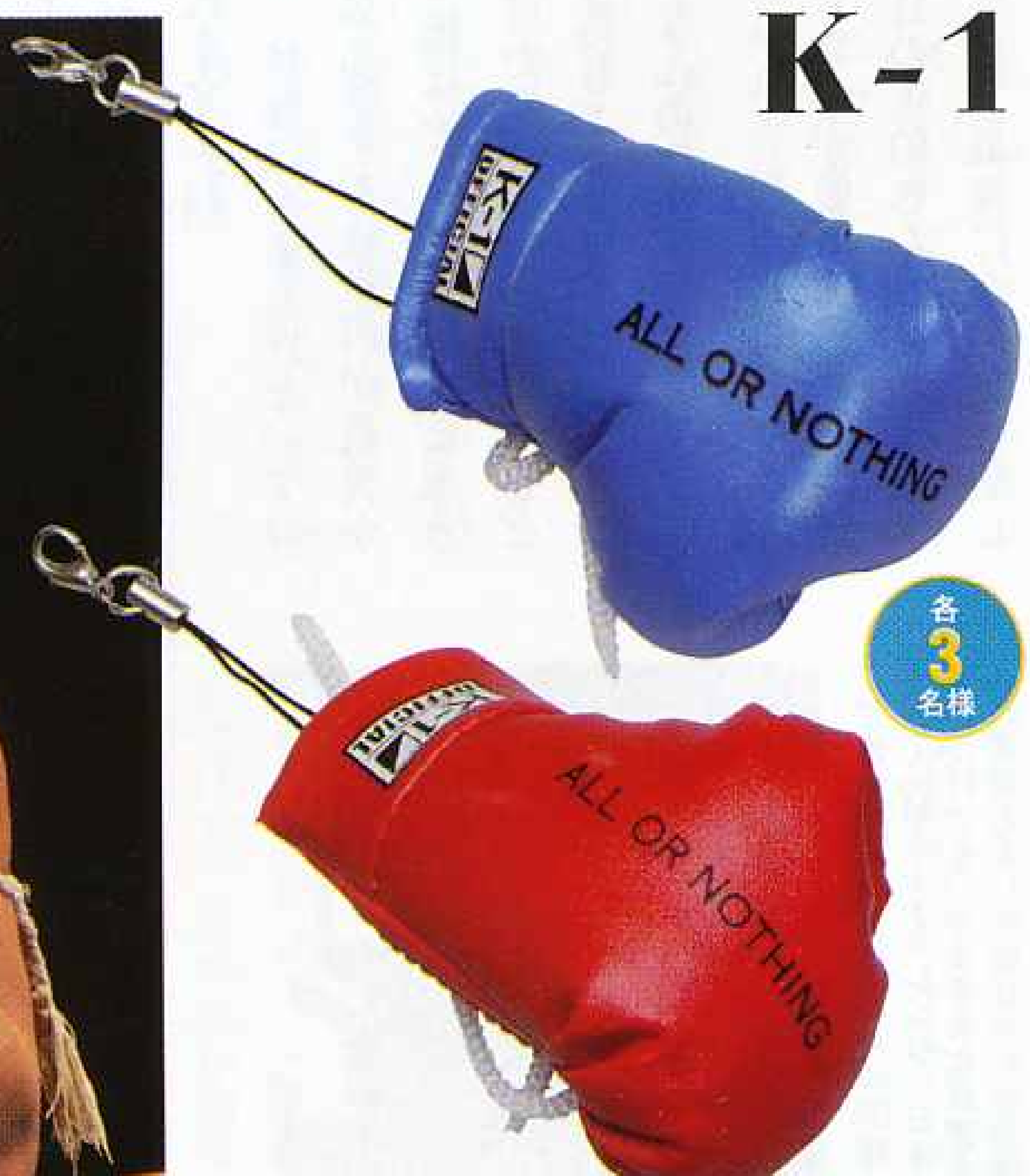
2 名様



HAO COLLECTION フィギュア　魔裟斗

[¥3,990(税込)]

4.9 K-1 WORLD MAXの1回戦では"元ボクシング王者"カラコダから見事な右フックでKO勝利を奪ったK-1 WORLD MAX2003世界王者・魔裟斗のフィギュアを2名様に提供します。



各 3 名様

K-1 ミニグローブストラップ

[レッド＆ブルー／¥945(税込)]

「今年はK-1に専念します!」と宣言した谷川イベントプロデューサーが次々と夢のカードを実現中！ そんなK-1のミニグローブストラップを各3名様にプレゼント！

FEG ■ http://www.k-1.co.jp/

SENGOKU



1名様

大会記念Tシャツ

[レッド／¥4,200(税込)]

まだまだ出るぞ！ とおどろおどろしいアナウンス調で紹介したいのが3.5『戦極』でも売られた真っ赤に燃える『戦極』旗揚げ大会記念Tシャツ！ 1名様に当たるぞ！

戦極■http://www.sengoku-official.com/pc/

HUSTLE

各1名様



髙田総統 パロディT-SHIRT ヴァーガンディ

[ワインレッド／¥3,990(税込)]

キューバの革命家として知られるあのチェ・ゲバラふうの髙田総統パロディTシャツを1名様に提供！ これを着て"ヒマでモテない"生活に革命を起こせ！



ハッスル 社章タイプPINS

[¥1,050(税込)]

ハッスル軍のエース・坂田亘も復帰し、2008年上半期のクライマックスである5.24『ハッスル・エイド』を目前に控え、さらにヒートアップする『ハッスル』のPINSを1名様に！



ハッスル■http://www.hustlehustle.com/

GLAM SENSES





1名様

SP☆なかてま氏のサイン色紙

女子総合格闘家・渡辺久江の旦那様であり、『月刊チャンピオン』で連載中の『B.M.N.ジャパン』の作者でもあるSP☆なかてま氏の貴重なサイン色紙を1名様に！

B.M.N STRIKE&GRAPPLE Round1 KAMINARI-雷- GRAPPLE ver.&STRIKE ver.

[¥3,990(税込)]

各2名様

フィギュアブランドのglam sensesが『月刊チャンピオン』で連載中の格闘技マンガ『B.M.N.ジャパン』を迫力満点にフィギュア化！ 2バージョンを各2名様にプレゼント！

http://www.glam-net.jp/

ART JUNKIE



Z旗2008Tシャツ

1名様

[レッド／¥5,040(税込)]

おなじみART JUNKIEからはジャズやスカなど多彩なジャンルを融合させたサウンドが魅力の10人編成のブラスロックバンド『Z旗』のTシャツを提供。

ART JUNKIE■http://www.artjunkie.jp/

REVERSAL





FAT LOOP ×reversal ダブルネームTシャツ

[ブラウン／¥5,040(税込)]

人気格闘技ウェアブランドのreversalと、ナマ音で現代によみがえるHIPHOPクラシックのカバーアルバムFAT LOOPのコラボTシャツを1名様にプレゼント。





FAT LOOP ×reversal ダブルネームTシャツ

[ホワイト／¥5,040(税込)]

2名様

同じくreversalとFAT LOOPのコラボTシャツの第2弾！ ニッポンオリジナル極太インストカバーアルバム「FAT LOOP vol.2」のジャケットをプリントした逸品。

REVERSAL■http://www.rvddw.com/

QUEST



各1名様

髙阪剛 TK式格闘学会 実践編 vol.2

131分／¥5,880(税込)

おなじみ"世界のTK"髙阪剛が自身のジム『A-SQUARE』でMMAの技術を解説&指導する「TK式格闘学会」のDVD第2弾！ 実績に裏打ちされたTK理論をわかりやすく紹介！

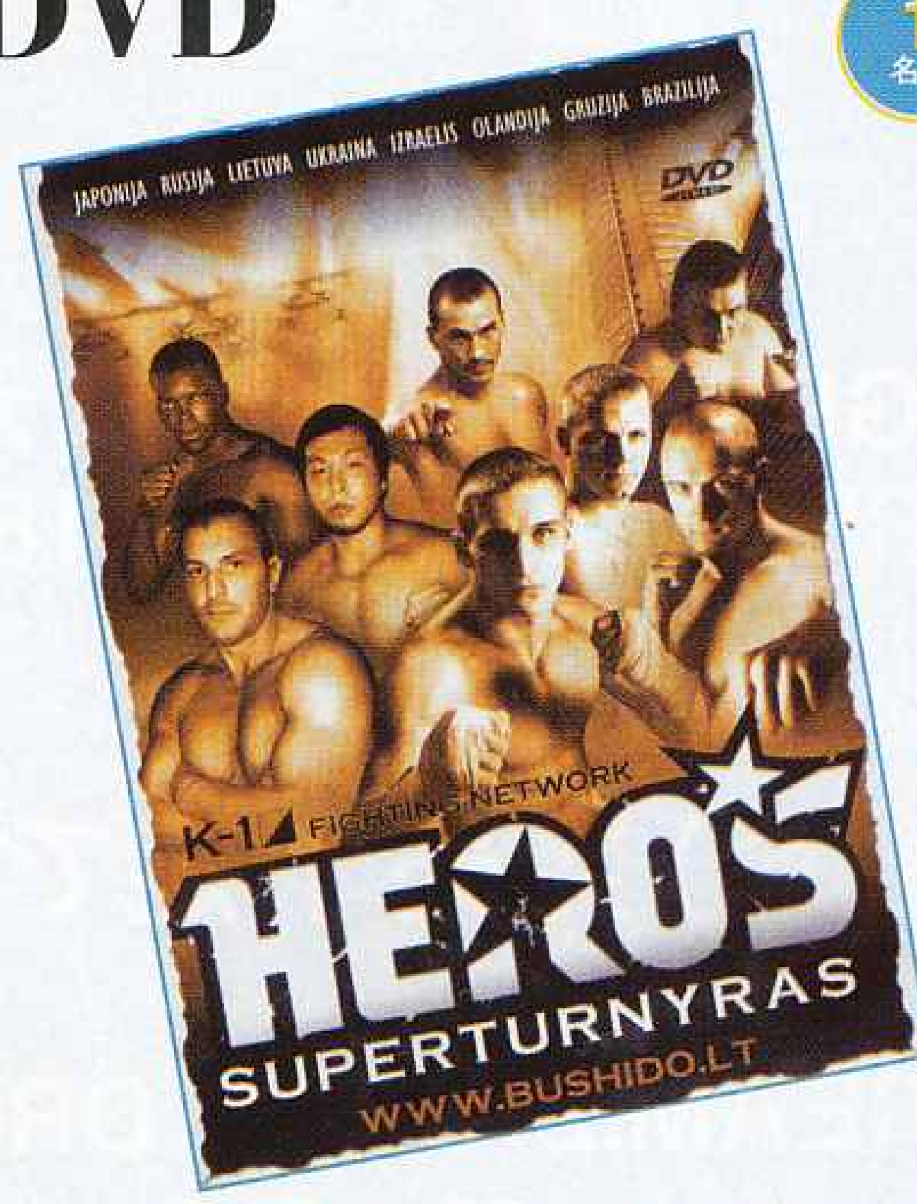


『JWP 激闘史 2007』	239分／¥5,880(税込)
『初見良昭口伝その十一』	107分／¥5,880(税込)
『芦原空手 サバキテクニック西山道場篇 part.2』	228分／¥5,880(税込)
『糸洲流空手道 型 大鑑(三)』	101分／¥5,880(税込)

QUEST■http://www.queststation.com/

DVD

1名様



HERO'S LITHUANIA 2005 DVD

イリューヒン・ミーシャにレミギウス&スミルノバスも参戦した『HERO'S LITHUANIA 2005』のDVDを1名様にプレゼント。『HERO'Sリトアニア』とはなんだったのか？ がよくわかる！

busido.lt■http://www.busido.lt/

BOOK

ぼくの週プロ青春記

[小島和宏(著)(白夜書房)／¥1,890(税込)]

元『週刊プロレス』編集部で女子プロ、大仁田番として知られる小島和宏氏が当時の『週プロ』編集部時代の破天荒かつ赤裸々な出来事を余すところなく描いた一冊。読み応え充分！

2名様



3名様



俺たち文化系プロレスDDT

[高木三四郎(著)(太田出版)／¥1,575(税込)]

DDTのエースとして団体を牽引、現在は代表取締役社長を務める異端の"文化系"レスラー高木三四郎がDDTの歴史を綴った注目の一冊。マッスル坂井との師弟対談は必読！

白夜書房■http://www.byakuya-shobo.co.jp/ 太田出版■http://www.ohtabooks.com/

kamipro 紙のプロレス

No.122
2008年5月6日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
真下義之
大川義之
鈴木 佑
八木賢太郎（楽しいGW計画のため非番）

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子
能登くん
上杉初期設定

編集次長（Cb判定）
松林 貴

デザイン大将
出田さん（TwoThree）

デザイン司令長官
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
白木しらき（以上、TwoThree）

トメさん
はなえちゃん（以上、さおとめの事務所）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
黒田史夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
梅木麗子
大甲邦喜

お勘定&衣料部
ニュー林様

HAKAISHA
入江フィールド（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

助っ人営業
上野宏樹

業務部
樽本"用紙トラブル"義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

終身名誉編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川奈津子

編集チアマダ〜ム
廣橋久美子

広告営業
株式会社ビューポイント
（広告掲載のお問い合わせは☎03-5776-0717まで）

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

印刷
図書印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00〜17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL: http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。



NEXT ISSUE

ミドル級GP開幕&3度目の青木vsカルバン!
4.29『DREAM.2』速報! 5.18『戦極』も直前大特集!!
Kamipro Special 2008 JUNEは
5月9日（金）発売予定です!!

4.29『DREAM.2』&5.11『DREAM.3』徹底詳報!!
No.123は5月22日（木）発売予定!!

※地域によっては多少発売日が遅れるわよ。チュ!


PR:結婚情報サービス
ケータイ恋人探し!
国内最大級恋愛コミュを徹底解剖!
ドラマ仕立て! ピュアアイ出会い体験物語
真南ちゃん(23歳)の場合
アツシくん(29歳)の場合
16:00
あっ、ピュアアイ♥
ピュアアイで彼女探しかぁ…
17:00
無料で使えるんだ!! 登録しちゃおっ!!
簡単に登録できてすぐ使えるんだ!!
18:00
ワッ!! 早速、メール来た!!
この娘がいいなメールしよう!!
20:00
アツシくん!? 結構イイ感じぃ♥
真南ちゃんイイ子だなあ♥
22:00
週末にデート!? いいかもぉ!!
思いきってデートに誘おう!!
その週末
初めまして!!
真南ちゃん、可愛いなぁ♥
平日メール&週末デート♥
そんな使い方も可能だよ!
入会費・年会費完全無料!
無料登録はこちらから!
すぐにご利用可能!
QRコードで簡単アクセス
空メールで登録(携帯電話から空メールを送信)
aoqr@pure-i.net
WEBにアクセス(携帯電話・パソコン両対応)
http://pure-i.net/aoqr
今回紹介するサイト
ピュアアイ
Pure i
小倉優子ちゃんでお馴染みの国内最大級コミュニティー。杏さゆりちゃん、吉岡美穂ちゃんもイメージガールを歴任している老舗サイトなんだ!
「そろそろ素敵な恋がしたい!」
そんな皆さんに自信をもって
オススメしたいのが
人気コミュニティー「ピュアアイ」
今回は体験ドラマ仕立てで
「ピュアアイ」を徹底紹介!
10のキーワードでお相手を瞬時に検索
ピュアアイの人気の秘密は、充実した検索機能。10のキーワードで、ユーザーの条件にあったお相手を瞬時に探しちゃうぞ! お相手検索はエントリー後すぐに利用可能。いつでもどこでも素敵な出会いがすぐに始まるぞ!
18歳未満の方(高校生を含む)、既婚の方のご利用は固くお断りいたします
株式会社エーディーアンドディー 東京都渋谷区渋谷2-11-8 第二種電気通信事業 A-15-5933
ピュアアイはTRUSTeプライバシープログラムのライセンスを取得し、個人情報の保護に務めております
03-5469-0291
受付時間10:00~19:00(年中無休)
■ご利用料金のご説明…ピュアアイは入会費・月会費等は一切かかりません。さらにお相手のご紹介も無料です。料金はお相手とご連絡をとる際に、500円発生いたします。またご利用いただかない時に料金は発生いたしません。※女性会員様はウェブサービスはすべて無料でご利用いただけます。 ■携帯電話からご利用の際は別途パケット通信費が発生いたします PR広告 結婚情報サービス

kamipro 2008 122 "黒の宴"を止めるのは誰だ!? 魔王が来たりて……

2008年5月6日
発行人 浜村弘一 編集人 斎藤慎一 発行・発売所 株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
印刷・製本 図書印刷株式会社



9784757742017
定価:本体838円+税
雑誌 61956-10 Ⓗ2008.8
Printed in Japan 図書印刷
ISBN978-4-7577-4201-7
C9476 ¥838E
1929476008381
enterbrain